魔法少女リリカルなのは　～永遠を生きる魔術師～

不知火仁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのは　～永遠を生きる魔術師～

【Ｎコード】
Ｎ８３０２Ｋ

【作者名】
不知火仁

【あらすじ】
ＪＳ事件から数年の時が流れた
人々は幸せな暮らしを送っている
しかし、彼らは知らなかった。これがかりそめの平和であると
そして、再び世界をも巻き込む戦いが始まることを

※ただいま温泉編です
※タイトル戻しました

プロローグ

プロローグ

？？？？

そこはとある世界。なにもない世界に一匹の動物が歩いていた。

「あの野郎、面倒な呪いなんかかけやがって」

かわいい小動物の割には言葉遣いが荒い。

「ん・・・・なんだこれ？向こうか」

小動物の彼はそれのとこに走った。こんな小さい形ではいくのも一苦労。

「これは・・・！まさかこんなところでロストロギアを見つけるとは。とりあえず管理局に運ぶか」

彼は魔法を使ったのかその箱を浮かせそのままこの世界にたまたま来ていた管理局の艦に乗り込んだ。

ーあとはどうやってバレずに・・・！

すると艦が攻撃を受けた。不運にも貨物室に直撃した。

彼が持ってきたロストロギアがそれに反応してしまった。

「しまった!!」

時空を移動中に起きた事故は過去にいくつもあった。
事故にあったものは外に放り出された場合どこかの世界の放りだされるか死が待っていた。
ロストロギアもまた外に放り出され自分もまた放り出されてしまった。

「くそっこのままじゃ・・・静止」

すると彼の体は静かに止まったというより浮き続けている。
ロストロギアが散らばった方を見ていた。

「・・・地球か。いやはや何年ぶりに帰省か?しかし、いったい誰が?」

悩んでいても仕方がないと思った彼は地球に向けて跳んだ。

そして、彼は地球で運命の出会いを果たす。

プロローグ（後書き）

どうも初めての投稿になります。未熟者ですが最後まで読んでくれればありがたいです。

第1話　それは運命の出会いなの？

地球　海鳴市にある公園。

暗い公園。月だけが辺りを照らしている。
そんな公園の池に奇妙なものがあった。池にあるのはボートぐらい。
しかし、ボートではない。それは池の中央にそれはいた。それから
少し離れたところに小さな子供がいた。不思議な格好をした少年だ
った。

「他の生物を取り込んだのか・・・くるっ！」

冷静に今起きている出来事を分析している時間すらくれなかった。
奇妙な生物雄たけびを上げ少年に突進していた。

「ブオオオ！」
「うわっ！」

しかし、それは彼の目の前に落ちたそのせいか岸と池をつなぐ木で
できた通路が壊され体制を崩してしまった。
だが、彼は池に落ちることはなく浮いていた。
彼は間合いを取り反対側の岸の上にたった。
すぐさまそれは向きを変え彼に飛んでいく。

彼は右手を前に構え小さな赤い宝石を持って叫んだ。

「ジュエルシード封印！」

それと同時にそれは奇妙な光に包まれる。

だけど、彼腕は服が破れ血が吹き出る。

「くぅぅぅぅぅ！」

「ブオオオオオオオオオオオオオ！！！！！！！！」

しかし、それは封印することはできずそれは吹き飛ばされ木々に隠れ逃げた。

「しまった・・・おわ・・ないと」

だが、彼はその場に倒れてしまう。

ーくそ、やっぱこれが限界か・・・意識が・・

彼の体は光を発し人の姿から動物の姿に変わった。

薄れゆく意識の中で

ーだれ・・・の声がき・・えて・・力を・・して・・

翌朝

高町家

♪♪♪

携帯のアラームが部屋になり響く。

「ん・・・」

彼女は手探りで携帯を探すが携帯が落ちてしまった。
そのまま手を床に下ろし携帯のアラームを止めた。

「はぁ～なんか変な夢みちゃった」

そして、彼女の一日が始まる。

私の名は高町なのは。
ここ高町家におちては三人兄妹では末っ子。
洗面台で髪を結び居間にいきお父さんとお母さんにあいさつをする。
そのあとは道場でお兄ちゃんとお姉ちゃんに食事ができたと伝える。
でも道場を持ってるのって結構すごいほうど私は思う。
朝食をすませ通学の時間になるといつのもバス停で学校をへ通う。

「なのは！」
「なのはちゃん」
「アリサちゃん、すずかちゃん！」

バスの一番後ろに座っていた二人のところへ向かう。
ここの一番後ろは私たちの特等席！
ーだと思う。

「おはようなのは」
「おはようなのはちゃん」
「おはよう」

学校ではいつものように先生の授業を聞いてノートに写している。

私の成績は普通。

昼休みになると私たちは屋上でご飯をたべる。

「将来かぁ・・・ん・・アリサちゃんとすずかちゃんはもう結構きまってるんだよね？」

話題を切り出しながらタコサンウィンナーを食べる。

「家はお父さんもお母さんも会社経営だし、ちゃんと勉強してあと継がなきゃ・・ぐらいだけど」

そう言いながらすずかちゃんの方に顔を向ける。

「私は機械系が好きだから・・はむ・・・工学系で専門職がいいいなぁと思ってるけど」

「そっかー二人ともすごいよね」

「でもなのは喫茶翠屋の二代目じゃないの？」

「うん、それも将来の一つのビジョンでもあるんだけど」

けど、それは自分のやりたいことにはつながらない。自分の意思ではない。

「やりたことが何かあるような気がするんだけど・・まだ、それがなんなのかハッキリしないんだ。私特技も取り柄もとくにないし」

「バカチン！」

アリサが怒って輪切りにしたレモンを投げる。

「そういうこと言うんじゃないの！」

「そうだよ、なのはちゃんにしかできないことときっとあるよ」

となのはを元気つけようとした。

「それにあんた?理数の成績は私よりいいじゃないの!それで取り柄がないのはどの口がいうわけ?」

なのはのほっぺをつまみながらアリサは怒って?いた。

「うわーーだってわたし体育にがてだしーーーーー」

「ほら二人とも・・・」

すずかがやめさせようとするがしばらくは止まらなかった。

他にも人がいるのにもかかわらず。

そんな帰り道三人で公園を歩いていた。

ー自分ができること、自分にしかできないことか・・・

私はそんなことを考えていた。

「ほらここ。ここを通れば塾に近道だよ」

アリサが指をさした。

アリサのいう近道を歩いているときだった。

「・・・はっ・・」

頭の中にビジョンが流れてきた。
ーここ夕べ夢でみた場所？
「どうしたの？」
と心配して声をかけてくれた。
「ううん、なんでもない」
「そっかいこ」
「・・・まさかね？」
それから再び歩きだす。
―・・・助けて
「！」
「なのは？」
「今声が聞こえなかった？」
「声？」
「別に聞こえなかったけど」
なのはあたりを見回す。
けど、誰もいない。あるのは木々だけだ。
―助けて！
「はっ」

今度は聞こえたはっきり「助けて」って

「ん！」

なのは走った。

「なのは！？」

「なのはちゃん？

二人もなのはあとを追いかける。

「はぁはぁ・・多分こっちのほうから」

声のした方向に走るなのは。

なんで私こんなに必死になってるのかな？

心の中でふと思った。

「あ！」

目に写ったのは傷ついて体を丸めている動物だった。

ピク

動物の耳が動いた。

その子は顔をあげた私をみた。

すると首に小さな宝石をつけていた。

「どうしたのなのは？」

「その動物けがしてるの・・」

それから近くの獣医さんのとこで手当てをしてもらった。

そのあと塾へいってそこで誰が飼うか相談していた。

最終的には私が家族に相談してみるという形に落ち着いた。

実際相談してみる皆了承してくれた。

とりあえずしばらく家で預かるという形で収まった。

アリサちゃん、すずかちゃん。

あのフェレットは家で預かることになりました。

明日、一緒に帰りに迎えにいこうね

「送信っと」

二人にメールと送ってもう寝ようかと思ったときだった。

誰かが語りかけているような気がした。

―誰か聞こえますか・・・僕の声が聞こえますか？

「夕べの声と昼間の声と同じ声！」

―僕の声が聞こえるあなた。僕に力を貸してください！

―あの子がしゃべってるの？

―お願い僕のところへ！時間が、危険が！

そこで声は途切れてしまった。

なぜか妙に疲れて私はベットに倒れた。

？？？

―誰か僕の声を

っていつから僕に・・・？

「！」

殺気に気付いた。

目の前にはあの怪物がいた。

「ブオオ」

なのはｓｉｄｅ

「はぁはぁはぁはぁ」

私は走っていた。

あの動物病院へ。

あの後とても気になってこっそり家を抜け出した。

けど、気になってというよりいかなければいけないような気がした。

行かなきゃ後悔すると思ったからだ。

動物病院の入口まで来るといきなり頭がいたくなった。

「うう、またこの音」

再び目をあけると景色の色がかわっていた。

ブオオオオオオ

怪物のような声が聞こえた。

「！」

すると何かが壊れた音がした。その方に行ってみるとあのフェレット何かにおわれていた。

「あれは！？」

フェレットは木に登り怪物の攻撃からよけるが木は倒れフェレット宙に浮く。

「あっ！」

フェレットの視界にあの子が写った。

そのまま枝を踏み台にして手を広げる彼女に向って飛んだ。

「きゃっ」

そのまま尻もちをついてしまった。

「なに！なになにないいったいなに！？」
怪物は自分で倒した木で押しつぶされていた。
「来てくれたの？」
「しゃべった！」
フェレットがしゃべったけどすぐ落ち着いた。
「とにかく逃げて！」
「えっ」
「早く！」
いわれるがままに来た道を走っていた。
「え～といったいなにがどうなってよくわかんないんだけど！？」
走りながらフェレット説明を求める。
「君には・・・資質がある」
帰ってきたのは質問とは違う返答だった。
「少しだけ力を貸して」
「資質・・？」
「ええといろいろと省くけど探し物のために僕はここに来ました。けど、いろいろあって僕一人じゃどうにもできなくて。だから、力

をかして、！迷惑だとはわかってるけど、今君のその力が必要なんだ。ちゃんと後でお礼をします。なんでもするだから今は力を貸して！この魔法の力を君に託す！」

「魔法・・・？」

魔法ってゲームのあれ？

ブオオオオ

頭上から怪物が降ってきた。
近くの電柱に隠れる一人と一匹。

「お礼は必ずします！」
「お礼とかそんなこと言ってる場合じゃないでしょう！」

怪物のほうをみる。
頭から突っ込んで抜けないみたいだ。
（→ｗｗバロス）

「どうしたらいいの？」
「これを」

差し出してきたのはピンク色をした宝石だった。

「君なら使えるはずです！」
「君ならって」
「目を閉じて僕の言うとおりに繰り返して」

「うん」

「我使命を受けし者なり」

「我使命を受けし者なり」

「契約のもとその力を解き放て」

「契約のもとその力を解き放て」

「風は空に　星は天に」

「風は空に　星は天に」

「そして、不屈の心は」

「そして、不屈の心は」

『この胸に！この手に魔法を！ＲＨセートッアープ！』

『ＳｔａｎｄｂｙＲｅａｄｙ　Ｓｅｔｕｐ』

するとなのは光に包まれた。
宝石は機械を身にまとい杖になった。
なのはも衣服は消えバリアジャケット身につける。

その姿をみたフェレットは

「まさか、本当に適合者がいたとは」

なにかに驚いていた。

たとえるならそれは白い魔法使いだろう。

「な、なんなのこれ？」

ブオオオオオ

怪物は今に襲いかかろうとしていた。

「えーーーーー！」

なのはは今起きていることが未だに信じられずにいた。

そして、今この瞬間彼女は魔道師となった。

ＥＮＤ

第1話　それは運命の出会いなの？　（後書き）

とりあえず一話。ＴＶみたいな感じなっています。このペースはきつい。
おそらく何話か省略するかもしれません。ダグにもある通り主人公は今のところなのはなのですがユーノ（まだ名乗っていないが）がこの一期では終盤あたりが活躍するような気がします。ではまた次回もお願いします。

第2話　魔法の呪文はリリカル、なの？　前篇

魔法の呪文はリリカル、なの？　前篇

高町家　なのはの自室

「じゃあ、改めて。さっきはありがとう。君が来てくれなかったらたいへんなことになっていたよ」

「・・・・私、あまり『実感がない？』うん・・」

彼女の部屋で今さっき起きたことを話していた。

彼女は自分の椅子に座りフェレットである彼は机に立って？話していた。

「無理もないよ。むしろ素人が初めてであそこまでできたのが逆に凄いんだよ」

「そうなの？」

「そうだよ。何も知らない子供がいきなり実戦であそこまでできるとは僕も思ってなかったけど」

「・・・・・」

なのははあの時起きたことを思い返していた。

「えーーーーー！」

今自分に起きていることが把握できていない彼女。しかし、怪物は彼女の意思を問わず雄たけびを上げ攻撃をしかけてきた。

「来るぞ！」
「えっ！？」

フェレットに言われて初めて目の前に怪物が迫っているのに気付いた。
彼女は無意識のうちに杖を前面に向けていた。

『Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ』

前面に展開された障壁は怪物を防いだ。

「んんっんんっ！」

しかし、その反動は彼女に届き今にも押されそうな感じだった。
が、怪物ははじけた。
あちこちに身体の破片が飛び塀に練りこみ、電柱をも倒し電線が切れた。

「へ、ふぇ？」

なのはあたりの惨劇に驚いていた。

「今の魔法は発動体に組み込まれたプログラムと呼ばれる方式で、それを使うには術者の精神エネルギー、または魔力」

フェレットを抱きかかえその場から離れるなのは。
その間に色々と説明をしてもらっている。

「ええっと・・・」
「つまり、今のは君が身を守るというイメージというか思いがアレを発動させたんだ」
「ん、なんとなく理解したか、な？それよりアレはなんなの！？」
「アレは忌々しい力に生み出されてしまった思念体。アレを安定つまりおとなしくさせるにはその杖を使って封印するしかないんだ」
「よくわかんないけど、つまりどうすればいいの？」

先ほどから難しい話しで小さい彼女にはあまり理解できていなかった。

「簡単に説明すると簡単な攻撃や、防御はイメージや心で願えば勝手にやってれる。けど、大きな力を使うにはその・・・君みたいな初心者には呪文を唱えないといけないんだ。その呪文は君だけの呪文。目を閉じて心澄まして。そうすれば聞こえるはず」

なのはは言われた通り目を閉じた。

ブオオオオオオ！

不思議と恐怖は感じられなかった。あの怪物が迫っているのに何故か集中していられた。

そして―

目の前に怪物がくると先ほどとは別に落ち着いて、冷静にといった方がいいだろうか？
杖を前面に出し

『Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ』

怪物からの触手を防いだ。

そして、彼女は呪文を叫ぶ。

「リリカルマジカル―」

「封印すべきは忌まわしき器、ジュエルシード！」

「ジュエルシード、封印！」

『Ｓｈｏｏｔｉｎｇ　ｍｏｄｅ　ｓｅｔ　ｕｐ』

杖がそう発すると先端部の少し下の金属の分が展開しピンク色をした小さな羽根が現れた。

それから飛んだピンク色のリボンが怪物を捕える。

ブオオオオオ！！

怪物は苦しいのか痛いのだかわからないが叫び怪物の額にＸＸＩの文字が浮かび上がる。

『Ｓｔａｎｄｂｙ　Ｒｅａｄｙ』

「リリカルマジカル　ジュエルシードシリアルＸＸＩ　封印！」

『ｓｅａｌｉｎｇ』

無数のリボンが怪物を貫く。

そして、光となって消えた。

「あっ」

目に写ったのは綺麗なひし形をした宝石のような物。

「それがジュエルシード、ＲＨで触れて」

杖、ＲＨと呼ばれるそれを向けると吸い込まれるようにＲＨ本体に吸収された。

『Ｔｈｉｓ　ｉｓ　？ＸＸＩ』

すると身にまとっていた服はいつも通りの至福に戻っていた。

「あ、あれ終わったの？」

「そう、君のおかげで・・ありがとう―」

フェレットはいきなり倒れた。

なのはは心配して近づき抱きかかえた。

すると遠くからサイレンの音が聞こえてくる。

「もしかするとここにいるとたいへんアレなのでは？・・・と、とりあえずごめんなさ～い」

何に誤ったのかはいざ知らず、彼女は逃げるようにその場をさった。

その後帰りの途中にすぐ目を覚ましたその子。

傷はもう治っているといい私はそのまま家に連れて帰ることにしま

した。
当然お忍びで抜け出したのでばれないようにそ～と家に入ろうとしたのですが残念ながらお兄ちゃんに捕まりました。けど、お姉ちゃんのおかげと心配で見に行ったといったらなんとか納得してくれました。

そして、今私はその子とさっきのことを話していた。

「そういえば自己紹介がまだだったね。私は高町なのは。小学校三年生。家族とか友達はなのはって呼ぶよ」
「僕は・・・ユーノ」

彼は少し間をおいて名乗った。
しかし、彼女はそれに気づくことはなかった。

「ユーノくんかぁ。可愛い名前だね♪」
「それでその・・・小学校三年ってことは9歳？」
「うん、そうだよ」

―9歳でこの魔力、もしかしたらとんでもない逸材を見つけたのかもしれない

「でも、どうして？」
「いや、僕たちの世界ではそのぐらいだと魔法学校とかに通ってるんだ」
「へ～って僕達の世界！？」

彼女は驚いていた。

「あ～そうだよね、なのはは、いや知らないのが当然か・・・。で

も、もう遅いし・・また明日ゆくっり教えるよ」
「うん、でも気になって眠れないかも?♪」
「ははっ」

そして、長く忙しかった夜は終わった。

とある場所

そこに小さく光る宝石があった

未だ誰にも知られず

ひっそりと―

前篇　ＥＮＤ

第2話　魔法の呪文はリリカル、なの？　前篇（後書き）

とりあえず前篇。また近いうちに後篇を上げる予定です。ユーノの口調が変わったりしますがまぁいろいろとあるんです。
誤字とかありそうな気がするけどとにかく書くことでいまは手がいっぱいです！
では、また次回・・・

第3話　魔法の呪文はリリカル、なの？　後篇

魔法の呪文はリリカル、なの？　後篇

？？？ｓｉｄｅ

「で、どうだこの子は？」

『はい、私と上手く同調しています。それにこれほどの魔力を持っているのは驚いていますが・・・』

謎の二人の声が聞こえる。

けど、その声は誰にも聞こえることはない。

「そうだな、この時代にこれだけの魔力を秘めた子がいる時点で驚きだ。まぁ希にいるんだけど。そういえばあいつもそうだったな」

『ああ、提督ですか？』

「まぁ、今じゃ爺さんだが」

密会のような会話なのにどこか日常の会話のように聞こえてくる。

『で、これからどうします？』

「とにかく今はジェルシードを回収する。アレは危険だ。動物や植物といったものならいざ知らず人間が使うことになったらとんでもないことになる」

『では、しばらくはそうしることになりますね』

「ああ、しかし、最終的にはその子を守ってくれ。きっともうどこを探してもいないだろうからな。お前を扱う者は―」

『わかりました。私は彼女を失うのは惜しい』

「それじゃあお休みＲＨ―」

『Ｙｅｓ　Ｃｒｅａｔｏｒ』

それから声は聞こえることはなかった。

そして、太陽は昇る。

・・・・・・

翌朝

♪♪♪

自室にアラーム音が響く。

いつものように止めようとするが床に落ちてしまいそして止める。

これをしないと何故か起きれないのだろうか？

目を覚ました彼女はもう起きていた彼にあいさつをする。

「おはようユーノくん♪」

「あ、ああ、おはよう」

それからなのは小学校の制服に着替え鏡で髪の毛を縛っていた。

着替えていたのはもちろん彼女の部屋。

ユーノは気にせず彼女の着替えを見ていた。

興味がないかのように・・・・

「とりあえず、昨日はお疲れ様」

「それはこちらこそ・・」

「・・・ん・・」

―夕べユーノくんと話す前お父さんとお母さんにユーノくんを実際に見せたら簡単に受け入れられました♪

「あ～ん可愛い～♪」

「なんだ意外と小さいんだな」

とお母さんは物凄く可愛がっていました。

お父さんは初めて見たのかイタチと間違えていました（笑）

「何か芸とかできるのか？」

とお父さんがいうとユーノくんはお手？をしました。

「キュ」

と言いながら。

フェレットの鳴き声って「キュ」なんだぁと初めて知りました。

その後ユーノくんのご飯とかｅｔｃ・・・と色々ドタバタして昨日は少ししかお話ができなくなって・・

「じゃあ、私そろそろ学校にいかなきゃいけないから。帰ってきたらお話聞かせて」

鞄に必要なものを詰め部屋を出ようとするとユーノくんが・・

「あっ、それなら大丈夫。離れていても話はできるんだ」

「ふぇ？」

―なのはもう魔法使いなんだよ

「あっ、これ私を呼んだ時の・・・」

頭に直接声が語りかけてくる感じ。
ユーノくんは続けて語りかけてくる。

―そっ、ＲＨを身につけて心で僕に喋ってみて？

それに従い机の上においてあるＲＨを手にとってなんとなく喋ってみた。

―・・・こう？
―そっ、簡単でしょ？

「わぁ～！」

彼女は素直に感激？していた。

「ほ、ホントだー！」

―空いている時間に話すよ。僕のこととか。魔法のこととか。ジュエルシードのこととか。

「うん」

その後学校にいつも通り登校した。

「おはよー」

教室に入りアリサちゃんとすずかちゃんにあいさつをしたらなにか

言いたそうに私のとこに来ました。

「ねぇ聞いた？」

「えっ？」

「昨日行った病院の近くで車の事故かなにかあったみたで・・」

「あのフェレット無事だといんだけど・・・」

私は二人にどう説明するか考えました。

だって、私の家にいるって簡単に言えるわけないし・・

とりあえずあの後心配で様子をみにいって病院から逃げ出していたのをそのまま家に連れて行ったということで話はまとまりました。

二人には「ホント偶然だね」と言われ

―嘘はついてない、嘘はついてない。ちょこっと真実を動かしただけ

二人にはその顔がひきづっていたのか不思議そうに見られていました・・・

授業中

「いいですか、漢字には・・」

先生の授業の中私は今朝教えて貰った念話とか念意と呼ばれる意志の疎通？とやらで授業を受けながらユーノくんからお話を聞いてました。

―じゃあ、昨日の続きから。僕はこの世界とは別の世界からやってきたんだ。この世界とは他にたくさんの世界が存在する。ジュエル

シードはそのとある世界にある古代遺産なんだ。
―古代遺産？
―そう、この世界にもあるでしょ。昔からの宝とかそういうもの
―うん
―簡単に言うとそれ。昔の人が造った代物。または自然と生み出された万物。ジュエルシードは本来は手にした者の願いを叶える魔法の石なんだけど、力の発現不安定で夕べみたいに単体で暴走して使用者をふくめて周囲に危険を与える可能性もあるんだ。

なのは黙って真剣に話を聞いていた。

―人や動物が誤って使用すると使用者を取り込んで暴走する恐れもある。

―そんな危ない物がどうして家のご近所に？

あるはずのないものがなんであったのか。なのは当然の疑問を言った。

―・・・僕のせいなんだ。ある日たまたまそれを見つけてある場所に保管してもらうとその移送中にその・・攻撃、襲撃にあって、それでこの地球のこの街に落ちてしまったんだ。

―２１個のジュエルシードはこの街、いや、もしかしたらここ以外に散らばってしまったかもしれない。今まで見つけたのは昨日のふくめてたった二つ。
―あと１９個か・・・

「起立、礼」

日直に言われ起立し、先生に礼をする。

「そういえばあと少しでＭＧＳＰＷが発売ですね・・・予約しなきゃ」

―でも、ちょっと待って。ジュエルシードが散らばっちゃったのって別にユーノくんのせいじゃないんじゃ・・？

―・・・だけど、アレを見つけたのは僕だから、全部集めて・・・あるべき場所に戻さないと・・・

―なんとなく、なんとなくだけどユーノくんの気持ちわかるかもしれない・・・真面目なんだね、ユーノくんは？

―えっ？

「あっでもＭＨとの共同作品もでるみたいですね。皆さんも二パ二パ動画で見てみましょう」

『は～い』

―え～と、昨日本当に助けてもらって本当にありがとう。けど、なのはにこれ以上迷惑をかけられないから。あと少しだけ休ませてもらえれば・・・

その時なのはの触角？両サイドに結んだ髪が反応した。

―戻ったらどうするの？

―また、一人で探すことになると思う

―それはだ～め

―えっ

―私、学校とか塾のある日は無理だけどそれ以外の時間なら手伝えるから

なのははそういうことをいうユーノを放っておくことはできなかった。

―けど、昨日みたいな危ないことだってあるかもしれないんだよ？

「ふふふ」

「？」

となりの席の子に見られたけど気にしない。

―だってもうしり逢っちゃたし、話も聞いちゃったもの。ほっとけないよ

―それにあんなことが起きたらご近所の皆さんに迷惑かけちゃうし、ね。ユーノくん、一人ぼっちで助けてくれる人いないんでしょ？一人ぼっちは寂しいもん・・・。私にもお手伝いさせて。

―困ってる人がいて、助けてられう力が自分にあるならその時は迷っちゃいけないって。これ家のお父さんの教え。

キンコンカンコーン

チャイムが鳴り二人と一緒に帰宅する。

その道中も話をやめなかった。

―ユーノくんは困ってて、「私はユーノくんを助けてあげられるんだよね？魔法の力で・・・

―・・・うん

ユーノはただ返事をすることしたできなかった。

―私ちゃんと魔法使いになれるか自信ないんだけど・・・

―なのははもう魔法使いだよ

―多分なのはには才能がある。魔導師としても才能が

―そうなの？自分ではよくわからないんだけど、とりあえず色々と教えて。私頑張るから！

―うん、ありがとう。

―とりあえず、もう家につくから。今日のおやつなにかな～・・・・！

―！

すると突然なにかを感じた。

「あつ、すみません」

ぼーとしていたのか向かい側から歩く人にぶつかってしまった。

―ユーノくん今のって？

―新しいジュエルシードが反応している。すぐ近く！手伝ってなのは！

―うん、じゃあそこで合流ってことで

―うん！

それから二人はジュエルシードが発現した場所へ向かった。

そこは階段を登った上にある神社だった。

その怪物恐らく犬を取り込んだのだろう。その犬の飼い主がその姿

を見て気絶してしまったのと二人が着いたのは一緒だった。

「なのは、ＲＨを！」
「うん！」

一番上につくとなのははＲＨをかまえた。

「原獣生物を取り込んでいる。実態がある分手ごわくなってる！」
「大丈夫。多分・・・」
「なのは、ＲＨの起動を！」
「えっ！？起動ってなんだっけ！？」

なのは突然言われたことにビックリした。
その間に犬型ＪＳ（ジュエルシード）は近くに迫っている。

「っ！」
「我は使命をから始める起動パスワードを！」

肩に乗って教えてくるユーノだが・・・

「えーあ、あんな長いの覚えてないよ！」

なのは覚えていなかった

「もう１回いうから繰り返して！」
「あ、あわわ、わかった！」

ガルルルルル！！

けどそれは間に合わくて

「きゃあ！」

なのはその時なにかを思った。
するとＲＨを握っていた左手が輝いた。

「レイジング・ハート？」

『Ｓｔａｎｄｂｙ　Ｒｅａｄｙ　ｓｅｔｕｐ』

なのはの意志反応してＲＨは起動した。
すると手にはＲＨを握っていた。

―パスワード無しでＲＨを起動させた！？（ってあんま意味ないけど・・・しかしこの短期間。二度目の実戦でここまで使いこなすとは）

「わぁ～」

なのはその状況に歓喜？とは違うけどなんとなく驚いていたんだと思う。

グルルル、グワァ！！！！！

ワンコはなのはに襲いかかる。

「なのは、防護服を！」

「えっはい！」

『Ｂａｒｒｉｅｒ　Ｊａｃｋｅｔ』

それと同時にワンコと攻撃を食らう。

「なのは！」

ユーノはそれを避けなのはを叫んだ。

「ふうー」

なのはバリアジャケットを装着していた。

ワオオ――――ン！

鳥居の上に立ちそのまま落ちてなのはを襲う。

「きゃっ！」

またなのはは無意識に障壁を展開しワンコを気絶？倒した。

―あの攻撃をノ―ダメージ。やはり、この子には才能がある。

「いたたって言うほど痛くはないかな？」

なのは自身それを実感してはいた。

ただ、その力には気づいていなかった。

「え～と、封印をすればいいだよね？ＲＨお願いね」

なのはの問い、思いにＲＨは応える

『Ａｌｌ　Ｒｉｇｈｔ　Ｓｈｏｏｔｉｎｇ　ｍｏｄｅ　ｓｅｔ　ｕｐ』

そして昨日と同じようにあのリボンが怪物を捕縛し額にＸＶＩの文字が浮かぶ。

『Ｓｔａｎｄｂｙ　Ｒｅａｄｙ』

「リリカルマジカルジュエルシードシリアルＸＶＩ　封印！」

『ｓｅａｌｉｎｇ』

そして、ジュエルシードは元の石に戻り、取り込まれた子犬も解放された。
ジュエルシードはＲＨに取り込まれた。

『Ｔｈｉｓ　ｉｓ　？ＸＶＩ』

「これで、いいのかな？」
「うん、上出来」
「えへっ♪」

その後気絶していた飼い主も目が覚めていた。
気絶する前のことはあまり覚えていなかったという。

「おつかれさま～、かな？」
「うん、そうだね」

私、高町なのはが魔法使いになってからの長い一日がやっと終わっていきます。
新しい友達ユーノくんのこと、魔法のことやよくわからないこと。
とにかくたくさんあるんですが

「それにしてもお腹減ったね～」
「そうだね」

とりあえず、色々頑張っていかなきゃと思います！

????side

「本当に素晴らしい成長ぶりだな」
『はい』
「で、今のところ彼女の身体に影響は？」
『特に見当たりません』
「なるほど、それほど相性がいいとみえる。ところで解析の結果は出たか？」
『いえ、もう少しで解析が完了します』
「そうか・・・できれば何事もなくことが進めばいいんだが・・・」
『・・・』

もう一人は答えない。
なぜなら言わなくてもわかっていることを知っているからだ。
なにもなく進んだことなどなかったのだから・・・

END

おまけ

「ところでもう夕飯になるけどおやつなにかな？」
「ん？クッキーだったよ」

「え、どうしてわかるの？」
「だって、さっきまで食べてたからね」
「・・・・私の分は？」
「どうだろう？」
「・・・・・・・・・・少し・・」
「なのは、はいクッキー」
「さすがユーノくん♪」

―・・・それキャラ違うから・・

そんな帰り道の出来事でした。

第3話　魔法の呪文はリリカル、なの？　後篇（後書き）

前篇より二倍ぐらい長い・・・・。ＲＨの声を英語で書くのつらいっす。

途中先生が何か言っていますが気のせいでしょう。

次回はいくつか省略、簡略して話を進める予定です。？にしてももうわかるから仕方ないんだよね。

第４話　もう一人の魔法使い現る、なの？

海鳴市某所

まだ薄暗い海鳴市の夜。
人が少ないこの時間に不思議な少女が屋上にいた。

「この付近にロストロギアがあるんだね」

優しい声だった。そんな少女が斧らしき杖を構えているとは想像もつかないだろう。
そんな少女の近くに狼？それも見たことのないような姿をしていた。

「形態は蒼い宝石、一般呼称はジュエルシード。・・・そうだね、すぐに手に入れるよ」

誰に言ったのかはわからない

それに応えるかのようにその狼の声が響き渡る

誰にも聞かれることなく

なのはｓｉｄｅ

私、高町なのはは平凡な小学生だったのですがなんと魔法使いになってしまいました。

異世界からユーノくんの下ジュエルシード集めをしているのですが・・それが思ったより大変で・・・。
平日は学校があり、さらに塾もあり中々探すこともできない状況でして・・この前、４つ目のジュエルシード？ＸＸを見つけることに成功、さらに封印にも成功したのですが・・・それがとてもたいへんで帰るころには着替えずそのまま寝たこともあったり・・・。
ユーノくんにあんな大騒ぎになるようなことをして大丈夫なの？と聞いたら。

「大丈夫。僕が結界を張って外部にわからないようにしているから」

なんでも結界を展開するとその空間の時間が止まるとか？小学生の私には難しい話でした。

けど、街をも巻き込むことが起きてしまいました。ある二人の男女がジュエルシードを発現してしまいそれが大樹のような大きな木が街をも巻き込んでしまいました。
ユーノくん曰く人間が使ったときその強い思いがジュエルシードを強く発現させると言っていました。
私はジュエルシードを持っていた子を知っていた。もっと早く気づいていればこんなことにはならなかったのに。
だから、私は無意識にやっていたんだと思う。

『Ａｒｅａ　Ｓｅａｒｃｈ』

すると彼女の真下に魔法陣が現れた。

「リリカルマジカル、探して最悪の根源を！」

すると無数の光が四方八方に飛び散り大樹を調べていた。
頭の中にビジョンが流れてきた。
そして、見つけた。

「・・見つけた！」
「ホント！？」
「すぐに封印しないと！？」
「この距離じゃ無理だよ」
「大丈夫いけるよ！・・・・そうだよね？ＲＨ」

彼女はＲＨを空に掲げ言った。
ＲＨもそれに応えるように返した。

『Ｓｈｏｏｔｉｎｇ　ｍｏｄｅ　ｓｅｔ　ｕｐ』

今までとは別の形に変形していくＲＨ。
先端部の形がいかにも砲撃するような形であった。

「往って！そして、捕まえて！」

その光の砲撃は発言者とジュエルシードごと包み込む。

『Ｓｔａｎｄｂｙ　Ｒｅａｄｙ』
「リリカルマジカル・・ジュエルシードシリアルＸ、封印！」

掛け声とともに再び放たれる砲撃。

『ｓｅａｌｉｎｇ』

そのままジュエルシードを封印することに成功しました。

けど・・・
今回の事件は私の甘さが招いてしまったことにかわりなくて・・・
ユーノくんは私を励ましてくれて・・・
だから、このときから私の中でユーノくんためだけではなく自分の
意志でジュエルシード集めをしようと思いました。

それから後日
すずかちゃんのお家にお呼ばれされました。
お兄ちゃんも一緒でもちろんユーノくんも。
まさか、そこでジュエルシードがあるとは思いもよりませんでした。
発現したのは子猫でして・・けど、ただ子猫が大きくなっただけで
して。
私はどうしたらいいか迷っていました。
だって、あんな可愛い猫さんを攻撃するなんてできない！
しかし、そこに思いもよらぬ出来事が起きました。
私と同じ魔法使い、だと思います。
彼女は私と同じぐらいで痛みに叫ぶ子猫に攻撃をして私も抵抗した
けど返りうちにあって・・・そして、止めを刺そうとした時微かに
聞こえたあの子の声

「ごめんね」

確かに聞こえた。けど、その時私は彼女の攻撃に巻き込まれてしま
っていました。
その後彼女にジュエルシードは奪われてしまったけど子猫は無事で
した。

あの子悲しい声をしていた。

私はそう思いました。

？？？ｓｉｄｅ

またここであの声が聞こえる。

確かに彼女の成長ぶりは凄いがただ体力がない。子供にしてはいい方だと思うがそれでも彼女には長時間の戦闘は無理だろう。
だが、それとは裏腹に彼女の真価をみた気がした。
街を巻き込んだあのジュエルシード。教えてもいない広範囲サーチ。
そして、砲撃モードによる封印。
確かにＲＨはそういうデバイスとしてある。つまり彼女のスタイルは後方支援型の砲撃タイプだ。あの威力は想像していなかったが。
自分の意志でやったとは思えない。あの状況の中で彼女が無意識にそれも何かを願うかのようにＲＨが反応した。と考えるのが妥当か。
さっきの事件で自分の甘さを実感しさらに意志、決意が固くなったな。
９歳の子供にして心が強い。
なのはの本当の強さをしった時でもあったのかもしれない。

それからすずかというなのはの友達の家で発現したジュエルシード。
そこで出会う魔法使いはなのはに大きな変化をあたえた。
だが、それは彼女だけではなかった。

「同系の魔導師　ロストロギアの探索者か　バルディッシュと同じインテリジェントデバイス」

彼女の声を思い出していた。

あの子の髪、顔立ち、そしてあのインテリジェントデバイス。
どこかで見たことがあるような・・・。
それにバルディッシュという名のデバイス。
そう、確か前にどこかで・・・・。

おっとっと口調、口調。

彼は何かに気付いたのか少しあわてた様子だった。

なんであれなのはには頑張ってもらわないと。
僕の出番がくるまでは、ね？♪

二人の思いとは関係なく運命は彼女たちを出会わすことになる。

ＥＮＤ

おまけ

次回第５話は山だー！旅館だー！温泉だ―！浴衣だー！事件だー！
ジュエルシードだー！もう一人の魔法使いだー？

第４話　もう一人の魔法使い現る、なの？（後書き）

第４話です。途中フェイトの登場をかなり省いたかも。焦っているのか俺？
やっとオリジナルらしい文章になってきたかな？誤字も多いと思いますが・・。
次回はおまけでも描いたあの回が登場です。あの回まじでユーノが羨ましいと思ったのは俺だけではないはず！
次回の更新は明日かそれ以降になるかと思います。できるだけ早めに投稿したいと思っています。フェイトの出番も増やさなきゃ。

第5話　ここは、湯のまー『温泉だー！浴衣だー！事件だー！』温泉なの・・・？

久しぶりの投稿です。今回はちょっと長いと思います
そのため脱字、誤字があるかと思われますのであしからず

第5話　ここは、湯のまー『温泉だー！浴衣だー！事件だー！』温泉なの・・・

？？？

そこは木々が生い茂る生き生きとした場所だった
広い土地は一面緑。こんな場所ならピクニックにでも行きたいような場所だ
そんな場所にじゃれ合っている子供と子犬がいた

「あはははは、こっちだよ！」
「ワン！」

仲が良い
誰もが見たらそう思うだろう

「あっ」

少女は体勢を崩し尻もちをついた。けど、子犬はお構いなしに飛びついて少女の顔をなめる

「あはは、くすぐったいよ～」
「ワン、ワン（ペロペロ）」

そんな少女たちを遠くから見ていた若い男女が近づいてきた

「お嬢様あまりはしゃぎ過ぎてはいけませんよ」

「まぁいいじゃないか。子供は無茶するぐらいの方がいいさ」

一人の若い女性は彼女の侍女だろうか？お尻のあたりに猫のような尻尾が生えてる
逆に若い男性は手になにやら黒い杖を持っている

「お兄ちゃん、それな～に？」
「ん、これか？これはお前の新しい友達でもありお前と一緒に戦ってくれる鎌だ」
「えっ、わたしもうデバイス持っていいの！？」
「はい、お嬢様もそろそろデバイスを持ってもいい頃なので。私と彼が一緒にあなたのために造ったんですよ」
「ありがとうリニス、お兄ちゃん！」

少女はともて喜んでいた。まるで新しい玩具を買ってもらったかのように嬉しそうだった

「そうだ、この子には名前があるんだ」
「名前？」
「そう、この子の名はバルディッシュ」
「ばるでぃしゅ？・・・・バルディッシュ！」

二回目でちゃんと言えたようだ。
彼女はバルディッシュを見てあいさつをした。

「よろしくね、バルディッシュ！」
『Ｙｅｓ　Ｍａｓｔｅｒ』

「・・・・っ・・・・」

彼は地面に膝をついて彼女と同じ目線で喋りはじめた。

「おまえは・・バルディッシュを使って何をするんだ?」

「お母さんを手伝ってあげるの!そうすれば一緒にいられるから・・」

彼の顔は憐れみのような顔をしていた

答えた少女も少し悲しい顔をしていた

「・・・そっか」

彼は少女の頭をなでてあげた

「えへへ」

先ほどの悲しい顔をから笑顔がこぼれていた

―きっと、辛いことや悲しいことがお前には訪れるかもしれないけど・・・

「頑張れよ・・・・・フェイト」

???side

「!」

突然彼は目を覚ました。うなされていたわけではないただ、なんだか懐かしいものをみたような感じだった

彼は夢を思い返すように言いだした。

「・・・・バルディッシュ、じゃああの子は・・・・・しかし、何故？」

彼には疑問が出てきた。

例えそうだとしてもここにいるはずがないのだ。

「でも、なぜなんだ。なぜジュエルシードを・・・・・！」

そうか、わかった

彼には心あたりがあった。絶対的な確信が

「まだ、過去に囚われているのか・・・。死んだ奴は・・生き返らないんだぞ」

悲しんでいたのかもしれない。同情からもしれない。けど、どんなに悲しんだって、同情したって変わらないものもある。

人の決意というものはそう簡単には揺らがないのだから

「・・・朝、か」

カーテンの隙間から日がさしていた。

まだ、起きていない向かい側の少女は可愛い笑みを浮かべていた。

「・・・・・フェイト」

彼は再び眠りについた

今度は夢をみることなく

第五話　ここは、湯のま―『温泉だー！浴衣だー！事件だー！』温泉なの・・ってええっ？

さて、日本国内というか全国的に連休です！
喫茶翠屋は年中無休ですがお店を店員さんたちにお任せにしてちょっとした家族旅行に出かけたりします。
今回はなのはのお友達一同とお兄ちゃんの彼女月村しのぶさんと月村さん家のメイドさんたちといっても二人だけですが・・・
近場で二泊のんびりと温泉につかって、日ごろの疲れを癒そうという高町家の家族旅行としてはいつのもプランです。

移動中の車内

私は後部座席に座り映りゆく景色を眺めていました。
この家族旅行は私の一年の行事の中でもとても大事な日でもあり、家族で旅行なんて滅多にないので私は毎年この家族旅行を楽しみにしています。
そんなことを考えているとユーノくんが

―なのは、旅行中ぐらいはのんびりしないと駄目だよ？
―うん、わかってるよ。大丈夫

そうは言っても脳裏にあの黒い魔法使いの姿が浮かんでしまう。
アレから一つもジュエルシードを見つけられなかったこと・・・色

々考えすぎちゃってるからゆっくりお休みするようにってユーノくんのお勧めもあってー

すると車が止まり身体が少し揺れた。
気がつくと車は旅館についた。

とりあえずこの2日間はなのはも年相応のお子様らしく目一杯遊んでしまおうと思います。

「う～～～ん！」

大きく背伸びをして安堵する。

そして、さっそく旅館のメインとも言える温泉に入りたいと思いま～す

婦人の湯と書かれた場所。
もちろん女性の湯という意味だ↑アレ？
そう、男は入れない。入れるのは小学生まで。男は涙を惜しんで男湯にはいるしかない生き物。混浴があっても相手がいないんじゃあただの変態。
覗きたくても俺たちには越えられない壁がある。
たった一枚の板。

それがなんだ！

しかし、そんな薄っぺらのような壁でも俺たちには越えられないもの。
そんな神聖な場所に一匹が迷い込んでいた・・・・

―ユーノくん、温泉入ったことある？

頭に彼女の声が聞こえた。

彼は今脱衣所のロッカーの中にいて壁側を向きたっていた。

―え、あ、うん・・・公衆浴場とか、自然のとか・・

―えへへ～。温泉はいいよね～

―そ、そうだよね？

と言いながら後ろ振り向くとそこには俺たちにとっては楽園が広がっていた。絵がないのが残念だ。

しかし、彼にとっては―

―ほ～最近の子は発育がいいな、特に彼女達の姉とかナイスバディーというやつか

とまったく別の意味で興味を抱いていた。

？？

―悲しいな～時代ってやつは。昔なんか胸の小さい奴らなんか悩み悩み悩んだあげく自殺した奴までいたよな～。遺書には「巨乳憎い」と書いてあった。どうにかならないかって相談しにきた奴もいたっけ。そう考えるとなのはとすずかは将来は安定だな。アリサは・・・まぁ有望だな。

ホントにこいつ男か？

ってあれ？

とじっくり観察、考察、昔に浸っているとあることに気付いた。

―色々とまずいのではこの状況?

といまさらながら気づいた。

―あの、なのは?やっぱり、男湯の方へ・・・

―ええ～いいじゃない、一緒に入ろうよ!

確かに、男湯になんて入りたくはないさ。けど、色んな意味で駄目なんだよなのは。

そんな瞳で僕をみないで・・・

ていうか身体をこっちにむけないで―

そして、なのはに抱かれ温泉にはいる一向。

小さいながらもなかなか広い温泉だった。

ていうかここ動物禁止じゃないのか!?

と心の中で叫ぶ彼だった。

「わ～広い!」

「ねぇお姉ちゃん?背中流しっこしよう?」

「うん、ありがとうすずか」

月村姉妹がそういうとなのは姉妹も続いて

「じゃあ、私も」

「ありがとう」

「キュー」

泣きながらユーノくんはアリサちゃんに捕まえられてしまいました。

「ふふ～ん。じゃあ、あんたは私が洗ってあげるね」
「キュー！！」
「ははっ、心配ないわよ。私洗うの上手いんだから♪」

そんな一人と一匹のやり取りをみていたなのはは

「えへ」

笑っていた。

「じゃあ、私たち先にあがるねー」
「旅館の中と探検してくるから」
「うん、またあとでね」

温泉から出ようとするなのはとすずか。
ユーノは姉の肩でのぼせていた。
そんな彼をアリサは逃がさなかった。

「さぁ、あんたもいくわよユーノ」

その手の動きはなんですか？

「き、キュー・・・・」

それから三人と一匹は旅館の廊下を歩きながらこれからどうすか話し合っていた。

「どうする？」
「卓球とか？」
「えー私お土産とかみてみたい」
「卓球はちょっと」

―・・・はぁやっと解放された

一匹は一人で溜息をついていた。

―それにしてもなのは、髪をおろすと結構長いんだ。髪の色も母親似だしなによ り

―浴衣最高―！

アレこれユーノだよね？

すると三人が歩いている少し目の前の女性が声をかけてきた。

「Ｈｉ～☆おちびちゃんたち」

あいさつをし三人のとこにやってきたその女性はどこか不思議な感じだった。
それを感じ取っていたのはユーノだけだった。

―・・・この人、人間じゃない

「ふむ、ふむ君かね～家の子をあれしてくれちゃったのは？」
「え、ええ？」

なのは足一歩を後ろに引きずった。

「あんま賢そうでも強そうでもないし、ただの餓鬼んちょに見えるんだけどなー？」

訳のわからないことばかりいう女性にアリサが前に出た。

「ん～、なのはこの人お知り合い？」
「ううん」
「この子、あなたを知らないそうですがあなたどちらさまですか？」
「あは～ん？」

少しの間睨み合いが続いた。

「あははははっはははっごめんごめん。人違いだったかな？知ってる子によく似てたからさぁ」
「あーなんだそうだったんですか」

なのは安心したのか少し溜息をついていた。

「あははは っ可愛いね」
「あ、はい」
「よしよ～し、なでなで～」
「は～」

その時近づいてきた女性になのは見惚れていたのか定かではないがそれは一瞬にして崩れ去った。

―今のところはあいさつだけね

「はっ」

「ん！？」

―忠告しておくよ、子供いいこにしてお家で遊んでなさいね。お痛がすぎるガブッっていくわよ？

「・・・っ・・・」

「さ～てもう一風呂いってこよ～っと」

そう言い残すと女性は去って行った。

―なのは

―うん・・・

二人はその女性をみていることしかできなかった。

婦人の湯

先ほどの女性が温泉を楽しんでいた。

―あーもしもしフェイト？こちらアルフ

旅館から離れた林のなか。旅館の敷地内かもしれないその場所の一本の木の枝に杖を持った少女がいた。
まるで絵になるような光景でもあった。
けど、声が聞こえるまでは眠っていたようだ。

「ん」

―ちょっとみてきたよ。例の白い子
―そう、どうだった？
―う～ん、まぁどうってことないね。フェイトの敵じゃないよ
―そう、こっちも少し進展。ジュエルシードの位置がだいぶ特定できてきた。今夜にも捕獲できると思うよ
―ん～ナイスだよフェイト！さすが私のご主人様
―うん、」ありがとうアルフ。夜にまた落ち合おう
―は～い

それから会話がおこなわれることはなかった

「はぁ～くつろぎ、くつろぎ」

再び温泉に浸っていると気が緩んだのか彼女の頭からデカイ耳が飛びだした。

「おっと、いけないいけない」

あたりはもう暗くなり月が出ている。三人ではしゃいだあと私たちは大人組より先に就寝しました。子供だからな？
なのはを中心とし隣に二人が寝ている。
なのは寝付けなかった。
二人をみればぐっすり寝ていて彼女はユーノに声をかけた。

―ユーノくん、まだ起きてる？
―うん

アリサと一緒に寝ていたが彼女の布団から出て彼女の所へゆく。

―昼間の人このあいだの関係者かな？
―多分
―またこの間みたいになっちゃうのかな・・
―・・・なのは、やっぱりここからは「ストップ！」えっ？

ユーノが最後まで言うのを止め彼の頭に触れていた。

―そこから先、言ったら怒るよ？ここからは僕一人でやるよ。これ以上なのはを巻き込めないから、とか言うつもりだったでしょ？
―・・うん

最初は怒っていた彼女だったがすぐにいつのもの笑顔にもどった。

―ジュエルシードと集め。最初はユーノくんのお手伝いだったけど今はもう違う。私が自分でやりたいと思ってやってることだから
なのははユーノを抱いた
―私を置いて一人でやりたいなんて言ったら怒るよ

―・・・うん
―・・ん・・・
―少し眠っておこ?きっと今夜なにかあるかもしれないからね
―うん

旅館の近くを流れるちいさな庭園のような川。そこの石と石の狭間に蒼い石があった。
それは光を出しながら落ちそのまま流れてしまった。

しかし、それに気付いた者がいた。

突如光を放ったジュエルシード。
遠くから見れば綺麗な光の柱が立っていることだろう。
だが、その光景を近くでみていたものがいた。

「ビンゴ、見つけたよフェイト!」

少し離れた場所で一人の女の子がその場所に向かっていた。

「なのは!?
「大丈夫・・・RHお願いっ!」
『Standby Ready setup』

ジュエルシードの近辺

「わー凄いね。これがロストロギアのパワーってやつ?」

「随分不完全で不安定な存在だけど」
「あんたのお母さん。なんであんなもの欲しがるんだろうね？」
「さあ、わからないけど・・・関係ないよ。母さんが欲しがってるんだから手に入れないと」

そう、理由なんてどうでもいい。ただ、私はお母さんのために―

「バルディッシュ、起きて！」
『イエッサー』

主に問いに応えその姿を見せる黒い斧。

『ｓｅａｌｉｎｇ　ｍｏｄｅ　ｓｅｔ　ｕｐ』

斧の部分が１８０度回転した。最初の状態、斧の先っぽが先頭になった感じだ。

「封印するよ、アルフサポートして」
「へいへい」

アルフと呼ばれる女性は相槌を打つような返事ではあったがしかし、彼女はいつもあの子のために真剣だった。

「アレは！？」

封印するのと同時になのはが現場に到着した。

「あ～ら、あらあらあら」
「はぁっ！？」

なのは彼女をみて驚いた。なぜなら彼女は昼間にあった女性でしかも耳が生えているのだから

「子供いい子でっていわなかったけか」
「それを、ジュエルシードをどうするつもりだ？」

ユーノは慌てず冷静に質問した。

「さあね？応える理由が見当たらないよ。それにさぁ、私親切に言ったよね？いい子でないとガブっといくよって」
「・・・っ！！」

すると彼女の身体が変異を始めた。体には毛が生え手は足と爪になり顔をは犬というより狼、犬と狼を足して割った感じだった。

アオオオオオン！

「やはり、使い魔！」
「使い魔？」

そうさ、私はこの子に創ってもらた魔法生命。製作者の魔力で生きる代わりに命と力のすべてをかけて守ってあげるんだ」

アルフは自らの正体を明かしなのはの疑問にも答えた。

「先に帰ってて。すぐに追いつくから」
「ん、無茶しないでね」
「ＯＫ～！」

高く飛びそのままなのはにかみつく気だろう。
ユーノは彼女から降りフィールドを張った。

フィールドによってアルフの攻撃は防がれた。

「ちっ」

「なのは、あの子をお願い」

「えっ」

なのはにはユーノの今の状況に少し驚いていた。

「させるとでも思ってんの！」

さらに彼女の攻撃は増していく。

しかし―

「甘くみるなよ！」

するとさらい広範囲な魔法陣が展開された。

「移動魔法？まず―！」

「違うな、転移魔法さ・・ふん！」

するとユーノたちの姿はなく取り残された二人。

なのはあたりきょろきょろしていたがフェイトは表情を変えてはいないが今起きた現状に驚いた。

「結界に強制転移魔法・・・いい使い魔を持っている」

「む、ユーノくんは使い魔ってやつじゃないよ！私の大切な友達！」

ユーノのことを使い魔と言われ少し怒ったなのは。

少しの間睨み合いが続いた。
先に口を開いたのはフェイトだった。

「で、どうするの」
「話し合いでなんとかできるってことない？」

なのは、できれば戦いたくなかった。戦わず話し合いで解決したかった。

「私はロストロギアの欠片をジュエルシードを集めないといけない。そして、あなたも同じ目的なら私たちはジュエルシードをかけて戦う敵同士ってことになる」
「だからそういうことを簡単に決めつけないために話し合いって必要なんだと思う」
「話し合うだけじゃ言葉だけじゃきっとなにもかわらない・・・伝わらない！」
「・・・はっ―！」

気がつけば彼女はなのはの後ろ回り込んでいた。
杖をなのはに当てようと振りかざすがなのはしゃがみそれを避ける。
だが、フェイトはすかさず第二撃を当てる。

『Ｆｌｉｅｒ　Ｆｉｎ』

なのはの足に小さな羽根が現れ上空へ飛びかわす。
フェイトもそのまま空へ、彼女を追う。

「でも、だからって！」
「かけて、それぞれジュエルシードを一つずつ」

―なんでこんなにもジュエルシードに拘るの？
―なんで彼女はあんなに必死で話し合いをしようとすんだろう？
互いに気付かないうちにそんなことを思っていた。
「―ああっ！」
彼女は月を背に私に近づいてた。

二人が戦っている最中別の場所でも戦いは行われていた。
「ちょろちょろちょろちょろ逃げ回るんじゃないよ！」
2匹は林の中を走っていた。正確にはユーノがアルフに追われている感じだ。

「なぜ、ジュエルシードを集める！？アレの危険性がどれだけものか知らないのか！？」
「はん、そんなの知ったこっちゃないね。主人の命令に従う。それが使い魔ってもんだろう？お前も！」
「俺が使い魔ぁ？」

ユーノは足を止め振り向く。
アルフも足を止めていた。

「使い魔ぁ？ってどうみてもそうじゃないか」
「ふん、これには色々とわけがあるんだよ！」

『Ｔｈｕｎｄｅｒ　Ｓｍａｓｈｅｒ』

彼女の手から雷のような砲撃が放たれる。

『ディバインバスター』

ＲＨからも凄まじい砲撃が放たれた。

激突する両者の攻撃しかし、どちらも一歩も引かないといえばそうなる。

「ＲＨお願い！」

『Ａｌｌ　Ｒｉｇｈｔ』

なのはの思いに応えたのかさらに威力があがり彼女の攻撃を打ち消した。

それを遠くから眺めていた２匹。

「なのは・・・だが甘い」

「？」

アルフはその言葉に不信感を抱いた。

なぜ、自分の相棒にそうまで冷たいことをいうのか？

自分だったらわかっていてもわからなくても感動的なまたほめ言葉を漏らしていたであろう。

だが、彼の言葉は間違ってはいない。

『Ｓｃｙｔｈｅ　Ｓｌａｓｈ』

彼女の攻撃を軽々とよけフェイトのデバイスは鎌になりそのままなのはの隙をついて斬りかかる。

「・・ん・・あっ―！」

恐らくしとめたと思い込んでいたのだろうか。上空に彼女がきりかかっていることに気付かなかった。

「・・ん！」

咄嗟に目をつぶってしまう。やられることを悟ったのだ。

「・・・・・」

しかし、彼女の首が斬られることはなくそのぎりぎりのとこで止めていた。

こんな芸当簡単にできるものではなかった。

だが、その一撃をとめたのはフェイトの、彼女の甘さでもあったかもしれない。

するとＲＨは自分が持っているジュエルシードを差し出した。

「ＲＨなにを！？」

なのははＲＨが何をしているのかわかなかった。

けどフェイトはそれを理解していた。

「きっと主人思いのいい子なんだ」

彼女は差し出されたジュエルシードを手に取り地上に降りた。
なのはも地上に降りるが

「帰ろう、アルフ」

動物形態から人型へ戻るアルフ

「流石私のご主人様♪じゃあね、おちびちゃん」

去ろうとする二人をみてなのは声をかける

「待って！」

だが、彼女は振り返らない

「できれば私たちの前にもう現れないで。もし、次であったら今度は止められないかもしれない」
「名前、あなたの名前は！？」
「フェイト、フェイトテスタロッサ」
「・・っ私は―」

しかし、なのはがいうまえに二人は去ってしまった。
暗い林に向こうに

なのはｓｉｄｅ

疲れをとるための旅行が逆に新たな悩みと不安を生んでしまった今

回の出来事
私は、あの子とどうしたいんだろう
これからわたしはどう向き合えばいいの？
そのためにどうしたらいいの？

自分がどうしたらいいかわからなくなってくなのは。
決めたのに決意したはずなのに自分がどうしたらいいかわからなくなっていった。
不安が彼女を縛る

ユーノｓｉｄｅ

やはり、彼女だった
できれば嘘であって欲しかった
けど、現実はその逆で
自分の思いとは裏腹で

―フェイト・・・・

あんなに笑っていた彼女がなんであんなことを・・・
けど答えはわかっていた

―プレシア・・・お前にとってフェイトはそれぐらいのこと、なのか？

・・・あなたが、あなたが力を貸してくれればあの子は！あの子は！

かつては互いのよき理解者でもあり、研究者して共に働き・・・そして―

―もう、昔のお前じゃないんだな

戻ってくれば元に戻ると思っていた

けど、それは偽りのもので彼女はだんだん壊れていった

俺はわかったていただが・・・

そして、彼女は本物を生み出すために

ただ、愛した娘のために

―あいつは壊れてしまった

第5話　ここは、湯のまー『温泉だー！浴衣だー！事件だー！』温泉なの・・・？

第五話です。今回はかなり苦労しました。バルディッシュの技を英語で表現するのは難しい。ディバンインバスターも見つけれずカタカナになってしまいました。

さて、実は自分の本音みたいのが描かれています。いや～やっちゃたそして、ちょっとネタばれに近いユーノはそろそろ正体を明かすと思います。

多分オリ主なんですが・・・ちー（ｒｙといわないほうがいいですねほとんどなのは、ユーノ視点でかいてますができるだけフェイトもいれるように努力したいと思います

第6話　わかりあえない気持ちなの？

わかりあうって駄目なのかな・・・

話し合いで解決するってそんなに難しいことなのかな？

彼女は悩んでいた

きっとあの子、私と同い年だと思う

綺麗な髪と瞳をしていて・・・

それは少し嫉妬かもしれない

私はあの子と話し合いたい、わかりあいたい

でも、今のままじゃ無理だと思う

なら、どうしたらいいの？

どうすれば話を聞いてくれるの？

誰も答えてはくれない

答えてくれるのはどんな時で己自身なのだから・・・

きっと彼女はそれにまだ気づいていない

第6話　わかりあえない気持ちなの？

「いいかげんにしないさいよ！」
「・・・・！」

アリサのどなり声が教室に響き渡る
目の前で聞いていたなのははあまり驚いておらずクラスのみんながなのは達の方を向いている。

「この間から何を話しても上の空でボーっとして！」
「あっ・・ご、ごめんねアリサちゃん―」
「ごめんじゃない！私たちと話しているのがそんなに退屈なら一人でいくらでもボーっとしてなさいよ！いこう、すずか」
「あ、アリサちゃん・・」

なのはの謝罪を許さずさらに怒り教室を出て行ってしまった

「あっ―なのはちゃん・・」
「いいよ、すずかちゃん。今のはなのはが悪かったから」
「そんなことないと思うけど・・。アリサちゃんも言いすぎだよ、私ちょっといってくるね」
「ごめんね」

すずかが教室を出るのを見る。

「怒らせちゃったな・・・ごめんね、アリサちゃん」

本人がいない場で彼女は誤った

今のは自分が悪い。さすがにそれは私でも自覚していた。あの日か

ら私は考え事をすることが多くなった。
二人と話していてもどこか上の空だったんだと思う。
ホント私、最低だな・・・

「アリサちゃん、アリサちゃん！

彼女を追って階段を降りるすずか。

「なによ」

歩みをとめ上にいるすずかに顔を向けるアリサ

「なんで怒ってるかなんとなくわかるけど駄目だよ、あんまり怒っちゃ」

すずかは普段は中立の立場で立っていた。二人がいつも喧嘩したりすると彼女が間に入っていた。

「だって、ムカつくわ！悩んでるの見え見えじゃない、迷ってるの、困ってるのみえみえじゃない！なのに、何度聞いても私たちには教えてくれない・・」

「うん・・・」

「悩んでも迷っていないって嘘じゃん！

「どんなに仲良しな友達でも言えないことはあるよ、なのはちゃんが秘密にしてるなら私たちは待ってるしかできないんじゃないかな？」

友達だから、親友だからなんでも話すわけでもない。むしろそうだから逆に相談しにくいのかもしれない。

だから、本人の口から言ってくれるまで待っているのが友達ではないか？
それでもアリサは譲らなかった。

「だから、それがムカつくの！少しは役にたってあげたいのよ！」

アリサはなにも自分がしてやれないことにいら立っていた。

「・・・どんなことだっていいんだから、何もできないかもしれないけど少なくとも一緒に悩んであげられるじゃない！」
「やっぱり、アリサちゃんもなのはちゃんのこと好きなんだよね」
「そんなのあたりまえじゃないの！」

すずかは笑い、アリサは顔を赤く染めていた。

「あの子がいたから、私は一人ぼっちじゃなくなったんだ」
「・・・そうだね、私もそうだよ。あの時なのはちゃんがいたから私たち友達になれたんだよね」

あの日小学校に入りたての私は、自分でいうのもなんだけど我ながら最低だったと思う。
自信家で強がりで我がままで・・・クラスメイトを馬鹿にして楽しんでいた。
私は心が弱かったから。
そうやって自分の弱さを埋めていた。

初めてあったころ、私は今よりずっと気が弱くて思ったことをぜん

ぜん言えなくて、誰になにを言われてもぜんぜん反応できなくて・・・

ただ、周りに流されていただけだと思う。自分の意志じゃなくて他人言われそのまま。

『あの時それを初めて実感してそしてかわった』

アリサがすずかの大事なものをとりすずかをからかっていた。

―私も弱かったから。なにも言えなかった。それはすごく大切なものだから返してって。それだけのことも言えなかった。

―私はなにも言われても聞かなかった。みんな素直に聞いたらなにかに負けちゃうような気がして

そんな二人の間に入ったのがなのはだった。

なのははいじめられているずずかの前にたちアリサの顔をぶった。

あの時なのはこう言っていた。

「痛い?でも、大事なものを盗られちゃった人の心はもっと痛いんだよ」

今でも覚えているあの子の言葉。

そのあと二人は大喧嘩になった。

それを止めたのは弱気でなにも言えなかったすずかだった。

―今思えばあの時は必至だった

それから少しずつ私たちは話をするようになって

「で、すずかはそんな昔話をきっかけに私にどうしたいわけ？」

「わかってるくせに」

「ん・・・私たちに心配させたくないだけだってことぐらいわかってるわよ。私たちじゃあの子の助けにならないってことも待ってるだけしかできないことも・・・じゃあ私はずっと怒って待ってる。分け合えない寂しさと親友の力になれない自分に―」

「・・・いじっぱり」

「ふーんだ」

高町家

「そっか喧嘩しちゃったのか」

先ほどまでのいきさつをなのはから聞いたユーノ。

「違うよ、私がボーっとしてたからアリサちゃんに怒られただけ」

「親友なんだよね」

「うん、入学してからずっとね」

ユーノは一度を下を向いた。

「なのは・・・僕がいえることじゃないけど、友達は―ううん、親友だったら尚更大事しなよ？喧嘩したら親友じゃないんじゃない。そういうことを怒ってくれるのが親友なんだ」

俺は後者で親友を怒っていた。けど、誰も俺を叱ってくれなかった。

いつも俺は親友を正しい道に導こうとしていた。

「ユーノくんにも親友がいたの？」

少し失礼な質問だったと思う。
けど、なぜか聞きたかった。

「いた、けど数えるぐらいしかいなかった。僕はある理由であちこちを転々としていたから友達、中々つくれなくて・・・けど、どこに言っても親友と呼べる友達はいた」

そう、自分のことをちゃんと見てくれた友たち。

「そう、なんだ」
「だから、なのは。友達を信じてあげて。今は互いに距離を置いてるけどお互いどうしたらいいかわからないんだ。なのはも・・」
「うん、そうかもしれない」

―ああ、やっぱりユーノくんにはわかっちゃうんだよね

私はおやつのたいやきを手に取り半分にわけた。

「はい、こっちユーノくんの分。・・はむ・・・もぐもぐ・・・。今日は塾もないし夕飯まではゆっくりジュエルシード探しできるよ、だから一緒に頑張ろう」
「・・うん、頑張ろう」

海鳴市の町中に一際高いビル。

けど、周囲の人間は気づくことはなかった。
住人は一人一匹

「んんはむもぐもぐ、こっちの世界の・・ご飯もなかなかいけるね～♪」

おいしそうに食べているのはドッグフードだった。
アルフは獣モードなら食べていても違和感はないが人型ん状態だと見ているこちら側としてはちょっと気分が悪くなる。

「さて、家の御姫様はっと。・・・おっと忘れ物」

手に取ったのは犬元気と書いてあるドッグフード。

二階にいる自分の主の元へ向かうアルフ。
二階も一階と同じく殺風景な空間だった。
必要なものにしか置いておらずあるのは母と一緒にしる写真。

「あーまた食べてない！」

先ほど作った食事を食べていないことを怒ったアルフ。
自分は使い魔だからこういうこともこなす。

「駄目だよ、食べなきゃ」
「―少しだけど食べたよ、大丈夫」

起き上がるフェイト。
アルフは彼女の背中の傷をみた。

「そろそろいこうか」
「あっ」
「次のジュエルシードの大まかな位置特定はできるてし、あんまり母さんを待たせたくないし」
「そりゃあまぁフェイトは私のご主人様で、私はフェイトの使い魔だからぁいこうって言えばいくけどさ・・・」
「あっそれ食べ終わってからでいいから」

フェイトに言われ自分が持ってきたドッグフードをむこうにやる。

「そうじゃないの、私はフェイトが心配なの。広域探索の魔法はかなりかなりの体力を使うのにフェイトってばろくに食べないし休まないしその傷だって軽くはないんだよ？」
「平気だよ、私強いから」

そういうとベットがから起き上がり自分の漆黒のマントを身にまとった。

「さぁ、いこう。母さんが待ってるんだ」

海鳴市某所

なのはとユーノは街を歩いていた
こうするだけで近くにジュエルシードがあればその反応を察知し、二次被害を食い止められる。
しかし、そう簡単にはみつからない

また、別の場所でフェイト、アルフも探していた。
彼女達もみつけることはできていなかった。

時間は経ちすでにあたりは暗くなっていた。

「う～タイムアウトかも、そろそろ帰らないと」
―大丈夫だよ、もう少し僕がさがしておくから
「うん・・」

ユーノはなのはから降りた。

―じゃあ、晩御飯とっておいてね
「うん」

なのはに手を振ってジェルシード探しを再会する。
なのはは家の方に向かって走った。
途中走るのをやめ携帯を開いた。

新着メールはありません

期待はしてなかった
むしろこっちから言うべきだと思う

そして、また彼女は走りだす

そんな二人の近くに黒い影が一角のビルの上に降り立った。

「だいたいこの辺りだと思うんだけど大まかな位置はわからんいだ」
「はーこれだけごみごみしてると探すの一苦労だね」

「ちょっと乱暴だけど周辺に魔力流を打ちこんで強制発動させるよ」
杖をかまえるフェイト。しかし、アルフが口を出した。
「あー待った。それあたしがやる」
「大丈夫？結構疲れるよ？」
「いったいこの私を誰の使い魔だと？」
「じゃあお願い」
「んじゃー！！！」
アルフは魔法陣を展開させ魔力流を流す。
その反応に二人もすぐ気付いた。
「ん？」
「あっ」
互いに別の場所でそれを察知した。
「こんな街中で強制発動？やってくれるなあいつら。広域結界、間に合うか！？」
ユーノも被害が及ばないよう結界をはる。
強制発動すればどんなことが起きるかわからないからだ。
「はぁはぁ・・・・」
なのはは走っていた。
ジュエルシードの場所に。

胸にあるＲＨを掴み空へ投げる

「ＲＨ、お願い！」

『Ｓｔａｎｄｂｙ　Ｒｅａｄｙ　ｓｅｔｕｐ』

魔力流に反応したジュエルシードが発現した。

「見つけた！」

「けど、あっちも近くにいるみたい」

すると辺りの色が変色した。

「早く片付けよう、バルディッシュ！」

『ｓｅａｌｉｎｇ　ｆｏｒｍ　ｓｅｔ　ｕｐ』

バルディッシュが封印形態に移行し、ジュエルシードに向けて構える。

なのはｓｉｄｅ

なのはの方からもジュエルシードが発動したのが確認できた。

―なのは、発動したジュエルシードがみえる？

ユーノくんから連絡がはいる。

―うん、すぐちかく

―あの子たちもすぐ近くにいるんだ。あの子たちよりさきに封印して！
―わかった！
RHも封印形態移行する。

「あっ」

しかし、自分が封印するのより向こうのが早く行動していた。
こちらもすぐに行動を起こす。
ジュエルシードを二つの光だ捕える。

「リリカルマジカル！」

「ジュエルシードシリアルXIX！」

「封―」
「―印！」

両方のエネルギーがジュエルシードに向けて放たれた。
そして、互いに打ち消し合った。
結果は見事沈静には成功した。

ここからが勝負―

フェイトよりジュエルシードの近くにいたなのははすでに目の前にいた。
ただ、なぜかその時アリサちゃんとの喧嘩したときのことを思い出してしまった。

―アリサちゃんとすずかちゃんも初めてあったときは友達じゃなかった。話をできなかったから、わかりあえなかったから。アリサちゃんを怒らせちゃったのも私が本当のことを思ってることを言えなかったから・・・

「よし、なのはすぐ確保を―」

「そうはさせないよ！」

上空にアルフが襲いかかる。

ユーノが前にでてフィールドをはり防ぐ。

「・・あっ」

目の前にはあの子がいた。

漆黒のマントを纏い私の目の前に・・

―目的があるからお互いぶつかりあうかもしれないだけど知りたいんだ

なのはは一歩、足を前にだす

「このあいだは自己紹介できなかったけど、私なのは―高町なのは」

『Ｓｃｙｔｈｅ　ｆｏｒｍ』

彼女はかまわず戦闘形態に移行している。

「！」

なのはも慌てて杖を構える。

―どうして、そんな寂しい目をしているのか・・・

「はっ！」

フェイトはいったん距離をおきそこから加速し迫る。

『Ｆｌｉｅｒ　Ｆｉｎ』

なのはも上へ避ける。

そこから海鳴を戦場にした空中戦がおこなわれた。

一人は接近戦を得意とした雷の魔法使い

一人は遠距離、射撃戦を得意とした星の魔法使い

互いに一歩も譲らない戦いだが二人の経験を考えればフェイトに一歩優勢だった。

「あっ！―！」

後ろに回り込まれるが自分もすかさず後ろに回り込み撃つ

『ディバインシューター』

『Ｄｅｆｅｎｓｅｒ』

彼女から放たれた攻撃を防ぐ

お互いまた距離を置いて構える

けど、なのはは彼女の名を呼んだ

「フェイトちゃん！」

「！」

フェイトもまさか自分の名前を呼ぶとは思わなかった

「話し合うだけじゃ、言葉だけじゃなにもかわらないって言ってたけど話じゃないと、言葉にしないときっと伝わらないことだってあるよ！ぶつかりあったり、競いあうことも仕方がないかもしれないけど・・だけど、なにもわからないままぶつかりあうのは嫌だ！」

フェイトは動揺しながら彼女の言葉聞いていた。

「私がジュエルシードを集めるのはそれはユーノくんの探しものだから。ジュエルシードを見つけたのはユーノくんで、ユーノくんはそれを元通りに集め直さないといけないから。私はそのお手伝いで―けど、お手伝いをするようになったのは偶然だったけど自分の意志でジュエルシードを集めて自分の暮らしている街や自分の周りの人に危険が降りかかったらいやだから、これが私の理由！！」

―そうだ、それでいい。自分の思ったことおもいっきりぶつけろ。そうすれば相手にも、そして自分の答えも見つかる

「・・私は『フェイト、答えなくていい！』！」

地上で戦っていたアルフが叫ぶ。

『あっ』

「優しくしてくれる人たちの所でぬくぬく甘えて暮らしている餓鬼んちょなんかに何も教えなくていい！私たちの最優先事項はジュエルシードの捕獲だよ！」

ジャキン！

彼女は再び鎌を構える。

「なのは！」
「大丈夫！」

しかし、彼女は向かってこなかった。むしろ逆に向かっていた。

なのはもすかさず後を追う。

そして―

二人がついたのは同時だった。

「え？」
「な・・」

４人がその光景に驚いていた。

すると―

ジャリ、バキ

双方の杖にヒビがはいる。

そして、ジュエルシードはまた光を発した。
それに伴いその振動が空気に伝わりゴゴゴーと音が伝わってくる。
その光に４人は包まれた。

「きゃーーーーーーー！」
「くッ――――――！」

某所

「・・？」

稽古を終えたアリサとすずか。
すずかはなにかに気付いたのか空を向いていた。
その方向はなのはたちがいる方角だと知らずに

「ずずか、どうしたのー？」
「ううん、なんでもない」

もう一度携帯を開く

新着のメールはありせん

しかし、待っている人からの返事は帰ってこない

「もう、お腹減ったよ。帰ろう？」
「あっうん」

ガチャ

まだ夜は始まったばかりだ

第6話　わかりあえない気持ちなの？（後書き）

どうも、第六話です。アクセス数をみると毎日みてくださる方がいてとてもうれしいです。評価も最近はつくようになったのはうれしいです。実力不足のためなかなかあがりませんが・・・
次回はとうとうやっと私が描きたかったものがかけるはず！あったぶんもう二話必要かも・・・
ここまでタイトルとあんま関係なくね？と思ってしまうかもしれませんがあと少ししたらだと思うんでがんばります

第7話　そして運命という名の歯車は動き出す（前書き）

後半が適当になったかわりに中盤に力を入れすぎてしまった。

第7話　そして運命という名の歯車は動き出す

彼女は自分のためにやってくれている

それはいい―だが、ふと思うんだ

なんで俺はジュエルシードを集めているのか

放っておけばよかったと今では思っている

けど、今こうしているのが正しいとも思っている

そのおかげで継承者を見つけた

そして、あの子との再会

これは運命なのか

それとも必然だったのか

永遠を生きてきた今でもそれはわからない

ど、目の前で起きていることは確かなものだから

だけ

だったら、もう一度友と会おう

救えるかどうかはわからない

それでも、自分の意志で行動し判断する

やりたいようにやる

俺が今までそうしてきたように

そしてこれからも・・・・

第七話「そして運命という名の歯車は動き出す」

４月２６日
海鳴市　市街地　結界内部

「フェイトッ！」
「なのはッ！」

互いの相棒は主の名を叫ぶ
二人はジュエルシードの爆発に巻き込まれた

だが、そこから二人の人影が見えた。なのはとフェイトだ。
二人は衝撃波により飛ばされた。

フェイトｓｉｄｅ

吹き飛ばされたフェイトは安定したのを確認するとバルディッシュをみた
その姿はコアを中心にかなりの損傷だった。あちこちにヒビが入り今にでも壊れそうだった。

「大丈夫っ？・・・戻ってバルディッシュ」
『イエッサー』

その声には雑音が混じっていた。
手の甲に戻るのを確認すると目の前にあるジュエルシードをみた。

まだジュエルシードは活動を止めていない。先ほどのエネルギー放出により今は一時的に活動を静止している。

フェイトは助走をつけ一気にジュエルシードの下へ向かいその手に納める。
そう、彼女は自分の魔力でジュエルシードを止めようとしているのだ。

「フェイト、駄目だ危ない！」
「うっ、んんんんんんん！」

彼女の手の中で輝くジュエルシード。
本来ならばこういったロストロギアの封印などはデバイスを通して

行われる。理由は生身の人間では危険すぎるからだ。もちろん、デバイスがなくてもサポートがあれば可能だ。しかし、人体にどんな影響を及ぼすかはわからない。だから、デバイスを使い封印する。
フェイトはそれをわかっていながらも実行した。
バルディッシュをこれ以上傷つけないため。
そして、なにより今より被害を出させないために―

―止まれっ、止まれ止まれ！

ブチッ

グローブが敗れ血が吹き出た。
それでも、彼女は止めようとはしない。

―止まれ、止まれ！

―キュイン―

ジュエルシードは活動を停止した。
彼女の思いに反応したのだろうか？
フェイトはふらつきながらその場に立つ

「はぁ・・はぁ・・」
「フェイトー！」

アルフは倒れそうになった彼女の身体を抱きとめる。
そして、怒りの視線を彼女達に向けた。

「あ・・」

その姿は使い魔ではなく一人の戦士として立っているように感じられた。
そして、フェイトを抱きかかえたままアルフはその場を去っていた。
その姿が見えなくなるまでなのはとユーノはずっとその場に立ちつくしていた。

同日
海鳴市　住宅街　高町家

なのはの机の上ですでにＲＨは自己修復を開始していた。
ユーノはＲＨを覗き込むようにみていた。

―ＲＨはかなりの大出力にも耐えうるデバイスなのにそれを一撃でここまで破損させるとは・・・

―フェイトとなのはの魔力衝突が・・・いや、それでは説明がつかない。やはりアレはジュエルシードが原因。

ユーノは原因を詮索していた。

―二人の魔力衝突ではここまでの破損は無理だ。いや、不可能。それはフェイトも同じだ。
俺も甘かった。危険だとわかっていてあれだけの代物だとは思わなかった。

コンコン

―？

ノックのあとなのはがお夜食をもってやってきた。

「ユーノくん、ＲＨ大丈夫？」

「うん、かなり破損は大きいけどきっと大丈夫。今、自動修復機能をフル稼働させてるから、明日には回復する思う。そういうなのはこそ大丈夫？」

「うん、ＲＨが守ってくれたから」

なのはは落ち込んでいた。自分のせいでＲＨが傷ついてしまったと思い込んでいる。

「だから、ごめんね？ＲＨ・・」

―ＲＨはなのはを守った。やはり、奴自身もマスターと認めているということか・・・

同日　同時刻

遠見市　住宅街

アルフはフェイトを看護していた。特にジュエルシードを掴んだ両手は血が出ていて今はもう止血し消毒した。

普通の人からみても痛いはずなのに当の本人は顔色一つ変えてはいなかった。

「んっ」

包帯を巻いていると強すぎたのかフェイトの声が漏れた。

「ごめんよ、フェイト・・少し我慢してね」

「平気だよ、ありがとうアルフ」

それでも彼女は私にありがとうと言ってくる。

使い魔としては嬉しいし、使い魔としてはこれ以上傷ついてほしくなかった

「明日は母さんに報告にいかいといけないし、早く治さないとね・・・きっと、傷だらけで帰ったら心配させちゃうから」

「心配、するかぁ？あの人が・・・」

あの人は一度もフェイトを心配したことがない。いや、心配しようなどとも思っていないかもしれない。

「母さんは少し不器用なだけだよ」

それでもフェイトは自分の母を信じていた。

「私には・・・ちゃんとわかってる」

「・・・報告だけなら私が行って来れればいいんだけど・・・」

包帯を巻きながらアルフは言った。

あの人は私の話しを声すら聞いてはくれないだろう

「母さん、アルフの言うことあんまり聞いてくれないもんね」

フェイトもそれはわかっていた。

「あ」

フェイトはアルフの頭をなでていた

「アルフはこんなに優しくていい子なのにね」

アルフの優しさをフェイトはわかっていた。
誰よりもわかっている。

「んまぁあ明日は大丈夫さ。こんな短期間でロストロギア、ジュエルシードを４つもゲットしたんだし褒められなくて叱られるようなことはないもんね！」
「うん・・・そうだね」

アルフは自分のいったことを信じたい。
なにより使い魔にとって自分のご主人が傷つくところなんてみたくはないから・・・

４月２７日

高町家
なのはは朝早く道場にいた。ランニングから帰ってきた姉に頼んで稽古を見せて貰っていた。
普段はこんなことしないのになぜか今はこうしていた。
そして、姉の稽古をみながら考えていた。というより気になっていた。

あの子、フェイトちゃんは私よりずっと強くて、冷たい感じもする

のに・・・だけど、綺麗で優しい目をしている。なのに、なんだか
すごく悲しそうだった。
その悲しさにはきっと理由があると思うんだ。

ジュエルシードを集めている理由

だから、あの子と話がしたい

だから、そのために―

―・・・それでいい
―？

同日
遠見市　住宅街　マンション屋上

「お土産はこれでよしっと」

マンションの屋上で小さな箱をもってたっているフェイト。

「甘いお菓子か。あの人、こんなんもんで喜ぶかね？」

アルフはこれを渡しても結果はみえていると思った。
「わからない。こうゆうのは気持ちだから」
「ふ～ん」
「―次元転移、次元座標８７６Ｃ　４４１９　３３１２　Ｅ６９９
３５８３・・・・」

二人の足元に魔法陣が現れた。

「３１２５―開け、誘いの扉　時の庭園　テスタロッサの主の下へ」

二人は光に包まれその場から姿を消した。

それを感じとった者がいた。

「・・・」

なのはは何かを感じ取ったがすぐ前を向き通学路を走っていた。

同日　同時刻
次元空間内

時空管理局
次元空間航行艦船『アースラ』

その艦橋に一人の女性が入室した。

「皆どう?今回の旅は順調?」

彼女のといに誰かが答えた。

「はい、現在は安定に航行中。目標次元へは１６５時間後に到着の予定です」

「前回の小規模次元震以来特にめだった動きはないようですが・・・二組の捜索者が再度衝突する可能性は高いですね」

「は・・・そう」

そう言うと自分の艦長席についた

「失礼します、艦長」

後ろから別の女性がティーカップをもってやってきた。
それを艦長の目の前においた。

「ありがとう、エイミィ」

彼女は時空管理局提督“アースラ”艦長　リンディ・ハラオウン

「そうね、小規模とはいえ次元震が発生は・・すぅ・・・ちょっと厄介だものね」

一杯紅茶を飲み状況を分析している。

「危なくなったら急いで現場に向かって貰わないと・・・ね、クロノ♪」

下にいる小さな子供の名を呼ぶ艦長

「大丈夫、わかってますよ艦長」

彼の名はクロノ・ハラオウン　時空管理局　執務官
そして、リンディの息子でもある。

手に握っているのはカード型のデバイス

「僕はそのためにいるんですから」

時間は遡りなのはが姉の稽古を見学の最中

―それでいいんだ、なのは
―ゆ、ユーノくん!?もしかして聞こえてた!?

本人は自分の言葉が漏れているとは思っていなかった。

ほんとうは盗み聞ぎしてたなんていえない

―なのは、なのははなのはのしたいことをすればいい。ジュエルシードはその後でもいい
―えっでも・・・・
―あの子とお話、したいんでしょ?
―・・・うん!
―だったら、僕もできる限りの協力はする。だからなのは、頑張って
―うん、ありがとうユーノくん・・・

その後、なのはが学校に行った後ユーノは傷ついたＲＨをみていた。

「で、どうだ?」
『はい、確かにあの時小規模ながら次元震が発生したと思われます』
「そうか・・・」

傷つきながらも彼の問いに答えるＲＨ

「次元震が発生したとなると管理局が動くな」
『はい、それは高確率でありえると思われます・・・よいのですか?』

「なにが」

今度は逆にＲＨが彼に質問していた。

『管理局が動いたとなればもうここにはいられませんよ?』

「・・・そうだな、きっと前ならそうしていたな。けど、偶然にしろお前のマスターをみすみす手放すってのは少々勿体ない」

『では、どうするのですか?』

「もう、逃げるのを終わりにする。それに・・・やらなきゃいけないことができちまったからな」

『・・わかりました。あなたがそう言うのであれば私はそれに従います』

「おいおい?お前のマスターはなのはだぞ?」

『はい、確かに彼女はマスターです。しかし、あなたは私の創造主ですから』

「・・・まったく、成功なのか失敗だったのかわからなくなってきた」

彼は愚痴をもらし空を眺める。

―もう、逃げない。逃げるのは・・やめだ

まぁ、逃げていたのは管理局だが

高次空間内　『時の庭園』

そこは次元空間ないでもとても荒い場所である。例えるならとても気象が荒い場所にいると思っていただきたい。
その空間内にある時の庭園。それは名ばかりで見た目はあるでゲーム言うならラスボスがいる城だろうか

時の庭園内部

中はまるで神殿のような造りになっていた。
しかし、雰囲気はどうみてもラストダンジョンだ。

ペチッ！ペチッ！ペチッ！

「あッ！・・・あっ！・・ん！」
少女の悲鳴が聞こえる。
そこの少し広い場所で女の子がつるされていた。
両手を魔法で吊るされ、体中に鞭で叩きつけられた可愛そうな少女。

「たったの４つ、これはあまりに酷いわ」
「・・・はい、・・・ごめんなさい母さん」

吊るされ、鞭で叩かれていたのはフェイトだった。

「いいわ、フェイト。あなたは私の娘。大魔導師プレシア・テスタロッサの一人娘」

彼女の下へ近づきながらやってくるプレシア。
彼女の顔を上げさらに語る。

「だから、不可能なことなどあってはならない。どんなこと、そうどんなことでも成し遂げなければならない」
「はい―」

フェイトはただ答えることしかできなかった。

「こんなに待たせておいて、上がってきた成果がこれだけとは…母さんは笑顔であなたを迎えられないわ。わかるわね、フェイト」
「はい、わかります」
「だからよ、だから覚えてて欲しいの・・・もう二度と母さんを失望させないように」

プレシアが持っていた杖が鞭にかわる。

「はああっ！ん―」

その光景を目の当たりにし目を瞑る。
そして、容赦なく鞭をふり彼女に娘に叩きつける。

「ああ、あああっ、あああ！」

その叫び声は外にいたアルフにも届いてた。

耳をふさぎできるだけ声を聞かないようにしていた。けど、主の声は聞こえてしまう。

「なんだよ、いったいなんなんだよ・・あんまりじゃないか、あの女」

『あああああああああっ！』

あの女のフェイトの母親の異常さとかフェイトに対する酷い仕打ちは今に始まったことじゃないけど・・・今回のはあんまりだ。いったいなんなんだ！ロストロギアは・・ジュエルシードはそんなに大切なもんなのか！？

「ロストロギアは母さんの夢を叶える必要な物なの」

「はい、母さん―」

「特にアレは・・ジュエルシードの純度は他のより遥かにすぐれている。あなたは優しい子だから躊躇ってしまうこともあるかもしれないけど・・・邪魔するものがあるなら潰しなさい、どんなことをしてでも。あなたにはその力があるのだから」

鞭は杖に戻りフェイトは床に倒れた。

「行って来てくれるわね・・・私の娘、可愛いフェイト・・・」

フェイトは這いずるように身体を持ち上げる。

「はい、行ってきます・・母さん」

それでもフェイトはそういうことしかなできない。
母さんのために。

「・・・次は必ず私は喜ばせてちょうだい」
「―はい」

そして、彼女は部屋へと戻っていった。
それが見えなくなるまでフェイトは母の後姿をみていた。

「・・・・」

台においてあるお土産は持っていかずそのまま置いてある。

「・・・っ・・・」

傷ついた身体に耐えながら足を引きずりながら歩くフェイト。
それをみたアルフが慌てて近づいてフェイトを支える。

アルフは誤っていた。私はどうして「謝るの?」といった。
それでもアルフは私のことを心配して色々と言ってくれていた。
けど、私はそれが母さんが私のためにしてくれることだと思っていた。
それが娘である私にしかできないことなら・・・私はなんだってやる
私たちは親子なんだ。
だから、なんとしても母さんを喜ばせてあげたい。

そのためにジュエルシードを集めて、母さんに笑顔をとり戻すんだ。
あの幸せだった日々を

時の庭園
プレシアの自室。

フェイトの調教のあと彼女は自室にこもっていた。

なんであの子はあんなに出来が悪いのかしら。ジュエルシードはまだたったの４つ。
これではまだたりない。そうまだ、足りない。私の、私たちの夢を叶えるには・・・。

「・・・・」

プレシアは飾ってある写真をみた。
そこはには彼女と“フェイト”とある男性の写真だった。

・・・・・・

「どうして、どうして失敗したの！計画は完璧だったなのに、なのになんであの子は！」

ある部屋で女性が叫んでいた。叫びながら机に上にある書類をなぎ

飛ばしていた。その書類には難しい専門用語ばかりが記されていた。

「・・・プレシア」

「んんっ！」

男性が彼に声をかけると彼が差し伸べた手を振り払った。

「あなたも協力してくれたのになんで失敗したの！？」

男性は今の彼女を救ってあげられる言葉が見つからなかった。

ただ、こういうことしかできなかった。

「プレシア・・・同じものなんてこの世には存在しない。例え、どんなに形が同じでも、同じものなんてないんだ。それは人の魂も同じ―！」

彼女は彼の襟を掴んでいた。

「そんなのどうだっていい！要はなんであんな子が“生まれてしまった”かよ！」

「現にあの子はあの子の・・・」

「そうよ。けどあの子じゃない、私の愛した娘じゃないのよ！」

彼女は泣きだしそうだった。

彼にもその気持ちは十分すぎるほどわかっていた。その思いを、願いを叶えてやりたいしかし・・・

「そうだわ・・あなたの力があればあの子だって！」

「断る」

「どうして！？あなただってあの子に会いたいでしょ！？」

「断る！」

それでも彼は彼女の思いに応えない。

「なんでよ・・・」

プレシアは彼から手を離し静かに聞いた。

「いいか？プレシア、死んだ人間は生き返らないんだ！どんなに顔を真似ても、髪の色を同じにしてもあの子は・・・死んだ人間は戻ってこないんだ・・・それぐらいお前だって『わからないわ』！」

「わからないわ・・・ええ、わからないわ」

―駄目だ、もう壊れかけている

「そうよ！」

「・・？」

彼女はなにか思いついたように言い出した。

「そうだわ、あなたが・・あなたが力を貸してくれればあの子は帰ってくる、私に元気をくれる・・」

「プレシアっ・・」

さっきと同じことを言い出した。

もう、彼女は自我を保てていない。

「ねぇ、お願い」

「駄目だ」

「お願い」

「駄目だ」
「お願い」
「・・・」
「・・・お願いよっ！」

それからあの男は去っていた。
彼女もまた新たなる可能性を探し始めた。

その部屋の散らばった書類はそのままだった。書類には「プロジェクトF」と記されていた。
しかし、それはまた上か落ちてきた一枚の紙に覆いかぶされてしまった。

「―今思えばあなたに頼らなくてもよかったわ。現にこうしてジュエルシードがある。これさえあれば私たちの夢は叶う・・・だからもう少しだから待ってて・・・“アリシア”」

4月27日
住宅街

今日もいつも通り学校にいき小学生としての生活を過ごしてきた。
帰りのバスの中なのはは一人で帰宅していた。

すずかちゃんとはいつも通り接してくれたけどアリサちゃんはまだ怒ってる。
けど、前よりは怒ってなさそうにみえた。私が悪いのはわかってる。

けど、もうすこし待ってほしい。そしたら、きっと前みたいにいられると思うから。

なのははいつものバス停で降りた。

「あ」

電柱の陰にユーノくんがＲＨをもってきてくれた。

「ＲＨ、治ったんだね。良かった」

『Ｃｏｎｄｉｔｉｏｎ　Ａｌｌ　Ｇｒｅｅｎ』

「また、一緒に頑張ってくれる？」

その問いにＲＨは答えた。

『Ａｌｌ　Ｒｉｇｈｔ　Ｍｙ　Ｍａｓｔｅｒ』

彼女の思いにＲＨも応えた。

それを聞いてなのははＲＨを胸にあて静かにお礼を言った。

「―ありがとう」

海鳴市　海鳴臨海公園

ここは多くの人が利用する公園。

海がみえるという公園は中々ないだろう。
そして、そこの雑木林のなかでジュエルシードは発現した。

媒介にしたのは木だった。
それは通常の何倍にも大きくなった。

それに気がついたなのはたちはすぐ現場に急行していた。

「封じ結界展開！」

辺りは結界につつまれ外部とここを遮断した。

木を媒介にしたジュエルシードは前回に遭遇した犬に近い。
近いと言っても意志を持っているという意味でだ。本来、木にも意志と言うものがある。それが我々が思っている意志とはまったく同じなのかはわからないが意志がなければこんな姿にはならない。

上空に無数のフォトンランサーが降り注ぐがバリアによって防がれた。

「今までより強いね。それに・・・あの子もいる」

自分の視界に写る彼女の姿。

「フェイトちゃ―『グオおおおおおおおお！』

木の根っこらしきものがコンクリートから這い出て攻撃しようとしていた。

「ユーノくん逃げて！」

―言われなくてもそうしている

ユーノは彼女が言う前にすでに退避していた。
なのはは上空に避けるが・・

「ＲＨもっと、もっと高く飛んで！」
『Ａｌｌ　Ｒｉｇｈｔ』

マスターの命令い従いさらに上昇する。

一方地上のフェイトも戦闘態勢に入った。

「アークセイバー、いくよバルディッシュ」
『アークセイバー』

バルディッシュが鎌へと移行する。
「ふん！」

そのまま横に振りおろし斬撃としてそのままブーメランのようにとんでいく。
そのまま根を斬り本体に向かうがバリアによって塞がれてしまう。
それでも効果はあった。

「いくよ、ＲＨ！」

上空のなのはＲＨを砲撃形態に移行させていた。

「撃ち抜いて！ディバイン―」
『バスター』

ディバインバスター。高密度の魔力を打ち出す砲撃魔法。
減衰することなくそのまま標的を撃ちぬく。

しかし、バリアによって防がれるが攻撃は止まず地面に叩きつけらていく。

「貫け豪雷！」
『サンダースマッシャー』

雷の砲撃がジェルシードを狙う。

そして、とうとうバリアで防げなくなりそのまま二つの砲撃によって打ちのめされる。

『ジュエルシードシリアルＸＩＩ、封印』

お互いに封印に封印するがどちらが封印したのかはわからない。
しかし、二人にとって本番はこれからだった。

互いに見つめ合う二人
先に口を開いたのはフェイトだった。

「ジュエルシードには衝撃をあたえないほうがいいみたいだ」
「うん、この前にみたいになったら私のＲＨも、フェイトちゃんのバルディッシュもかわいそうだもんね」
「うん、だけど譲れないから」

自分の相棒を前回みたいに傷つけたくない。

その思いは二人とも同じだった。だが、それはそれだ。互いにジュエルシードは譲れない。

「―私はフェイトちゃんとお話したいだけなんだけど」

けど、きっと聞いてはくれない。だから―

「私が勝ったら、ただの甘ったれた子供じゃないってわかってもらえたらお話聞いてくれる？」

フェイトは無言でうなずいた。

それがなのはの悩んだ末に導きだした答えだった。

そして、二人は距離を詰めるように前に出て杖を振り下ろそうとする。

―だが、その時光が現れた。それと共に魔法陣も現れ二人の攻撃を受け止めた者がいた。

フェイトは杖で受け止め、なのはは素手で止めた。

「ストップだ！ここでの戦闘は危険すぎる」

「あっ・・？」

なのはは何が起こったかはわからない。それはフェイトも同じだった。

唯一わかってることは二人の戦いを止めた者が現れたということだ。

「時空管理局執務官クロノ・ハラオウンだ。詳しい事情を聞かせて貰おうか？」

自分の名をなのりその場を静止させた。

ジュエルシードはただ、宙に浮きその出来事をみていた。
そして彼も―

ユーノはその出来事を木の上から眺めていた。

「とうとう来たか・・・・ハラオウ懐かしいな。厄介事にならなくて済みそうだ」

彼の名を聞いてある程度のことを理解、確認した彼は木から降り彼女達の下へ向かった。

第7話　そして運命という名の歯車は動き出す（後書き）

サブタイトルが原作のものとかわりました。多分これからも何回かあると思われます。やっと次回主人公が出せる。できれば感想などをいただけるとありがたいです。自分では良い悪いがなかなかわからないものなので

第8話　正体を明かす彼と歩みだす少女（前書き）

今回は戦闘シーンがなくお話だけになります。

第8話　正体を明かす彼と歩みだす少女

時空管理局
次元空間航行艦船『アースラ』　艦橋

アースラでは先に行われ始めた二人の魔導師の戦闘観ていた。
調査、分析をしていた部下から報告が入る。

「ロストロギアのクラスはAクラス。動作は不安定ですが無差別攻撃の特性をもっています」
「次元干渉型の危険物品、回収急がないといけないわね。クロノ・ハラオウン執務官出られる？」

艦長であるリンディは的確に指示を執務官であり自分の息子に問う。

「転移座標の特定はできてます。命令があればいつでも」
「それではクロノ、現地での戦闘行動の停止とロストロギアの回収と両名からの事情聴取を！」
「了解です、艦長！」

彼は転移装置がある艦長席の後ろに立った。

「気を付けてね～」

先ほどの艦長の顔とは違い母親としての顔でクロノを見送る。
それにしてもハンカチまで取り出してやることが大げさすぎる

「いってきます・・・」

意識を集中して目標地点、転移場所に向けて跳んだ。

そして話は戻り―

「まずは二人とも武器を引くんだ」

二人はクロノと呼ばれる魔導師に従い地上に降りる。

「このまま戦闘行為を続けるなら―！」

地上に降りた直後攻撃を受けた。
クロノはすぐさまそれに気付きシールドを張った。

「フェイト撤退するよ離れて」

攻撃したのはフェイトの使い魔アルフだった。彼女は主を援護したのだ。“
敵”である二人から。

「・・・っ・・」

彼女は一瞬ためらった。だが、すぐその場から退避する。
それと同時にアルフの攻撃がなのは、クロノに追いかかる。

ドッカン―！

二人は後方に避けていた。攻撃の衝撃で爆風がそれが二人に対して

目くらましにもなった。
その間フェイトは上空にあるジュエルシードを確保しようとしたが砂塵のなか精密な攻撃がフェイトを襲う
「あっ―！」
攻撃を食らったのかフェイトは地上に落下する。
「フェイトー！」
「フェイトちゃん！」
アルフとなのはが彼女の名を叫ぶ。
アルフはフェイトより先に地上に着き彼女のクッションになった。
爆風が晴れるとクロノは二人に向けて攻撃を仕掛けようとした。
「止めてっ！撃たないで！」
「なっ！？」
その間になのはが盾として入った。その隙をアルフは見逃さなかった。
「逃げるよフェイト」
「え・・・はぁはぁはぁ」
「しかっり捕まって！」
彼女の息は荒かった。それでもアルフはこの場から逃げるために全速力でその場から離脱した。

「あっ」

その姿をみてなのはは何を思ったのだろうか？

するといきなり女の人が出てきた。

『クロノお疲れさま』

「すみません片方は逃がしてしまいました」

『ううんまぁ大丈夫よ。でね、ちょっとお話が聞きたいからその子たちをアースラに案内してくれるかしら？』

「了解です。すぐに戻ります」

彼が返事をするとウィンドは消えた。ウィンドというより一種の転送陣だったのかもしれない。

会話を終えた彼はなのは達を見ていた。

「あ―」

『第八話　正体を明かす彼と歩みだす少女』

場所は移り『アースラ』艦内

三人はアースラに転送した。

なのはは何が起きているかユーノに聞いていた。

―ユーノくん、ユーノくんここいったい

なのはの声は少し怯えていた

―時空管理局の次元航行船の中、簡単にいえば色んな世界に移動できる艦(ふね)って解釈すればいい

―簡単、じゃないかも

―つまりだ、なのはの世界の他にいくつもの世界があってその狭間を移動するためのものがこういった艦で・・・そういった世界を管理しているのが時空管理局なんだ

―そう、なんだ・・・それよりユーノくん喋り方―

すると目の前の扉が開きその向こうに出ると前にいたクロノが二人の方に振り向いた。

「あーいつもでもその格好というもの窮屈だろう？バリアジャケットとデバイスは解除して平気だよ」

「あ、そっか。そうですね」

彼に従い変身をとく。

「君も元の姿に戻っていいんじゃないか？」

「へ？」

その言葉になのはは驚いた。その相手がフェレットであるユーノくんなのだから。

しかし、それはなのはの思いもよらない返答だった。

「―“君”という言葉は上官に対して失礼なのではないか、“クロノ・ハラオウン執務官”？」

『えっ？』

その言葉になのはだけではなくクロノも驚いてた。

「―まぁ想定していたこととは言え仕方ない」

すると彼の身体は光を発しそこから現れたのは“人”だった。

例えるならアルフのような物だろうか？動物から人間になるような感じだ。

身長はなのは達より少しデカイ。１６０ｃｍかそれ以上でだいたい小学高学年か中学一年ぐらいだろうか？

髪は男なのに珍しくロングで容姿は子供のようで大人。

服装彼に合ったロングコートを着用で色は黒その下はｙシャツのようなもスーツのようなものでやっぱり黒。

「―えっ、えええっ・・・・」

「さて、ハラオウン執務官。この艦の艦長に逢わせて『えっえええええええええ！？』あーそう言えばなのはにこの姿を見せたのは初めて？だったな」

彼は冷静に彼女が叫んだ理由を察した。

それでもなのはは止まらない

「えーだって、ユーノくんって×２嘘！えーーーーーーー！？」

指を指したり認めたくないのか顔を横に振っていた。

「あの～失礼ですがお名前は？」

クロノは恐る恐る聞いた。クロノとて馬鹿ではない。先ほどの発言が嘘ではないことはこの人のオーラで分かった。

「管理局の総帥と言えばわかるか？」

「・・・・・あ、あああっあああああああ！！！！！」

彼もなのはと同様叫び出した。

しかし、なのはと違って彼は頭を下げ謝りだした。

「も、申し訳ありませんでした！」

「いいさ、まぁとにかくここの艦長「えええええええええ！？」なのはぁ、少し落ち着いてくれ」

その後一旦落ち着かせたなのはを連れクロノに案内された応接間らしき場所に案内された。

そこはどうも、不可思議な場所でどっかの爺ちゃんが大事に育ててそうな松とか茶道セットとかなぜか和風。

しかし、彼の立ち位置は上からみて

ユーノ

茶菓子

クロノ、リンディ、なのは

である

そして、何故か全員正座。

「すぅ・・・はぁ～やっぱお茶はいい。心が落ち着く」
「で・・・その総帥？今までどちらに？」
「リンディ、総帥は止めろと前にいったろ？今まで通りレイさんか先生でいい」
「とは言いましても私にも立場という物がありまして・・・」

あの母さんがもとい艦長が敬語で喋っている。
クロノは今現在の状況に驚いていた。
しかし、一番驚いていたのはなのはで・・・

「え、あう、あ・・・」

放心状態である。
最初からそれに気付いた“彼”は彼女に声をかけた。

「あーなのは？とりあえず“お前”が聞きたいこと言ってみろ」
「はっ、えーとそのユーノくんってユーノくんじゃないの？」
「簡単にいえば“ユーノ”という名は偽名だ」
「ぎめい？」

なのはまだ立ち直れていない様子

「俺の本当の名は“レイル・アンヴァルト・Y・神乃”。簡単に言えばこいつらの上司であり管理局の総帥になる」
「えっ、えっ！？」
「あーリンディ、説明してやってくれ」
「・・・わかりました」

―自分で引き起こして置きながらなんで私に振るんですか!?まぁいつものことですけど・・・・

リンディは昔のことを思い出しながらぼそりとつぶやいた。

「え～と、高町なのはさん?」

「あっはい!」

「とりあえず、自己紹介しましょう、私はこのアースラの艦長のリンディ・ハラオウン。この子は執務官であり私の息子のクロノ・ハラオウンよしくね♪」

「あ、はいよろしくお願いします」

とりあえず互いに自己紹介を済ませる。

「えー彼、総帥『リンディ?』・・・レイさんは私たちが所属する時空管理局の設立者でもあり、その総帥でもあるの」

「えーと、総帥って一番偉いってことですかぁ?」

「ええ、そういうことになるわね。レイさんは世界の安定のために管理局を設立し、現在までに至るの。けど、ある日を境にっというかよく仕事を・・・簡単にいうとサボってどっかに行ってしまうのが日常茶飯事で・・・」

リンディは途中自分の言っていることがその上司の悪いことばかりだと思った。

「つまり、ユーノ、じゃない、レイくんは仕事が嫌いだったんですか?」

その問いに彼本人が答える。本名がわかったということでユーノと呼ばなくなった。

「サボっていたわけじゃない。各世界を回って自分なりに“仕事”をしてきたつもりだ」
「え、ええ本人のいうとり各世界に犯罪行為は激減したわ。それに伴って管理局の本来の仕事ロストロギアの確保、封印もしてくれていたの。けど、ある境にいきなり行方が掴めなくなって総帥不在のまま現在に至る。というわけで大まかなレイさんの生涯というか歴史を語ってみましたけど・・・」

視線をその本人に向ける。
当の本人は茶を飲んでいた。

「ああ、そういうことになる」
「でも、なんでレイくんは家のご近所にいたの？」
「それは最初に逢った時に話した通りジェルシードを集めていたから」
「じゃあ、なんでフェレットで偽名使っていたの？」
「フェレットだったのはとある事情、それでもやっとこの姿までに戻るようになったんだ。偽名を使っていたのは俺の素性が漏れると色々とやっかいだから」
「厄介って？」

なのは次々に彼に質問していく。それに彼も答えて行く。

「昔、色々やったせいで色んな奴から狙われてんの。国とか、魔術国家、魔術宗教、宗教団体、魔術師、魔導師、殺し屋、傭兵、国家機関、秘密組織、悪の組織・・ｅｔｃとかたくさん」
「凄いね～レイくん」
「だろ？」

―なのはさん、突っ込むところが違うわ！

「じゃあ、神乃って日本語だよね？ということはレイくんって私と同じ世界の人間ってことなのかな？」

「そういうことになる。けど、ずっと昔の人間だが・・・」

『えっ！』

その言葉に反応したのはなのはとクロノだった。

リンディが驚かないのはその事実を本人から聞いたからだ。

「なのはがどれくらい勉強してるかは知らないが戦国時代ってわかるか？」

「うん・・・アリサちゃんとすずかちゃんと戦国ＢＡＳＡＲＡやったことあるから少しは・・・」

『・・・・・』

レイだけではなく、他の二人もちょっとそれに引いた。

「その時代の中期か後期あたりの人間だ」

「じゃあ、なんでそんなに長生きしてるの？」

「そうだな。なのはが理解するように言うには・・・なのはのいる世界と別の世界は決して同じ時間とは限らないんだ」

「ん～つまりなのはいる世界が朝だったら他の世界は夜とか？」

「悪くはないがそれはなのはの世界でもあるだろう？つまりだ、なのはの世界でいう一日が他の世界では一年かもしれないってこと」

「エーッ！？そういうことって・・」

なのはが混乱しているクロノが助言をする

「そう、そ『・・・』―レイさんが言うことは確かなことだ。実際

に君たちより遥かに進んだ技術をもった世界も存在する。その逆で君の世界のより遅れている世界もある。しかし、“基本的には同じ時間軸を辿っている”」

「へ、へーそういうことあるんだ。ていうか私今凄いことを聞いているのでは!?」

「ま、まぁ何も知らない人が聞いたらそう思うわね」

「かなり、重い話だしな」

「えーと、そのあっ！RHは私が持っていて“いいんですか”？」

いきなり敬語を使ったなのはにレイは不愉快を感じた。

「なのは、できれば敬語は止めてくれ。いつも通りで構わないから」

「でも・・・」

「いいんだ。俺がこう言ってるんだから、なっ？」

「―うんじゃあ、レイくんRHは私が持っていいの？」

「ああ、RHはお前を主として認めているからな。それはもう、お前の物だ」

「・・・じゃあ、改めてよろしくねRH」

『Ｙｅｓ　Ｍｙ　Ｍａｓｔｅｒ』

―これで、RHの問題は解決だな

「さて、そろそろ本題に入ろうか」

彼は湯のみを置き足を崩して胡坐の状態で座っている。

「状況から推察するとジュエルシードは『俺が見つけた』えっ！？」

「どっかの世界で偶然見つけてな、“たまたま”管理局の艦が来てたから“密航”してそのまま管理局にいってジュエルシードを置いてこうようと思ったら何者かに襲撃にあった。まぁその犯人はフェ

イトかその後ろにいるやつだな」

『・・・・・・・』

三人ともどう答えていいかわからなかった。
この事件の半分はこの人のせいではないだろうか？と思った者もいなかったわけではない。

「あのーところで、ロストロギアってなんですか？」
「あー詳しく言ってなかったな。ロストロギアっていうのは異質世界の遺産って言ってもわからないか・・・ちら」

そもそも何も知らない以前に子供がそんな難しい話を理解しろというのが無茶だ。
そして、視線をリンディに向ける。

―また、私ですか・・・

「えぇとね、次元空間にはいくつもの世界があってその中にごくまれに進み過ぎた世界があるの」
「進み過ぎた世界？」

彼女の言葉にクロノも助言する

「つまり、技術や文化が発達しすぎてそのまま自己崩壊してしまうことさ」
「どうして？逆にいいことなんじゃ・・・」

なのはの言うことも一理あるだろう。技術や文化が発達すればそれだけ自分たちの暮らしが豊かになるのだから。

「―本来順を追って進むべきはずの物がそれを早送りみたいに進み過ぎてその危険性に気付かずそのまま崩壊、滅亡、破滅しちまうのさ」

「・・・・？」

なのはにはその言葉が理解できなかった。

「つまり、そういった世界で失われた世界の危険な技術の遺産」

「それらを総称してロストロギアという。使用法はわからないが世界はおろか全次元を崩壊させかねない程危険な物まである」

「しかるべき手続きをもって、しかるべき場所へ保管させないといけない代物。ジュエルシードは次元干渉型のエネルギー結晶体いくつかを集めて発動させれば次元震を開き最悪の場合次元断層まで引き起こしてしまう可能性もある」

黙って聞いていたなのはだが半分は理解できても半分は理解できていない状況だった。

「君とあの黒衣の少女が衝突した時に起きた爆発と振動、アレが次元震だ」

「あっ」

あの時のことを思い出す。あの光と爆発、振動というか揺れは感じなかったけど確かに危険な感じはした。

「一個であの威力なんだ。複数個集まったらその威力は計り知れない」

「―旧暦４６２年。次元断層が起こり隣接する平行世界がいくつも崩壊していった。歴史に残る悲劇ってやつだ」

地は裂け、海は街を飲み込み、火山が噴火しまさに世界の終り

「そんなこと繰り返してはいけないわ」

ポッ

お茶に砂糖をいれたリンディ。
その光景になのはは驚いた。

「そして、それを防ぐための抑止力が管理局」
「だから、レイくんは管理局を創ったの？」
「・・・・まぁ、そういうことにしておく」

彼の顔は横に向いていた。彼女達はあえて追及しなかった。

「それにロストロギアは見た目では判断できない物も多いんだ」
「どういうこと？」
「ジュエルシードは一見宝石か綺麗な石にしかみれないだろう？それと同じさ。まぁ大概は調査すればわかるんだけどな。けど、たまにそれを骨董品か昔の美術品だと勘違いしてこっちが事情を話しても譲らない場合もある」
「そういう時はどうするんですか？」

とりあえずなのははリンディに聞いた。

「そうね、交渉を続けるかそれなりの報酬を提供するか、かしら？」
「まぁそういうケースも無くはないですね」
「へー」

そう答えたのは目の前に座っている総帥殿だった。

「じゃあ、レイくんはどうやってたの？」

「ん？そりゃあ犯行予告だして盗みだしたりとか色々・・・」

―いいのかしら、総帥がそんなことして

―本当にこの人僕らのトップなのか？

「ルパンみたいな感じかな？」

「まぁそんな感じ」

―なのはさん、その乗りについていくあなた凄いわ

リンディは改めてなのはの凄さを知った瞬間でもあった。

「では、この件ジュエルシードについては管理局が全権を持ちます。それでいいですね？“総帥”」

「ああ、構わない。ただ、なのはにはこのまま協力してもらう」

「えっ！？」

「彼女は民間人ですよ！？」

クロノが怒鳴りを上げた

「時空干渉にかかわるレベルなんですよ！？民間人がこれ以上かかわるのは」

「・・・だが、いやそうだな。なのは、これからは先は君自身で判断するんだ。時間はまだある」

彼は途中言いなおした。クロノの言葉を聞いたからだろうか？

「・・・わかりました」

彼女は再び迷った。けど、心のどかではもうすでに決まっていたのかもしれない。

「まだ、時間はあるな。リンディ少し話がしたい、場所を移してくれないか？」

「わかりました。では私の部屋でお伺いしましょう」

二人は席をたって扉に向かう。

「なのはは少し待っててくれ。すぐ戻る」

「うん・・・」

―無理もない、か。できれば俺もあんなこと言うべきではなかったとも思っているがそれでも普通の女の子に戻って平和に暮らして欲しいと願っている自分もいるのは確かか・・

その後場所を移し艦長室

「で、お話というのは？」

「―そうだな・・」

「できれば私も一つ質問してもよろしいですか？」

「なんだ？」

艦長席に座るリンディとソファーに座る彼。

本来ならば対等に向かい合ってなのだろうがそれが彼らがそれなりの関係だと示している。

「なぜ、そんなお体に？」
「とある呪いをかけられてな。これでも戻ったほうだ。もう、その呪いも解析済みであとは治療プログラムを作製すればいいだけなんだがな今手間取っている。確かそういうのが得意な局員がいなかったか？」
「ああ、エイミィですか。それは後で私から頼んでおきます。で、そのデータは？」
「後で渡そう。ところで、俺が不在の間の管理局は最高評議会まだあるのか？」
「ええ、そうですが。でも何故です？」

それには理由があった。彼と評議員の三人を含めた四人が管理局を設立した。ばらばらになった世界を統一するという目的もありまた、危険な遺産ロストロギアの回収封印するというのも前提だった。しかし、彼らはだんだんその地位に目がくらみ挙句の果てに今ではなんとも言えないものになっているからだ

―あいつにあの研究をさせているのはどうみてもあいつらだ。まぁあいつらも俺が協力していたのは知っていただろうあいつは俺の中ではそれなりに面白い奴だった。だが、研究員としては物凄い力を発揮していた。その力が認められあいつらに命令され研究をしているんだろうが・・・結局あいつもあいつらに生み出された物でしかないんだろうな

「いつか話すさ」
「―わかりました」

いつもそうだとリンディは思った。肝心なことは教えてはくれない。しかし、ちゃんと最後には教えてくれていた。

「それで、あの子一なのはさんはどうするんですか？」
「最終的にはあいつが決めることだ。だが・・・あいつは途中で投げ出すような奴じゃないからな。結果は見えているさ。それに人手不足の管理局にとってはあういう逸材は捨てておかないからな」
「ふふ、そうですね」
「それにあの子を止めてくれるのはきっとなのはだけだからな」
「・・・あえて聞きませんがそれはいい意味で、ですか？」

その質問は提督してまた一人の女として聞いた。

「いい意味で、だ」
「・・・もう何も言いません」
「ありがとな。さて、もう時間だな。・・・これをその子に渡してくれ。一応通常の物とはさほど変わらないはずだ」
「わかりました」

そのデータを受け取り部屋をでようとする彼。

「まだ、“総帥”には戻らないんですか？」
「・・・当分は戻らない」

そう言い残しなのはの下へ向かった。

そして、先ほどの公園に戻ってきた二人。太陽が沈みかけていて辺りはもう夕方。
彼はまだ、人の姿をしている。

「さてと」

彼はまたフェレットの姿に戻り彼女の肩に乗った。

「いこうか」
「う、うん」

それから二人は家に向かった歩き始めた。

「怒ってるか？」
「えっ」
「正体を隠してたこと」
「正直に言えば怒ってる、かも。けど、レイくんはそうしなかきゃいけない事情があったんでしょ？」
「ああ」
「確かに怒ってるよ？けど、ちゃんと話してくれたからそれで許してあげる」
「ありがとう。なのは」

彼は心からそう言った。
本当に感謝している。自分のことに関してもジュエルシードに関しても、そしてフェイトのことも

「ところで、レイくん一番偉い人なのに私と一緒にいていいの？」
「ああ、別に俺がいなくても機能はしてるからね。それに今はなのはの傍にいたんだ」
「えっ・・・そのありがとう」

なのははは照れていた。
逆にレイは「なんで？」という顔をしている。

アースラ管制室

そこでアースラの管制官であるエイミィが先ほどのなのはたちの戦闘を解析していた。
その結果には驚かされることばかりだ。

「凄いよ二人ともＡＡＡクラスの魔導師だよ。魔力だけならクロノくんを上回ってるね」
「魔法は魔力値だけで決まるものじゃないんだ」
「はいはいわかってますって」
「むう」

こうみても二人は案外中が良い。
互いにこう言い合えるのはそれなり互いを許しているからだ。

「それにしてもエイミィこれは？」
「あっこれ？艦長が総帥に頼まれた医療プログラムを完成させてほしいって頼まれて」
「ふーんってすごい量の情報量だ、こんなものが医療プログラムなのか？」
「なんでも、ワクチンとかなんとか。けど、なんで私に頼んだんだろう？」
「それは、あの人がエイミィの実力を知った上で認めたからだよ」
「えっでも私まだ一回も会ってないよ？」

そうは言っているが彼なりにアースラに来た時ここの乗り組員のことはデータで確認していたのだ。
彼はエイミィの実力、素質を見抜いた。だから、プラグラムを彼女

に託した。

「あの人にはそういうこと通じないと思う」

キュイン

後ろで扉が開く音が聞こえ後ろを振り向く。

そこには私服姿の艦長がいた。

「ああ、二人のデータね。・・・それにしても凄い子たちね」

「はい、これならジュエルシードが反応したのも頷けます」

「そうね、力を誤った方向に使えば自分も破滅してしまうもの。それにしても、なのはさんとレイさんっといってもあの人の目的はわかってけどあっちの黒い服の子は何故なのかしらね」

レイたちは危険であるジュエルシードを封印している。

対してフェイトはなんの目的でジュエルシードを集めているかがわからなかった。

「何か強い目的があったような気がします・・」

「目的、ね。まだ、こんなに小さい子供なのに本当なら母親に甘えていてもおかしくない年頃でしょうに・・・」

フェイト・アルフｓｉｄｅ

先ほどから帰還しフェイトの治療を終えたアルフ。けど、当の彼女は傷ついた身体で動こうとする。それを当然のごとく止めさせるアルフ。

「駄目だよ、フェイト。時空管理局まで出てきたんじゃあもうどうにもならないよ・・・・逃げようよ、二人でどこかにさぁ」

アルフは辛かった。管理局まで出てこられてはもうどうしようもない。下手に動けば察知されてしまう。

けど、そんなことよりアルフはなによりフェイトがこれ以上傷つくのをみたくはなかった。だから、つい言ってしまったのだ「逃げよう」と。

「・・それは駄目だよ」

それでも彼女は素直に受け入れてはくれなかった。

「でも、雑魚クラスならともかく一流の魔導師だ！本気で捜査されたらここだって何時までばれずにいられるか・・・あの鬼婆。あんたの母さんだって何言ってるかわからないしフェイトに酷いことばっかするし！」

「母さんのこと悪く言わないで・・・」

まただ。どうして自分をこんなにまで傷つける母親を信じるのか。アルフには理解できなかった。

「言うよ！だって、私フェイトのこと心配だ！フェイトが苦しんでると私の胸も千切れそうで痛いんだ。フェイトが泣いていると私の目や鼻がジーンとしてどうしよもなくなるんだ。フェイトが泣くのも悲しむのも私嫌なんだよ！」

彼女の言葉がフェイトを揺らがせる。彼女にも自分の使い魔の、アルフの言いたいことはわかってる。だから、こうまでして私のことを心配してくれている。

それでもフェイトは・・・

「私とアルフは少し精神リンクしてるんだよね。アルフが悲しいなら私もう泣かないよ」

アルフは泣いている。悲しくて自分にはそうして上げられる力がなくて

「私はフェイトに笑って幸せになって欲しいだけなんだよぉ・・・なんで、どうしてわかってくれないんだぁ・・・」

「ありがとうアルフ。でも、私母さんの願い叶えてあげたいんだ。母さんのためだけじゃない。きっと自分のために。だから、後少し、最後まであとすこしだから私と一緒に頑張ってくれる?」

彼女の頭に手を置き優しくなでる

「約束して、あの人のいいなりじゃなくてフェイトはフェイトのために自分のためだけに頑張るって。そしたら、私はフェイトを必ず守るから」

「―うん」

それは主と使い魔の約束けして解けない約束だった。

そんな二人を月だけが二人を見ていた。

フェイト・アルフｓｉｄｅＯｕｔ

なのは・レイｓｉｄｅ

高町家

レイはＲＨを通してリンディたちと通信していた。

「だから、なのはにも協力してもらう。これは彼女の意志だ。それにあの子に関してはなのはに任せれば問題はない」

「しかし、そ―レイさん」

クロノはまだ上司である総帥を名前で言うのは抵抗があった。

「わかってやれクロノ。あの子に関してはなのはが適任だ。それに指揮はそちらでとってくれて構わない」

「わかりました」

「かあさ、艦長！」

「こちらとしても“切り札”は温存しておきたいもの」

しばらくフェレットである彼はジーッとリンディを見つめていた。

「“切り札”ねぇ・・・家のなのはのは“それなり”にやるからな。こちらとしても“切り札”がでないことを祈るよ」

「あらーそれじゃあお言葉に甘えさせてもうおうかしらぁ」

「・・・・・・・」

「・・・・・・・」

『ふふふっ（ははは っ）』

―こ、恐いよ、クロノくん

―耐えろエイミィ

しばらくの間二人の恐ろしい言葉が二人を硬直させた。

―なのはこっちは終わった。後はそっちの問題を解決すればＯＫだ
―うん

そっちの問題
それはこれから私が管理局に協力するにあたって必要なことだった。
きっと今のままじゃいけないから。
そして、何よりこれ以上家族に心配させちゃいけないって思うから。
なのはにはまず時間が足りなかった。いつも通りに学校へいってからでは時間が足りない。
だから、その件も含めてまずお母さんに相談しないといけないと思った。

「で、大事なお話ってなぁに？」

お母さんと一通りの家事が終わり本題に入る。
お父さんたちは稽古のため外に出ていた。言い方は悪いが好都合とも言えた。

「うん―」

お母さんに話したのはレイくんと出会ってからのこと。魔法やレイくんのことはさすがに言えなかった。だから、そのためにしばらく家を空けること。

「もしかしたら危ないことになるかもしれない。けど、大切なお友達と一緒に始めたことだから最後までやり通したいの」
「うん―」

お母さんは何も言わず聞いてくれた。そして、静かに頷いてくれた。

「心配かけちゃうかもしれないけど・・・」

「それはもうぉいつだって心配よぉ。お母さんもお母さんだからなのはのことが凄く心配」

「・・・・」

やっぱり駄目だよね

「でもね」

「？」

「でも、なのは迷っていたら危ないことは駄目よって思うんだけど・・・でも、決めちゃってるんでしょ？友達と始めたこと、最後までやり通すって。なのはが逢ったその女の子と話がしてみたい」

「―うん」

「じゃあいってらっしゃい。無理しないように」

そういうとお母さんは私の頭を撫でてくれた。

―ありがとうお母さん・・・

今のそのお母さんの言葉だけで私本当に助かってる

なのはは母の優しさと心の広さを改めてしったのかもしれない。

―なのは、別に話してもいいんだぞ？俺のこと

となりにいたレイくんが話しかけてきた。

―けど、話したらきっともっと心配しちゃうし。それに本当に駄目

っていうかもしれない
―大丈夫。きっと素直に話したら信じてくれる人さ
―ちょっと待っ

「桃子さん？」
「えっ？なのは、じゃないわよね」
「えーとここです」
「ここ？」

声の方向。下を向く。そこにはフェレットの“ユーノ”しかいない。
そう、ユーノしか。

「もしかして、ユーノ？」
「はい」
「えぇうその・・・？」
「混乱するのも無理はありません」

そういうと彼は人型に戻った。

「えっ！？？？？」
「まず私の名前はユーノではなくレイル・アンヴァルト・Y・神乃と言います」
「えっああ、高町桃子です！」
「とりあえず落ち着いてください。深呼吸して」
「すぅーはぁー」

彼に言われ深呼吸する桃子。
そんな二人の間で見ていたなのははまぁこういう風になるよねっと思っていた。

「本当は正体を明かすつもりはなかったのですがきっとこれからもこういうことがあると思って正体を明かしました」
「その・・・とりあえずお歳は」
「あー見た目は子供の姿ですが一応大人です」
「はい、わかりました」

―立ち治りが早い。さすがなのはの母ということか？

「まず、お嬢さんを巻き込んで申し訳ない」
「どうして、謝るのですか？」
「きっと親としては娘が普通に育って欲しいと思っているでしょう？」
「はい、確かにそうです。けど、なにがあったにしろなのはが自分で決めたことです。親が自分のので決めたことをやめろなんて言えないでしょう？」
「ははっ、やはりあなたはなのはのお母さんだ」
「ふふっ。もしかして試しました？」
「それはお互いさまでしょう？」
『ふふははっ』

―お母さん凄い、のかな？

互いに試しあっている時点でどうかしていると思われるこの会話。

「さて、本題に入りましょう」

それからレイくんは魔法のことを軽く話し、異世界のことも軽く触れていた。
お母さんは私と同じように黙って聞いてくれていた。

「できれば、時が来るまでは他のご家族には内緒でお願いします。きっとややこしくなるかもしれませんから」
「―わかりました。けど、どうして私に話してくれたんですか？」
「そうですね。しいて言うなら家族を支えているのは父親です。その父親を支えているのもまた母親です。あえて言うなら家族を本当に支えているのは誰でもない母親であるあなたです。だから、私はあなたに話した。あなたは信頼に長ける人物ですから」
「・・・レイさんって意外とそういう方なんですね。私も初対面ですがあなたの内面的なところは少し理解したつもりです。どうか―」
彼女はソファーから立った。
「なのはをお願いします」
それはきっと一人の母親として彼に頼んだ。レイも立ち上がり感謝を述べた。
「ありがとうございます」
「ありがとうお母さん！」
なのはも一緒に立ちあげって礼をいった。
きっと感謝しきれない気持ちでいっぱいだったなのはだろう。
そして、部屋に戻り身支度を済ませさっそく向かう。
玄関を出るときお母さんが言ってくれた。
「いってらっしゃい」
「―いってきます」

本当にありがとうお母さん。

―きっとあと戻りはできない。私が決めた道。自分がほんとうにやりたいことを私は―

次元空間内
時の庭園　大広間

フェイトが集めてきたジュエルシード４つを見つめているプレシア。

その瞳はどこか遠くを見つめている。

「はやく、はやくなさいフェイト。“約束の地”が・・・“アルハザード”が待っているの。私たちの・・・私たちの救いの地が・・・」

きっとその言葉は娘には届いてはいない

第8話　正体を明かす彼と歩みだす少女（後書き）

とうとうｘ２主人公登場です。次回は登場人物の設定を出そうと考えていますのでそこで詳しく書きたいと思います。
とりあえず主人公をだせたのでよし！

第9話　なぜなになのは　はじまります？（前書き）

途中ある文章になったらあのＢＧＭを思いだしてみてください。そうすれば非常に楽しくなります

第9話　なぜなになのは　はじまります？

アースラ　作戦司令室

「というわけで、本日〇時を持って本艦全クルーの任務はロストロギア・ジュエルシードの捜索と回収になります。尚今回ジュエルシードの発見者で・・・我々の総帥である―」

「レイル・アンヴァルト・Ｙ・神乃だ。君たちの働きに期待している」

ザっ！

彼女に紹介され席をたち自己紹介すると他の局員も立ち上がり敬礼をしている。

「・・・」

その光景をみたら彼は手で座れの合図をしている。

サッ！

そして、動きなれたように座る。

「今回とある事情により捜索に協力してもらっていた・・・・」

「た、高町なのはです！」

「彼女が本件に捜査協力してくれることになった。みんなよろしくたのむ」

『はっ！』

「・・・・堅苦しいのはいいから」
『はぁ？』

（ニコ♪）

クロノ視線に気づいたのか笑顔をおくるなのは。

「！」

クロノは赤面していた。

―若いな、小僧。だが、なのはに手を出しら・・・・

第九話　「なぜなになのは！？」

「では、ジュエルシードの位置特定はこちらでやるわ。見つけたら現地に向かってちょうだいね」
「はいっ」

艦長席の後ろで待機しているなのはとレイ。レイはどこかから椅子をもってきて本を読んでいる。

「艦長お茶です」
「ありがとう♪」

その光景は日本人である我々には酷なものだった。
何故かお茶（緑茶だと思われる）に砂糖大さじ2杯。さらにミルクをいれている。

「ん～ほっ♪」
「うへ・・・」
「お前は相変わらずの甘党だな」
「そうかしら？」
「まぁ、俺の知人にもコーヒーに塩をいれる奴がいたからあんま驚かなかったが」
「えっ！」

黙々と呼んでいた彼の発言はなのはにとってはありえない話ばかりだった。

―コーヒーに塩はないでしょうが！

「ところでなのはさん、学校の方はいいの？」
「はい、家族や友達には話しておきました」
「そう―ほっ♪」
「ううっ・・・」

しかし、やはりなのはにはちょっとつらい光景だった。

アースラｓｉｄｅＯＵＴ

某所　ジュエルシード発現場所

そのジュエルシードは今回鳥を取り込んだのだろうか。どこか不死

鳥のようなイメージがわいてくるものだった。
現地に到着したなのはとレイはさっそく封印にとりかかっていた。

『・・・・縛』

すると不死鳥の周りにいくつもの根が絡む。
その根はあたりの木だった。本来はもっと短いはずなのに通常の数倍は伸びジュエルシードを捕えていた。

「ぽけー」

そう光景になのははどうなっているか分からなかった。なぜなら彼はデバイスを持っていないからだ。

「なのは、ぼーっとしてないで封印！」
「あ、はい！」

つい敬語で言ってしまった。
それでもちゃんと作業をこなし封印することができた。

「ジュエルシード??か」
「うん、ところで・・・」
「？」

アースラ　管制室
そこでクロノとエイミィはフェイトとアルフについて調べていた。

「この黒い子フェイトって言ったっけ？」

「フェイト・テスタロッサ。かつての大魔導師と同じファミリーネームだ」
「へーそうなの？」
「だいぶ前の話さ。ミッドチルダ中央都市で魔法実験の最中次元干渉事件を起こして追放された大魔導師」
「その人の関係者かな？」
「わからない、すくなくとも・・・・」

ピィン

するとウィンドが展開された。

「ん？なんだ」

『3』

『2』

『1』

『ドッカーン！わーい！なぜなになのは』

と意味のわからない映像が流れだした。

『えっ？』

すると変な表紙から人が出てきた。

『皆さん、こにちわ。時空管理局総帥のレイ“先生”です。今回はなのはくんの質問に応えるためにまた皆に聞いてももらおうと思っ

てこれから色んなことを一緒に勉強していきましょう。ちなみに今回残念ながらうさぎさんと解説のお姉さんがいないので俺が説明しよう！』

その映像にクルーの反応はというと

「なっ、なにこれ？」

「な、なんだ電脳ジャックか！？」

「あれ、これどこかで・・・」

「あ、悪夢よ・・・もう二度とはあんなも―ひっ！」

などです。

一人とても思い出したくない記憶があるようですね

Ｓｉｄｅ　なぜななになのはが放送されている教室

「・・・あのレイくん？」

「なのはくん？質問は挙手しなさい」

「じゃあ、はい」

「はい、なのはくん」

「えーとその格好についてとこのーなぜなになのはってなに？」

どこで収録されているかは不明だが舞台セットらしきものがありさらに中継を無人カメラで撮影。さらに現況である彼は白衣をきてメガネをかけている。

「昔、知人に教えてもらった。これのがよりわかりやすくできるそうだ。ちなみに過去に実証済みで評価はなかなかだったぞ？」
「・・・・あ・・そうですか」
これ以上言わない方がいいと思ったなのはであった。

「さて、まず何を聞きたい？」
「えーと私？」

コクリと頷く彼。
原因はなのはにもあるのだがあえてここは彼のせいにしておこう。

「ん～と、なんでレイくんはデバイスを持ってないのかな～って」
「説明しましょう。俺は“魔術師”だから別にデバイスなんていらないの。単に杖は必要な時にしか使わないだけ。ないわけじゃない」
「魔術師って？私たちのこと魔導師っていうよね？」
「ん～これはちょっと難しいかな？本当に簡単に話すと『魔導師』と言うのは、魔導を説く人間を指す。つまり魔法で人間を導くってことだな。対して魔術師と言うのは魔法、魔術、呪術を使い常人では成しえないことする者の意味だ」

しかし、それには矛盾が生じる。
それは、魔法を使うなら魔導師も魔術師も同じなのではないか？なのははそのことも聞いた。

「魔術師とは主に昔では“魔女”と呼ばれていた。男も女も。しかし、昔の魔女は世間からは受け入れてもらえない存在。現に昔魔女狩りが行われた。まぁ、そうだな。魔術師だと印象が悪いイメージがあるに対して魔導師は人を導くという良い印象がある。それが今

現在大半の者を魔導師と呼んでいる」
「・・・・」
「まぁ、これを理解するにはもっと時間が必要だし、なによりなのはや他の皆もわからないか」
『うん、うん』
「じゃあ、この質問はこれで一時終わり。何か他の質問は？」
『はーい先生質問～』
「君は確かエイミィだったかな？」
『はい、覚えていただいて光栄です。質問なのですが先生はミッドチルダ式の魔法を使ってるんですか？』
「そうだな。使う時もある、使わないときもある。まぁ基本的デバイスを使わないときの方が多いな」
『ふむふむ』
熱心な生徒というより彼の情報が知りたいエイミィのように思える。
『では、どんな魔法を使っているのですか？』
「そうだな。君たちはデバイスという触媒で魔法を行使していると思う。まぁ大半が自分の魔力で杖を通しているっというのが一般の認識だな。そもそもこの時代でデバイスを使わないのは相当の熟練者だと思った方がいい」
『それはなぜですかぁ？』
「デバイス、特にインテリジェントデバイスは自らの意志で主を守るために防御や索敵ｅｔｃなどしてくれるが俺のような滅多にデバイスを持たないものはすべて自分でやっている。さっきのように俺が使った魔法、まぁ“魔術”ということにしておこう。それは木を触媒にしたものだ。簡易魔術、下位魔術等の物なら無詠唱で唱えることができる。しかし、中級、上級といった高等呪文には詠唱が必

要になる。魔導師の場合なら魔力チャージかな？しかも唱えるのに敵が待っててくれるはずがないだろ？詠唱も防御も自分でやるのさ。しかし、魔術師は大概使い魔を従えているからそういった面でそれを補っているとも言えなくはない」

『・・・・』

「どうした？」

さすがのエイミィも理解はできなかったらしい。彼の言う魔導師と魔術師の違いはなんとなく理解できたのだろうがそれ以降の力の行使については違いが理解できてはいない。

『じゃ、じゃあ魔導師と魔術師。どちらが強いのですか？』

「魔術師」

彼はキッパリ言った。迷うことなく。

『理由は？』

「魔術師のがせこいからさ」

『そ、そんな理由で・・・？』

「他の奴らはどうかは知らないが俺の体験談で話せば魔術師は魔導師よりやっかいだ。呪術で生き返る奴もいればなんか危ない呪文となえたりとかとにかく凄いと思うぞ？魔導師は効率がいいからな。単体（ワンマンアーミー）としてもやっていける。逆に魔術師は誰かと組んでいないと強力な攻撃できないからな」

『ちなみに先生はどれくらいお強いので？』

「そうだな・・・魔術師としても多分頂点だし、魔導師とても頂点だな。人間としても頂点に立っている」

腕を組みエッヘンと言わんばかりの感じだった。

「まぁ基本的に俺は戦わない“人間”なのであまり強いとかはわからん」
『そ、そうですか、ありがとうございます』
結局わからないままで終わってしまった。
「じゃあ、先生質問―」
「はい、なのはくん」
「レイくんはどういった魔術を使うの？えーと例えばどういう攻撃とか」
―あ、それは気になる
それだけは聞いてみたい。とクルーは思っていた。
「黒魔術とか白魔術、呪術、死霊術ｅｔｃ・・・・・。あっもちろんミッドや“ベルカ”も使える」
「な、なんか一杯あるね？」
「まぁ魔導師は扱いのデバイスが違うだけであとは各々の得意魔法だからな」
「へー魔法にも一杯あるんだね！♪」
「そうだぞ、知っておけば戦闘でも役に立つからな『キーンコーンカーンコーン♪』おっと今日の授業はこれでおしまいだな」
どこまで用意がいいのだろうか？
学校のチャイムがアースラに鳴り響く。
「では、皆も聞きたいことがあったらこちらどうぞ～」
と下で連絡先が表示されている。

「それでは、次回のなぜなになのはもよろしく～」

プチ

とそこで映像は切れた。

《じ、次回もあるるの？》

アースラ某所で誰かが怯えている。

『あっ、ちなみに次回はうさぎさんとお姉さんを連れてくるのでお楽しみに～』

《ヒッ！》

それは恐らく止めを刺したのだと思う。

“彼女”は気絶してしまった。

その後のことを少し語ろう。

意外にも「なぜなになのは」はクルーから評判がよく次回放送を期待しているらしい。

また、先生の言ううさぎさんとお姉さんについて一部のファンからお便りが寄せられているそうだ。

ただ、一人を除いてそれを望んでいない者がいることは“先生”以外知る者はいなかった。

なぜなになのは未放送版

なのは「なんでタイトルに私のなまえがあるの？」
先生「それは聞かないお約束」
なのは「別に『教えて？レイ先生～！』でもいいと思うけど」
先生「それもいいな。けど、それ前のタイトルだから。今回はパワーアップして帰ってきたのだ。それに、なのはが疑問に思ったから「なぜなになのは」なんだ（棒読み）」
なのは「じゃあ、今度私じゃなくて他の人だったら？」
先生「そうだな、『帰ってきた！教えて？レイ先生～！』だな」
なのは「へーところでうさぎさんとお姉さんって？」
先生「これには欠かせないものなんだよな。今回は急遽やることになったから用意できなかった。これに関しては次回のお楽しみってやつだ」
なのは「へー私それやってみたい」
先生「タイトルの人が出るのはどうかと思うがまぁお姉さんでもいいかな？基本的にお姉さんのポジションはアシスタント兼司会だから。一応なのはも候補にいれておこう」
なのは「ところで前のお姉さんとうさぎさんって誰だったの？」
先生「俺の教え子。ちなみに一人はここにいる・・・ニヤリ」

艦内某所
「悪夢よ、アレは悪夢よ・・・。お姉さんなんて・・・・・

おまけ

先生「お前に教えてもらったアレ意外と好評だったぞ？」
Ｉ先生『でしょう、なんで皆わからないのかしら？』
先生「でさ、こんどお姉さんの衣装とうさぎさん送ってくれないか？」
Ｉ先生『いいわよ、知り合いに送らせるから。着ぐるみのバリエー

ションも増えたからそれも送るわ。お姉さんの衣装も付け足しておくから』

先生「おっ助かる」

Ｉ先生『ええ、それじゃ』

先生「ああよろしく頼む」

以上二人の秘密の会話でした♪

次回は本編に戻りますのでよろしくお願いします。

それからこの「なぜなになのは」も何回か放送する予定です。

第9話　なぜなになのは　はじまります？（後書き）

なんかできちゃった。なぜなには彼のことやこれからのことで何かを説明するに当たって必要なものだと思って出しました。
まぁネタは言わなくてもわかるか。

祝一万ヒット！！（前書き）

ただ一言

本当にありがとう！

祝一万ヒット！！

作者「祝1万ヒット！誠にこの作品を読んでいただいた皆様ありがとうございます！」

レイ「ホント、最初は読んでくれるかおどおどしてたもんな」

作「るっせい！」

レイ「まぁこの作品は当初は原作を再現しすぎたので皆さんの期待に応えることができなくてな、今ではオリジナル展開だが」

作「最初が肝心なんだよ！」

レイ「そこは認める」

作「だろ？まぁでも嬉しくて涙が・・・ぐす」

レイ「・・・さて、こんな奴放っておいてこれを記念に皆さんにはこの『第1回なぜなになのは！？講演会』にご招待。なんと今回ゲストでI先生も来るぞ？場所は時空管理局本局の特別ホールで行うぞ。しかも来てくれたお方にはもれなくこの会員証ピンバッジをプレゼント」

作「って、何宣伝してんだよ？」

レイ「別にいいだろうが」

作「よくない！」

???「何がよくないの？」

『！！！』

作「だ、だめ！お前まだ出てきちゃらめっ！」

レイ（自分がやったくせに）

さて、改めて読んでくださった皆さん本当にありがとうございます。
そろそろ無印も終盤。
予定ではＡ‘Ｓ編をやろうと思っています。しかし、その前に色々とその間の話を書こうと思っています。
それでは次回はちゃんと本編に入りますのでよろしくお願いします。

祝一万ヒット！！　（後書き）

感謝とこれからの予定を書きました。
次回本編とか言っておきながらすみません。
うれしかったんです。
それと皆さんにアンケートを募集しようと思います。
「なぜなになのは！？のお姉さんとうさぎさん役をするなら誰？」
というアンケートを募集します。キャラは現時点でいるキャラでお願いします。
期限はとくにないのでどしどし応募お願います！

第１０話　決戦は海の上　そして―（前書き）

技名の上にカタカナをいれたのですか妙な空間ができてしまった（
汗

第１０話　決戦は海の上　そして―

第十話　「決戦は海の上　そして―」

アースラ　艦内　食堂

アースラの広い食堂に二人の男女が食事いや、おやつを食べていた。

「私が集めたジュエルシードは三つ。フェイトちゃんが手に入れたのは二つだから・・・」

「あと６個か」

残り六つ。中々見つからなかった。

そこで捜索範囲を地上だけではなく海にも捜査範囲を加えた。

恐らく少し時間がかかる。

「それにしても今回も空振りだったね」

「ああ」

彼はいつものように古い書物を読んでいる。メガネをかけて。

そんな態度をとっていてもちゃんと返事を返してくれるのは彼なりの人との接し方なのだろう。

「なのは、寂しくないか？」

突然彼は聞いた。

突然というわけでもなく家族から離れこんなことをしているのだ。

普通なら寂しいとか家が恋しいと思う者もいる。

けど、なのははは違った。

「ううん、全然寂しくないよ・・はむ・・。レイくんと一緒だし一人ぼっちでも平気。ちっちゃい頃はいつも一人だったから」

気がつけばなのはは自分の過去について語り始めていた。

レイは黙ってそれを聞いた。

「私がまだちっちゃい頃にね？お父さん仕事で怪我しちゃってしばらくベッドから動けなくなったことがあるの。喫茶店も始めたばかりで今より人気はなかったけどお母さんとお兄ちゃんはいつも忙しくて、お姉ちゃんはお父さんの看病で―だから私割と最近まで一人でいることが多かったんだ。だから結構慣れているの」

レイは彼女が一人ぼっちなところを想像した。まだ、こんなに小さい子供なのによく耐えらていたと思う。

きっとなのはの強さはこれがあったからなのだとレイは思った。

「そう言えばレイくんの家族の事とか全然しらないね？」

「ああ、もう故人だしな」

「そ、そうなの？ごめん知らなくて」

「別にあやまることじゃないさ。それに俺にも妹がいたからな」

「じゃあレイくんお兄ちゃんだったんだ」

「そうだな。あいつ今頃なにしてんだろ？」

なんとなく期待しても意味ないのに期待してしまった。

妹が生きていることに。

「―けど、俺も家族を失ってから一人だったな」

「そうなの？」

「ああ、頼れるのは自分以外にいなかった。今は違うけど。現にそ

の一人がなのはでもあるし。俺はなのはを相棒（パートナ）に近い存在だと思ってるから」

「それ、褒めてる？」

「褒めてるのかな？よくわからない」

『・・・・』

二人はそれっきり黙ってしまった。

互いを見あい何かを感じている。

「レイくん、もしこれが片付いたらもっと色んなお話しようね」

「ああ、色々片付いたらな」

―けど、もし全部が片付いたらきっと

なのははきっとそうなるであろう未来を予測していた。

きっと今だけなんだと思っていた。

―なのは、俺お前に一つ嘘をついた

彼は心のなかで彼は謝罪していた。

―両親は確かに故人だけど本当は“殺されて”死んだんだ

彼女には伝わることのない真実を彼は思っていた。

―！　―！

警報が突如鳴り響いた。

『Ｅｍｅｒｇｅｎｃｙ　Ｅｍｅｒｇｅｎｃｙ　捜索区域にて大型の魔力反応を探知！』

捜索していた局員が艦内に放送している。
それを聞いた二人はすぐさま艦橋へと向かった。

「な、なんてことしてんのあの子たち！？」

エイミィはそれを見て大声を上げていた。

アルフｓｉｄｅ

アルフは主が今やろうとしていることを見守っていた。
その行動は確信を得て行っている。

―きっとジュエルシードはこの海のどこか。だから、海に電気の魔力流を流して強制発動させて位置を特定する。

確かにこの広い海で探していたらかなりの時間を浪費してしまう。
だから、フェイトの計画は間違っていない。
ただ―

気がつけばフェイトは詠唱を終え海に向かって魔力流を打ちこんでいた。
少し待っているといきなり海は荒れた。
台風が迫っているのより遥かに海は荒れ雷は落ちていた。

「はぁはぁ見つけた、残り六つ」

―これだけの魔力を打ちこんでさらに全部封印していくらなんでも絶対限界を超えた

「アルフ、空間結界とサポートをお願い！」

「ああ任せておいて」

―だから、誰が来ようが何が起きようが絶対私が守ってやる

それが使い魔としての役割。

それが“アルフ”としての決意、思いであった。

アルフｓｉｄｅＥｎｄ

アースラｓｉｄｅ

艦橋

二人の行いは艦橋のモニターで表示されていた。

同族ならこんなものを見たらまず思うだろう。

「なんとも呆れた無茶をする子だわ」

と。

フェイトがとった行動は無謀でさらに個人の魔力を超えている。

「フェイトちゃん！」

艦橋になのはが慌てて入ってくる。

「あの、私、急いで現場に！」
「その必要はないよ。放っておけばあの子勝手に自滅する。仮に自滅しなかったとしても力を使い果たしたところを叩けばいい」
「で、でも！」
「今のうちに捕獲の用意を！」
「了解」

なのは言い返すこともできずただ、彼女が映るモニターを見ていることしかできなかった。
中々封印することができずアルフは何かに捕まり身動きがとれずさらにはフェイトの魔力はすでに極僅かだった。

「私たちは常に最善の選択をしないといけないわ。残酷にみえるかもしれないけどこれが現実」

それが、会社、企業、団体に所属している者たちがとるべき姿。
そう、彼女達はなに一つ間違っていない。彼女達は最善の選択をしている。彼らは局の人間。その規則（ルール）に従っているまで。
けど、その光景はなのはにとって本当に残酷な光景でしかなかった。

―いけ、なのは

彼の声がした。後ろを振りむくと彼が立っていた。

―でも、レイくん。あの子と、フェイトちゃんとお話したいのはレイくんとは関係ないんだよ！？
―関係はある。それに、ここで今までの仮を返して置きたいし。俺は今まで君に助けてもらってばかりだ。最初にあったときから―だから、行ってこい。アースラのシステムは既に掌握済みだ！

すると彼の後ろの転送装置が起動した。
それに気付いたのかクロノは叫んだ。

「総帥あなたは！」

なのはは走る。互いにすれ違うと二人とも微笑んでいた。

―これが、相棒（パートナ）ってやつなのかね？

「ごめんなさい。高町なのは、指示を無視して勝手な行動をとります！」

「彼女の結界内に転送！」

彼の掛け声と共になのはは彼女の下へ転送された。

「やってくれましたね、“総帥”？」

「これは総帥権限だ。納得しないなら報告書にでも書いて提出すればいい。まぁ一度もみることなくただの紙切れになるだけだが」

「まったく。なにかやるとは思っていましたがさすがにこれは・・・」

彼のことを知るリンディでさへこの展開は予想していなかった。

「さて、俺もいこうかな。・・・術式展開」

すると彼の足もとに六芒星が出現した。

「転移座標を具現化（イメージ）・・・・・構築（コンストラクト）」

「一我を彼の地へ誘い（インバイト・アース）たまえ」

すると彼はどこかへ消えた。
おそらく彼女達の下へ向かったのだろう。しかし、驚くべきは単体でこの次元空間内から地球へと跳んだことだ。しかも、デバイスや何も補助なしで

アースラｓｉｄｅＥｎｄ

なのはｓｉｄｅ
発現区域の遥か上空。
そこは下と違って青空が広がっていた。
それを見ながら落ちていることを除けば。

「いくよ、ＲＨ－風は空に　星は天に」

かつて、初めて魔法を手にした時の発動キーを言う。

「輝く光はこの腕に、そして、不屈の心は」

きっとそれは新たな決意の証

「この胸に！ＲＨセートッアープ！」

『Ｓｔａｎｄｂｙ Ｒｅａｄｙ　Ｓｅｔｕｐ』

なのはｓｉｄｅＥｎｄ

フェイトｓｉｄｅ

ジュエルシードの封印に手間取っていたフェイト。
その最中光が目に入った。
例えるならそれは雨上がりの後の風景。雲が少しずつ晴れ太陽が大地を照らすような光景。
しかし、この状況では太陽がさすことはない。

そして、光から何かが降りてきた。
第三者がみたらこう思う者もいるのではないだろうか？
まるで神や天使が舞い降りたような光景だと

「・・・っ・・・」

しかし、降りてきたのは自分と同じで小さな女の子だった。

フェイトｓａｉｄｅＥｎｄ

なのはが現れたことに気付いたアルフはジュエルシードによって巻きつけられた綱を引きちぎりなのはに迫る。

「フェイトの邪魔を・・・するなーーーー！」

だが、その攻撃は止められてしまう。

「なっ！？」
「悪いな。だが、今回は戦いに来たんじゃない」
「レイくん！」
「―あっ！？」

『なにをやってるんですかあなたたちは！？』

アースラからクロノの声が届く。
アースラを通して頭に直接声が届く・

―ごめんなさい。命令無視は後でちゃんと謝ります！だけどほっとけないの！
―っ？

なのはは降下しフェイトの下へゆく

―きっとあの子一人ぼっちなの、一人っきりが寂しいのは私少しだけどわかるから！

一方レイはアルフを説得していた。

「まずは、ジュエルシードを停止させないと不味いことになりかねない」
「あっ―」

彼は防御陣を解き竜巻となったジュエルシードの近くに向かう。

「だから、今は封印のサポートだ。それづらい貴様でもわかるだろう？」
「・・っ・・」

―海―水とフェイトの魔力流により電撃の特性を持っているのか。
竜巻自体はもう水ではなくエネルギーになっている。とりあえず足止めぐらいはできるだろう

アルフは彼の言うことをりかいできていないわけではなかった。それが唯一主の負担を減らせる最良の選択だと。

そんな中なのはを目で追っているとフェイトと接触しているのが目に入った。

「フェイトちゃん！」

彼女はフェイトの隣で止まった。

「手伝って、一緒にジュエルシードを止めよう！」

なのは杖を差し出しそこから桜色をしたエネルギーがバルディッシュに送られた。

それは一種の回復魔法であろうか。

自分の魔力を他人に与え魔力補給させたのだ。

「二人はきっちり半分こ」

「・・・」

「・・・」

彼女は笑顔で頷いていた。

彼女はなぜ私にこうまでしてくれるのか未だに私はわからないけど今は―

「・・・ちっ」

―さすがにこんな大出力の暴れん坊を6個も足止めはできんな。

バインドと呼ばれるミッド式の魔法。彼はそれを使っていたがさすがにこれでは止めることはできなかった。

―仕方ない。力を使うか

「・・・っ！」

横を向けばアルフいつのまにか手伝っていた。

「アルフ、少し踏ん張ってろよ？」

「？」

「二人とも俺たちが抑えているうちに早くしろ！―氷は水からできる。水は氷にすることができる。生憎ここには困らない程の水がある。さて、やるか」

彼の足もとに先ほどのミッドチルダ式ではなく先ほどの六芒星の魔法陣が展開された。

「レイくんとアルフさんが抑えてる。だから、今のうち！二人で二人でせーので一気に封印！」

なのはは空にあがった。

その雷が襲いかかる中それをよけ射撃地点を確保する。

―ひとりぼっちで寂しい時に一番してほしかったことは「大丈夫？」って聞いてもらうことでも優しくしてもらうことでもなくて

魔法陣を展開しそこに降り立つなのは。
下をみるとまだフェイトは立ち止まっていた。
『ｓｅａｌｉｎｇ　ｍｏｄｅ　ｓｅｔ　ｕｐ』
バルディッシュは命令をしていないのに自分で動いた。
「バルディッシュ？」
しかし、相棒は応えてはくれない。
そして、もう一度上空にいるなのはを見上げる
彼女はウィンクしていた。
「ディバインバスターフルパワー・・・いけるね？」
『Ａｌｌ　Ｒｉｇｈｔ　Ｍｙ　Ｍａｓｔｅｒ』
そらに彼女の魔法陣が大きくなる。
そして、フェイトも魔法陣を展開した。
それを見ていたレイも行動を起こした。
「我が同胞たちよ。我の声に応えろ―氷結した海（フローズンマリン）！」
竜巻が発生している海が凍り始めた。
そして、それはだんだん竜巻をも凍らせた。
竜巻は凍らされ一時活動を停止した。しかし、それは竜巻だけであり止めは彼女たち二人。

「今だ二人とも！」
「せーの！」

彼の声の後になのはがタイミングの掛け声を言う。

『サンダーーッ！』

凍った竜巻に雷が降り注ぐ。

『ディバインーッ！』

杖の先端に魔力が集束する。

『レイジーー！！』
『バスターー！！』

雷が星がジュエルシードを停止させることに成功した。
その双方の強力な攻撃は結界内の端まで影響を及ぼした。逆に結界をしていなかったら街に被害が出ていただろう。

すると蒼い柱がたちそこから二人のもとに六つのジュエルシードが現れた。

―同じ気持ちを分け合えること

それは彼女がかつて一人だったときに気付いた答え

―寂しい気持ちも、悲しい気持ちも半分ここにできること

そうすれば少しは軽く楽になる。けど、実際は―現実はそう簡単にはいかない

―ああそうだ。やっとわかった

きっとそれは彼女と出会ってやっと見つけた答え。

どうすれば話を聞いてくれるか？
どうやったら彼女とお話することができるか？

きっとそれはこの答えのためだったんだ

―私、この子と分け合いたいんだ

「友達に―なりたいんだ」

それが私が彼女と出会って見つけた答え―

「・・ぁ・・・」

誰もそんなことは言ってはくれなかった。それ以前に私はそんな人と出会わなかった。あの人以外には。
けど、この子は私に友達になりたいって言ってる。

私は今きっと困惑している。けど、心のどこかで私の答えはもうあったんだと思う。

けど、それは叶うことはなかった

「ん？」

最初に気付いたのはレイだった。

その刹那。

アースラにアラート音が響き渡る

『次元干渉！？別次元から本艦及び戦闘区域から魔力攻撃来ます！あ、あと６秒！』

それに気付いたが遅かった。

アースラに魔力攻撃が襲う

『あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝！！』

それは戦闘区域にいた四人にも被害をおよぶ。

紫色をした雷が海をいや、無差別に攻撃していた。

「あっ―母さん！？」

フェイトはそれが母によるものだと分かった。

刹那レイの叫びが彼女に届く

「フェイトォ！避けろ！」

『ア〝ア〝ア〝アアア！！！！』

その攻撃はかく乱のためだけではなく自分の娘にもその雷が落ちた。

「フェイトちゃん！―キャッ！？」

叫び彼女の下へ向かおうとしても雷が突如なのはにも落ち落下する。

「なのはー！！」

レイは落下するなのはを抱きとめる。

するとアルフも人型に戻り落ちるフェイトを抱きジュエルシードを掴もうとする。

ジャキン！

しかし、それはクロノに止められた。

「邪魔を・・するなー！！」

怒りのままに魔力弾をクロノに打ち込みそのままジュエルシードを取ろうしたが３つしかなかった。

「！」

下を向き落下したクロノをみた。

そこには残り３つのジュエルシードがあった。

それは彼のデバイスに保管されてしまった。

「ううううあああああああ！！」

魔力弾を海に打ち込むそれはレイたちにとっては良い目くらましになった。

『逃走するわ、補足を』
『駄目です！』

今もなお続いているこの状況で流石のアースラでも追跡は無理だった。

「は・・・レイくんフェイトちゃんは？」
「・・・逃げられたようだ」

彼の腕のなかで辺りを見渡す。
しかし、彼女の姿はどこにない
ただ、その後妙な空気が彼らを漂っていた。
その後機能を回復したアースラに回収された三人だった。

レイｓｉｄｅ

回収された後レイは一人アースラのどこかにいた

―プレシア、そうまでして・・フェイトを傷つけてまでアリシアを生き帰えさせたいのか

彼は先ほどの光景をみて怒りではなく悲しさ、憐れみを感じていた。

―レイぃ・・・

それは寂しく、切なく、悲しい声

「わかってる。俺も覚悟を決めよう。例え、いや―いまさら禁忌（タブー）な

ど恐れてはいない。だから、あいつ自身は救えなくても心だけは救って見せる。あの日、あの時の約束はもう叶っているんだ。だから、そのことに気づかせてあげなくちゃいけない。それが俺のしてやれる唯一の事だから―」

誰もいないそこで彼は静かに決意を固めた。

きっとそれは一人の男として

きっとそれは彼女が自分の教え子だったから

きっとそれは自分が彼女の先生だったから

そんな彼の気持ちに気付いていた者はいない。

けど、一つの―人ではない“もの”を除けば彼の気持ちと決意を知っているものがいた

しかし、それを知っている“もの”は彼以外にはいなかった

そして、物語は終盤へと話をすすめる

―もし大切なものを失った時、あなたはどうしますか？

ＥＮＤ

第１０話　決戦は海の上　そして―（後書き）

第十話です。
最後の”もの”という表現は者であり物でもあるのでそういう表現方をしました。
そして、最後のは物語にある意味関係していておそらく現実でも関係していると思います。ただ、これを描いたのは私一個人の言葉です。気にとどめるもよし、無視するのも自由だと思います。
ただ、なんとなく私はそう思ってしまいました
なんか暗くてすみません
感想、またはアンケートに答えるくれるとありがたいです

フェイトの夢　リニスの切なる思い（前書き）

まず一言すみません。なんかネット止められていて更新できませんでした。
その間に書こうと思ったけどネットが使えなくなったショックで鬱になりすぎて駄目でした

フェイトの夢　リニスの切なる思い

私は今なにをしているのだろう？
そもそも起きているのか、寝ているのかさえわからない。
そんな状況の中でただ一つわかってるということがある。
それは“フェイト・テスタロッサ”の記憶、思い出がまるで夢と言う撮影機を使って再生されているようだった。

……

時の庭園　庭

そこで一人の男と小さな少女が訓練をしていた。
小さな少女は自分よりも長い棒を持って彼に攻撃している。
けど、当然なのか少女の攻撃はあたらない。

「いいか、フェイト。まず当てることではなく自分が使う得物（武器）を熟知するんだ」
「えいっ！やっ！」

横に振ったり上から下へまっすぐ振りおろしたりしている。棒なのだから攻撃する型は限られている。
そんなことをかれこれ1時間は続けていた。

「・・・よし、休憩にしようか“フェイト”？」
「はい、“レイ兄さん”」
二人木の陰に行きそのまま座った。
「しかし、フェイトもそれなりに戦斧の使い方を熟知してきたな」
「うん、本で使い方や弱点とか色々調べてみたんだ」
「そっか、偉いなフェイト」
そういうと彼はフェイトの頭を撫でてあげていた。
その時の彼女の顔はとてもうれしそうだった。
「えへへ～♪」
「じゃあフェイトは少しここで休んでいていいぞ。俺はちょっとリニスの所にいってくる」
「は～い」
そう言い残し彼はリニスの下へ向かった。
リニスがいる研究室
そこでは黒い斧の形をした杖がいろんなコードやらケーブルなどに繋がれていた。
「で、どうだ調子は？」
「これは、レイさん。ええ、今のところ順調です」
気がつけばいつのまに後ろに立っている彼。
「後はこいつに名前をつけるだけか」

「もう考えてあるのですか？」
「ああ、バルディッシュという名をつけようと思ってる」
「バルディッシュ。いい名ですね」
「レイジングハートと後継機になるわけだが・・・一応お前の方が先輩だな」

彼の隣に浮いている宝石レイジングハート。

『なんだか、不思議な気分ですね。いわゆる兄妹機という奴ですか？』
「そうだな、数字でいうならお前がアイン、こいつがツヴァイになるな」
『ドイツ語ですか？』
「ああ、不思議と数字なのになんだか名前な気がしてな。まぁレイジングハートが本当の名だからあまり気にすることはないさ」
「ふふっ」

隣で会話を聞いていたリニスは笑っていた。

「あっ、すみません。けど、言葉って不思議ですね。ただ、数字なのに国によって呼び方が違ったり、今のように名前みたいで」
「そうだな、言葉だから伝わるものってあると思う。けど、伝わらないものもある―」

彼の目はどこか遠いところを見ていたような気がした。

「フェイトはどうですか？」
「ん？ああ、あと少しもすれば立派な魔導師だ。お前の教え方がいいからな」
「それをいうならレイさんだって」

「俺は戦い方を教えただけさ。後はアイツ自身の素質、才能だ」
「まぁそういうことにしておきます」

リニスには彼が自分を棚に上げないという態度をいつもとっていることを知っていた。
自身が否定していても彼女にはわかっている。彼がいつも彼女のことを思っていることを。

リニスｓｉｄｅ

それから少しの時が経った
リニスはいつしかある異変に気付いた。自分の主プレシアのことだ。
自分は彼女の使い魔であるが彼女は異常すぎる。
研究室に引きこもり滅多に外にでない。そのため使い魔である私を生み出した。
フェイトから聞いた話では、プレシアはとても優しい母であり、こん風に忙しくなる前はいつもピクニックに連れて行ってくたし、一緒に遊んでくれたという。そして、ある程度仕事が忙しいのは昔からであり、自分が寂しがってわがままを言ったりしてはいけない、というのは、フェイトがずっと思っていることであるともいう。
しかし、ある時私は見てしまった。
見なければどんな思いで死ねただろうか？
アレを見てしまった私はどうすることもできなかった。
彼女の研究室にはいり彼女が倒れているのをみつけ傍に駆け寄った
私は辺りの保存ポットをみつけた。
ずらりと並ぶその奥に一つだけ違うものがあった。その時辺りは暗く猫を素体にしていなければみえなかったそれは

「フェイト・・？」

その言葉に反応してプレシアが怒った。

「違うわ！あの子は、あんなモノとは！」

リニスを掴んでいたプレシアの手は病人の手とは思えないものだった。彼女の爪がリニスの柔らかな肌に食い込んでいた。

「私のアリシアを、あんな失敗作と一緒にしないで頂戴！」

その時私と彼女の精神リンクが最大レベルで接続された。プレシアの記憶、プレシアの過去、アリシアの存在、フェイト誕生の理由。そして、自分の過去と生まれた理由。

そして、彼女は私も失敗作と罵った。さらに彼女の言ったことは「失敗作なりに最高の道具を作ってくれたわ」だ。

彼女には死が近づいていた。

プロジェクトF．A．T．Eの最中に病に冒されてしまったこと。

そのための歳月をアリシアのためにささげること。

そのあとすべてを知った私は彼に相談した。その記憶の中には大抵彼の存在がいたからだ。

「あなたは知っていたんですね・・・」

すべてを知っていた彼が何も言わないことに不思議と怒りはこみあげてこなかった。

「そうか、見たのか」

「どうして、あなたならプレシアを止められたはずです！」

彼は黙っていた。知っていて尚彼は黙っていた。

「・・・俺も今思えばなんで研究に係わったのかって思う。お前もみただろ？俺はあっち側の人間だ。本来なら捕える立場だ。だが、俺は一人の指導者である前に俺は魔術師だ。自分の利益になることならどんなモノでも利用する。そういう人間だ。だが、俺は・・・俺は甘い人間だ。それがなによりの証拠」

「・・・・」

リニスは彼の言っていること理解できてはいた。

自分を甘いと言っている。そういう人には見えないが実際に精神リンクでみた彼は甘い人間だった。ただ、それは“友”だけで“他人”には振りまいてはいない甘さだ。

「・・・リニス、お前はフェイトをどう思う」

不思議な質問を彼はした。

「確かにフェイトは人の精をもって生まれたわけではありません。それにそれが何だって言うんです！彼女は私の大切なフェイトです！あの子だってちゃんと生きてます。人としてあの子は立派に―」

それはまるで母親のような言い草だった。

違う立場で見ているから言える言葉。

そんな言葉がレイにとってはありがたく感じていた。

「リニスお前にこれを見て貰いたい」

そういうと彼の人差し指の上から光の小さな球体が現れそれをリニスの額に埋め込んだ。というより入った。

するとリニスの頭に映像が流れた

そこには二人の親子がいた。一人はプレシア、もう一人はフェイト？アリシアだ。

そこで二人は何か楽しそうに話している。

アリシアが何かいうとプレシアは恥ずかしそうに顔を赤く染めていた

「！これは・・・」

その映像は彼からみた光景だった。

「あの子の願いだよ―」

ふとリニスは彼の顔をみた。彼は悲しい、いやまるでもう叶っているようなそんな顔。

「ではフェイトは・・」

「そういうことになる。だが、あいつはそれに気付かないだろうな。あいつを道具として思っているかぎりは」

「―だったら」

その声は真剣だった。

「だったら私はフェイトを育てます。誰にも負けない魔導師に育ててみせます」

「―そうか、それがお前のやるべきことか。・・・・だったら」

「？」

彼はリニスの頭に手を置き数秒待った。

「収集（コレクト）」

「なにを・・・？」

すると彼の掌には先ほどの小さな球体ではなくだいたいハンドボールぐらいの大きさだった。

「ちょっとな。きっとこれが将来役に立つ」

「将来？」

「ああ、確信はないがな」

彼は笑っていた。

「そうだ、こんなことをしても変わらんが占ってみるか」

そう言うと彼はカードを取り出しそこから変な妖精が出てきた。

「さて、今日は何を占うのかしら？」

「フェイトの未来を」

「いいわ」

妖精は周りにあるカードをシャッフルし並べオープンする。

そして、占いの結果を教えてくれた。

「出たわ」

「なんと？」

「そう遠くない未来、金色の魔導師は運命の出会いを果たすだろう。

しかし、そのため自らが辛い道を歩むことになる」

「その運命の出会いとは？」

こうやって占いの真理に近づく。あやふやな質問ではなく単純かつ明解な質問をすれば今のように聞くことができる。

「・・・白き魔導師」

「白？」

「これで、占いは終わりだ。では、さらば」

そういうとまたカードに戻っていた。

「どういうことでしょうか？」

「そうだな、きっとフェイトを理解してくれる奴が現れてくれるってことじゃないのか？」

「だと、いいんですが」

そう、所詮占い。当たるか当たらないかは神のみぞ知る。

リニスｓｉｄｅＥｎｄ

フェイトｓｉｄｅ

今、別れの時が近づいていた

その人は母と同じくらい大切な、大好きな人で―

ずっと傍にいてくれると思っていた。

「本当にいっちゃうの？兄さん・・・・」

「ああ」

きっとその時の私の顔は捨てられた子犬のような顔をしていたと思う。

「・・・ぐす」
「泣くな、フェイト」
彼はしゃがみ彼女の頭に手を乗せ優しく撫でていた。
「きっとまた会えるから」
「ほんとう？」
「ああ、本当だ。きっとまた会える。だから、これを―」
彼女の後ろに手を回し前に戻しなにかをつけてあげていた。
「これなぁに？」
「約束の証。まぁ御守りみたいなものかな。また、俺とフェイトが会えますようにって」
「・・・このペンダント半分？」
「ああ、俺とお前の。今度あったときこれをはめるんだ」
「うん、わかった！」
私はとてもうれしかった。二人だけの約束とかその証とか。全部含めて私は嬉しかった。
けど、別れは寂しくて
「じゃあな、フェイト。リニスあとは頼んだ」
「はい」
彼は別れを告げその場から時の庭園から姿を消した。
「・・フェイト？」

私は泣きそうになっていた。
けど、泣かない。また会えるって言ったから。

「いこうリニス！」
「はい」

そのペンダントは今も持っている。失くさないようにいつも身につけている。けど、戦闘になると壊れちゃうかもしれないからその時はバルディッシュにしまっておいて貰っている。
また、いつか会える日まで私は兄さんを待っている。
ペンダントと一緒に

フェイトｓｉｄｅＥｎｄ

レイｓｉｄｅ

フェイトを見るたび心が痛む。
約束を自分からしておいて最低だと思う。今いる自分の立場はあっちから見れば敵。こっちから見ればあの子は敵。
こんな自分がいやになる。

「ごめんなフェイト。でも、もう少しだから」

自分の手に納められているペンダント。
これはある日どこかの世界で面白かったから買ったものだ。
これは映像記録装置といった俗にいうカメラの保存機器だ。二つ揃えればそのデータをみることできる。

これは俺が“フェイト”を撮ったものだ。
これがフェイト。
誰でもない“たった一人”の“フェイト”を撮った。

「俺はお前をフェイトとして見てきた。誰でもないお前として」

だから、もう少しだけ待ってほしい。
きっとその時になったらお前の周りにはたくさんの者たちがいるはずだから

レイｓｉｄｅＥｎｄ

フェイトの夢　リニスの切なる思い（後書き）

サイドストーリみたいなものだと思います。

リニス弐回目の登場。ここでリニス出しておかないと今後の展開に必要なものでして。

なのはの小説から文章を参考にしました。

本編書くっていっておいて書かなくてすみません。

メタルギアが邪魔してくるんだもん。そして今日クリアしたｚｅ☆

↑関係ない

コラボ書くか

第11話　決戦前（前書き）

なんとか更新で来た
こんなにも遅れたのはメタルギアのせいだ！

第１１話　決戦前

アースラｓｉｄｅ
艦橋

戦闘が終わりただ茫然といる三人がモニターに映し出されていた

「三人とも戻ってきて」
『了解』

とりあえず三人を収容する。
ただ、これからだ大事なのだ。
命令無視に独断専行。これだけでも厳重な処罰が下される。
ここは学校ではない。間違ったら「ごめんなさい」で済むものではない。それが時に命をも奪うのだ。

「さて、なのはさんと総帥には私じきじきのおしおきタイムです」

―一提督が総帥に説教するって普通できるか？

―できる以前に普通はありえないだろう

―リンディ提督すげー

―噂だと総帥の教え子だったって聞いたぜ

―うちらの提督はんぱねー

と部下である彼らはそんなことを精神リンクで話していた

場所を移しリンディのお仕置き部屋

といっても作戦司令室。

リンディは今艦長らしいことをしている。

しているのだが・・

「で、あの人はまったくぅ・・・」

なのはの腕に「総帥代理」と書かれているある紙をつけたボン太くんがいた。

「その・・・着いたとき一緒だったんですけど・・・」

「言わなくてもいいです。あの人は昔からああなのよっ！」

―やっぱり部下の人たちが言っていたリンディ提督がレイくんの教え子だったっていう噂本当なのかな?

「まぁあの人はどうでもいいとして。なのはさん、規則（ルール）とは集団を守るための規則です。個人ならともかく集団で行動している最中勝手に単独行動をとればそれだけ周囲の人間に迷惑や危険が伴います。わかりますね?」

「はい・・」

「しかし、本来なら厳罰ものですが今回は得るところもあったので不問とします」

「えっ」

「しかし、二度目はありませんよ」
「はい」

なのはだってそれぐらいはわかる。わかるけどやらなければならないこともある。
今回は彼女のためにやったことだ。
後悔はしていない

「さて、問題はこれからね。クロノ」

後ろにいたクロノに声をかける。

「はい、エイミィモニターに」
『はいは～い』

台の中央にそのデータが表示された。
そこには大魔導師といわれたプレシア・テスタロッサが映し出されていた。
その光景にはリンディは少し驚いていた。

「あらぁ」
「そう、僕らと同じミッドチルダ出身、プレシアテスタロッサ。専門は次元航行エネルギーの開発偉大な魔導師でありながら違法研究と事故で放逐された人物です。登録データと先ほどの攻撃で魔力波動が一致しました。あの子・・・フェイトと呼ばれる少女は恐らく・・・」
「フェイトちゃん・・・あの時お母さんって」
「親子、ね」

けど、あの時のフェイトちゃんは驚いてたというより恐がっていた

ような・・

「エイミィ、彼女の過去のデータ、家族関係とその後との足取りについて詳しく調査してちょうだい」

『了解』

なのははモニターに映しだされているプレシアをみた

―この人がフェイトちゃんのお母さん

こういったら悪いかもしれないけど自分の娘を愛していないような感じがする。

アースラＳｉｄｅＥｎｄ

時の庭園　ｓａｉｄｅ

「あれだけの好機前にしてただぼーとしているなんて」

「・・ごめんさい」

母の息は荒くそれでもフェイトに調教として鞭を振るう。

「酷いわフェイト。あなたはそんなに母さんを悲しませたいの！？」

「ううっ」

再び鞭で叩かれる。

その時脳裏にあの子の言葉が浮かんだ。

―友達になりたいんだ

「あああああ！」

彼女の叫び声が庭園に内に響き渡る

時の庭園ｓｉｄｅＥｎｄ

アースラｓｉｄｅ

少し時間が経ちエイミィ自らが現れ自らが説明してくれていた。
しかし、先ほど話していたことあまり進展はなかった。

彼女がミッド中央で研究していた次元航行エネルギーの開発。それに違法研究をしていたこと。その後辺境でも研究者として活動していたが突如姿を消し行方を暗ました。

「やはり、これが限界です。ほとんどのデータは失踪する前に消されています。今本局にも問い合わせています。もしかしたらデータが残っているかもしれません」

「いつ頃？」

「一両日には、と」

「んー、プレシア女史もフェイトちゃんもあれだけの魔力を放出したあとではそうそう動けないでしょう。その間にアースラのシールド強化もしないといけないし・・なのはさん、一休みってやけではいけれど一旦お家に帰ったらどうかしら？」

「あっでも」

「学校を休みすぎてもいけないしなによりたまには家族に顔を出してあげた方がいいわ」

そう言うとリンディは立ち上がり部屋を出て行った。

「はい」

アースラｓａｉｄｅＥｎｄ

時の庭園　ｓａｉｄｅ

プレシアの調教が終わりすぐさま部屋に入るアルフ。

「フェイト、フェイト！」

中央の広間に倒れているフェイトに血相をかかえながら走るアルフ。

「はぁ・・フェイトぉフェイト・・」

彼女は優しくフェイトを包み込んだ。

しかし、彼女は起きない。

「くっ！」

時の庭園の地下

「たった九つ。次元震は起こせるけどアルハザードには届かない・・ぐふっ！」

彼女の血が近くにあった銅像についた。

「ぐふ・・ごほごほ・・もうあまり時間がないわ。私にもアリシア

にも」

今自分が犯されている病。それはだんだんと身体を虫食んでいた。
そして、自分の死はアリシアの別の意味で死を意味していた。

ドッカン――！！！

後ろで爆発が起きた。

振りかえるとそこにはあの道具の使い魔がいた。

「ふん」

興味がないかのように彼女は前を向いた。

コツコツ

アルフは黙って彼女の下へゆく。

「ッ！」

そして、彼女に襲いかかった。

「ああっ！」

それは簡単にはじかれた。

「ふっ」

「はあああああ！」

彼女は腕はプレシアのすぐ後ろに迫っていた。
障壁がとけ彼女の襟を掴みまるで脅すような格好でアルフは今までため込んでいたものすべて吐いた。

「あんたは母親で、あの子はあんたの娘だろ！あんないう頑張っている子に、あんに一所懸命な子になんであんな酷いことができるんだよ！―はあ？」

彼女の表情はどうかしていた。
まるで娘とは思っていないような、どうでもいいような顔していた。

「あん―！」

突如腹に魔力弾を撃ち込まれた。
そのまま壁に衝突した。

「あの子は使い魔の作り方が下手ね。余分な感情が多すぎる」

使い魔とは主に服従するただの道具
そうプレシアは認識していた。

「フェイトは・・あんたの娘はあんたに笑ってほしくて・・優しいあんたに戻ってほしくてあんなに―ぐう！」
「ふっ・・・邪魔よ、消えなさい！」
「ぐっ！」

彼女は杖を出しそのままアルフに叩きこんだ。
それは庭園の外壁をも壊した。
そして、そこから一筋の光が落ちた

―どこでもいい、どこかに転移しなきゃ。ごめん、フェイト少しだけ待ってて

その後プレシアは広間に戻り寝ているフェイトを母親のように起こした。

「フェイト、起きなさいフェイト」
「はい、母さん」
「あなたが手に入れてきたジュエルシード九つ。これじゃ足りないの。できればあと5つ。それかそれ以上。急いで手に入れてきて母さんのために」
「はい―アルフ？」

起き上がろうとしたフェイトは自分にかけられているアルフのマントに気付いた。

「ああ、あの子なら逃げ出したわ。恐いからもういやだって。必要ならもっと有能な使い魔を用意するわ。いい、あなたの味方は母さんだけ。いいわね？フェイト」

―ああ、なんでこんな物に母を演じなければならないのか

「はい―母さん」

―本当にあなたは最高の道具よ、フェイト

時の庭園ｓｉｄｅＥｎｄ

高町家

「という十日間だったんですよ～」
「あらーそうなんですか～」

今現在高町家ではリンディ自らが事情を説明してくれていた。
それは見事というのを言わざるを得ないほどに。
また、どこへ行っていたのか戻るときには彼もいつのまにかいてフェレットとして再び高町家にやってきていた。

―しかし、お前もなかなか板についてきたじゃないか

精神リンクで会話をしているレイとリンディ・
レイの方は特にそれを面白がっていた。

―誰のせいですか誰の！
―まぁ話は桃子さんが合わせていてくれているから大丈夫だろ
―しかし、本当に正体を明かしてもよかったのですか？

高町家の中で桃子は唯一なのはたちの事情を知っている人物だ。
明かしたのはレイ本人であるが

―大丈夫だ。魔法のこととかは軽く話してある。他にも異世界のことを軽く言ってある
―そこまで話してもいいのですか？
―どうせ、これからもこういうことがあるんだ。一人でも知っている人物が多い方がいい。その方がやりやすいからな
―・・・まるで悪役ですね

彼の言っていることは簡単に言えば利用できるものは利用する。み

たいな感じだ。

―悪役なんて色んな立場からみれば悪役にも正義にもなる。管理局（俺ら）は周りから正義だと思われていても敵から見れば俺たちこそが悪だと言う者もいる。所詮人間とか世界とかそういうもんさ。

本当に悪役というかボスみたいなセリフだった。

―ところでなのは

―なにレイくん？

―友達には連絡したのか？色々あったから

―うん、さっきメール送っておいたから大丈夫

―そうか

まぁあの二人はなんだかんだでなのは親友だからな

高町家ｓｉｄｅＥｎｄ

アリサｓｉｄｅ

「送信っと」

先ほどなのはから届いたメールを読みたった今返信をした。

―本当心配かけさせるんだから。あいつは目的のためなら無茶をしちゃう子だから・・・・

それが親友としてアリサがなのはをいつもみて気付いたことだった。

何かあると私たち心配かけないようにいつも気を配っている。

けど、今回はいい方なのかもしれない。少し喧嘩とかしてしまった

がこうしてまたメールのやり取りをしているのだから。

「・・・！止めて！」

アリサはいきなり運転している執事に命令をした。
理由はあるものが目に入ったからだ。
車を降りそこへ向かうと傷ついた大型犬が倒れている。口から血を吐き息も荒い。
アリサは執事に命令しその犬を保護した。

その大型犬は額に宝石をつけている不思議な犬だった。

アリサｓｉｄｅＥｎｄ

レイｓｉｄｅ

翌日久しぶりに学校に登校したなのは。
二人に色々と心配をかけたがいたって普通な感じだった。
放課後アリサに呼ばれ彼女の家にいくことになった。そこで保護したと言っていた犬は聞いた通りで、なのはとレイがよく知っている犬であった。

―やっぱりアルフさん
―・・・あんたかい
―どうしたのその怪我？それにフェイトちゃんは・・・

なのはもだいたいのことわかってきているので使い魔である彼女が主のもとを離れることがないということに

―・・・・

アルフは檻の奥を向き少し元気というか気力をなくしていた。
三人はとりあえずそっとしておくことにして、彼女の話をレイが聞くということになった。
―・・・・
レイはアルフという訳ではないが昨日ここ海鳴に微弱な魔力反応を察知していた。
何も言わなかったのはフェイトがこんな行動をとるわけがないと知っているレイは第3者の可能性を予想していた。
―久しぶりだな、アルフ
―・・・あたいはあんたのことなんか知らない
―まぁこんな身体じゃあな。俺だよ、レイだ。
―レイ・・・・?・・・・・・まさか!
アルフには心当たりがあった。まだ自分も小さかったころ、フェイトによって生み出されて間もない頃アルフは彼に会っていた。
―本当にあのレイなのかい?
―ああ
―じゃあなんで・・・
―?
感動とは裏腹に彼女の声は怒り震えていた。
―なんであたいたちの敵なんだよ!
―これは偶然だった。俺も最初はお前たちとは知らなかったんだ。

ただ、お前らの名前を聞いたときから薄々わかってはいた。お前らかみれば敵だろうが俺はお前たちを敵と思ったことはない。むしろ会った時素直に嬉しかった。成長したお前らをみれて嬉しかったかった。

―あんた・・・

―その傷、プレシアが？

―・・・・（コクリ）

アルフは静かに頷いた。

レイはだいたいの事情を察していた。

―けど、いいのかい？管理局にもこの会話聞かれてるんじゃ

―大丈夫だ。今管理局との会話（コンタクト）は切ってある。

同じころアースラのモニターでは「どうせ時報女です。ただいまこの映像は封鎖されています。もう少し待ってからもう一度接続してください」と表示されていた。

―・・・あんた相変わらず凄いね

普通そんな常識はずれのことができるはずがないのに彼ならばやってしまうと彼と一緒にいた時間でそのことを体得した。

知っている限りではいいもん見せてやるよって言って龍を召喚したりなんの動作もなく転移したり次元内を生身で跳んだりｅｔｃなどなど。

―さて、俺はプレシアのやることはだいたいわかるんだが・・・フェイトは今どうしている？

なんか今とても重要なこと言わなかったかい？

―フェイトは・・・その
―まぁ、また利用されるだろうな。あいつはフェイトをそういう風にしか見てないからな
―なんで母親であるあいつが実の娘をあんなにまで酷いことできるんだよ！

レイはアルフの言うことをすべて理解していた。
だが、あえて何も言わなかった。

―とりあえず今までの経緯を話せ。クロノ？

『やっと通じた。そう―レイさん！』

―まぁまぁ、あとはお前に任せる。アルフ、素直に話せばこちらもそれなりの処置をとることができる・・・（それと重要なこと喋るなよ？特に俺との関係は）
―（どうして？）
―（こっちにも色々と準備ってもんがある）
―（わかったよ）

素でなぜなにやりたいって言えるかバァロー

その後のアルフの告発により今後の活動が決まった。
アースラはプレシア・テスタロッサ捕縛することを決定。アースラに攻撃した時点でそれはもう確定しむしろお釣りがでるくらいだ。
プレシア・テスタロッサの逮捕兼ジュエルシードの確保および封印。
これで管理局（こちら）の行動は決まった。
問題はなのはだな。まぁ聞いても無駄だろうが。

―で、なのはお。前はどうする？
―・・・私はフェイトちゃんを助けたい！あの子の悲しさ、寂しさは私も少しわかるから。
それに友達になりたいって返事まだ聞いてないから
―そうか、ならフェイトのことは君に一任しよう。

―なのは、だったね。頼めた義理じゃないけどフェイトのこと助けてあげて

自分では主を助けてあげられない。
本当は自分の手で助けたい。けど、彼女なら、あの子の心開かせたあの子なら頼める。

―うん、大丈夫任せて！

その後レイはアルフとまだ会話していた。

―なら、お膳だては俺が用意しよう
―どうやって
―簡単だ。あっちの目的はジュエルシードだ。それと引き換えにフェイトをおびき出す。
―それって
―そう、なのはに戦ってもらう。これが唯一フェイトを救う方法だ。
俺が言ったってプレシアの母の思いが方が今は強いからな
―うん

そう、あの子を開放するには戦って保護するしかない。
ただ、これは賭けだった。
悪くすればいや、最悪の事態になったらあいつのフェイトの心は―

壊れる

―ところであいつはまだペンダントを持っているのか？
―ペンダント？ああ、あれかい。いつも離さず身につけているよ
―そうか

最悪の事態。それを救うのはなのはの言葉とこれなのかもしれない

レイｓｉｄｅＥｎ

フェイトｓｉｄｅ

フェイトは戦う準備をしていた。
先ほどジュエルシードを賭けての勝負が申し込まれたからだ。
相手はきっとあの子だということはフェイトもわかっていた。
友達になりたいって言ってくれたあの子。私はどうすればいいか未だに迷っているのかもしれない。けど、母さんが待ってる。これが終わればきっと母さんは笑ってくれる。
そしたらまたあの日々が待ってるんだ

「だから、私を守って兄さん」

身につけているペンダントをバルディッシュにしまう。
これはとても大事物だからしまっておく。
傷つけたり壊したりしたら約束を守れないから

「行こう、バルディッシュ」
『イエッサー』

フェイトｓａｉｄｅＥｎｄ

？？？？ｓｉｄｅ

そこは海鳴臨海公園から少し離れた茂みの中。
そこには黒衣を纏った謎の集団がいた。

「アレが例の計画の失敗作か」
「失敗作にしては十分な魔力を持っている」
「それもあるが、失敗作とはいえ計画で生み出されたものだ。十分な材料だ」
「そうだな。それにあの白い奴もなかなかの魔力を持っている」
「奴も捕えるか？」
「ああ、アレも良い材料になるだろう。それにしてもあの情報は確かなのか？」
「間違いない。この周辺同じ魔力波感知した。間違いなく奴はこの近くいる」
「あの裏切り者に死を！」
『死を！』

？？？ｓｉｄｅＥｎｄ

レイｓｉｄｅ
海鳴臨海公園

今まさに始まろうとしていた。
なのはとフェイトの戦いが。
ジュエルシードをかけた戦いが。
互いに大事な物を賭けた戦いが。

しかし、レイは妙な臭いを感じだ。
まるでドブネズミのような臭い。裏の世界の住人のような人間ではない悪質な臭いを

―あいつらめ、とうとう嗅ぎつけたな。まぁいつものことだ。セコイ手を使ってくるに違いないな。とりあえず様子見、もしあいつらに手を出したら・・・排除するまでだ

レイｓｉｄｅＥｎｄ

そして今二人の戦いが始まろうとしている

第１１話　決戦前（後書き）

いよいよなのはとフェイトの対決です。
そして、新たなる勢力の登場です。これはオリジナルということになります。
次亜戦闘描写か・・・書けるかな・・・？
感想またはアンケートに答えてくれると幸いです

第１２話　黄金の夜明け団（前書き）

急増でかいたため誤字脱字があるかもしれません

戦闘描写をもっとうまくかけるようになりたい

第１２話　黄金の夜明け団

フェイトｓｉｄｅ

母さん、私の母さん
いつも優しかった私の母さん
私の名前を優しく呼んでくれた母さん

「ねぇ、とても綺麗ねアリシア」

母さんは私に花冠をつくってくれた
けど、私はフェイトだよ？
アリシアじゃないよ？

「さぁいらっしゃいアリシア」
「うん」

母の下へ近寄り花冠をつけもらった。

「ほら、可愛いわ。アリシア」
「本当だな。中々似合ってるじゃないか。アリシア」

兄さんまで
私はアリシアじゃなくてフェイトだよ？

けど、幸せだからいいのかな

フェイトの中で変革が始まろうとしていた

フェイトｓｉｄｅＥｎｄ

アースラｓｉｄｅ

「あー戦闘開始みたいだね」

「ああ・・」

管制室で二人の戦闘をみているクロノとエイミィ。

クロノは彼女の寝癖が気になって仕方がない

「にしても総帥もよくこんなことを考えるよね」

「まぁ、あの人のことだから色々と考えてはあるんだろうけど」

彼はどこから出したのかワックスのスプレーを取り出し振っている

「言い方は悪いけどなのはちゃんが時間を稼いでるうちにあの子の帰還先追跡の準備をしておく」

「頼りに知るんだからね。逃がさないでくれよ」

スプレーかけブラシで優しく溶かしている。

なんでこんなことこいつしてんだ？

「おう、まかせておけ！」

ぴょん

寝癖復活

そうそう甘い空気にさせると大間違いだぜ！（寝癖）

「でも、あの子となのはちゃんに伝えなくていいの？プレシア・テスタロッサの家族とあの事故のこと」

本局に問い合わせそのデータが送られてきた。
それは信じがたい真実だった。

「買ってくれることにこしたことはないんだ。今はなのはを迷わせたくない」
「・・・総帥はこのこと知ってるのかな？」
「どうだろうね。多分そうなんだと思う」
「だよね、あの人よくわからないから・・・よし完成！」
「それ総帥に頼まれた魔術プログラム？」
「うん、やっと終わったよ」

さて、いつ渡せばいいんだろう？
帰って来てからでいいかな

アースラｓｉｄｅＥｎｄ

話は戻り海鳴臨海公園上空

空ではなのはとフェイトの激しい攻防が繰り広げられていた。

『フォトンランサー』
「！」
『ディバインシューター』

互いに出現する魔力の弾

「ファイヤ！」
「シュートォ！」

互いに発射されなのはそれを接近しながら避けるがフェイトは避けきれずシールドを張って防いだ。それにより隙ができてしまいなのはの追撃を許す。

「シュートォ！
「！」
『サイスフォーム』

鎌形態に移行しそのまま狙ってるシューターを斬っていく。
そのままなのはに斬りかかる

「はぁーーー！
「ん！」

今度はなのはがシールドを展開しそれを防ぐ

「ん・・・」

なのは目を閉じ一つ生き残っているシューターを操作しフェイトの後方へと向けた。

「ち！」

それに気付きとっさにシールドを張る

「・・！」

振り返れば彼女の姿はいない。

「上！？」

「てぇえええええええい！」

真上から一気に迫ってくるなのは。

避けきれないと判断しバルディッシュでそれを防ぐ

ドーン！

小規模な爆発が起きあたりは光に包まれる

『サイススラッシュ』

「！」

ぎりぎりの所でそれをかわすが胸のリボンが斬れてしまう。

だが、今は間合いを取らなければならない。

なのはは砲撃型、逆にフェイトは接近型踏み込まれたらアウトだ。

しかし、目の前には設置型のフォトンランサーがあった

『ファイア』

バルディッシュの掛け声とともにそれはなのはを襲いシールドで防ぐ。

なのはを狙ったフォトンランサーは海に落ちた

「はぁはぁはぁ」

「はぁはぁはぁ」

初めて会った時はただの魔力が多いだけの素人だったのに今は違う。
早くて強い！
迷ってたらやられる！

フェイトは魔法陣を展開した。
するとなのはの周りにいくつもの魔法陣が出たり消えたりしている。

―なるほど、仕掛けるか

地上から見ていたレイはフェイトが本気をだしたことに気付いた。

「ん！」

なのはは何かをされる前に攻撃しようとしたがフェイトのライトニングバインドによる手足を封じられてしまう。

―なのはフェイトは本気だよ！

一番近くにいるアルフがいうのだから本当なのだろうとなのははわかっている
しかし、こんな危機的状況でなのはが言った言葉は

―・・・二人とも手を出しちゃだめだよ？これは私とフェイトちゃんの真剣勝負だから！
―でも、フェイトのそれは本当にヤバいんだよ！

「平気！」

なのはには自信があった。確信とも言ってもいい。
そして、フェイトは詠唱を終えた

「フォトンランサーファランクスシフト！」

３０はあるフォトンランサーがばちばちと散らす

「撃ち砕け、ファイア！」
「・っ！」

フェイトの渾身の一撃がなのはに襲いかかる
そして、すでに見えない

「く・・・ん！」

しかし、フェイトにも相当な負担がかかっている。だが、攻撃をやめるわけにはいかない
ほとんど撃ち尽くし残ったフォトンランサーを集束する

「はぁはぁはぁ」

これだけかなりの体力を消耗した。
魔導師や魔術師にも共通すること。強力な技を使えばそれだけ魔力消費や体力も消耗するということだ。

爆風が晴れるとそこにはまだなのはがいた

「は～攻撃をやめるとディバインドってとけるんだね。今度はこっちの番！」

意外と落ち着いていた

『ディバインバスター』

「はーー！」

集めた魔力を投げるがディバインバスターに飲み込まれそのまま自分の下へやってくる。

シールドは張って防ぐがそれは容易ではなかった。

―直撃・・・けど、堪えてみせる。あの子だって堪えたんだからそれはきっと対抗心なのかもしれない

「ううっ・・ああああ」

グローブが、マントが千切れてゆく。

「はぁはぁ」

―堪えた

「フェイト・・・」

「だが、なのはの勝ちだ」

「・・・！？」

すると光が放たれている。

上を見上げればまだ平然としているあの子がいる

「受けてみて、ディバインバスターのバリエーション」

『スターライトブレイカー―』

辺りに散らばった微弱な魔力粒子が集束されていく

「させなー！バインド！？」

先ほどの展開と逆の立場になった。

「これが私の全力全開！スターライト・・・ブレイカァ――――！」

『なんつー馬鹿魔力』

『フェイトちゃん生きてるかな？』

とアースラ陣

「あいついつのまにそんな技を・・・ははっこりゃあいい。流石だよなのは」

「あの子本当に子供かい？」

と動物陣

「はぁはぁはぁ」

だが、それはなのはに相当な負荷がかかっていた。

「はぁはぁ・・フェイトちゃん！？」

なのはの一撃をくらいそのまま海におちるフェイト。なのはもまた海に飛び込みフェイトを抱きかかへ空にあがる

「んん・・あ」
「あっ気がついたフェイトちゃん？」
「ごめんね、大丈夫？」
「・・うん」
「・・・私の勝ちだよね」

するとバルディッシュに納められていたジュエルシードを開放した。

「飛べる？」
「うん」
『よし、なのはジュエルシードを確保それから『くるよ！』な！？』

その瞬間空が渦をまきそこから雷が降り注ぎフェイトに襲いかかる。

「あああああ！」

その隙にジュエルシードはどこかへ消えてしまった。

『ビンゴ！』

エイミィは追跡を開始した。彼女でなくてもなにかがそこにいくことがあれば追跡はできる。

『よし、捕まえた！』
『では、武装局員はただちに出動。任務はプレシア・テスタロッサの確保です！』
『はっ！』

「ぐふっ・・・次元魔法はもう駄目だわ。それにここの場所もみつ

けられた。もう、あの子も潮時ね」

庭園から彼女達の戦闘をみていたがもう駄目だとさとったのだろう。

場所は戻りなのはｓｉｄｅ

「フェイトちゃん大丈夫！？」

「う、うん」

傷ついたフェイトを支えるなのは。

『マスター！』

「えっ！

すると目の前には謎の黒衣をまとった者がいた。

いや、目の前だけではない。彼女たちを中心に１２人のそれによって囲まれた。

『それを渡して貰おうか？』

「いったいなんなんですか！」

『答える義理はない。どのみち貴様も連れて行く我ら黄金の夜明け団の下に』

「ほー誰に断って二人を連れて行くつもりだ？」

「―！？」

それは声のあった後ろを振り向いたしかし、そこには誰もいない

「やっぱりお前たちだったか。まぁ戦闘の最中手を出さなかっただけましか」

「レイくん！」

『貴様！』
「・・・・？」

なのはと黒衣の集団は彼を知りフェイトはそれが誰だかわからなかった。

「こいつらの相手は俺がしよう。なのは、フェイトとアルフを連れてアースラに戻れ」
「で、でもレイくん一人じゃ・・」
「いいから、任せておけって、アースラ、エイミィ聞こえたな！？」
『了解！転移開始』

そして、地上にいたアルフなのは、フェイトはアースラに転移された。それと転移される間際一瞬彼が振り向きそれをみたフェイトは呟いた

「兄さん？」

その声は聞こえたどうかわからない。けど、今は

「さて、お前のたちの相手は俺だ」
『やはり、ここにいたのかこの裏切り者め！』
「裏切り者？俺はお前たちの仲間になったつもりはない。ただ、俺はお前たちがもつ技術（魔術）と情報が欲しかっただけさ」
『戯言を！我らが導師の言葉を賜った者が！だが、貴様を殺しその首を持って帰る！』
「ふん、できるならな。エイミィ？」
『はい、なんでしょうか？』

両方をモニターしているエイミィにとって今の状況はついていけな

かった。

「プログラムは完成したか？」
『はい、でもどこに転送すれば・・』
「コード×××急げ」
『了解・・・転送』

しかし、それっきりアースラとの通信は繋がらなくなった。

『データ受信完了。プログラム展開。修復開始』

誰の声かはわからない。
だが、その声は確かにデバイスの声だった。

『させると思って―！！』

いきなり彼を中心とした辺りが光に包まれた。
しかし、それは一瞬の出来事にすぎなかった。

『修復完了。すべてオールグリーン』
「ふー久しぶりの元の身体だな」

今の彼の姿は今までの子供の姿ではなく大人の姿。
身長は１８０はあるだろうか？
いつものようにコートを纏っている。

『・・・貴様いったい何をした？』
「何って俺にかけられていた呪いを解いただけだ。さて、おしゃべりはここまでだ」

ドン！
彼が握っているのはＭ９２Ｆベレッタだった。
『ぐ・・・』
一人の黒衣に一発の銃弾が当たった。しかし、倒れることはない。
『忘れたのか？我々はそんなものでは『ぎゃーーー』？』
「そんことはわかっている。ただ、この銃弾には刻印（スペル）が刻まれている。貴様ら“死人”には相当効果があるな―つまり成仏ってやつだ」
蒼い炎をに焼かれ苦しむ死人と呼ばれるそれはフードが燃えそこえから骸骨があらわになった。
『なっ貴様―！』
「だから、お喋りが過ぎるんだよ」
彼はいつのまにかそのよく喋る死人を浄化した。
「浄化（ピュウリファイ）」
『あああああああああああああ』
後ろを向き右手を構える
「失せろ、聖なる光（ホ―リ・シャイン）」
浄化を単体技とするなら聖なる光は広範囲による技だ。
『あああああああああああああ

あああああああああああああああああ』

その技の本質は悪しき魂を成仏させる技。
彼らのような死人に一番有効な技。やつらが嫌う光と同じように。
そして、１２人いた死人は浄化された。

「さて、この様子だと庭園にあるあの子も奪うつもりだ。さすがにそれをされると俺の計画が狂っちまうんでね。今回も邪魔をさせてもらうぞ。アレイスター・クロウリー様ってな。転移場所アースラ・・・我を彼の地（インバイト・アース）へ誘いたまえ」

そして、ここには誰もいない。
舞台は時の庭園へと移る・・・

Ｅｎｄ

第１２話　黄金の夜明け団（後書き）

やったよとうとうお前の出番がきたぜ

レイ「ああ、やっと元の体に戻れた」

次回はフェイトの真実とか書く予定だけど一応オリキャラ紹介すると思う

「今さらだな」

し、しかたないんだよ。お前の出番なかなかこないから

「まぁ、いい。次回も俺の出番が多いしな」

そうだけど・・・

さて、今回も読んでくれましてありがとうございます。
次回はオリキャラ紹介をはさんで本編にうつりたいと思います。
ではまた！

オリキャラ紹介（前書き）

なんていうか第三者がデータをみる感じでかいてみました。
ちょっと変かもしれませんのでご注意を
それと前に紹介すると言っておきながら今になって誠に申し訳ございませんでした

オリキャラ紹介

時空管理局局員一般公開データ
コード？―

レイル・アンヴァルト・Ｙ・神乃

所属　時空管理局総帥

性別　男

出身世界　地球のどこか（本人自身把握できていないとのこと）

外見　長身　推定１８０　黒い髪で肩から下まで伸びている
ほとんど黒い足首まであるコートを着用。そこから様々な武器や道具はたまた日用品まで出てくる

性格　私用と仕事をわけるタイプである

魔導師ランク　不明　（本人曰く計ったことがないとのこと）
魔法光　不明というより目撃証言によれば色んな色をしていたとか

デバイス　所持はしているが実際それを確認したものはいない

その他武器や戦闘に関して
あらゆる武器や体術、戦闘術をこなす完璧超人。
材料があれば核をつくれるとかないとか

備考
管理局を設立した４人のうちの一人。ミッド側でいうなら旧暦時代にはすでに存在が確認されている。地我々の世界では英雄とされ魔導師を目指す者たちの憧れでもある。また、多くの雑誌やそういった分野でも人気があり多くの者からの支持や信頼を得ている。
魔導師ではなく魔術師でありミッドの魔法とは異なるものを使う。
そのことに関しては管理局技術部でも把握はできていない。我々が保管する古代遺産（ロストロギア）のほとんどは彼が集めたものである。
また、放浪癖がありほとんどの場合管理局には在住していない。
現在高町なのはが所有するレイジングハートの元持ち主兼レイジングハートを開発した人物であり現マスターである高町なのはの命令より彼を優先することもあると判明。
※尚これはすべてリンディ・ハラオウン提督、彼がもっとも信頼の厚い人物から情報ではあるが正確な情報ではない可能性あり。

警告
これ以上の閲覧は極秘事項に価するため一般局員では閲覧不可。
閲覧するには本人による閲覧許可が必要。

黄金の夜明け団
※情報が少ないため記録されている限りの情報を提示します。
黄金の夜明け団とはあらゆる次元世界に出没している謎の魔術集団と噂されており非人道的なことや今では禁止されている人体実験な

どなど行われているらしい。
また、多くのテロリストたちが所属する組織は最終的にはこの黄金の夜明け団の可能性が高いと調査で確認されている。

アレイスター・クロウリー
あなたのアクセス権限では閲覧できません

作者から一言
レイの魔術に関してですが彼の魔法は言葉です。言霊といいかえてもいいかもしれません。
ただし、近くにそれを媒介するものがなければならないのですがレイはそれを自らの力で補っているため媒介にするものがなくても力を使うことができます。
例　水の槍　媒介に水を必要とするが水がない砂漠などでも使用可能というわけですね。もちろん媒介にできるものがあれば威力は増します。

黄金の夜明け団ですがぶっちゃけ敵です
アレイスター・クロウリーは実際にいる人物からとりました。まぁ親玉ですね。

オリキャラ紹介（後書き）

どうでしたか？
とりあえずレイの今教えられる可能な限りのことを書きました。
あとオリジナルのものを少々。
さて、次回なのですが原作でいう１１話後半から１２話をかく予定でいます
次回タイトルは「母と娘」（仮）ですがたぶんこれになる思われます
では次回でまたお会いしましょう！

第１３話　母と娘　前篇（前書き）

いよいよ最終局面前篇です
ちょっと急展開かもしれません

第１３話　母と娘　前篇

アースラのモニターに映し出されている時の庭園。
入り口付近には先ほど転送された局員たちが存在している。
ある局員が思った。

―まさにラスボスって感じだな。ここもなんかそういうダンジョンみたいだ

その者が思うことはもっともだろう。
時の庭園なんて名ばかりだと思った。
そんな彼らの状況を中継しているなかフェイトとアルフをつれてなのはが戻ってきた。

「ごくろうさま、なのはさん」
「はい、そのレイくんは？」

―レイ・・・？

「どうも妨害されてるようで映像が来ないのよ。けど、大丈夫。あの人なら平気よ。―それからフェイトさん、初めまして」

リンディは彼女のに軽くあいさつをするが返事は返ってこない。
現在彼女は拘束されているのだ。いや、もっと根本的なのが別にある。

―母親が逮捕されるのは忍びないわ。なのはさん、彼女をどこか別の部屋に

それが今リンディがしてやれる唯一のことだろう。

―あっはい

「フェイトちゃん、よかったら私の部屋ーあ」

『総員玉座の間に侵入。目標（ターゲット）発見！』

タイミングが悪いそう思った

時の庭園　玉座の間

「プレシア・テスタロッサ。時空管理法違反時空管理局管制への攻撃容疑であなたを逮捕します」

「速やかに武装を解除せよ！」

「・・・・」

プレシアは今自分が不利な状況だとは思ってもいなかった。

局員は彼女を包囲しつつある部屋を見つけた。

「こ、これは・・」

あたり一面培養ポットだらけ。ほとんどが木の根らしきものに絡まれている。

その映像はアースラにも届いていた

「えっ！？」

最初に声をあげたのはなのはだった。

映像にある中央の奥の一つにある少女が納められているからだ。
その少女はフェイトそくっりだった。

「あ・・・は・・・？」

一番混乱していたのはフェイト本人だった。

「ぐわっ！」
「私のアリシアに近寄らないで！」

―あ、ありしあ？

あの時の夢と同じ名前

「う、撃て！」

数人の局員たちの攻撃をいとも簡単にプレシアは防いだ。

「うるさいわ」

彼女が腕を構えると前面に渦が現れる

「危ない！防いで！」

とっさにリンディが叫ぶが彼らでは不可能だろう

『あああああああああ！！！』

悪しき雷がその場にいた全員に落ちる。

普通の局員がいくら束になろうと大魔導師と呼ばれた彼女に対抗すること自体不可能なのだ。

「いけない！急いで局員たちの収容を！」

「りょ、了解！」

エイミィが慌てて行動にはいる。

あんな攻撃をもう一回くらってみろ。それこそ死が彼らを向かい入れる

彼女はアリシアが納められているポットに手を触れまれで懺悔しているかのようにいった。

「もう駄目ね。たった9個のロストロギアではアルハザードに辿りつけるかわからないけど・・でも、もういいわ。終わりにする。この子を亡くしてからの暗鬱な時間をこの子の代わりの人形を娘扱いするのも」

「―っ？」

「聞いていてフェイト。あなたのことよ？せっかくアリシアの記憶をあげたのにそっくりなのは見た目だけ。役立たずでちっとも使えない私のお人形」

「―最初の事故の時にね？プレシアは実の娘。アリシア・テスタロッサを失くしているの」

真実を知っていたエイミィから告げられた言葉。

エイミィにとってそれを口にするにはどれだけの覚悟がいっただろうか？

「彼女が最後に行っていた研究は使い魔とは異なる、人造生命の生成・死者蘇生の秘術。フェイトと言う名前はその時につけられて開発コードなの」

「よく調べたわね。そうよ、その通り」

さらに真実を本当のことを彼女自身から告げられる

「だけど駄目ね。ちっとも上手くいかなかった。作り物は所詮作り物。失ったものは取り戻せない。アリシアはもっと優しくして笑ってくれた。アリシアはときどき我がままもいったけど私の言うことをちゃんと聞いてくれた」

「やめて」

なのは止めようとする。
それ以上言わないでと

「アリシアはいつもでも優しくしてくれた」

自分の本当の娘をなでる。しかし、それはポット。それがなければ何回でも撫でていた。

「フェイト、やっぱりあなたはアリシアの偽物よ。せっかくあげたアリシアの記憶もあなたじゃ駄目だった」

「やめて、やめてよ！」

お願いだからそれ以上言わないで。
どうして、そんなことが言えるの？

作り物だから？
実の娘になれなかったから？

「アリシアを蘇えさせるまでの間に私が慰めだけに使うお人形」

その慰めとは彼女に対する調教だろう

「だから、あなたはもういらないわ・・・どこへなりと消えなさい！」
「・・・・・」
「お願いもうやめて！」

だが、小さな少女の声は彼女には届かない。

「ははっははははあはは」

突如彼女は笑いだした。

あの優しかった母さんの記憶は私の記憶じゃない
あの辛く厳しくしたのはただの慰め
私を虐めることで埋まる欲求
そうすべては私じゃない彼女（アリシア）のため

「う・・・うう」

フェイトの目から涙がこぼれ落ちそうだった。

「ふふっ、いいことを教えてあげるわフェイト・・。あなたを作りだしてからずっとね私はあなたが―大嫌いだったのよ！」
「は―！」

パリーン！

握っていた待機形態のバルディッシュが彼女の手から落ち砕けた。
それと同時に彼女の心、精神は―

壊れた

「フェイトちゃん！」

真実を告げられさらには心が壊されたフェイトは倒れた
だが倒れることなく一人の男に支えられた

「レイ、くん？」

どうやって現れたのだろうか
彼は膝をつき彼女を支えそっと立ち上がる

「本当にそう思っているのか？プレシア―」

その声には怒りが込められていた

「・・・本当、あなたは何も変わらないのね。あなたはあの日から私を拒絶した。いいえ、アリシアを拒絶した！」
「あの時言ったはずだ。死んだ人間は生き返らない。どんな方法でも同じ物が生まれることはない、と」
「嘘、あなたはその方法を知っていた！けど、今はそんなことどうでもいい。私はこれからアリシアと一緒に失くした時間を取り戻す

のよ！」

「ちょ、ちょっと見てください！」

モニターに映しだれる各中継地点から映像。
地面から鎧が現れた。
それは３０、８０、１００とどんどん増えて行く。
そうれはまるで王を守る騎士たちのようだった。

「プレシア・テスタロッサ、いったい何をするつもり！？」

時の庭園全体で地響きが起こり始めた。
彼女がいる場所も天井が少しずつくずれ落ちてゆく

アリシアが納められているポットとともに玉座の間に移動する。

「私たちの旅を邪魔されてたくないのよ―」

彼女の目の前に９個のジュエルシートが円を描き現れる

「私たちは旅立つの―忘れられた都、アルハザードへ！」

「・・・・」

「この力で旅立って取り戻すのよ―すべてを！」

それはアリシアのとの時間
あの子の笑顔
アリシアと私の失くしたものすべてを取り戻す旅

「次元震です！中規模以上！」
「シールド防御。ディストーション・シールドを！」
「ジュエルシード9個発動！次元震さらに強くなります！」
「現状を維持したまま転送可能なエリアまで移動を！」
「了解！」
「このままいけば次元断層が！」

リンディとその部下たちの会話をただ聞いているレイ。

「あんなとこ往ったって何も戻らないんだよ―プレシア」

アルハザード
それは忘れられた都と今は呼ばれている。
そこには失われた魔法。さらには彼女のいう死者蘇生などといった
秘術まで眠る場所

「どんな魔法を使ったって過去を取り戻すことができるものか！」

クロノは叫ぶ。
そんな魔法があるなら実在しているなら自分だって使いたいさ。
失った者を―
失った時間を―
大切な人を―

「はーはははあふふはははははっ！」

「なのは、フェイトを頼む」
「レイくん？」
「大丈夫だ、心配するな」

彼はなのはの頭に手を置き軽く撫でた
その時なのはは初めて彼の笑顔をみた。今までみたことない彼の笑顔には逆らうことはできなかった。

「フェイト、こんな再会になっちまったが約束―果たせたな」

彼は身につけていたペンダントを外し彼女につけてあげた。
そして、なのはと同じように彼女の頭を撫でた。

「・・・プレシア。忘れてしまったあの子との約束を思い出せてやる」
「レイくん！」

彼女の声は届かず彼は転移した。
モニターを見れば入り口付近に彼はすでいた。

レイｓｉｄｅ

「邪魔をするな」

圧倒的な戦力の差を気にせず敵を蹴散らす彼。
一発の魔力砲撃はなのはのディバインバスターと同等だった。
彼は内部に侵入するがそこで目にしたのはあの黒衣たちによって倒されていた鎧たちがあった。

「こんな時に・・・」

黒衣いや死人は前回より数倍をいた。

『貴様に邪魔はさせん』

「てめぇらの目的はわかってんだよ・・・・・ＺＥＲＯ、モード二丁拳銃（ケルベロス）」

『了解　モードケルベロス』

彼の両手に現れた二丁の銃（わかる方はガングレイブのグレイブが持つ銃を想像してください）

『ふん―・・・・我らを、我らが身体・魂を捧げ汝をここに召喚する！』

幾人かの死人が前面に現れた六芒星によって生贄に捧げられ、そこから巨大な魔法陣が現れた

『おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！』

それが死人の声だったのか誰の声だったかはわからない

そして、魔法陣から巨大な腕が現れる

「悪魔召喚か・・・そんなもので俺を防げると思ったら大間違いだ。だから、邪魔を―するな―！」

『だが、邪魔をさせてもらう』

魔術師同士の戦いが再び始まった。

レイｓｉｄｅＥｎｄ

そして、金色の魔法使いは心を壊されもう何もできなくなってしまった

対して白の魔魔法使いは戦うこと決意する。それが彼女の母親であっても

第１３話　母と娘　前篇（後書き）

えーまず彼のデバイス登場

簡単にいえば無という意味を込めてそうつけました。

ＺＥＲＯ　零　０

能力

モードケルベロス

イメージは上記にもあったとおりグレイブ二丁拳銃でケルベロスからとりました。

威力は中　ただし普通の実弾での状態　弾を魔法弾に変えれば威力はあがる。魔法弾の属性によって威力や能力もかわる

基本的弾は無限です（倉庫と呼ばれる場所から供給している）　しかしカートリッジを交換することも可能

他にもいくつか変形機構を備えています

これもなぜなになのはで紹介する予定です。でも、あと後篇とあと一話あとになりそうですが・・・すみません

では次回にまた！

第１４話　母と娘　後篇（前書き）

すこし自分でも把握できていない漢字を使ったのであってるかわかりません。もし違っていたら教えてくれるとありだたいです。

第１４話　母と娘　後篇

時の庭園内部

ドドドドド！！！！！

現在庭園内部では魔術師同士の戦闘が繰り広げられていた。
ケルベロスで応戦するレイ。死人相手なら簡単だ。
弾は無限。こちらが負けるわけがない。
しかし、敵は―悪魔だった

『どうした？その程度かアンヴァルト？』

悪魔が俺に言う。
背中に天使の羽を持っているが色は白ではなく黒。
天使の象徴であった羽が悪魔色に染まったその姿。
奴の名はサタン、別名ルシファー。
堕天使と呼ばれた悪魔の一体。
身体大きいため魔法陣から上は上半身だけしか現れていない

「よりにもよってルシファーなんか呼びやがって、よ！」

ガーンッ！

繰り出される巨大な手をかいくぐる。

『黒槍』
「ちっ」

ドン！

死人から放たれた槍を撃ち落とすが弾かれ避けることしかできなかった。

「！！！」

槍を回避しようと飛ぼうとしたレイだがルシファーの腕により壁に叩きつけられる

「ぐほっ！！」

普通の人間なら即死だろう。それでも彼の身体はミンチにならずただ口から血を吐いているだけだ。

『俺も完全ではないがお前もそのようだな？』

「る、・・・せい。ぐほっ」

『にしても何百年ぶりだ？お前とこうして戦うのは？』

「かぞえて・・・るわけないだろうーふんっ！！」

体内の魔力を放出して腕から解放される。

「はぁはぁはぁ。こちら側ではお前らに死はないのがホント残念だよ・・」

ルシファー、悪魔や龍といった召喚魔法によって現れたものは召喚された世界で死ぬことはない。ただ、倒しても元の世界に還るだけだ。

『貴様だってそうだろうに』

「・・・」

レイにとってこの状況は最悪だった。
なにより時間がないのだ。

『さぁルシファーよ。我らが魂を捧げたのだ。奴を殺せ!!』
『殺せ、殺せ、殺せ!!』

殺せコールが部屋に響き渡る

『黙れ亡者どもが!』

突如ルシファーは叫び魔法陣とは異なる円が現れそこから放たれたビームが死人どもをなぎ払う

『ぎゃあああああ!!』
『何をする!?』
『俺の楽しみを邪魔をするな!誰が貴様らなんぞのために戦わなければらんのだ!』
『そんなこと知ったことでは―』

ゴンッ!

ルシファーの拳がその死人を殴り潰した

「・・・そんなことしたら、ここに長くはとどまれないぞ?」

召喚されたものは召喚師の魔力でその場に留まることができる。その供給源をなくせばあとは自らの魔力で存在し続けなければならない

『ふん、その間まで俺はお前と戦えればそれでいい』
「時間がないってのに・・・仕方ない。付き合ってやる。ＺＥＲＯ『宝物庫』にアクセス、デュランダルを」
ケルベロスを解除してＺＥＲＯが一旦元の姿―レイジングハート同じ形に戻る。色は漆黒の黒。
『了解。宝物庫にアクセス。デュランダル解凍』
ＺＥＲＯの返答とともに地面から現れる剣
デュランダル。それは聖剣と呼ばれた伝説の剣だった。
過去の書物では馬上では片手剣、地上では両手剣だったと記録されている。
黄金の柄に納められているデュランダルを抜き構える。
「悪魔退治といくか」
『聖剣か。だが、そんなもので俺を倒せるか―！？』
「黙ってろ！」
レイｓｉｄｅＥｎｄ
アルフｓｉｄｅ
一方なのは達は放心状態となったフェイトを医務室へ運びなのははクロノと共に現地へ向かった。
状況が状況なだけに提督であるリンディ自らも出撃する。
アルフはフェイトの傍についていた。
ピーピ

さっきから電子機械の音が鳴り響く

フェイト・・・・

アルフもあの真実は初めてしった。

けど、今まであの女がフェイトにしてきたことはそれで納得してしまった。

自分の娘じゃないからあんなことをした?あんまりだ!

「・・・あっ」

ふと先ほど彼が付けたペンダントに目が入った。

「せっかく約束が守れたんだ、バルディッシュ辛いかもしれないけど出せるかい?」

『い、イエッサー―・・・』

黄色い光の球に包まれアルフの手に渡されたペンダント。

「これ・・」

アルフは今気付いた。このペンダントは元々一つだったということに。

もともとの方は球体でそれを半分に割ったのを二人とも持っていたんだ。

一瞬一つにしようと思った。

けど、これはフェイトがやるべきことだと思った。

「フェイト、これはフェイトがやんなきゃいけないことだよ。だか

ら、早く目を覚まして・・・」

アルフは起きた時にわかりやすいように二つのペンダントを両手に持たした。

「・・・」

映像の向こうではなのはとクロノが扉を破って内部に侵入していた。
さすがに二人でやるにはきっと大変だからアルフは立ち上がりフェイトに一言つげる

「私もいくね、フェイト。絶対帰ってくるから」

アルフは転移しなのはのサポートに向かった。

アルフｓｉｄｅＥｎｄ

なのはｓｉｄｅ

なのはとクロノは庭園内の通路を走っていた。
先ほどのクロノの戦いをなのはは思い出していた。
魔力を温存しろと言って私には戦わせなかったけどそれでも一人であの数を倒しちゃうんだからやっぱ強いんだクロノくんて。

「ボーとするな、なのは！」

「あっごめん！」

考え事をしていたのに気付かれたのかクロノに叱られてた。

「いいか、さっきから見えるアレは虚枢空間。いっさいの魔法が使

えなくなる場所だ。だから、落ちたらもう二度と出られないよ！」
「き、気を付ける」
ドン！
次の部屋に入れば部屋いっぱいの鎧がいる。
「ここから二手にわかれる！なのはは最上階にある駆動炉の封印を！」
「そこには私が案内するよ！」
「アルフさん！？」
「わかった。僕はプレシアの下へゆく今僕が道を作る！」
『ブレイク・キャノン』
なのは程ではないが道を作るにはちょうどよかった。
「クロノくん！気を付けてね！」
クロノは笑顔で応えた。
駆動炉に向かう中なのははアルフに聞いた。
―でもいいのアルフさん？フェイトちゃんの傍にいなくて―いてやりたいさ。けど、今は自分のできるこををやるまでだ、いくよなのは！
―うん！
なのはとアルフは最上階に向けて跳んだ。
フェイトｓｉｄｅ

医務室

フェイトに少し意識が戻った。

「・・・」

彼女達が戦っている姿をみていた

母さんは最後まで私に微笑んでくれなかった。
私が生きていたいと思ったのは母さんに認めて欲しかったからだ。
どんなに足りないと言われてもどんなに酷いことをされても・・・
笑って欲しかった
あんなにはっきりと捨てられて今でも私、母さんに縋りついている。

映像にアルフが戦う姿をみた

アルフ、ずっと傍にいてくれたアルフ。
言うことを聞かない私にきっと私の分も悲しんでくれた。

なのはが戦っている

何度もぶつかった真っ白な服の女の子
初めて私と対等にまっすぐ向き合ってくれたあの子
何度も出会って戦って何度も私の名前を呼んでくれた
何度も、何度も

「・・っ・・！」

フェイトは起き上がり涙を流していた

生きていたいと思ったのは母さんに認めて貰いたかったからだ。
それ以外に生きる意味なんてないと思ってた。
それができなきゃ生きてちゃいけないんだと思ってた。
捨てればいいってわけじゃない。
逃げればいいってわけじゃないよね

チャリン

「？」

フェイトは今自分の手につけられている二つのペンダントに気付いた。

「・・これ・・」

フェイトはただ何も考えず二つに別れたペンダントをくっつけた

「約束・・守れたよね？兄さん・・・」

ビー

「？」

するとペンダント、球体から映像が現れた。

そこにはアリシア、ううん私がいた。
庭園で遊ぶ私とアルフ。
それにリニスもいる

するとメッセージが流れた

『フェイト、これを見ているってことはきっと俺たちはまた出会えたんだと思う。もし、これを見ているのがフェイトだったら聞いてほしい。これは俺がお前を撮ったものだ。
誰でもない何者でもない“フェイト”としてのお前を。きっと真実を知ったらお前は壊れてしまうかもしれない。だから、これをお前にみせたかった。誰でもないお前を。自分自身をみてほしかったからだ。俺はアリシアのことを知っていた。けど、俺はお前をアリシアとしてではなくフェイトとしてお前と接していた。一人の女の子として』

「・・・兄さん・・・」

フェイトは嬉しかった。大好きなあの人が自分を自分としてみていてくれたことが

『きっともう真実を知ってしまったと思う。プレシアが、母が憎いか?アリシアが妬ましいか?きっとそれはお前にしかわからない。一けど、これだけは言っておきたい。二人を憎まないでくれ。いや、嫌いにならいでと言った方がいいのかな?プレシアは気づいていないだけなんだ。だから―自分の“母親”を嫌いにならないでくれ』

兄さんはいつも私たちのこと心配してくれていたんだ

『俺はな。もしアイシアも生きていて、お前がいたらきっといい家族だったって思う。そしたらお前はアリシアの妹になるのかな?はは
っ』

?

『けど、本当にそうなれたどれだけ良かったろう。もし、なれたらきっといや、本当に幸せだったと思う。お前も、そしてあいつも』

途中彼が何を話したいのかよくわからなくなっていた。

『最後に、もしこれだけという形だったらちゃんとお前に言うよ。ただいまって。いや、ただいまは変かな?とにかくちゃんと会ったら色々話そう。それじゃまた』

ブツ

そこで映像は途切れた

「兄さんありがとう・・・」

フェイトは傷ついたバルディッシュを優しく持った。

「私たちの、私たちのすべてはまだ始まってない。そうだよね?バルディッシュ」

『い、イエッサー!』

傷ついたバルディッシュは修復を即座に行いまた金色の魔法使いの斧として復活する。

「うまく、できるかわからないけどいこう!」

『イエッサー!』

「くそっ数が多い！」
「シュートォ！」

なのはとアルフは敵に足止めを食らっていた。
強いってわけじゃないけどただ、数がおおい。
なのはは最低限の魔力で敵を倒しアルフはビースト形態で戦っている。
アルフはなのはの援護、つまり敵を封じそれをなのが倒す戦い方をしていた。

「このままじゃ・・・しまった！なのは！」
「！」

少し気が緩んだのか敵捕縛していた鎖が千切れなのはにその矛先が向かう

『サンダーレイジ』

目の前に迫る敵が突如雷によって破壊された
その雷、いや魔法は彼女がよく知るものだった

「フェイトちゃん！」
「フェイト？」

ドゴン！

束の間壁を破り大型の鎧兵器が現れた。
それは例えるならガンキャノンだった。

「大型だ、バリアも強い」

「うん、とりあえずあの背中の」

キューン

ガンキャノンは背中の二門の大砲の発射態勢に入った。

「けど、二人なら」

きっとそれは今まで聞きたかったことのだ一歩だと思う

「うん！うんうん！」

嬉しくて何度も頷く

「いくよ、バルディッシュ！」

『イエッサー』

「こっちもだよレイジングハート！」

『Ｓｔａｎｄｂｙ　Ｒｅａｄｙ』

互いに最大の攻撃繰り出す

「サンダー・・スマッシャー！」

「ディバイン・・・バスタァー！

ドッカーン！！！

煙が晴れれば二人の攻撃は分厚い床をも貫き虚枢空間がみえるぐらいまで貫いていた。

「フェイトちゃん！」

「・・・ん」
「フェイト、フェイトフェイトー！」

アルフが嬉しそうに近づいてくる。

「アルフ、心配かけてごめんね？」
「うん、いいんだよ。こうして戻ってきてくれたんだから」
「うん、だから、これから始めるよ。本当の私を」

そんな二人の会話を嬉しそうにみていたなのはだった。

フェイトｓｉｄｅＥｎｄ

その後なのはとフェイト、アルフは二手に分かれた。
なのははは駆動炉を止めるため。
フェイトは母のもとへ。
母のもとへ向かうフェイトになのはは優しく「頑張って」と言った。
フェイトはその言葉がとてもうれしかった。

なのはｓｉｄｅ

駆動炉につくとやはりそこでも敵は待ち伏せしていた。

「・・・・」

なのはは少し恐かった。
今は自分しかいない。隣に誰もいない

けど、やるしかなかった。

―なのは・・お前ならできる。自分を信じろ

「！」

頭に届いた彼の声。

「そうだよね。私だって―。レイジングハートいくよ！」

『Ｙｅｓ　Ｍｙ　Ｍａｓｔｅｒ』

なのはｓｉｄｅＥｎｄ

レイｓｉｄｅ

「はぁはぁはぁはぁ・・・・」

『楽しかったぞ、さらばだ』

出てきた時とは逆に吸い込まれるように消えていくルシファー

「こっちは遊びじゃないんだよ」

『自己修復開始します』

すると傷ついていた彼の身体がみるみる治ってゆく

「ＺＥＲＯ、奴らは？」

『ルシファーさんとの戦いで大半が巻き込まれて死んでますね』

「そうか。戦闘開始からどれだけ経った？」

『かなり、現に今なのはさんが駆動炉の封印を完了。それにフェイトさんもプレシアのもとへ向かっています』

「そうか、よかった・・・俺たちもいくぞ、手をくれになる前に」
『了解』

レイｓｉｄｅＥｎｄ

プレシアｓｉｄｅ

「・・・・」

次元震の揺れが弱くなっていることに気づき始めた直後

「プレシア・テスタロッサ」

声の主はリンディだった。
庭園のどこかで次元震を抑え込んでいた。

「・・・・」

「次元震は私が抑えました。駆動炉は時期封印。あなたの元には執務官が向かっています。忘れされし都アルハザード。伝説の秘術が眠る場所。存在すらわからないただの伝説です」
「そんなことはないわ・・・現にそこへ言った者がそう言ったのだから」
「？しかし、それは分の悪い賭けです。最悪の場合自身も消滅してしまうかもしれないのですよ？」
「そんなことはどうでもいい！私は・・取り戻すのよ。こんなはずじゃなかった世界を」

キューン、ドッカ―ン！！

「あっ！？」

「世界はいつだってこんなはずじゃないばっかりだよ！ずっと昔から誰だってそうだったんだ！」

壁を破りクロノが姿を現す。

「あ」

別の方向からあの人形がきた

「こんなはずじゃない現実から逃げるか、立ち向かうかは個人の自由だ！だけど、自分の勝手な悲しみに無関係な人間を巻き込んでいい権利は誰にでもあるわけがない！」

「ごほごほ」

「母さん」

人形がなにをしに来たのか私のもとへ駆け寄ってきた

「何しに来たの？」

「一は」

「消えなさい、あなたにはもう用はないわ」

けど、人形は私の方を見ている

「あなたに言いたいことがあって来ました」

「？」

「私は―アリシア・テスタロッサじゃありません。あなたが作ったただの人形かもしれません」

そうよ、あなたはアリシアの代わりの人形

「だけど、私、フェイト・テスタロッサはあなたに見出してもらって育てて貰ったあなたの娘です！」
「ふふっ、ははははあっ。だからなに？今さらあなたを娘だと思えと」
「あなたがそう望むなら・・・世界中のどこからも誰からもあなたを守る。私があなたの娘だからじゃない。あなたが私の母さんだから！」
「・・・くだらないわ」
ドン
杖を叩き彼女の魔法陣が展開する
「ああっ」
リンディのすぐそばで地面に亀裂が起きた。
『艦長戻ってください！庭園が崩れます！この規模なら次元断層は起こりませんから！クロノくんたちも脱出して！崩壊まで時間がないから！』
「了解した。フェイト・テスタロッサ。フェイト！」
彼の問いに彼女は応えない。彼女は返事をまだ聞いていない
「―！フェイト避けろ！」
「！」

すると天井が崩れフェイト達に振ってくる

「フェイト！」

アルフが無理やりフェイトを抱えその場から退避する

「母さん！」

しかし、プレシアは何も言わない

ゴンッ！

そして、彼女のとの間に壁ができてしまった。

もう二度とあの人をみることはなくなってしまった。

「一緒にいきましょう、アリシア。もう離れることはないわ。ずっと一緒よ」

―お母さん

「！」

そして彼女の床も割れ虚枢空間へと落ちてゆく

永遠にさまよう世界を一人で・・・・・

プレシアｓｉｄｅＥｎｄ

こうして今回の事件は幕を閉じた
管理局はプレシアの捕縛は叶うことなくまた、死亡を確認することができなかった。
後のこれはＰＴ（プレシア・テスタロッサ）事件と呼ばれプレシアは歴史に犯罪者として名を残すことになった。

第１４話　母と娘　後篇（後書き）

今回登場した悪魔ルシファーは私もどれを参考にしていいかわかっていません。
すみません。一応悪魔という形で想像してください。

それとＺＥＲＯの宝物庫に関してですがこれはいわゆる自分の領域に保管してあるものの中で宝を保管している場所ということになります。
詳しくは後日書きたいと思います

さて、次回は無印のエピローグです。
その後はＡ‘Ｓになるのですが平凡系を書いていこうと思っています。
では、今日はこの辺で。
また次回にあいましょう！

第１４、５話　これからが始まり（前書き）

エピローグなのにとても長くなってしまってすみません

原作１３話を軽くまとめたものになるかもしれません

しかし、最近忙しく更新が中々早くできないくてすみませ

誤ってばかりだな俺

第１４、５話　これからが始まり

エピローグ

その後のことを語ろうと思います。
時の庭園から帰還した私たちを待っていたのは何とも言えないものでした。
勝ったわけでもない。
負けたわけでもない。
ただ、不思議な空気がアースラに漂っていました。
無傷とは言えなかった今回の事件―武装局員さんたちはフェイトちゃんのお母さんの攻撃をくらって全員が中傷と誰一人死にいたることはありませんでした。
クロノくんも軽く怪我をしていて「大丈夫！？」と声をかけたけど私に心配をかけたくなかったのか平気だと言いました。
私もクロノくんなら平気だと思ってそれ以上はいいませんでした。
それと私たちより先に出たレイくんですが無傷でした。
帰還したレイくんの姿はなんとも言えないぐらい暗い顔をしていたように思えた。けど、それは一瞬ですぐ傷ついた局員たちの手当てを手伝っていました。
でも、なんだが何かを抱え込んでいるように私は思えました。
こんな私でも相談に乗れるのにな・・・
さて、これからが本題になると思います。
フェイトちゃんとアルフさんについて。
今二人はアースランの独房にいれられています。当然と言えば当然の処置、何だと思う。
けど、それはあまりに酷い。

「いいかいなのは。例え自らの意志でやってきたわけではないことは俺が一番わかっている。だが、今回の事件はとても危険なものだ。下手をすれば彼らは大怪我もしくは死にいたることになっていたかもしれない」

レイくんはそんな私に説明してくれました。

「最悪次元断層が起きそれによって多くの世界が犠牲になったかもしれない事件。それをまだ子供だから、とかそういうもので片付けることはできないんだ。個人ならともかくここは集団。まして俺はそのトップ。俺の独断で決定することはできない」

「うん・・・」

かつてリンディ提督に言われたことを思い出した。多分レイくんはその時の私と同じ立場にあるんだと。

「しかし、最初に言った通り彼女は利用されていただけだ。言い方は悪いが主犯であるプレシアは自分の目的のために彼女を利用した。だから、彼女を弁護することもできる。本当なら次元規模な犯罪は永久懲役とか死刑だがそれを少しの期間の査察とか調査が入るぐらいにできる。最終的には裁判で決められるがまぁそこは何とかなる。それに弁護側に俺が入るから大丈夫。心配するな」

彼はそう言うと私の頭を撫でてくれた。大きくて優しくてそして暖かい手だった。

そのあと私はリンディさんに呼び出されて皆のいる前で表彰されました。

多分その時の私はとても緊張していたんだと思います。

「今回の事件に大きな功績をあげたとしてここで略式ではあるがその功績を称えここに表彰しるものとする。ありがとうなのは」
「あ、ありがとうございますっ！」

パチパチパチパチ♪

―そんなに堅くならなくても平気だよ
―で、でも表彰されたの初めてだし皆の見てる前だからもっと緊張しちゃって
―はははっそうか。例ってわけじゃないけど今度デートでもするか

「で、デート！！？？？」
『！！！！！！！！！！！』

ごにょごにょ

「まさか、総帥はロリコン・・？」
「いや、今から種をまいて大きくなったら・・」
「総帥！あんたって人は――――！」

などなど

レイくんは冗談冗談と言っていましたが私は少し残念というか勿体ないというかそんなことを思っていました。
そんな考えを読まれたのか

―じゃあデートするか？
―ええっ・・・ああ・・・その・・・はい

私は返事をしてしまった。

けど、きっと私はそれを楽しみに待っているに違いないと思いました

そのあと私たちはレイくん、リンディさん、クロノくん、エイミィさんと5人で食事をしながら今回のことを話していました。

「で、“総帥”はこれからどうなさるのですか？」

「・・・まぁなのはの所に居候しながらちょくちょくフェイトに尋問という形ではあるが面会でもしようかな」

そうあとで聞いた話でレイくんとフェイトちゃんは知り合いだったそうでフェイトちゃんの担当はレイくんが一任したそうです。

そこのところ私は詳しく知りたいと思ったのですがレイくんに「また今度」と言われてしまいました

「なのはさんはいいの？」

「はい！私、もっとレイくんと一緒にいたいですから」

―なのはさん、あなたも彼の餌食に・・・

「あの一つ聞きたいことがあるんですけどいいですか？」

「なんだエイミィ？」

「その・・・レイさんはアルハザードのことを知っているようなことを言っていたような気がするんですけど・・」

皆の視線が彼に向けられる

「聞きたいか？」

『聞きたいです～！』

「そうか、なら・・・」

ザッ！

といつも着ていたコートから白衣にチェンジしていました。
けど、そこで・・・

「説明はいいですから！！！」

と怒鳴り声をあげてそれを止めてしまました。

「そうか・・・。そうだな、みんなは―まぁなのはは知らないか。アルハザードとは旧暦もしくは前世期に存在していたと言われる伝説の土地。幻の秘術、現代ではありえない魔法が眠っていると言われた場所。まぁその・・・ぶっちゃけ言えば俺はそこに行ったことがある」

『えええええええええええええええええええ！！！！！！！！』

皆の驚きの声の大きさにレイは耳をふさいでいた。

「偶然・・・まぁなんであれアルハザードらしき場所にたどり着いた」

「けど、なんであんなとことか言ったんですか？」

「あそこは人間の立ち入っていい場所じゃない。普通の人間ならその底が見えない秘術（欲）に取り込まれ精神が崩壊しかねない場所。俺は普通じゃないから平気だったけど」

さらっと恐ろしいことを何度もいう

「じゃあ、レイくんはその秘術とか魔法を知ったの？」

「知ったというか体得したというかまぁその情報はすべて記憶して

いる」
「ふーん。例えば、例えばだよ?その・・死者を蘇えさせたり過去をやり直せたりできるの?」
『・・・・・・』
きっと今の話をしていて誰もがそう思ったのだろう。
誰もがおとぎ話だと思っていたものが現に目の前にいる彼がその場所にいったことがあると言うのだから。
「・・・・・」
結局レイくんは何も言いませんでした。
けど、私はなんとなくだけど聞かなくて良かったと思っています。
もし、聞いたらそれを欲して新たな悲劇を生んでしまうかもしれないから
そして、アースラの皆、リンディさんたちに別れをつげ私は海鳴に帰ってきました。
帰ってきたのは朝の5時半ぐらい。
そのまま家に帰り学校へ。
今日何回ただいまと言っただろう?
でも、それだけ心配かけたんだから当然と言えば当然だよねけど、学校から帰ってきた私には疲れとかその他もろもろ襲いかかりすぐ寝てしまったあっちでは昼も夜もわからないからそのせいでもあるかもしれない
「・・・お疲れなのは。君がいなかったらフェイトは救えなかった。本当に感謝している。さすが継承者だ。なっ?レイジングハート」
『はい、彼女は私の最高のマスターです』

「ははっ、お前も言うようになったな。それじゃあなのは、お休み」

なにもかけずに寝てしまった彼女にそっと毛布をかけてあげる。
彼も静かに眠りにつき長かったこの事件も本当の意味で終わったのかもしれない

レイｓｉｄｅ

翌朝レイはなのはが学校にいる合間にアースラに赴きフェイトと面会していた。

「フェイト―」
「兄さん！」

ガバッ！

フェイトはレイに抱きついた。

「・・・大きく、それに綺麗になった」
「うん、うん・・・私、約束守ったよね？」

彼女の胸で光るペンダント

「ああ、守った。こうしてまた逢えたんだから」
「うん・・・」

そんな二人をアルフは涙を流しながら見ていた。

「―アルフも大きくなったな。それにフェイトを守ってくれたんだな」

「ああ、そうだよぉ～ううっ」
「ははっ、泣くなよ」
「そうだよアルフ・・・」

そんなフェイトも少し目が潤んでいた

―本当・・・良かった。けど・・・

感動の再会を終え本題にはいる

「これから私たちどうなるの？」
「しばらくは幽閉生活が続くかもしれないが少ししたら普通の部屋に移ると思う。そのまま裁判の材料、君の証言などを用意しなければならない」
「・・うん」

―・・・今からでも解放してやりたい。だが、俺はここの総帥だ。だから、自分のわがままで君を開放することはできない

解放してやりたいそう思っても自分は上にたつ者
それはとても苦しいものだった

「・・・ねえ兄さん」
「なんだ？」
「兄さんはすべて知ってたんだよね？」
「ああ―その、あの映像で言った通り俺は知っていた。言わなかったのは当時お前は生まれたばかり。そんなことを言ったって信じない。いや、信じたとしてもきっとお前は壊れる。そう思ったからだ。けど、俺は時がたったら伝えるつもりだった。けど、現にお前はプ

レシアに・・・利用されていた。だから、言えなかった」

―兄さんも苦しかったんだね

「もうひとつ聞きたいことがあるの」

「ああ」

「私の記憶ううん、アリシアの記憶の中には兄さんがいた。兄さんはアリシアを『待て、映像でも言ったが俺はお前をお前として見ていた。それはわかってほしい』・・・うん。それはわかってる」

「？」

「アリシアと私、どっちがいい？」

「は？」

レイにはその質問の意味がわからなかった。

―フェイトはきっと嫉妬してるんだよ

―嫉妬？

念話を通じてアルフが教えてくれた

―なんていうかフェイトはあんたのこと好きだから。けど、フェイトの中のアリシアの記憶のアリシアもあんたのことが好きだから

自分とアリシアは同じ存在だと思っているのか？

「フェイト、俺にはどっちがいいなんて答えられない。だって、君とアリシアは違うだろう？もし、フェイトが二人いたらまぁどっちがいいっていう質問に答えるだろうが・・・」

彼は笑っていた

「うん、私は私。そうだよね？」
「ああ、そうだフェイト」

そのあと他愛もない世間話を少しした。
こんな辛い状況だ。少しでも明るい話をしたほうがいいと思った

それから数日後彼はフェイトの元へ通った。
少しでも心を治療したほうがいいと思ったのだろう。けど、レイは限界を感じていた。
だから、最後に彼女と会わせるのが一番いい

「なのは、最後は君に任せる。それが彼女にとっても君とってもきっとこれが始まりになる」

レイはその言葉を胸に秘めなのはに託した。
なのはとフェイト。二人のこれからを―

なのはｓｉｄｅ

なのはは朝早く学校とは違う道を走っていた。
昨晩からアースラに赴いていたレイから朝早く形態を通じて連絡があったからだ。

「フェイトの処遇が決まった。本局へ移送。そして、事情聴取に裁判だ。まぁ無実は確定だな」
「ホントに！？」
「ああ、それと―」

少しだがフェイトに会える

私はすぐ起き着替え待ち合わせ場所へ走った
会えるのはとてもうれしい
けどなにより嬉しいのは私に会いたいって言ってくれたことだった

待ち合わせの場所へ着くとフェイトちゃんとアルフさん、クロノくんそれにレイくんがいた。

「フェイトちゃーん！」

手を振ってなのははやってきた

「少しの時間だけだがゆっくり話といい。俺たちは向こうに行ってるから。いくぞ」
「うん」

そう言うと二人は少し離れたベンチに向かって歩いて行った
二人がいなくなったあと私たちはとりあえず微笑んでいた

「フェイトちゃんと一杯お話したかったのにフェイトちゃんに会ったら忘れちゃった」
「うん、私も。たけど、私嬉しかった」
「えっ？」
「まっすぐ向き合ってくれて」
「うん！友達になりたいって思ったの。一けど、これから出かけちゃうんだよね」
「そうだね、少し長い旅になる」

せっかくこうしてお話ができるのは今だけだと思うとちょっぴり悲

しい
けど、これだけは聞きたい

「また、会えるんだよね！？」
「・・・うん、少し悲しいけどやっと本当の自分を始められるから・
・来て貰ったのは返事をするため」

そう私はまだ返事をしていない
兄さんにも言われた。

なのはに会いたいんだろ？

ただ、それだけ言ってくれた。

彼女もお前に会いたがっている

だからまだ返事を返していなかったから

「君がいってくれた友達になりたいって」
「うん、うん！」
「私で、私でよければ・・・だけど私どうしたらいいかわからない」

私に友達なんていなかった
アルフしか

兄さんにどうしたいい？と聞いたけど

「大丈夫」

笑顔でそれしか教えてくれなかった

「だから、教えて欲しいんだ。どうやったら友達になれるか」

ああ、フェイトちゃんも悩んでいたんだ
友達って言葉だけなら簡単だけど実際は難しい
けど、本当に簡単なんだよ？
アリサちゃんたちはぶつかってそれから友達になったけど
本当に簡単

「呼んで、私の名前を呼んで。初めはそれでいいの。君とかあなたとかそんなんじゃなくてちゃんと相手の目をみてはっきり相手の名前を呼ぶの。・・・私、なのは。高町なのはだよ！」
「なのは・・・・？」
「うん！」
「な、のは」
「うん・・」
「なのは」
「うん・・・」
「―ありがとうなのは」
「う、ん・・」

これが嬉し涙のなのか私にもわからなかった。
けど、ただ言えることは私の名前を呼んでくれていることが嬉しかったこと

「ううっ・・・・」
「少しわかったことがある。“友達”がないているとこっちも悲しいんだって」
「フェイトちゃん！」

離れてしまうことが悲しくて抱きついてしまった

「ありがとうなのは。今は離ればなれだけどきっとまた会えるそうしたらまた君の名前を呼んでもいい？」

「うん、うん・・・！」

「会いたくなったらまた君の名前を呼ぶ、だからなのはも私の名前を呼んで。今度なのはが困ってたら私が助けるから」

「なのははいい子だねレイ」

「ああ、本当にな」

遠くからその光景をみていた三人

アルフは嬉しくて泣いていた。

「総帥、そろそろ」

「ああ」

クロノが立ちあがり二人のもとへゆく。

時間だ

「フェイトちゃん、これ」

「それ」

なのはは自分にしばっていた布を差し出していた

「思い出にできるのこんなのしかないけど」

「じゃあ私も」

フェイトも自分の髪をほどきなのはに差し出す

その色は互いを表す色そのものだった
こうすればいつでも忘れないから

「ありがとう、なのは」
「うんフェイトちゃん」
「きっとまた」
「うん、きっとまた」

繋いでいた手を離す
それは少し切なかった

「アルフさんも」
「ああ、ありがとうなのは」
「クロノくんもありがとう」
「ああ」

三人の足もとに魔法陣があらわれる

「ありがとう、バイバイ。クロノくん、アルフさん、フェイトちゃん」

私は手を振って送った
これが最後じゃないから。
これが始まりだから

「バイバイ！」

それから目の前の三人はいなくなった。

残ったのはなのはとレイだけ

「レイくんはこれからどうするの？」
「まぁなのはに許可もらってるしこのままいさせてもらうよ。まぁフェイトのことでいなくなったりするけど」
「うん」
「それからなのはがいいなら魔法を教えようと思ってる」
「うん、私知りたい。魔法のこととか世界のこと」
「そうか。とりあえずまずは」
「帰ろう！」
「ああ」

なのはｓｉｄｅＥｎｄ

レイｓｉｄｅ

それからのことを少し語ろう

あれからなのははフェイトから貰った髪留めをしている
意外と似合っているのだから驚きだ
それはフェイトも同じだ
それとビデオレターという形で二人は連絡を取り合っている
撮影は俺たまに誰か
編集俺
配達俺
こんなことでも役にたつならそうしていた。
けど、リンディに怒られた
二人は歩み始めた
これが俺の望んだもの
今思えばあの時の占い意外とあっていたのかもしれない

俺は今アースラにいる。誰も使っていない部屋で

「これからが始まりだ。二人にとって。俺も始めるか、なぁアリシア」

ポットにあるアリシアを見つめる

これが幸福をもたらすのかそれとも混乱を不幸をもたらすのか

それはきっと彼にもわからない

レイｓｉｄｅＥｎｄ

第１４、５話　これからが始まり（後書き）

無印完結！
そして、新たな暗雲が・・・

わかるかたはわかると思いますが・・
次回オリキャラだけどオリキャラじゃない人物が登場

それと一言
なんかこれみてるとフェイトルートじゃねと思ってしまった。まぁ
ペンダントとかそういうルートあったけどさ・・
俺どうしたらいいのだろうか？

第１５話　死者生還（前書き）

まず、前回悩んでいた誰のルートにするという話ですがなのはを主軸にしてハーレムで行こうと思います。
だって、皆幸せがいいんだもん！

さて、エピローグのあとの話なります。A’sまでは日常編や回想？などをやっていこうと思っています
それと今回はゲストが登場します。なんと本編にも登場です！
あとこの作品軽くクロスオーバーになるやもしれない・・・

第１５話　死者生還

アースラのとある一室

「・・・・準備は、整った」

アースラのとある一室に明かりをつけずロウソクがいくつも並び床には白い線がしかれている。
その形は六芒星。
そして、その中央には祭壇がある。祭壇の上には裸の少女が寝かされている。
少女以外には一人の男がいる。それにしてもずいぶんと疲れているようだ。
息も荒い。

「はぁはぁさすがに、辛いな。これだけ念入りにやって成功しなきゃマジで呪うぜ・・・・。アクセス・・・」

右手の薬指にはめられている指輪が光る

「神の代行者としての権限によりこれより―魂の定着を始める」

「宝物庫にアクセス・・・・賢者の石を解凍」

すると彼の左手に赤い宝石が現れた

「汝が魂をこの身体に再び宿すため我ここに契りを結ばん」

―我らは問う。貴様、自分が何をしているのかわかっているのか？

頭に直接響く声

「わかっているからやっている」

―自分の立場に溺れてはいないか?貴様は“人間”なのだぞ。けして神なのではない

「は!今さらそれを言うか!?いいか?これは死者蘇生ではない。離れた魂を再び身体に戻すだけだ!」

―だが、現にそれは死んだ

「そう、確かに死んだ。だが、それ魂が離れたからだ。原因はなんであれ魂を失ったものは器をなくし零へ還る。しかし、未練があるからこうして両方とも存在し続けている。互いに失くしたものを取り戻しているのさ」

―それは言い訳にしかすぎない。ただ、お前は自分のためにそれを行うとしている

「・・・対価なら支払ってやるさ。賢者の石を媒介にこの俺の・・血をな!」

彼は石を少女の胸に運び左手にナイフを持ちそれを右腕に刺した。いや、斬り裂いた

ザッ!・・・どろどろ

「ぐっ・・・」

出血の量からして1?はある。普通の人間なら即死。

―そこまでしてお前は何を得る?

「んなことはでうでもいいんだよ・・・。ただ、俺はあいつとの約束を果たすだけだ」

―その約束の相手がいないのにか?

「俺はいつも卑怯な人間だ。知っておきながら助言するだけでなにもしない。もし、あの時俺がやっていればもしかしたら違う未来を辿ったかもしれない。けど、それは今は結果にしか過ぎない。・・・正直俺もわからない。知っているだろう?俺は大切なものには甘いんだ。だから、こうして平気で禁忌を犯す。まぁ俺にとってそれはあまり意味のないことだが」

―いいだろう。代行者レイ。貴様の行いを許可する。

「・・・ありがとう」

―その代わりにあとでこちらに来てもらうぞ?

「そんなことでいいんならな」

―彼女の相手をしてもらう

「なっ、なんでそうなる!?」

―あいつはお前にゾッコンＬｏｖｅだからな

「神がへんなこといってんじゃねぇよ」

―・・・・・

そして、声は聞こえなくなった

「・・・・・すぅーはぁー。代行者レイル・アンヴァルト・Ｙ・神乃に名において汝アリシア・テスタロッサの魂を―ここに！！」

ゴゴゴゴッゴゴゴ！！！！！！！

大規模な揺れとともにその部屋は大きな光に包まれた

「・・はぁはぁはぁはぁはぁさすがに血を流し過ぎたか・・ぐ」

大量の出血をしていた右腕の切り傷が治ってゆく

「で、儀式は？」

『データ上では成功です』

先ほどまでデータをとっていたＺＥＲＯが言う

するとのんきな声が聞こえてきた

「ん、ん～～～～♪」

「・・・・・・」

「はわあああ。なんだか、とても長い時間眠ってた感じ」

「身体は時を止めていても実際は永眠状態だったんだ。そう感じるのは当然だな」

「うん・・・レイ大丈夫!?」

「ああ、大丈夫だ」

「ごめんね。私のために」

「いいんだ。俺はあいつの約束をまだ完遂していない。いや、これからだからな・・・とりあえずお還りアリシア」

「うん、ただいま。レイ」

裸の状態でのんきにあいさつを交わす二人

「さて、あとはリニスだ。アリシアお前がメインだ。俺はサポートする」

「うん、わかった」

その出来事はすぐにアースラに気付かれる。
まぁその中でやっていたのだから当然と言えば当然だ。
しかし、局員たちがきたころにはそこはもぬけの殻だった・

アースラレイの部屋

「で、どうだ？身体の方は」

先ほどの部屋から逃げるようにこの部屋に戻ってきた彼ら。
一人はレイ。もう一人は死んだ筈のアリシアとリニスだった

「うん、大丈夫。リニスは？」

「私は大丈夫ですよ？まぁ私の記憶はあの時から止まっていたから」

「そうか、二人とも問題はないな。さて、問題はこれからだ」

「フェイトですか？」

「・・・・」

「それもある。あとはアースラの連中にどう納得させるかだ・・・
アリシア？」

「フェイトは私のこと憎んでるかな？」

だってそうだろう。自分のせいであんなことをされていたのだから。

「大丈夫だ、あいつはきっと受け入れてくれる」

『マスター』

二人の会話を邪魔された

「なんだ」

『予想より動きが早いです。あと・・・あっもう来ます』

「えっ？」

『動くな！』

ひょん

と三人は手をあげホールドアップしていた

彼の部屋に入ってきたのは艦長であるリンディである。

「総帥、さきほどの件あなたがやったと分かっているんです！おとなしくお縄に・・・・！」

まぁ誰もがみたらそう思うだろう。

なぜなら死んだはずの人間がいるんだから

「展開が早すぎるｗ（内容的な意味とか作者のめんどくささとか）」

事の発端はあの時の庭園がくずれたときに起きた

「母さん！」

瓦礫によって母と別れてしまったあの時

「さぁ、一緒に行きましょう。アリシア」

―母さん

「！なんでアリシアの声が・・・・」

聞こえるはずがないその声を聞きアリシアをみる。
するとその向こう側に彼がいた

「今さら何しに来たの？」

「まだ、思い出せないのか？」

「だから、なんのことよ！」

「わかった。自分で気づいて欲しかったが教えよう。あの日まだアリシアが生きていたとき三人でピクニックにいったことを覚えているか？」

「ええ、忘れるはずがないわ。あの子との時間を忘れるはずがない」

「だったらなんで覚えていない？」

「？」

彼がなにを言っているのかわからない。

あの日私たちはピクニックに出かけた

そこで遊んだり食事をしたり楽しい時間を過ごした

・・・そういえば私はアリシアにこう言ったわ

「アリシアは何か欲しい物がある？」

そうだ、確かにそう言った。

けど、アリシアはあの子はなんて応えたのかしら・・・

「妹が欲しい！」

「！」

「・・・」

思いだした。

そう、あの子はまだなにもしらなくてただ妹が欲しいと・・

「お前はあの子の願いを叶えたんだ。例え違う生まれ方をしてもあの子はお前の娘。そしてアリシアの―妹」

「い、もうと・・・アリシアの妹・・・」

「だから、もう苦しまなくてもいいんだ」

「そう、私はいつも気づくのが遅いのね・・・。アリシアごめんなさい。あなたをもてあそぶようなことをしてけど・・・あなたは私

と一緒には来れないの。ね、そうでしょう？“先生”」

その時の彼女の顔は今までの顔とは違っていた。

本当に母親の顔をしていた。

「また、呼んでくれたな」

「私、本当に馬鹿ね。母親である私が覚えていないんなんて母親失格。一先生。一つお願いしてもいいですか？」

「なんだ？」

「もし、アリシアが目覚めたら・・・私の代わりにあの子を育ててください。それともしあの子。私の“娘”がまだ私を母親であると言ってくれたのなら代わりに誤ってくれませんか？ごめんなさい。酷いことして。と。今さらこんなこと言えることじゃないかもしれないけど」

「わかった。伝えておく」

「さぁアリシアお別れよ」

杖を前に倒しアリシアのポットが彼の元へゆく

「きっとあなたのことだからなにかしてたんでしょ？」

「まぁな」

「・・・ほんと、先生は昔から意地悪で本当のことといつも教えてくれなくて・・・けど、自分のことは教えてくれた。―そして、大好きでした」

彼女は俺のところに走って軽く頬にキスをした

ゴゴゴッ！

「プレシア！」

「―先生」

バン！

プレシアは彼を突き飛ばすように離れた

バリン！

床が崩れ彼女は逆らうことなく落ちてゆく

果てしない何もない底へと

―ああ、アリシアごめんさい。私、本当に馬鹿ね。けどね、後悔はしてないわ。だってそうじゃなきゃ今の私はここにいないもの。こんな私を許してくれる？

―当り前だよ。だって私のお母さんだもん

「―ありがとうアリシア、さようなら先生」

彼女は笑顔で逝った

彼はただそれをみてやることしかできなかった。

―気づいてたか？お前、昔の喋り方に戻ってたぞ・・・

そう、昔のお前に戻ってたんだ

―さようならプレシア。

約束は絶対果たすよ。

アリシアは俺が責任をもって育てる。そして、フェイトも彼女を認めてくれるか確信はないがきっとあの子はこの子を認めてくれる。

「だから、本当にさようならプレシア」

そして彼はアリシアをアースラに極秘に持ちこみ先に至る

そして

「3」

今

「2」

彼の口から真実が語られる

「1」

のだろうか？

「ドッカーン！わーい。なぜなになのは」

そして、あのなぜなにが帰ってきた

「皆さんこんにちは、お久しぶり。管理局総帥レイです。なんと今回はお姉さんが、それとうさぎさんではありませんがボン太くんが来てくれています」

といつものように白衣と伊達眼鏡を付け説明しさらにどこから現れたのか某軍曹が通う高校の女子の制服をきたお姉さんと片目をつぶったボン太くんが現れた

「こんにちは～お姉さんのマリアで～す！♪」

「ふもふもふもーふもっふ」

『こんにちはボン太くんです』

とマリアがインカムをつけボン太くんの言葉を代弁している

「ちなみにこの映像は全部署に流れています。さて、マリアくん今日の議題は？」

「は～い。まず、今皆の言いたいことを代弁したいと思います。なんであの子が生きてるの？」

直球

「そうだな。まずどこから語ればいいか。あっちなみにその本人はただいまフェイトと面会中。この映像も流れています。では、本題に入ろう。まぁね。俺も甘い人間でさアリシアが死んだ直後彼女に時間停止の魔術かけて身体の崩壊とかその他もろもろを止めたわけ。でも、これだけでは駄目だった。彼女の魂がないといけない。幸い魂は現世に留まっていたので俺が保護。今の今まで彼女を現世にとどめていたという形になるんだな」

「ふも、ふもふもふもっふ」

「え～と、なんで死んだ人間を蘇らせたのか？と聞いています」

「まだ、幼い命を散らしてしまったこと。プレシアの起こした実験によりあの子は命を落としてしまった。世論は彼女を叩いた。けど、俺は違った。例え総帥でも権限が行きとどかないところもある。俺がもっとちゃんとしていれば・・・・いや、話がずれてしまったな。とにかく答えは簡単。プレシアと同じさ。ただ生き返させたかった。それだけだ」

「では、次です。どうやって生き返させたの？」

「アルハザードの知識、というのも一つ。本来魔術には黒魔術と白魔術があり黒魔術には死者蘇生の方法もあった。まぁ最大の要はこれだな」

映像でその要が表示された

それを知っていたのかボン太くんが聞く

「ふもふも？」

「もしかして賢者の石か？」

「そう」

「総帥あなた勝手に古代遺産（ロストロギア）を！」

「あー観客席の人は黙ってるようにー。そうだ。これは賢者の石。よく錬金術師とかが求めた造りだそうとしていたもの。これがあれば対価を支払わなくても実行することができる」

「ちなみにそれをどこで？」

マリアお姉さんが先生に質問した。

それは少し関係ないと思ったのだろうがそれでも気になったらしい

「とある兄弟に譲ってもらった。礼として失ったものを返してあげた」

「先生すご～い！」

「まぁな。さて、この議題はこれでいいか？次の質問は？」

「はいでは。Ｐ・Ｎアースラのお茶係さんからの質問です。総帥が戦っていたアレなんですか？なんか色々気になって仕方がありません。それとそのデバイスについて知りたい。だそうです」

「まず、アレは悪魔。死人どもが自らを生贄に捧げ悪魔召喚をしたのさ。これも黒魔術と言われている」

「ふも、ふも」

「えーと。なんか知り合いみたいな感じだった。だそうよ」

「それは昔魔界に住っちゃったときに戦う羽目になりそのまま戦ってたらなんか仲良くなっていたんだ。すごいんだぜ?何回殺されそうになったとかか・・・」

「ぶっちゃけ魔界とかあるんですか?」

「あるぞ。現に精霊を召喚する者がいるだろ?そいつは精霊界にいる者たちと契約をしているからできること」

「ふもっふ」

「じゃあ悪魔がいるなら天使もいるのか?」

「ああ、いるぞ」

「どうしてそう言い切れるの?」

「あったことあるから」

『・・・・・・』

話が超スケールすぎてあまりに観客席の皆さんも見ている皆さんもついていけないようだ

「えーと、じゃあ総帥のデバイスについて」

「デバイスか、なのかはよくわからんがＺＥＲＯ」

『なんですか？』

「わ～レイジングハートと同じですね。色違うけど」

ＺＥＲＯの形はレイジングハートそのまんまで色は漆黒

「だって、ＺＥＲＯを基にしてレイジングハートを造ったんだもん」

『えっーーー！？』

「どうしてまたそんなことを？」

「まぁ色々と研究のために」

「そうなんですか」

「そうなんです」

『・・・』

お姉さんは意地でもその理由を聞き出そうとしていたが無理だった

「じゃあ話かわるけどＺＥＲＯのあのモードケルベロスってなに？」

「あーアレは俺が好んで使う形態（モード）だから名前つけたんだ。ちなみに

これが本来の形ではなくいや、ないと言った方がいいなＺＥＲＯはＴＰＣ（時　場所　状況）システムを積んでいる。これがあればもっともその時にあった戦術と地形、状況にあわせた武装を選び戦うことができる」

「それってなんてチート？」

「チートではないだろう。昔から人はそれに適した戦い方をしてきた。それは卑怯ではない」

「まぁそうだけど・・（この話題はもう終わりにすべきね。それにボン太くんの中の人もそろそろ限界だろうし）」

「じゃあこれはここまででいいな。じゃあ次が最後の質問だ」

―良かった。レイも察してくれたみたいね

「では、最後の質問はＰ・Ｎお茶は甘党さんからでプレシア女史とはどういう関係だったのか。だそうです」

「そうだな、簡単に言えば俺の教え子だった。かな」

「へーそれじゃあ学生の頃から彼女を知っていたの？」

「ああ」

「ふもふもふもふ」

「昔の彼女はどうだった？」

「そりゃあ美人だった。ミスコンにも出たような出なかったような・・・。それにあいつの初恋相手、俺だし」

『は！？』

「それにあいつの初めての・・・」

ゴクリ

「キスを奪ったのも俺だぞ？」

バタバタ

期待をしてみればそうきたか

「あっそうそう。タイトルは違うがこのなぜなにの前バージョンでは初めてあいつがお姉さん役をしたっけ。懐かしいな～」

現に思い出話へと突入
お姉さんはめんどくさくなったので

「それじゃあ先生の爆弾発言はおいといて今日のなぜなにはここまで！」

「ふもふもふもっふー！」

「ふふっ、ボン太くんが次回をお楽しみにだそうよ。それじゃあ皆またどこかであいましょう。バイバイ」

「ふもふも」

Ｅｎｄ

と映像にはいる

「あいつが恥ずかしがる服をきせてだな・・・パチン！・・・・・・」

放送が終わっても彼の声が聞こえたがなにかハリセンみたいの音がなると本当に放送は終わった。

放送会場

「いってーって、マリアお前それをどこで！？」

「これ？そこで拾ったのよ」

マリアが持っているのは普通のハリセンだ。どこでも見るハリセンだ。

よく突っ込むのに使うハリセンだ。

大事なことなので三回言いました

「そ、それはどんな暴走した奴でもとめられる古代遺産（ロストロギア）！その名も『かなめ専用ハリセン』だ！」

「人の名前でてるわよ」

「しかし、あまりに便利だから借りパクしたままどこかにやってたと思ったら落ちていたのか。それよりアイツ大丈夫か？」

「ふももももももも！（怒？）」

「あっごめん歩！」

マリアはボン太くんの頭をとってあげた

「な、なんだこれは！？」

「何って最終決戦兵器ボン太くん」

「何が最終兵器だ！？言語がすべてふもとかふもっふだぞ！」

「それがこいつの謎なんだよ。知人から譲り受けたのだがボイスチェンジャーが壊れてるとかないとかで。でも、こいつのボディーは銃弾を弾きそして見た目は着ぐるみとは思えない機動性を有しているのだ！」

「威張って言うことかしら」

ちなみに彼がしゃべっていたことをいくつか現すと

最初のあいさつのとき

「歩だ」

「あー俺の声が通じているか？」

「おい、聞こえているのかマリア！」

などなどで実はほとんどマリアのアドリブなのである

「まぁマリアには救われたな。歩」

「どこがだ・・・」

「さて、これ出演料。それとこのこと向こうの奴らに言うなよ？」

「わかってるって。連絡もらったときは驚いたけどね」

彼は小切手の入った封筒を二人に渡した

「それじゃあ俺たちは帰らせてもらう」

「ああ、場所は六課でいいな？」

「ええ」

『ゲート解放。次元連結システム解除。座標固定いけます』

「・・・じゃあまた、必要となったら呼ぶよ」

「できればなぜなに以外で呼んでくれ」

「まったく、本当楽しかったくせに―」

・・・・

『転送完了。二人は無事送り届けました』

「ありがとうＺＥＲＯ。さて、アリシアとフェイトとの所にいくか。もう、仲良くやってるだろう」

「そうだといいですね。ところでなのはにはどう伝えておくんですか？」

「あ」

なのははここいないことに今気付いたレイだった。

「まぁ録画しておいた奴をみたあとでまた色々と言っておけばいいだろう」

『そうですね。まぁ彼女なら友達になってくれるでしょうし』

と先のことはあまり考えていないお二方でした

おまけその１

「ｐｐｐｐｐｐガチャ。あっ、俺だ。レイだけど」

『これはレイ殿お久しぶりです。今日はどうなされてたのですか？』

「いや、今日お前に貰ったボン太くん弐型を使ってみたんだがやっぱボイスチェンジャー駄目だわ。他は良好だったが」

『そうですか。知人の技術者に協力してもらったのですがやはり原因は不明でして』

「そっか。俺も調べてみたけど駄目だった。まぁそこがいいんだか。それとかなめに謝っといてくれないか？」

『なにをです？』

「いや、実はあいつのハリセン黙って借りたままでさ、さっき見つかったんだけど結構使えるからこのまま貰っておくって言っておいて」

『い、いや、その・・・自分が、でありますか？』

「なんならテッサに頼んでいってもうらんでもいいけど」

『大佐殿もちょっと・・・』

「まぁいやならいいよ。それと武器の発注をあとで頼みたいんだが」

『はい、それでしたら』

「ああ、それじゃあリストあとで送るから頼むわ」

『了解しました。では自分はこれで』

「ああ、またな宗介」

ガチャ

その2

「はー心臓に悪いわ。あの悪夢が・・」

某艦長は通路でガクリと頭をさげ歩いていた

「このままいけばきっと・・・」

「というわけでそろそろお前に出てもらぞ?2代目お姉さん?」

ザッ!

彼女は声が聞こえた瞬間走りだした。

悪夢から解放されるためなにより自分の命がかっている

「縛」

「キャ!」

彼女の身体は鎖に縛られたかのように動かない

「別にやることに不満があるわけじゃないだろう?」

「それはわかってます!けど、またあんな目に遭うと思うと・・・」

「まったく、あれは俺もわるかったと思うが・・・3代目が現れない以上お前に当分はやってもうらしかないんだ。頼むよ、リンディ」

「／／／

マ「そう?私はこんな可愛い制服着れて嬉しいけど?」

歩「お前はそうでも俺はわけのわからん着ぐるみを着せられたんだぞ!」

マ「まぁまぁ、でもアレ可愛いわね。ぬいぐるみとかないの?」

仁「あっありますよ。はい、これお土産にどうぞ。あっその制服もあげる」

マ「ありがとう♪にしても、ボン太くん?だっけ可愛いわね」

歩「なんだか、侮れない熊だな」

仁「熊かどうかは知らないけどね。
さて、今回はお二人ともありがとう!暇人さんもありがとうございます!今度は天使編なそうなので皆さんもみてくださいね!」

その後ボン太くんの魅力に魅了されたお二人でした。

第１５話　死者生還（後書き）

まず、神代行者について
これはヴァルキリ―コンプレックスを知っているかたはわかると思いますがまぁ言葉の通りです
次に賢者の石ですが鋼のを連想してください。それらしい二人出てますけど
詳しくはアリシアの紹介にてかこうと思っていますのでお願いします

どうだったでしょうか？
自分でも明確ではないのですが映画であんなことを言っていたような気がするんですよね。ＴＶみたらアレないじゃんという展開でした。
けど、アリシアは自分のなかで復活させたかったのです！だって、可愛そうじゃん。
プレシアは途中口調が変わったのに違和感をもった方もいると思いますがすみません。想像としてはアリシアといたころのプレシアを想像して笑顔顔を思い描いてください。

今回暇人さんからゲスト出演させていただきました。本当にありがとうございました！

次回はこの話で、別の場所でアリシアとフェイトが対面していた所をかくと思います。
それとアリシアなのですが私の中のアリシアをかくと思うので半分オリキャラ化すると思われます。よろしければ皆さんが思っているアリシアを教えていただくと参考になります。

ちなみに私はフェイトの逆で活発な?イメージがあります。フェイトはおとなしいイメージがありますから

では、次回にまた!

第１６話　対面（前書き）

今回はなぜなにが放送されているときアリシアとフェイトが対面していたときの話になります。

一応レイがいったことをアリシアが補完する感じやってみたけどうまくできたかは自信がありません・・・

それとなのはは名前だけで出てこない

酷

第16話　対面

なぜなにナデシコが放送される数分前

フェイトがいる部屋の前

コンコン

「どうぞ」

「フェイト調子はどうだ？」

「兄さん、うんいいよ。今日はどうし、た、の・・・・」

言葉が詰まった。

なぜなら彼の後ろにはいないはずの人物がいるのだから

「初めまして。あなたがフェイト？」

『！！！！』

そう目の前にはアリシアがいるのだ。それに、かつて自分に魔法を教えてくれたリニスも

「じゃあ、俺は放送があるから」

「うん、頑張ってレイ」

「いってらっしゃい」
彼は投げだしたように逃げた。
『・・・・・・』
『・・・・・・』
それからしばらく無言の状態が続いた。
理由は簡単だ。いや、普通こうなるのが当然だろう
「3」
「2」
「1」
こんな重い空気をなんとかしてくれるものがやってきた
「あれ、これ・・・」
「あー！これしかして母さんが前に言ってたやつだ！」
「あ、アリシアは知ってるの？」
「うん！なんでもレイが先生でね、色んなことを教えてくれるんだって」
「へ、へー」
―な、なぁリニス？
―なんですか、アルフ？

互いの使い魔は主に内緒で念話していた

―これは、いったいどういうことだい？あたいにはさっぱり・・

―これを見ていればわかります

『なんであの子が生きてるの？』

「あ―」

フェイトはつい口を漏らしてしまった。

アリシアをみるがあまり気にしていなさそうだった

「別に気にしなくても平気だよ？私、ずっと見てたから」

「見てたって？」

「死んだあとね？私ずっとレイの傍にいたの。私もよくわからないんだけど魂として私は今存在してるんだって。それからずっとレイの隣でレイと一緒に色んなところにいったりみたりしてきたの」

「ちょっとわからない」

「だよね（笑）私もあまり死んだって実感なかったもん。けど、こうしてまた身体を動かしてるとね？ああ、私は死んでたんだ。って思うんだ。ははっ変でしょ？」

「う、うん」

フェイトはとりあえず頷くしかなかった

―私、どうしたらいいの？

今のフェイトにはそれしか考えられなかった。

『まだ、幼い命を散らしてしまったこと。プレシアの起こした実験によりあの子は命を落としてしまった。世論は彼女を叩いた。けど、俺は違った。例え総帥でも権限が行きとどかないところもある。俺がもっとちゃんとしていれば・・・いや、話がずれてしまったな。とにかく答えは簡単。プレシアと同じさ。ただ生き返させたかった。それだけだ』

―兄さんはやっぱりアリシアのこと・・・

フェイトは彼の思いは自分ではなく彼女の方のが強いと思った。どんなに優しくしてくれたって現にアリシアを生き返させたのだから。

「あーあ。レイってばあんなこと言ってる」

「えっ？」

「あんなこと言ってるけど本当はね？レイも悲しかったの。けど、レイってそういうの表に出さないううん、出せないの。だから、母さんに酷いこと言っていても本当は母さんと同じくらい悲しくて私のことを思っていたんだ。あんなこと言ってるけどね。もし、フェイトが私だったらきっとそう」

「そんなこと・・・」

なぐさめて欲しくなんかない

「フェイトのこともレイと一緒にみてたよ？私と同じくらいレイはフェイトのこと思ってた。フェイトは私を羨ましいって思ってるけど私もフェイトが羨ましかったんだよ？」

「そうなの？」

「そうだよ。だって、現にフェイトを心配して毎日来てる」

「うん―。それならアリシアだって」

「うん、だからそういうことなんだと思うの。ねぇフェイトは私が嫌い？」

「そんなこと！」

「良かった。私嫌われてると思ったの。フェイトがお母さんにその―あいゆうことされてたから」

「そんなことないよ！確かに羨ましかったよ？母さんに愛されてて、娘だって思われて」

「そっか、けどね？最後に母さんフェイトのことごめんって酷いことしてごめんって言ってた。だから、フェイトはちゃんとお母さんの娘で私の妹！」

「い、妹！？」

「だって、そういうことになるんでしょ？」

「そ、そうなのリニス？」

今まで何も言わなかったリニスに聞く

「え、ええ、そういうことになりますよ。あなたはアリシアの後に生まれたことになりますから」

「でもさぁ、どうみてもフェイトがお姉さんにしか見えないよね？」

確かにそう言われるとそうだろう。

なぜならアリシアは死んだときから身体の成長は止まっているのだから

「それなら心配ありません。レイ曰く、止まっていた時間を取り戻そうと常人より少し成長が早いそうです。だから、少ししたらフェイトより少し大きくなります」

「そうなんだ。凄いなぁレイは」

「じゃあフェイト。私のことお姉ちゃんって呼んで！」

「唐突すぎるよ！・・・お、おね・・」

その割には言おうとしているけど

「ワクワク」

「おねえ・・・だめ、できない・・」

「・・・まぁ仕方がないよね。いきなりお姉ちゃんなんて。とりあえずアリシアでいいよ。フェイト」

「うん、アリシア」

互いに名前を呼び合う
フェイトはなのはに呼ばれたときと同じぐらい嬉しかった。

するとなぜなにでレイが学生時代のプレシアを知っているという話になっていた

「母さんの初恋って兄さんだったんだ」

「まぁお母さんもそれ隠してたみたい。私もレイに聞いたから知ってたけど。それにね？お母さんこれの初代お姉さんだったんだって」

「えっ、こ、これに！？」

「うん、写真みせてもらったんだけど凄いよ。短いスカート穿いてなんかコスプレ？みたいな服着てたんだよ」

―それを着て恥ずかしがってる母さんみてみたい

そんな表情の彼女をみたことがないのでそのギャップに萌える

「あとでレイに見せてもらおう」

「う、うん！」

これからの生活が少し楽しくなりそうだと思ったフェイトだった。

それから数十分後最初の重たい空気が嘘のように二人は自然と話し合っていた。
そんな二人をリニスとアルフは笑顔で見守っていた

―そういえば、リニスはアリシアの使い魔なのかい？
―ええ、どうやったかは知りませんけどもう一度この身体を生み出して前の私からとった記憶を植え付けたと彼は言ってましたがまぁ細かいことは考えないほうがいいですよ
―そうだよね、あいつのことだから

レイが係わっていると思うと深く考えただけで頭が重くなりそうだ

「よー調子はどうだ？」

すると放送が終わって今回の現況が帰ってきた。
着替えていない？のか白衣と伊達眼鏡を装備している。

「あっレイ。おかえり」

「ああ、ただいま」

「よっと」

レイが向かい側のベットに座るとアリシアは彼の膝の上に座った

フェイトはそれを羨ましいそうに見ていた。

―いいな・・・・

「ねぇ、レイ?」

「なんだ?」

「フェイトにもアレ見せてあげて、母さんのアレ」

「ああ、アレか。確かここに・・・・あっあった。ほら、フェイト」

そう差し出したのは驚くべき姿のプレシアだった。

学生時代ということもありかなり若くさらに短いスカートをはき恐らく伊達眼鏡（なんかフレームが丸いやつ）＋白衣を着ていた。少し恥ずかしいのかスカートの裾を下におろす感じで前かがみになっておりそんな彼女を腹を押さえながら大爆笑している彼がいる

「k、かわいい・・・」

「ほんと、これがあのプレシアなのかい?」

「ああ、当時その学校は物凄く長いスカートでな。それで試しに着せたら・・ぷっもの凄く似合ってな?それからプレシアファンクラブまでできたほどだからな（笑）」

「母さん可愛い」

なにより笑ってって色んな表情していることに新鮮さを覚えた

「あっまだある」

二枚目はそれを怒った彼女が杖を持ちだし彼を襲うところだった。
起こった表情も可愛かった。
さらに、三枚目はボロボロになった二人が並んでたって撮っている写真だった。

「ところでレイとプレシアはどういう出会いをしたんだい？」

「まぁ簡単に言えば俺が遊びで教師生活してるときにあいつに出会ったかな。詳しいことはあとで話してやるよ。そうそう、フェイト。なのはからビデオレター預かってるぞ」

「ありがとう兄さん」

一応フェイトは重要参考人酷くいえば共犯者だ。だから、いくら協力者のなのはでも面会は難しかった。だから、ビデオレターという形で連絡をとっていた。
最近ではアリサ、すずかにもフェイトに紹介してしようとしているらしい。
しかし、ここでレイの悪だくみが

「ああ、これいいな。アリシア。お前これでなのはにあいさつすればいいんじゃね？」

「また、唐突な。でもいいかもしれませんね。私のことも紹介しておきたいですし」

「だろだろ」

「私もなのはちゃんと話してみたい！」

本人たちもやる気なのでではさっそくとレイはある程度のセットを持ってきてた。

監督レイ
カメラマンレイ
編集レイ

どっかでみたことある項目がまた現れた。

「まぁ出始めは「実はなのはに紹介したい人がいるんだ」（棒読み）だな」

「そのあとは？」

「適当にやればいい」

―うわー投げやりだ

それからしばらくレイ監督の元ビデオレター制作が続いた。

言うまでもないがそのことにレイ“だけ”リンディに叱られた。

第16話　対面（後書き）

皆さんの脳内変換ならプレシアの姿を変換できるはず！
改めてプレシアの境遇が可愛そうと思ったので自分はいや、レイがこういう形で彼女を救済するという感じでやってみました。

さて、フェイトもアリシアも仲良くなったしあとはどうつなげるかだなのは「ところで今回私名前だけだよ」

仕方ない

「仕方ないで済ませるの・・・？」

だから、その冷たい視線を向けるな！
だが、安心しろ。お前にはレイとのデートフラグが立っている

「あっ忘れてた。でも、ちゃんとやるんでしょうね？」

・・・普通のデートにはならないかも

「・・・ジャキ（レイジングハートを構えるなのは）」

だが、まて。このデートはほかの奴らを大きく引き離すことができるのだぞ？

「まぁ、そういうことなら」

ふー（なんとか一命はとりとめた）

あっそれとレイのことなんですが一番例にしやすいキャラクターがみつかりましたので報告します。
ガンダム００Ｉで登場するラーズ・グリースが一番しっくりくると思います。黒いしコート来てるし長髪だし。
わからない方はヤホーで検索すればでると思われます。あまり、知られてないキャラですみません。
でも、逆にそっちの方がおもしろい？

さて、次回はアリシア、リニスの紹介をしようと思います。一応オリキャラ扱いさせていただきます。
では、次回でまた！

オリキャラ紹介2（前書き）

一応公式キャラですがこの作品ではオリキャラですので一応こういうことにしておきたいと思います。前回みたいな書き方はつかれるのでやめました。

※案がまとまったので改変しました。

オリキャラ紹介2

アリシア・テスタロッサ

年齢　5歳　（死んでいたため）

出身　ミッドチルダ

外見　フェイトとまったく同じであり基は彼女である。唯一違うと言えばリボンが緑色であること。

性格　大人相手にも物怖じしない活発で明るい性格でありおとなしいフェイトとは逆の性格

使い魔　リニス

デバイス　現在は所持していませんがこれから登場の予定

魔法術式　ミッド式

魔法変換資質　雷

魔術属性　大地　自然

魔導師ランク　不明

魔力色　緑

備考

原作では魔法資質はないとありますが付けました。さらに変換資質もつけ雷に。しかし、フェイトほどではない。（例フェイトがライチュウで、アリシアがピチューみたいな感じです）
大地（アース）、自然（ネイチャー）の魔術を使うことができる。詳しくは彼女がデバイスを手にしたときに記述する予定。こうみると雷はおまけ。技の混合などに用いる。
そのため普段の魔力色は緑ですが雷を使うと黄色になります。
魔導師ランクはこれからの予定です。

リニス

年齢　不明

性格　お姉さんタイプとかしつけ役みたいな感じです

主　アリシア・テスタロッサ

能力　猫に変身できる

魔法術式　ミッド式

魔導師ランク　不明　推定ＡＡ

デバイス　所持しない

備考
アリシアの使い魔として三度目の生を受けた。
フェイトに魔法を教えていたこともあり恐らくランクは上記のものだと思います。リニスはアルフと違い肉弾戦ではなく中距離、遠距

離の支援型または隠密に優れているという設定にしました。

デバイス紹介

ＺＥＲＯ
インテリジェントデバイスである。声は女。性格はレイと同様にマイペースな性格。

機体能力
ＴＰＣシステム
これはレイ独自に開発したシステムであり固有形態をもたず時、場所、状況にあった形態に変形する。しかし、ほとんどレイの好みで変形している。

今現在確認さている形態
ケルベロス
二丁拳銃で片方が赤　もう片方が青
弾は無尽蔵。これは倉庫と呼ばれるところから供給されているため

倉庫
固有世界とも置き換えることができそこには使用者の私物が保管されている。武器から色んなものまである。ちなみにホワイトボードとか衣装もある。ちなみにボン太くんも。

宝物庫
名の通り宝が納められている。
現在確認されているのは聖剣デュランダル。賢者の石。

彼が色んな世界を廻った時に回収あるいは保管などしたときに造られた。
ほとんどが空想上、神話などに登場するばかりの代物。

最終決戦兵器　ボン太くん二型

レイがとある知人から“買った”もの。
それからというものレイ独自に改良を重ね最終的には量産。対管理局襲撃要因を考案しこれを配備しているとかないとか。
銃弾を弾く毛皮でレイにより核ミサイルにも耐えられるという優れモノ。さらにはＡＭＦも搭載し魔法なんて聞かないＺＥ☆しかも、格闘戦もこなす凄い奴。さらに着ると搭乗者の特徴が現れるというもの。

こいつに死角はない

だが、ボイスチェンジャーだけは治せない。

何故か

一般局員の色はネズミ色。その上、提督とか有名人とかは黄色。
レイ専用も存在しブラックボン太くんＦＩＮＡＬ

レイ自体これを古代遺産（ロストロギア）にすべきだと言うが周りが認めないらしい。
実戦配備もそれで否定された。

「あとで後悔しても知らないからな？」

と言葉を残しボン太くん防衛計画は白紙となった。
それでも総帥権限として上記の要因により配備されてはいる

レイ専用　ブラックボン太くんＦＩＮＡＬ

ボン太くんの究極の姿。
ボン太線を内蔵しそれは神をも超える

オリキャラ紹介2（後書き）

あれ、ボン太くんが優遇されているような・・・・
ちなみに対管理局襲撃要因は実際に設定として考えています。

アリシアもリニスもこれかの事件とかに参戦です。デバイスはもう少し待ってくださいね。

次回はレイメインの話の予定

第17話　神の代行者（前書き）

ここでは神の代行者についてかいた話になります。

それとアリシアの変換資質についてですがアドバイスをもらったのですぐ書きなおすので見てみてください

第17話　神の代行者

とある日のこと

「レイくん、もう朝だよ」

もう学校にいく時間のなのははまだ寝ている彼を起こそうと必死だった

「もー。レイジングハート。どうしたら起きるかな？」

『・・・恐らく日ごろの疲れがたまっていたんでしょう。今は寝かせてあげましょう』

「う、うん。レイジングハートがそういうなら」

（恐らく呼ばれたんでしょうね）

「じゃあいってくるね、レイくん」

果たしてその言葉届いたのかはわからない

？？？？

「・・・・・なんだ。今日は精神だけか」

俺の名はレイ。

気がつけばとある場所に着ていた。
しかし、ここに来たのは初めてではない

「となると・・・・・は！」

「ドドドドド・・・レ～イ～♪」

「ちっ！」

何かが彼に迫っている。
レイはとっさにそれを避ける。

「残念～ここでは無意味なことよ♪」

「は、離せ！」

いつのまにか背後に回られ腕を組まれてしまう

「だ～め♪先の件で罰として今日は私に付き合ってもうらんだから」

「はーわかった。わかったから腕をくむのは止めてくれ。フィリーヤ」

自称愛の神と言うがどうみても違うだろう。

「だ～め♪」

結局腕を組んだまま目的地へ歩くことになったレイ
そこは不思議な場所で聖域とも言ってもいいだろう。ギリシャにある神殿に似たような建造物や宙に浮いている島?

地上は川と自然しかない。

「それにしてもいくら代行者だからって人を生き返させるのはやりすぎよ、レイ」

「蘇生じゃなくて魂の定着だ」

「けど、やってることに変わりはないわ。忘れてないわよね？あなたを良いと思っていない神だっているってこと」

「わかってるさ」

代行者

それは神に認めらし者が神に代わって世界を見守る、監視するという役割を担う。

俺は遠い昔神に召喚された。

最初はなにがなんだかわかなくて攻撃したっけ？本当に強くて手も足も出なかったわけではないが多分本気を出されたら負けていただろう。神だから。

それ以来俺は神の代行者としての人生を歩んでいる。

管理局に留まらないのはそれが理由の一つでもある。

「人間が神を殺すということは神殺しを背負うこと。それは未来永劫最も重い罪を背負うこと」

「別に殺すつもりはないさ。理由がないし」

「理由があったら？」

「まぁ、戦う」

殺すではなく戦うと言いかえた。
それに気付かない神ではなかった。

「そうね、まぁそんなことないけど。それより、あのなのはって子誰？それに、フェイトとかアリシアとかリンディとか。それにプレシアって女にキスされてたけど・・・もしかして―う・わ・きぃ？（怒）」

ミシミシ

お、俺の左腕が悲鳴をあげているぅーー！

愛の神とは名ばかり。嫉妬神に言いかえた方がいいな
ここで彼女について紹介しよう
自称愛の神　フェリーヤ
なんでも俺を代行者に推薦した一人でもあるらしい。
彼女自身を語るならまぁＶＣ（ヴァルキリーコンプレックス）のフェリーヤそのもの（大人版）
ルックスは神的に最高と言っておこう。
性格は言うまでもなくこうだ

「う、浮気もなにも付き合ってすらいないだろ！」

「酷い！あの夜に言ったことは嘘なの！？」

「勝手なこと言うな！」

「ちぇー」

本当に愛の神か？なんだかそうは思えない

「まったく。で、今日はなんで呼んだんだ？これだけじゃないだろ？」

先のアリシアの件で呼ばれたのはわかっている。だから、なんらかの罰があるのだろうとは思っていた。

「ないわよ」

「はあ？」

「だから、今日は一日私に付き添えばいいのよ」

「いや、だから・・」

「さー全は急げよ！」

もうどうにでもなれ

レイは身体を彼女に任せた。

全速力で走るフェリーヤ。

ああ、人は引っ張られるだけで宙に浮くんだ

初めてレイはそう思った。

そして、フェリーヤの家らしき場所の庭園

二人は雅に紅茶を飲んでいた。

いや、神がティータイムってどうよ？

「ところで、あなたルシファーと戦ったんですって？」

「ああ」

流石神。なんでもお見通しだな。

「しかし、まぁ奴も本気じゃないとはいえよく勝てたわね―それはレイも同じか」

「そうだな。互いに本気はださなかったがなんとか勝ったって感じ」

「ふ～ん。そういえばあなた人間を除いてどのくらい契約しているの？」

「えーと、神はお前とあと何人か。天使と悪魔はそれなりに。精霊はほとんどだな」

「結構いるわね。ルシファーは奴らと契約したのかしら？」

「多分してないな」

「どうして？」

理由は簡単。
死人が悪魔と契約できるわけがない。さらに、何人も契約の代償として生贄になっていた。
その上ルシファー自身完全に召喚できていない。しかも、ルシファーに殺されてたしな

「じゃあ、最後に召喚したのって誰？」

「どこも問わないなら天使長のリンだな」

「リンってあのプリンシパール？」

「そっ」

あいつ天使のくせに私には生意気なのよね～（怒）
特にレイがいるときなんて生意気ったらありゃしない！

「で、どういう時に召喚したの？」

「かなり前だからあんま覚えてないが確か奴らと戦ってる時に」

その時は確かめんどくさかったから召喚したんだっけ？
彼女とはリン愛称で呼び合う仲だ。他の天使と比べれば彼女を召喚する回数が多い
けど、召喚するたびに色々とある。
デートされたり、デートさせられたり、デートを強制されたり
大事なことなので三回（ｒｙ

まぁ嫌いじゃないんだが

「ふーん」

そのふーんにどれだけの意味がこめられていることだろうか

「ねぇ今度私を召喚してよ？」

「お前自分で何言ってるかわかってんのか？」

人間が神を召喚するなどありえない話だ。

いや、俺なら可能だが・・・

「いいじゃない♪私たち神は自分で地上界に降りることは許されない。だから、ねっ！？」

地上界とは我々人間が住む世界を指す。人界ともいう。天使が天界。悪魔が魔界。精霊が精霊界。神の世界を神界（じんかい）という。そのまま神が住まう世界とか神の世界ともいうらしいが。

「ねっ。じゃない。理由がない」

「理由ならあるわ」

「ほー言ってみろ」

「私がレイとデートするため！」

「威張って言うことか！仮にも神だろお前！」

「神なんて役職捨ててやるわよ。愛のためならどんな障害も恐くはないわ！」

駄目だこいつ早くなんとかしないと
頭を押さえながらレイは思った。
言ってることはカッコイイんだが・・・
「ねっ・・・良いでしょうレイィ？」
今度は捨てられた子猫のような顔をして迫ってきた
その顔には弱いんだよ・・・
「ああ、考えておく」
「だから、レイのこと大好き♪」
はぁー
自分が情けない
「けど、代行者の権限で神を地上界に呼べるんじゃなかったか？」
「ピンと来た！それよ！」
あれ地雷踏んだ？
いえ墓穴をほったという。

「・・・じゃあちゃんと―呼んでね」

今度は前から抱きついて俺を誘惑しているのだろう。

「わかったらか抱きつくな」

「もう、照れ屋さんなんだから」

会話だけでかなり疲れた

「それと奴ら最近かなり裏で動いてるわよ？」

奴らとは黄金の夜明け団のことだ

「わかってる。先の庭園で恐らくプレシアの部屋から資料を盗んだのはわかってる」

「人造魔導師の生製・・・我々神は手をだせないけどわかってるんでしょ」

「まぁ、どうせ模造品しか造れんさ。問題は幹部とアレスターだ。あいつらのことだから悪魔とは契約してるか。それとも地獄の釜をあけて何かを出すか・・・」

人造魔導師をつくれるほどの魔術師はそんなにはいない。それに資料だけでは限界がある。

「でも、悪魔の半分は契約してるんじゃなかったっけ？」

「まぁ形だけ。どちらかといえばあいつら俺と戦いだけだから」

「そうだったわね。あの脳みそ筋肉ども」

ほとんどが闘争本能しかないとフェリーヤは思ってるんだろうな。

「けど、あなたの最大の目的は」

「―復讐か。最近すっかり忘れてた。まぁ復讐もその一つだがいや、最初は復讐で動いていたがいまはどうでもいいのかもしれないな」

そうは言ったってその時になれば復讐に走るのはわかってるのよ

それがいつも彼をみていてわかっていること

「じゃあ、俺は帰るぞ」

「えーもうぉ～」

「俺だって暇じゃないんだよ。ドライの調整で忙しいんだから」

「あの子のデバイス?まったくこのロリコン」

「俺は神士だ」

「へん―すみません」

あまりに恐い顔で睨まれたのでそのあとのことは言えなかった。

ていうか神に誤らせるなんていい度胸してるわね。

けど、そこがいいんだけど

「じゃあ、送るわ。感謝してよね。都合があると思って精神だけにしたんだから」

「わかってる。ありがとフェリーヤ」

「じゃあ・・・」

どうみてもキスを求めている。
絶対しなきゃ帰してくれないよな

「・・・っ・・・」

チュ

彼は彼女の頬にキスをした

「―けち」
「るっせい」

「じゃあよろしく～♪」

「はぁー、わかってる」

今日何度目の溜息だろうか

薄れゆく意識の中で彼女は手を振っていた。

その後戻った時にはすでに夕方だった。

なのはには寝過ぎと言われたが精神だけは起きてたと言っても信じては貰えないと思ったのでまた俺は寝た

―そう言えばなのはとデートどうしようかな。この姿だと色々と社会的にまずいし・・・ああドライの調整も・・・・

彼女の相手に疲れたのか今日もぐっすり眠れたレイでした。

第17話　神の代行者（後書き）

まず、フィリーヤはＶＣの愛の女神。天使長のプリンシパールはバトルスピリッツのカードになります。
もっとちゃんとしたのにしろよろと思ったのですが好きなんです。
多分良い例になると思ったのでこれからもすると思われます。

「そんなことどうでもいいからここ私がジャックしたわ」

フェリーヤおまっ！

フ「どうも、愛の神フィリーヤです♪愛の神だけど私の愛はレイだけだから」

えー先にでたゾッコンＬＯＶＥの神は彼女です・・・（汗）

フ「そして、本日やっと登場よ。今日はあいさつだけだから」

よかった

フ「ちゃんと書いてよね？」

ぎぃふぅ！

フ「書かないとお仕置きだから」

い、イエッサー

えーと次回ですがなのはとデートはまだまとまっていないのであと

になります。
たぶんアリシアのデバイスになるだろうと思います。
ではまた次回で

第１８話　ハルバード（前書き）

さて、アリシアのデバイス登場です。
魔術とかの説明がありますが少し難しい説明になってしまったかもしれません。
すみません。
では、どうぞ

第１８話　ハルバード

レイの固有空間

カンカン

ビッビビビ

ハンマーで鉄を叩く音。
バーナーで鉄を切断する音がその部屋に響いている。
そこでは現在ある物の製作をしている。
工場（ファクトリー）と呼ばれるレイの固有世界または私空間と呼ばれる場所で彼は一人それに没頭している。
彼の周りには待機状態のＺＥＲＯ、レイジングハート、バルディッシュがいる。
彼の目の前には待機状態のデバイスがある。形は６角形の緑色をしたものだった。

「ふーとりあえずひと段落だな。ツヴァイの実戦データでだいたいの作業は捗ったし」

彼が言うツヴァイとはバルディッシュのことである。正式名称はバルディッシュだがツヴァイと言う名はレイがデバイスたちにつけた開発コードである。彼はそれを気にいっておりその愛称で呼んでいた。ＺＥＲＯはそのままだがレイジングハートはアインと呼んでいる。

「ドライ、調子はどうだ？」

『はい、特に問題はありません』

そして、これにつけられた名がドライと言う名の開発コードである。

「さて、あとは正式名称だが・・・バルディッシュはそのモチーフとなった斧を参考というかそのまま付けたんだよな。それならドライもそれでいっか」

『まったく、相変わらずネーミングセンスはないんですから』

この４機の中で一番付き合いが古いＺＥＲＯは彼のネーミングセンスのなさに呆れているのだ。

「じゃあ、お前なにかあるのか？」

『・・・・』

ＺＥＲＯはなにも言わない。

無言の答えはなにも考えていないということだ

「ほら、お前だってそうじゃないか。人のこと言えないんだよ」

不思議とその会話は主人と僕というより友達みたいな会話だった。

「さて、名前は・・・・そうだな、ハルバード。うん、それがいい」

『結局そのまんまじゃん』

デバイスたちはモチーフになった武器の名前そのものだということ

を知っていたのだ。

「さて、さっそくアリシアの届けにいくか」

『喜んでくれるといいですね』

「そうだな。これでも色々試行錯誤して考えたからな」

『フェイトの時もそうだったんですか？』

「もちろん」

軽くそれを言えるんだから凄いよね。

「ゲート解放。場所はアースラ」

すると彼の前の前に光の扉が現れた。
彼はドアノブに手をかけそのまま扉をあける。
そして、彼らはそのまま扉の奥にはいり消えていった。

ｓｉｄｅＥｎｄ

アースラアリシアの私室

今現在アリシアはアースラにやっかいになっている。
さすがにフェイトと一緒にいさせられないのが今の現状。
しかし、問題はそこではないのだ。
死んだ人間が生きている。これが問題なのだ。アースラクルーはいくら事情を知っているとはいえ世間はそれを認めないだろう。さら

に、プレシア自体有名な人物。その死んだ娘が生きている。マスコミがこれほどのネタを使わないとは思えない。
そこで、我らが総帥が言ったことは

「俺の知人にアリシアは実は生きてました。という情報をながせばいい。それか俺が全人類にアリシアは死んでいなかったっていう情報を植え付けるが？」

つまり簡単にいえば情報操作だ。
レイはそれを影で実行したらしくその効果は本当のものとなっていた。
あるクルーが知人にそういうことを聞いたらなんか奇跡的に生き延びたんだってとか言っていたらしい。

恐るべし。

そして、その元凶である彼は工場から直行でアリシアに会いに来ていた。

「おっす、アリシア」

「あーレイ！どうしたの？」

アリシアはリニスと一緒に魔法について勉強していたようだ。
それを指導したのはレイだが

「実はお前にプレゼントがある」

「えーなになに♪？」

まるで新しい玩具を買ってもらえるような子供だ

「お前のデバイス『ハルバード』だ」

彼の手から差し出されそのまま彼女の左手につけてあげる。
それはブレスレットで待機状態のハルバードはブレスレットにぶら下がっているという形になる。
左手なのは彼女が左利きだからだ。

「ハルバード、ということはバルディッシュと同じ戦斧ですか？」

リニスはハルバードと言う名を知っていたらしい。
彼女もバルディッシュを造ったというよりレイが途中から協力していたのでバルディッシュは彼女の作品とも言える。

「さすがリニス」

「じ～ハルバード？」

『はい、なんですかアリシア？』

「マスターではなく名前で呼ぶんですか？この子」

大半のデバイスは自分の主をマスターと呼ぶのが多いのが一般的だ。

「ああ、アリシアのイメージを考えるとマスターとかそういうのより友達みたいな感じのがいいと思ったんでな」

「よろしく、ハルバード！」

『はい、こちらもよろしくお願いします』

ハルバードの声は男だ。一応バルディッシュの弟という位置づけだ。
彼が造ったデバイスはあるいみ姉弟みたいな関係なのだ
ＺＥＲＯ＞レイジングハート＞バルディッシュ＞ハルバードとＺＥＲＯが長女ならバルディッシュは長男ということになるがＺＥＲＯには誰も頭があがらないのだ。

「さて、細かいことは別の場所で。ゲート解放。訓練所へ」

先ほどと同じ扉が現れる。

「さぁ行こうか」

「は～い」

「私もですか？」

『もちろん』

レイとアリシアに同時に言われた。

「はぁー」

溜息をつきながら扉をくぐる。
リニスは別にいくのがいやなわけではない。ただ、少し疲れるだけ。
けど、それが大変。

そして、扉をくぐると辺りは真っ暗。

「場所は平原に設定」

レイがそう言うとあたりがその通りになった。

「さてと。アリシア、ハルバードを起動してみろ」

「うん、わかった。ハルバードセートッアップ！」

『了解（ヤー）』

まず、レイがハルバードについて説明した。

その姿はバルディッシュと酷似している。長さもバルディッシュと同等だろう。しかし、違うのはバルディッシュは斧であるが鎌であるのに対してこのハルバードは斧であるということ。槍の穂先に斧頭、その反対側に突起（ピック）がある。

ハルバードにはいくつかの戦いがあり少なくとも斬る、突く、鉤爪で引っかける、鉤爪で叩くといった、４つの使い方が可能。

「とりあえず、基本的な形態から。ハルバード、まずアックス形態に移行してみてくれ」

『了解（ヤー）』

今の状態から斧頭が前面に展開、突起にも魔力の刃が現れた。（想像としてはバルディッシュがサイスフォームにならずそのまま展開しているところ想像してください）

「わーいかにも斧って感じだね」

アリシアは魅了されていた。

「あと他にデュアルハーケン、トマホーク、ダブルトマホークと計４つのモードが存在する」

「聞く限りでは全部斧なんですね」

リニスが言いたいことは彼がいっていることはすべて斧という分類にあたるということだ。

「ああ。けど、同じ斧でも物によっては扱い方は違ってくる。しかし、ハルバードは（これは）もしもの時の秘密兵器だ」

「秘密兵器？」

彼は頷いた。

「実は、二人は隠密行動に向いていると思ったんだ。特にリニスなんて何かに型よってないからバランスがいいし、なによりアリシアはそれに適している」

「私が？」

「そう。アリシアは元々魔法の素質がなかったんだが俺が彼女に眠るまぁ能力というか才能を覚醒させたんだ。結果、雷の変換資質は受け継いだがそれはかなりフェイトに劣るんだがそれにも負けない能力を手に入れた」

「それはいったいなんですか？」

「それは動物や植物、木々といった人以外の生命の声を聞きとれる

という能力」

「そ、そんな能力がアリシアにはあったんですか！？それ以前にアリシアはそれを知っていたの？」

隣にいるアリシアに聞いてみた

「うん、実際は小鳥とか木とかだけど」

―これって物凄い能力なのでは？

「残念ながらここは仮想空間だから無理だな。あとで、実際にみてみるといい。まぁ本題はここからでアリシアは『生命との会話』が可能であるから魔術師の才能を俺は見出した」

魔術師とは本来自分でない物。万物から力を借り執行する。
それは動物であり植物でもある。
アリシアにはそれができている。

「つまり、簡単に言えばその力は自分にとても有利だということだ。魔導師は辺りの微粒な魔力を集束したりもするが魔術師、アリシアなら万物から力を借りることができる」

「う～ん、それ私にもよくわからないんだけど・・・」

当の本人であるアリシアですらその話は理解できていなかった。

「そうだな。これは例えだが今アリシアは地上、陸地で敵と戦っていて敵の攻撃を避けようとするが間に合わない。そこで、こうやって身を守ることができる。ということだ」

実演したのは彼の足もとのすぐそばで地面がいきなり浮きあがり小さな壁を作った。
これが彼のいう万物から力を借りるという意味だ。

「すごいですね。これなら、戦いを有利に進められる」

「そういうことだ。俺が見たところアリシアの魔術属性は大地と自然のようだから陸地、それに木々、まぁ森林がある場所なら圧倒的に有利だ」

「なるほど、それで彼女が隠密性に優れているわけですね」

「そういうこと」

「？」

やはりアリシアに理解できていない。すこし、話が難しすぎるのだ。
今度はレイの代わりにリニスが説明してくれた。

「いいですか？こうやって大地や動物、植物と会話できるということは彼らがみていることを聞けるということで、敵がどこでどうしているかを彼らを通じて知ることができる。というわけです」

「あーだからおんみつせいなんだ」

―やっぱ五歳の彼女では理解は難しいようだ。それでも少しは話を理解しているようだな

「そう、敵の情報知って尚こちらがどう動くべきかを十分考えるこ

とができる。俺が隠密性に優れているといいたのはこういう訳」

―まぁアリシアはそういうことだとして、私はきっと・・使い魔だからでしょうね。それに猫だから

あえて自分のことは聞かないリニスであった。

「ん？ではハルバードが秘密兵器の理由は？」

「そうそう、なんで？」

「それは、隠密行動をしている中敵を見つけ奇襲、または見つかってしまった場合を想定しみてくれ。そもそも隠密性のすぐれているものは軽量の武器しか装備しないんだ。重量のあるものでは隠密とはいえないからね。だから、敵もそう認識しているところの不意を突くのさ。斧は近接武器でも最大の攻撃力を誇っている。上手くいけば一撃で敵を粉砕することができるんだ」

「凄いんだね。ハルバードは」

『ありがとうございます』

主の褒めの言葉を素直に受け取った。

「けど、実際今はデバイスだからそんな重量とか関係ないんだけど。でも、アリシアの力は十分実戦で通用するほどの力だ。要は使い方だな。どうだ、アリシア？ここまで簡単、じゃないけど軽く説明したが俺の指導を受けるか？」

最終的にレイがやりたかったのはアリシアが魔導師としての訓練を

受けるかどうかであった。

「うんやる！レイと一緒にいられるしそれにフェイトを驚かせてやるんだから！」

「ははっ、そうか」

多分姉としての意地だろか。

「それじゃあ、まずはハルバードを使いこなすことからだな。それができたら各フォームの特訓。それから魔法との連携技とかだな。俺もそんなに長くはいられないからリニスにリストを渡しておくからそれを元にやってくれ」

「わかりました」

「は～い」

それからまず基本的な素振りやハルバードの使い方をある程度教えた。飲み込みが早いのか数十分で自主トレーニングに入っていた。

「はっ！　やぁ！　ふん！」

それを見ながらレイはリニスにも指導をしていた。

「それじゃ、これがトレーニングメニューになる。ハルバード自体の訓練はお前でもできるだろ？」

「はい。けど、この魔術に関することはあなたが？」

「もちろん。魔術は魔術師が教えないといけないからな。難しいん

だぜ?まず、自分が得意とする属性を自由に扱うことができないといけないんだ。もし、火だったらこんな風に」

人差し指をたてるとその指先に火がともされた

「!一すごいですね」

「まぁ、アリシアは『生命との会話』ができるから意外と簡単に扱うことができるかもしれないな。本来はまずそれと対話できなければならないんだ」

別の言い方に言いかえればこうだ。火なら火の精と水なら水の精と。魔術師は大抵の者はこれをできなければならない。しかし、これは意外と難しく対話できない者もいなくはない。これができて魔術を行うことができる。

「というわけだ。『生命との対話』はアリシアにとっていや、魔術師の戦いにとってとても有利になるんだ」

「なるほど。相手もなんらかの精と対話できている。だが、アリシアは特定のではなくほぼすべての精と対話できるから相手に力を行使できなくすることもできなくはない。これでいいですかね?」

「ああ、上出来だ。しかし、実際にそれが可能かどうかはアリシアの技量だな。さて、難しい話はここまでにしよう」

それから、レイとリニスはアリシアに戦う術を教え始めた。ハルバードや戦い方などはレイが。魔術ではなく魔法はリニスが。この特訓はもちろんフェイトに内緒で行われた。

特訓の合間にリニスは気になることを聞いてみた。

「ちなみに私たちの魔導師ランクっていくつぐらいなんでしょう？」

「そうだな。俺が観る限りではお前は・・ＡＡ＋はあると思うな。最初に言ったがお前はバランスがいいからな。魔力量も十分。普通にやるなら一般の魔導師は敵じゃないな」

―私って使い魔なのにそんなに強いんですか・・・

「では、アリシアは？」

「アリシアか・・・そうだな。まだ、Ａランクぐらいだな。けど、次第に身体が成長しそれと一緒に魔力も増加するだろうからな。それにフェイトが今現在はＡＡＡだからそれと同等になるかもしれん」

「疑問形ですね」

「俺も未来のことを知るのは流石に疲れる。けど、フェイトの姉だからな。きっとそれぐらいはあるさ」

―あれ、今変なこと言わなかったかしら

リニスは不意に感じ取った違和感に気付いたがそれを知ることはなかった。

「じゃあ、今日はこの辺で終わりにしよう」

「は～い」

「俺もさすがに毎日は来れないからな。わからないことはリニスに聞くと言い」

「うん。リニスも一緒に頑張ろう！」

「はい。頑張りしょうアリシア」

「あ～あ、早く成長しないかな～」

「大丈夫だ。近いうちにフェイトより少し大きなるだろうから」

「え～少しぃ？」

「だって、そうだろう。なぁリニス」

「ふふっそうですね」

「も～リニスまで～」

『ははっはは』

その後二人の部屋に戻り軽く喋ってレイはなのはの元へ戻った。

なぜか、なのはは少しご機嫌斜めだった。

―やば、デートどうしよう

第18話　ハルバード（後書き）

アリシア「わ～い、私にもデバイスが！」

よかったね

ア「でも、どうして斧なの？フェイトも斧で鎌だけど・・・そこはあえて別のにすればよかったんじゃない？」

それも考えてたんだよね。けど、アリシアって意外と斧って合うかもって思ったんだ。あっイメージとしてはゲッターなどのトマホークとかをイメージしてくださいね。

ア「でも、まだバリアジャケットでてないよね」

それは多分本編（A's編）かもしれない。けど、だいたいのイメージは固めているから心配しないでね

ア「よかった。それとリニスもあの衣装変えない？」

それは俺も思ってたんだよね。いっそ武装メイド衣装にしようかな

ア「それいいかも！」

さて、アリシアの能力説明とか難しいかったと思うんですけど平気でしたかね？

自分でも把握できているかも怪しいぐらいでして・・

それと、リニスの衣装の案ですけど実際に実施しようかと思ってます。もし、これだと思うものがあったらお願いします。
私はメイドがいいと思ってます。ちゃんと猫耳としっぽを出させてそして、次回はなのはとデート。やります。なんとかしてやってみせます。
けど、デートじゃなくなってしまうかも？
では、次回でまた！

第１９話　舞踏会（前書き）

はい、お待たせ！
なのはとデートの時間だよ！
けど、デートじゃなくて舞踏会になっちゃったぜ！

すみません。

自分書いてて本当になれないことをしたので大丈夫か心配です

第１９話　舞踏会

私、高町なのは。少し前までは平凡な小学三年生だったのですがレイくんという魔術師と出会い私魔法少女になってしまいました。
けど、今私は地球ではない場所。いわゆる異世界のお城にいます。
どうしてこうなったかと言うと・・・・・

数日前

現在レイは苦悩していた。
なのはが学校にいない間に彼女とのデートをどうしようかと悩んでいたのだ。
そんな彼の元に一本の電話がかかってきた。

『マスター、外線です。お相手はシャルル様からです』

「シャルル？なんでまた。繋いでくれ」

目の前にウィンドが現れる。そこにはどこぞのブリタニアのおっさんに似た老人がいた。

『お久しぶりです。レイ殿』

「おう、シャルルいったいどうしたんだ？わざわざ連絡なんかよこして？」

『その単刀直入に言うとですなぁ。今度我が城で開かれる舞踏会に出てほしいのです』

「舞踏会？どうせ権力に溺れた貴族しかいないのにか？」

正直に言えば大半の貴族は権力におぼれ私利私欲に政治をしていると言ってもいい。

民のことを考えているようで考えていない。そして、自分より上の者がいれば種をまいておく。そんな奴らばかり。

しかし、目の前にいるシャルル・Ｊ・クロスロードは騎士道精神というか民のための民による政治をしている。何よりさっきの奴らの中でまともな人間だからだ。

俺の少ない知人の一人でもある。

『まぁそれはどうでもいいんです。ただ、娘がどうしても会いたいと』

「あーシャルロットか・・・最後に会ったのっていつだっけ？」

『そうですな～。多分あの子が５歳の頃かと』

「そうか、アレからもう１６年か。まぁ行ってもいいんだがちょっと付き添いが二人ほどついてくるがいいか？」

『来てくださるだけでもう感謝の言葉でいっぱいですよ。お一人は１６年前に一緒にいらしたリンディさんですか？確か今では提督になられたとか』

「ああ、もう一人は俺の―相棒（パートナ）ということにしておく」

『パートナですか・・・では手続きは済ませておきます。それと、これが招待状になりますので。では、当日お待ちしております』

「ああ、わかった」

そして現在に戻り

そのことを聞かされた私はデート思ったらまさかこんな所に連れてこられるとは思ってもいなかった。別にいやではないけど私にみたいな子供はそんなにはいない。

―なのはさん大丈夫？

隣にいるリンディさんが心配してこれをかけてくれた

―はい、大丈夫です。けど、まだ空気に馴染めないと言うか・・・

―仕方ないもの。ここはそういうところだから。ところでレイさんは？

―あっ、ちょっと着替えに手間取ってるそうです

―そう

ちなみに二人の今の姿は舞踏会用のドレスだ。二人ともいつも髪を縛っているが今は髪を下ろし少しいつもと違う雰囲気だ。

リンディなど提督という人間ではなくどこかのお姫さまのような存在感を漂わせている。現に先ほどから声をかけられている。

「それにしても、リンディさん綺麗です」

「ありがとう。なのはさんもとても可愛いわよ?ちょっと別人みたい」

「そ、そうですか?」

なのははまったく着たことのないドレスを初めて着こんだ。ハイヒールだって最初履く予定だったけどやっぱり無理で普通のこういう場の靴に履き替えた。

―やっぱりドレスって初めてきたからなんか変だな・・・

ざわざわ

そんなことを考えていると辺りざわめきだした。

皆出入り口の扉を見ている

「なんだろう?」

「もしかして・・」

「?」

彼女はそれを知っているかのように言った。

『第23代シャルロット・J・クロスロード王女殿下のおな~り』

どこかのドラマでみたような感じで門が開きそこから綺麗な女性が入ってきた。
その姿になのはは魅了されていた。

「わ～綺麗」

「まさか、あの子があんな」

「リンディさんは知ってるんですか？」

「え、ええ。一度会ったことあるの。けど・・・？」

するとシャルロットは広がる貴族たちに軽くあいさつをしながらこちらに近づいてきた。
そして、私たちの目の前にやってきた。

「お久しぶりですね。リンディさん」

「え、ええ。よく覚えていたわね。シャルロットさん」

「それはもちろん。彼の隣にいたのをよく覚えていましたから」

「あらそうなの・・・」

「そうなんですの」

―あわわ、なんだが二人の火花が

『続いて。アンヴァルト伯爵のおな～り』

「えっ、伯爵！？」

「やっぱり」

私は驚いたがリンディさんは知っていたようだ。
レイくんが来ると色んな言葉が飛びかかった。

「みて、アンヴァルト伯爵よ」

「あ～素敵だわ。声をかけてもらえないかしら」

「まったく、どうしてあんな奴がこんな場所に」

色んな言葉私の耳に入ってくる。

彼もシャルロットさんと同じように私たちの方にやってきた。
けど、私たちが声をかける前にシャルロットさんは彼に飛びついた。

「久しぶりレイ！」

「あーひっつくなシャル。皆がみている。王女なら王女らしくしろ」

「ぶーは～い」

頬を膨らませながら彼から離れた。

「綺麗になったな。シャル」

「そう、ありがとう。伯爵さま」

「別にわざとそういう風にいう必要はない。それに二人も悪いな」

「ええ、まったくです」

「私は―別に」

シャルロットさんはいきなり私の目の前にたち、じ～っと私を見始めた。

「ねぇ、レイ。この子なに？」

「俺のパートナ」

「ぱーって将来を約束したっていう―」

「違う。勝手に妄想するな。それより、なのはどうだ？」

「うーと、ドレスは初めてで動きづらいしなんかあんまり来たくない場所かも」

「まぁ、そう思うわよね。私だって出たくないもの」

おいおい。王女殿下がなに言ってんだよ

「それより、レイ踊りましょう！」

気がつけばダンスの曲が流れている。

周りの人たちはパートナ見つけ踊り始めた。

「ああ、って引っ張るな」

彼はシャルロットさんに引っ張られダンスを踊り始めた。
本当に綺麗だった。
お姫様と王子みたいな感じだった。
私だって彼と踊りたい。心の中でそう思った。けど私は子供だから。
そもそもこんな場所に似合わない。

「なのはさん？」

リンディさんが声をかけてくれたが私はそれを無視した。いや、聞こえていなかったかもしれない

「―なのは？」

踊っていたレイになのはがテラスに向かう姿が目に映った。

テラスにでた私は一人寂しく座っていた。
もし、私もシャルロットさんみたいだったらレイくん―私と踊ってくれたのかな？
そんなことを私は思っていた。

「―なのは」

顔をあげるとレイくんが目の前に立っていた

「レイくん・・・・」

「どうしたんだ？」

「だって、私子供だし。それに普通の子だし。それに、全然デートじゃない」

ぐさ！

俺の心に一矢が刺さった感じがした。

確かに今回は俺が悪い。自分から言っておいてたまたまこうなってしまったのだ。

いや、多分俺が彼女を女の子としてではなく子供としてみていたからだろう。

「その、なのは？少し大人の階段を登ってみないか？」

「えっ？」

そう差し出されたのはカプセルだった。

「だまされたと思ってこれを飲んでみてくれないか」

彼が私の手のひらにそれを置く。

「・・・・ごく」

私は何故か不思議と飲んでいた。

「・・・・・？」

けど、身体になにも変化はない。

「・・・・・」

「レイくん？」

彼は何かに見惚れているかのように立ちつくしていた。

「いや、この薬は子供が飲めば未来の自分になれるという薬で・・」

言われてみれば見ている視線が少し上になったが気がする。
手足をみればまるで大人になったかのように長い。
（Ｓｔｒｉｋｅｒｓのなのはを想像してください）

「相手からは未来の大人として認識される。けど、自分の姿をみても顔だけはみれないんだ」

「どうして？」

「見たらなんかいやだろ？未来の自分がこんなんだって。けど―綺麗だよ。なのは」

ドクン！

胸が高まる。
それを言われて凄くドキドキした。

「私と踊ってくれませんかお姫様？」

彼は私に手を差し出してきた。
本当に漫画みたいと思った

「―はい」

けど、今起きていることは現実なんだ。
私は彼の手をとった

二人しかいないテラスで月が照らすなか踊る

「そう、そこでターン」

「う、うん」

初めて踊るダンス。
彼が踊りながらレクチャーしてくれる

「その、ごめんな。ちゃんとしたデートじゃなくて。怒ってるか？」

「うん、少し。けど、今はこうしてレイくんと踊れているだけでうれしいよ、私。なんだか違う自分みたいで不思議だけど楽しいし」

「そうか。今度はちゃんとデートしような」

「―うん」

約束した。
いつかはわからないけどできれば今度は私が本当に大人になったらデートしたい。

その時はきっと同じ景色をみられるように

パチパチ

「？」

「シャルロット」

「どんな魔法を使ったかはわからないけどまさかあの子がね・・・」

彼女は私の正体を見破っていた。

「あなた、名前は？」

「高町なのはです」

「そう、私はシャルロット・J・クロスロード。なのは、あなたとはいいライバルになりそうだわ」

ああ、この人もそうなんだ。

私は悟った。

「こちらこそ」

―今度会う時はきっとあなたが今の姿になってることを祈るわ。あなたの世界と私の世界の時間軸が違っていればだけど・・・それと、もし困ってることがあったら言って。力になるわ

なんで初めて会った人にそこまでするんだろう。

けど、私にはわかっている。

彼女も彼を―

―はい、ありがとうございます

「？？？？」

レイは彼女達のやり取りがまったくわからなかった

―女ってわからん

その後リンディと合流した二人は最後まで舞踏会には参加せず元いた場所へと帰っていった。

なのはの部屋

舞踏会から翌日

昼間、なのはが学校に言っている時間に彼は昨夜ＺＥＲＯに内緒でとっていた写真をみていた。

ドレス姿の二人。シャルロット。

いくつもの写真があるが彼がその手に握っているのは大人になったなのはだ。

「未来、あの子がこんな姿になるとはな」

『本人が知らないのは残念ですけど・・・綺麗ですね』

「ああ、本当に」

大人になったなのは。大人の女性へとなった彼女に彼は見惚れていた。

その時の彼は彼女を一人の女としてみていたかもしれない

「今度はちゃんと約束、守らなきゃな」

いつかはわからないその約束。
けど、きっといつか果たされる。
彼はそう思った。

第１９話　舞踏会（後書き）

どうだったでしょうか・・・
シャルロットはプリンセスラバーの奴です。

フィリーヤ「なんかライバル出たけど彼女今後出るかしら？」

む、難しい。でたとしてもＳｔｒｉｋｅｒｓかもね

フィ「まぁあんなのライバルの内にはいらないわ。ところで・・・
私の出番は？」

なにほしいの？

フィ「・・天罰が下るわよ？」

それよりも次回、どうすっかな。
某艦長の伏線だしたしな・・・けど、短いかも
リンディルート・・・これで勝つる
まぁ最後ぐらいには神さまとのデートだしてもいんだがお前のこと
だから居座りそうでいやなんだよ。そもそもこの日常編。どこで区
切りをつけるかまだ判明していない。
Ａ'Ｓはカオス的な展開しか待ってそうだし

フィ「・・・私放置されて―」

どうするか・・・
皆さんなんかご要望とかありますか？
いや、こういうことはいけないんだけど、ね？

ということでまた次回で

第２０話　特典映像収録中（前書き）

リンディ専用のお話作っちゃった。
内容はこれでもＡ's Ｓでのリンディがフェイトを養子にする伏線が少しあります。
短いですがとうぞ！

第２０話　特典映像収録中

アースラ特別スタジオ

「―そして、先着予約、購入された方になんとこの歴代お姉さん人形とボン太くんの応募券がつきます！さらに、レイ先生の講演会の招待状も付き、わ、私リンディお姉さんも特別出演！さぁお店へ急ごう！」

「・・・カット」

「はぁ～お、終わった」

ただいまここアースラ特スタジオではレイ先生の「ここんとこ教えてくれるレイ教室」のＤＶＤ特典映像のＣＭを収録していた。
先の約束で二代目お姉さんであるリンディがその司会を務めていた。

「まぁ、現役に比べれば天と地だな。あの時はもっと何も気にせずはきはきとやっていたのにな」

「む、昔は昔です！そ、それにこんなみ、短いスカート・・・」

説明しよう
今の彼女姿はミニスカートなのだ！髪はポニーテールで普段の彼女とはまったくの別人なのだ！。
スカートが短く裾を下に引っ張っている姿がなんとも愛らしい。

「まぁ、ほれ『レイ特性超激甘デザートミックスＳＰ』だ」

「あ～これだけのためにどれだけのプライドを捨てたか・・・はむ・・う～んおいしいわ♪」

―・・・なんでこんな甘いのが食えるのだろうか

確かにこれを作ったのは俺だがこんな甘いのさらに甘さを足したのなんて食えない

ちないみに彼。作っといて味見をしていないそれほど甘いのだ。
これは―

例えるなら普通に食べているケーキの甘さの数段上と想像してもらいたい。いや、想像できなくね？

だから、聞いてみた

「美味いか？」

「はいぃとっても♪」

そんな笑顔で言っているんだからそうなんだろうな

「ところでフェイトさんとアリシアさんどうするんですか？」

「どうするって裁判の後か？」

こくり

食べながら頷く彼女

「最初は俺が養子にでもしようと思ったんだが俺は色々と危ないからな。だから、それについては考えている」

「・・そのもしよければ私に任せてくれませんか？」

「お前が？」

「はい、なんというか一人の母親としてほっとけないと言うか・・・」

「そうか、お前母親なんだよな」

気がつけば母親になってるんだから早いもんだな。時間ってのは

「まぁこの件が落ち着いたら皆で話せばいいさ。・・・ほら、ほっぺたについてるぞ」

彼は手を伸ばしハンカチでリンディについたクリームを吹いた。

「／／／／／／ありがとう、ございます」

「まったく、“リン”はこういうときは無防備だからな」

「そ、そのあだ名は止めてください！」

リンというのは彼女が生徒だったときに彼が好んで呼んでいたあだ名。

「別にいいじゃないか。それにお前だって二人きりのときは先生って呼んでくれたって良いんだぞ？」

「い、今もう私は大人です」

「まぁ気長に待つよ。先生って呼んでくれるの。それにしてもお前のその格好似合ってるな」

「お世辞はいいです・・・」

「いや、素直な感想なんだけどな。それにあの時より綺麗になったんじゃないのか？」

「それ、セクハラです」

「なんで？」

「なんでって・・それは・・・」

―本当、この人に恋愛のことはまるきっし駄目なのよね。自分に関することは駄目なくせに他人だと超がつくほど鋭いし。

「それは、なんだ？」

「だから！」

―私だってあの時は・・・“先生”のこと・・・

「・・・だから、その・・もういいです！」

リンディはデザートのグラスごと隣の部屋の更衣室に入っていた。

「まったく、なんだってんだ」

彼は何もわかっていなかった。

更衣室に逃げ込んだリンディ

「はぁはぁ・・・・先生の馬鹿」

その後最初は人目を気にしていたがいつのまにか愛称で呼ぶようになっていた二人だった。

第２０話　特典映像収録中（後書き）

どうでしたか？
ほんと、重要参考人移送中になにやってんだろうね。

さて、日常編はこれで最後になります。
次回はＡ－Ｓでいうプロローグになると思われます。
Ａ－Ｓでもレイのむちゃくちゃなご都合主義があると思われます。
では、次回にまた！

第２１話　人との出会い　それは何かの始まり（前書き）

今回はＡ－Ｓ編のプロローグと思ってください。
まぁこれで今後の展開が読めるといえば読めちゃうんだよね
けど、普通で終わらせるつもりはないぜ！
ここだけの話。Ａ－Ｓ編ではオリキャラが多くでるかもしれないの
で期待してください
ではどうぞ！

第２１話　人との出会い　それは何かの始まり

レイｓｉｄｅ

夢をみた

遠い昔の夢を

いや、夢と言うには少し違うかもしれない

アレはきっと俺の記憶だ

辺りは一面戦場の痕

建物は崩れ人間など一人もいなかった

けど、その戦場に一人の女性が分厚い本をもってその光景を悲しそうにみていた

俺は毎回のごとくこう言った

「今回も結局この結末か」

「・・・それがこれを手にした者の運命。私利私欲以外になにを思う？」

「確かにそうだ。たが、人間はそういう奴らだけじゃない。お前を

お前として見てくれる奴もきっと」

「きっとっていつ？そんなこと私は信じていない」

「そうだな。俺も信じていない。どんなに願ったって何も変わらない。戦争が終わるわけでも人が争いをやめるわけでもない」

「それも何回聞いたか。もう、私は消える。今度も私の前に現れるのですか、魔術師」

「どうかな。それといい加減名前で呼べ」

「これも何回目だろうか」

そうこのやり取りも何回目だろう。言葉を言いかえれば会うたびかわらないエンドレスエイトのように。

「それでは私は消える。さようなら―」

彼女が消えるのもを見届けると俺もその場から離れた。

「・・・・・さて、俺も往くとしよう」

そんな夢をみたのか俺はなんだか寝起きが悪く最悪これからのことを予知しているのではないかと思った。

ＰＴ事件から俺はなのはのもとでお世話になっている。

彼女に内緒でアースラにいったりもしてるしなのはの個人的な魔法

の特訓もしている。

6月が過ぎたあたり俺はある波動を感じ取り気になって最近調査のために海鳴市を歩いて回ることが多くなっていた。
部屋で広域探索をしても可能だが自らの目でみなければわからないものもある。
そのためか、最近ご近所の人たちと仲良くなってしまった。

「あらぁ神乃さんこんにちは」

「こんにちは、おばあちゃん。調子はどうだい？」

「もう、絶好調なのよ。神乃さんが教えてくれた通りに身体を動かしたらなんだか身体が軽くなったのよ」

「ははっそれは良かった」

などそういう会話をしたりしていた。
喋りながら俺は思った。

いったい俺はなにをしているんだろうと

本来の目的すら忘れかけている
けど、そのことに俺は気づいていなかった。

夕方

「もう、夕方か。帰る前に図書館に寄ってくか」

普通の町の図書館に俺が読みたいものがあるのかと思うだろうな。
けど、俺はただ本が読めればよかった。
長い旅の中何もない時はいつも本を読んでいたから。

ＳｉｄｅＥｎｄ

？？？ｓｉｄｅ

「ん～ここら辺やったと思うんやけど・・・あった」

私は本を借りに図書館へ来ていた。
やっと見つけた本は自分より高い場所にある。自分は子供だからそうだと言えばそうかもしれない。
けど、私はさらに小さい。
私は車椅子に乗っているから。
だから、頑張ってとるしかないのだ

「う～ん・・・届かんなぁ」

それでも借りたい本があるから頑張って手を伸ばしている

？？？ｓｉｄｅＥｎｄ

すずかｓｉｄｅ

「え～と、どこだったかな？」

私は今日図書館に来ていた。
最近はよく図書館を利用している。本を読むのは楽しいしなによりそれを想像するのが楽しくなっている。

けど、今探している本が中々見つからない。
このあたりだと思うんだけど・・・
「えーと・・・あっ」
一段一段みていっていたら視界車椅子の少女が目に入った。
彼女は自分より高い位置にある本を手を伸ばしてとろうとしているが一向にとれそうにない。
なんで、誰も助けてあげないんだろう？
だから、私は彼女のもとへいこうとしたけど
「はい、これでいいかな」
先を越されてしまった。
すずかｓｉｄｅＥｎｄ
？？？ｓｉｄｅ
「はい、これでいいかな」
「あっありがとございます」
私が頑張ってとろうとしていた本を目の前にいる男の人がとってくれた。

たまに、こういうことがあるけど誰も助けてはくれなかった。
けど、この人は助けくれた。
それが素直にうれしい。

「当然のことをしたまでさ。けど、俺が来なくてもきっとあの子が君を助けてくれたと思うよ。ね、そこの君」

「えっ、あその・・・」

後ろを振り向くとそこには私と同じくらいの女の子がいた。
彼が言うとおり私を助けようとしてくれていた。

「その、ありがとうな」

「ううん、私もその人が助けてあげていたから少し安心したよ。あなたも本が好きなの？」

「うん、大好き」

「私もなんだ」

同い年で同じ趣味をもつ人がいるのは嬉しい。
私には友達はいないけど家族はいる。

「へぇーそれ―の本か」

「知ってるんか？」

「ああ、中々読みがいのある本さ」

「へー私も読んでみようかな」

「だったら、さっき受付に返してきたんよ。受付の人に言えば借りられるかもしれないし」

「じゃあ、いってみるか」

それから三人は受けつけに向かった。

お兄さんは私を押してくれた。
せっかくなので私は彼に聞いてみた。

「お兄さんも本が好きなん？」

「まぁ好きといえば好きかな。二人も本が好きなんだろ？」

「はい。だって、読んでると頭の中で色んな世界が広がるし」

「私も私も。なんていうか早く読んじゃうと続きがよみたくて仕方ないんよ」

「そうか。それほど本が好きなんだな」

それから受付につくとお兄さんが聞いてきてくれてすぐ私が借りていた本の一巻を持ってきてくれた。
借りられて私はよかったと思った。

ここで話をするのは迷惑なので三人とも用は済んだらしく外へ出た。

「そう言えばお兄さんの名前なんていうん？」

「俺か？俺の名前は―神乃。神乃玲」

「なんか女の子みたいな名前やね」

「それは言いすぎだよ。あっ私の名前は月村すずかっていいます」

「よろしくすずか。ところで君の名前は？」

「私は八神。八神はやて言います」

「そうか、はやてか。よろしくな、はやて」

「よろしくね、はやてちゃん」

「うん、よろしくな。二人とも」

なんだかんで私に友達、一人違う気もするけど嬉しかった。

「俺は帰るけど二人はどうする？」

「私は待ち合わせしてるんで大丈夫です」

「そうか、はやては？」

「私は、迎えが来るからここで待ってる」

「そうか。じゃあ、すずか。途中まで送るよ」

「あ、ありがとうございます」

すずかちゃんちょっと緊張してたなぁ。まぁ玲さんカッコイイから。
それは私も同じやけど

「じゃあね、はやてちゃん」

「じゃあな」

「うん、二人とも気を付けてな」

軽く手を振って二人がいなくなるとはやては人の邪魔にならない場所へ移動した。
それから少し待つと大切な家族が迎えに来てくれた。

「はやてちゃん、待ちましたか？」

「ううん、大丈夫やよ。シャマル」

「そうですか。じゃあ行きましょうか」

「うん」

シャマルに押して貰い家に帰る。

「シャマル、私な、友達ができたんよ」

「そうですか、それは良かったですね。そうだ、今日は何にします？」

「そやな、お魚がまだ残ってたから焼き魚にしよか」

「はい♪」

はやて、いや少女にとってこれから毎日が楽しいものだと思った。
けど、彼女には辛い未来が待っているということをまだ本人もいや、誰も気づくことはなかった。

はやてｓｉｄｅＥｎｄ

第２１話　人との出会い　それは何かの始まり（後書き）

フィ「どういうこと？私の話がないじゃない」

ああ、めんどくさかったからな。

さて、Ａ－Ｓ編プロローグどうでしたか？
レイがまずはやてとすずかに出会いましたがレイははやてがアレだとはこの時点では気付いておりません。
けど、彼のことだから途中から気付くと思われます。

フィ「ねぇ私の出番は？」

多分ないかもね。ていうかシツコイ

フィ「ひ、ひどいわ・・・」

では、また次回で！

第２２話　戦いの幕開け（前書き）

さて、ＴＶでいえば一話になりますね。
ここで一人新キャラが登場します。
それと、ヴィータのデバイスアイゼンですがＣＶを勇者王に変換してください。
なんかどっかの動画でそんなネタがあったので。
アイゼンの会話（戦闘中）はほとんどそんな感じになると思います。

第２２話　戦いの幕開け

１２月１日
海鳴市　桜台

海鳴市では冬を迎えていた。海が目の前にあるだけに冬はかなりきつい。
そんな中朝早く桜台で一人少女がいた。
彼女の名は高町なのは。今、朝のトレーニングの仕上げをしているところだ。

「コントロール・・・」

カン　カン　カン

『４５　４６　４７・・・』

上に放り投げた空き缶をディバインシューターで地面に落とさず何回続けれられるか。
これはディバインシューターのコントロールを極める特訓でもあり尚且つ集中力をあげるための特訓でもあった。

「アクセル・・っ」

さらにシューターのスピードを上げる。

コントロールが難しくなる。集中力が途切れればそこで終わり。

「・・・っ・・・」

『９８　９９　１００』

「ふー」

目標回数に達し気を緩めた。

「あっラスト！」

左腕を振りシューターへ指示をだす。

イメージを送ればそれだけシューターの動きはよくなる。

―ただ、操作するのではなく動きを、一歩先のイメージしろ

彼から教わったことだ。

カン！

缶はそのままゴミ捨て場に飛んでゆくが今回は残念ながら入らなかった。

「あ～あ」

『よい出来でしたよ。マスター』

「ははっありがとう。レイジングハート」

『けど、レイさんの言葉を借りれば最後に気を緩めたな。と言うでしょうね』

「うっ、とても説得力のある言葉・・・」

落ちた空き缶を捨て家に帰宅する。

「今日の評価は？」

『そうですね。７９点です』

「そっか♪」

中々高得点と思われるかもしれませんがこれでも最初よりはよくなっていた方でして・・・。

実は最初のころは３０回いくのがやっと。

実戦であそこまでできたのが不思議なくらいだ。とレイくんは言っていました。

いざ、意識してみると一つのものを集中してあそこまでコントロールするのがあんなに難しいとは思ってもみなかったのでした。

「ただいま」

「おかえりなのは。あの子から郵便が来てるわよ」

「ホント！？」

母から渡されたそれはフェイトちゃんからビデオメール。

もうかれこれ半年は続いている。

けど、私には衝撃的なことがありまして・・・

「な、なんでアリシアさんが！！！？？」

そうフェイトちゃんがいきなり

『実はなのはに紹介したい人たちがいるんだ』

最初はアースラの誰かと思ったらまさかのアリシアさん。それにフェイトちゃんに魔法を教えたっていう使い魔のリニスさんがいました。

「ど、どうしてなの！？」

それをレイくんに聞いて見たら

「うんまぁこれをみてくれ」

と渡されたＤＶＤ。

そこにはなぜなにんなのはが録画されていてアリシアさんたちのことがメインで。

レイくんはそれをみて理解しろと私に言っているんだと悟りました。

最初は戸惑った私ですが二人も私に会いたいと言ってくれていた。

とてもうれしくて早く会ってお話がしたい。

最近はアリサちゃんとすずかちゃんに二人のことを紹介した。

アルフさんとリニスさんはどうやら動物を貫くらしい。

「さて、行っています」

机に置いてある写真にあいさつをする。

そこにはあの日舞踏会に出た時の小さな私とレイくんが一緒に写っている写真。
レイくんは今フェイトちゃんの裁判のためにアースラに在中している。
たまに連絡をよこしてくれている。
連絡にはもう少しで帰れると言っていたので楽しみだ。

「皆どうしてるかな」

なのはｓｉｄｅＥｎｄ

アースラｓｉｄｅ

同時刻次元航行中アースラ
艦橋

「あ～とうとう戻ってきてしまった」

そうぼやいたのは我らが総帥、レイだった。

「頼みますからいきなり姿を消すのだけは勘弁してください。“先生”」

「保証はできないが努力してみよう」

相変わらずの彼をなんとかしようとする我らが艦長。リンディ。

―おい、聞いたか

―ああ、先生だってよ

―やはりあの噂は本当だったか！

―しかし、艦長の学生時代。そうぞうするだけで鳥肌もんだぜぇ・・・

・

―くそぉなんとかデータとかないのか！

部下たち、魂の叫びでした。

「それにしてもやっと明日裁判が終わるな」

「ええ、勝利確定の・・・ん～ほ。裁判ですから」

お茶を一杯飲み満面の笑顔を浮かべている。

食堂

現在食堂アースラ職員で賑わっていた。

そこのすみっこでフェイト、アルフ、クロノ。そして、先ほどやってきたレイが裁判の最終確認を行っていた。

「じゃあ、確認するぞ。被告席のフェイトは裁判長の問いにそこにある記述どおり応えること」

「はい」

「今回はアルフも被告席に入ってもらう。いいな？」

「わかった」

「で俺とクロノは証人席でいいんだよな？」

「はい」

「あーめんどくさいから帰っていい？というより本局にいきたくない」

「そんなことを言わないでください！」

本局に近づくたび彼の我がままは増していた。

なんで、本局に帰りたくないのか。その理由がわからないクロノであった。

「さて、この裁判の結果は無実は確定。数年間の保護観察は間違いないだろうな。けど、心して臨んでくれ」

『はい』

戻って艦橋

「で、そちらの方が平気？レティ提督」

『こちらは万全よ。リンディ提督。けど、少々厄介なものが最近とびこんできてね？』

「厄介？」

『ええ、古代遺産（ロストロギア）一級捜索指定がかかっている超危険物』

「っ！」

艦橋に報告にきたクロノはそれに反応した。

『いくつかの世界で痕跡が発見されて捜索担当は大騒ぎよ』

「そう」

『今は捜索班からの報告を待つしかないわ』

「そっか～」

と頭をかかえこんでるようには見えない。

けどクロノの顔は険しいものだった。

フェイトの自室

「ふふ」

机の上においてあるなのはたちの写真。

もう少しで会えると思うとふいに言葉が漏れてしまう。

「フェイト～どうだった？」

「アリシア、うん平気だよ」

「そうですか。よかった」

先ほど秘密の特訓をしていた二人がフェイトを心配してみにきた。

「けど、もうすぐなのはに会えるね？」

「うん！」

「私も早く会いたいな～」

「そうだね。なのはならきっとアリシアと友達になれると思うよ」

「そっか」

アリシアもなのはに会いたくて仕方がなかった。
ビデオメールで自分のこととか紹介したけどやっぱり実際に会いたいようだ。

「それにしてもアリシア、少し背延びたんじゃない？」

「そうかな～？そうなのリニス？」

「ええ、彼のいう身体が時間を取り戻そうとしているんでしょうね」

今のアリシアの身長は今現在フェイトより少し背が大きい。
最初に比べれば相当成長したほうだろう。

「それじゃあ、フェイト。レイのところへいこう♪」

「うん♪」

アリシアはフェイトの手を引っ張りレイのところへ向かう。
気がつけば二人もう姉妹だった。

アースラｓｉｄｅＥｎｄ

１２月２日
風芽丘図書館

「兄さん、今日も来ないな」

「うん、仕事が長引いて中々これないんだって。メールがちょっと前にきてたから。けど、もう少しで仕事が片付くからそしたらお詫びに面白い本を紹介してくれるって」

「ホンマ！？楽しみやな～♪」

半年前に出会った三人はよく図書館で待ち合わせして本を読んだり色々するような仲になっていた。
とくにすずかは彼とメアドを交換するぐらいで・・・
はやても彼を本当の兄さんのように慕っていた。

「じゃあ、私はこれで。ばいばいはやてちゃん」

「ばいばい」

手を振って見送るはやて。
自分も待っている人の所へいく。
入り口のところで立っている美人の女性。

「あっ、はやてちゃん」

「シャマル、待った？」

「いいえ。さっ行きましょう」

「うん♪」

待っていてくれる人いるのはとてもうれしいとはやては思っていた。
今までは一人だったから。
どんな形であれ家族ができてほんとうにうれしかった。

「はやてちゃん寒くないですか？」

「うん、平気。シャマルこそ」

「私は大丈夫ですよ」

「そうか。あっ」

外に出て少しいくとある駐車場で二人の女性が待っていた。
一人はポニーテールが特徴な女性。
もう一人は頭にサングラスをかけている女性。

「シグナム、ユキナ！♪」

「はい」

「やっほ、はやてぇ～」

それから四人で家に帰りながら今日の晩御飯について話す。

「三人はなにが食べたい？」

「あっ、その迷います」

「私は、はやての料理ならなんでもいいよ」

「じゃあ、とりあえずスーパーで材料を買いましょう」

「うん、そやね。そういえばヴィータは今日もお出かけ？」

「あっその・・」

シャマルは口ごもってしまった。

「大丈夫だよ。ザフィーラがついてるし、遅くなったら私とシグナムが迎えにいくから」

「そうか、なら安心やな」

―助かった、ユキナ

―ほんと助かったわ

―こういうとなら私にまかせて。けど、今日は迎えにいったほうがいいかも

―そうだな

―じゃあ私ははやてちゃんと一緒にいくから二人ともヴィータとザ

フィーラをお願い
―『了解』

ＳｉｄｅＥｎｄ

同日
海鳴市　市街地上空

夜になった海鳴市。
その市街地の上空に少女と一匹の狼が街を見下ろしていた。

「どうだ、ヴィータ？」

「いるよ～な、いないよ～な。最近妙に出たり消えたりしてる大きな魔力反応。それを捕まえれば一気に２０ページもいくんだけどな」

そう、そこら辺の雑魚より相当時間を短縮をできる。

「二手に分かれよう。闇の書はお前にあずける」

「ＯＫ～ザフィーラ」

ザフィーラはそう言うとどこかへ消えた。

「さて、ちょっと荒っぽいけど封鎖領域展開」

結界は市街地だけではなく住宅街にまで及ぶ

それは彼女の家も含まれていた。

「結界！？」

自宅で過ごしていたなのははは突然発生した結界に気付いた。

頭の中で浮かぶ巨大な魔力

「見つけた！いくよグラーファイゼン」

『了解』

闇の書をしまいその魔力をもつ者へと飛んでゆくヴィータ。

なのはｓｉｄｅ

『対象、高速で接近中』

結界が発動したらそこにいるのは魔力を持つ者だけ。

居場所なんて簡単にわかってしまう。

「・・・・」

どうしよう、今ここにあの人はいない。いるのは私とレイジングハートだけ。

いつもいた人が傍にいない。なんだか、とても寂しいし恐い。

―いいか、なのは。こういうことをしてる以上絶対に避けられないものはある。きっと恐いかもしれない。けど、その恐れを乗り越え

ることで人は一つ強くなる。だから、逃げるな。その力がお前にはある。

彼の言葉が私の恐怖を勇気に変える。

「いくよ、レイジングハート！」

『了解』

なのはｓｉｄｅＥｎｄ

ヴィータｓｉｄｅ

『対象、こちらに接近中』

当然といえば当然か。

こっちは堂々と魔力を放出してるんだ。

けど、逃げないということはそれなりの実力者。少しやっかいだ

ヴィータｓｉｄｅＥｎｄ

なのはｓｉｄｅ

ビルの屋上につき辺りを警戒する。

『来ます』

「！」

レイジングハートの言う方向をみると赤い光こちらに向かってくる。
最初は小さいがだんだんそれは大きくなってゆく。
けど、近づくにつれそれは人ではないことに気付いた。

『誘導弾です！』

「っ！」

避けずシールドを張る。

「ううっ・・」

重い

たったの一撃がこんなに思いとは思いもよらなかった。
そして、彼の教えが脳裏を横切る。

―敵が姿を現しておいて尚、そこで自身ではなく魔法を使った攻撃をしてきたら大半はフェイク。つまり囮だ。それを避けるか受けるか。結局は隙をつくらせるためにやるんだ。敵は必ずお前の背後に現れる。

「でやぁあああああ！」

「！」

それはなのが思い出したのと彼女が現れたのはほぼ同時だった。
無意識に空いた右手でシールドを張る。

けど、その一撃は重かった。

「きゃぁあああ！」

なのははそのまま地上へ落下する。

「レイジングハートッ！お願い！」

『Ｓｔａｎｄｂｙ　Ｒｅａｄｙ　ｓｅｔｕｐ』

白き衣まといレイジングハートを振るう。

この姿になったのは久しぶりだった。

「ふん！」

「！」

赤い少女は容赦なく攻撃をしてくる。

鉄球を放ち爆発する。

その際光の球が二つ跳んだことには気づいておらずそのまま私がいたところにそのハンマーを振り下ろす。

「いきなり襲いかかれる覚えはないんだけど！いったいどこの子！？なんでこんなことをするの！」

ピン　ピン

彼女の手に再び二つの鉄球が現れる。

「教えてくれなきゃわからないってば！」

「な！」

先ほどの爆発の際シューターを二個出しておいた。
そのまま彼女の襲いかかるが一個は外れもう一個は彼女に当たるがシールドで塞がされてしまう。
けど、これでいい。

「この野郎ぉおおお！」

『Ｓｈｏｏｔｉｎｇ　ｍｏｄｅ　ｓｅｔ　ｕｐ』

それをぎりぎりの所でよける

「話を―」

『ディバイン』

「聞いてってばー！」

『バスター』

「やば！」

しかし、彼女のぎりぎりの所を狙ったため彼女自身が被害を受けることはなかった。
だが、代わりに彼女が付けていた帽子が吹き飛んだ

なのはｓｉｄｅＥｎｄ

ヴィータｓｉｄｅ

落ちてゆく帽子。
彼女が自分のためにつくってくれた大切な物。
それを傷つけられたヴィータはまさに怒りで我を忘れていた。

「この野郎・・・アイゼン！カートリッジロード！」

『よっしゃぁあああ！』

デバイスが上に上昇しそこに弾丸が込められたがあった。そのまま上下に動きハンマーの部分が変形した。
ハンマーは鋭くさらに片方にはブースターがついている。

「ラケーテン・・・」

ハンマーの出力で数回回り速度をあげる

「ハンマー！」

「きゃあああああ！！！」

シールドごとレイジングハートまで貫かれ後方のビルに激突したなのは。

こんなじゃゆるさねぇ

追い打ちをかけるようにヴィータはビルへと向かう。

「こほこほ」

埃がまり息がしずらい。

「てりゃあああ！！」

「！」

『Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ』

自身も傷つきながらも主人をレイジングハートは守ろうとした。

だが―

「ぶち抜けぇえええええええ！！」

ドン！！！

なのはのバリアジャケットを貫きそのまま壁に吹き飛ばした。

「はぁはぁ・・」

やばい少しやりすぎた。死んだら元も子もないのに

ヴィータはさっきまで自分が怒りのまま行動していたことに気付いた。

けど、むかついた。

大切な物を傷つけられたから。

ジャキ

彼女はアイゼンを構える

そして、彼女も自分に杖を向けていた

ヴィータｓｉｄｅＥｎｄ

強い

薄れゆく意識の中で私は思った。
この子は私より強い。きっと勝てない。
けど諦めたくない。

でも、彼女は私にデバイスを振り落とそうとしている。
ここまでなの？

諦めかけていた。

いやだ、フェイトちゃん、アリシアさん・・・レイくん！

ジャキン！

「・・・？」

「な、仲間がいたのか！？」

仲間・・・？

よくみれば見なれた少女の後姿みえる

「ごめん、なのは遅くなって」

「あ、アルフさん？」

『サイスフォーム』

敵に構えるフェイト

「違う―友達だ！」

傷ついた友達を助けるためフェイトは現れた

なのはｓｉｄｅＥｎｄ

レイｓｉｄｅ

先ほどから起きた海鳴市での騒動はすぐアースラにも伝わっていた。

なのはと対峙するなぞの魔法使い。

しかし、彼には見覚えがあった。

―あのハンマーどこかで・・・いや、でもあいつジャケットなんて着てたか？

いや、でもまて。なんであいつがあそこにいる？というよりアレが起動したのか？

自分でも驚くほどに困惑していた。

しかし、なのはが窮地に陥る

フェイトたちは先に現地に向かった。

―だが、フェイトでもあいつらの相手は少し荷が重すぎるな。仕方

ない秘密兵器をだすか

「それじゃあ行くぞ。二人とも」

「は～い♪」

「わかりました」

新たなる戦力。アリシアとリニス。

二人がとってこれが初陣になることだろう

―けど、顔ばれたらまずいな。バイザーでもつけるか

某復讐鬼みたいなバイザーをとりだした。

顔を隠すためにつけたそれだが・・・

―これなら平気だな

ばれないと思っているらしい

レイｓｉｄｅＥｎｄ

第２２話　戦いの幕開け（後書き）

どうでしたか！？
オリキャラとしてあらたなる騎士ユキナを追加しました。
詳しくは次回になるかと思われます。
ユキナの人物像は姉しよの巴で髪が長く普通に後ろで縛ってる感じでいつも某兄貴（ドリル）のようなサングラスをしています。
性格は元気いっぱい。明るいがモットーかな？

では今回はこのへんでまた次回お会いしましょう！

第２３話　魔道師と騎士（前書き）

やっと更新できた・・
新キャラも登場だけど詳しくかけなくてすみません
キャラの場面のきりかえが変になってしまったかも
タイトルも気に食わないんだよね。なんか今回の話にあわない。
けど、他にいいのも浮かばない・・

ではどうぞ

第２３話　魔道師と騎士

高層ビル　オフィス内

フェイトは友達を守るためにヴィータの前に立ちはだかる。

「民間人への魔法攻撃。軽犯罪では済まない」

「んだてめぇ？管理局の人間か？」

「時空管理局嘱託魔導師、フェイト・テスタロッサ。投降すれば弁護の機会が君にもある。だから、おとなしく武装を解除して」

裁判の決着後フェイトに下された判決は保護観察だけではなく嘱託として働くことも含まれていた。

「んなことするか！」

普通はそうだよね

ヴィータは一旦距離を置くため外へ逃げた

「アルフ、なのはをお願い！」

フェイトもそれを追う。

「わかった」

「あ、アルフさん・・」

「遅くなってごめんよ」

アルフはなのはに治療魔法をしながらこちらの経緯を話した。
裁判が終わったからなのはの報告しようと思ったらこんなことになってしまったことを。

「けど、アレは誰だい？なんであんたを・・」

「わからないの・・いきなり襲われて・・」

なんで自分が襲われたかはわからない。
けど、敵意というか目的のために襲ったのはわかっていた。

・・・・・

「―なのは、無事か！？」

「レイくん―！」

彼女達のもとにバイザーをつけたレイが駆け付けた。

「アルフ、お前はフェイトのところへいけ」

「わかった！」

彼の指示に従いアルフはフェイトの援護に向かう

「すまない、なのは。遅くなった」

「ううん、そんなことないよ・・・」

―思ったよりダメージが大きい。それにレイジングハートごとジャケットを貫くとは。あいつ強くなった

「レイジングハートもよく頑張ってくれた」

『それ・・・がわたしの・・・役目・・ですから』

彼女も相当重症だ。
早くしないと手遅れになる。

「とりあえず治療を開始する」

「うん―」

ヴィータｓｉｄｅ

『アークセイバー』

「てやぁ！」

ヴィータに向かって残撃が飛んでゆくがいとも簡単に防がれた。

―そんな、あんなに簡単に止められるなんて

「アイゼン！」

『シュワルベフリーゲン！』

なのはも苦戦した４つの鉄球がフェイトに放たれた。
追尾機能もつきさらに魔力ダメージではなく物体によるダメージも追加されるためこれはやっかいだ。

「くっ―」

―なのはのシューターより厄介かも

彼女の場合数多くのシューターに比べればこれは数もすくない。
けど、攻撃力は断然こちらのが上だ

「・・・下！？」

「でやぁあああああ！！」

ドン！バリン！

彼女の拳がヴィータの障壁を破る

「―このぉ！」

「っ・・・あ〝あ〝あ〝！」

シールドを展開するもいとも簡単に破られてしまう

「はっ！」

攻撃のあとの隙を突きフェイトが攻撃をしかるがそれも簡単に避けられる。

「これはどうだ！」

アルフが捕縛魔法を使い見事ヴィータの両手両足を拘束した。

「ちっ・・・この！」

引きちぎろうと身体を動かすがびくともしない。

―くそっこんなところで・・・

「終わりだね。名前と出身世界、目的を教えてもらうよ」

「ぐぐぅうう！」

ドクン！

アルフは何かを感じた

「フェイト！」

「！」

気付いた時にはもう目の前にもう一人誰かが現れた

「あああああ！」

「フェイトォ！」

「はぁあああああああ！！」

「ぐっあああああ！！」

今度はアルフに謎の男のケリがさく裂した。

「シグナム、ザフィーラ・・」

「大丈夫、ヴィータ？それ！」

器用と言わんばかりの技術でドリルの先端でバインドを破壊した。

「ユキナも・・・どうして」

「どうしてって。あんまり遅いとあの子が寂しがっちゃうからね。さて、シグナムも方はもう終わるかな？」

「「紫電一閃！」」

彼女の剣　レヴァンティンが炎を纏いフェイトに斬りかかりフェイトはそれを防ぐが圧倒的な力でビルに吹き飛ばされてしまう

「ね？」

「ああ。けど、助けろなんて言ってねぇぞ」

「そうか、それは悪かったな。しかし、お前が怪我をしたら我らが主が心配する。それから―落としものだ」

「あっ」

ポンポンと彼女の頭にのせたのは先ほどの帽子だった。

「破損したところは直しておいた」

「ありがとう―」

ビルの屋上

「フェイトちゃん―アルフさんも」

駄目、このままじゃ皆・・・

「大丈夫だ」

「えっ？」

「助っ人の登場だ」

彼が言う方向に現れたのは―

「まさか・・・あれって！」

そう、なのはが観た人物は―アリシアだ

「「てりゃぁあああ！」」

ハルバードーアックス形態で不意打ちを狙った。

「！」

「おっと！」

シグナムに向けて振り下ろされた斧はユキナの紅蓮によって止められた

「ちぇ、リニス！」

「はい！ファイヤーランサー！」

ファイヤーランサー
フェイトが得意とするフォトンランサーの別のバージョンで炎を属性とした攻撃だ。
リニスはこの半年間レイの指導の元雷以外の力を身に付けた。（これは魔術属性に分類されます）

「障壁！」

『おう！』

ユキナが盾となりそれを受ける。
爆煙が目くらましの代わりになってる間に二人は一旦距離を置いた。

―フェイト大丈夫！？

―あ、アリシア？どうして・・・

―細かいことはあと。なんとかやれる！？

―う、うん

「リニスはあの赤い子。私はあのドリル女。フェイトはあのポニーテール。いけるね？」

「わかりました」

「う、うん」

「それじゃあ・・・いくよハルバード！」

『了解（ヤー）』

「へへっ、面白くなってきた！紅蓮！」

『応！ドリルＯＮ！』

紅蓮のデバイスの先端はドリル。それがいま動き出す

「とりゃあ！」

「えい！」

ぎいいいいいいい！

金属が削れる音が響くがどっちも削れてはいない

―ハルバードはそんなんじゃ壊れないよ!ていうかドリル・・・

―凄いなぁ。私の紅蓮に耐えられるなんて!けど、このトマホーク・・・

ザッ!

二人とも一旦間合いをとる
そして、互いに睨み合う

(なんだろう、あのドリルみてると変な感じになる)

(おかしいなぁ。あのトマホークみてると無性に戦いたくなる!)

互いに感じる違和感を感じ取っていた。

二人の戦いをみていたシグナム

「まったく、あいつの戦い癖は相変わらずだな。それよりヴィータ。やれるな?」

「ああ」

「敵は5。一人は除外して・・・」

下をみればザフィーラとアルフが戦っている。そして、ユキナとアリシアが。そして、リニスがシグナムたちの元へ近づいていた。

「事実上4対4。だが、ベルカの騎士で1対1で負けることは―」

「ねぇ！」

―私はあの黒いのを。お前はあの・・・女をやれ

―わかった

『シュワルベフリーゲン！』

「！―てぇい！

ヴィータが４つのシュワルベフリーゲンを放つとリニスもファイヤーランサーを４つ放ち衝突させた。
爆風で相手がみえないのを気にせず次の攻撃に入る。

「おりゃぁあ！」

一振りで爆風を吹き飛ばすヴィータ

「トレイン、私の小太刀を！」

『了解！』

リニスの両手に現れる二本の小太刀を掴みそのまま斬りかかる

「そんなもんで！」

「甘いですよ！魔術加工・風！」

ヴィータはそれを軽々と上空に避けるかリニスはヴィータに向け小太刀を投げる

―そんな軽い攻撃なんて

アイゼンで迎え撃とうとするが小太刀は奇妙な動きをした。
ヴィータに向かってきた小太刀はアイゼンと接触する寸前左右に避けそのまま上に向かった。
＼・／↑こんな感じ

「今です！」

左右に別れた二本の小太刀はそのままヴィータに向かって飛ぶ。
↓・↑こんな感じ

『障壁ィ！』

アイゼンがすぐさま障壁を展開する。
しかし、それは簡単に防がれポンと跳ね返されてしまう。

「そう簡単にはいきませんか・・・よっと」

残念そうに小太刀を手元に戻す

―こいつ、戦い方を知ってやがる

さっきのやつらよりよほど手だれている。

「こいつ・・」

―ていうかなんでメイド服着てんだ?

ヴィータｓｉｄｅＥｎｄ

シグナムｓｉｄｅ

―ヴィータの方も始まったか、こちらも―

「はぁっー！」

「ふん！」

互いの相棒がぶつかり合う。

一旦間合いを取るフェイト

―・・・強い

「魔導師にしては悪くない。だが、ベルカの騎士に挑むにはまだ未熟！」

こちらに向かってくるとは思えばそれは残像

「！」

気づけば目の前にいて

『バリア展開！』

バルディッシュが自らバリアを張りフェイトを守る

バリン！

やはりバルディッシュでさえ簡単に破られてしまう。

「レヴァンティン、叩斬れッ！」

『了解！』

カートリッジをロードし

「―バルディッシュ！？」

シグナムの剣はバルディッシュの命、コア―バルディッシュの本体と呼ばれるべき場所に攻撃が当たっていた。

「ぐぅ・・・ああっ！！！」

ドン！！

彼女の攻撃を耐えきれずビルに叩きつけられてしまう

「フェイトちゃんッ！」

―・・なのはの、声が聞こえる・・

けど、今は・・

「・・・弾もばかにならんな」

一つの弾丸がレヴァンティンに込められた

―あれだ。あの弾丸。あれで一時的に魔力を高めてるんだ

「終わりか？ならばじっとしていろ。命まではとらん」

「誰がぁ！」

諦めるもんか

「いい気迫だ」

若いのに良い気迫だ。
それに魔力も大きい。

「我が名はベルカの騎士、シグナム。そして、我が剣。レヴァンティン。お前の名は？」

騎士として自分が認めた者には名前を聞く。
それが互いの礼儀というものだ

「ミッドチルダの魔導師。時空管理局嘱託、フェイト・テスタロッサ。この子はバルディッシュ」

「テスタロッサにバルディッシュ。いい名だ」

シグナｓｉｄｅＥｎｄ

なのはｓｉｄｅ

皆、皆が危ない

なのはいる位置から皆戦いがよく見えていた。
アルフはザフィーラに圧倒され、フェイトはシグナムとぎりぎりの戦い、アリシアとリニスは同等の戦いをしている
―レイくん、いったいどこに行ったの？

少し前、彼は何かを感じ取りなのはに治療と防御の魔術を施し一旦別行動をとっていた。

「皆を―助けなきゃ」

でも、こんな状態では逆に足手まといは目に見えていた。

『マスター・・・撃ってください・・スターライトブレイカー―を・・・』

助けたい。彼女の思いに応えたレイジングハート。だが、それは自殺行為だ。

「レイジングハート!?駄目だよ、そんな状態じゃ。あんな負担がかかる魔法、今のレイジングハートじゃ・・」

『撃てます』

「けど、レイジングハートが壊れちゃうんだよ!」

『マスター、私はあなたを信じています。だから、あなたも私を信じてください』

「レイジングハート・・」

―インテリジェントデバイスは魔導師の力を1＋1を3にすることだってできる。それはあの子たちが意志を持ってるからだ。意志を持つ。それは人と同じだ。彼らは主をいつも信じている。だから、主が彼らを信じなければ意味はない

そうだよ・・私がレイジングハートを信じなきゃいけないんだ!

「んっ・・・」

なのはは彼が造った結界から出た。出ると意味をなくした結界は崩れた。

―皆聞こえる?今から結界を壊すからタイミングを合わせて転送を!

―なのは・・・

―なのは、大丈夫なのかい?

―大丈夫!スターライトブレイカ―で撃ち抜くから!

「レイジングハート、カウントォ!」

『わかりました。１０・９・８・・』

―まずいなぁ～あの白い子。何かする気だよ?

まず異変に気付いたのはユキナだった。

―そうはしたいがどうやら近づけさせてはくれんらしい
フェイト達はなのはに近づけさせないよう必死に守る戦いにはいった。

レイｓｉｄｅ

それは遠くにいたレイにも伝わっていた

―あの馬鹿！なんで結界から出たんだ！それよりも・・どこだ

あの結界は治療と防御の魔術『鉄壁の癒し』。あれは外部と遮断してあるから空間転移も及ばない。
わざわざそれをしたのはなのはが今一番狙われやすいからだ

―ちっ一旦戻るしか・・・あれは！

なのは達の方に振りかえり彼女のすぐ近くのビルに人がいた

「しまった！」

レイｓｉｄｅＥｎｄ

『４・３・・・３・すりぃ・・』

しかし、レイジングハートに限界が近づいていた

「・・・レイジングハート大丈夫？」

『大丈夫です。カウント3・2・1―』

「スターライト・・ぶ『ぐにょ』あっああ?」

「なの、は?」

なのはがスターライトブレイカ―を撃つことはなかった。
なぜなら彼女に胸に腕が飛び出ている。その手のひらには魔導師の源リンカ―コアを持っている。

「やった。捕まえた」

―シャマル!お前いつの間に闇の書を・・

ヴィータはいつの間にかに消えていた闇の書が彼女の手元にあることに気づいた

「リンカ―コア捕獲。蒐集」

『蒐集』

闇の書に彼女の魔力が注げられる。そして次々に魔力が送られていくごとにページが進む

―えっなに?・・うで・・なんでそれにこれなに・・でも、うたなきゃ・・うたないと

『カウント０』

「あああああああスターライトォ・・ブレイカ―ァあああああ！！！」

咆哮しながらスターライトブレイカーを放ち砲撃はそのままヴィータが造りだし封鎖結界を破壊した

アースラｓｉｄｅ

「結界破れました！映像来ます！」

先ほどから封鎖結界内の映像はきておらず彼女達の状況が掴めないでいた

「これは・・・」

「いったいなんなのこれは！」

次々と送られてくる映像

途中から目撃したアースラにはまったく状況が掴めなかった

アースラｓｉｄｅＥｎｄ

「ふー蒐集完了」

手を抜き闇の書を閉じる

―シャマル、蒐集は終わったな？結界が破られた引くぞ！

―ええ

―心得た

―了～解

―シャマル、ごめん助かった

―うん、それじゃあ一旦散っていつもの場所で集合

彼女たちは転移を始める。
また、アースラではエイミィが彼女達を捕えようと必死だった

「ああ、逃げちゃう！ロック急いで！」

『やってます！』

彼女達が消える中一つの映像が流れた

「アレは！」

気付いたのはクロノだ。
シャマルがもつ闇の書に反応した

あれがそうなら今回の事件の発端は・・

映像でレイがなのはの所に戻ってきて彼女を抱きかかえる。

「リンディ！急いで本局の医療施設の手配をしろ！」

『ろ、了解。本局に問い合わせ、急いで！』

『了解！』

「直接俺は本局にいくあとは頼むぞ！」

『わかりました！』

「なのは・・・」

―魔力を蒐集されただけだが戦闘でのダメージも大きい。命にかかわることではないと思うが

「ゲート解放。本局への扉、開門！」

彼の目の前に現れる門。

急いで彼は門をくぐり本局へと向かった

『駄目です。ロックが外れました』

「あーもう！」

バン！

キーボートを叩くエイミィ

「ごめん、クロノくんしくじった。・・・クロノくん?」

彼はまっすぐモニターを見て呟いた

「第1級捜索指定物。古代遺産闇の書(ロストロギア)」

彼は表情に出していないが拳に力が入っている。

「クロノくん、知ってるの?」

「ああ、少し嫌な因縁があるんだ」

状況は最悪。

再会がまさかこんなことになるとは誰も思ってもみなかった

第２３話　魔道師と騎士（後書き）

新キャラユキナとそのデバイス紅蓮
詳しく書こうと思ったのですがそれはオリキャラ紹介で
紅蓮のＣＶですがまんまカミナです。その方が燃えるっしょ？

ちょっと今回は複雑ですみませんでした。キャラごとの場面がなんか変だったと思うのですが・・・平気でしたかね？

多分次回はオリキャラ紹介か次話になる思いますのでよろしくお願いします

オリキャラ紹介3（前書き）

とりあえずユキナと紅蓮についてかきました。
書いてるうちにちょっとめんどくなったので手抜きになったかも？

オリキャラ紹介3

螺旋の騎士　ユキナ

モデル　姉しよの巴で髪が黒で普通に髪(ロング)を後ろで止めている感じです

性別　女

性格　面倒見がいい。シグナムやシャマル同様お姉さんタイプ。困ってる人がいたら自然と声をかける。
戦い癖で強い相手がいると戦いたくて仕方ない

魔導師ランク　S

魔法術式　ベルカ式

魔力色　濃いオレンジ

デバイス　インテリジェントデバイス　ベルカ式　紅蓮

ジャケット　イメージとしてはリンディの管理局の服とシグナムのジャケットを足した感じ。（下がリンディので上がシグナムの）一応上には何も羽織っておらずただ真っ赤に燃える赤いマント（カミナみたいので闇の書の十字がある）を羽織っておりていうかあれなんでとれないんだろ?と思うような感じです。色は赤と黒を主にしています。
※説明が下手ですみません。簡易版だとカミナの格好で上をちゃんと着ている感じ

備考
闇の書の騎士プログラムの一人。天を突き大地を割り主のための道を開く。それが彼女である。騎士たちの中では一番お気楽の方だがよく皆を見てシャマルやシグナムをサポートする。
アリシアと出会い何故かライバル視しはじめた

紅蓮

インテリジェントデバイス

ＣＶ　ひろし（カミナ）

形状　ドリル　どこからどうみてもドリル。ドリルの下、平なとこの中心に棒を刺した感じ。
イメージとして　？・一　左からドリル　紅蓮　杖になります。
カートリッジはバルディッシュアサルトみたいなリボルバー型です

形態　通常モードと装着型ある

通常モード　紅蓮の一般的な形態。ドリルだが空でも活用できドリルを回転させた竜巻やそのまま発射するドリルミサイルなどがある。

武装　ドリルアタック　加速しそのまま相手に突っ込む
　ドリルミサイル　ドリルをミサイルのように放つ。追尾機能付き
　ドリルハリケーン　ドリルを高速回転させ竜巻を起こす

装着型　武装は上記と同じだが地上において地面を掘れる。通常型

でも可能だがこちらの方が安定する

形状　右腕の肘まで装着しておりドリルの長さは１ｍ（だが自由に長さを変えることができる）

最終形態　？？？？

没案　スコップ型　最終兵器らしいが詳細は不明
ていうか没案だし

トレイン

※当初出すつもりはありませんでしたが出すことにしました。

インテリジェントデバイス

性格　温厚　普通のとあんまり変わらない

特徴　トレイン自身がデバイスにならずトレインが収納している武器を出すデバイス。
これをデバイスと言っていいのかはいまいち判断しがたい

収納武器
トレインが収納している武器は一般のとあまりかわらない。とりあえず使い魔なので魔力消費を抑えるために現代兵器を使うこともしばしば。
主に使用するのは小太刀。

備考

戦闘形態がないためいつも待機形態の状態でリニスのメイド服の胸あたりについている。

魔術用語

ゲート

日常編から出てきたものですがこれはレイがその空間を登録している場所のみ使えます。

インバイト・アースと違うのはあれは登録していない場所へいくさいに使うものでその場所をイメージしなければならない（ボソンジャンプみたいなもの）

つまり、登録した場所であれば声一つでその場所へいけるということ。

オリキャラ紹介3（後書き）

ＣＶ天の声　多分皆思ってるかもしれないししれないかもしれないけどなんで騎士を一人足したの？

作者　なんとなく、いやアリシアがトマホークだから出そうかなって

天　なんか適当だよね

作　なんていうか最近自覚したんだけどさ日常編のがものすごく書きやすいってことに！戦闘は大変なんだ、言葉に表すのが・・・

天　そこを頑張っての小説家だろ！？

作　いやそうなんだけどさ。個人的にはマテリアル偏をかきたいんだよ。けど、飛ばせない、飛ばさないのはとても大事なことがあるから

天　大事なことって？

作　んまぁそれはお楽しみってことで。前からマテリアルとかいってるけどこれネタばれじゃね？

天　いいんじゃない？

第２４話　帰ってきたよ・・・本局に（前書き）

よし、なんとか更新できた！
今日から中間だけど！
赤点は免れてみせるぞ！

第２４話　帰ってきたよ・・・本局に

１２月２日　時空管理局本局　医療施設区域

とある医務室の扉に面会謝絶の張り紙が貼られた一室があった。
そこには一人の小さな少女がベットの上で静かに眠っていた。
彼女の名は高町なのは。先ほど総帥権限で緊急治療を終えた。
そして、もう一人

カタカタ

白衣を着た男がキーボードを打っている
彼の名はレイ。言わずと知れた本局（ここ）の総帥だ。
総帥権限で使用しているがぶっちゃけ使ってない部屋を無理やり使ってるだけだけどね♪
そして、現在リンディと念話中

―で、なのはさんの容体は？

―特に異常はない。そもそも殺傷設定がある限り命に至ることはないからな。ただ、問題はなのはのリンカ―コアが小さくなったってことぐらいか

―となると一連の事件と同じですか・・。となるとこの事件は私たちが担当になりそうですね

―まぁそういう仕事だからな

―休暇はしばらく延期です・・

―そしたらちょっと多めに休暇をやってもいい

―本当ですか？

―ああ、それぐらいのことをして貰ってるからな。アースラには

―（ほとんどが先生の独断な気がしますけど・・・

「・・んっん」

―なのはが気付いたかもしれん。一旦きるぞ？

―わかりました

「・・・あれ、ここ・・」

気がつけばそこは知らない部屋だった。
少し見渡せばそこには会いたかった人がいた

「―レイくん」

「目が覚めたようだな」

「私どうしたの？」

「簡単に言えば急激に魔力を抜かれさらにスターライトブレイカーを放ったから気絶した―まぁ一種の貧血だ」

「魔力を抜かれた？」

「魔導師の源、リンカーコア。例えるなら今のなのはガソリンが終わった車みたいなもんだ。だから、当分は魔力は使えない。あっても心配するな？魔力切れといっても自然と回復するから」

「うん―」

ドン

「？」

扉の方から何か叩く音が聞こえた。

レイくんをみたら「あっ忘れてた」みたいな顔をしていた。

「すまん、もう入っていいぞ」

「―なのは大丈夫？」

「フェイトちゃん、えーとアリシアさん？」

入ってきたのはテスタロッサ姉妹だ。

「あーもうぉ。私のことはアリシアでいいっていったでしょう？」

そう言えば最初ビデオレターでさんつけたらやめてっていたっけ

「あう、そのアリシアちゃんでいい？」

「いいよ♪」

「えへへ」

「なのは、怪我は平気？」

そういうフェイトちゃんも腕を怪我したようで包帯を巻いていた。

「私は平気。フェイトちゃんは？」

「私も平気だよ」

「よかった。―それにしてもとんだ再会になっちゃったね？」

「うん―」

それから少し無言な時間が続いた

お、重い

空気がなんだが重い

「あーもう！」

「あ、アリシア？」

「どうあれせっかく会えたんだからもっと楽しくいかなきゃ！」

「アリシアの言うとおりだぞ～」

「兄さんはちゃんと込めていったほうがいいと思うよ？」

「なにを!?ちゃんと思いを込めて言っているのに!」

「ははっ」

「なのは、そこ笑うとこじゃねぇぞ」

「だって、レイくんが必死になっていうんだもん」

―必死って言えばレイ、なのはが倒れた時やけに必死になってたような・・・?

アリシアは先のことを思い出していた。
確かにあの時のレイの行動は異常なような気がしなくもない。けど、いざ自分の目でみたら落ちついていたし・・・
まっ、詮索して意味ないか

「じゃあ、あいつらのとこいくか?」

「うん」

あいつら

それはなのはとフェイトの愛機

「どうだ、リニス?」

「はい、なんとも言えない状況ですね―あっ初めまして。なのはさん。リニスです」

「あ！初めまして。それにアルフさんも久しぶり」

「うん、久しぶりだね、なのは」

とりあえず再会のあいさつ

「で、今現在の二機の状況は？」

「今は、自動修復をしています。しかし、一旦精密検査をして破損部分が激しい部品を交換でしょうね」

「そうか」

「レイジングハート・・」

「バルディッシュごめんね」

ふいふり

アルフは尻尾を振りながら皆にいった

「ところでさぁあいつらの魔法少しへんじゃなかった？」

「ああ、アレはベルカ式だ。カートリッジシステムと言われる魔力が込められた弾丸を使うことで一時的に魔力を増幅させるんだ」

「そうか、だからいきなり魔力が大きくなったりしたんだ」

「そういうことだ」

―レイジングハート・・ありがとう

「今はゆっくり休んでね」

「ところで、さぁ。もう一つ聞いていい？」

「なんだ？」

「その・・リニスの今の格好もそうなんだけどなんでアリシアがデバイスを持ってるのさ？」

「／／／アルフ、あまり口に出して言わないで。これでも恥ずかしいんですから」

「あ、ごめん」

―恥ずかしかったんだ。あまりに似合いすぎてたから。特に猫耳と尻尾まで出てるし

そのあとレイは何・故・か！なぜなにを使わず三人に説明していた。

なんで！？

と言わんばかりの不思議さにアルフが聞いた

「今日の俺はＤｒ．レイだからだ」

意味がわかんね

ちなみに彼、医師免許を持ってるのこと

※それとアリシアのジャケットはチャイナの膝まであるやつで左右が空いてるやつ。手には鎧のようなアレ。腰にははやてがつけている金ぴかの部分が尖った感じ。肩にも鎧のような軽い飾りがついている。
※2リニスのメイド姿は某三千のメイドさんをご想像ください

『総帥いいですか？』

「なんだ、クロノ」

『フェイトの面接の時間です。それとなのはも連れてくるようにと』

「ああ、わかった。じゃあ行くか。二人とも」

『はい』

「それとアリシアたちはレイジングハートたちを頼む」

『は～い』

レイたちは面接場所へと向かう。
ちょっとそこである出来事が起きた

レイを先頭に後ろについて行くように歩いている二人。歩きながら聞こえる小声というひそひそ話が聞こえてきた

「おい、みろよ総帥だ」

「帰ってきたのか！」

「それにしても前回戻ってきたのはいつだ？」

「しらねぇよ。前回戻ってきたのは確か判子を忘れたとか」

「俺は女絡みだって聞いたぜ」

「というか後ろに連れてる子。もしかして子供か？」

「いや、どうみても似てないだろう」

「じゃあロリコン？」

とこれが男性陣

「キャー総帥よ！」

「いつみても凛々しいわ」

「あー声かけてくれないかしら」

「あっ今私の方みた！」

「いえ私よ！」

「それにしてもあの子供誰？ロリコンなの？」

「さー？」

と女性陣

―レイくんって本当に総帥？

―そうだが？

―兄さん、嘘はよくないよ

―いや、本当だから

先ほどから聞こえてくる声が総帥というのが嘘に聞こえてきてしまうのだ

まぁそうですよね

「一入るぞ」

―うわぁいきなり

なんてマナーがないんだろうと思った

入るとちょっと老けたおっさんとクロノがいた

「久しぶりだな。グレアム」

「はい、総帥もやっと帰ってくれましたな」

―でもやっぱり総帥なんだ

現実は常に残酷だなと思った二人でした

―いや、どこからへんが残酷だよ？

それからグレアムさんとの他愛もない会話をした。
彼がフェイトちゃんの保護観察官になったことにはある意味ラッキーだとレイくんもあとで言っていた。

まぁ優しいおっさんだからな

と言っていました

それからグレアムさんは大切なことを教えてくれました

「友達や自分を信頼している人を裏切ってはいけないよ」

きっとそれは大事なこと。
だから、友達って良いなって思う

八神家ｓｉｄｅ

『俺の拳が光ってうなるぅ！』

ただいま八神家では夜のゴールデンタイムをみていた。

「はやてちゃん、お風呂沸きましたから入りましょう。ヴィータちゃんも」

『は～い』

「あっ私も～」

はやてはシャマルに抱っこされお風呂場へと向かう４人

「あれ、シグナムはいいのか？」

「私は明日入るよ」

「お風呂好きが珍しいじゃん」

「たまにはそういう日もあるさ」

「じゃあいきましょうか」

・・・・・・・

「傷を負ったのか？」

残ったザフィーラが聞いた

「察しがいいな」

お腹に斜めの傷跡が残っていた。

「あの魔導師か？」

「ああ。良い太刀筋だった。きっと良い師に学んだだろうな。デバイスの差がなければ危なかったかもしれん」

「だが、お前は負けないだろう」

「ああ、我ら騎士に敗北は許されない」

「主のために」

―そうだ。主のため。そして私たちのためにも敗北は一許されない

窓の前に立ち夜空を見上げるシグナムだった。

八神家ｓｉｄｅＥｎｄ

管理局ｓｉｄｅ

グレアムとの話を聞いたあと各々別れて行動していた。

二機の資材の発注したエイミィとなのははそのまま一緒にいた。

そこで彼女から驚くことを聞いた。

「フェイトちゃんがリンディさんの養子ですか？」

「うん。プレシア事件で天涯孤独―じゃなかった。アリシアちゃんもいるけどやっぱりそういうのが必要だって話になって」

「それでフェイトちゃんは？」

「まぁ、まだ心の整理がつかないってところかな。けど、本人も満更でもなさそうだしね」

「じゃあ、クロノくん義兄さんですね」

「そうだね～」

―まっ、クロノくんも案外気にいってるんだよね。実のところ

「あっ、でもアリシアちゃんはどうするんですか？」

「それが問題なんだよね。フェイトちゃんもそうなんだけど最初は総帥が引き取るって話だったらしいし」

「レイくんが！？」

「うん」

意外だと私は思った。

あのレイくんがそういうこと言うとは思ってもみなかった。けど、レイくんは二人のことよく知ってるしそれにプレシアさんとも仲良かったって話だからそうなると言えばなるよね

「けど、総帥はリンディ提督に任したんだ」

「なんでですか？」

「それが・・「俺といると大変だから」とか言ってたらしいけど・・」

「じゃあ、アリシアちゃんがまだ戸惑ってるのって・・」

「そ。アリシアちゃん、総帥の養子になるつもりらしいんだけどそれを総帥が否定してて」

「色々と大変ですね」

「そうだね・・」

とある自販機のあるところにレイくんを除く人たちが集まりました。
内容は闇の書兼魔導師襲撃事件の捜査をアースラが受け持ったこと。
そして、アースラが使えない臨時作戦本部をどこにするという話だった。

「というわけで、本部の場所はなのはさんのお家の近くになりま～す♪」

ではさっそくと言わんばかりに皆準備を始めた。

時空管理局　総帥の間

レイは今自分の部屋の前に立っている。なぜ、間なのかは彼の趣味らしい。

「よし、あけるぞ・・・」

ポチ

ザッ！

ボタンを押すと同時に彼は瞬時に壁に背をつけまるで部屋からなにかが出てくるように退避した。
いや、性格には出てくるから退避したのだ。

「げほげほ・・・あ～やっぱ埃がたまっていたか」

どうしたらこんなにも埃がたまるのだろうか。例えるなら４年に一度しか起きない超能力刑事の部屋異常それの５倍は積もってると思ってもらいたい。

「はー、ＺＥＲＯクリーニング」

『・・了～解』

なんということでしょうあの埃だらけだった部屋が匠の技で一瞬にして普通の部屋に

まぁ匠じゃないけどね

「さて、ただいま」

綺麗になった部屋は至って普通で奥に茶の間とか庭園があるぐらいの普通の部屋だ。

彼はそのまま机に置いてある端末を起動した。
すると流れる滝のような報告書が流れている。

「あー溜まってる溜まってる。さて、自動処理モードっと」

それはまぁデバイスみたいなものである程度の報告書を自動でやってくれるという便利なものだった。だが、総帥自身が必要なものならそれを本人に報告するというすぐれもの

彼はそのまま本棚がならんであるところに歩いて行った。

そこのとある一冊の本を押した。
するとどうだろう。からくり屋敷みたい本棚が左右にずれ奥の壁がひらきエレベータが現れた。
乗り込んだ彼はそのまま下へと向かっていた。
そのエレベータには階数を表示するものがない。いや、ボタンすらなかった。ただ、それは下へと向かっていた。

ピン

エレベータが止まり外へ出る
そこは不思議な空間だった。
中央に大きな柱がありその下には機械が柱を中心としてドーナッツのようにおいてある。けど一角は窪んでいて階段があった。
彼は柱に近づき階段を上った。
そこにはアリシアのように培養液に入った少女がいた。
だが、アリシアと違うのは彼女は生きていることだ

「ただいま、イヴ」

『おかえりレイ。いつぶりの帰宅かしら?』

イヴという少女は目を開け普通に応えていた。
ちなみに彼女の姿は全裸です

※3　イヴという少女は鋼殻のレギオスのフェリをご想像ください

「確か最後に来たのは何十年も前だった気がしなくもない」

『本当久しぶりね。けど、いつも寝てるからつい昨日のような感じだね』

「そうだな。調子はどうだ？」

『いつもと変わらない。それより、ちょっと無理したんじゃない？あのアリシアって子。あなた代行者の力を使って生き返らしたんですって？』

そのことはアースラ乗組員にしかしらないことを彼女は知っていた。それに代行者のこともだ。

「なんだ、もう知ってたのか」

『一応リフィーアさんから聞いてたけど』

「なんだ、あいつから聞いたのか？」

『うん、精神だけ向こう側に往って。けど、最近は暇だからいつも向こうに往ってる』

それなら知っててもおかしくないよな

『それよりリフィーアさんから伝言頼まれたんだけどなんでも他の代行者が動いてるって話よ』

「そうか、まぁ敵対することはないだろ。戦うことが俺たちの使命じゃない」

代行者は神の数だけこの世に存在する。しかし、代行者を従えない神もいる。

『そう。なら、私から一つ』

「？」

『夜明け団の幹部が動いてるわ。あの地球って場所で』

「お前も感じたか」

『じゃあ、あなたも？』

「ああ、さっき妙な魔力を感じた。多分魔力を消してたんだろうが臭気というかそんな臭いを感じた。それにしても幹部か。やっかいだな」

彼がなのはの傍を離れていたのはそのためだった。
しかし、結局捜索は断念されてしまったが

『一どうするの？』

「戦うしかないだろうな。幹部なら尚更」

『けど、殲滅はしないんでしょ？』

「そんなことしたら世界の均衡が崩れる。闇があるから光はその輝きを保ってられる。管理局もそうさ。敵対するものがいなければ食っていけない」

『まぁそれが過去・未来・現在へと変わらない世界の法則だもんね』

「ほんといやな世の中になっちまったな」

『うん―』

なんでこんな争いばかりの世界になっちゃったんだろう。
私は争いのない世界を望んでた。けど、私が望んだって世界は変わらない。
やっぱりあなたがそう望んでいるの？

アダム・・・

『―レイは、私を裏切らないよね？』

「なんでそんなこと聞くんだ？」

『いいから答えて』

そこにいる少女は何かを失うのが恐い。そう思っているような顔だった。

「・・・俺はお前を裏切らない。お前も俺を裏切らない。そういう仲のはずだろ？」

『―うん♪』

やっぱりあなたは優しい人。
だから、私はあなたを選んだ。

「じゃあ俺、もういくから」

『そう、残念。あっもう一つ聞きたいんだけどいい？』

「なんだ？」

『なんであなた管理局に戻りたくないっていつも思ってるの？』

「それは・・・」

『それは・・・？』

「仕事したくないから」

『それと提督たちが俺を捕まえようとするから。でしょ？』

「まったくもってその通りです」

『ははは。じゃあまたね』

ポットの中から手を振ってくる

「ああ。またな」

彼も手を振って返す

その時だった

「ふもーーーーーーーー！」

「とぉう！」

軽く前に前回り受け身をしてそれを避ける

「おい、お前帰ってきたのにそれはないだろう」

突如襲った者には見覚えがあった。あったというかここの守護神というなんというか・・

「ふもふも！」

「なに？帰ってきたんだから少しは手合わせしろ？めんどくさい」

「ふもー！」

「めんどくさいじゃない？俺だって忙しんだよ、ボン太くん」

そう、目の前にいる彼を襲ったのは黒いボン太くんだった。

『ボン太くんだって寂しかったんだよ？』

「ふ、ふもふもも」

『（寂しくなんかないやい。だって、可愛いな・・）』

もちろんそれはレイにもわかっていた。

「まぁ、今回はよく戻ってくることになるかもしれないから時間が空いたら手合わせしてやるよ」

ぽんぽん

と彼の頭を撫でてあげる

「ふもぉ・・・」

『（わかったよぉ。仕方ないなぁ～。もう、照れ屋さん☆）』

「じゃあ、またな。二人とも」

『うん』

「ふもふも～」

『行っちゃった』

「ふもぉ」

『ねぇ、一緒にリフィーアさんのところいこっか？』

「ふも！」

そういうとイヴはまた眠り始めた。ボン太くんもその場に尻もちをついて眠り始めた。

第２４話　帰ってきたよ・・・本局に（後書き）

さて、今回はちょっと世界の真理できなものに触れました？
アダムとかイヴ－わかるかたはわかりますよね・・
そして、なんとボン太くんがとうとう本編に！
一応これオリキャラで紹介したブラックボン太くんＦＩＮＡＬです。
あっちなみにこの子中の人なんていませんよ

次回は引っ越しの話になります。
本当は一緒にしようとしたんですけど長くなりそうなので一旦区切りました。
では、次回でまた！

第２５話　闇は常に動いている（前書き）

えーと２５話にはいるのかなこれ？
まず今回はヴィータたちの戦闘のさいレイが離れていたときの少しの話です。
ほんと短くてすみません

※それと前回予告詐欺してしまいました。ごめんなさい

第２５話　闇は常に動いている

どこかの次元にある世界の一つ。
そこにあるのは荒野だけ。太陽は射さない。月だけがその世界を照らす。
その世界に一つしかない建造物。
城のような雰囲気を漂わせてはいるが簡単に言えばラスボスのダンジョンだ。

城内

一人の男が通路を歩いていた。
彼の名はジェイド・バナード。夜明け団の幹部の一人である。
※モデルはダンディなおっさんです

彼は研究施設に向かって歩いていた。
研究施設に入ると一人の老人が実験場をみていた。

「導師、どうですか？人造魔導師の生成は」

導師。それはこの黄金の夜明け団の創設者。
アレスター・クロウリー。
数多の魔術師、魔導師を従えている次元犯罪者ではあるがそれを知っている者は数えるものしかいない。
※モデルはブリーチの総隊長の爺で目が開いてる感じ

「ジェイドか・・・どうもこうもこの有様でな」

「どれ・・・」

人型をした人形が崩れてゆく姿が目に入る。

「やはり、駄目ですな。死人どもが持ち帰ったあのF計画の資料。我々は魔導師を従えてはいますがその魔導師としての根本を理解していない。キメラを造れても人は造れない。禁忌を犯さない限りは」

「その通りだジェイド。我らは魔術師。けして魔導師ではない。そして、大いなる悪。悪がいるからこの世界は成り立っている」

「ふっ、そうですな」

「あー疲れた」

二人の会話に若い男が入ってきた。

「アダムよ。奴の訓練が終わったのか？」

「まぁな。まったく、お前の娘で俺が認めた“女”なのになんであんなに駄目かね？」

アダムと呼ばれた男は期待してたのに実際はまったくの落ちこぼれみたいない感じで呆れていた。

「あやつには自覚がないのだ。まだ、自分が真っ当な人間だと思っておる」

「あの方はまだ若いですからな」

「のわりには全くて言うほど自覚していないな。お前の娘であることも」

「そう言うなアダム。この先奴の力は必要になる」

あいつはまだ力の制御がでていないからな

「我らが盟約。世界の統一。そして、お前の目的を果たすために」

「まぁゆっくりと指導していくさ。お前を超えるぐらいに」

「ははっ、それは面白い」

『失礼します』

会話の最中一人の死人がやってきた

『ジェイドさま。次元転移の陣が整いました』

「そうか」

「そういえばどこにいくのだ?」

「少し計画の遺産をみに。確保できるなら確保してきますがね。それと彼に遭うことになったらごあいさつをしますが、何か伝えることはありますか?」

「ふん、奴に伝えることなどない!」

「伝えることがあるとすればいますぐ死んでくれ。だな」

「では、そう伝えておきますよ（笑）」

そう言うとジェイドは部屋から出て行った。

「あの時は本当にしてやられたな。俺達全員が出払ってる時にまさかただの有能な魔術師だと思った奴がここを壊滅寸前まで追い詰めたんだからな」

「今思えば可笑しかった。ロストロギアと引き換えに儂のもとにいれてほしいと言ってきたあの時」

「それはお前が骨董品集めの悪い癖が出たんだよ」

この爺は珍しい物には目がなく特にロストロギアなんかどんな手を使っても欲しがる。それをあの時あいつはそれのことを知っていたに違いない。

そして、奴が入って半年。

妙なことに俺達幹部を含めた全員が出払っていた。

それを好機に奴はここを壊滅状態までに追い込みさらには爺が集めたロストロギアや魔術資料を強奪。そしてとんずら。

俺達が来たときに目にしたのは原型をとどめていない城と大量の死体。

盗まれたロストロギア魔術資料はほとんど盗まれたと言ってよかった。

そして、壁に血でかかれた「お宝はいただいたぜ　レイから導師様へ（笑）」

ありゃ大変だった。
俺はあんなもんに興味はなかったが爺の怒りというかなんというか。
止めていた死人が何百人と死んだからな

「さて、儂は少し眠ろう」

「じゃあ俺は飯でも食うかな」

ジェイドｓｉｄｅ

ヴィータが結界を張ったすぐ直後

「うーん、結界か。魔力を消さなければ」

海鳴市に転移してきたジェイドは軽く街を見ながら散歩していたら
結界が貼られていたことに気付いた。
すると戦闘が始まった。
彼は結界の一番端に隠れながら見ていた

「ほーあれが報告にあった白い魔導師か。なるほど。若いのによい
才能を持っている。それとあの赤いの・・・人間であり人間ではな
いな・・・？」

ジェイドは初めて目のあたりにしたヴィータの正体に薄々気づいて
いる。

それからピンチになったなのはに救援がかけつけた。

「ほーあれが計画の遺産。確か・・・フェイト。とか言っていたな。
それに大魔導師の娘まで！あやつ死者蘇生をしたのか・・。相変わらず恐ろしい奴よ。ー！」

しまった気付かれたか

どうやらあやつが俺の臭いを嗅ぎつけたらしい。
魔力を消してもこの臭いは消えんか。
まぁいい。それにいいものも見れたここは一旦引くとしよう。

ジェイドは気づかれないようにその場をさり本部へと帰還した。

戻って夜明け団本部
？？？

疲れた

アダムはいつも辛い特訓を私に指導する。

父様の娘だから

少し魔力が大きいから

けど、逃げない

逃げたら私の目的が達成できない

父様たちの目的なんかしらない

私の目的のためにアダムと父様たちを利用する

レイル・アンヴァルト・Ｙ・神乃

私と同じ選ばれた子供

彼に会うために

私は―今を生きている

？？？ｓｉｄｅＥｎｄ

「導師、ただいま戻りました」

「で、どうだった」

「はい、面白い物を見つけましたよ。あのベルカの時代にあったあの闇の書です」

「そうか・・・なら手に入れる価値はあるな」

「はい。では、情報通り今は闇の書の完成を待ちましょう」

「うむ」

そして、静かに世界の闇に潜む悪は動き出し始める

第２５話　闇は常に動いている（後書き）

短いからちょっと雑になってしまいました。
アダム登場
イメージはキスダムのシュウ（主人公）かな。
それと導師の娘はまだ決まっていないので未定です。
今回もまた不思議な単語
選ばれた子供
ちなみにこれはＡ'Ｓでは明かされません
おそらくこの話でいえばＳＴＳが終わったぐらいじゃないかな?続くどうかはわからいけど・・・

次回はフェイトとアリシアが引っ越しのお話です。
ではまた!

第２６話　引っ越しと手助け（前書き）

はーい２６話でーす。
中間も終わって気分がいいです。

今回はアースラ一行の引っ越しとレイが裏で騎士たちに手を貸すお話になります。
ではどうぞ！

第２６話　引っ越しと手助け

「わぁー私の家とすぐ近くだよ！」

自分の家を指でさしながらはしゃぐなのは。

そうただいま引っ越しの最中。

できるだけなのはの近くで構えるためこのマンションを選んだ。しかも、作戦本部なのであるはずのないケーブルやらウィンドが表示されたりとどうみて何世紀か先のお部屋になっていた。

ちなみにこの作戦本部にはリンディ、クロノ、エイミィ、フェイト、アルフ、アリシア、リニスが住まうことになっている。

「ほんといい物件もあるもんだな。俺も探してみるかな」

引っ越しを手伝わずソファーでくつろぐ男が一人。

「えっ、それってどういうこと？」

「さすがにいつまでもなのはに世話になってるわけにはいかないからな。まぁぼちぼち探しながら決めようかなと・・・なんでそんな残念そうな顔してるんだ？」

―だって、寂しいから

「で、でも当分の間は一緒にいるよね！？」

「あ、ああ」

寂しそうになってると思えば今度は笑顔。
ほんと女っていまいちわからん。

「ところでアルフその姿・・！」

「新形態子犬フォーム！どう？フェイト」

「うん可愛いよ！」

ぎゅっと抱きしめるフェイト。

―それにしてもあんな恐い犬？が子犬なるとこうも可愛くなるとは思えないよな・・

なんていうかギャップが凄いよね？

「リニスはどうする？」

アリシアは同じ使い魔のリニスに聞いた。

「私、ですか？」

リニスの場合普通にしていればどこかのメイドだから対して気にはならない。それにこのご時世。なんかのプレイかメイド喫茶の女の子で話が通る。

「一応猫になっておいたほうがいいだろう。その方が楽だろうし」

「そうですね。では・・」

リニスも同じく猫フォームになる。

「うん、リニスも可愛いよ♪」

「ありがとう。リニス」

「一ところでレイくんはならなくていいの？」

「ん？」

そうまだ肝心のお方が残っている。

「いや、だからレイくんもフェレットにならなくてもいいの？」

『フェレット・・・？』

アリシアとリニスは知らなくて当然だ。だが、フェイトはすっかり忘れていたらしく一緒に口ずさんだ。

「まぁ・・なってみるか」

レイも言われフェレットになる。

その姿を見たフェイトとアリシアの二人は・・

「兄さん・・か、可愛い」

「レイお持ち帰りぃ！」

アリシアに捕まえられ抱きしめられるレイ

「ぐ、ぐるじい。アリシア、もっと・・やさしく・・」

「あ、ごめん。つい可愛くて・・」

「アリシア、次私」

「やだ！」

「な、なんで？」

「レイは私の物！」

きっぱりと言いました。

「駄目！」

アリシアから強引にレイを引き離しなのはがレイを保護する。

「れ、レイくんは私のなんだから！」

ドーン

その時彼女達に衝撃が走った。

それは女の直感。そうこれは宣戦布告なのだとＣＶアカギの天の声

「ねぇ、なのはちゃん。それって宣戦布告って受け取っていい？」

「なのはでもそれだけは譲れない」

あのフェイトでさえこれである。

「別にいいよ・・・相手になるよ」

なのはは顔は未来の魔王さまのような顔をしている。

「お前らいい加減にしろー！」

『！！！！』

いきなり人の姿に戻り怒鳴る

「まったく。少しは大人しくしてろ！」

『は～い・・・』

自分が玩具のとりあいのような感じになったのを体感したレイだった。

それから引っ越しの作業も終わりに近づいてきた頃。

「ねぇレイ？」

「・・・アリシア。いいたいことはわかってる」

「―うん」

それはリンディの養子なると言うことだった。

「アリシアはリンディのこと嫌いか？」

「ううん。いい人だし優しいし好きだよ？でも・・」

―仕方ないと言えば仕方ない。アリシアはずっと見てきたからな。

アリシアは死んだあとも魂としてレイの傍でずっと見てきた。
ずっといたと置き換えてもいいだろう。
それは自分の母を目の前で失ったのをこの目でみたのだ。未だに心の整理がつかなくてもおかしくはない。

―なんで、フェイトはあんなに嬉しそうなれるんだろう

確かにあの人がフェイトにしたことはきっとフェイトにとっては辛いことだったかもしれない。けど、最後にはあの人を母と言っていた。
なのにこうも簡単に養子なると言われてあんなに嬉しそうにできるのが不思議でならなかった。

「とりあえず、この事件が終わるまでは一緒にいろ。その間に色々と考えるといい。それで、答えが今と同じなら俺も別の―いや、お前の意見をできるだけ尊重する。それでいいか？」

「―うん」

頭を撫でられるアリシア。

―レイは、私とってはお父さんみたいな人だから本当はレイの養子

になりたいんだけどな・・

小さいころから一緒だったアリシアにとって彼は父のような存在。
いや、父親という存在だった。

―本当なら俺が二人を引き取ってやりたいが・・幼い二人を危険な目にあわしたくない。許してくれ

本当は二人を引き取りたい。けど自分といれば危険が自然と襲いかかる。そんな矛盾がレイを迷わせていた。

『こんにちは～』

「アリサちゃん、すずかちゃん！」

どうやら二人が遊びに来たようだ。

「さてと、フェレットになるか」

フェレットになって玄関先へと向かう。

「フェイトも・・初めましてってのはへんだよね」

「うん。私もアリサとすずかにあえて嬉しいよ」

「あれアリシアは？」

「私ならここにいるよ～」

奥の方からフェレットを抱きながらやってきた。

―ほんと、フェイトとそくっり

―でも、アリシアさんって私たちより年上なんだよね？

二人並べばそくっりだがアリシアの方が少し背が大きいので見分けはついていた。

「アリシアも改めて初めまして」

「うん、アリサ。すずかもよろしくね？」

「うん！」

その後アルフ、リニスを連れ翠屋で軽くお茶をしていた。

「あんたどっかでみたことあるのよね・・・」

「くぅーん・・」

アルフを抱きながらアリサはじっとみていた。

「リニスは大人しくて可愛いね」

猫好きのすずかはリニスを膝の上にのせ優しく撫でている。

「ユーノも久しぶりだね」

―そういうやそう名乗ってたんだっけ？

「きゅ」

鳴いただけでその場に丸くなるだけだった。

「なんか可愛くないわね」

「きゅ」

「そう、かな・・」

「ははははっ（ー＿ー；）」

最初のころは自分の正体を隠してたから今はもう動物らしい素振りをする気はないらしい。

―それでもフェレットのレイくん。可愛いんだけどね

「フェイトさんちょっといい？」

「リンディさん？」

私服姿でやってきたリンディ。手には大きな箱を抱えていた。

『こんにちは』

アリサとすずかは立ちあがり元気よくあいさつをした。

「こんにちは。アリサさん、すずかさんね？ビデオメール拝見させてもらってたからすぐわかったわ。これから二人のことよろしくね」

「はい、こちらこそ」

「それでね、フェイトさんに渡したいものがあるの。受け取ってもらえる？」

差し出された箱を受けとり了解を得て開けてみた。

「こ、これって・・・」

「これ、私たち同じ制服だ！」

「もう編入手続きはしてあるから休みが明けたらなのはさんたちと一緒の学校に通うことになるわ」

「リンディさん、ありがとうございます！」

―フェイト嬉しそうだな・・・

隣で笑顔な顔をしているフェイトをみるアリシア。

「じゃあ私たちと一緒の？」

「ええ、そういう風にお願いしておいたわ」

「あっ、でもアリシアは？」

年は違えど学校に通っていてもおかしくはない年齢だ。

「私はその・・・ちょっと遠い学校に通うことになってるの」

「へー私立の？」

「う、うんそういうことになるかな」

実のところを言えば嘘である。

この半年間。レイとリニスの指導の下、大半の知識を教え込まれたのであまり学校にいかなくてもいいぐらいの学力は身についていた。

レイが言うにはもう高校生以上のことは教えたかも。らしい。

確かに友達とか作りたいとも思ったけど私は断った。理由は自分でもあまりわからない。

レイもそんなに追及しなかった。ただ一言

「お前のしたいようにやればいい」

そう言ってくれた。

それにレイって言う先生がいるし。

―アリシア、本当にいいの？

心配したのか念話でフェイトが聞いてきた。

―いいの。フェイトは、フェイトのしたいことをすればいいよ。私も自分でしたいことがあるからそうしてるだけだから。あまり心配しないで

―うん、わかった

したいこと。それは今はレイといられるだけでいい。それだけでいい。

それから世間話とか楽しい話をかれこれ数１０分は話した。

「じゃあ、私たちはこれで」

「また、学校でね」

「うん、ばいばい」

「アリサ、すずかまたね」

「ばいばい」

二人を見送り自分たちも帰ろうとしたときだ。

「じゃあ、俺いくところあるから」

「えっ？」

フェレットのまま喋りそのまま近くの路地に入ってしまった。

「いっちゃた」

「兄さんもいくところあったんだ」

「まぁいいんじゃない。私たちも帰ろう」

「うん、そうだね」

あまり深く詮索せずなのはたち三人も自宅へと帰宅した。

風芽丘図書館ｓｉｄｅ

図書館の入り口前ではやては待ち合わせをしていた。
すずかから兄さんが今日会えるという連絡を貰ったので先にきて待っていた。

「はやてちゃ～ん」

「すずかちゃん！」

すずかはなのはたちと別れたあとそのまま図書館へと向かっていた。

「待った！？」

「ううん。全然待ってへんよ。あとは兄さんだけやな」

「うん」

二人は他の人の邪魔にならないようにまた入り口付近で彼を待っていた。
すずかが来て数分後
やっと彼が来た。

「すまん。待ったか？」

「大丈夫ですよ。私たちもさっき来たばかりですから」

「兄さんも仕事ひと段落ついたん？」

「ああ、しばらくは暇かな?じゃあ中に入ろうか。風邪引くと困るし」

『はい』

はやてはレイに押されながら図書館内に入る

「それよりすずか、今日は一段と可愛い服着てるじゃないか」

「えっ!そうですか?」

「そうだよ。なぁはやて?」

「うん、いつもの制服と違って可愛いと思うよ」

「そ、そうかな・・・へへ」

―ちょっと勇気を出したかいがあったかな・・・／／／／／／

幼い二人は気づいていないが今の発言かなり危ない。

玲も素で言っているので気付いてない。

それからいつものように本の話をしたり世間話をしたりした。

気がつけば外はもう夕暮れだった。

「じゃあ今日はもう帰るか」

「うんそうやね」

「じゃあ、私は迎えが来てるからいくね」

少し向こうの道路の方に止まってるリムジンが目に入る。

「ああ、気をつけてな」

「ばいばいすずかちゃん」

「ばいばい！」

すずかを送り残った二人。

「はやては迎えが来るのか？」

「そうなんやけど今日は皆どこか出かけてて。でも，もう帰ってくると思うんやけど私がここにいるって知らんと思うし」

「じゃあ俺が送って行こう。さすがに一人じゃ危ないからな」

「ほんと助かります。ありがとな、玲兄さん」

「いいって。じゃあ案内を頼む」

「はいな」

玲に押され自宅へ帰宅するはやて。

その時のはやては家族の皆とは別のような感じで嬉しかったそうだ。

ＳｉｄｅＥｎｄ

ヴォルケンリッターｓｉｄｅ

主を守る5人の騎士たちは何故か全員地球より少し離れた異世界へと赴いていた。
本来ならば一人か二人が付いているのだが夜でもないのに全員出払っていたのだ。
そして、地球で言う夕方になったの地球に戻っていた。

「それにしてもなんで全員出たんだ？」

「う～ん？」

「そんなことよりはやくはやてちゃんのところに戻りましょう」

「そうだな。主も心配いるだろう」

「うむ」

そんなこんなで家の玄関を開けると見覚えのない靴がある。
それはどう見ても我々の物ではなくましてはやてのものでもない。
あえていうなら男性用で２８ｃｍはある。
しかし、ありえない出来事とに騎士たちは慌てた。

「はやて！」

「はやてちゃん！」

「主！」

血相をかかえリビングの扉をあける騎士たち。
しかし、そこには楽しそうに料理をしていたはやてと玲がいた。

ヴォルケンリッターｓｉｄｅＥｎｄ

八神家ｓｉｄｅ

「もうこのへんでええよ？家はもう目の前やし」

図書館からレイに押してもらって家に帰宅するはやて。さすがにここまで送ってもらうとは思ってもいなかった。

「うーん、でもーまだ家族の人たち戻ってなさそうだし。それに一人だと危ないから戻ってくるまで一緒にいていいか？」

「わたしはかまわんけど・・」

よく考えてみれば皆以外に家にいれるのって玲兄さんが初めてとちゃうんかな？

「じゃあ俺が手料理を振舞おう」

リビングに入ると彼はいきなり言いだした。

「そんなそこまでしてもらわんでも・・。料理なら私でもきるし」

「じゃあ一緒にやるか」

「え・・うんそうやね」

なんだか兄さんのペースに乗せられるような感じがするけどまぁいいかな
それから大勢になるのでとカレーをつくることになった。
私の料理さばきといえばいいだろうか。いつも通りに包丁を握り野菜を切ったりするところをみた彼は

「その年でそれだけできるなんてはやては偉いよ」

そう言いながら頭をなでてくれた。
褒められてなでられたのは初めてだった。それが私にとてはともて嬉しかった。
あえて付け足すなら玲兄さんも物凄い腕でなんていうか包丁が何個もみえて野菜が斬られていくという常人では成しえない技を披露していた

「よし、あとは寝かすだけだな」

「あの玲兄さんちょっとええか？」

「どうしたはやて？」

「その・・これから玲兄さんのこと玲兄って呼んでええか？」

「そりゃまたどうして」

「なんていうか私だけの呼び方というかその・・」

自分でもどう言ったらいいかわからへん。今物凄い緊張しとる

「・・わかった。別にそれでもいいぞ」

「ほんま!?」

「ああ」

―別に呼び方なんてどうでもいいし

「ありがとうな♪」

―まぁその笑顔は可愛いんだけど

ドドドド

『?』

やけに外が騒がしい

「はやて!」

「はやてちゃん!」

『主!』

入ってきたのははやての家族であった

「皆どないしたん?そんな慌てて」

「どうもこうも怪しいやつがこの家にいると思って!」

「そうですよ、みたことない靴でしたし!」

「あっレイだ」

『なに！？』

一人だけ・・最初は慌てたくせに今ではユキナだけが物凄く落ち付いてたユキナがはやてと一緒にいるレイに気付いた

「なんでお前がここにいるんだよ！」

「そ、そうですよ！」

あれ皆玲兄のこと知っとるん？

「いやー久しぶりだな、お前ら。その様子だと元気そうじゃないか」

「うん、元気だよ。それより私のドリルかなり上手くなったんだ！」

『ユキナ！』

「えっなに？」

「そうだぞ。少しは落ち着いたらどうだ？」

『これが落ち付いて『はい皆少し静かにおしい』はい・・』

―ほー子供とはいえ彼女達を従えているか

「まず、玲兄はシグナムらと知り合いなん？」

「ああ、古い付き合いだ」

「じゃあ魔導師ってやつなんか？」

「いや、俺は魔術師だ。本を読んでるお前ならわかると思うがまぁ悪い魔法使いみたいな感じかも」

「へー。じゃあ玲兄も魔法使えるんか？」

「もちろん」

―なんで主はそんなに落ち付いていられるんだろ・・・

改めて自分たちの主の器を知った彼女達だった。

「さて、とりあえず夕食にするかはやて」

「そやね。じゃあ皆。詳しいことはご飯を食べてからや」

『・・はい』

6人と1匹で夕食というのも初めてかもしれない。

そうレイは思った。

はやてとレイのカレーはあまりにおいしく、さっきまで自分たちが騒いでいたことを忘れていた騎士たちだった。

夕食後

―で、なんでお前がここにいるんだよ

はやてに気付かれないよう念話で話しかけていた。

―まぁお前たちに会いたかった。かな

―んとか？

―本当さ。というよりお前たちがいるとは思ってもみなかった。俺の勘だがお前たちが発動したのは半年だいたい6月ごろだろ？

―そうなのかシャマル？

台どころではやてと一緒に後片付けをしているシャマルにヴィータは聞いた。

―ええ、多分そうなるわ

―それで俺なりに調査さしていたら偶然はやてと出会った。最初会ったときから妙な違和感を感じていたがまさか今回の持ち主になると思ってもみなかった。

それは子供という点が大きいだろう

―あの子は生まれた時から闇の書と？

―多分そう

―そうか・・・

少し調べてみる必要があるな

―それとあの子闇の書の毒にかかってるんじゃないのか?

―!!

声に出さずとも顔をみればわかった。言った直後に顔色が少し変わったのだから。

―今は足で止まっているがいずれは身体、あの子の全身を虫食むぞ

―そうならないためにあたしらは頑張ってるんだ!

―そうです。例えー

―主の命に背いてもか?

―それは・・

―優しいあの子のことだ。戦いとか物騒なことを望むとは思えない。

―・・・

―医者としてみればまだなんとかなる領域だ。それにお前たちのやろうとしていることは間違っていない。闇の書が完成すればあの子の毒は消える。ちなみに今どのくらい集まった?

―半分は超えました

―そうか。ちょっと貸してみろ

―なんで

―いいから

「ほらよ」

ヴィータが持っていた闇の書をレイがとる。レイは一度後ろを振り向きはやてがこちらを見ていないのを確認すると静かに闇の書の空白のページに手を置いた

小さな光とともに闇の書はどんどんそのページをめくっていく

―おいおいまじかよ

ありえない光景だと思った。
普通それを知っていて自分から魔力を送るか？

「ふー。とりあえず１００ページは埋めておいた。あとはお前たちでやれ。そうじゃなきゃお前たちがやる意味がない」

「―ありがとう」

ヴィータは恥ずかしそうに礼を言った。

―ありがとうございます。レイ殿

―感謝する

―ありがとうレイ

―ありがとうございます

念話で騎士たちが礼を言ってきた

―それともうわかってると思うがここで事を起こすなよ。管理局（俺ら）が監視している

―やはり、あの時もう一人いたと思いましたがあなたでしたか

―さすがだな、シグナム。魔力を消していたんだがな

―なんだあたいらの敵か！

―落ち付きなってヴィータ。レイはそんなことしない。けど、敵であることに変わりはないよ。戦場では、ね

―ユキナもわかってるじゃないか（笑）

―まぁね。でも戦場以外でのあなた信じてもいい？

それだけは確かめなければならない。
自分たちのため。なにより主のために

―信じてくれ。俺だってあんな子にあんな物を背負わせたくはない

―わかった

―それとこれを

渡されてたのは何かのデータチップだった

―そこに記されている世界へいけ。そこにはリンカ―コアを持った魔法生物が多く生息している。最低で3頁。多くて7頁ぐらいが限度。上手くすれば上級生物もいるかもしれない。だが気をつけろよ。これならなんとか管理局の網に引っ掛からずにやれる方法だ。

―ありがとう

―これが今俺がしてやれることだ。あとは完成後だがな

―？

「さて、俺はこの辺で。はやて、世話になった」

「そんな。世話になったのはむしろ自分や。ありがとな玲兄」

「ああ、それじゃ、お邪魔しました」

八神家ｓｉｄｅＥｎｄ

レイｓｉｄｅ

なのはの家に向かって夜道を歩くレイ。

「ＺＥＲＯ」

『はい』

「はやてに関する資料を集めろ。それと一人であそこまで生きて行けたはずがない。きっと裏で誰かが援助していたに違いない。そい

つを探せ」

『わかりました』

―きっとそいつははやてが闇の書を所持していたこを知っていて彼女を援助していたに違いない。闇の書を得るためかそれとも・・・

『マスター通信です。エイミィから』

彼は人目につかない道へと歩いていき回辺りを見渡し誰もいないことを確認した

「いいぞ繋いでくれ」

『はい』

『総帥、少しいいですか?』

「どうした」

『それが本局でデバイスを診ている私の後輩から連絡があって基礎パーツの交換は終わったらしいですけど何故かエラーコードを出してるんです』

「エラーコード?」

おかしいな。そんなに内部の損傷が激しかったのか?

『実は目を疑うかもしれないんですけど見てください』

ピン

目の前に送られてくる二機のデータ。
確かにエラーコードが出ている。

『以下の部品が欠落しています。ＣＶＫ７９２－Ａ・ＣＶＫ７９２－Ｒが不足しています。さらに創造主への申請。ケースＤを要請します』

『あの、総帥これって・・』

「ははは」

『そ、総帥？』

いきなり彼が笑いだしたのに驚いたエイミィ

「わかった。この件、俺が預かる。心配するな」

『わかりました。では』

通信が切れるとレイはなのはに念話をした

―なのは聞こえるか？

―レイくん！？どうしたのこんな遅くまで

―悪いが今日は帰れそうにない。俺はこのまま本局へいくからよろしくな

―もしかして、レイジングハートの具合悪いの？

―いや、大丈夫。最終点検みたいなもんで俺がみるだけだから。じゃあ、俺がいないからって無茶するなよ。お前はまだ戦えないんだから

―うん、わかった

―お休みなのは

―お休み・・

「さて、いきますか。ゲート解放本局へ」

そして、彼は本局へと向かった。彼女達に新たなる力をもたらすために

レイｓｉｄｅＥｎｄ

第２６話　引っ越しと手助け（後書き）

書いてて思った。結構色んなことを通り越したんじゃないかって。
けど、そっちの方が楽かも。

ちょっと今回はアリシアとフェイトの間に少し亀裂が入ったかもしれません。これが後の起点になるのかもしれません。

それと今後の予定なのですが終盤オリジナルになりそうです。まぁところどころＴＶと同じ部分が多くでるかもしれませんが。
そして、次回はレイジングハートとバルディッシュがパワーアップ！

レイ「期待して待っていてくれ。」

なそうなので次回もよろしくお願いします！

第２７話　新たな力　そしてもう一人の代行者現る（前書き）

どうも、第２７話です。
なんと今回文字数で言うと約１万文字は書きました。なんていうか区切る場所がみつからなくて・・・
長いですがどうぞよろしくお願いします。

第27話　新たな力　そしてもう一人の代行者現る

なのはｓｉｄｅ

私立聖祥大付属小学校

「では、今日新しい友達を紹介したいと思います。フェイトさん」

「は、はい」

教室のドアを開け緊張しながら先生の下へ歩いて皆の前に立つ

「フェイト・テスタロッサです。よろしくお願います」

『お～』

「フェイトさんはまだ日本に慣れていないと思うので皆、仲良くしてあげてくださいね」

『は～い』

フェイトちゃんが今日から一緒に通うことになった。
私やアリサちゃんもすずかちゃんもとても楽しみだった。
でもアリシアさんも一緒だったらよかったのに。

なのはｓｉｄｅＥｎｄ

アリシアｓｉｄｅ

時計をみればこの世界ならだいたいの子供は学校に行っている時間だ。

―今頃フェイトは学校か・・・

「アリシアさん？」

「リンディさん・・？」

「本当によかったの？」

きっと学校のことだろう

いいって言っているのにこう言っちゃ悪いけどシツコイ。

「本当に心配しないで。私は私の意志で決めたことですから」

「そう、ならいいんだけど」

きっと一人の母親として心配しているのだろうか

ありがたいと言えばありがたい。迷惑と言えば迷惑だ。

「それに、私の場合大切な人がいてくれればそれでいいから・・」

膝の上に乗っているリニスを撫でながら寂しそうに言った。

―先生はフェイトさんと逆の性格だって言っていたけどこうも違うと言葉を疑うわ

「あっ、そういえばレイがどこにいるか知ってます？」

「確か二人のデバイスの調整で本局に―」

「じゃあ、リニス往こうか」

「わかりました」

猫から人型へと戻り転移魔法陣を展開する。

「ちょ、ちょっと二人とも！？」

「じゃあ、往ってきます～」

リニスはリンディに一礼をして二人は消えた。

アリシアｓｉｄｅＥｎｄ

レイｓｉｄｅ

レイジングハートとバルディッシュがある部屋でレイはモニターと格闘していた。

「二機への部品の組み込みは終了っと。あとはバージョンアップだけか」

二機が要請したケースＤ。それは自身が何らかの破損また敵との交戦に対して自身の力が不足していた場合に発生するものだ。

レイジングハートを造った過程でそれを見込んでそのデータを残してあるがバルディッシュはもともとリニスの作品。俺が途中から手

を加え一応バージョンアップもしてはある。
ただ、バージョンアップは持ち主のデータを一度リセットしそこから新たに適した物になるように設定はされているが今はそんな猶予もないだろう。

「それじゃあ、俺が考案していた形をとるがいいか？」

『構いません。マスターのデータは起動時にフルスキャンします』

「まぁ人ってのは成長するからそれに合わせた物が必要なだけだが。あとは最終フレームの素材だ。レイジングハートは一から全部変えたからな。もう、何かがない限りは壊れん。バルディッシュも一応交換しておいた。だが、最終形態は別だからな。所持者にも負担がかからないようデータを造るが・・・」

『ちなみに最終フレームにはどんな素材を？』

「オリハルコンでも使おうかと。あっちなみに最終フレーム以外は全部それだぞ。残念ながら使いきっちまった」

オリハルコンと言えば一番堅い金属のはずだ。希少価値で滅多に手に入らない。

「知人からそんなもんが手に入ったとか連絡があったから。それに使おうと思ったんだ。けど、間に合いそうにないんだよな、これが」

その知人から送られてくるのは恐らくしばらく先だ。
きっとそれまでには会敵する。

「とりあえず今はできるだけ最終フレームの強度を上げよう。もし

かしたら壊れるかもしれんが。特にレイジングハート」

『なんでしょうか？』

「お前となのはは似たようなところがあるからな。俺の勘だと絶対使うから念を押して言っておくが無茶してまで使おうとか思うなよ？」

『善処します』

たくホント似たものどおしだ。

全力全開！とか言ってやりかねない。

「やっほーレイ♪」

立ち入り禁止の張り紙を張っといたはずだが？

まぁアリシアとリニスならいいか

「どうした？」

「別に、ただ暇なだけ。それより二機とも終わったの？」

「あと少しでバージョンアップが終わる」

「ふーん。私のハルバードは壊れたりしない？」

「平気だ。一応最新型だからな。カートリッジシステムでもいれるか？」

「ううん、別にいらない」

なんだ。意外とあっさりしてるな。ハルバードにもオリハルコン使ったからな。それで二機分が少し足りなかったんだけど。

「トレインも調子はどうだ」

『はい、調子はいいです』

「そうか。一応リニスにあう試作品を造ってみたら今転送する。ＺＥＲＯ」

『了解。データ転送』

トレインに保存されている武器はなどはほとんどがデータとして変換され保存されている。
それを使う時はわかりやすい言葉でいえば実体化、復元としてあらわれる。

『データ受信完了。あのレイ様、これって・・・』

「ああ。リニスも一応メインが雷だからな。ちょっと造ってみたんだ。色々と大変だったぜ。ジェネレータを内蔵させたりとか冷却装置とか。あっそれとライフルとかも送っといたから。弾は魔力が内蔵されている魔力弾。俺が使ってるのと同じだな。牽制には使える」

「なんだか私魔導師と言うより魔道兵士じゃありません？」

「別にいいじゃないか」

「うん、カッコイイと思うよ」

なんでお二人はいつも息が合うんでしょう？

「ちなみにお前のそのメイド服。バリアジャケット同じ性質だからそう簡単には壊れないようにできるって最初に言ったよな？」

「ええ。それでも普段の生活で物凄く快適につかえるほどに」

ただのメイド服と思ったら全然違ったのに最初は驚いた。
下級魔法なら軽く防げる程の防御力を持っているし軽いしそれに可愛いし・・・
一人の時にくるっとターンしたりしてましたけど・・・

―リニスも案外気にいってるよね

―ああ、一人でターンしてほどだからな

レイにはばれていたことにはきっと気付かないだろう。
むしろ知らない方が幸せか。

「ところで私ハルバードの必殺技考えたんだけど」

「必殺技？」

「うん。たまたまテレビ見て思いついたんだ。こうーボンとデカくして魔力を全体に纏って敵を斬るの！」

斧を持ってるように演じ彼に説明するアリシア。

―それってあの合体アニメじゃないのか？まぁアレヲ参考にして機

能を加えたと言えば加えたが・・・

「一応それ入ってるから」

「えっほんと!?」

「まぁ・・・うん。けど、アレあまり使うなよ。ただでさへお前はまだハルバードを使い始めたばかりなんだからな」

いくらこの半年間で使いこなしたとしてもこの間のが初めての実戦だ。

「は～い」

少し残念そうに言っていたのはもちろん気づいていた。

『バージョンアップ終了』

「よし、あとは『マスター通信です』開け」

『総帥!』

「どうしたエイミィ」

『実は・・・・・』

「・・・・!」

おいおい。あれほど見つからないように手引きしたってのになん見つかってんだよ・・・

しかし、彼は総帥として判断を下さなければならない

「わかった。二人とその結界内向かわせろ」

『で、でもまだ・・』

「大丈夫だ。改修は済んだ。俺が二人に転送する」

『りょ、了解！』

それを聞いていた後ろの二人ももちろんいくきだった。

「さて、俺たちもいくか」

『はい！』

レイｓｉｄｅＥｎｄ

ヴォルケンリッターｓｉｄｅ

海鳴市上空　結界内

「くっ」

「ぬう」

ドジを踏んだ。としか言いようがない状況だった。

現在ヴィータとザフィーラは管理局の武装局員一個中隊に囲まれていた。

「どうする？相手は雑魚」

「いや、上だ！」

「！」

上を見上げればクロノがすでに攻撃態勢に入っていた。

「スティンガーブレイド！エクスキュンシフト！」

魔力でできた無数の刃が二人に襲いかかる。

「ちぃい！」

避けることはできず防御するしかなかった。

「はぁはぁ通ったか？」

さすがにあれだけの攻撃で通らなかった少しすねる

爆風がはれるとザフィーラの腕にはいくつか刃が刺さっていた。

「ザフィーラ！」

「気にするな。この程度でどうにかなるほど軟じゃない！」

―通ったのたったの３つ！やはり心してかからないといけない

あれだけの攻撃がたったの３つしか通らなかったのは少し痛い。

「上等！」

「くっ」

さすがに2対1はきついな

『クロノくん！たった今助っ人を送ったから！』

「えっ・・アレは！」

それはヴィータにも捕えていた。

「おいあいつら・・」

それはデバイスを持たないなのはとフェイトだった

ヴォルケンリッターｓｉｄｅＥｎｄ

なのは・フェイトｓｉｄｅ

「えーと来たはいいけど」

「まだデバイスが・・・」

エイミィに言われここに来たのはいいが肝心のデバイスがまだない

『その心配ない！』

「レイくん！」

「兄さん！」

キィン！ピカ！

すると二人は光の柱に包まれた。

『アップデート開始。解析開始』

『解析率１０％から２４％・・・身体情報習得』

「れ、レイジングハート？」

「バルディッシュも！？」

『いいか。今二人のデータを再登録しているんだ』

「えっ、それってどういう？」

『つまり、今のお前たちに合わせようとしているんだ！』

『解析率１００％。システム異常無し。オールグリーン』

『さぁ、呼べ！新たなそいつらの名前を！』

「―レイジングハート・エクセリオン！」

「バルディッシュ・アサルト！」

『セートッアーップ！』

『Ｄｒｉｖｅ　Ｉｇｎｉｔｉｏｎ』

さらに大きな光に包まれる二人
新たなる姿。
それはデバイスにカートリッジシステムを組み込んだ新しい姿。

レイジングハート・エクセリオン
ベルカ式カートリッジシステムのマガジン型が組みこまれさらに形も少し変わっている。冷却装置の間にブレードのような物ついている

バルディッシュ・アサルト
リボルバー式のカートリッジシステムを組み込んだ。
さらに斧の形状も実在のものアリシアのハルバーとに近い。

※劇場版にカートリッジシステムを組み込んだものとして想像してください

だが、変わったのはデバイスだけではない。
特に一番変わったのはなのはだ。胸のリボンはなくなり金属製のオプションが付いている。腕の裾なども全体的に戦闘用に変わった。

フェイトは左腕に籠手が装備されベルトも茶色に変わっている。

※全体的に劇場版になっています

「おいあいつらのデバイス、まさか！」

なのは・フェイトｓｉｄｅＥｎｄ

シグナム・ユキナｓｉｄｅ

結界外

「強壮型の捕縛結界か」

「二人は閉じ込められてるみたい」

シグナムとユキナは外から結界を見下ろしていた。

「レヴァンティン。お前の主はここで引くような騎士だったか？」

『否！』

「あっちはそう言ってるけど私はどうかな？」

『壁があるなら突き破る！それが俺達だぜ！』

「はは。そうだよね、紅蓮！それじゃあシグナム」

「ああ。レヴァンティン！」

「紅蓮！」

カートリッジをロードしレヴァンティンは炎を纏い紅蓮は円柱からブースターが展開される

「さぁいくぞ！」

「おー！」

シグナム・ユキナｓｉｄｅＥｎｄ

結界内

「―わかったかバーカ！」

「いきなり馬鹿呼ばれされる筋合いはないよ！それにいきなり襲ってきたのはそっちでしょう！？」

話し合いをしてると思ったら変な痴話げんかになっていた。

「―！」

誰かが結界を破ってきた。

「―っシグナム！」

「―と・・」

誰？

フェイトはシグナムのことを知っていたがもう一人のドリル使い。

ユキナのことは知らなかった。

「クロノくん！手を出さないでね！私、あの子と1対1でやるから！」

「ちっ」

「まじか・・」

「マジらしいな」

「おわっ！」

いきなり自分のとなりにいたレイに驚いていた。

―アルフも手をださないでね

―ああ、わかってる。私も野郎にちょいと話がある

「むっ」

見上げそこにいるのはザフィーラだ。

「・・・私はあまり？」

観るからして私ってあまりだよね・・・

「―あなたの相手は私！」

「おっ、斧使い！」

空からやってきたアリシア。

「あなたとはもう一度戦いたいって思ってたの」

「ふっふっふ。それは私もだよ」

さぁて、とりあえず・・・

―クロノ、俺たちはもう一人の騎士を探すぞ。リニス、お前もだ

―わかりました

―了解

まぁ主はいないだろうがな

『マスター。『カートリッジロード』を』

「うん。レイジングハートカートリッジロード！」

『ロードカートリッジ』

「私たちも、バルディッシュ！カートリッジロード！」

『ロードカートリッジ』

双方に弾丸が込められる。

「デバイスを強化している。ヴィータ、シグナム気をつけろ」

「言われなくてもわかってるよ！」

「そのようだ」

そして、互いに武器を構え空へ飛ぶ

なのはとヴィータ。フェイトとシグナム。アリシアとユキナ。アルフとザフィーラ。
捜索班にレイ、クロノ、リニス。

「私が勝ったら話を聞かせてもらうよ！」

「やれるものなら・・・やってみろよ！」

『シュワルベフリーゲン！』

来た！

先の戦いでなのはが一番苦戦したあの鉄球。初弾は軽くかわす。

「アイゼン！」

『おっしゃあああ！ラケーテンフォルム！』

そう最初はワザと外すように撃ってその間に距離を縮める。

「でぇやあああああ！」

けど、今度は！

『Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ』

「かてぇ！」

「本当だ」

自分でも驚いていた。今なら平気と思っていたがこれほどまで強くなってるとは思わなった。

「くっ！」

一旦距離をとったヴィータ。

『アクセルシューターを撃ってください』

「うん、アクセルシューター・・・シューット！」

「なっ！？」

「えっ！？」

撃った自分でも驚いていた。
シューターは計１２個。自分が出したので最大の数だと思う。

『コントロールをお願いします』

「うん」

目を閉じ意識を集中させる。

「アホか。こんな大量の球。全部制御できるわけが・・っ！」

先ほど撃ったフリーゲンを操作する。
まっすぐなのはに向かっていく。

『できます。私のマスターなら』

あの特訓。一つのシューターであれほどのコントロールができるんなら例え大雑把でも操作は可能。

―４つ・・きて

なのはの命に従い４つのシューターがヴィータのフリーゲンを粉砕した。

「・・な・・」

「約束だよ。私たちが勝ったら事情を聞かせてもらうって」

「ちっ―」

一方フェイトとシグナムはまだ互いに魔力を使わず己の剣で戦っていた。

『はぁあああ！！』

互いにぶつかりあいながら一歩も引かない。

『プラズマランサー』

最初に仕掛けたのはフェイトだ

「ファイヤ！」

８つのランサーがシグナムに向かう

「はっ！」

炎を纏いはじいたと思えたが

『ターン！』

向きを変えさらに迫ってくる。

追尾式か。厄介だな。

上と逃げるが尚追ってくる。

「てぇえええい！」

炎を飛ばしランサーを消滅させるがフェイトは目前に迫っていた。

『ハーケンフォーム』

―凄い。以前とはまったく違う

「レヴァンティン！」

『シュランゲフォルム！』

連結刃になら鞭のように振るう

ドッカーン！

互いに一歩も引けを取らなかった。
フェイトは前回の戦いが嘘のように思えた。対等に戦えてることが嬉しかった。

「強いなテスタロッサ。だが、こちらも負けるわけにはいかない。殺さず倒すと言う保証はできない。この身の未熟を許してくれるか？」

鞘に剣を納め構えるシグナム。

「構いません。勝つの私ですか」

ぎゅいいいいいいん！

地上に紅蓮のドリル音が響き渡る。

「じゃあこっちらいくよ！ドリルミサイル！」

その名の通り彼女の周りに3つのドリルが現れアリシアへと向かってゆく

「そんな単純な攻撃を食らうと思ってんの？」

アリシアは回避せずまっすぐ向かっていく。
ミサイルはまっすぐしか進まないと言う単純な動きだ。少し身体をひねれば避けられた。

「はっ！」

「とお！」

彼女の一撃を受け止めるがその顔を余裕だ。

「甘いなぁ・・確かに空中じゃまっすぐだけどドリルは地下で本当の力を発揮するんだ！」

「！」

一体いつまにさっきのドリルが地中に潜ったのか？

ドリルは相対している二人の間に現れまっすぐ上を目指していた。

「ちっー！」

「不意打ちとはいえ今のよく避けたね・・・いいよ。そうじゃなきゃ。君名前は？」

「戦いの最中に相手の名前を聞く？」

「騎士として、一人の敵として相手を認めたからね。私は螺旋の騎士・ユキナ！」

「私は・・アリシア・テスタロッサ」

「アリシアか。じゃあいくよ！ドリル ハリケーン！」

「うそぉ！」

ドリルが今までにないような回転をし始めそこから竜巻がアリシアを襲おう。
地上ではビルが邪魔して避けらない。
なら
「ハルバード、トマホークに！」
『了解。トマホークフォーム！』
片方にしかついていなかった斧がもう片方についた。
※真ゲのトマホークがモデルです
「トマホーク・・ブーメランッ！」
なると同時にブーメランのようにハルバードを投げた。
さらに魔力が展開している。威力は数段上がっている。
※イメージで劇場版のバルディッシュのアックスフォームを横にした感じです
そのままトマホークは竜巻を横真っ二つに斬る
「うそぉ！」
今度はユキナが叫ぶ。
横にまっすぐ飛んでくるトマホークを上空へと回避する。
「けど、これでガラ空きだ！」
そう、まだハルバードは彼女の手に戻るところだ。だから、今のア

リシアは無防備

「それはどうかな！」

「！？―ドリルアタック！」

『いくぜー！』

今度は紅蓮自身がミサイルとなって飛んでゆく

『お願い、力を貸して・・・ナチュラル・トラップ、ガイアウォール！』

歩道に植えてある木たちがありえない程にその根を伸ばし彼女を拘束し彼女の足もと。
大地が巨大な壁を造りだす

「すごいな・・・けど、紅蓮は止められないよ！」

自分が拘束されてるのにも関わらず彼女は笑っていた。

『そんなもんでぇ！俺を止められると思ってんのかぁ！？』

コンクリートも一緒になっているがいとも簡単に粉砕するが壁の向こうにアリシアはいない

「・・・ユキナだっけ？あの壁、さらに魔力強化してあったのに粉砕するなんて」

アリシアは先の間にハルバードを手にとり彼女の少し離れた前にい

た。

「アリシアも凄いよ。ここまで私の技が破られるなんて」

ぎゅいいん！

地上から戻ってきた紅蓮が彼女を拘束していた木の根を斬る

―ありがとう。ごめんね。あとでちゃんと治してあげるから

生命のとの会話で伝わってくるのは声だけではない。

彼らの痛みの声も聞こえてくる。だから、使ったらそれで終わり。

では駄目なのだ。

「さぁ続けよう！」

「そうだね」

「おりゃあああ！」

「ふん！」

同じく地上でもアルフとザフィーラの戦いが繰り広げられていた。

互いの武器は拳だった。

「あんたも誰かの使い魔か！」

「ベルカでは騎士にに使える獣を使い魔と呼ばん！」

「ぁん？」

「主の牙　そして盾　　守護獣だぁあああ！」

「同じようなもんだろうおお！」

ドーン！！

間合いをとり空をみる。

―状況はあまりよくないな。三人が負けると思えないがここは引くべきだろう

結界外にいるシャマルに問うがシャマルもそうは動けなかった

―そうしたいんだけど局員が外から結界を維持しているの。私の魔力じゃ破れない。シグナムのファルケンか、ヴィータのギガン級かユキナの天元突破ぐらいじゃなきゃ破れない

―三人とも手が離せん。止む負えないがアレヲ使うしかない。幸い彼がページを増やしてくれた。問題はない

―わかってるけど・・・

ジャキ

「動かないでください、ご婦人」

―ご、ご婦人!?

―どうした?

「捜索指定ロストロギアの所持の疑いであなたを逮捕します」

後ろでリニスが小太刀をシャマルの首に向け彼女の前でクロノが杖をかまえている

―シャマル、どうした!?

「おっし、クロノくんグッジョブ!」

―あーあ。捕まっちゃった。

「武装解除するなあなたにも弁護の機会はある。同意しなければ・・・」

―どうしたらいいの。さすがに二人相手じゃ・・・

ザッ

「えっ」

「なっ!」

「ふん!」

「ぐあああああ！」

「クロノさん！はっ」

「―」

「きゃっ！」

クロノに引き続きリニスまでもが吹き飛ばされた。

「あなたちは・・」

一人は仮面の男。もう一人はボロボロのマント羽織っている。

「使え」

「えっ」

「仲間を助けるのだろう？減った頁はまた集めればいい。そうだろう？」

どうする。信用して平気？でも闇の書のことを知っている。なら、今は・・・

―皆、聞こえる。今から結界を破るから上手くかわして撤退を！

―「「「「「おう！」」」」」

「お前たちも仲間か！？」

対峙するクロノと仮面の男

「答えろ！」

「ぐぐ・・・ちょっときついかもしれませんね」

たった一発のケリを腹に受けただけなのにこうも衝撃が伝わるなんて
ビルの屋上に叩きつけられ腹を押さえながら立ち上がるリニス

「へーまだ生きてたのか」

「―？」

上を見上げると自分を襲った男がいた

「その服丈夫にできるみたいだ。けど、もうお終い。死ね―」

キュイイイン

彼の指に集束されるエネルギー

―なに、この力。魔力とは違う？

「ばいばい」

「！」

死を覚悟した。

けど、少し経てばまだ自分は生きてることに気付く。

「・・・レイ！」

「大丈夫か？リニス」

『大いなる障壁、順調に展開中』

ＺＥＲＯの守りの形。大いなる障壁
ＺＥＲＯのコアを中止とした機械でできた盾。その形はなにかの紋章にもみえなくはない

「貴様・・・なぜここにいる」

「それはこっちのセリフなんだけどな・・・よっと」

ボロボロのマントを捨て彼の姿があらわになる。
その姿は美男子と言ってもいいだろう。彼の服装にはところどころ赤い色が付いている。
※モデルはエヴァのカヲルで服装は大人のクロノのＢＪのもっと細くなった感じで色は青紫で白が混じっている。それにところどころ赤がある

「初めまして。愛の代行者くん。名前は確か・・・『禍の種アンヴァルト』だっけ？」

「・・・貴様の名は？」

レイは自分のことを言われても何もいわず相手の名を聞く。

「僕かい?僕の名前はマルス。ローマ神話でいう戦の神。そして戦いの代行者。凄いだろ?肩書きも戦いで名前のその通りなんだから」

「・・・その由来にはもう一つある。それは―残虐の神。ただ殺し合いを楽しむ神と一部では伝われている」

「そうらしいね」

「そうか、お前が近頃色々と動き回っている代行者か」

「へーそうなんだ。けど、お喋りはお終い。君に邪魔されると困るんだよ」

―こっちだってあまり手を出したくないんだよ・・・

レイも自分のためにここで手を出すわけにはいかない

「闇の書よ。守護者シャマルが命じます。眼なる敵を撃ち砕く力をここに―」

すると結界上空で雲が怪しい動きをする

その中心に魔力が集中する。

「撃って!破壊の雷!」

それはすぐにも中の彼女達にも伝わっていた。

「すまん、テスタロッサ。勝負はお預けだ」

「シグナム！？」

「ヴォルケンリッター・鉄槌の騎士　ヴィータ。あんたの名は？」

「なのは、高町なのは！」

「高町なの、なの・・・ええい！呼びにくい！」

「逆切れ！？」

「ともあれ勝負は預けた。今度は絶対に殺すからな！」

「ま、待ってヴィータちゃん」

「ありゃー時間切れだ」

「そうみたいだね」

「じゃあね、また勝負しよ。アリシア！」

「うん、ユキナも！」

「仲間を守ってやれ。直撃を受けると危険だ」

「えっああ・・うん」

結界が破れて行くのを外からも確認していた

「へーあれが闇の書の力か。楽しくなってきた！」

「待て！」

「邪魔しないでね。愛の代行者くん♪」

バン！

突如強い光が発生し視界が封じられた。

「くそ・・・」

―こりゃあ向こうも大騒ぎだな

ヴォルケンリッターｓｉｄｅ

自宅帰還した彼女達は主がいないことに気付く。
すずかという友達の家にいまはいるらしい。けど、一人でいてくれるよりは良かった。
今シャマルがはやてに電話し何度も謝っている。

「はい、はい、本当にごめんなさい」

『そんな謝らんでええって。ご飯冷蔵庫に入ってるから温めて食べてな』

「はい、じゃあヴィータにかわります」
「はやてー」

「寂しい思いをさせてしまったな」
「ええ」
「それにしてもお前を助けた男たちは誰だ？」
「わからない。けど、そのうちの一人をレイさんは知っていたようだけど。でも、当面の敵にはならないと思う」
「そうか・・・」
「これで管理局も本腰をいれてくる。いずれあの人も私たちを助けてもらえなくなる」
「わかってるわ。だから、急がないと」
「そうだな。一刻もはやく主はやてを闇の書の真の所有者に」
「そうね」
「シグナムぅーはやてが変わってって」
ヴィータの次にユキナが話していたんだろう。

受話器をもってやってきた。

「はい―もしもしシグナムです」

辛い状況にある中月がただ彼女達を照らしていた。

ヴォルケンリッターｓｉｄｅＥｎｄ

第27話　新たな力　そしてもう一人の代行者現る（後書き）

頑張った。書いた後そう思いました。

戦闘ではアリシアの生命との会話を初めてだしたと思います。
そして、デバイスも劇場版仕様でカートリッジ付き。やっちゃった。
てへ
それとなのはのＢＪも劇場版です

今回またオリキャラ登場
戦いの代行者　マルス
ローマ神話からそのまんまとりました。ちなみにモデルカヲルくん。
危ない空気が・・・

次回予告なんですど自分詐欺ばっかしてると思うので次回はこういう感じかもよってな感じでお伝えしていきたいと思います。
というわけで次回はたぶん本編ではなくアクセス記念の話になるかと思われます。
では次回でまた！

祝１０万アクセス！＆ユニーク１万突破！（前書き）

とまぁ今回はタイトル通りです。
短編みたいなものをかかせてもらいました。
けど、ちょっと読んでられないと私は思いました
痛い意味で

祝１０万アクセス！＆ユニーク１万突破！

『ロリコンなの？』

気がついたら～いつのまにか１０万～
ヒットしてたんだ～

「それは良かったな」

それよりさぁイヴのことどうすんのさ？
きっと皆お前が飼ってるって認識してんぞ

「・・・・・」

あら、無言

「じゃあ、読者の奴らの思ってる通り首輪とか鎖とかつけようかぁ（怒）？」

やべ、こいつ切れ始めてる

「私は・・・レイならいいよ？」

「い、イヴ！？ど、どうしてここに！？」

ちなみにちゃんと服着てますから。ゴスロリ・・・

「ボン太くんに連れてきてもらったの」

「ふも～」

「そ、それよりそんな誤解を招くことをいうんじゃない！」

「だって、現にレイってロリコンでしょ？なのはちゃんとかフェイトちゃんとかアリシアちゃんとか今はすずかちゃんとかはやてちゃんもあなたの餌食になってるじゃない？」

「んなもん俺は知らん」

「ふもふも」

なになに、ロリコンってなに？
いいか、お前は知らなくてもいいことだ。それとわからないからって親とかに聞いちゃだめだよ？

「ふも・・・？」

「で、ロリコンなの？」

「知らん！」

『吹っ切れった』

「なのは・・・・」

「な、なにレイくん？」

「頼むから大人なってもその無垢な心を失わないでくれ。というか大人にならないでくれ」

「ど、どうして！？」

あの吹っ切れったはよかったよ。俺も首を振っちまった。

「な、なんのこと・・？」

「小さい君は天使だ」

ああ、喫茶店翠屋の天使だ。

「だから、何のこと～！？」

『関係ないけど・・・・』

『みそ汁はどう？』

買ってきたＤＶＤをみているレイと作者

「実はさぁ・・・・フィルムコマ、アスカだったんだ」

「良かったじゃないか。お前好きだろう？」

「そうなんだけどさ・・・・。それよりなのはのＤＶＤいつだろう。はやく出ないかな～」

「当分先だな」

「はー。ブルーレイ内蔵のＨＤ欲しい」

「ほんと、関係ないな」

『この作品のロリ一覧』

なのは、フェイト、アリシア、アリサ、すずか、はやて、ヴィータ、そしてイヴ。

切り札「さぁお前のロリを数えろ」

疾風「ぞくぞくするねぇ」

だめだ、もう世界は終わりだ。

レイ「・・・・手を出しら殺す！」

やっぱロリだろお前？

えー色々ありましたがまずはありがとうございます！

なんかこの作品に熱をいれすぎて他がめんどくなっちゃったんだよね。
けど、これだけは頑張りたいので頑張っていきます！
では、これからもよろしくお願いします！

祝１０万アクセス！＆ユニーク１万突破！（後書き）

語ることは語った・・・・

第２８話　無限書庫　実は彼の私物なんです（前書き）

さて、２８話です。
今回の主役はＺＥＲＯだったりして

第２８話　無限書庫　実は彼の私物なんです

管理局ｓｉｄｅ

戦闘終了後　作戦本部

レイは二人に新しくなったレイジングハート・エクセリオン、バルディッシュ・アサルトの説明をしていた。

「まず、レイジングハート・エクセリオンから。主なフォームは高機動中距離戦用の《アクセルモード》砲撃重視の《カノンモード》そして、最大出力用まぁ最終形態の《エクセリオンモード》。次にバルディッシュ・アサルト。形態のバリエーションは汎用性に優れた長斧型の《アサルトフォーム》、近接戦闘に用いる鎌型の《ハーケンフォーム》、最大出力用の大剣形態（ザンバーフォーム）だ。二機とも最終形態はまだフレームの強化が終わっていないから使うなよ？」

「どうして？」

「使えばお前たちの最大出力に機体が持つかわからないからだ」

「うん、わかった」

「さて、問題は彼らの目的よね」

「はい、まるで自分たちの意志で完成を目指しているような・・・」

「それっておかしいのかい？用は使い魔と同じで主のために頑張ってるってことだろ？」

「そもそも、闇の書は完成後も前も危険な代物なんだ。さっきも見ただろう。完成もしていないのにあれだけの威力だ」

確かに言われてみればそうかも

「それに闇の書のが破壊以外で使われたという記録もないわ。ただ純粋な破壊しか使用されたことがないとしか」

「そして、あの騎士と呼ばれる者たち。あれは人間でも使い魔でもない。ただ、闇の書を守り主に使えるためのプログラムにしか過ぎない」

「ああ、守護騎士プログラムのことだろ？」

いつものごとく口をはさんだのはレイだった。

「知ってるんですか！？」

「まぁそれを記した本を書いたような気もしなくはない。まぁ俺が知ってる範囲では転生と再生を繰り返していくやっかいな存在だな。それに過去の例でもあるように彼女達には本来感情はないんだ」

「はい、それが今回と過去と違う点でもあります」

「でも、ヴィータちゃんとかは怒ったりその・・感情をあらわにしてたよ？」

「それがわからないんだ。総帥はわかりますか？」

「さぁ？所詮プログラムだからな。俺にもわからん」

まぁ原因はあの子だろうな・・・

「でも、この様子なら案外主は近くにいるかもしれない」

「あーそれなら持ち主は普通の魔導師だもんね！」

―鋭いとこつくよな・・・

「でも、もっと闇の書に関する情報が欲しい・・」

「それなら無限書庫に往ったらどうだ？多分俺が闇の書に関する記述がある本がどっかにあるぞ」

「そうしたいのは山々なんですがあの・・・なんていうか」

「・・・わかった。それ以上いうな」

つまりは、レイの部屋。総帥の間みたいに埃とかがかぶっているということだ。

「では、総帥。明日からでも？」

「あ・・・わからん。俺はこれからちょっと急用で遠くにいくからな。多分明日に帰ってくると思うが・・・」

「遠く、ですか？」

「ああ。―！悪いもういかなきゃならんらしい。ＺＥＲＯはおいて

いくからＺＥＲＯに頼んでくれ。それじゃあまたあとでな」

その直後どうやってか、レイはいなくなっていた。

「いっちゃった」

「じゃあ、私たちも―」

『はい』

それから一人家に帰るなのは。

それにしても闇の書の主ってどんな人だろう？

素質がある人をランダムっていうぐらいだから子供も含まれるのかな？

もしかして、私と同じくらいだったりして

そんな半分冗談なことを考えていた。

♪～

「すずかちゃんからだ。えーと今友達が泊まりに来てます。か。・・・名前は八神はやてちゃん。かわいいな」

メールと一緒に二人の写真が添付されていた。

まさかこの子が闇の書の主だとはなのはも思ってもみなかった。

管理局ｓｉｄｅＥｎｄ

ヴィータｓｉｄｅ

文化レベル０　ただ、砂漠しかない場所

ヴィータは闇の書を抱えボロボロの身体で砂漠を歩いていた。

「くそ、手こずらせやがって・・」

後ろに倒れているワームを見下ろした。

「はやてに貰った騎士を服をこんなにボロボロにしやがって・・・」

あの綺麗な甲冑はとこどころなかったり汚れてたりしていた

「騎士服は治るからいいし・・・まぁ頁もそこそこかせげたからいいけどよ」

バキ

「あっ！」

靴が壊れその場に倒れる。

「い、たくない！こんなの全然痛くない！」

大切なものがあるから。守りたいものがあるか。

それのためならこんな痛みちっとも痛くない！
はやてのがもっと苦しんでるんだ。
だから、あたしたちがやらなきゃいけないんだ！

「だから――！」

「ぐおおおおおおおおおお！」

先ほどの同じワームがヴィータの前に姿を現す。
ワームは容赦なくヴィータに襲いかかる。

「いたくねぇえええ！」

ヴィータｓｉｄｅＥｎｄ

クロノｓｉｄｅ

クロノは現在アリシアとリニスを連れて管理局に出向いていた。

「二人の他に協力してくれる人たちがいる。まずはそっちにいくから」

「はーい」

「わかりました」

―しかし、どうもまだこの二人には慣れていないんだよな

クロノはフェイトと裁判やらで色々と接点があり今では普通に話しているがこの二人とはまだ上手く会話できていなかった。

「ねぇ、その二人ってどんな人？」

「ああ、その僕の師匠になる」

「へー」

はい、会話終了

それから無言の状態で待ち合わせしていた部屋についた

「お～クロ助～」

「ロッテ！こらくっつくな！」

「いいじゃないか～久しぶりの再会なんだしぃ」

―猫だ

―猫ですね

「助けてくれアリア！」

「まぁそのお前もまんざらいやでもないだろう」

「そんな！」

―こっちも猫だ

―猫ですね

アリシアとリニスはそれをただ見ているだけだった。

しばらくお待ちください

「で、今回の事件のために闇の書について調べたいと」

「そうなんだ。二人にも出向いてもらいたいが無理だろ？」

「うん、新人の訓練とかそっちの方で中々でられそうにないんだ」

「そうか・・・」

―この二人がクロノの師匠？

―ああ、僕に魔法と近接戦闘を教えてくれた。大人しいほうがリーゼアリア。やんちゃなのがリーゼロッテだ。

―ふーん

―どうした？

―いや、かぶってると思って

―なにが？

―猫は私一人で十分です

いったいなにがなんだがわからない状況だった。

「でも、あそこほとんど使われてないからその・・・」

「わかってる。それについては問題ない。そうだろ?」

『?』

『まぁめんどくさいですけど私がやるしかないですし』

―こいつ本当にデバイスか?まったくといっていいほど総帥と同じだ

「これは?」

『これはとは失礼な!私はあなたたちの上司でここのトップの総帥のデバイスですよ!頭が高い!控えろぉ!』

『・・・・・・・・・』

―ごめん、ＺＥＲＯ。それは流石に引く

アリシアが念話でＺＥＲＯに伝える

―　一度やってみたかっただけです

『じゃあ、往きましょうか。無限書庫に』

無限書庫へ向かう中アリシアは無限書庫について聞いてみた。

「ねぇ、無限書庫ってどんなとこなの？」

「まぁ簡単に言えば管理局の管理を受けている世界の書籍や情報の全てがストックされていて、次元世界最大のアナログデータベース。「無限」の名の通り、書物は日々増え続けるってところかな？」

『しかし、その実態の半分はマスターの私物ですが。というより書庫自体は彼の私物です』

「「「「えっ！？」」」」

『知らなかったのですか？書庫自体が集めたものもありますが。そーですね半分っていいましたけど４割ぐらいマスターが長い旅で自分が記したものがあります。書庫より実際にみて触れたものですから確証は高いですし』

―まさか無限書庫にそんな秘密が・・・

調べ物をしたくてもあんな場所に誰も入ることはなくいや、むしろ入れないのだ。

―きたなくて

そんなこんなで書庫の前

『さて、皆さんできるだけ壁に張り付いてください』

「なんで？」

『まぁ開ければわかります。じゃああけますよ』

ピ

ぼーーーーーーーーーー！

それはかつての総帥の間とは比べものにならないくらいの埃だった。

「「「けほけ・・いきが・・・」」」

『清浄開始』

ピーン

ＺＥＲＯの言葉の直後空気は綺麗になった。

中に入り書庫をみてみるとそこは一種の異空間だった。

無重力で入った瞬間身体浮かびあがった。

「ここが、無限書庫・・・」

「そう、僕たち局員でも滅多に入らない場所」

「うわー本棚にずっしり・・・それにあちこち浮いてる」

「そうですね・・・あら、これは『レイ先生の魔法講座第１１１３号』そんなにあったんですか」

というよりそんなものまであるのか。ここには

『さて、そんなことより闇の書に関してでしたね』

「ああ。頼む。僕やアリアたちはこっちには中々これないから三人でやってもうらことになるが平気か？」

「私たちはレイに頼まれたか」

「ええ、それに調べ物は得意です。トレイン、ＺＥＲＯと情報の共有を」

『了解。ではお姉さまお願います』

『ええ』

型式で言えばトレインは５番目になる。そのためトレインはＺＥＲＯを姉と呼ぶ

「じゃあ、僕たちはこれで。手伝ってやれないがあとは頼む」

『了解』

クロノｓｉｄｅＥｎｄ

ＺＥＲＯｓｉｄｅ

クロノたちが出た後

『クロノにとって今の状況はあまりよくないでしょうね』

ＺＥＲＯが急にいいだした。

「どういうこと？」

『彼の父、クライドは前回の１１年前に起きた闇の書の事件で亡くなってるのです。封印護送中の彼の艦に闇の書は暴走した。クライドは最後まで一人艦に残り死んでいった』

「そう、なんだ」

―クロノも大切な人を失ってるんだ

そういうのは身近でいえば私たちだけかと思ってた

『クロイドはいい人でした』

「ＺＥＲＯは知ってるのですか？」

『はい。というかマスターのほうですけが。一応友人だったらしいです。当時私とマスターいつものように放浪していたので知ったのは亡くなってから数日後ぐらいだった気がします』

（そういえばその頃からマスターは闇の書を探していませんでしたね。忘れてたのかただたんに今の世界は昔と違って平和だから安心していたのか。どっちにしろ私たちも平和ボケしすぎましたね）

「ねぇ、一つ聞きたいことがあるんだけどいい？」

『なんですか？』

「レイって今回も裏でなにかやってるでしょ？」

「アリシア？」

アリシアは確信があって言った。

『なぜそう思うのですか？』

「よくわかんないけど・・・死んでいた期間ずっとレイといたからなんとなく。それに私たちって血の契約で結ばれてるんでしょ？」

『それは・・・』

血の契約。

それは彼女を生き返らす際、彼が自分の血を使って彼女を蘇らせたこと。それは彼女の体内に彼の血が流れていることになる。本来契約とは、彼にとってはもっとちゃんとしたものになりますが彼女場合はイレギュラーと申しますか。それが彼の血で契約していることになっている。

しかし、本来の契約と違うため多少は違う部分も多い。多分、彼の血が彼女になにかを伝えているんでしょう。マスターの考えていることや行動などが無意識のうちに流れて行くのが

「それと今レイ遠いとこにいってるって言ったよね？」

『はい』

「それってこの世界じゃないでしょ？レイが代行者なのは知ってるけどそこまでは知らなかったし」

『仕方ないですね。まぁマスター自身それもわかっているとは思いますが。彼は今神の世界にいます』

「神、ですか？本当に存在していたのですか？」

『しかし、神が人の前に姿を現すことはない。常に我々をみているのです。その世界から』

―私たちって今世界の理を知ったのではないでしょうか

一人リニスは思った。

「じゃあこの話はとりあえず今はお終い。今度レイが来た時改めて」

『わかりました』

―アリシアは意外と冷静ですね

―そんなことないんだけど・・・。ただ、私たちって普通じゃないから

アリシアは一度死んだ。リニスは彼女が使い魔として再び蘇らせレイが前の記憶を与えた。
それは普通ではない。

―そんな、自分を否定すること言わないでください！レイは絶対あなたを見捨てません。私もそうです！今度は絶対あなたを守って見せます！

それはリニスの一度の生の時。あの時は本当にただの無力な猫でしかなかった。
けど、今は違う。ちゃんと彼女を守ってあげることができるのだ。
―ありがとう、リニス
―それが―私の役目ですから

（でも、よく考えてみたら彼の血が入ってるってことはアリシアも・・・）

ＺＥＲＯはある大事なことに気付いた。

（けど、今はこの問題をなんとかしなきゃね。彼の計画が彼女たちを救うことにつながるんだから）

「で、まずは何をすればいいのＺＥＲＯ？」

「そうですね。私たちじゃこの膨大な本の中から探すのは一苦労ですし」

『それは私がやります。二人は本の解読を。レイの物なら解読は簡単ですが書庫の方だと古い記述なのでそちらは私に回してください』

「わかりました」

「よしっ！じゃあ始めようか！」

彼女達も行動を起こす

（そういえば、そろそろマスターはついたころでしょうか？呼ばれてるならまだしもこっちから往くとなると大変ですから・・）

静かにマスターの心配をするＺＥＲＯだった

ＺＥＲＯｓｉｄｅ

「くそっ、道に迷った！」

彼は迷子になっていた。
自分からいくことは滅多にないのだ。

「たくっ、無駄に広いんだよここは・・・。えーと確かこっちか」

その方へ向かう彼だが実は目的地はその反対側なのだ。
それから神に仕える者が彼を迎えにいったらしい

第２８話　無限書庫　実は彼の私物なんです（後書き）

主人公が迷子ってないよね

さてと、今回もとんでも発言。

「実は無限書庫はレイの私物だったんだよぉ」

「「「なっなんだってー！」」」

みたいな感じですね。
それとアリシアとリニスが裏方になりつつありますね。
そういう設定ですけど。

次回はレイが神の世界へいってたときのお話になります。
そのせいかフェイトがリンカーコアをとられた後にレイが帰ってくるかもしれません。本当に戦闘省いてすんません。

ではまた次回で！

第２９話　神の世界（前書き）

どうも、更新が少し遅れちゃいました。
色々あったんですよ。なんか意見発表の代表になって全校生徒の前で発表するなんて初めてでとても緊張した・・・

さて、今回はレイが神の世界に往っていた話になります。
では、どうぞ

第２９話　神の世界

神の世界　審議の宮殿

神が存在している多くの宮殿の一つに審議の宮殿がある。裁判とはまた違い何か問題があったとき、多くの神の中で６人の代表者がここに集い議題について審議するというものだ。
もちろん代行者がいるのであれば当然参加という形になる。

大きな円型の机を中心に周りに座る５人の神たちとその後ろにたつ３人の代行者たち
なぜ一つの椅子が空いているのか。それが今回の議題だった。

「アレスはやはり来ぬか」

「「「「・・・・・」」」」

先に口を開いたのは神々の統治者であるゼウス。
ここいる他の４人の神は美と愛の女神　アフロディーテ　太陽の神　アポロ　海の神　ポセイドン　月の女神　ディアナ
ここにいるものは主に地上界に係わる者たちで構成されている。
そして、アフロディーテ以外には代行者が後ろで立っている。
そのことについてゼウスが聞いた。

「アフロディーテよ。奴はまたこんのか」

アフロディーテ。それはフィリーヤだった。

「さぁ？それよりその名前で呼ぶのやめてくれない？」

「何を言っている。アフロディーテが貴様の名だろう」

「（っ、これだから。ヘラにまた浮気してたのチクろうかしら）」

彼女がその名を嫌っているというわけではないが彼がつけてくれたフィリーヤという名前が好きなだけだった。

すると入り口から誰かが来たようだ。

「すまない。遅れた」

神たちが集う中、代行者の中でただ一人敬語ではなくタメ口。

「あら、今回は来たの？」

「ああ、ちょっと情報が欲しいからな」

「そう。それじゃあゼウス、議会を始めましょ」

「うむ。では、まず今回集まってもらったのは他でもない。戦いの神アレスの代行者マルスについてだ」

―あいつのことか

「奴は代行者でありながら問題を起こした」

「その問題とは？」

「詳しくはわからんがとある世界を絶滅させた」

『！』

代行者とは本来神に変わって世界を見守ることを使命としている。けして、その世界、国がかかえている問題に手を出してはならない。例えるなら二国の戦争にどちらかの国に加担し戦争を終わらせるなどそういう歴史に干渉してはならない。

「その確証は？」

「配下の者が確認したが生きているものはいなかったそうだ」

「―多分喰ったんだと思う」

口をはさんだのはレイだった。

「なぜ、そう言える？」

ゼウスは聞く。

「奴に遭ったからだ。奴の中には多くの生を感じた。逆に聞くがその世界に生きていたものには人間は含まれているのか？」

「そうだ」

「なら、血は？辺りに血痕などなかったのか？」

人間がいるなら絶対抵抗する。それが防衛本能からきているだろうが。

「ない。あったのは死体だけだ」

「なら奴はその世界の生きるものすべての生、魂を喰ったのは間違いない。それに―」

「なんだ・・・（こいつ相変わらず勘が鋭い奴だな）」

「アレスも喰ったんじゃないのか？」

「「「「！」」」」」

「待て！」

怒鳴りをあげたのは太陽の神　アポロ

「なら、奴は神殺しの大罪をしたのか！」

「そうじゃないか？奴から微かに神気みたいのを感じたが」

神気とは簡単に言えば神が力を使う時の波動みたいなものである。人間が氣を使うのと同じようなものだ。

「そうなのかゼウス？」

ゼウスの顔はともて険しいものだった。

「恐らくは・・・」

―ていうか神が一人死のうが死ななかろうがどうでもいいんだが

―そんなこと言わないの

アフロディーテもといフィリーヤが母親みたいにいう

―私たちにとって神の死はとても簡単なことじゃないの。一人失うことで世界のバランスを崩すことだってありうるのよ?

―だが、実際は起きていない。ようは人間と同じだ。あるべき場所に還った。それだけだ。それより・・・

―ええ、あなたと聞く話とその世界で死んだ生きものたち。生を喰ったと言っていたけどじゃあアレスはどう説明するの?おかしいわ生を喰うというならアレス自身の死体があるはずなのだ

―考えられることは二つ。一つは神自身を喰ったか。もう一つは喰った。のではなく取り込んだ。それとも、取り込まれたか。だな

―両方ともありうる話だわ。現にアレスは戦いの神。彼は純粋に戦いを、殺し合いを楽しんでいた。神としては最低ね。彼の代行者もまたその名の通り。互いの利害は一致している

―例えそうだとしても奴らの目的がわからん

―いいえ、目的ならあるわ

フィリーヤはそのことについて確信があった

―ただ、戦って殺し合いたいのよ。だた、それだけのために・・・

―確かにな

そう確かに理由はそれだけで事足りた。一度しか遭わなかったが恐らくそうなのだろう。

気づけば議会はそろそろ終わろうとしていた

「では、この件について。愛の代行者。貴様に一任する」

「・・・なんで」

「「「（こっちが聞きたいよ）」」」

「状況をみる限りこの件については貴様が一番適任だろう」

「ではどうする？神殺しの大罪人を殺せばいいのか？」

「かまわん。それが罪人になった者の末路だ」

―しかし、神と同化してるかもしれない奴に勝てるかね・・・

こっちは代行者だがあっちはもうなんでもない。神に近い存在だ。

「わかったよ。その命引き受けよう」

「―貴様はまずその口の聞き方を治せ」

「あん？」

「貴様はここに来たときから問題だらけだ」

「「「（あーあれかー）」」」

傍観している神や代行者たち。

一番問題になったのは彼が代行者の候補してこの世界に呼ばれた時敵の罠かと思った彼はこの世界の一部を廃墟にした。

その時の相手がゼウスで人間のくせに無駄に強かったのを覚えていた。

「ふん。だが、もう一度確認する。本当に殺していいんだな？」

「くどいぞ」

それ以降レイが喋ることはなかった。

「では、本日の議会はこれにて閉会とする」

その後、レイはフィリーヤと共に歩いていた。彼女の宮殿へと向かっていたのだ。

「けど、本当に大丈夫なの？」

「なにが」

「なにがって！相手は今神に等しい存在なのよ！？今回は流石にあなたでも・・・・」

相手は代行者で神を喰うことで神に等しい存在となった。

でも、レイなら勝てると思った。けど・・・・

「珍しく心配してるんだな」

そんなの当たり前じゃない！
あなたを失いたくない。あなたが大事だから。
そんなこと思ってなかったらあなたを心配するわけないじゃない！

とは言えなかった。

「心配するな。最悪リミッター―を外すことは覚悟している。１０～１までお前が管理しているんだ。もし、そうなったときお前が解除すればいい」

それは彼女を信頼いや、心配させないように言っていた。

「―そんなのわかってるわ」

本当に、もし、本当にあなたがそうなったら―私が戦う
あなたを死なせはしない

「だが―もし、まだ俺のことを心配、信じていないなら―」

彼は彼女の前に立ちふさがった。

「命令しろ。俺はお前の代行者だ。生きろ、そう命令すれば俺は絶対帰ってくる」

私は命令なんかに頼りたくない
純粋な頼み、願いとしてあなたに帰って気欲しい

けど、それであなたが帰ってくるなら・・・

「いいわ。代行者レイ。必ず私の下へ帰って来なさい。これは愛の女神　アフロディーテとしての命です」

「わかりました」

彼はひざまずき頭を下げる。しかし、すぐに立ちあがりいつもの感じに戻った。

「で、少しは時間あるんでしょ？お茶でもどう？」

「ああ、それもいいな」

地上から急な連絡もないしすこしはゆっくりしてても平気だろ

―ところがぎっちょん！

「！？」

―マスター、マスター聞こえますか？

―ああ、ＺＥＲＯか。どうした？

―実はフェイトが・・・

「なに！フェイトがどうしたって！？」

「！？」

いきなり怒鳴り声をあげ隣にいた彼女は驚いていた。

―いや、だからその・・・仮面の男に・・・

「わかった！今すぐそっちへ戻るからな！待ってろよフェイト！」

「ちょ、ちょっとレイ？」

「というわけだ。俺は帰る！」

すると彼はいなくなった

ただ、一人残されたフィリーヤは・・・

「・・・タイミング悪いんだから」

アースラｓａｉｄｅ　医務室

彼が神の世界へ往っている間。こちらでは数日の時が流れていた。

ヴィータたちと接触したなのはたち。

こちらが有利にことを進めていた。しかし、またあの仮面の男が現れた。幸いのことにあのマルスはいなかった。それでもフェイトのリンカ―コアが捕食された。

ＺＥＲＯは先ほどマスターであるレイにそのことを伝えたが最後まで聞かずこちらにいま向かっていることだろうと思っていた。

今ＺＥＲＯはフェイトがいる医務室にいる。もし、彼が来るとしたらここだと直感したのだ。

ＺＥＲＯ以外に、アルフ、アリシア、リニスが彼女の傍にいた。

「アリシアも心配かけてごめんね？」

「ううん。今回、私は出られなかったから。むしろ、私が姉としてフェイトを守らなきゃいけなかったし」

「そんなことないよ。アリシアとリニスは闇の書について調べていたんでしょ。だったら、私が戦わなきゃいけなかったし。それに相手はシグナムだったから」

―シグナムか。まぁ私もユキナが今回出て来なかったら出なかったけど。

ドドド

「それにしても命にかかわることじゃなくてよかったです」

「リニスもありがとう」

「すー。すー」

アルフはずっとフェイトの傍にいたようだ。

「アルフもありがとう」

ドドドッドドッドドド

「なんか音がしない？」

「ええ、なんだか上から何かが落ちてくるような・・・」

『皆さん私の近くに！』

「えっ？」

ＺＥＲＯはフェイトの傍により語りかける。

『いいから早く！』

二人は言われるがままにＺＥＲＯの近くによった。

『障壁！』

ＺＥＲＯが障壁を張るのと彼が落ちてくるのは同時だった。

ドーン！

「なっ、なに！？」

目の間に起きていることに驚く彼女達。

「―フェイトォ―！大丈夫か！？」

「に、兄さん！？」

「怪我はしてないか！？それとも・・・」

『マスター落ち付いてください。別に命がどうのってわけではありません』

「は！？だってフェイトが・・・仮面の奴に・・・」

「兄さん、私は仮面の男にリンカーコアをとられただけだから」

「そ、そうだったのか・・・」

彼は疲れ果てたのかその場に、ベットにおっかかる形で倒れた。

『まったく、人の話を聞かないから・・』

「・・・うるせぇこっちだって大変なんだよ・・」

だんだん、彼の声は小さくなっていた。

「兄さん、ありがとう」

「・・・おう・・・」

それから彼は寝息をたてていた。

アースラｓｉｄｅＥｎｄ

グレアムｓｉｄｅ

管理局、グレアムの部屋

彼は闇の書のデータをみていた。

「・・・」

「父様」

「リーゼ、どうした」

「そんなに張りつめなくても大丈夫ですよ」

「そうだよ、父様。計画は順調だし、それにデュランダルも完成したし」

「そうか。あと、もう少しだ」

そう、あともう少し。

あの時の悲願を叶えられる。私はあの日から決めたのだ。クラウドがあの日死んだ日から。もう二度と同じ過ちを犯さないと。そのために今まで準備をしてきた

「じゃあ、計画は最終段階。そろそろ覚醒してもらおうか。闇の書の主に」

グレアムの後ろに立つ男。それはマルスだった。

「本当に平気なんだろうな?」

「心配ないよ。騎士ごとき僕にはなんの生涯にもならない。一番の問題は彼さ」

「・・・・」

彼。

私の上司で昔はいつも助けてもらった。

管理局の、私たちの総帥。

彼から聞かされたときには驚いたが総帥もまた闇の書を封印かなんらかのことをしていたそうだ。
例え、非道と呼ばれても構わない。
それでも私は私の意志を貫く

―まぁここまでこいつに協力してきたけどそろそろ潮時かな？最高の舞台にするために君にもちゃんと役目を果たして貰うよ

グレアムｓｉｄｅＥｎｄ

レイｓｉｄｅ

―それでは、例の報告を

―ああ

外面的に寝ていた彼だったが中身は起きていた。

―恐らく彼に間違いありません。遠い親戚として資金援助をしていたようです

―やはりな。他には？

―それと、極秘にあるデバイスが開発されていたようです。その名『デュランダル』」

―はっ、聖剣と同じ名前とはね。わかった。それはいい。あとは闇の書だが

―それなら私たちが皆に報告しておいたから

二人の会話にアリシアが介入した

アリシアの他にリニスもだ。二人は部屋の外。アースラの通路を歩いている。

―・・・ＺＥＲＯ

―もう、良いのではないのですか？

―そうか。リニスもすまないな。こんな汚れ仕事につき合わせて

―いえ、それにあなたが言ったんですよ？私たちは隠密にすぐれているって

―そうだったな。それでどこまでなのはたちに喋った？

とりあえず彼女達には闇の書の本当の名が夜天の魔道書と呼ばれていたこと。本来は魔導師と旅をする魔道書。それがいつかの所有者によってデータの改変により今の形になってしまったこと。さらに、主の魔力を喰いつくすなど。ある程度のことは言っておいた

―けど、レイ。最終的に皆を救うんでしょ？

―ああ

―けど、どうするの？ＺＥＲＯから簡単に言われたけど完成してからかが問題って

―それは第三者による闇の書の完成。それだけは絶対に避けなくてはならない。それに、奴が―マルスがいるとなると非常に困難だ。おっと話がそれたな。要は完成したあと。俺が本当にやらなければならないこと。この長い時間の中でやっと取り戻すことができた闇の書を救う鍵

―鍵？

―それはいったいなんですか？

―それは・・闇の書、いや、もう一つの夜天の魔道書。それが今ある闇の書を、彼女たちを救う鍵だ

レイｓｉｄｅＥｎｄ

第２９話　神の世界（後書き）

さーてと。今回は色々と飛ばしたなぁ。とくに戦闘シーンとか。
いきなり数日後でフェイトがリンカ―コアをとられた後になっちゃいました。
そして、レイがマルスの死刑を請け負い、さらにアリシアとリニスが真実を知りレイとともに陰で暗躍するかも？

それにもう一つの夜天の魔道書。これはオリジナルになります。
今後というか最後に明らかにするつもりです。

では、次回の予告ですがおそらくはやてが闇の書の主として覚醒するところまでいくだろうと思います。さらに、オリジナル展開になると思われます。
それではまた次回でお会いしましょう！

第３０話　闇の書覚醒（前書き）

まず、今回話がとびとびです。
急展開すぎるかもしれません。
でも次回はちゃんとやりますから・・・

第３０話　闇の書覚醒

レイが地上界へと戻ってきて2日後。彼の下に一通の連絡が入った。
それはシャマルからで「はやてちゃんが倒れたんです。すぐ来てください！」という秘通知が来た。
彼はすぐにはやてたちの下に向かい彼女が入院している病院へと赴いていた。魔法とかかわりのないこちらの世界の医者では彼女の足の麻痺のことはわからない。ただ、麻痺が起き歩けなくなっていることしかわからないのだ。
そのため闇の書を詳しくレイに頼んだのだ。

「どうなんだ、はやては！」

「ヴィータ、静かに」

混乱しているヴィータをユキナが抑える

「心臓が急に苦しくなって目眩がしたと言っていたな」

現在ははやては静かな寝息をたて眠っている。
本人には聞けないのでそれを聞いた彼女達に聞いた。

「はい、なんでも急に」

シグナム答えた。

「恐らく、闇の書の毒が心臓に迫っている」

「「「「！」」」」

毒というのは彼が言いやすく例えているだけだ。つまり、闇の書の機能が彼女を虫食んでいる。ヴォルケンリッターも例外ではない。彼女たちははやての魔力で存在しているのだ。ただでさえ未成熟なリンカーコアだ。そんなに魔力を消費したら今の現状に陥る。

「急いだ方がいい。このままだと本当に取り返しのつかないことになる」

「それはわかってる。わかってるけどよ・・・」

「それに今何頁まで蒐集が進んだ？」

「あともう少しです・・」

「そうか」

―フェイトの魔力を蒐集したことでかなり進んだようだな。あの仮面、どうせ奴のアレだろうがいい仕事したと今言っておこう。だが、フェイトにあんなことをしたことは俺は許さんが

「とりあえず今は蒐集を続けるしかない。俺もできるだけ情報を錯乱させる。だが、俺もこうして会いにくることさえ無理になる」

「わかってます。あなたが管理局の人間だって。けど、それでもあなたは―いつも私たちを・・・」

「それが俺のやるべきことだからだ」

大人として、また医者でもあった自分。けど、立場上助けてやれないし、目的のため助けられない。そんな自分がたまに嫌になった。

それからはやては入院することになった。
大事な家族とも会える時間は少なくなった。

そして時は１２月２３日
クリスマスが近づいていた。
その間に少し厄介なことが起きた。最初はすずかが見舞いにきたがそれから彼女の友達もくることになったのだ。そのことをレイに相談したシャマルだったがレイは「あいつらははやてのことを知らない。なら、お前たちが逢わなければ問題はない」。確かにそうだった。
それから彼の言うとおりに大人しくしていた。
その時彼女達ははやてを助けるために蒐集を続けていた。

同日アースラｓｉｄｅ

カチカチ

管制室でクロノはとあるデータをみていた。
それは自分の師でもあるグレアムのデータだった。なにもなければそんなことはしない。けど、そう思ってしまった自分がいる。

すると部屋のドアが開きエイミィが入ってきた

「！」

「アレ？クロノくん、なんのデータをみてるの？」

「あ、ああちょっと闇の書のデータを」

「なんだ。言ってくれれば私がやってあげたのに」

「はは。そうだね」

エイミィ自身この時の彼の態度は変だったとあとで思った。

「それじゃ、あとは頼む」

「うん」

それからクロノは通路を歩いていた。できれば会いたくない人に会わないよう早く自室に戻りたかった。けど、そうはいかなくて・・・

「クロノ」

「総帥・・」

彼は壁に背を預け腕を組んでその場に立っていた。

「お前も、気づいたんだろ?」

「・・・総帥も、ですか」

「ああ、独自の調査でな。つい最近だ。認めたくないと思ってるだろうが事実だ。だが、奴がそうしようとしている理由も共感できなくはない」

「それでも！僕は・・・」

「わかってる。俺はこれから往くがどうする？」

「往ってどうするんですか」

「答えは簡単だ。とめにいくのさ」

彼は笑っていた。
まるで当然のことのように

そう、当然だ。犯人がわかっているのだから。捕まえるのは当然だ。
それが例え自分の師であっても

「わかりました」

「俺は少し準備がある。明日になるだろうからまた連絡する」

「はい」

そういうと彼はゲートを開き消えた。
クロノもまた歩きだす

アースラｓｉｄｅＥｎｄ

１２月２４日　夕方

今日はクリスマス・イヴだ。
街は賑やかだ。
皆楽しい幸せな時間を過ごしていることだろう。それは八神家でも

同じことだった。ヴィータとシグナム、それにシャマルははやての見舞いにきていた。ユキナとザフィーラは別行動をしていた。
全員揃っていないがそれは幸せな時間だった。
だが、そんな幸せな時間は長く続かなかった。
お見舞いにすずかが来てくれたと思ったらタイミングの悪いことになのはとフェイトもやってきた。
そう、もう幸せな時間は終わったのだ。

そして、今彼女たちは街のとあるビルの屋上で対峙している。
ヴィータたちはなんとしてでもはやてのことを管理局に伝えられるわけにはいかなかった。
逆になのはたちは闇の書が完成した後のことを伝えようと思っても伝えられる状況ではなくなっていた。
騎士としてまだジャケットも装備していないなのはを襲うヴィータ。
それは騎士としてあるまじき行為だろう。だが、すべてははやてのためだった。

炎上するフェンス。そこから何もなかったように変身したなのは姿を現す
その姿をみたヴィータはこう言った

「悪魔め」

「悪魔でいいよ・・・悪魔らしいやり方で話を聞いてもらうから」

そして、戦いは始まった

「闇の書は壊れてる。そんな状態で完成させたらはやてがどうなるかぐらい・・・」

「貴様に言われなくてそんなこと知っている。我々は言いかえれば闇の書の一部。貴様らより闇の書を一番知っている！」

剣を振るいフェイトに斬りかかる。

現在フェイトはソニック・フォーム。紙のように薄いＢＪ。一撃でもくらえば終わりだ。

「だったら、なんで！」

「そんなのはやてが幸せになるためなんだ！お前たちに何がわかる！はやての痛みが苦しみがお前たちにわかるのか！？」」

ヴィータは叫ぶ。

わからないだろう。はやてが一番苦しんでる。それがわかるのは私たちだけなんだ！

「わからない！けど、どうして闇の書なんて呼ぶの！？」

「・・・？」

何を言ってるんだ？

「忘れちゃったの！？本当の名前を！？」

「本当の・・名前・・？」

なにを言ってるんだ。わからない。闇の書は闇の書だ。

闇の書に別の名前なんて・・・

ヴィータは困惑し始めた。
一体何が正しいのか。わからなくなっていた。
だが―

「な！」

「バインド！？」

濁った青色をしたバインドがなのはを拘束する。

「なのは！？」

なのはの異変に気付いたフェイトだが彼女もまたなのはと同じバインドにより拘束されてしまう

そして、現れたのは二人の仮面魔導師

「二人！？」

そう、先の戦いで一人だと思っていたのが二人だったことに驚くなのは。
しかし、驚いたのは次の行動だった。

「えっ？」

「なっ！」

「うう！」

仮面の魔導師は騎士たちを援護していたのに今はなのはたちと同じ

ようにバインドで拘束された。
そして、空から彼女達を見上げこう言い放った。

『さぁ、始めよう』

管理局ｓｉｄｅ

時間は少し遡りレイとクロノは管理局についた。
そして、ゆっくりと歩きながら今回の黒幕の一人である彼、グレアムの部屋を目指していた。

―クロノ。無理しなくてもいいんだぞ

念話で彼に語りかける。今のクロノの心境はともて複雑だろう

―大丈夫です。自分もけじめはつけます。

―そうか

クロノも覚悟を決めたようだった。

まだ、地上ではなにも起きてはいない。上手くいえばこのままなんとかなるかもしれない。
そうレイは思っていた。だが、そうはいかなかった。
いや、そういくはずがなかった

「ふふっ、少し遅かったね。愛の代行者くん♪」

「―っ！」

ふいに聞こえたあの声。すれ違いに言ったあの言葉。
振り返ってもその声の男はもういない。
これが示すことは最悪の事態だった。

「クロノ、急ぐぞ！」

「えっ！？」

彼はいきなり走りだした。
クロノも遅れて走りだす。

「どうしたんですか！？」

迂闊だった。いや、どうして気付かなかった。
奴は仮面の魔導師と“一緒にいた”。ということは共通していたということだ。

「くそっ！間にあってくれ！」

最悪の事態。それは想像したくはない。
ただ、その先に待つのは・・・

「グレアム！」

彼は自動で開く扉が開く前に蹴り倒し中にはいる

「どこだ！グレアム！」

部屋を見渡すレイ。するとソファーから腕が見えた。
扉側かれみればちょうど隠れているようだった。

「グレア・・・ム・・・・」

そこにはまさに最悪の事態があった。

「総帥！いったい・・・提督！」

遅れ来たクロノもその現状を目のあたりにする。
そこには血だらけのグレアムの姿があった。レイは先にきたのか治療魔法を今
施している

「・・・・そ、そうすい・・・すみま、せん」

まだ息がある。死んではいないようだ。

「言うな。お前も、お前のやり方で闇の書を封印しようとしたことはわっている。クロノもだ。だが、お前のやり方は間違っている。逆にそれは火に油を注ぐようなものだ」

「・・・ぐふ・・・それでも私は・・・」

「お願いですから、もう喋らないで！」

クロノは辛い顔をしている。
泣きそうな顔とも受け取れた。

―しかし、これでは本当に取り返しに使いないことに・・・

そう、まだ終わってはない。

彼の使い魔が仮面の魔導師として活動している。さらにはマルスもだ。

―本当に最悪だ

管理局ｓｉｄｅＥｎｄ

はやてｓｉｄｅ

そして、時間は戻る。
なのはたちがバインドで拘束された直後はやての病室

なんか寒いなぁ・・・

確かに今は冬でクリスマスだがとても寒い。
ゆっくりと起き上がり外を見た。なぜか窓が開いていた。

「おかしいな。ちゃんと閉めたんに・・・・？」

風に煽られているカーテンの後ろに人影がみえた。
最初はシャマルか誰かと思ったけど違った。

「あんた誰？」

「さぁいこうか。闇の書の主」

「えっ―」

そして、はやては病室から消えた。

・・・・・・・・・

突然の出来事に驚いているはやてだが目を開けるとそこは先ほどいた自分の部屋ではなかった。

「ここどこ？・・・・は―！」

辺りを見渡せば恐らくどこかの屋上。
けど、視界にある者が目に写った。

「ヴィータ！シグナム！シャマル！」

三人の名を叫ぶ。
三人は十字架に吊るされているような格好で浮いていた。

「きたね」

「うんきた。じゃあ始めようか」

「そうだね。蒐集」

『蒐集』

そこにはなのはとフェイトがいた。だが、二人ではない。
闇の書を操り騎士たちのリンカーコアを蒐集しはじめた。

「「「ああああああああ！！！」」」

「やめてぇ！」

「黙ってみてなよ」

「そうだよ。これは君のためとか言ってたけどそのために色んな人を傷つけたんだよ?」

「えっ?」

なにをいってるん?

「人から動物まで無差別に・・・・」

「私たちも被害にあったよ。痛かったな・・・」

「なに、なにを言ってるん?」

「それに完成したって君は治らないんだよ」

「もう、壊れてるから」

治らない?壊れてる?

「は、はやて・・・」

「ヴィータ!?」

蒐集されながらもはやてに声をかける

「ご、ごめんはやて・・・」

「なんで謝るん？ヴィータはなにも悪いことしてない！」

本当のことを知らないはやては意地でも否定している

「しぶといな・・・・っ」

蒐集に力を込める

「「「あああああ・・・・・・・・・――――」」」

最初は悲鳴を上げるがだんだん小さくなりそして―消えた

「ああ、あああああああああああああ！」

消えた。どうして、どうして、どうして？

なのはちゃんとフェイトちゃんがやったから

「「「でりゃあああああああああああ」」」

『！？』

突如なのはとフェイトに襲いかかるのはザフィーラとユキナ

「そっか。まだいたんだね」

「じゃあ消さなきゃ」

偽なのはとフェイトにカードみたいのがそのまま二人の胴体を貫く

「「「ぐっはああ・・・・」」」

「ザフィーラ、ユキナ！」

「あ、主・・・」

「早く、消えなってワンコクン」

『蒐集』

「ぬオオおおおお！」

「ザフィーラ！ぐふ・・・この・・・」

目の前で友が仲間が消えてゆく。
残ったのはユキナただ一人。
胴体から流れる血。彼女達は人間ではない。プログラムだからすぐ治ると言えば治るが遅いのだ。

「な、なんでそんなことをする！」

「知っているだでしょう。あなたたちはいつの時代からこうしてきたって」

そっか。全部わかった。いつも最後の記憶がないのは自分たち自身が生贄になってたんだ。
けど、今は違う

「でも、そんなこと！ーあ、あ・・・・・」

「もーしつこいんだから」

後ろから彼女の首を掴み持ち上げるマルス。

『蒐集』

「ああ、ぁぁあああぁぁ」

「ユキナ、ユキナ！」

「ほら、よくみてね。君の大事な家族が消えて行く最後を」

「はゃ・・・て・・・」

必死に彼女に手を伸ばそうとするユキナ

「ユキナ！」

はやても手を伸ばすが届くはずもなかった。しかし、彼女はそのまま蒐集されなかった

「じゃあ、もっと憎しみを与えてあげるよ♪」

グシャ！

「あ―ぁぁぁぁぁぁぁいやあああああああああああああああああああああ！！！」

マルスの開いていた腕を彼女の胸に突き刺したのだ。

飛び散る血は辺りに散らばりはやての顔にもついた。

「はは、ははははっ！」

ぐちゃ・・・どん

そして、ユキナも消えた。リンカ―コアを最後までとられなかったが彼女はプラグラム。魔力で造りだされたもの。それごと回収し最後の頁を埋めた

「いやあああああああああ！！！！」

はやての下にベルカの魔法陣が展開した。
そう、彼女は覚醒したのだ。

「おっと」

マルスは危険だと察知したのかその場から一旦距離を置いた。

「さて、君たちも用済みだよ♪」

「「ぐほ！！」」

偽なのはとフェイトはマルスの蹴りを食らいさらには魔力とは違う力でエネルギー弾を放つ。
爆発が起き煙に包まれた二人。
煙が晴れるとそこにはリーゼ姉妹がいる

「ど、どうして・・・？」

「どうして？まぁ君たちは用済みなんだよ。それといいことを教えてあげる。君たちの主。死んじゃうかもよ♪？」

笑顔で告げられたそれは二人も理解した。

『父様！』

二人は転移したのかその場から消えた。

「さて、そろそろかな。ん？ああ、あの二人もあそこから出たようだ」

それは本当のなのはとフェイトだった。リーゼ姉妹により拘束されていてやっとの思いで出られた

「はやてちゃん！」

「はやて！」

しかし、はやてではなくなっていた。

漆黒のバリアジャケットを纏う。さらに、黒き翼がその姿を現す。

「・・・・泣いてるの？」

そうはやてではない誰かが涙を流していた。

「また、こうなってしまった。やっぱり彼が協力しても結果はいつもこれ」

はやてではない。それは闇の書の人格。第６の騎士だった。

涙を流しながら彼女は言う

「さぁ我が主の願いを叶えよう」

はやてｓｉｄｅＥｎｄ

第３０話　闇の書覚醒（後書き）

待たせたな！（明夫ボイス）

皆の嫁リンフォースが登場だ！だが、しかし、まだ彼女には名前がないんだ。というかまだはやてがつけてないし。

さて、前回と出たもう一つの夜天の書は終盤での登場となります。これは、リインの・・・と受け取ってもらって大丈夫ですよ～（あえて言わない）

けど、皆リインが消えたことに悲しんだんじゃないかな。俺もすごく悲しかった。というかＡ'Ｓが他の作品と比べて良作だったからな・・・

そして、次回はいよいよ闇の書との戦いです。うまくできるかはわかりませんが頑張ります！

第３１話　悲しい涙を流す彼女（前書き）

今回は戦闘シーンがメインです。
未だに慣れないので感想などでご指摘があればお願いします。
感想も登録していない皆さんもできる設定にしましたのでどうぞご気軽にお願いします。

第３１話　悲しい涙を流す彼女

海鳴市結界内

闇の書が覚醒しはやてが真の主となった直後。

「―間にあわなかったか・・・・」

レイは現地に赴いていた。
グレアムのことはクロノに任せこっちに向かってきたはいいが間に合わなかったのだ。
第三者、マルスにより憎みを植え付けられた状態で覚醒した彼女は半ば暴走していた。

「マルス・・・」

彼女がいる上空にマルスの姿が視界にはいるが今はそれよりも闇の書を止めなければならない。

「それより二人は・・・」

見渡すけれどなのはとフェイトの姿はない。
隠れているのだろうか

―なのは、フェイト聞こえるか?聞こえていたら返事をしろ!

少し間を置きなのはから返事が返ってきた

―レイくん!?

―無事か?

―うん、フェイトちゃんも

―兄さん・・・

とりあえず二人とも無事のようだな。

「・・・主よ、あなたの望みを叶えます」

遠く離れているがはっきりと聞こえる彼女の声

「!」

『いけません。兄妹だちとリンクしましたがどうやら主の目の前で騎士たちを・・・』

「くそ!」

「―愛おしき守護者たちを傷つけたものたちを今破壊します」

すると街一帯に結界が包んだ。

それはかつての封鎖結界と同じものだった。

「スレイプニ―ル、羽ばたいて」

彼女の４つの黒き翼が大きく羽ばたき空を舞う。

―来た・・・アルフ、お前もいるな

―ああ、いるよ

―お前はバインドで奴の動きを止めていろ

―わかった

―なのはは距離を置いて砲撃、フェイトも慣れないが後方で砲撃だ

的確に各自にあった場所を指示するレイ。

今まさに総帥らしいことをしている

―レイくんは？

「俺も・・奴と戦うさ」

そして、とうとう目前に彼女が迫った。

「ーふん！」

先に仕掛けたのはレイだった。

ＺＥＲＯを起動せずただ拳で挑んだ。だが、当然のように防がれる

―アルフ！

「ああ！」

アルフのバインドが彼女の足を拘束し

―なのは、フェイト！

『ディバインバスターエクステンション』

『プラズマスマッシャー』

「ファイア！」

「シューット！」

なのはとフェイトの砲撃魔法が闇の書に向かって放たれる

「・・砕け」

『粉砕（ブレイカー）』

まずはアルフのバインドを壊し

「壁」

『シールド』

片方ずつ砲撃をいとも簡単に受け止め

「ブラッディダガー」

血のように赤いナイフが複雑な軌道を描きなのはとフェイトに向け爆発した。

バッ！

二人もそう簡単にはやられてはいない

「―星よ集え。すべてを撃ち砕く力となれ」

「まさか・・・」

「スターライトブレイカー―」

そう闇の書は蒐集した者の力をコピーできそれを使うことができる
辺りにある魔力素を吸収、集束し始める。

「距離をとれ！」

彼の指示通り動く三人

なのははフェイトに押して貰うような感じで飛んでいた。
機動力ならフェイトの方が高いからだ。

「フェイトちゃん、こんなに距離をとらなくても・・・」

闇の書の位置からかなり距離をとった

「駄目。至近で食らったら防御の上から落とされる！」

それは自分で身に受けたからわかることだった。

『マスター！』

彼も距離をとるため回避行動をとっていた最中ＺＥＲＯが叫ぶ

「どうした」

『結界内に民間人！』

「馬鹿な！？普通の人間がこの中でいられるはずが・・・・」

そう結界内にいられるのは魔力をもつもの以外にはいない。
しかし、ＺＥＲＯは民間人と伝えている。

「位置は！？」

『距離およそ１６００メートル！』

「間にあえ！」

彼はスピードを上げた。

―二人とも気づいてるな！？

―うん！？

そして、道路の真ん中を走る小さな子供が二人

「子供！？」

彼はそのまま道路を滑走路のようにし速度を落とした

ガガガガ！

道路が削れる音が響きわたる

「えっ何!?」

「―そこの二人そこから動くな!」

そして、目前に迫るとレイ自身その子供には見覚えがあった。

「玲さん?」

「なっ・・・」

そうすずかとアリサである

―なんですずかがここに!?

「アリサちゃん!?」

「すずかも?」

合流したなのはとフェイトも二人がここにいることに驚く

「なのはちゃん、それにフェイトちゃんも・・」

「あんたたち一体・・」

互いが驚くも無理はないのは仕方ない。

だが、今はそれどころではない

「ＺＥＲＯ！防御形態『大いなる障壁』」

『了解！』

ＺＥＲＯが前に出て防御形態に移行する

「我と契約せしものたちよ　今こそ我に力をかし　我らを守る盾となれ」

ゴゴゴゴ

すると地震のように辺りが揺れ始めた

「―大地から生み出されし鉄壁の盾（アイアンウォール）！」

彼らがいる道路の前方。闇の書に向かってそびえる壁。

厚さは２メートルぐらいで高さは近くのビルと同じぐらだから数十メートルはある。

その数は間をおいていくつも現れる

そして闇の書の攻撃と盾ができるまでほぼ同時だった

「放て、スターライトブレイカー」

ドっドドド

地上に放たれたそれは例えるなら核のようなものだろう。落下地点から軽くレイたちがいるところでその勢いは止まらない

「ぐぐぐ・・・」

意識を集中する。
だが、次々と盾は崩れてゆく
それもそのはずだったエネルギーは軽く盾を越しているのだ。持ったとしても数秒が限界だった。

「レイくん！」

「―ＺＥＲＯ！」

『わかってます』

そして、最後の一枚が破られＺＥＲＯで受け止める

―・・・エイミィ・・聞こえるな？

―総帥！？

―攻撃がやんだらすぐ民間人を安全な場所まで避難させる、んだ

―了解

そして、攻撃が止むと同時に彼は地面に膝をついた。

「・・・はー！はぁはぁ」

さすがにリミッタ―付きでの魔力は堪える
だが、それよりも・・

「はぁはぁ・・・悪いな二人ともすぐ安全な場所へ運ぶから」

立ち上がり二人のもとへ近寄るレイ

「玲、さん・・？」

「それになのは、フェイト―」

そして、すぐアースラからの転移で二人は安全な場所へと移された

「レイくん、見られちゃった」

「けど、すずかは兄さんのこと・・」

「詳しいことは後だ。アルフ、お前は彼女達を守ってくれ」

―アルフ、私からもお願い

―うん、わかった

レイは空にあがり彼女と向き合う。

「さてと、いい加減止めたらどうだ？」

レイは闇の書に問いかける

「・・・お前は私の前に立ちはだかるのか？その子供たちを守るために」

「―そうだ」

「なら、お前も永遠の闇に包まれろ。それが我が主の願い。愛おし

い騎士たちを傷つけた彼女達と共に」

―やはり、語りかけても駄目か。なら、内部からやるしか・・・

「そんなの間違ってる！」

地上にいるなのはが空にいる闇の書に向かって叫ぶ

「―なのは？」

「主の願いを叶える？本当にその願いがはやてちゃんの願いなの！？」

「それが主の願い」

「ただ、主の願いを叶えるだけの道具で本当にいいの！？」

「我は魔道書。ただの道具だ」

「なら、なんで涙を流すの！？道具だと言っていてなんで涙を流すの？それはあなたの意志が、心があるからでしょう！」

「これは、主の涙だ・・」

「違う！それはあなたがはやてちゃんを思って流してる涙！悲しいって思ってるんだよ！」

「悲しくなどない。我は道具だ」

「そんな悲しい顔で言ったって、誰が信じるもんか！」

今度はフェイトも彼女に語りかける

「はやてちゃんはきっとそんなあなたの悲しみを受け止めてくれる優しい子だよ？」

「・・・・・」

彼女は沈黙した

ドン、ドン、ドン！

今度はあちこちに火柱がたつ

「早いな。時期に私も消える」

『・・闇の書の暴走』

ＺＥＲＯが呟いた

「ならば、意識のあるうちに主の願いを『パチン！』・・・」

レイは彼女の頬を叩き彼女の肩を掴む

「―いい加減目を覚ませ！それが本当にお前の主が望んでいることなのか！？お前はずっとみていたはずだ！あの子の傍で彼女の笑顔を幸せな顔を！それでもなんでそれが彼女の願いだと言うんだ！」

「一番傍でみてきたからだ。それが大切な家族を失った主の願い。お前もそうだろう？」

「なに？」

「お前が私に注いだ力で感じた。結局、お前も私と同じだ。誰も自分をみてくれない。本当の自分を―」

「そんなことはない！それに俺はお前を何時も―」

「―では、約束は？復讐は？」

「なっ・・・」

「それも私の中で考えるといい」

『吸収』

「レイ、くん？・・・」

「よくも、兄さんをー！」

フェイトが彼女に斬りかかろうとする

「お前も私の中で眠るといい」

『吸収』

「ああ―ぁあぁ」

光となって消えていくフェイト

「フェイトちゃん！」

そして、なのはは一人になった。

レイｓｉｄｅ

ここはどこだ

そうかここは闇の書の中か。どうやら上手く内に入れたようだ

死と生の狭間

しかし、暗いな。ここ

辺り一面の黒。真っ暗なだけに距離感もつかめず自分がどこにいるのか、いや、立っているのかすらわからない

あーあ、あああああ

声がした。

まるで自分をも引き込まんとする亡者の声

よく見れば今度は手が俺を誘い始める

「憎しみ、怒り、嫉妬、恐怖、殺意、怨念、邪念、すべて負の感情。今さら俺を呑みこもうとしているのか？」

そう、かつて自分はそれに耐え今こうしてここにいる

すると風景が変わった。
小さな村がある。木でできた小さな家がいくつか建っている。自分もそこに立っている。
そして、一人の女性が自分の目の前に立っていた。

「―レイ兄さん」

微笑みながら彼のことを兄さんという彼女

「・・・・ルリ」

妹の名前を呼ぶレイ。

これが俺に見せる夢か？

レイにとては悪夢にしか思えなかった

レイｓｉｄｅＥｎｄ

第３１話　悲しい涙を流す彼女（後書き）

書いててやっぱり悲しいんだよね。Ａ'Ｓは。

さて、うまく戦闘シーンが書けたかは少し不満ですがどうでしたか？

最後にレイも取り込まれさらにそこで彼の記憶の一端をみることになりましたが・・・

なんだかんだでレイについては当分先になるんですよね。

では、次回の予告

取り込まれたレイとフェイト。レイは過去の記憶をみる。フェイトは母とある意味での再会を果たす。

そして、ただ一人戦うなのは・・・

それを傍観するマルス・・・

では、次回にまた！

第３２話　祝福の風（前書き）

最近更新が早くなったなと思う今日この頃です

さて、今回は闇の書に取り込まれたフェイト、レイ、そしてはやてがメインとなります。

第３２話　祝福の風

レイとフェイトが闇の書に取り込まれた直後

「エイミィさん！」

アースラにいるエイミィに今の現状を問いかける

『大丈夫！まだ二人とも生きてる！けど、救出方法は現在調査中！』

その報告だけでなのははほっと胸をおろす

「二人は今、死と生の狭間。永遠の中にいる。それは我が主も同じ。そこで主たちは永遠の夢をみる」

「―永遠なんてないよ。皆変わってく。変わっていかなきゃいけないんだ」

そう、人は時が経つたび変わっていく。それを成長とも人は言うだろう

「私も、あなたも―！」

マルスｓｉｄｅ

少し離れた上空でその舞台をみているマルス

そして、いつのまに彼の隣にいるのはジェイドだった

「で、どうだ」

「完成はしたけどやっぱ暴走してるみたい。まぁあの子たちが止めた後に僕たちが横取りすればいい話さ」

「そうか、なら導師にはそう伝えておく。その・・・まぁ貴様がやられることはないと思うが本当に危なくなったら救援に向かう」

「案外優しいね？」

「貴様我らにとっては必要な人材になったのだ。当然だろ」

「はは。ありがとう♪」

軽く礼を言ったあとジェイドは本部へと戻っていた。

「さて、愛の代行者くんは大丈夫かな？」

とりこまれたレイを心配しているマルス。
しかし、それが本当に心配していたのかは彼にしかわからにない

マルスｓｉｄｅＥｎｄ

フェイトｓｉｄｅ

目が覚めたら私はベットの上にいた

隣にはアリシアも寝ている。少ししたらリニスが起こしに来た。アルフも一緒だ。

着替えて広間にいく。そこには母さんがいた。

優しい母さん。私の母さん。

母さんがいて、アリシアもいてリニスも、アルフもいて。

これが私の望んだ世界。

けど、これは・・・幻だ

フェイトｓｉｄｅＥｎｄ

はやてｓｉｄｅ

ここはどこやろ

なんだか身体が軽い感じがする

「主、静かにお眠りください」

誰やろ？

声からして女の子やから・・・けどヴィータたちとは違う

けど優しい声

「何もかも忘れてよい夢をみてください」

その優しい声に言われるがままに私は瞼を閉じようとしていた。

はやてｓｉｄｅＥｎｄ

レイｓｉｄｅ

「ははっ兄さん♪」

目の間にいる妹であるが妹ではない彼女が俺に優しい笑顔を向ける。

「どうしたの？」

俺はなにも答えない

これが夢だと知っているから

俺の記憶を夢として変換しているだけなのだと

わかっている

しかし、すべてを否定できない自分もいた

「ねぇ？いつになったら約束果たしてくれるの？」

「・・・・」

約束

お前と俺の約束

兄妹の約束　大事な約束

わかってる。忘れたことなんてない

「ねぇ？いつになったら約束果たしてくれるの？」

また同じ言葉を繰り返す

何度も何度も同じことを言ってくる

そして

「ねぇ？いつになったら約束果たしてくれるの？」

「ぐう！」

今度はいきなりモザイクがかかったような声になりレイの首を締め始めた。

それと同時に景色も変わった。

家が燃えている。何もかも燃えている。

人は死んでいる

生きている者はいない

「私たちの仇。とってくれるんじゃなかったけ？」

モザイクなまま語りかけてくるそれ

「もしかして、もうめんどくさくなったの？」

「ぐ・・ぐぁ！」

夢をみさせるはずの物が悪夢をみせていた。

『だから、もう復讐は止めたのかと言っているのだ！』

また違う声だ。だが、それには聞き覚えがあるものだった。

「だま、れ。俺はお前たちの復讐のための道具じゃない！」

腕を千切り解放されるレイ

「我が一族が呪い、怨念どもが！失せろ！」

大きく手を振り闇を斬り裂く

「「「「だが、忘れるな！貴様も復讐、怨念に囚われる運命だ！」」」」

断末魔のように消えて行く声とその世界

パリン！

まるでガラスが割れたように世界は砕け草原が広がっている
そこにはまた記憶の中の妹がいた

「ねぇ兄さん。約束忘れてないよね」

「ああ」

今度は答えた。今はきっと俺の記憶から造りだされた彼女自身の言葉だと思うから。

「ちゃんと約束、守ってよね」

「わかってる」

それを聞いて嬉しかったのか彼女は笑顔で消えた

パリン！

そして再び世界は暗い世界に戻った。

「・・・忘れるはず、ないだろ・・・」

俺たちはたった二人の兄妹なのだから

「なのは、お前も頑張ってくれ」

外にいるであろう彼女に向けて言った。

そして、自分もはやてを救うために動く

レイｓｉｄｅＥｎｄ

なのはｓｉｄｅ

「はぁはぁはぁ・・・」

場所は街から移り海上へと移った。先ほどからの闇の書の攻撃はワンパターンであった。基本的彼女は格闘戦しかしかけてこない。しかし、魔力を込めた拳はなのはのバリアを簡単にも破るほどの威力だった。

「お前も眠れ」

私にも闇の書へ吸収されろ。と言っているのだろうか

「眠るよ。でも、それはきっとずっと先。だから、今は二人を返して貰うよ。そして、はやてちゃんも」

「貴様にそれができるのか？」

『できます。私のマスターなら』

なのはの代わりにレイジングハートが答えた。

「うん。けど、私とレイジングハートなら。だよ。じゃあ、レイジングハート、いくよ」

『Ａｌｌ　Ｒｉｇｈｔ』

レイくん、約束一つ破っちゃうけどごめん

「レイジングハート・エクセリオンモード！」

『Ｉｇｎｉｔｉｏｎ』

杖を形どっていたレイジングハートは一番近いものに例えるなら槍に近いものになったものだろう。
レイジングハート本体の周りに白の装甲が付きさらに2本のブレードの間に白いブレード付いていた。

※デバイスは劇場版使用なのでところどころ違います

「いくよ、レイジングハート！」

『了解』

なのはｓｉｄｅＥｎｄ

フェイトｓｉｄｅ

フェイトは広い草原のとある大きな木に寄りかかっていた。

「ここは、私が望んだ世界。けど、違う。私は・・・」

確かに自分が望んだ世界。けど、何かが違った。
何が足りない？

―違う。すべてが違うんだ。例え望んだとしてもそれは結局、夢だ！

「に、兄さん？・・・・」

けど、声はもう聞こえない

夢

そうこれは夢

だから、夢から覚めなくちゃいけない

フェイトが行動起こそうとしたときプレシアがやって来た

「フェイト・・・」

「母さん」

「私はあなたの優しいプレシアを望んだ形かもしれない」

「わかってたの！？」

それは驚くべきことなのかもしれない。

夢でありその造りだしたものがそんなことを言うのはおかしい。

「けどね。あなたの記憶の中にはあなたを傷つけた私もいる」

「・・・」

きっとそれは忘れたい母の記憶だろう

「でも、私はそれでもあなたを娘だと思ってる。最後にあの人が気づかせてくれた」

「―母さん」

プレシアは優しくフェイトを抱いた

「だから、あなたも私の娘。フェイト・テスタロッサ。記憶を巡らせて、造りだされた私かもしれないけど」

「ううん、そんなことないよぉ・・・私も母さんのこと大好きだから」

「ありがとう、フェイト。それとね。あなたに伝えてほしいことがあるの。アリシアに」

フェイトｓｉｄｅＥｎｄ

はやてｓｉｄｅ

「私が・・ほしかった幸せ・・？」

はやては再びあの声の彼女と喋っている

「健康な体。大切な家族とずっと一緒にいる幸せな暮らし」

確かに、それは私が望んでいたものかもしれん

「眠ってください。そうすれば夢の中であなたはずっとそんな世界にいられます」

彼女は首を振りそれは違うと否定する

「けど、それは夢や」

―そうだ、それは夢でしかない

はやてｓｉｄｅＥｎｄ

なのはｓｉｄｅ

「きゃああ！」

彼女の攻撃を食らって弾き飛ばされるなのは。

「一つ覚えの砲撃。通ると思ってか」

ジャキ

再びレイジングハート構え叫ぶ

「できるよ！私とレイジングハートなら！レイジングハートが自分の命をかけて一緒に戦ってくれてる。それにレイくんも。私にはわかる。あの人も私に語りかけてくれてる。泣いている彼女を助けあげてって！だから―！」

『A．C．S．　Stand　By』

飛び出ているブレードから羽が生え真ん中にはするどい刃が現れた。
これは出力集中や突撃・至近距離、及び零距離攻撃に特化したストライクフレーム展開型
これにはとても負担がかかる。出力調整を間違えれば暴走し自滅してしまう。
だが、互い信頼し合っているからこ使おうとしたのだ。

「レイジングハート・ストライクフレームA．C．S．ードライブ！」

そのまま真っすぐ彼女に向け突っ込むなのは。
だが、彼女の言うとおり一つ覚え。つまり単純な攻撃を軽々防いだ

「届いて・・・！」

―願うんじゃない。自分の力を信じろ

あの人の言葉よぎる

「届け！」

ワンカートリッジを注ぎ込み刃の先端だ障壁を貫いた

「なに！？」

「ブレイクゥ・・・シューット！」

すべて包み込み羽が彼女を、闇の書を包んだ

そして、大きな爆発と共に彼女が展開した封鎖結界は解けた

「はぁはぁ」

直撃？バリアを抜いての零距離エクセリオンバスター・・・

『マスター！』

上を見上げればまだ彼女は健在だった。

「もう少し、頑張らないとだね」

『ＹＥＳ』

なのは瞳はまだ諦めていなかった

なのはｓｉｄｅＥｎｄ

はやてｓｉｄｅ

「私、こんなん望んでない！あなたもそうやろ？違うか」

「私の心は騎士たちの感情と深くリンクしています。だから、私も騎士たちと同じようにあなたを愛おしく思います」

「違う！」

彼女達とは別の声が聞こえた

「玲兄?」

「それは騎士たちの思いだ。お前の思いではない!」

「そんなことは・・・」

「ないっていいきれるか?」

「わからない。私でも制御できないプログラムの暴走。そして、このままいけばあなたが死んでしまうこと。私にはわからない」

「・・・それが悲しい、切ないってやつじゃないのか?それがお前の思いなんじゃないのか?」

これが私の思い?彼女をどうしたら助けられるという私の思い?誰かの感情じゃない。私自身の感情?

「・・・けどな?わからなかったら聞けばいいんや。だって、マスターは私や。そんなの辺り前のことやろ?」

「・・・!」

彼女の足もとにベルカの魔法陣が現れた。

「名前をあげる。闇の書とか、呪いの魔道書なんて呼ばせへん。私が呼ばせへん!」

「ううっぅぅう」

自然と彼女から涙がこぼれ落ちた

「私は管理者や。私ならできる」

「無理です。自動防御プログラムが止まりません。管理局の魔導師が戦っていますがそれでも・・」

「―止まって」

ただ純粋に止まれ。そう命じた

それは外にいたなのはにも確認できた

『外の方聞こえます?えーと管理局の方!』

―その声、はやてちゃん!?

『なのはちゃん!?なら、その子止めてあげられる?闇の書本体とコントロールは切り離したんやけどその子がいると管理者権限が使えへん。そこにいるのはただの防御プログラムだけやから』

―えっえーと

『つまり思いっきりぶちのめせってことだ!なのは!

―レイくん!?

『お前らしく全力全開でぶっ飛ばせ!』

「うん！レイジングハートバレル展開。中距離射撃モード！」

『Ａｌｌ　Ｒｉｇｈｔ』

「夜天の主の名の下　汝に新たなる名を　祝福の風　リンフォース」

彼女の新たる名。祝福の風リンフォース。
もうけして闇の書とは呼ばせない。
彼女の本当の名前がここに

はやてｓｉｄｅＥｎｄ

フェイトｓｉｄｅ

もう迷いはない

母さんとも分かち合いそして別れを告げた。

そして母さんの言葉を託された

「だから、ここから出るよ。バルディッシュ。ザンバーフォームいけるね？」

『イエッサー』

それは今までのと違い大きな太刀となった

「疾風神雷！」

「ジェットザンバー！」

フェイトｓｉｄｅＥｎｄ

レイｓｉｄｅ

「さぁもう管理者権限は使えるだろ」

『しかし、防御プログラムがとりません』

「うんまぁいこう」

『はい、我が主』

「創始者権限において彼女たちを空へ・・・」

『承認』

それは闇の書プログラムの声だったかもしれない

「玲兄は！？」

「俺はここでこいつの暴走をできるだけ食い止める。心配するな」

「―うん、必ず戻ってきてや！」

声は聞こえるがもう彼女の姿は見えない

『マスター。防御プログラムが暴走の兆しをみせました』

「外はあいつらに任せる。あとは―アリシア、リニス！」

―はい、やっと出番が来ました！

「準備は！？」

―こっちは準備完了だよ！

―こちらも準備万端です

「長い間待たせたな。アリシア、最後だから派手にやって構わないからな」

―じゃあ、アレやっちゃう？

「ああ、いいぞ。リニス、最後はお前にかかっている。頼んだぞ？」

―ふふ、腕がなります

「さぁて、最後の大仕事といきますか」

レイは瞳を閉じ精神を集中し防御プログラムの邪魔をするための行動を開始した

レイｓｉｄｅＥｎｄ

第３２話　祝福の風（後書き）

よし、やっとリンフォースの名前が！

そして、いよいよA's編も大詰めだ。
多分あと二話ぐらいは戦闘シーンなのでまだあるんですよね

それとレイの過去とルリ。ルリは実の妹になります。
ルリのイメージはナデシコのルリ（大人版）で髪をおろした感じになります

次回のタイトルはなんか決まっていたので

次回「旅は終わった　だが夜は続く」

です。ではまた次回で！

第３３話　終わらない夜

ドドドド

「・・・・きゃ！」

いきなり闇の書が停止ししたと思ったら大きな光に包まれた。

「・・・フェイトちゃん！」

「なのは！」

フェイトはどうやら外に出られたようだ。

そして、海上では黒い淀みが現れている。

「アレが闇の書？」

「―なのはアレ！」

「えっ」

フェイトの言う方に向くなのは。そこには白く包まれた球体があった。

その周りには５つの光がある。

「ヴィータちゃん！」

「シグナム！」

姿を現すは夜天の守護騎士たち

そして、彼女たちの―夜天の王が姿を現す

『・・・はやて（ちゃん）！』

「ん♪」

彼女達の姿を上空から眺めるクロノ

「提督・・・」

時は少し戻り管理局

クロノは医務室で彼を見ていた

『父様！』

ノックもなしに入ってきたのはリーゼ姉妹

互いに気まずい雰囲気が漂っていた。

「クロノ・・・」

「アリア、ロッテ」

「―私たちは自分たちがやってきたことを後悔してないよ」

「そうか。総帥もそんなことを言っていた」

『えっ？』

『人や使い魔も感情を持つ限り、例え罪だといわれてもそれが正義でもある。だから、あいつらのやろうとしていたことは俺たちのためでもあった』

「てね？だから、僕も君たちを責めはしない。けど、もっと違うやり方だってあった。それを総帥は知っていた」

「クロ助・・・」

「じゃあ、僕はいく。まだ事件は終わってない」

「クロノ！」

部屋を出ようとした彼をアリアが止めた

「これを・・」

それはカード型で待機してるデバイス。おそらくデュランダルだろう

「凍結専用のデバイスだけどクロノならきっと使えると思うから・・・」

彼は素直にそれを受け取りただ一言

「ありがとう」

そして、今彼女たち家族との再会を喜んでいた
しかし、状況も状況である。

「すまないが簡単に説明させてもらう」

「はい」

「あの黒い淀み。闇の書の防衛プログラムがあと数分で暴走を開始する。それを止めるには方法が二つある。一つは強力な凍結魔法で封印する。もうひとつは軌道上で待機しているアースラのアルカンシェルで防衛プログラムごと破壊するか。二つに一つだ」

「あの～それは止めておいた方がいいと思います」

手をあげそれを指摘するシャマル

「あれは魔力の塊ですからあまり意味ないですし・・・」

「それにアルカンシェルも絶対駄目！はやての家まで吹き飛んじまう！」

「えっそうなの！？」

「ああ」

「だったら私もそれ反対！」

「僕だってそうさ。けど、他に方法が・・・」

「―方法ならあるよ」

「「「「「！」」」」」

いきなり現れたのはハルバードを持つアリシアだった

「あーアリシア！」

先に叫んだのはユキナだ

「アリシア！今までいったいどこに・・・」

フェイトが心配して聞くがアリシアはというと

「うーん、実はずっと上にいたんだよね・・・？」

『上？』

皆そろって空を見上げるがあるのは空だ

「で、その方法とは？」

「簡単だよ。まず皆でアレを可能なら限り弱らせてまぁぶっ飛ばしてそれで弱ったところを上空にいるリニスが消滅させるの」

「えーっと、確かに簡単な方法だが・・・アルカンシェル以上の物があるのか？」

『甘く見られちゃ困るぜ！』

「「「！」」」

どこから聞こえてくるレイの声

『今遥か上空でリニスが待機している。それは空間歪曲とか起きないから被害の心配はない。ただ、純粋に破壊に特化した武器さ！最大出力なら闇の書はおろか地球だって撃ち抜けるぜ！』

ていうか口調変わってません？

「ってそれじゃあ駄目だよ！」

『大丈夫～。ようはリニスがいる場所より上に転移させれば問題はない。座標はアリシアに聞け』

某整備士のウリ（ｒｙみたいな感じのノリでした

「わかったけど、レイくん・・今どこにいるの！？」

彼はどこにもいない。闇の書に取り込まれたままだ

『まだ、闇の書の中だ。今こうして暴走の進行を少しでも・・・・・やば！』

すると淀んでいた周りの空間にヒビがはいる

『急げ！こっちも長くは持たないからな！それじゃ！』

「ちょ、ちょっと！」

それから彼の声は聞こえなくなった。

「不安が色々あるが信じていいのか？」

クロノがアリシアに問う

「大丈夫だって。レイを信じて」

「「「「コクリ」」」」

彼女たちはレイを信じた。

「まずは、シャマル。二人を」

はやてはなのはとフェイトに治療を頼む

「はい。クラールヴィント」

『はい』

すると二人は癒しの風に包まれた

「凄い・・・」

二人は一瞬にして傷ついた身体が治った

「くるぞ！」

淀みが壊れそこから姿を現す闇の書の闇
その姿は蒐集した生物たちの身体があちこちに現れていた

「まずは、私たちがあのウザい触手をなんとかするよ」

「ああ」

先行はアルフとザフィーラ
自分たちの邪魔をする触手をまず叩く

「チェインバインド・マキシマム！」

まずはアルフが攻撃する。

チェインバインドをさらに強化したそれは以前より多くのバインドを出現させ触手を締め斬る

「くらえ、鋼の軛！てりゃあああ！」

例えるならそれは大きなカマイタチと言うべきだろう。横一閃に触手を斬り裂く。

二人の攻撃でほとんどの触手が消滅した
そして、本命だ
魔法と物理が混合したバリアを破るのだ。

「ちゃんと合わせろよ！高町なのは！」

「うん！ヴィータちゃんこそ！」

初めて名前を呼んでくれた♪

「いくぞアイゼン！黄金の鉄槌（ゴルディオンモード）！」

『よっしゃぁあああああああああ！！』

まず、ギガントフォームに変わるがそれは一瞬でさらに色が黄金に輝きだす。

そして、常時より遥かに巨大化したアイゼンを軽々振り下ろす

「ゴルディオン・パニッシャー―！」

『光にぃ・・・なぁれえええええええ！！！』

一つのバリアが光となって消え

「いくよ、レイジングハート！」

『Ａｌｌ　Ｒｉｇｈｔ』

「エクセリオン・・・ブレイカァ――――！」

パリン！

また一つ消える

「次、シグナムとテスタロッサちゃん！」

シャマルが叫び伝える

「今こそ見せよう。レヴァンティンのもう一つの姿・・・」

鞘をレヴァンティンの柄に触れさせカートリッジを一回ロードするとそれはそのまま一つになり弓となる

『ボーゲンフォルム！』

「駆けろ隼！」

『シュツルムファルケン！』

放たれた矢はバリアに直撃し爆発する

「フェイト・テスタロッサ！バルディッシュいきます！―はっ！」

たったの一振りが残っていた触手を斬り裂きバリアに少しのダメージを与える

「撃ち抜け！雷刃！」

『ジェットザンバー！』

振り下ろされた刃はバリアを破り防衛プログラムの身体を斬り裂く。しかし、すぐに再生し奇妙な怪物の頭が二頭が迫ってきた

「いくよ、アリシア！」

「そうだね、ユキナ！」

今度は二人の番だ

「ハルバード！ファイナルモード！」

『了解（ヤー）　ＦＩＮＡＬモード！』

するとハルバードは彼女の手から離れ巨大化し魔力を纏った形になる

「紅蓮！モード天（あまつ）！」

『おう！いくぜ！これが俺たちの天を突くドリルだ！』

紅蓮は一度彼女の腕に装着した形をとりすぐにドリルだけが巨大化した。

「グオおおおおお！！！」

二頭の頭が二人に迫る

「いくよ！」

今のハルバードはアリシアは手の動きで動いていた

「ファイナル・トマホークゥ・アリシアスペシャルー！」

ハルバードが一体の頭を真っ二つに斬り裂きそのまま胴体をも斬り裂いた

「食らえ！天元突破・ドリルクラッシャー！」

ユキナの紅蓮のドリルが頭ごと貫きそのまま加速を付けた状態で防衛プログラムの身体を貫く

「私に断てない物はない！」

「私たちに貫けない壁はない！」

最後に決め台詞をさらっという二人。

「はあああああああああああああ」

しかし、すぐに身体は再生し次々と取り込んだ生物の身体が現れる

「ダメージは通っている。このまま続行だ。いくぞ、デュランダル」

『ＯＫ　ボス』

「すべてを凍てつくす永遠の眠りを与えたまえ！」

『エターナル・コフィン』

海をも凍てつかせプログラムの身体を凍てつかせた最大の凍結魔法

バキバキ　バリン！
それでも再生能力は止まらない
でもこれが最後だ

「いくよ、フェイトちゃん、はやてちゃん！」
「「うん」」
『スターライトブレイカー』
「全力全開！スターライトォ・・・・」
小さな魔力たちが次々と集束されていく

「雷光一閃！プラズマザンバー！」
彼女の太刀に雷が集う
「響け終焉の笛！ラグナロクー！」

「「「ブレイカァー！！！！！」」」
３つの巨大な砲弾がプログラムに向けて放たれた。
この出力なら地球だって破壊できそうだ

「本体コア露出・・・捕、まえた！」

旅の鏡で闇の書の闇のコアを捕まえたシャマル

「長距離転送！座標遥か上空！」

『転送！』

アルフとシャマルによって本体コアが空へと転送された

―リニス、出番だよ！

アリシアが念話で彼女に伝えた

「ええ、わかってます・・・トレイン、エネルギーは？」

『３００％オーバー　これなら塵一つ残さず消滅できます』

大気圏ぎりぎりの所にいるリニスはこの時を待っていた。

『目標あと１０秒で転送されてきます！カウント　８・・・』

今リニスにはあちこちケーブルが接続されている。というよりいつものメイド服に鎧を装備していた。

そして、ある物を構えていた

それは・・・

「最終殲滅兵器　超電磁砲スタンバイ！」

『了解！』

そういうなればレールガンだ。

※エヴァのヤシマ作戦で使われた奴とメタルギアのレールガンを足しガンダムWのバスターライフルで割った感じの物です

リニスは今となっては様々な能力を得たが一番高いのは雷だ。つまり電気。

レイはそれを最大限引き出すために造ったのがこの超電磁砲である。

アリシアもいなかったのはこの充電のためだった。ジェネレータを使っても限界がありゆえに自らの電気とアリシアの電気が必要だった

『バレル展開。軌道修正完了！ターゲットスコープＯＮ』

彼女の顔につけれたスカウター―に表示される

『３・２・１！』

彼女より少し上に奇妙な形で現れたコア

「ファイヤ！」

カチ

トリガー―を引く

キュイーン・・・ドドドドドーン！
それは某荷電粒子砲並の威力だった。
「きえええええええええ！」
奇妙な声を出しながら消滅していくコア
『砲身が持ちません！』
「構いせん！全電力を奴にぶつけるのです！」
『了解。オーバードライブ！』
さらに威力が上がる。
そして・・・・・
ドーン！
コアが消えるのと砲身が壊れたのは同時だった
『冷却装置強制作動』
シュー
「エイミィ！？」
クロノが叫んだ

『待って・・闇の書・・・完全に消滅！再生の可能性０！』

『では、準警戒態勢に移行します』

「はぁーなんとか終わったね」

なのはが笑顔で皆にいう

「そうだね」

けど、大事なことを忘れている

「そうや、玲兄は・・・・」

「―彼なら多分まだそこだよ？」

「「「「！！！」」」」

突然あられ割れたのはマルスだった。最後の最後まで傍観していたのだ

「あなたは・・・あの時の！？」

シャマルは見覚えがある。

彼ははやてに近づき始めた

「僕としてはこの展開は予想外だったんだけど・・・まぁ余計な機能がなくなっただけましかな。じゃあ、夜天の主。君には壊れてもらうよ」

すると右手をあげ手のひらが奇妙な口を開いた

「ひっ！」

「主！」

ドン！

刹那、一筋の光がはやてを守った

「・・・てめぇ・・・」

『レイ（さん）（くん）（兄さん）！』

そうはやてを守ったのはレイだった

レイｓｉｄｅ

「はぁはぁ」

刹那彼女を守るために現れたレイ。しかし、彼の身体はボロボロのように思えた

痛い。

外面的ではなく身体の中が痛い。千切れるようなこの感じ。燃え狂うようなこの苦しさ

内部でできるだけ闇の書を押さえていたレイには彼女達の攻撃を受けた波動が彼にも伝わっていたのだ。体の傷はすぐ治った。しかし、内臓器官などの損傷が激しい。これはすぐには治らなかった。これが自己再生のいい点んであり悪い点でもある。軽い傷はすぐに治る。しかし、重い傷はすぐには治らない。腕をなくした場合再生には早くて３０分はかかる。この身体そんなに便利なものではなかった

「驚いたな・・・まだ、戦える状態じゃないと思ったのに・・」

「レイくん！」

「なのは、それにお前ら・・・こっから早く離脱しろ」

「えっ」

「こっから先はお前たちにみてほしくない」

「で、でも・・」

「いいからいくよ！」

そう彼の援護をしたのはアリシアだった

「アリシア、でも！？」

「大丈夫だから。絶対大丈夫。そうだよね？」

「ああ」

振り向かずただマルスの方をむくレイ。

「じゃあ、必ず戻ってきてね！？」

「そんなの当たり前だろ・・・」

「玲兄！」

「はやて、お前もだ。ちゃんと後で話してやるから・・」

「うん・・・」

「エイミィ、転送を」

『了解！』

そして、彼女たちはアースラに向けて転送された。

「本当にいいのかい？けど、僕としては闇の書を逃すわけにはいかないんだよね。あのおじいさんに怒られちゃうから？」

「導師のことか？」

「そうだよ。僕はいま夜明け団にいるのさ！」

彼は笑顔でいってきた

「一つだけ。聞く。お前は神を喰ったのか？それとも取り込んだのか？」

彼の表情が変わった。

「そうだね。両方正しくもあり間違いでもある」

「？」

「僕は神そのものになったんだよ」

何を言い出すかと思えばそんなことか

「人は神には慣れない」

「現に僕は神だ」

「そう思い込んでいるだけだ。人はどこまでいっても人でしかない。人の形をした化け物になるかそれとも別の生き方をするかだ。人は絶対神なんかには慣れない」

「僕はマルスー戦いの神マルスだ！」

逆切れとも受け取れた彼の反応

恐らく彼は怒っているだろう

「いい加減自覚しろ。お前は・・・人間だ」

レイｓｉｄｅＥｎｄ

第３３話　終わらない夜（後書き）

そして、戦いは続く

今回いろいろと突っ込みどころ満載？でもあるようなないような

色々書きたいんですが重労働でこれ以上は無理です

早ければ明日には更新します。

では・・・ばた・・・

第３４話　愛の代行者ＶＳ神と言う名の人間　（前書き）

明日とか言っておきながら今日更新できた

さて、レイとマルスの戦いです。

それとご報告。
この作品なぜかクロスオーバーの予感。いやね、できるだけ人物名だけは極力控えてたんだだけど・・・

まぁいっか！

第３４話　愛の代行者ＶＳ神と言う名の人間

「いい加減自覚しろ。お前は・・・人間だ」

対峙するレイとマルス

「じゃあ、君はなんだ？」

「俺か？俺は・・・・・」

俺は・・・なんだ？

そして、歴史上初めて代行者同士（一人は神とか言ってるがここはこう標記させてもらいます）の戦いが始まった

ドン　ドン　ドン

二つの閃光がぶつかり合う

それは目で追えない早さで終えたとしても通った後の光でしか確認できない

「喰らえ、グラトニー」

彼の手のひらに開いた

「きぃいいいいいいい」

「ぐう・・！」

何かがすれる音か、それともなにか雑音の音が響きわたる

―これは精気を・・・吸い取ってるのか？

意識が遠のいて行く

その中でＺＥＲＯをケルベロスモードに移行し

「―ケルベロスバースト！」

二丁の無限銃が上下に展開し大きな魔力弾を放つ

一発はそのままマルスに。もう一発は拡散型だった

「ふん！」

マルスは軽々と避けるが一つ一つがこの超高機動の中精密な射撃をやってのけるレイの技量が伺えた。

そのため一発一発をぎりぎりの所で避けていた。

「さすがだね。なら、これはもうやめにしよう」

「？」

すると変な雑音は消えた

そして、ゆっくりと減速し一旦止まった

「じゃあ、僕もそれなりの対応しないとね」

「なんのことだ？」

「僕はね。戦いが好きなんだよ。弱い奴は精気を喰って苦しみの死を与えるんだ。けど、僕に相応しい相手となったら本当の戦いをするんだよ。今さっきのは君を試したんだ。僕は戦いの代行者いや、だったけど君は愛の代行者だったからね。噂で神たちと戦ったって言うけどその相手がゼウスだったんだって？けど、それで生きている君はありえないからね」

ゼウスは一応神たちの中で最強の神として君臨していた。それをあいつは信じたのだろう。

―意外と常識に囚われている奴だな

「だから、僕も君に相応しい姿で相手をしよう」

「・・・」

すると彼の身体光を放ち始めた。

光ってるだけであまり変わっていないが目が純潔な赤となっている

「神化（しんか）・・・・」

「そう呼ぶらしいね」

それは代行者のみ行える技。いうなれば神とのユニゾンである。神とは人の形をしているが人ではない存在。そのためユニゾンが可能

だ。しかし、代行者でも所詮は人である。神とのユニゾンはそんなに長くは持たない。

しかし、それを超越した者がたどり着くという神化。
それは神と真の一体化。
神と同等の力を引き出す。

だが、目の前のはイレギュラーである。現に取り込んだのか喰ったのか。それがはっきりしないが確かに奴は神となったのだろう。
だが、レイにとっては人でしかなかった

「ＺＥＲＯ。今の状況を」

『あまりにも内蔵器官の損傷が激しいです。あのＳ級の技を食らい続けて、再生をしたとは言えここまで動いてる時点でかなり危険です。忘れたのですか？あなたは不死身であり不死身ではないのですよ？』

不死身であり不死身ではない。
それがこの身体の悩みでもある

「一何よそ見してるんだい？」

「！」

ドン・・・ボン！

いきなり背後に現れ海へと叩き落とされた。

「ほら、これは避けれるかな」

神気で造りだしたエネルギー弾を放つマルス

ボン！　ボン！　ボン！

放つたびに海が荒れる
そして、しばらくして

「ふー。生きてるかな？」

よく見てみるとそこにはまだ海の上で立っている彼の姿があった

「そうこなくちゃ」

「はぁはぁはっぁ・・・！」

熱い　身体が熱い

視界も霞んできた

「はぁはぁ・・・やるしかない、か」

―フィリーヤ！

―なに？

―リミッター―を9から4まで解放しろ！

―ちょ、ちょっといきなり5も！？危険よ！あなたの今の身体では

堪えられない

―頼む・・・・

―・・・わかった。

キイン　キイン

すると鍵が外れる音のように彼の身体から5つの円が半分に割れるような感じでリミッター―が外れた

「はー・・・・・」

普段のリミッター―を10としよう。それは最低限の魔力とＺＥＲＯの解放。そして、宝物庫の使用

そして、一気に4まで解放したことによりかなりの制限がなくなった魔力は大幅に解放された。そして、ＺＥＲＯのモードに融合装着型の機能が解放されさらに宝物庫の使用もかなり増える

「我が友から得たこの力・・・破れるか?ＺＥＲＯ、融合装着『最強の拳』と『最速の脚』を」

『了解』

そして、彼の両腕、両足に装着されたそれ。腕は黄色と赤の二色を目立つ。脚は薄い紫と濃いピンクだ。そして、胸、というか首のすぐ下にはＺＥＲＯが収まるぐらにアクセサリーが。

※スクライドのカズマとクーガのアルター―をイメージしてください

「そうそう。夜明け団のジェイドから聞いたよ。君は魔術師のくせに滅多に魔法を使わないって。その代わり奇妙な物を使うって」

ジェイド？知らないな

「貴様が神ならばこの二つを簡単に凌駕しているはずだ。この拳は間違いなく最強。この脚は誰より速い。貴様にそれが越えられるか？」

「へー。最強とか最速とか簡単にいうけどそんなに凄いものなのかい？」

恐らく神化している彼にとってはすべてのものが無力と思っているのだろう

「なら、見せて―」

「―！」

音もなく彼は消えた。

「・・・やろう」

後ろ振り向くマルス。
そこには彼がいた

そんな馬鹿な！？

「どうした？もしかして視えなかったか？」

彼は余裕の表情だ

「ありえない。そんなはずは・・・」

神化しているマルスは常人の数倍の能力が上がっている。
そんな彼でも視えなかったのだ。

「じゃあ、次はこれだ」

機械仕掛けの腕となった右腕が殴りかかってきた

「そんなもの・・・・」

彼は片手でそれを受け止めた。いや、受け止めてはいなかった

ドン！　バン！

するとマルスは海へと落ちていた

「・・・こんなものか」

「ありえないありえないありえない・・・・！」

彼は錯乱していた。今までの状況がありえない。そう思い始めたのだ

「現実を認めろ。お前は・・神などではない。神ならば俺の動きを
追えるしこんな力も入れていないパンチで吹き飛ばされなかったぞ
？」

「・・・じゃあ、あの噂は本当だったのか！？」

「噂？ああ、俺がゼウスと殺りあったことのことか？お前本当に知らないんだな。というかそれは大分前の話だ。いかんな。長生きしてると時間の感覚ってのがずれてくる」

彼は何を言っているんだ？
ゼウスと殺りあった？大分前の話？長生き？

「そうそう、一つ聞きたかったんだが・・お前いつ代行者になった？」

「いつって、君は何をいってるんだい？」

「いいから答えろ」

「・・・・５年前だ」

現在僕の歳は２４歳。１９歳のころに代行者として召喚された

「なんだ、最近なのか」

最近？どういうことだ？

今現在神に選ばれた人間、つまり代行者は１０人いるかいないか。
時がたつごとにそれは変わり新たな代行者が選抜される

「そういう君はどうなんだ？視る限り僕より少し上だろうけど・・・」

「お前、アレスから何も聞いていないのか？いや、他の奴らも知らないのか・・・」

「だから、何のことだ！」

いちいちムカつく言い方をしてくる奴だ

「代行者にはそれぞれの神が選らんだ人間が選抜される。同じ神なら何代目とかって奴さ。多分お前も何代目かの戦いの代行者さ」

「じゃあ、君は何なんだ！？」

「俺か？俺は今も昔も愛の代行者だ」

今も昔も？

さっきから意味のわからないことばかり・・・

「まだわからないのか？俺はずっと愛の代行者だ。ちなみに最初に選ばれた人間でもある」

最初？確か聞いた話では最初に選ばれた人間は何世紀も前のはず・・・

「じゃあ・・・！」

「やっと気付いたのか？俺は不老不死なんだよ」

不老不死。それは誰もが求める願望。

それが目の前の彼は不老不死？馬鹿げている

「まぁ信じられないよな。けど、本当のことだ」

「証拠は!?君が不老不死という証拠は!?」

「証拠って言われてもな・・・・頭を撃っても死ななかったりとかやったらいいのか?悪いな。俺も痛いからそれしたくない」

「・・・もういい」

「?」

いきなり静かになった

「ここで、君を殺してそれを証明すればいいだけだ!」

彼の手には剣が握られていた

一瞬に彼との間合いを詰め剣を振り下ろす

キィン!

彼はその腕で止めた

「ほう、それはアレスが使っていた剣か」

なんで知っているんだ?

確かに何もないただの剣だがそれは戦いの神アレスが使っていた剣だ。

一振りで相手を斬り裂き二人振りで大地を裂くみたいなそんな代物だ

切れ味だって相当の物だ
なのに彼はいとも簡単にそれを受け止めている

「だから、所詮お前は人間だと言っている！」

バキィン！

空いていた左手で刃を掴みに握り壊した

「そんな・・・・・」

神になったのに・・もう人ではないのになんで僕は負けるんだ！？

こんな代行者で所詮は人間なのに！

「俺もあまり時間がない。一発で決める。輝け我が黄金の拳・・・・」

構えるレイ。そして、彼の右腕が輝く。その輝きは闇を照らす光のようだ

「技を借りるぞ。―殲滅の・・・」

それはかつて戦った友をまねて自分で造りだした技
そういえばパクるんじゃねぇ！とか言われたっけ

「は―」

マルスは放心状態だった。避けることなくその攻撃を受けた
輝く拳から発せられる光は空を裂いた。ただの光が暗い暗雲を裂い

たのだ。

眩しい

マルスは思った

「ジェノサイド・ブリットォ―！」

背中の羽が大きく展開し急速な加速をしながらエネルギーを纏った拳でマルス殴りを海へと叩きつけた

ドーン！

「―――――――！」

マルスには声を発せられる合間さえなかった

プシュー・・・・

右腕の肩が展開し冷却装置が発動し煙が噴き出た

手ごたえはあった。だが・・・・

メキ

腕を見れば拳が凍りついていた

「・・・・」

マルスを殴った下へと視線を向けるレイ

あまりの威力で底が見えていた
そして、そこには二つの人影があった。
「・・・・あれ、生きてる」
死んだと思ったら生きていた。
彼が手加減するはずもないしすると少し肌寒く感じた
「まったく、あと少し遅れていたら死んでいたぞ？」
「・・・ジェイド？」
そこには夜明け団の幹部のジェイドがいた
彼は刹那レイの腕を凍てつかせ衝撃を和らげたのだ
「・・・ぐっ・・・痛いや」
例え衝撃を和らげたとしてもあの攻撃は相当なものだ
「ここは一旦引くぞ」
「でも・・・」
「奴の力の一端がみれただけで十分だ。それに今お前を失う訳にはいかない」

「うっ・・・」

彼の腕を肩に預けそのまま上昇するジェイド
そのまま彼と同じぐらい高さまでくると

「初めましてになるかな?俺の名はジェイド。夜明け団幹部の一人。
氷結のジェイド」

「・・・これも貴様の仕業か」

拳に凍てついた氷を溶かす

「悪いが今回は引かせてもらう」

「・・・・・」

だが、彼はそれを止めようとはしなかった。
彼にも限界が来ていた

「では、さらばだ」

そして、転移した二人

残ったのはレイだ

『武装解除』

そして、腕と脚に装備されたアーマーが解除されていく

『強制封印』

すると彼の身体に離れた円がくっついた
解放したリミッターを再び封じたのだ

「・・・・ぐほぉ！」

口から噴き出た血。
内蔵器官のどれかがいかれたようだ

『いけない。早く休ませないと・・・・』

「・・・・」

再生が追いつかない。やはり外面的は再生はすぐだが内部ダメージはすぐには治らないか・・・

「・・・・――――」

『マスター！』

今のＺＥＲＯには彼の身体を支えるだけの力はなかった。ＺＥＲＯも彼と同じく酷いダメージを追いさらに先ほどの戦いで急激なエネルギー消費をしてしまったからだ。

そして、彼はまだ、冷たい海へと落ちて行く

アースラｓｉｄｅ

レイの言うとおりアースラに戻ったなのはたち。
なのはは心配で艦橋で映像をみていた。
結界の中は観ることができずただ結界を観てることしかできたなかった

「レイくん・・・・」

なのはは心配だった。

アレは、あの時のレイくん、とてもつらそうだった。

それに見せたくないってなにをだろ?

そんなことを考えていた

『結界周辺に変化あり!』

局員の人の声が聞こえ再度モニターをみるなのは

結界が壊れその中心にいる彼

よかった。無事だ

ほっと安心するもつかの間彼は下へと落ちて行く

「―レイくん!」

なのははそれをみた途端すぐ転移装置で彼の下へ向かった。

「なのはさん！」

リンディが叫ぶがなのははもう転移した。

直後だ

「アレは・・・？」

一筋の光がレイに向かっていく

なのはさんにしたは早すぎる。一体なんのなの？

アースラｓｉｄｅＥｎｄ

レイｓｉｄｅ

レイはただ落ちていた。

それに彼の意識はなかった。いや、あったとしても彼には何もできなかった。

闇の書体内での彼女たち攻撃を受け続けさらに先の戦闘。さすがの彼も限界だった。

彼の自己再生が追いつかないのは理由がある。それは外部ダメージ。つまり傷跡などはすぐに消えるが内部に通ったダメージには再生に時間がかかる。それがこの自己再生機能の不便なところだ。全回復とはいかないのだ。しかし、彼に死はない。不老不死だからだ。ただ、意識がなくなるだけでまた目覚める。それだけだ。

それなのにＺＥＲＯが心配するのにはわけがある。それは彼の意志

が弱まることだった。
彼の意志が弱まればそれを期に奴らが彼を虫食むかもしれないからだ

『マスターマスター―！』

だから、彼女はただ叫ぶしかないのだ。今の自分もレイと同じ状況だがそれでも自分の今の機能をそちらに回して最悪の事態に備えていた

「―大丈夫よ」

『！？―あなたは』

すると落ちてゆく彼を優しく受け止めたのは愛の女神アフロディーテ　自称フィリーヤだった。

『しかし、どうしてあなたが・・・』

「今そんなことよりレイよ。いくら死なないからって今回は無茶しすぎ。身体が悲鳴をあげてる。・・・・彼に母なる加護を・・・」

するとレイの身体は優しい光に包まれた。彼女に抱かれながら

「・・う・・・お前、どうして・・」

彼の意識が戻ったようだ

「心配しないで。ちゃんと許可はとってあるから。だから、今はゆっくり休んで」

「すまない・・・」

実のところを言えば心配で心配で少し投げやりな感じでこちらにきてしまったのだがそれは気にしない。

―それにしても私も心配しすぎたわ。マルスがかなりの脅威だと思ったけどまさかこうも簡単に倒すとはね。

それはフィリーヤにとっても意外な展開だったのだ。神に近くなった人間に勝てると思ってもなかったのだ。

―けど、あなたが強すぎたのよね。だって、私たち神と“同等”に渉りあえたんだもんね

再度彼の強さを認識したフィリーヤだった

すると誰かが転移してきた

「―レイくん!ってあなた一体誰ですか?」

現れたのはなのはだった。

なに?この女。レイくんを抱いてる。私だって抱かれたことないのに逆に抱いてるなんて!

ちょっとみるところが違うなのはだった

「私はその・・・彼の古い知人よ。ちょっと“たまたま”通りかかったから助けたのよ」

「そうですか・・・それはそれはありがとうございます・・・」

なのはの声は低かった

「それより、彼を休ませたいんだけど?どこか案内してくれる?」

「ええ、では付いて来てください」

その後なのはに連れられフィリーヤはアースラへと案内された

レイｓｉｄｅＥｎｄ

こうして、少し予定外のことが起きたが闇の書事件はとりあえず解決した。

しかし、まだ終りではない

まだ、本当に終わったわけではない

主を救うため彼女は自らの旅に終止符を打つため決意する

自分の死を持ってこの長い旅に終止符を打つために・・・・

第３４話　愛の代行者ＶＳ神と言う名の人間　（後書き）

はい、もろスクライド！

レイは普通に別次元超えちゃうからクロスーバーもありなのさ！（壊れかけていた）

さて、気を取り直して・・・

殺すか殺さないかで迷ったんですけどマルスは生かすことにしました。
自分でもこれからの扱いがたいへんそうですＷ

そして、次回はリインフォースが消える話ですが！

自分はリインフォースを消させるつもりはないぜ！

ちょっとご都合主義な展開な予感ですが許してください！

では次回で！

第３５話　もう一つの夜天の書（前書き）

一応Ａ's編の最終回となります。次回がエピローグです。

それと最近気付いたんだけどリンフォースじゃなくてリインフォースなんだってことに・・・

第３５話　もう一つの夜天の書

リインフォースｓｉｄｅ

アースラのとある一室。その部屋のベッドにはやては寝ていた。それを見守るように立っている騎士たちそこにはリインフォースの姿もある

「やはり、破損は致命的な部分まで至っている。防衛プログラムは消えたが歪められた基礎構造はそのままだ」

まだ、終わってはいないことを静かに告げるリインフォース

「私は、夜天の魔道書本体が少なからず新たな防衛プログラムを生成しまた暴走を始めるだろう」

「やはりか」

シグナムは予想していたように言った

「修復はできないの？」

「無理だ。管制プログラムである私の中の夜天の書が消されている」

簡単に言えば元の姿がわからないから戻しようがないということだった。

「はやては大丈夫なの？」

ユキナが聞く。それが一番の問題だ

「心配ない。私からの侵食も完全に止まっている。リンカーコアも正常に稼働している不自由な足も時がたてばいずれ治る」

「そう、それならまぁよしとしましょうか」

「ああ、心残りはない」

騎士たちにとって最大の願いが主の幸せだ

「防衛プログラムがない今、夜天の書の破壊は簡単だ。もう、暴走することはない。そのかわり私たちも消滅するけどな」

ヴィータは悲しそうに言った。

やっと掴んだ幸せがまた消えたしまう。

「いいや、その必要はない。逝くのは私だけだ」

夜天の書が再びプログラムを再生する。

今度ははやてを侵食するかもしれない。

そのために彼女は逝くと決意した

リインフォースｓｉｄｅＥｎｄ

フィリーヤｓｉｄｅ

彼は医務室で寝ていた。
そんな彼をフィリーヤは看病していた
「まったく無茶するんだから」
今回は久しぶりに無茶をした。
今までもそういうことがあったが今回は特に無茶をしたように思える
大切な人を見守っていたのは彼女だけではない。
向かい側になのは、フェイト、アリシアがいる
なのはとフェイトは彼女のことを知らないがアリシアは何回か彼女にあったことがあるので面識はあった。しかし、彼女も今の状況はなっとくがいかないらしい
―なんだろうね。こう胸の奥からわき出すこのもやもやは・・・
―私もだよ、なのは。兄さんは確かに鈍感だから気づいていないけど今回の相手はもの凄く敵意を感じる
それは女としての嫉妬だった
さすがのアリシアも素性を知っていてもその感情を止めることはできなかった。
―あの、フィリーヤさん?私のレイにそんな目で見つめないでください
―あら～なんことかしら?大切な人をみているのがそんなにいけないことかしら

「「「・・・・・・」」」

「・・・・・」

対峙する女たち

そんな状況の中レイはただ眠っているだけだった

フィリーヤｓｉｄｅＥｎｄ

そして、彼女が逝く時がきた

彼女はなのはとフェイトに自分を逝かせてもらうことを頼んだ。
彼女からすべてを聞いた二人は少し戸惑った。けど、それが彼女の意志だとわかったから協力することを決めた

「さぁ始めよう・・・夜天の書の最後・・・」

「リインフォース！駄目や、そんなことさせへん！」

「はやて・・・」

ヴィータが彼女の所にいこうとするがユキナがそれを止めた。

「破壊なんてそんでええ！私がさせへん！だから、こんなことせんでええ！」

必死に説得するはやて。だが、彼女の意志は揺るがない

「主はやて、よいのです。長い時のなか最後の最後で私はあなたと会えたよかったと思っています。あなたに素敵な名前と心をいただきました。けど、心配しないでください。騎士たちはあなたの傍にいます」

「駄目や！リインフォースもいなきゃ駄目や！」

「心配しないでください」

「心配とかそんなんちゃう！マスターは私や！ちゃんと話を聞いて！今は無理かもせんけどでも絶対なんとかする。だから・・・」

ううん

と首を振るリインフォース

「もう、いいのですよ。主の危険を払い、主を守るのが魔道の器の務め。だから、あなたを守るための優れたやり方を選ばせてください」

「でも・・やっと救われたやないか！」

「はい。私はあなたに救ってもらいました。だから、今度が私があなたを救う番なのです」

「そんなの・・そんなの・・・」

彼女のために涙を流すはやて

「私は世界で一番幸せな魔道書です。それはあなたのおかげです」

「リインフォース・・・」

「だから、お願いがあります」

「・・・え？」

「私は消えます。だから、次のあなたの新たな魔道の器に名前を・・・祝福の風リインフォースという名を付けてあげてください」

「・・・リインフォース・・・」

「はい、我が主」

そして、リインフォースは再び儀式を開始した

私は本当に幸せだ。
最後にこんな形で逝くことがむしろ嬉しい
だから

「ありがとう、主はやて。守護騎士たち。そして小さな勇者たち・・・本当にありがとう。そしてさよう『創始者権限においてその行動を拒否する！』・・・え？」

「「「「・・・・？」」」」

消えようとしていた彼女の身体が消える前の状態で保たれていた。
そして、魔法陣も消えていた

「あなた・・・一体なにを・・・」

リインフォースの先にはあるのは雪がふるこの丘の上歩いてくる男が一人

「はぁ・・・はぁ」

レイだ。
彼は足を引きずるように歩きながら彼女の下へゆっくりとそして急いで歩いていた。

「お前が・・逝く必要はない・・」

「しかし、こうしなければ・・・」

「もう、いいんだ。お前は生きてもいいんだ」

「だけど、どうやって・・・」

「はぁ・・・はぁ・・うっ」

バタ!

蹲きその場に倒れたレイ

「レイくん!」

「兄さん！」

なのはとフェイトが彼を起こした

「・・・はぁ・・はぁ・・。それは・・これだ」

彼がとりだしたのは夜天の書だ

「「「「「！」」」」」

何故彼がそれを持っているのか。現に夜天の書は彼女が持っている。

「これは・・・もう一つの夜天の書。これがお前を救ってくれる」

状況はまだ困惑している。全員。もちろんリンフォース自身も

それから場所を八神家と移した

このことについてアースラとも中継が繋がっていた。

彼はソファーに座りその傷ついた身体を休ませた

「さぁ教えてくれ。それはなんだ」

リインフォースが聞く。

一番聞きたいの彼女だろう

「だから、言ったろ。もう一つの夜天の書だって」

「もうひとつってなんだよ。夜天の書は一つじゃないのかよ！」

怒鳴るか聞くかどちらにしてほしいよヴィータ

「いいか？ロスロギアには二種類ある。自然に生まれたものと人工的に造られたもの。夜天の書はその後者だ。だから、人が造りだしたものになるわけだ。このもう一つの夜天の書はいうなれば外書みたいなものだ。本家の６６６頁の追加項目３４４頁が刻まれている。お前たちが知らないのは無理もない。これは本家が造られた後に造られたからだ」

「だが、不審な点が一つ。なんでお前がそれを知っていてそれを持っている？」

そうそれが最大の謎だ

夜天の書がかなり前ベルカ時代から存在が確認されたものだなんでそれを彼が知っているのか？

「夜天の書を造った一人が俺だからだ」

「「「「！！！！」」」」

「ありえない」

「そう思うよな。普通は。だがお前たちならわかるだろう？なんで本の起動と同時に俺が毎回現れたのか」

「そうか・・」

気付いたのはシャマルだ

「造りだしたならその後の成果を確かめなければならない。だから・・・」

「そう、だから毎回お前たちの前に現れては記録していた。だが、途中闇の書なんかに変わっちまったが・・・。さて、話を戻そう。造りだしたものたちを創始者と呼びその創始者たちは後に本家に組み込めなかったことやもしのときのことを想定してこれを造った」

「もしものときって・・・」

「そう、なんらかによる故障かまたは暴走。本当はもっと前からこれを実行したかった。けど、造ってから直後本は行方不明だ。これはロストロギアには指定されなかった。使う者が使わなければただの本だからだ。そして、俺はこれを探し続けやっとみつけることができた」

「だいたいのことはわかった。けど、用はなんなん?どういうことになるん?」

はやてが聞いたのはもっともこれから大事なことである

「そうだな。簡単に言えば今の状況を一変することが起きる」

「それってリインフォースが消えなくてもいいってことなん!?」

彼は笑顔で答えた

「ああ、そうだ」

「―！リインフォース！」

「・・本当なのか？」

「ああ、だが、条件がある」

「それは？」

「今現在発動している条件。それは防衛プログラムがなんらかの原因で暴走または削除された場合、夜天の書の再生機能が防衛プログラムを再生し再び暴走するというケースがあった場合それを消滅」

「それって凄いじゃん！」

「ああ、だがそのために、代償に管制人格である第６の騎士をこの外書に移さなければならいということ」

「それって結局夜天の書自体は消えてしまうってことやろ！」

「そうだが！・・先ほど行ったことそれはお前の欠片を残す。そうすれば夜天の書自体は消えない」

「だけど、そのもう一つの夜天の書を使えば・・・」

「そうだよ！なんで・・・」

彼の顔が険しいものに変わった。

「こいつのすべての発動条件に夜天の書の主は使用できない。使用

できるのは創始者。つまり俺だけだ」

それが俺を含めた創始者たちの意見の一致だった。ただでへ強力な魔道書をもう一つ持たせるわけにはいかない。だから、その一番の危険性を知っている我々がそれを使用する。

傲慢かもしれない。けど、誰も知らない奴が使用するよりはましだった

「いいか、落ち着けよ?結果的なことで言うがリインフォースは生きる。だが、リインフォースは夜天の書は消えなければならない。だから、その欠片をお前に託す。リインフォースと夜天の書のかけらを。そして、新たなお前はこの外書でいきる。新しい自分として。でも、

記憶が消えるとかそういうことはないから心配するな。で、どうする?」

はやてとリインフォースは顔を見合わせる

「リインフォースが助かるならそれで私はかまへん」

「主・・・」

「答えは出たようだな。・・よっと・・・」

彼は立ち上がりベルカの魔法陣が展開した

「では、始めよう。ここに夜天の書管制プログラムの移動を開始する」

すると彼の持つ外書が光る

「リインフォース、やってくれ」

「ああ」

リインフォースの身体消えかけ始めた。
そして、その光は彼の持つ外書に移動しはやてのてには彼女の欠片が置かれた

「リインフォース・・・」

ぎゅっと握りしめ祈るように願った

「プログラムの移動を確認。これにより第６の騎士はこの外書の管制プログラムとして起動。そして、人工生命プログラム発動。他の騎士たちにも命を。これにより騎士プログラム削除」

「「「「それって・・・」」」」

その言葉が意味するもの。それはプログラムではなく一つの命として活動するということだ

「そして防衛プログラム更新―完了そして削除。再生機能にプログラムの再生項目から削除―完了・・・夜天の書・本書の消滅を確認。データを移行―完了。これにより１０００頁の保管完了。そして、プログラムの一部封印。管制プログラムの機能とそして力の行使を許可。その他のプログラムはすべて封印。別命がある時以外使用は凍結。以上だ」

『了解。マスターの名前を入力せよ』

その声はリンフォースとは違う機械の声だ

「レイル・アンヴァルト・Y・神乃」

『・・・創始者の一人として存在を確認。あなたをこの外書のマスターであることをここに承認します』

そして、開いていた本は閉じた

「・・・終わったん？」

「ああ。なぁはやて。一つその頼みというかお願いなんだが」

「なんや？」

「リインフォースという名前は次の子に託された。なら、彼女の名を俺がつけてもいいか？」

はやては一瞬悩んだ。けど、答えはすぐ出た

「ええよ。少し複雑やけどその子（外書）のマスターは玲兄や」

「そうか、ありがとう。では、彼女に新たな名を。その名は・・・銀（イン）」

本が光り彼らの前に再び姿を現すリインフォース、いや銀

「・・・リインフォース・・ううん、銀」

「主・・」

「主は私やないで？銀」

「そう、でしたね。ただいま。はやて」

「うん、おかえり♪」

感動再会というのも変だが彼女達を暖かく祝福していた。

それはレイも同じだった

「・・・・っ」

すると突然彼は倒れそうになった。

それを銀が受け止めた

「すまない・・・」

「いえ。けど、礼をいわせてもらいます。ありがとうレイ。私の新しい主」

「初めて呼んでくれたよな」

「えっ？」

「俺の名前。初めてあったとき教えたけど今まで一度も呼んでくれなかったからな」

「そう、でしかたか？」

「そうだよ」

こっちはお前の名前を呼びたくても呼べなかったからな。
逆に知っているのに呼んでくれなかったのは少し残念だった

「ふふ。ではこれから毎日呼んであげましょうか？―レイ」

キュピーン！

その時なのはたちはいつかと同じように何かを悟った

特に一番の異変に気付いたのははやてだ。
はやてもそれなりに玲のことを好いている。それは自分に優しくしてくれた兄のような存在として。もちろん一人の男性としても好意を抱いた

―もしかして、銀・・・あんた・・・

―なんのことでしょうか？（笑）

―なにが（笑）や！あんたもまさかその・・玲兄のこと・・・

―さぁ、どうでしょう？

少しの間に性格がちょっと変わった銀だった。

『あの～一つ聞きたいんですど～』

挙手をしているのはエイミィだった

「なんだ？」

『その前々から聞こうと思ってたんですけど・・・総帥ってなんで生きてるんですか？』

あの馬鹿！

とうとう聞きやがった

いや誰かいうと思ったがよりによってこの状況かよ！

ていうかそんぐらいニュースでもやってただろう！

新聞よめ！

ググレカス！

しばらくお待ちください・・・・・

『はい、わかりましたぁ。ごめんさないぃ・・・』

「わかればよし」

えーエイミィ氏はクロノ執務官を含め何者かに常識というなの知識を叩きこまれました

簡単に言えばそういう呪いにかかっちゃた！　てへ♪

で世の中は納得している。

しかし、本当のところは彼の活躍が民衆を納得させていた。
現にそういう事件が起きたのだ。

なんで生きているのかと

だが、彼は平然とそういう風に答えた

それでは民衆は納得しない

だが、事件を解決し民衆を守る彼の姿をみて誰も彼を批判しようと思わなくなったそうだ。それでも反抗派とかそういう人間は否定している。
つまり、管理局が統治している世界の人たちは皆彼を『英雄』として信仰していた。
他にもファッション雑誌やら色々なメディアでも報道される程のスターでもあったのでした。

「とここまで彼の嫁（自称）フィリーヤちゃんでした♪」

白衣をきた愛の女神さまでした・・・

「・・・（なにこれ）」

レイは意味がわからず錯乱していた。

「さて、今日は帰ろうか。俺もまだ治療中の身だしな」

「そうですね」

それから帰る場所へ帰る者たち

帰るときなのははレイに聞いた

「今日はどうするの？」

「とりあえず今日はアースラで過ごすよ。さっきも言った通り身体を治さなきゃいけないからな」

「そう、だよね・・・」

そうだよ。無理して引き止めちゃレイくんに悪いもんね

「じゃあその・・・」

「大丈夫だ。明日にはもう治ってると思うから」

「そう、なんだ」

―それにアリサとすずかのこともあるだろう？

―うん。

―俺も一緒にいくから

―本当！？

―ああ。俺にも責任がある

―うん・・・

念話で今後に控えている大事な問題
ちゃんとけじめをつけなきゃいけない

「じゃあまた明日」

「うん。また明日」

「銀はどうするん？」

「私も彼といきます。色々と整理したいこともあるので」

「そやね。とりあえず今日はゆっくりやすもうか」

「ああ、それとはやては一度病院に戻れよ？」

「「「「「あっ！！！！！」」」」」

そのレイの一言でまた騒がしくなった。

急いで病院に戻ったはやてを担当の先生がシグナムたちを叱ったそうだ

そんなごく日常に戻った今をはやては幸せだと思った

こうして事件は幕を閉じた。

その後のことは・・・そうだな

とりあえず今は休もう

それからのことは次回ゆっくり話すことにしよう

それじゃあまた次回で・・・

第３５話　もう一つの夜天の書（後書き）

如何でしたか！？
リインフォースをどう存続させるか前々から悩みそしてこいつを作ったんですが・・・。

自分でもちゃんと設定していたんですがどうだったでしょうか？
少し複雑な部分もあったと思うのですが自分的には大丈夫だったと思っています。

リインを次の子まぁツヴァイなんでかってに名前を付けました。
銀（イン）とつけたのにはまぁ理由があります。名前もなやんだんです。けど、これが一番しっくりくると思いました。
銀は某水銀党からインはＤＴＢからとりました。けど、銀は似てるんだよね。何かが（自分の中ではですが・・・

これについて皆様のご感想をいただけると嬉しいです。

では、今回はこの辺でまた次回でお会いしましょう

第３６話　家族になりました（前書き）

えー前話での誤字修正いたしました。
それと感想で騎士たちはプログラムなのにプログラムが本当の命をという指摘があったのでここで説明させてもらいます。文は感想からの転用です。すみません

一応人工生命プログラムという単語が出ていたと思います。

本来騎士プログラムは主の魔力でリンカ―コアを生成し活動をします。傷を負っても主の魔力でそれを修復というものだったと思いますそれを人工生命プログラムにより主からの魔力供給を必要とせず一つのリンカ―コア言い方を変えれば命として活動するというものだったんです。
だから、主からの魔力を使わず自らのリンカ―コアで存在を維持することが可能になったわけです。

本編も一部修正しましたが彼女たちは結局はプログラムであり老けることはないんです。しかし、傷を負えば自らの魔力で傷を癒す。最終的にバックアップがないわけですから魔力が切れれば死を迎えることになります。

というわけですのでよろしくお願いします

第３６話　家族になりました

本局ｓｉｄｅ

管理局　本局　総帥の間

いつぶりに座った総帥の椅子に座るレイ。
今回の事件報告を提出にきたリンディ。

「で、グレアム提督はどうなるんですか？」

「第三者による洗脳により闇の書の暴走を手引きした。ということになる」

「しかし、本人が真実を告発するかもしれませんよ」

「真実とは時に語らなくてもいいものもある。グレアムのしたことは正しい。だが、小さな命を奪うことは許されない。今回の事件はあいつなりにやろうとしたことだ。だから、こういうことにしておく」

それは彼なりにグレアムを思ってのことだった。

「上に立つ者としては失格です。けど、私はそれでいいと思っています」

「そうか。それにグレアムにはちょうどいい」

「辞任したのですか？」

「ああ。俺もそれがいいと思ったしな。故郷でゆっくり傷を癒して使い魔と一緒に静かな暮らしを送るといいさ」

「そうですね」

時空の海を眺める二人
これでまた一つの事件が終わったのだ

「さて、俺もいくかな」

「どこへいくんですか？」

「ん？なのはたちと一緒にクリスマスパーティーに出席するんだ」

そう今日は地球で言う１２月２５日　クリスマスだ

「そういえばフェイトさんもそう言ってかしら。それになのはさんには頼みごとを引き受けましたし」

「そうか。まぁ桃子さんも協力してくれるし問題はないだろう」

なのはは自分が魔導師になったことを告げる決意をした。
もちろんすずかとアリサもだ。
現に二人はあの場に居合わせてしまったか。レイも素性を知られてたしちょうどいい機会でもあるとレイは考えた。

「じゃあ、その時になったら頼む」

「はい」

レイはゲートを開きなのはの下へ向かった。

リンディも準備のために総帥の間をあとにした

本局ｓｉｄｅＥｎｄ

なのはｓｉｄｅ

１２月２５日　夕方より少し前

なのははフェイト、はやてと一緒にすずかの家で行われるパーティーに出席するため移動していた

レイはフェレットになりなのはの肩にいる

「やっぱり話さないといけないよね」

「うん。もう隠すのはやめようと思う。それに見られちゃったしね」

「けど、二人ならきっと信じてくれると私は思う」

「そうだね」

「うん」

後で銀に聞いた話だが二人があの結界内にいたのははやてそう望んだからだそうだ。

唯一自分を信じてくれる人。

そんなようなことをはやては望んだらしい。

―ねぇレイくん

―なんだ？

なのははレイに聞きたいことだあって念話した

―色々ね？聞きたい事とかあるんだけど一つだけ聞いていい？

―ああ構わない

―リインフォースさん、うん。銀さんははやてちゃんに会うまで寂しい思いをしてきたけどレイはどうだったの？寂しくとかそういうことなかったの？

―寂しくはなかった。俺は常に社会に溶け込んでいたから。親友と呼べる友もいた。けど、結局俺は彼らの死をみていることしかできなかった。寂しいというより切ないと言えるかもしれないな

―そっか。レイくんも辛かったんだね

辛いかどうかは俺にもわからない。けど、心のどこかでそう思っているのかもしれない。そう思った。

―それとその親友に私は入ってる？

いきなり何を言い出したかと思えばそんなことだった

―親友というより大切な存在かな。今のなのははは

―・・・えへへ

―？

大切な、だって！

私は嬉しかった。自分がそんな風に思われていたことが

「どうしたのなのは？」

「顔があかいで？」

「う、ううん。なでもないよ」

嬉しくて顔が赤く染まっていたことに気付き軽く受け流すなのはだった

それから数十分後

「いらっしゃい三人とも！」

「それにユーノもね」

「「「お邪魔します」」」

軽くあいさつし会場というかすずかの部屋にいく三人

楽しいクリスマスパーティーといきたいところだけどやっぱり最初に言った方がいいと思ったんだ

「えーと、それじゃあ三人は魔法使いってことになるわけ？」

「まぁそういうことかな」

「ふーん。いたんだ。魔法使いって」

意外と二人とも真実を話しても驚いてはいなかったけど、二人も十分驚いていた

「ところではやてちゃん。玲さんは来ないの？」

「えーとな。来てることは来てるんやけど・・・・」

「？」

すずかは三人のことも大事だったが彼レイのことも気になっていた。どうして、彼があそこにいたのかもあるがそれ以前に彼の正体が知りたかった

「・・・いいよ。はやて。俺が話すから」

「ユーノが喋った！」

まぁ当然だよね

知らないんだから

「よっと」

なのはの肩から降り変身を解く

「わわわW@A？」

「・・・玲さん？」

「ああ。けど、本当の名前はレイル・アンヴァルト・Y・神乃。まぁ間違っていないけどレイが正しい」

彼の正体をみてもあまり驚かないすずか

「レイさんも・・・その魔法使いなんですか？」

「そうだね。そういうことになる。君と遭ったのは偶然だった。けど、悪い気はしなかった。君はなのはの親友だからね」

あれなんか口調がいつもと違うような・・

「フェレットの姿で二人をいつも見てたけど親友だけあってとてもいい子だし、なによりなのはのこと思ってくれていた」

「当然よ！親友なんだから」

「だから、だ。前に喧嘩しただろ？」

「「あっ」」

なのはがフェイトと対峙していたときのことだ

「そのときはごめん。俺から改めて謝る。できれば真実を知ってほしくはなかった。危険が及ぶかもしれないと思ったからだ。だから、ごめん」

「そんな謝らないでください！もう、そのことはいいですから・・。それに私がその・・・聞きたいのは別のことで・・・」

「？」

すーはー

すずかは一度深呼吸をした

「その・・・今でも私たち友達ですよね？」

こんな歳の離れたのが友達というのも変だとレイは思った。
けど、彼女の眼は真剣だ。
それにレイもその言葉は嬉しかった。あんなことがあってどんな人間かもわからないのに自分のことを友達と言ってくれている。
それがレイにとって嬉しかった

だから、迷わず返答した

「ああ、俺たちは友達だ」

その笑顔は反則だった

「／／／／はい！／／／／／／」

すずかもとても嬉しそうに返事をしてくれた

「なんか私蚊帳の外じゃない？」

雰囲気的に自分がのけ者にされていると思ったアリサ

「そんなことはない。アリサにも感謝している。半年前君が助けた犬は俺の知り合いだ。だから、ありがとう」

手を差し伸べるレイ。

「べ、別に当然のことをしたまでよ！」

テレながらその手を握るアリサ。

けど、子供と大人の手。彼の手は大きかった。

「それじゃあ仕切り治してパーティーといきますか！」

「「「賛成～」」」

「グラスを持ったか！？」

「「「は～い」」」

「メリークリスマス！」

「「「「メリークリスマス」」」」

なのはｓｉｄｅＥｎｄ

時刻は８時を回り始めたころ。なのはたちは月村邸を後にした。
なのはにとってはこれが一番の問題なのかもしれない。
家族に真実を打ち明けること
レイとリンディも協力しさらには母桃子さんも知っていたので思ったの他話は順調に進んだ。

なのはの問題はこれで片付いた。
しかし、レイには問題がまだあった。

彼は今現在の帰るべき場所と言える総帥の間に戻ってきていた。
そこには彼とアリシア、リニス、銀がいた

「さて、これからどうする？」

すずかの家で分けてもらったケーキを食べる彼ら

「もぐもぐ・・。事件が終わったらってレイが言ったんだしいいよね？」

それは彼との約束だった。
フェイトと二人でリンディの養子になる件についてだ

「考えはまとまったのか？」

「うん。私、リンディさんの養子にはならない」

「理由を聞いてもいいか？」

静かに頷くアリシア

「私も色々レイの事情とか知っちゃってるからなんていうのかな。裏方ってやつ。私はレイと一緒に汚れてもいい。そう思ったの。だって、私は元々存在してなかったから。だから、こんな私でも役に立てるならその力を使いたい」

彼女の話を真剣に聞いているレイ。

そうか。なら、俺がもう口をはさむべきことではないな

「だから、それで私、レイの養子になる！」

ぶ！

食べていたケーキを思わずふいてしまった

「キタないですよ」

「すまない。というかなんでいや、まぁ最初はそうだったが・・・・」

「駄目？」

「うんまぁ・・・いっか」

決断早！

「リニスはそれでいいのか？」

「私はアリシアの使い魔です。彼女の行動を否定するつもりはありませんし。それに私もどちらかというとこっちの方が落ち付きます。あまり、皆で騒ぐというのは慣れていません」

「わかった」

とりあえずアリシアの件はこれで片付いた。

「あとは、銀。お前だ」

「私か？別に私は特にないと思うが・・・」

「まぁ、そうだが・・・お前のマスターになったとはいえはやての傍にいくなってわけじゃない。別にはやてたちの所に往ってもいいんだぞ？」

彼としてはそれがもともとやろうとしていたことでもあった

「一応そのつもりだ。だが、ちゃんとお前の下には帰ってくる。これでも私はお前の騎士だからな」

外書とはいえ彼を守る騎士であることには変わりはなかった

銀自身。彼の傍にいたいというのもあるのだろう。

「そうか、二人とも同じようなもんか」
用はレイの傍にいたい。そういうことだ
「じゃあ、俺たちは家族。みたいなもんになったのか」
「ううん、違うよ」
「なったのか。ではなく」
「なったのだ」
三人の呼吸はピッたしだ。
けどまぁあながち間違いではないか
「なら、家が必要だな」
「ここじゃ、駄目なの？」
「いやだ。管理局に留まるのは今回で最後にしたい」
「まったく。我がままなんですから」
「仕方ない。レイだからな」
「ふふ。そうですね」
「確かに言えてる」

「酷い奴らだ」

「「「「ははははは」」」」

こんなに充実した時間はいつぶりだろうか

けど、悪くない

むしろ嬉しい。というより暖かい。そんな感じがする

レイにとってそれは久しく感じた懐かしい家族の温もりだったのかもしれない

さて、まずはいい物件を探さなきゃな

家を建ててもいいがそんなに人数多くないしマンションとかでいいかな？

今後のことについて考えているレイだった。

第３６話　家族になりました（後書き）

すみません。事件報告簡単で・・

そして、神乃家誕生

予告　まだ増えます

それとフィリーヤさんこっちに来てるのに完全に空気化していますけどちゃんと出しますから・・・

時間軸的には正月を迎えるのでそれをやって他にもあるので少し日常編を書いて新章という形になりますのでよろしくお願いします

オリキャラ紹介４

今さらですけどオリキャラ紹介～第４回目

※少し変わってるかもしれないけど気にしないでね

マルス　２４歳　男性

出身　不明

モデル　エヴァのカヲルくん

ＣＶ　石田　彰

性格　大人しい性格をしているが同じ人間を快楽のための道具としか思っていない。
弱い人間には苦痛の死を。認めた人間には自らを持って死を与えるという変態
最初はレイに対して好意（強さてきな意味で）を抱いていた。

口癖
「〇〇くん♪」

能力・武器
「グラトニー―」　本編では手のひらに口がみたいのが開きへんな音を発生させる。それにより人間の精気を喰い殺す。とある世界の生物は皆これに喰われました。

「神化」　戦いの神アレスを喰った。または同化し神に等しい力を

得る姿。元々は神とのユニゾンを指す。
これを使い自らを神と表するがレイにははが立たなかった。レイ曰く「所詮は人間」だという
能力を言えばもう人の域を超えている。レイや他の代行者を除けば例え上位魔導師ランクを持つ者でも勝てる見込みは少ない。
身体能力はぶっちゃけ常人の数１０倍。例としては海王拳（漢字合ってるかな？）みたいなもの。

「剣」　戦いの神アレスが使用して剣。普通の両刃の剣だが一振りで風を斬り二振りで大地を裂くとかないとかレイに砕かれた

備考
マルスは魔力を使わない。氣に近いものを使う。しかし、大半はグラトニーで喰っちゃうのであまり使わなかった。また、代行者に選ばれたのはアレスが共感する部分もあったのこと。実力は確かだがレイには歯が立たない。理由はレイが強すぎるから。それを除けば彼は強い。神を喰った。かもしれないのだから（この喰ったか取り込んだかは作者が悩んでいるのではなくそういう設定）

神たち
ゼウスとかｅｔｓについてはまだ未定。というかちょびちょび出るが本格的には出さない。
余談だがフィリーヤも神の中ではそれなりに強い

一応公式キャラだけどオリジナルの部分だけ書きます。

神乃　銀（日本）　または　銀・神乃（海外とか別世界）

女性　推定年齢１８～２２ぐらい　（書類では２０歳としている）

ルックス　かなり良い　上からきゅ（ｒｙいやなにする・・・・

格好　某水銀党首領様の衣装を纏っている。下はスカート。色々と目立つ格好だが逆に「ふつくしい・・・」という歓声を浴び人気者だったりなかったり。

好きな飲み物　乳酸菌が入ってるもの。つまりヤクルトとか

魔導師ランク　推定ＳＳ＋

デバイス

魔道書「夜天の外書」を使用することができる。

元々の夜天の書６６６頁を追加し１０００頁もなる魔道書になった。

しかし、ほとんどの機能をレイが凍結したので最低限の機能と魔法しか使えない。

レイ自身もこれを使用可。

「ゲーム攻略の書」

それは銀がゲームをやってそのクリアするまでの過程を記録したもの。もちろんそのゲームすべての情報が記録されている。ぶっちゃけ何故か機能して記録してしまった。

買ったばかりのゲームにはまったく役にたたないので注意。

戦闘技法（バトルスタイル）

基本的アニメやゲームと変わらないがレイの指導により近・中・遠距離に対応した戦い方もできまた他の者へのサポート、ブーストや

回復魔法なども使えるようになった。

※バリアジャケットはそのままの仕様にしています

備考

擬似生命体というよりプログラムだが人と同じ。血だって流すのであまり普通の人間と変わらない。騎士プログラムを外されたシグナムたちと違ってレイの魔力を糧に存在している。彼はほとんど魔力を使わないので無尽蔵と言っても過言ではない。

最終殲滅兵器　超電磁砲（レールガン）

レイがリニス用に造った兵器。本編で登場したのはまだ試作品である。そのためまだ大型で中々使用する機会がない。

形

ガンダムwのバスターライフル（初期）の長さくらいでＭＧＳＰＷのレールガンを足した感じです。

性能

フルチャージ、３００％とトレインが言っていたが最大で４００％はいく予定。しかし、チャージに時間がかかり戦闘に参加せずアリシアと自分で一生懸命充電していた。

今後それに関しては改修案が出されたので使いやすくなりそう。

威力

イメージとしてはゾイドのジェノザウラ―の荷電粒子砲のような感じです。臨界点突破しオーバードライブするとデスザウラ―並のも

のに・・・
喰らえば高確率で塵を残さず消滅させる。惑星も破壊できる

ハルバード　最終形態
通称「ファイナル・トマホーク・アリシアスペシャル」
一言で言えばファイナルゲッタートマホーク

巨大化したハルバードが魔力を纏った姿。大きすぎるので持つというより浮かして手の動作で動かしている

威力
最大出力でなら戦艦をも斬ることができる。

決め台詞

「私に断てない物はない」

備考
アリシアが日本のアニメを見ていて閃いた技。

紅蓮　モード天　通称天元突破

紅蓮の最終形態ということになる。一度融合装着型に移行しそこから天になる。変わったのはドリルのみで巨大化する。
※正確な大きさがわからないのでとりあえずグレンラガンのギガドリルブレイクを想像してください。

威力
威力というより粉砕力と言った方がいいのかもしれない。ただ、大きすぎてユキナでも使用時間が限られているので真っすぐでしか使

えない。
ユキナが本気を出せば惑星一つを突きぬくかもしれない。

決め台詞

「私たちに貫けない壁はない」

グラ―フアイゼン　黄金の鉄槌　通称ゴルディオンモード

「ゴルディオン・パニッシャ―」

アイゼンの第四形態。ギガントモードから黄金に輝くだけだが威力は通常の数倍。

詳細
バリアや障壁の類などを粉砕ではなく粒子並に分解する能力を持つ。人にやっても粒子化にはならない。ただ、威力だけならギガント以上。

巨大化したギガントと同等。使用するとヴィータも黄金に光り輝く。
通称スーパーヴィータ。
この案を出したのはレイらしくいつの時代かに教えてもらった。
ヴィータもこの形態は好きだが使用するとアイゼンがいつも以上にうるさいので困っている。
例
使うと

「よっしゃぁあああああああああ！！」

「ゴルディオン・パニッシャ―！」

と叫ぶと

「光に・・・なぁれえええええええええええええええ！！！」

ヴィータも耳が痛いそうです。
レイにそのことを頼んだら

「それがいいんじゃないか！」

となんでそんなことを言うの？的な顔をされたそうだ。

レイの融合装着型

「最強の拳」　モデル　スクライド・シェルブリット
両腕すべてがＺＥＲＯが造りだした機械と融合した形。黄金を纏ったそれは神化したマルスをも凌駕した。

技は「殲滅のジェノサイド・ブリット」
そもそも対人用でもあるが対悪魔など邪神用でもある。技を発したときに出る光は悪霊を成仏させる能力を持つ。
エネルギーを腕全体で纏いそのまま相手を殴る。そのエネルギーの塊がそのまま相手をぶっ飛ばす。力を入れないただのパンチだけでマルスを吹き飛ばした。凸ピンだけでビルとかを動かせるかもしれない

※レイがとある知人を真似たというか自分で造った。
※入手方法　どっかの大地にいるロリコンで喧嘩馬鹿と喧嘩で勝つ

「最強の脚」　モデル　スクライド・ラディカル・グッドスピード

両足がＺＥＲＯが造りだした機械と融合した形。拳と違って色は黄金ではない。

技は未定

その速さには誰も追いつけない。マルスも追えなかった。というより認識すらできなかった。

本編では武器としては活用していなかったがそれでも十分な能力を発揮した。

技を発生させるのにほとんど時間がかからず先手必勝とはまさにこのこと。

※これもまねて造った。

※入手方法　レイがとある知人に速さで互角の戦いをしてちゃんと許可を取った。つまり速さで勝てばいいのである

備考

上記の二つはレイ曰く。これを越す力を持っていれば最強の拳と脚、つまり力と速さを持っているらしい。

レイのリミッター

リミッター解除を施行できるのはフィリーヤだけ。

１０～０までである

１０　普段の状態　魔力は限られている。無理をすれば少しは力を使える。ＺＥＲＯのケルベロスと大いなる障壁が使える。この状態

でも宝物庫を使用できるが一つだけ。

9～4　魔力がかなり解放される。また、ＺＥＲＯの形態。融合装着型が使用可。同時使用もできる。登場していないが宝物庫の武器を複数使用可。また、召喚魔法もできる
※まだどう割り振っていいか考えているので待っていてください

3～1　予定では固有結界などのチート的な能力解放　ここまでがフィリーヤが解除できるリミッター

0　秘密　最後のリミッター―はＺＥＲＯにしか解除できない

仁「さて、とりあえず簡単に書きました。
それとご報告。なのはの世界観の設定である別次元を基にクロスオーバーになるやもしれません。ｓｔｓ編に入る前にそういうことをしようかと思っています。ｓｔｓ編で出るかはわかりませんが多分でないとは思います。伏線みたいなものになるかと思われます。出る作品は戦争関連や武装組織とか傭兵とか・・・そんな感じです。けど、あくまで予定です。本編ではできるだけ控えたいと思っています」

オリキャラ紹介４（後書き）

とりあえず書くことは書いたので予告

海鳴市の某所マンションへ引っ越しする神乃家。

そして、お正月が近づいてくる・・・

レイはお年玉に苦悩する。

といった感じです。時期外れなんですけどすんません。
当分次回を含め最低２，３話は正月話になるやもしれません

では、また次回で・・・

第３７話　お引っ越し（前書き）

今回は神乃家がお引っ越しするお話です。

常識的な知識が作者にはないので部屋とかそういうのがよくわからないのでちょっと心配です

第37話　お引っ越し

クリスマスから数日後

もう新年が、お正月が迫っている日本。それは海鳴市も例外ではない。
だが、そんな中でとある一家が引っ越してきた

某マンション
そこは海鳴市でもかなりいいマンションだが何せ家賃が高い。
エリートの給料で支払うことが可能なぐらいのマンション。
ではなく、ちょっと高くていいところだ。
身近な例としてはリンディ一家（フェイト含む）が住んでいるマンション。あそこと同じぐらいかそれより少し広いぐらい。個室は４つもありあとキッチンはしっかりとしていてプロの人も認めた設備。
さらにベランダに出ればマンションから観れる海を眺めることもできるし。風呂も・・・家族と一緒に入れるぐらい広いし、あることに関しては防音設備も備えてるとか備えてないとかで・・・。
とにかくいいところなのである。

レイはそれを見つけた直後即契約。翌日には引っ越しと突っ込みどころ満載な引っ越しとなったのだった。

ちなみにそのマンション。なのは、フェイト、はやて家より少し離れたところに位置している。

レイ曰く「あいつらを守るためでもあるが普通に暮らしたいということもあるので」ということらしい。

どうもプレシア事件から夜明け団が色々と動くなったので彼女達に危険が及ばないことも考慮しての引っ越しだ。

そして、やっと引っ越しが完了したのである。

と言ってもほとんどの荷物は転移させた奴ばかりで手持ちで持ってきたのは着替えとか最低限必要な物ばかり。
重いタンスだって魔法を使って浮かせて運べる。

あーなんて魔法は便利なんだろう

色んな意味で間違った使い方だと思ったリニスだが自分もやっていたので言えなかった

「さて、引っ越し蕎麦でも頼むか？」

受話器をとり出前を頼もうとしているレイ

「えー蕎麦？私、うどんがいい～」

そこはあえて我慢しろと言いたいぐらいの我がままだ

「引っ越しうどんなんて聞いたことないぞ？」

「じゃあ、引っ越し蕎麦止めよう！」

「唐突すぎるぞ、お前」

「じゃあ、どうします？」

「まぁ一応冷蔵庫あるし」

「材料は？」

「そうだな・・・・」

台どころへ行き冷蔵庫を開けて中身を確認した

あるのは昨日余ったケーキ

「「「「・・・・・」」」」

「勿体ないし、いいよそれで・・・」

とにかく食べれればいいや

今日のお昼　昨日の貰ったケーキでした

「さて、俺はお隣さんとかにあいさつしてくるかな」

引っ越して一番なのが近所付き合いだ。

これがうまくいけばよい交流関係を築くことができるのだ。もしものときは色々助かるし。

とりあえず適当に買ったものを持ってお隣さんにあいさつにいくレイ。

残された三人はというと

「ねぇ、どうする？」

「とりあえずゲームでもするか？」

「じゃあ、私お茶入れてきます」

あの銀でさえ現代文化に浸っている程だった。

別にやることがないからこうしているわけではない。

やることはあった。けど、やれなくなったのだ。

それは引っ越すにあたり市役所に出す住民票のことだった。

神乃家

夫　神乃　玲

これは別にいいのだ。ただ、問題なのは妻という一つの枠が問題だったのだ。

3人の乙女たちはそれを競って戦っていた。

ゲームと言う勝負方法で！

それをみていたレイは

「アリシアは無理だろ（年齢的に）」

一応アリシアの年齢はなのはたちが9歳だから一応12歳という設

定にしている。
事実上アリシアを除き銀とリニスなのだが・・・
銀は
「私は妻と言う器ではない」
と回りくどいいい訳をし
リニスは
「私は・・アリシアの使い魔ですから」
と使い魔を理由にして辞退
なら別に競う必要もないのではないかと思われるがそこは女のとしてのプライドが許さなかった。
だから、確保しなければならない
ということで昨夜。勝負が行われたのである
内容はカードだったりゲームだったり麻雀だったり花札だったりとかで
一応3人で奇数なのでレイも参加
だが、それが誤算だった
例として

神経衰弱

「こんなの簡単だって」

と全部一人でオープンして一人勝ち。

大富豪

「はい、革命。8で切って7であがり」

ずっと大富豪の椅子に座り続け

麻雀

「ロン。ライジング・サン！国士無双十三面！」

某麻雀を思い返すような上がり方

花札

「おっ四光。じゃあ降りるわ」

とこいこいするわけもなく

遊〇王

「はい、ずっと俺のターン」

馬鹿げてるＺＥ☆！

という惨劇になったのだ。
すべてのゲームで一位の座を彼に取られまったく勝負にならなかったのである。

なぜ彼女達は二位でいいのにそれをしなかったか。

それはいつのまにかレイに勝つためのただの遊びになっていたのだ。
つまり結果的に言えば

夫　神乃　玲

妻　空白

長女　銀

次女　李弐子

三女　有柴亜

という物になった

名前が漢字なのは日本だからだと言う。別に紙の上だけだから、とレイは言っていた。

これで終わったのはいい。
だが、それからというもの（まだそんなに経っていないが）
暇であれば妥当レイ！という旗をかかげ日々ゲームに没頭していたさすがのレイも父として怒り

「ゲームは一日4時間だ！ただしボス戦に限っては延長可！」
厳しいんだが甘いのかよくわからない方針だった。

その日の夕方

スーパーで買い出しにいき食材を買ってきた。
今日の夕飯はおでんだった

「それにしても、もうすぐ正月か」
―正月は寝て過ごせというし寝てよ
あながち間違ってはいなくはない？

「そうだね～。初詣いきたいな～」

「そうですね。フェイトたちも一緒に」

「そうだな。それもいい」

まだ、正月にもなっていないのにこれだ。
相当楽しみなのだろう。
まぁ皆が初めての正月だし

―そういえば・・・

ふとレイは思った。正月といえば大事なアレがあった

そうお年玉である

―あげた方がいいのか？

確かにそういう歳だし俺は大人だし、あげるのが当然といえば当然だ

しかし、いくらあげればいいのだろうか・・・

実は言うと彼には金銭感覚がある時とない時があるのだ。こういうどうでもいい金の使用の時が特にない時で小学生相手に百万でいいのかと思ったぐらいである

それもそのはずだ。彼は日本で生まれたわけではないのだ。旅をしている中で日本にも立ち寄ったことがあったからお年玉というのを知っていた

しかし、実際どういうのかはわからないのだ

そんなことを考えながら就寝しようとしたのか・・・眠れない

「どうしたいいものか・・・・」

「―私もぉお年玉欲しいなぁ～」

「・・・・」

声の方にゆっくり振り向く。

そこには何故かフィリーヤがいた

―帰ったんじゃないのか・・・・

「あなたっていう・・お・年・玉・？♪」

プスッ

「・・ガク」

彼は彼女に注射器を刺していた。
こちらにいる間は肉体があるので少しは効いたようだ。
けど、すぐ目を覚ますだろう。

「避難するか」

自分の部屋を出て向かったのは銀の部屋だった
理由　アリシアは流石にまずいし銀なら問題ないと思ったから

部屋に入ればもちろん銀は寝ていた。
起こさないようそっと隣で寝るレイ。
しかし、偶然にもレイが寝た後銀は起きた

―こ、これはどうなっているんだ？なぜレイが私のベッドで寝ているんだ・・・はっ！もしや・・・

―　一緒に寝る＝一人では寂しい＝妻がいないから＝私が妻！？

などという方程式が銀の中で組み上がったのだ

―わ、私がつ、妻ならば一緒に寝ても問題はない。そう、問題は・・・

「問題あるわよ！」

※ここからは小声で喋っております

「本妻である私を差し置いていい度胸してるわね・・」

「また、貴様か！邪魔をするな！」

「邪魔するわよ。だって愛の女神ですもの！」

銀はまだフィリーヤのことを知りません

「愛？追っかけの間違いじゃないのか？」

「そうよ、愛を求める乙女よ」

「どこの世界に愛を求めるために不法侵入してくる乙女がいるんだ！」

「ここにいるわ」

胸を張って言っているが駄目だろ

「ちょっとうるさいわよ！」

小声で喋っていたのに隣の部屋のアリシアまで聞こえていたらしい。

リニスもいる

「って、あんたなんでここに居んのよ!?」

「アリシア、知っているのか?」

「ええ、まぁ話すと長いんだけど・・・」

「というよりなんでレイがあなたの部屋に?」

「それは・・・私と寝・・・(ryごにょごにょ)」

「銀、あんた裏切ったの?」

「ち、違う!レイが私のところに勝手に・・・」

「まぁありえなくはないですね。というか原因フィリーヤさんですよね?」

リニスは至って平然としていた

「さ~ね(棒読み)」

「「「マジでやっちゃうぞ♪」」」

「なによ、やるっての?女神である私に・・・」

「時として人は神を超えるのよ」

「よくわからんがその通りだ」

「もう、帰ってください」

互いに得物を構える。フィリーヤはなんか某小宇宙（コスモ）のアテナが持ってるような杖？を持ちだした

・・・・・・・

「ぐ～・・・・おまえら・・・んて・・大嫌いだ・・・」

「「「「！！！！」」」」

レイの寝言がその部屋の危機を救った

「えっ、う、嘘だよね」

「そうにき、決まってるだろ・・・」

「ごめんなさい、ごめんなさい！騒いだの謝りますから」

「（寝顔可愛いな～）」

フィリーヤだけ反省していなかった

その後大人しくなった４人。

フィリーヤを除く三人は反省してというかその場で体育座りのような格好で寝ていた。

そして、元凶であるフィリーヤは彼の寝顔を見ながら寝ていた

翌日

「は～わあああ。あー、嫌な夢みた」

夢の中にまでマルスとか夜明け団が出てくるんだもんな

「さてと、朝食の準備を・・・ってこいつ結局こっちにまで来たのか」

隣で寝ているフィリーヤをみて溜息をついた

それよりも銀は？

ベットの上にいないことに気付いた

「・・・お前ら何やってんだ」

角の隅っこで三人が体育座りをして寝ていることに気付いたレイ

その後。三人は「嫌いじゃないよね！？」などとレイに質問攻め。

レイは訳が分からなかった

第３７話　お引っ越し（後書き）

銀の表情を増やしてみたがうまくいっただろうか？
というか銀が駄目になっているような・・・

次回はちょっとだけで正月。そして、女神とデートの話です。

第３８話　女神さまとデート（前書き）

今回フィリーヤという名前をつけてもらった出来事を書きました
だから、デート部分は少ない。ていうかデートなのだろうか？

第３８話　女神さまとデート

１月４日

新年が明けた。
神乃家も正月を迎えた。しかし、今家にいるのはレイ一人である。
アリシアとリニスはフェイトの所へ、銀は八神家にお泊りである。
１月１日に初詣にいったあとそのまま泊まりにいったのだ。
初詣には三人とも着物を着せてやりさらにヴィータたちはどうせないだろうから４人にも渡した。ちなみに三人は着物を着方がわからないので彼が着がえさせた。
その時の反応

「／／／どうしてもお前がやらなければならないのか？」

まず、最初に着替えさせられたのは銀だった。
銀も意外と恥ずかしいようで。
別に下に何か着てもいいのだろうが付けないほうがいいと言われた。

「俺以外に誰がやるんだ？」

「いや、それは確かにそうだが・・」

リニスは流石に着物を着方は知らないのだ

「いいか、ほら」

「あーれー（棒読み）」

と叫びつつもいつのまにか着替えさせられてた。アリシア、リニスも順番に着替えさせられた

「じゃあ、行ってくるけどレイは本当にいいの？」

「ああ。これ、ヴィータ達の着物。着方はリニスに叩きこんだ。まぁはやてでもできそうだがな。それと、皆に渡しておいてくれ」

紙袋に入った着物とお年玉と書かれた紙袋を渡された

「俺からのお年玉」

彼は悩んだ末、グーグルを頼ってその歳の子のもらう量を調べた。一応なのはや、フェイトにはお小遣いにしては多い３万円。はやてには家族を含めての生活費などを渡した。（主に食費）軽く１０万ぐらい

「うん、わかった。お土産なにがいい？」

「特にいらない。あー欲しいと言えば写真だな。お前らの」

「そんなものでいいの？」

「ああ、俺にとってはとても大事なものだ」

「わかった。じゃあ、行ってくるね」

「行ってくる」

「行ってきます」

「ああ、行ってらっしゃい」

キーガチャ

回想終了

というわけで彼はこの正月はほとんど寝て過ごしていた。
しかし、ずっと寝ているわけでもなく定期的に掃除とか洗濯だってしているのだ。

もう完璧すぎるw

主婦だよね。完全に

「で、お前はいつまでここにいるんだ？」

ソファーでくつろいでいるニート女神に聞いた

「レイがぁ～デートしてくれたら」

そういやそんな約束したな

「じゃあするか」

「う～ん・・・えっいいの！？」

まさかそんなに早く返答が来るとは思っていなかった

「ああ。それよりお前だっていつまでこっちにいられないだろ？」

そういえば仕事すっぽかして来たんだったわ

「じゃあ行くぞ」

「は～い」

フィリーヤちゃんデートモード♪

と心の中で冬用に着替えた

※作者はあまり服に詳しくないのでそういう寒くない格好をしていると思ってください

市街地

と、いうわでさっそく街に出た

正月ということもあるが４日になると大半の店は開店していた。

「で、どこにいく？」

「とりあえず歩きましょ。別に私、あなたとこうしているだけでいいし」

と腕をからめてくる彼女

「そっか。じゃあいくか」

「うん」

腕を組んでもあまり嫌がらないレイだった。

「・・・ねぇ、覚えてる？」

「なにを？」

「私が初めてこっちに来た時のこと」

「ああ、でも別になにもなかっただろ？」

俺の記憶では初めて彼女を呼んだ時には特に何もなかったはずだ。

「ううん、私にとっては大事なこと。“フィリーヤ”って名前をくれた」

今でも覚えてる。

彼が代行者になって初めて私が地上に降りた時のことを・・・

当時の私はあまり彼にたしてそういう感情を抱いてはいなかった。

彼を選んだのは私だがただ面白い人間だから選抜した。けど、まさか召喚した途端に私たちに襲いかかるとは思ってもみなかった。

彼が私の代行者になってからというものなにも進展とかそんなものはなかった。
けど、気になってはいた。最初に比べれば彼に対する感情がだ。
そんなある日私は彼に呼ばれた

「で、来たけどなにをすればいいの？」

初めて私は彼に呼ばれた

「簡単に言えば恋人の役をしてほしい」

「恋人？」

何を言い出すかと思えばそんなことか。

と思うかもしれない。
けど、私は愛の女神　アフロディーテ
そういうことに関しては興味津々。

「なんで？」

「ここに入るのに必要だからだ」

そう渡されたチラシにはあるパーティーの開催でそこで展示される
ある物をご披露するためのものらしい。参加は自由だが条件が恋人
か夫婦でなければならないこと。

あー、つまりこれだけのために私は呼ばれたわけね

なんていうかちっちゃいと言うかなんというか

「ここに展示される美術品はロストロギアでな。交渉しても譲ってくれなかったから盗むことにしたんだ」

「で、そのために私に恋人役を演じろと？」

「そうだ」

「ふーん。まぁいいけど」

「ちゃんと女の子らしい振る舞いをしろよ？じゃなきゃ恋人同士に見えないからな」

「女の子、らしい？」

なんだろう。今のままじゃいけないのだろうか
私はためしに聞いてみた

「なんでって。普段のお前、なんていうか女の子ぽくない」

よくわからない。私は女神だから性別でいけば女だ。
なのに女の子ぽくとはどういうことだろう

「なんていうのかな～いつものお前は女神だけど女の子じゃないっていうかもっと普通の感じになってほしいんだ」

普通・・・・。

その時の私はあまり笑ったりはしゃいだりはしていなかった。愛の女神のくせに

「じゃあ、笑って」

「・・・・？」

「俺、お前の笑ったところみたことない」

だってあなたよく会議とかサボるじゃない。
けど、彼の言うとおり私はあまり笑ない

「笑っていわれても・・・。あ、一つ聞いていい？」

私はふと気になったことがあったので聞いた

「あなた、私をどうみてるの？」

「どうみてるって言われてもな・・・・。俺は普段お前のことをどう見てるって答えればいいのか？」

「うん」

ていうかそのまんまなんだけどね

「俺はお前を一人の女性としてみてるぞ」

「えっ」

返ってきた言葉は私を驚かせるものだった

「向こうではというか会議の間はお前を女神としてみている。まぁ

仕事と私用をわける感じかな。だから普段、俺はお前を一人女性としてみている」

「一人の女性・・・？女神じゃなくて？」

「ああ」

なんだろう。この気持ち
ぽかぽかするこの感じ

「―じゃあ、私のこと好き？」

突然私は言い出した。

「好きか嫌いかって言ったら好きだ」

なんか逃げた感じがした。
けど、嬉しかった

「じゃあ、そろそろいくか。アフロディーテ・・・じゃ変だから別の名前にしなきゃな」

「あなたが付けていいわよ」

「いいのか？」

「ええ、あなただからお願いしたいの」

私たち神の名はとても大事なものだ。自分の存在を意味していると言っても過言ではない

「そうだな・・・。フィリーヤでどうだ?」

「フィリーヤ・・・・そうフィリーヤ。どう?私に似合う?」

なんかくるっと一回転した

「ああ、よく似合ってるよ。フィリーヤ」

きっとその言葉が今の私に変えてたんだと思う

ガバッ

私は嬉しくて彼の腕に抱きついた

「じゃあ、行きましょう。“あなた”♪」

「別に夫婦じゃなくてもいいんだが」

「いいの、これが一番効果があるんだから」

気づけば私は自然と笑っていた

「その後。普通に潜入してあなたが美術品を盗んだのよね」

私たちは話しながら近くのレストランに立ち寄っていた

「そうそう。その後も何日かお前こっちに留まったもんな」

だって、嬉しかったんだもん。
それに、愛の女神として本当の意味で目覚めたから

「そう言えば。アレスの空席誰が埋まるんだ？」

それは議会に出席する6席の内一つが空いている。それはアレスがどうあれ不在のためだ。
だから、新たな神を選ばなければならない

「恐らく―アストレアよ」

その名前にはレイも心辺りがあった

「アストレア・・・正義の女神。俺あいつ苦手なんだよ・・・」

向こうにいって会うたびに睨まれるんだよな

「自分が悪いんじゃない。最初、神に喧嘩を売ったのはあなたなんだから。正義の女神である彼女にとってはあなたはかなり悪に視られてるんだから」

「・・・まぁ俺にはあんま関係ないし」

「そうね。けど、まだ未定だから。候補としては彼女が一番にあがっただけだし」

でもそれって高確率でそうなるんじゃ・・・

「そうか。さて、どっかにいくか」

「ええ♪」

その後。二人は恋人のように街を歩き回った。

夕方になり臨海公園

「楽しかったな～」

腕を広げ夕日を眺めるフィリーヤ

「それは良かったな」

「ねぇ、レイ」

「なんだ」

「あなたはこれからどうしたいの？」

また嫌な質問をする

「―そうだな。家族、というのは憧れていたな。随分と前に忘れていたから」

「そう、よかったわね」

「叶うならこのままこうしていたい。けど―」

「あなたにそれは許されないわ。あなたは私たちに選ばれた。ううん。私たちだけじゃない。イヴちゃんにも。いつかは彼女達と別れる時がくる。けど、あなたの家族は違うかもね。もう、ある意味関わっちゃってるし。とくにアリシアは」

「・・・ああ」

もう、あいつらは俺と深く関わってしまっている。色々と知ってしまったから。
知ってしまった以上それからは逃げられない。
特に一番アリシアが深く関わってしまった。生き返る間に色んなものを見て知ってしまった

「すまないと思ってる。なによりプレシアに」

けど、あの子はそれをわかっていて俺の下に来た。

「そう。あと一つ聞いていい？」

「ああ」

「あの子―高町なのはちゃん。あなたは彼女をどうしたいの？」

本当、痛いところを突いてくる

「あなたはあの子に押しつけただけでしょう？レイジングハートを。私だって知ってるわよ？レイジングハート（あの子）が造られた理由」

「知っているならわかるだろう。俺はあの子に押しつけただけだ。最初はただの適合者、継承者と思っていたがあの子は化けた。この短期間であの子はレイジングハートを十分に使いこなしている。完全に機能を引き出していないが俺にとっては十分な成果だった」

「だった―今は違うの？」

「今は―俺の掛け替えのない一人だ」

長い年月の中。出会う人は数知れず。その中で彼が出会った数少ない友の一人。その中になのはも入っていた

「そう、ならよかった」

「？」

「もし、まだあの子のことをただの道具として視ているなら一発殴ってたところよ」

笑顔で拳なんか構えるなよ（―＿―；）

「それに言っとくが道具なんて一度も思ってないからな！」

「あらあら、ムキになちゃって（笑）」

「ったく」

「じゃあ往くわ」

「そうか。まぁ溜まってる仕事頑張れよ」

もっと気のきいたこと言えないのかしら？

「ええ。じゃあね、レイ」

「ああ」

別れを告げ彼女は消えた

「さて、俺も帰るか」

確かそろそろあいつらが帰ってくるからな。買い物してから帰るか

彼はそんなことを考えながら帰路についた

フィリーヤｓｉｄｅ

神の世界に戻ってきたフィリーヤに待っていたのは大量の仕事。というか地上界への無断外出が原因だった

「まったくぅ。自分の代行者を助けようとしたんだから別にいいじゃない」

愚痴をこぼしながら書類に目を通すフィリーヤ

するとある書類に目が止まった
空席になった議会の椅子が決まったようだ

「やっぱりアストレアか・・・。ん?彼女、代行者いたんだ」

いたことにも驚いたがその代行者の書類があることに驚いた

「どれどれ・・・えーと、カンノ・・マイ?変わった名前ねぇ」

フィリーヤはただそれを読むことに目がいってしまい大事な部分に気付かなかった。
漢字で書かれていたそれは神野。しかし、本当はジンノと読むことに彼女は気づいていなかった

フィリーヤｓｉｄｅＥｎｄ

第３８話　女神さまとデート（後書き）

レイはもう、娘三人のすべてを知っている

かきながら殺意がわいちゃったぜ♪

フェリーヤの言葉の意味。レイのなのはに対する思いは一体・・

さて、ここで新たな伏線を用意しましたけど、また結構さきなんだよね・・

次回はアリシアとフェイトのちょっとしたお話です。一応短編の予定です

ではまた次回で

第３９話　姉妹（前書き）

今回は短編ですね。
内容はＳＴＳの伏線のつもりで書きました
あとおまけがあります

第３９話　姉妹

アリシアｓｉｄｅ

市街地近辺の公園

フェイトは一人公園のベンチで座っていた

「フェイト～待った～？」

「ううん、今来たところだよ」

アリシアはフェイトに呼び出されてここにやってきた。

フェイトの隣に座り彼女の聞いた

「で、なに？あ、もしかしてレイの養子になったこと？」

「う、うん。どうしてかなって。なんで・・・私と一緒に―『リンディさんの養子にならなかったか？』・・うん」

やっぱりね。まぁそれしかないし

「別にね、リンディさんが嫌いって訳じゃないんだ」

あの人は確かに優しい人だ。こんな私たちに手を差し伸べてくれたのだから。

「なら、どうして？」

「私があの人の養子にならなかったのはね？レイが私にとっては父親的な存在だったから」

「父親？」

「そう。母さんとレイが昔から知り合いだったの知ってるでしょ？」

「うん」

確か母さんの学生時代のころからだったかな？

「私が生まれた時もレイは傍にいたんだって。それから私が大きなってもレイはいたの。間違ってお父さんって言ったぐらい」

「だから、兄さんの養子になったの？」

「養子って言っても形だけ」

「形だけ？」

どういう意味だろ？

「―私は、あの人の娘だと思ってる」

「！」

「養子じゃなくてあの人の娘だと本当に思ってる。どう？羨ましい

？」

「う、羨ましくなんかないよ・・」

顔を赤く染めながら言ってもまったく意味がない

―私だって、本当は兄さんの子になりたかったもん。けど、兄さんはそっちの方がいいって言っといて後からアリシアだけなんてズルイよ・・・

フェイトは自分だけ仲間はずれにされたようなものだと思っているのだろう。

けど、本当は違う。

―フェイトにはね、無理なんだよ。レイも私も。もう普通じゃないから

「けど―　一番の理由は・・・」

「なにか言ったアリシア？」

「ううん、なんでもない」

聞かれなくてよかったと後で思ったアリシアだった。

「じゃあ、私いくね。新しいゲーム出たから買いにいかなきゃ」

「えっ・・・あ、うん」

アリシア・・・それ何かが違うよ・・・

「―言いそびれちゃった」

本当に伝えたちことを伝えられなかったフェイト。

・・・けどね、本当の理由はフェイト。あなたなんだよ

心の中でぼそっと呟いたアリシアだった。

アリシアｓｉｄｅＥｎｄ

レイｓｉｄｅ

レイもまたアリシアのことが気になり少し離れたベンチで新聞を見ながら盗聴していた。

アリシアの服の襟に付けた盗聴器をあらかじめ付けていた

『―なんで・・・養子になっ・・・の？』

離れているためか雑音が少し入っている

―やっぱりか・・・アリシアの奴変なこと言わなきゃいいが

レイは二人の狭間に亀裂が入らないか心配だった

『・・・どう？羨ましい？』

「ぶっ！」

食っていたアンパンを吹いてしまった

―あいつ何言ってんだよ・・・

『けど―　一番の理由は・・』

「・・・・」

『なにかいった?』

『ううん、なんでもない』

―まったく。そんなこと言ったらどうなるかわかるだろ

レイにはアリシアの言おうとしていたことがわかっていた

『じゃあ、私いくね』

カチ

スイッチを切り新聞に読みふける

レイが今二人に恐れていること。それは姉妹という関係が崩れてしまうことだった

だから、こうして盗聴してまでやっているのだ

「―おじさん、盗聴は犯罪だよ?」

「！一なんのことかな？ちなみに俺はまだ若い」

バレていると分かっているがなんかプライドが許さない

「もう！」

バッ！

新聞を取り上げられた

「よぉアリシア」

「よぉ。じゃあないよ！こんなものまで仕掛けて」

差し出されたのは仕掛けておいた盗聴器だった

「よくわかったな」

「当然でしょ。私とレイは繋がってるんだから。ここにいるのもなんとなくだけどわかってたし」

「変な能力を身に付けたな」

「半分はレイの所為だと思うけど？」

ニッコリと笑顔で言われてもな

「・・・まだ許せないのか？」

「――――」

無言

「別にそれでもかまわない。だけど、あいつはお前の妹だ。それだけは―」

「わかってる。姉妹だからこういうことも思っちゃうんだ」

「―そうか」

ポン

アリシアの頭は優しく撫でた

「へへ」

「じゃあ帰るか」

「うん！」

互いに手をつなぎ歩きはじめる二人。

その姿は親子というよりも兄妹に見えたかもしれない

「ところで買いたいゲームって本当なのか？」

「うん！買って“パパ”♪」

パパと言いますかこの子は

「わかった。買ってやる。そのかわりパパは止めろ」

「どうして？」

「・・・なんかむず痒い」

「もう、照れちゃって♪」

その後。街や店の中を歩いていて周りの視線が痛かったのは言うまでもない

O・MA・KE☆

「第1回神乃家☆家族会議～ドンドンパフパフ～」

カーテンをしめ電気もテーブル以外の所は消し、まるで某秘密会議みたいな演出をだしていた。

「で、なんだこれ？」

レイは今の状況という展開についていけなかった

「隠しても無駄ですよ」

いきなり低い声で何か問いただすような感じでリニスがいった

「実は、私たち見ちゃったんです」

「なにを？」

「トボケるんじゃない！これが目に入らないかぁ！」

アリシアが何かにノリノリで写真みたいのを押しつけてきた

「これ・・・」

「そう。つい先日あなたは―」

その写真とは・・・

「あの女と“デート”してましたね？」

なんと二人が腕を組んでいるところが写されていた

「お前ら・・・後付けてたな？」

「ええ、“偶然”に」

「いいな。二人でデート」

「まったくだ。視ていたこちらの身にもなってもらいたいくらいだ」

いや、お前ら盗撮してただけだろ？

「その後レストランか喫茶店にはいって雅にお茶。羨ましいです」

「さらに、その後。二人で夕焼けをみて楽しく会話」

そこまでやってたのか

「ていうかお前らそれ犯罪だから」

「犯罪？」

「そんなの」

「バレなきゃいいんですよ」

我が家の子供たちは恐ろしいと思ったレイ

「それにこの写真とかなのはちゃんや」

「フェイトや」

「はやてたちにばらしてもいいのか？」

あげてほしくない人の名前があがった

もう脅した

ていうかどうなったらこんな悪い子になるんだ・・・

「で？俺にどうしろと？」

「さぁどうしてほしいんでしょう？」

「それぐらい自分で考えろ」

「そうです」

もうやだ。まだ、なのはの所で暮らしていた方が平和だった

自分が行ったことを後悔しはじめた

「―わかった。なんでもいうことを聞くから」

「「「ニヤリ」」」

この時を待っていた！

と言わんばかり三人は笑みを浮かべた。

「「「じゃあー」」」

三人の提示ものはしばらく一緒に寝るということだった。

リニスは猫になった俺の腹で寝てるしとなりにはアリシアと銀がいる

レイに逃げ場なし！

「（当分は眠れない夜が続きそうだ）」

彼の思惑通り、彼女達の気が晴れるまで眠れない夜は続いた

第３９話　姉妹（後書き）

崩れてゆく姉妹の関係・・・

おまけはまぁバレテいないわけがないだろうときっと思った方がいる思ったので作りました
まぁ偶然なのは本当なんだよね

では、次回なんですがちょっとむりやりな感じになりそうです。
彼女たちの特訓の話になります。それ違うんじゃね？とか思ってしまうところもいくつか出てきたのですがそれは次回のお楽しみで！

第４０話　日々これ精進？（前書き）

気がつけばもう４０話か・・・・
長いようで短いようだった・・・

今回は各々の特訓を描いております。
まぁレイが指導したり外部コーチが出たりとしてますが

第４０話　日々これ精進？

※時間軸はバラバラなのでご注意を

どうも、高町なのはです
実は最近変わったことがありまして。何とレイくんが私たち稽古を付けているのです！
理由は、わかりませんがとりあえず「日々これ精進だ！？」と言っていました

ヴィータの場合

「で、私はなんでゴルフ？」

ただいまヴィータとレイはゴルフ場に来ています

「いや、意外とセンスあると思って」

「そりゃあ、近所のゲートボールとかやってるけどさ。これが特訓になるのか？」

「そうだな。腰の回転力とか打撃力があがる？」

「疑問形かよ」

「まぁアイゼンをさらに使いこなすにはこれはうってつけだな。もちろんゲートボールもそうさ。アレはお前にとってはいい特訓になる。それと・・・」

「？」

場所を移し

「で、今度はゲーセン。しかもモグラ叩き」

「これで満点取ったらきっとゴルディオンを使いこなせると思うぞ」

「そうかぁ？」

「ただ振るうだけじゃ駄目だ。より速く、より正確に当てる。ゴルディオンは重いからな。振り回すのだって大変だろう？だから、無駄な力を使わずにできればアレはもっと強くなる」

なんだか嘘に思えて仕方ない彼の言葉だがなんとなくそうかなと思ってきた

「―わかった。とりあえずやってみる」

「そうこなきゃな」

レイにとってこの練習は第一段階でしかない。

第二段階が彼女をもっと強くするものになるはずだ

アイゼンは言いかえればハンマーだ。武器の中では最高の攻撃力を持つが隙も多い。隙が多いのは無駄が多いからだ。だから、この見

た目はどうでもいいようなものでも力の加減、
的確なところに当てる、というのが備わっているのだ。
これを体得すれば実戦でも力になる

「なぁ兄ちゃん頼みごとがあんだけど」

兄ちゃんとはヴィータがレイの名前を言う時の愛称である

「どうした?」

「ゴルディオンの時のアイゼンの『駄目』どうしてもか?『駄目!』」

どうしてそんなに拘んだろ?

フェイト・シグナムの場合

現在二人はとある世界の山奥に来ています。
レイ自身から稽古ではなくその道の専門のプロがいるからそこで稽古をつけてもらえと言われたのだ

なぜ、この二人がというと二人に共通するのは剣術だ。フェイトはアサルトフォームを追加したためでもある。シグナムは騎士ではあるが「剣術なら日本が一番」とレイに薦められた。

「このあたりだと思うんだが・・」

「はい。あ、あれじゃないですか?あの小屋」

「そう、みたいだな」

頂上付近に来たのか小さな小屋が一つ建っていた

「ごめんくださ～い」

『・・・・・・』

「いないようだな」

「でも、もしかたらいるかもしれませんよ」

「あんたたち人の家前でなにやっているんだ？」

「「！！」」

声に反応しそこにはどうみても中年にはみえない男が立っていた

「ん？ポニーテールに金髪・・・そうか。嬢ちゃんたちがあいつの言ってた二人か」

どうやら話が通っていたようだ

「失礼した。私はシグナム」

「私はフェイト・テスタロッサです」

「ご丁寧に。俺は比古清十郎だ。二人が俺に剣術を学びたいということでいいんだな？」

「はい。話が通っているようなので助かります。これをレイ殿から預かってきました」

「どれ」

渡されたのは彼がよく飲む酒と一通の手紙だ

内容は

「とりあえず二人には以下のことを教えるように。シグナムという女には普通に稽古してやってくれ。まぁ彼女は騎士なので武士道らしさを教えればいいから。
フェイトにはそうだな。斬馬刀で素振りでもさせてくれ。とにかく使いこなさせるまで。
じゃあよろしくw」

追伸・お前がよく飲んでるお酒も配布したのでよかったらどうぞ

よんで溜息をついた

「俺はこういうの苦手なんだがあいつの頼みじゃ仕方ないな。おい剣心」

「なんでござるか師匠・・・」

と現れたのは頬に十字傷があるひ弱な男性だった

しかし、シグナムは見抜いていた

―この男、できる。それにこのお方も相当の腕前だ

「お前はこの大きい姉ちゃんと稽古をつけてやれ。俺はこのちっこい嬢ちゃんをみる」

「まったく。あいかわらずいい加減なんだから」

「よろしく頼む」

「あ、拙者の名前は緋村剣心でござる。シグナム殿。さっそく稽古でもするでござるか？」

「ああ、頼む」

「嬢ちゃんは俺とだ」

「はい、お願いします。比古さん」

―比古さんか。悪くないな

そして、シグナムは剣心と木刀で稽古。フェイトは比古のもと斬馬刀を振りまわしていた

※フェイトが斬馬刀を振ったりできるのは魔法でちょっと重力制御してる感じです。いやー魔法って便利だね

ユキナの場合

「えーと、今日からお世話になるユキナです。よろしく」

ユキナはとあるトンネル開通工事のアルバイトに来ていた

―まったく、なんで私がこんなことろに。まぁレイのことだからちゃんと意味があるんだろうけど

―それにしても工事現場で働いている人ってこんな人たちばっかなのかな？

筋肉は凄いしなんていうかどっかの世紀末みたい

「そんな細い腕で仕事ができるんかね？」

「嬢ちゃん、俺たちはこの仕事に命かけてんだ。怪我したくなきゃ帰んな」

「まぁ、みてなって♪」

さっそく作業開始

作業開始から他の作業員は目を疑った。

俺たちは最低限の機械しか使わない。だから、開通させるにはピッケルかシャベルそしてドリルだ。

嬢ちゃんのドリル捌きは長年で鍛えたおっさんたちとは比べ物にならなかった

「嬢ちゃんスゲェーよ。そんなドリル捌き親方以外で初めてだ」

「ああ、俺たちが悪かった。これからお嬢って呼ぶぜ」

「へへ、ありがとう」

「ほう、あんたがレイさんが言ってた嬢ちゃんか」

「「「「お、親方！」」」」

おっさんたちが叫んだ

親方と呼ぶ人物はまさに工事現場の大将のような格好。安全第一のヘルメットに赤いサングラス。白いTシャツ、下は作業着にピッケルを持っている
例えるなら某喫茶店の海坊主だ。あ、ハゲじゃないよ

「あなたは？」

「呼びだきゃ親方って呼びな」

「じゃあ、私もユキナでいいよ。親方」

「「すげーあの親方と対等に張ってやがる」」

「ははは！根性のある嬢ちゃんだ。いや、ユキナ」

「ありがとう」

「だが、お前には大切な物が欠けている」

「欠けてる？何が？」

「それを見言い出すために来たんだろ？」

「そうだね。私がみたところ親方も相当のドリル使いだね」

「ふん、俺はドリルだけが取り柄じゃねぇ。おっし、てめぇら！仕事再開だ！」

「「「「「おっす！」」」」」

親方の一言で作業に戻るおっさんたち

「ユキナは俺と一緒に仕事だ。レイさんが言うほどの力を持っているかこの目でみてやる」

「いいよ！私のドリルに貫けない物はないんだから！」

シャマル・ザフィーラの場合

「で、我らはどうすればいいのだ？」

「そうですよね。私たちってどうすればいいのかしら」

とレイに聞く二人

「特にないな。お前らは特に戦闘に関して教えることはない。常に主の傍にいろ。それだけだな」

「まぁ俺は守護獣だからな」

「シャマルは冷静な判断力だな。お前の場合情報操作とか治療がメインだからな。だから、常に冷静で的確な判断を下せ。まぁ、お前には無理だろうが」

「なんでですか！（泣）」

「だって、お前ドッジ子だし」

「なっ！？」

「確かに」

「ザフィーラまで！？酷いです！あんまりです！」

「まぁそこは努力しろ。それより・・・お前には別の特訓をしなければな」

「別の特訓？」

ドン！

と差し出されたのは分厚い料理本
タイトルは「ど素人でも、ドッジ子でもちゃんと料理が作れる！？レイ先生のお料理本！」

「なんだか物凄く馬鹿にされてる感じがするんですけど・・・」

「はやてからも頼まれてな？さすがに炊飯器でご飯を焦がすという

神業は俺にもできん」

「それって褒めてます？それても貶します？」

「とりあえず俺が一から教えてやる。覚悟しろよ」

「はい！私もう、ドジっ子て言わせません！」

「よし、その調子だ！」

「はい！」

（もう、特訓とか関係ないな）

唯一人そう思ったザフィーラだった

アリサとすずかの場合

レイは、アリサとすずかに呼び出されてある頼みごとをされた

それは・・・

「魔法使いになりたい？お前らが？」

「「はい」」

「いや、魔法使い、魔導師になるにはリンカーコアというか魔力資質がないと駄目なんだ。だから、二人は『なれますよ』ＺＥＲＯ・・・」

あえて言わないでくれと祈っていたが口を挟みやがって

「あっ喋った！」

アリサはＺＥＲＯに驚いてた。しかし、あいかわらずすずかは冷静だ。

『二人にも素質はあります。私が保証しますよ。まぁなのはさんたちに比べれば差はありますけど推定なら軽くＡは超えてますし』

「本当！？」

すずかがとても興味津々だった

『ええ、用は訓練で鍛えれば問題ありません』

「で、どうなのレイ（さん）？」

すずかちゃんとさんづけで呼ぶのだがアリサは何故かタメ口。このツンデレめ

「まぁ、事実だ。だけど、二人は巻き込んだけでもすまないと思っているのに今度は自分から突っ込むか。普通」

「だって」

「あの二人の」

「「親友ですから」」

的を射ている。というか納得のいく理由だ

「わかった。二人に魔法の使い方を教えよう」

「「やったー！」」

「ただし、ちゃんと俺のいうことを守れよ」

「「はーい！」」

そして、レイ先生によるなのはたちにも内緒な二人の魔法の訓練が始まった

―けど、アリシアとかにはバレそうで怖いな

なのはの場合

そして、私の特訓はというと

「近接戦闘の特訓？」

私の戦闘スタイルは、機動は重めだけど強靭な防御力で攻撃を弾き、受け止めて操作性に優れた多数の誘導体と一撃必殺の砲撃魔法で仕留める（ｗｉｋｉから拝借）らしい

「でもなんで？」

「お前はいずれこのままいけば単騎でもやれる魔導師になれるだろう。だが、砲撃魔導師にとっての弱点が接近戦だ。まぁその道の魔

導師なら敵を近づけさせない程の実力を持っている。簡単に言えば用意に越したことはないのだ」

「でも、レイジングハートは砲撃専門だし接近戦って言ってもこう振るうだけだし」

レイジングハートを振るってるように演じるなのは

「それなら問題ない。レイジングハート、ＴＰＣシステム解除」

『了解・・解除確認』

「元々レイジングハートはＺＥＲＯを基にして造りだしたんだ。ＴＰＣシステムとは時、場所、状況にあった形態に変形する機能だ。まぁこれを使いこなすには相当の時間がかかるからあまり気にするな。さて、本題に移ろう。なのはの父さんは剣道かなんかやってなかったか？」

「うん、やってるよ」

「なら、少しはその才があるだろう。ＺＥＲＯ、宝物庫？００を」

『はい、マスター』

すると地面から錆びていて古びた刀が現れた。なのはにはそう見えた

「なに、このボロボロの日本刀？」

「なのはにはそう見えるか？」

「うん」

どっからどうみてもボロボロだよね？

「じゃあ、なのははまだまだだってことだ」

「え？」

「俺にはこれが立派な刀にしか見えない」

これが？

「これがボロボロにみえるってことはな？まだまだ未熟だってことだ。これがちゃんとした刀にみえるならそいつは一人前、まぁそういう類になるな」

「むーなんだか悔しい」

まだまだ自分が未熟と言われるとなんか傷つく

「ははは。なのははこれからだよ」

そう言いながら頭を撫でる

「にゃはは」

「さて、なのは。お前もレイジングハートに刀のイメージを送ってみろ」

「・・・うん」

イメージ。日本刀。んーこうかな？

『具現化』

「わー本当にできた」

レイジングハートは彼女の胸に固定され、目の前に刀が現れた

「お前の特訓はとりあえずこれを扱えることからだ」

「うん！」

「それと、あまりそれを使うな」

「どうして？」

「あくまでそれは最後の手って奴だ。お前はさっきも言った通りの魔導師だ。だから、敵は近接戦闘は不慣れだと思っているはず。その隙を突くのさ」

「へー、なんかカッコイイ！」

「だろ？」

本当はＴＰＳシステムを使いこなしてほしいが今はこれだけでいい。少しずつ覚えて行けばいい。そう、少しずつ

ちなみにアリシアたちに訓練がないのはもう各々でやっているからだというらしい

お・ま・け♪

「レイ先生のお料理教室～」

「どうも、皆の先生レイ先生だ。今日は私自ら料理の神髄を教えてあげよう。私にかかればど素人もドッジ子でもたちまち普通の料理ができるぞ！？でも、どんな料理も黒い物体に変えちゃうのは勘弁な」

「「「「「わーい」」」」」

何故か皆棒読み

「ちなみにアシスタントはこのメンバーの中で唯一料理ができるリニスとはやてに頼んであります」

「こんにちは、アシスタントのリニスです」

「どうも、アシスタントの八神はやてです」

二人が台所に立っているが皆はあまりやる気が出ない。
ちなみに生徒はアリサとすずかも加わっての魔導師たちである

「なんで、こんなことに」

「単刀直入に言う。女ぐらい料理つくれや」
なんか極道みたいな喋り方をし始めた
「あ、ちなみになのはたちはまだ子供だからあまり気にするなよ？これから覚えて行けばいいからな」
その中にはヴィータも含まれていた
「まぁ肝心なのはシャマルとシグナムなんだよな～」
「な、なぜ私が！私よりシャマルではないか？」
「シグナム酷い！」
「私は貴様と違って炊飯器で炊いたご飯を焦がしたりはしない！」
シグナムは胸を張っていっているがそれは実証済みなのだ。大分前にシグナムがご飯を炊いた時少し水っぽかったがちゃんと炊けていたのだ。それがシャマルだと何故か焦がしてしまう。
「ううぅう」
「というわけで次回があったらまず、炊飯器でご飯を炊くところからだ。
それじゃまた、次回このおまけで会いましょう」
とカメラ目線で手を振っていたレイだった

「私だって、好きで焦がしたわけじゃないのにぃ・・・しくしく」

第４０話　日々これ精進？（後書き）

俺も炊飯器でご飯焦がしたことないわ。まぁ使ったことないけど

今回、まさかのおろ？とその師匠が登場。
けど、出番はこれだけだから安心してね♪

多分

今回の目玉はアリサとすずかです。出すか出さないかで迷ったんだけど出しちまったぜ！
本格的な出番はｓｔｓ編からですね

次回は、なんかやっちまった現象が起きてとんでもないもん書いちまった

第４１話　へたれ＋レイでヘタレイ（前書き）

実はこれ前々からやりたかったけどなんかできなかったんだよね

ちなみにぃ不適切な用語があるのでぇ～小さいお子様は見ちゃだめだぞ

第４１話　へたれ＋レイでヘタレイ

※これから起きるのはとある１日でのことです。場所とかあんま気にしたら負けですよ～

※こまぁけぇことはいいんだよぉ

現在なのはの部屋

えー、どうも高町なのはです

今現在私はとても嬉しい状況にいます。それは・・・

「あーなのは。お前は可愛いな～」

私はレイくんの膝の上に座っていてレイくんが私の頭を撫でています

「も～お前は俺の天使だ～」

なんでこうなったかというと・・・

『説明しましょう！』

最初に乗り出したのはＺＥＲＯだ

『実はマスターには一年に1回か2回とある病気が発病してしまうんです。
それは今まで溜まっている性欲が抑えきれずそれが爆発して自身でも理性をコントロールできなくなってしまう程なんです。
過去に自分だけの時が何回か起きましたがそれはまぁ物に当たることで解消してきましたが今回もぶっちゃけていうと女がいっぱいいるから抑えきれなくなったんですよねー』

途中からめんどくさそうな口調になった

ていうか今回もっていうぐらいだから過去に女がいたらこんなことしてたの!?

むぎゅー

「れ、レイくん・・・・ポ」

「あー・・・・・・・」

「?」

強く抱きしめたと思ったら力を弱め言葉を発しなくなった

ポーイ

「きゃ」

なのははベットに放り出された

「え？え？」

『あ、言い忘れてましたけど。マスターの性欲が大きいほど一人の女に対してヘタレる時間が短いですよー』

「え、それって」

『ええ。つまり飽きたってことです』

「えええええ！！？？」

フェイトの場合

「フェ～イ～ト～♪」

「きゃ」

背後からいきなりフェイトに抱きつくレイ

―えっ、どうして兄さんが！？もしかして兄さん、なのはより私を！

「フェイトってさー」

耳元で小さく呟き始める

「○○だよね？」

「！！な、なんでそんなこと言うの？」

「だって、フェイトのバリ（ｒｙってさ、○じゃないか～」

「！！！！」

そ、それは否定できないけど・・・

「それに、プレシアにピ――――されてた時、実は・・・・よかったんだろ？」

「う、ううぅうそんなこと、ないよぉ・・・」

とうとうフェイトは泣き始めた

だが、それが彼の待ち望んでいた瞬間だった

「泣いた顔も可愛いな、フェイトは！」

むぎゅう

強く抱きしめてきた

―え、は、はめられたの？けど、いいや

「・・・ぽい」

「きゃ」

そして、フェイトも放り投げられた

「え？」

既にレイはいなかった

はやての場合

「れ、レイ兄、どうしてこんなことするん？」

「どうしてっていやか？」

「いやじゃないへんけど・・・」

今現在、はやてはお姫様抱っこされている状態である

「いや、じゃないならいいじゃないか・・・」

「うん」

「歩けるようになったら一緒にどこかいこうな？」

「―うん」

「もーはやては可愛いな～」

「きゃ♪」

お姫様抱っこの状態からなんか顔をすりすりしてるような感じだ

―レイ兄はなのはちゃんやフェイトちゃんより私を選んでくれたん

かな？

そんな思いもつかの間

「・・・はー」

レイは前の二人と違って優しく車椅子に戻した

「・・・？」

再びレイの姿はない

ヴィータの場合

「・・・なぁ兄ちゃん」

「ん～どうした～？」

ヴィータは今なのはと同じような体勢になっている

「その・・・ナデナデするのやめてくれよ・・」

嬉しいのだが恥ずかしい

「もう、照れ屋なんだからヴィータは♪」

「そ、そんなことねえ！きゃ」

いきなり強く抱きしめられついつい「きゃ」などと言ってしまった

「そんなお前が可愛いんだよな～」

「／／／／／／」

「・・・ふー」

そしてヴィータにも飽きた

シグナムの場合

「！」

シグナムは何かを感じて後ろ向いたが何もいなかった

「はは、甘いぞ～シグナム～」

「ぬ、れ、レイ殿・・・」

後ろから彼女を拘束した。右手で彼女の胸の下辺りに回しなんか持ちあげてるし左手で彼女の左腕をあげてる。さらに足も絡めている

「お前はもっと表情を柔らかくしたほうがもっと可愛いいのに」

「わ。私はべ、べつに・・・」

「フー」

彼女の耳に息を吹きかけた

「あ、ああん♪」

―くそ・・・恥ずかしい

「そうそう、そんな感じに・・・もっとみせてくれよ。なんなら俺が一から教えてやるぞ」

左手で彼女の頬に触れてくる

「あ、んん」

「・・・・」

「？」

いきなり彼の腕の力が弱まったのを感じた

ていうかもう彼の姿がない

シャマルの場合

「もうー、どうしたらちゃんと切れるのかしら？」

ただいまシャマルは料理と格闘中

「腕に力が入りすぎた。もっとこう優しくやるんだ」

「え、え？」

後ろから抱きつくような形で彼女の手を重ね指導していく

「まったく。お前は根っからのドジっ子だな」

「そ、そんなことありません！」

顔を彼の方に振り向くと

「！」

彼の顔が目の前にあった

「どうした？」

彼はわかっていながら聞いた

「い、いえなんでも、ありません・・・」

「ほら、続けて」

「は、はい」

―声が近い・・・緊張して手に力が・・・

「・・・」

―それに彼の手が・・・手が？

気がつけば彼はいなかった

ユキナの場合

「むぎゅうー」

「ねぇ、レイ？」

「んー？」

「なんで私の胸に顔を埋めてるの？」

今二人の状況はレイがユキナの前から抱きついている感じだ

「だってーお前、姉〇よの巴姉にそっくりで癒されるんだよ～」

「・・・なんか比べられてるのが癪だけどなんか嬉しいからいいや♪」

―そっかー私って癒し系かぁ。これでレイも私の物♪

「ほーら、お姉ちゃんの胸の中で眠るといいよ」

「ぐー」

―可愛いなぁ♪

「・・・・・」

「・・・ってあれ？」

何故かレイがいないことに気付いた

神乃家の場合

最後の標的は自分たちの家族だった

「ん？レイ、帰ってきてたのか。一体どこへ―！？」

ガバ！

いきなりレイは飛びかかった。いや、抱きついた

「な、なにをする！」

―な、なんなんだ？いきなり抱きついてくるなんて

「銀・・・・」

彼は私の名を呼んだ

―もしかして、私がいいのか？

「レイ・・・」

銀はそっと彼を抱きしめ・・・

「あーなにやってんのよ！」

「協定違反です！」

現れたのはアリシアとリニス。
リビングが騒がしいく感じたのでやってきてみればこの有様だ。

「ち、違う！こ、これはレイが！」

「問答無用！私も混ぜろー！」

「あっ！アリシアずるい！」

二人も遅れをとるまいと飛びこむ。
つまり三人のサンドウィッチ状態なのだ。

なの、だが・・・

レイはいつの間にかいなくなっていた。
というか自室で寝ていた

三人はそれに気付かず喧嘩をしていた

こうして長いような短いような1日は終わった

翌日

第1回乙女合同会議　会議室

さて、昨日の出来事でまったく眠れなかった彼女達

なんかよくわからんうちに造られたこの乙女合同会議。どこらへんが乙女なのか聞きたいぐらいだ。

「で、病気とはいっても対象が私たちだったのだからもちろん彼が好いている女がこの中にいるわけよね」

「それは私だよね。だって、ヒロインだし！」

「そこ、勝手にリアルな話をしなーい！」

「じゃあ、妹キャラである・・」

「そんなん間にあってるわよ」

「間にあってるというより多すぎよ」

「なら、お姫様抱っこしてもらった私が」

「たかがお姫様抱っこでしょ？」

「私はレイからこの“胸”に飛び込んできたよ～♪」

「私だって抱きつかれた」

「あら、私も」

「私は“押し倒された”」

「私は押し倒した♪」

「同じく」

「「「「「「「・・・・・・・」」」」」」」

「私は大好きって言われた」

「あら、私は愛してるって言われたけど？」

「私は結婚しようって」

「ていうか、皆嘘でしょ？」

「「「「「「「・・・・・・・」」」」」」」

泥沼化した女たちの戦いが繰り広げられていた

そんな彼女達のもとにタイミングを待っていたのかそれとも単に現れただけなのかＺＥＲＯがその姿を現した

『あっ、言い忘れてましたけどぉマスター翌日になったらその時の記憶忘れてますからぁ』

「「「「「「「「「バキ、バリン・・・・」」」」」」」」」

彼女達の中で何かにヒビが入り割れた

レイｓｉｄｅ

「はわ～、あぁよく寝た」

彼はベンチに座り目の前で特訓をしているアリサとすずかをみていた

「ちょっと欠伸なんかしないでちゃんと見てなさいよ」

「そんな怒っちゃだめだよ?アリサちゃん」

「すまん。なんかいい夢だったのか悪夢なのかよくわからん夢をみてな」

二人も一旦休み、彼の両隣りに座った

「へー。どんな夢なの?」

「んー・・・よくわからん」

「わかんないの?」

「まぁ、一つ言えることは・・・」

ポン

二人の頭に手を乗せ

「二人は大人になっても純粋で綺麗なままでいてくれ。心も、身体も」

それは何をみてそう二人に伝えているのだろうか？

「それってセクハラ？」

「アリサちゃんったらー」

「だってすずかぁ」

「まぁ、なんていうか今のままでいてくれってこと」

空を眺めレイは思った

なんで大人になるとなんていうかキタないというかオゾマシイのだろうか

そう思ったレイだった

レイｓｉｄｅＥｎｄ

第４１話　へたれ＋レイでヘタレイ（後書き）

ＺＥＲＯ「ヘタレイ」

レイ「なんのことだ？」

ＺＥＲＯ「スケコマシ。変態」

レイ「解体してやろうか？」

第４２話　マテリアル（前書き）

どうも、いきなりマテリアル編です
実はこのサイトで書く前から個人的にかいてたりしてました。
ゲームでいうと戦いが終わったあとの話になります

少し設定などに変な場所があるかもしれません。
そこはまぁ気にせず読んでください。

それと、もしマテリアル編でのタイトルをつけるとしたら
「偽りの存在は本当に偽りなのか」です

ではどうぞ

第４２話　マテリアル

それは闇の書事件から少し経ったある日のこと。
彼レイル・アンヴァルト・Ｙ・神乃はコンビニでつまみとか食材やらを買いにいった帰りの道中のこと。
目の前には目を疑う光景が目に入った。

「・・・・・俺？」

そう、目の前には自分がいる。

「俺はお前だが違う」

「あ～闇の書の余波被害が出たのか」

彼はまるでそれが起きることを知ってるかのように言った。

「さすだな」

「まぁ、今までこういった事態にならなかったからな。
あれだけのことをしたんだ、余波被害や後遺症があってもおかしくない」

過去に幾度も闇の書の持ち主を見てきた彼にとって今回の結末は初めてのことだった。

「で、俺はお前を倒せばいいのか？」

「いや、俺は闘う気なんてない、他の奴らはどうかは知らないが俺はお前だからな」

「・・・なるほど」

俺にしては悪役を演じないとは・・・

「で、本題は？」

「話したいことがある、場所を移そう」

それから俺たちは公園へと場所を移した。
できるだけ人目のつかない場所に。ちなみにどっちが本物でマテリアルかは聞くなよ。
それから俺はマテリアルの自分から色々と話を聞いた。

「なるほど、その他の意志を持ったまぁ幽霊で言うなら未練があってそれが消えても少しの間は生きながらえるからそいつらを助けてほしい、と」

「まぁ、そういうことになるな」

俺ながらなんてめんどくさい頼みごとをしてくるかね

「おそらくそのマテリアルは彼女達を基にして生み出された。だから・・・・」

「守ってほしい、だろ？」

もう一人の俺は頷いた。

「もし、管理局の連中が嗅ぎつけたらモルモットにされるか消される」

「そのトップにいる俺がいるのにか？」

「わかってる筈だろ」

「・・・・・・・」

俺がいない間の管理局には信頼できる人間などほんの一握りしいない。一部の人間がそういうやつらだということ。

「ああ、しかし本人たちにばれたらどうする？」

「それは俺なんだからなんどかしろよ」

「なんと無謀な相談だ」

「無謀かどうかはお前次第だ」

「お前次第というか俺次第？」

今思った。自分という存在ほどハタ迷惑ものはないと。

自分のことは自分がよく知っているというがまさにその通りだ。

「しかし・・・・」

「？」

どっちかはわからないがどちらかが言った。

「俺たちはなんでこんなに缶コーヒーを飲んでるんだ？」

あたり一面コーヒーの飲んだ後の缶が置かれている。

軽く見て数十個はある。

「ていうかだいぶ前から戦闘が始まってるがそろそろじゃないのか？」

「そうだな、闇の書からの魔力供給もだいぶ少なくなってきている。俺は闘っていないから他の奴らより存在を維持できている」

そうは言ってもだんだん身体が薄くなっているのがわかる。

「といいつつももう限界か、じゃあ頼んだぞ」

「ウェ～イってもう消えやがった。さすが俺だな」

いたはずの所に俺はいない。あるのは缶コーヒーだけ。

「まったく、俺ながら面倒なことを押し付けたな」

するといきなり彼女から連絡が入った。

『レイくん？良かったやっと通じた』

「どうした？」

『どうしたって、さっきまで闇の書の余波被害を食い止めていたんだよ』

「そうか、でももう終わったんだろ？」

もう一人の、マテリアルの自分が消えたのだ。事件の黒幕である闇の書は完全に消えた。

『うん、そうだけどレイくんのとこにはこなかった？マテリアルっていうんだけど』

「ああ、知ってる。俺の所にも来たからな、俺のマテリアル」

『エー！でもエイミィさんが言ってたけど全然通信が繋がらなかったって言ってたよ？』

盗聴というか聞かれたくなかったので通信は遮断していたしわからないように結界も張ってた。

「―ああ、出れる状況じゃかったからな、それじゃなのは気をつけて帰れよ」

『えっ、ちょっと―』

強制的に通信を切った彼は立ち上がり神経を研ぎ澄ました。

この町に魔力を持っているのは多くて１３人ぐらい―

大きい魔力は放置だ、かすかな今にも消えそうなロウソクのような魔力―

「―見つけた・・ここから結構あるな。魔法は気づかれるか・・・仕方ないアレを使うか」

彼はここにあるものを転送した。
それは彼の愛車ＢＭＷのサイドカー、レンシュポルト・オスカー・リーブマン・スペシャル・・・ええい長い！（ああっ女神さまっで螢一の愛車です）を召喚した。
物凄く絞った魔力で

ヘルメットをかぶり目的地までフルスロットルで向かう。

免許は？

一応持ってる

期限すぎてるやつだけどな！

それから数十分後
たどり着いたのは町から少し離れた山の中にいた。
彼は途中で降りその足で探している。

「―このあたりだと思うんだが・・・・だんだん小さくなってるな、急がないと」

ここにきてから確かに魔力を感じているがあまりに小さいため精確な位置が特定できない。

すると幻聴なのか何か声が聞こえた。微かに

―私は消えるのですね

確かに聞こえた。

彼は走りその場所へひたすら走った。
するとそこには彼女と同じ顔をした女の子がいた。
しかし、その姿はまるでコンピューターの画面がバグを起こしたかのように身体が消えかかっている。

「なのは・・・！いや、なのはのマテリアルか」

彼の声に気付いたのか彼女は顔を彼の方に向けた。
寂しそうな瞳をしていた。

俺はなぜかそう思った。

しかし、突然彼女は倒れた。

「ヤバいな、急がないと・・・」

先ほどより微かに小さくなっている彼女の命。魔力が尽きるそれすなわち死を表す。

その後彼は彼女を抱き抱えて自分の住むマンションへと向かった。

これが俺の新たな物語の始まりだった

第４２話　マテリアル（後書き）

さて、マテリアル編ですよ～

ちなみに銀、アリシア、リニスは事件の方に出ていて当分帰ってこないという設定です。
その間に三人をどうするかって話になります

予想ですがマテリアル編は短いです。
ちなみにネタばれですけどマテリアルの子たちも今後重要な役割を果たす予定

それとここのあとがきなにかのコーナーにしようかな

第４３話　名前を授けよう（前書き）

一応マテリアルズ三人登場！

彼女たちが消えずに残った理由は私になりに設定しました後、名前も決定！

第４３話　名前を授けよう

頭の中で声が聞こえた。

―なんであれ、せっかく生まれた生命だ。見殺しにはさせない。

知らない声。目を開けられないから誰だかわからない。

―くそっ、中々同調しないなどうすれば・・・そうかあいつらと同じ感じでやれば―

なんだか寒かったのがいきなり暖かいものに包まれた感じがした。

なぜか自然と目を開けていた。

「・・・・・・」

目を開けるとそこは見知らぬ天井だった。

「―ここは・・・」

「おっ目が覚めたか」

私は声の主の方へ振り向いた。

椅子に座りコーヒーを飲んでいた。

「あなたは・・・・レ、イー　レイ」

「ほう、よく覚えてたな。
言い方は悪いがなのはを基にしてあるから多少は記憶を持ってるのか」

「わかりません。私はあなたのことを知らないはずなのですがどこかあなたのことを知ってるような気がして口に出てしまいました」

―なのはに似ているがまったくの別人だな。というかおしとやかなイメージだな

「それより、身体の方は大丈夫か？」

「快調ではありませんが」

「そうか、上手くお前たちの魔力と同調してお前に魔力供給して存在を維持している。
それとお前たちの魔力の源であるリンカ―コアは悪いが俺の方で預かっとくぞ」

「・・・・？」

―俺変なこと言ったか？

「いえ、普通リンカ―コアを預かるという表現はどうかと。それにそんなことが可能なのですか？」

「まぁ俺ぐらいの魔術師なら可能だな」

―このお方は底がしれません

「何か飲むか？」

「紅茶で」

「はいよ」

彼はそういうと部屋から出ていった。

―それにしても魔導師と魔術師。あの方は自分のことを魔術師と呼んでいましたが何違うのでしょうか？

ガチャリ

ドアが開く音がした。

彼はティーセットごと持ってきて私が寝ているベッドの横にあるテーブルにおいて紅茶をいれてくれた。

「起き上がれるか？」

「はい、なんとか」

正直言ってまだ体は自由に動かせない。

―あ・・・

私が無理して起き上がろうとしているのを悟ったのか彼は手伝ってくれた。

「無理するな。まだ、身体が馴染んでないんだ」
「は、はい。ありがとうございます」
「ほれ、紅茶」
彼女はカップを受け取り一口飲んだ。
―おいしい。
「そういえばお前の名前なんていうんだ?なのはＭＫ??なのはモドキなんていうわけにはいかないしなぁ」
どっかのロボットみないた名前だった。
ネーミングセンスがない
「星光の殲滅者と私は記憶されています」
―完璧魔王だな・・・あのなのはの馬鹿げてると同等なら成長したら・・・恐ぇえ
「?」
レイはなのはと彼女が成長した姿を想像した。
白い魔王と黒い魔王
―頼むから、無垢な子供のままでいてくれ（泣）
「あの～」

「あっすまん。そうか星光の殲滅者か。じゃあ星音（せいね）でいいな」

「かなり略しましたね」

「そうか？星音って名前はおまえによく合うと思うんだけどな。それに住民登録する上でそんな名前だと登録できないしな」

「住民登録？なんで、ですか」

「何言ってんだ、お前らはここで一緒に暮すんだよ」

「それは―構いませんが・・お前らとは他にいるのですか？」

―なんだ。いいのか

「ああ、ただ場所がいまいち特定できなくてな。力を使えばわかるんだがそうすると管理局の方から色々と面倒なことを言われるからな」

彼は管理局の総帥だ。そんな管理局は現在ここの担当になったリンディ提督の元２４時間監視されている。というか逃げないように見張っているのだ

「では、その捜索に私が手伝えばいいのですね」

「話が早くて助かる。せっかくの命を散らすには忍びないからな」

「それは、私も同じです。同じマテリアルとして仲間を助けたい」

「それじゃいくか」

「はい」

それから二人は残りのマテリアルの捜索を始めた。
星音の服は前になのはに買ってあとであげようとしてたやつを着せた。
最初は戸惑ったが最終的には「まっいっか」
本人もまんざらではなくサイズもぴったり。

愛車の一つのＢＭＷのサイドカーに乗せとりあえず町を走る。

レイが感じた場所にやってきた。
あたりはビルなど町の中心部だ。

「ここらへんだと思うんだが、ただなんでこの近くにいた俺が町はずれにいたお前を最初にみつけられたのが不思議に思ってきた」

「それは私があなたを求めていたからだと思います」

「なんで」

「わかりません―ただ」

「ただ？」

「私はあなたのことを好いています」

「光栄なことで」

奇妙な会話だった。そもそも会話として成立しているかどうかもあ

やしい。

「で、精確な位置は特定できたか？」

「ちょっと待ってください」

星音は目を閉じ神経と研ぎ澄ます。

―ま・・・た　　ぼく・・・・つ・・・い・・はず・・に

「見つけました、あのビルの屋上です」

「―あそこか・・・・」

二人はとりあえずそのビルに向かった。

夜とはいえまだ人はたくさんいる。正面から入れば怪しまれる。

レイはそのビルと同じ高さの建物を見つけその裏路地に入った。

「どうするのです？」

「とりあえずここの屋上にいく。

怪しまれずにいくのにはこの方法しかないからな、しっかりつかまってろ」

「はい―」

星音は彼に抱きつく形でしがみついた。

レイはそのビル２５階以上はある高さを跳んだ。

跳び過ぎたのかビルを通り過ぎ屋上にはうまく着地した。

「さて、と。あのビルでいいんだな？」

「はい、間違いありません」

「よし、いくぞ」

彼女は再び彼にしがみつき彼はそのビルから向こうに跳んだ。
下を見ると車や街頭の光が輝いて見えた。

「とぉ、到着・・・アレかっ」

彼は急いでそのマテリアルに近づいた。
近くにいき暗くて見えなかった体も見えた。
その姿はフェイトだった。

「髪の色はスカイブルー？っていうのか、それ以外はフェイトそっくりだ」

「彼女もまた未練があって消えないでいます」

「未練、ね。こいつの未練って？」

「かすかに聞こえたのは・・負けた、僕は負けるはずないのに。
もう一度勝負して今度は―とかなんとか言っていましたよ」

「負けず嫌いね、とりあえずお前と同じ方法で治療するか」

それから彼はフェイトのマテリアルに星音と同じ方法で治療した。
途中彼女のリンカーコアを摘出して彼のデバイスに取り込んだ。
そんな光景を星音は不思議に見ていた。

―しかし、本当に奇怪なものですね。本来私たちみたいな存在はリンカ―コアが命そのもの。それが消えるまたは魔力が切れるということは私たちの死を意味する。それなのに彼はリンカ―コアを自分に取り込んでいる。そして、自分の魔力を私たちに常時送っている。

星音はこんなことができる人間、いやこの世にいるはずがないと思った。だけど、目の前いる彼はそれを超越している。

「・・・ん」

「おっ、気づいた」

「早いですね」

星音とは違い目覚めるのが早い

「・・・はっ！」

「ぐほっ！」

いきなり起き上がったフェイトモドキの頭が彼のお凸に激突した。

「いって～なにしやがんだ！」

「そんなことより、あいつ！あいつはどこだ！？」

「あいつぅ？」

レイは星音に聞いた。

「おそらく、彼女のもとになった方かと」

「あーフェイトね、お前あいつに負けたのが悔しいのか？」

「そうだ、僕はあいつともう一度勝負するんだ！」

いきなり立ち上がったと思ったら走りだしジャンプした。

「・・・・あれっ？痛！」

もろ顔面から落ちた。

―よくあそこまで跳べるな・・・

別の意味でレイは関心した。なぜなら軽く2メートルは上に飛んでいた。

彼は彼女に近寄った。

「ほら、見せてみろ」

「あっ」

「・・大丈夫だな、まったく少しは冷静に行動できないのか？」

「どうして、僕は跳べなくなったんだ？」

「ん？それは―」

レイは一通りの経緯を話した。

「じゃあ、僕はもう戦えないの？」
「まぁ、そういうことになるな」
「・・・・」
フェイトもどきはかなり落ち込んでいるというかしょんぼりしている。
「フェイトに勝ちたいか？」
「勝つ！そして僕が強いってことを証明するんだ！」
「なら、俺の所に来るか？お前を鍛えてやる」
「本当！？」
「ああ」
「わかった、ありがとうお兄ちゃんっ！」
そういうといきなり抱きついてきた。
―なんでいきなり抱きついてくるんだ？しかも、視線が痛い。
目の前にいる星音の視線がいたい。
「ああもう！ところでお前名前は？」
「雷刃の襲撃者って名前」

「じゃあ雷華でいいな」

「うん、気にいった♪」

―ネーミングセンスがありませんね

ただ一人星音は思った。

「さて、俺が感じるにあと一人だと思うんだが・・・」

「それは私も感じでいるのですが―」

「多分、あっち」

雷華は指でその方向をさした。

その方向は海。

「なんだ、雷華わかるのか？」

「うん、なんとなく」

「よし、いくか」

それから三人は来た道の逆の手順で地上に戻った。

後ろに星音を乗せサイドカーに雷華を乗せた。なぜか星音が勝ち誇った顔を雷華に向けていたことにレイは気づいていなかった。

海沿いの道路に出て近くの駐車場に止めて徒歩で探索を開始した。

「寒いな、夜の海は」

「本当ですね」

「えー寒い？」

―馬鹿は風をひかない

二人は同じことを思った。

ちなみに雷華の姿はバリアジャケットのまま。まぁ、寒くないと言えばないのだろうが・・・

「さて、どこかな～と」

「ん～すぐそこ」

「「えっ」」

雷華は堤防に上ると俺達を呼んだ。

二人も堤防に上って見ると確かにそれはいた。

「お～こりゃまたはやてそっくり」

「しかし―」

「？」

「彼女、私たち以上に深い負を抱えています。王の器である自分が王にはなれず自分に負けたことを―」

「王、ね。そりゃかなり嫉妬深いな。さてと・・・」

彼は彼女を抱き駐車場に戻り治療を始めた。

手順は二人と同じ。

最小は少しずつ魔力を送りそれが馴染み始めたらリンカ―コアを取り出す。それから一時的なラインをつくり魔力を送り続ける。

「・・・さて、リンカ―コアを―？」

その瞬間彼の腕をいきなり掴んだ。

「なんの・・・つ、もりだ！」

「ほ～早いねで手離してくれない？」

「我はなにをしていると聞いたのだ！」

「そういうわけにはいかない。闇の書からの魔力供給がない今変わりとなる魔力を送らないとお前らはこの世から消えてしまう」

「へ～そう、むぐぐぐ」

雷華が言おうとしたところ星音が口を押させていた。

空気を呼んだのだろう。

「それなら我は消えた方がましだっ！」

「簡単に消えるとか死んだ方がいいなんて言ってんじゃねぇぞ―」

『！』

彼女だけではない。星音も雷華も驚いていた。

「せっかく手に入れた命を簡単に捨てるな。それにお前らを助けたのは頼まれたからでもある。だが、それは俺の意志で今お前たちを助けている。負けたからなんだ？そんなことよりも今ある命のが大切だろ？」

はやてのマテリアルは手を離した。顔を横に向けた。

レイのやることを許したのだ。

「ありがりとな」

それから数分後。

彼女の身体が安定するのにそう時間はかからなかった。

「さて、これで終わりだ。そろそろ夜が明けるな。家に帰るか」

「はい」

「は～い」

「・・・・」

バイクに乗る三人。その三人の後ろについていくはやてのマテリアル。

「そうそう、お前の名前は？」

「？我に名前など・・・」

「あるだろ、なんか異名みたいな」

「闇―」

「？」

「闇統べる王」

「じゃあ闇樹（あんじゅ）だ。いくぞ、闇樹」

「・・・・！」

すると彼女はいきなり彼の脛を蹴った。

「痛っ！なにしやがる！」

「うるさい下僕、さっさと出せ」

「まずは口の聞き方から訂正したほうがいいなぁ～？（怒）」

闇樹はなにも言わない。

彼は溜息をつきエンジンを始動させ家に向けて出した。

暗い夜道を走っているとだんだん夜が明けた。
走行中前をみて運転しているレイは気づかなかったがサイドカーにぎりぎり座っている雷華と闇樹。闇樹は顔をうずめ一瞬だけだが笑っていた。
その瞬間を星音は見ていた。
また星音も笑い振り落とされないようしっかり抱きついていた。

そして、朝がやってくる。

第４３話　名前を授けよう（後書き）

「フェリーヤとイヴ、略してフィリイヴな時間？」

フィリーヤ「というわけでこの後書きは私たち二人が占拠したわ」

イヴ「皆、久しぶりだね。皆のお母さん、イヴだよ♪」

フィ「こらこら。ネタばれ、ネタばれ」

イヴ「あっ、ごめん。というわけでメインキャラだけど出番がない私たちのために作者がこれを作ってれました」

仁「まぁ、なんとなくね」

フィ「ところで、私たちのＣＶって決まってないわよね。それにレイも」

仁「あーそういえば。
レイは普段の時と戦闘の時で声が変わるから保志、櫻井さんと言った二つの声で大人しいのと恐い声ができる人を予定していたんだ」

イヴ「私たちは？」

仁「そうだな・・・。フィリーヤは女神だからというわけではないけど、井上喜久子さんかな。イヴは母親的な声を演じる人で本当は喜久子さんがよかったけど容姿が子供だから中原麻衣さん」

イヴ「・・まんまだね」

オリキャラCV

レイ　CV保志・櫻井さんのどちらからか
（例　保志さんはスクライドのカズマ。櫻井さんはコードギアスのスザク）

フェリーヤ　CV井上喜久子
（例　ああっ女神さまっ　ベルダンディー）

イヴ　CV中原麻衣
（例　クラナドの渚）

仁「という感じになりました」

イヴ「ねぇ、フィリーヤさん。ちょっとお淑やかな感じであいさつして」

フィリ「皆さん、こんにちは。愛の女神、フィリーヤと申します。―こんな感じ？」

イヴ「・・・なんでそういう口調にしっちゃったの？」

仁「言うな・・・」

さっきの言葉が某女神さまにみえて仕方がなかったのだ

フィ「？まぁ二人はほっといて次回もよろしく～」

仁「なんで、こんなせって（ｒｙいや、なにす・・・ぎゃーーーーーー！」

第４４話　契約（前書き）

前話直後の話になります。

ちょっと話の展開が急かもしれません

第４４話　契約

あの後俺たちは家に戻った。
朝なのだが俺は寝ていた。
理由はあいつらへの魔力供給。魔力の供給はそんなに簡単なものではない。
なにしろ契約している契約獣や使い魔と違い意識してやらなければならない。契約していれば無意識のうちにできるのだが・・・

「あいつらが受け入れるかどうかなんだよな」

「受け入れるってなにを？」

「そりゃあ契約のことだ」

「契約って」

「俺と契約することで半永久的にお前たちは生き続けることができるんだけどどうする？」

彼の寝室にいつのまにかいた雷華の存在を彼が気づかないわけはなかった。
しかも一緒に寝ている。

「今はまだ仮契約みたいなものだ。今は俺自身がお前たちに魔力を送っているが契約すれば自動的に送られる」

「したら強くなれる？」

「強くなれる・・・かはわからないな。
強いっていうのは魔力が大きいとか力が強いってことじゃないんだよ、雷華」

「どういうこと？」

彼は起き上がり彼女と向き合った風に座った。

「本当に強い奴ってのはなんていうか漫画みたいな言い方かもしれないがここが強いやつのことだと思うんだ」

「ここ？」

彼は雷華の胸のあたりに指を向けていた。

「心、折れない意志、例えどんなに負けても傷ついても何度でも立ち上がって戦う。
不屈の心の持ち主。雷華、お前はもうそれを持っている。消えようとしている時でももう一度戦って勝ちたいという意志がお前をこの世界に残留させた。だから、お前は十分強い」

「僕は強くなんかない、だってあいつに負けた」

「それはあいつらが誰かのために戦っていたからさ。
お前はただ勝ちたいってだけで挑んだ。実力は確かにお前の方が上かもしれない。
ただ、お前はあいつの心で、何かをやり遂げようとする意志で負けたんだ。それにお前は今そのことに気づいた。今度は負けはしない

さ」

彼は笑顔で言った。
そんな彼を見て彼女は理解したのか

「うん、わかった！」

―本当に理解したのだろうか？

「で、どうする契約するか？」

「する、そうすればお兄ちゃんとも一緒にいられるんでしょ？」

「ん～まぁそういうことだな」

「じゃあ、契約する」

「わかった」

俺もこれ以上言うのをやめた。

「でも、契約ってどうやるの？」

「俺らのやり方だと身体的なアレをやった方が一番効率がいいんだが・・・お前には早いからキスで大丈夫だろ」

「キスってなに？」

「・・・・・」

―まさか、キスすらわからないとは・・・いやそっちのが好都合か

「まぁ、実際にやればわかる。リラックスして」

「・・・・すぅ」

「ここに契約の儀を始める―」

すると下に魔法陣が描かれる。
二人はその陣の中におさまっていた。

彼は雷華の顔に手を伸ばし頬をそっと触れた。

「あっ・・・・」

雷華もまた何が何だかわからないでいた。
ただ、ドキドキしていた。

「―我が力、雷を汝雷華と共有し我が糧とせん」

彼はそういうとそっと雷華の唇にふれた。

「・・・・」

雷華にとってその時の時間は長く感じられた。
物凄く暖かな感じに包まれた。

「契約完了」

「・・・終わったの？」

「ああ、なんとなくだが力が流れているのがわかるか？」

「・・・うん、そんな感じがする」

「そうか」

―成功したみたいだな。初めてなんで失敗するかもとは思っていたが

「二人にもやるの？」

突然雷華が言い出してきたのですこし驚いた。

「あ、ああ」

「だって、二人とも」

「は？」

雷華の向いた方に顔を向けると星音と闇樹が立っていた。

星音はいたって普通にしていたようにみえるが闇樹は顔を赤く染めていた。

「なんだ、みてたのか」

「はい・・・途中から」

「この色欲魔っ」

一人意味のわからないことを言っている。

「で、どうするんだ？お前たちの意志で決めろ、俺は強制はしない。あんなことを言ったがもし、消えたいのなら止めはしないぞ」

「いえ、私たちも契約をします」

「ちょっと待て！誰がこんな下衆な奴と契約を・・・」

「あなたも嫌でもないんでしょ？」

「っそ、それは・・・」

珍しいのかどうかはわからないが星音にしてはやけに積極的というかなんというか・・・

「・・っ！」

すると闇樹は部屋を飛び出していった。

「いいのか？」

「大丈夫です。あの子は素直になれないだけですから」

「そうか。で、星音。本当にいいんだな」

「いったでしょう？私はあなたのことを好いています、と。だから、私はあなたと共にあり続けたい」

―今気付いたがこいつも少しなのはに似ているところがあるな

レイが思ったのは容姿のことではない。
ただ、彼を思う気持ちは同じだということだ。ただ、そのことにレイ本人は気づいてはいないが―

「では、ここに契約の儀を始める」

「・・・・・」

一通りの内容を知っていた星は静かに目を閉じ心を落ち着かせた。
雷華と同じように彼女の頬に手を伸ばしそっと触れる。

「（ん、・・・）」

彼の手が自分の頬に触れたのを感じた。

「―我が力、星を汝星音と共有し我が糧とせん」

互いの唇が触れ合う。

―なぜでしょう、私の中の何かが満たされていく、いえ叶ったのですね

―なんかこいつらと相性がいいな

星は自分の中で満たされていくおのれ自身の願いがかなった。
逆にレイはなにか別のことを考えていた。

「一契約完了」

「・・・・」
「どう、星音？なんだか暖かいでしょう」
「ええ、そうですね」
雷華に聞かれ応える星音。
レイにはその暖かいというのは良く分からなかった。
「さて、あとは闇樹か」
「大丈夫です」
「え？」
「彼女は本当はわかってますから」
「闇樹は素直じゃないからねぇ～」
少し前にあったばかりなのによくお互いのことを知っていたのを不思議に思っていたレイだった。
「・・・さて、闇樹はどこかな？」
彼はそういうと部屋から出て行った。その姿を二人は見ていた。何も言わずに行かせたのは信じているからだろう。
「レイ様ならやってくれると思います」
「ううん、兄ちゃんなら闇樹のことを任せても平気だよ」

二人は二人なりに闇樹を心配していたのだった。

ベランダ

朝日が綺麗だ

そう思ったのはおそらく始めてだと思う。
ただ、朝日を今みたのだからその通りだ。

・・あの夜のことは今でも頭から離れない。それは数時間前のことでもあるからでもある。
でも、本当は違う。

消えていく自分　成すことをなせず敗北し消える運命だった自分。
それがすぐに忘れることなどできないなのはわかっている。
けど、やはりつらかった。

闇樹は朝日をみながら自分の、すぐこのまえの辛い出来事を思い出していた。

「我はどうしたらいいのだろうなぁ」

無意識のうちに声を貰いしていた。

「そんなの決まってる、このまま今を生きればいい。あいつらと一緒に色んな事をすればいいさ」

「―それはお前の中での話だ」

後ろから声をかけられたが闇樹は振り向かなかった。

「お前も心の中ではそう思ってるんじゃないのか？」

「・・・・・」

無言。

「本当はわかってるんだろ？これから自分がどうすればいいか」

「そんなことはとうに理解している。ただ―」

「迷ってるのか？それともまだ先のことを引っ張ってるのか？」

彼女の迷い。それは先で自分が行ったこと。あんなことした後。今自分がやろうとしていることは本当にいいことなのかどうか。そのことを彼女は迷っている。

「こんなことをいうのもなんだが実際にお前たちが行ったことは現実にはまったくの被害を受けていない。受けたといえばなのは達の方だろうな」

「別にあいつらに対してはどうでもいい」

「あっそ」

「―ただ、我は王にはなれなかった」

「悔しいか？」

「わからぬ、ただ、今はどうしたらいいのかわからないだけだ」

「さっきも言ったが嘘だ。お前はもうわかってる。ただ、その一歩が踏み出せないだけだ」

「・・・・」

またもや無言。

彼は押しに出た。

「だったら、俺がその一歩を手伝ってやる」

「・・・・契約か」

「そうだ、だが、それはほんの手助けにしかならない。俺は、いや俺達はもう家族だ」

「家族？」

「そうだ、星音に雷華、闇樹、あと三人に俺。立派にもう俺たちは家族だ」

「家族・・・・こんな我でもその中に入れるのか？」

「言ったろ？お前はもう家族だって」

「・・・・そうか、わかった。我はお前と契約をしよう」

その彼女の顔はとてもいい顔をしていた。

「―ここに契約の儀を始める」

二人の周りに魔法陣が現れる。朝日を受けて薄く見える。

そして、なぜかまた頬をさわる。

「―我が力、闇を汝闇樹と共有し我が糧とせん」

彼は彼女の顔のすぐそこまで近寄った。そのままいくと思いきや一旦ためらったのかしかし、すぐ口づけを交わした。

「ん、んんん」

「・・・契約完了」

今までより少し口づけが長かった。

「終わりましたか」

「ああ」

「にしても長かったですね、私たちのときはすぐ終わったのに」

「いいな～闇樹は～」

「な、なんのことだ!?」

「ああ、それは闇樹と相性が良かったからだな」

「相性？」

「まぁそんなことより連続の契約執行は疲れた。というわけで寝る！」

まるで逃げるかのように彼はベランダから出ていき自分の寝室へと向かう。

「あ～ボクも一緒に寝る！」

「では、私も」

「わ、我も寝てやってもいい」

「頼むから静かに寝させてくれ・・・」

そして、朝日は上り一日が始まる。

だが、彼らの一日は明日になりそうだ。

第４４話　契約（後書き）

「フィリーヤとイヴのフィリイヴなお時間♪」

フィ・イヴ『・・・・・・』

仁「・・・（正座させらている）」

フィ「どうしてこういうことになったか。わかるわよね？」

仁「レイが三人と契約したことだろ（キッパリ）」

フィ「フィリーヤちゃん拳（パンチ）！」

仁「ぐふぉ！」

イヴ「回りくどいなぁ。キスしたっていいなよ」

仁「い、言ったてするくせいに・・」

イヴ「うん♪」

フィ「だって、キスよ、キス！私だってまだしてもらったとことないのに！」

イヴ「そうだよ。私だってまだだよ？」

仁「一つ聞くが、レイにとってあれが初めてだと思っているのか？」

「「・・・・・」」

仁「ちなみにあれは契約だから。ノ―カン。レイ本人は意識してないから」

フィ「そうだとしても！」

イヴ「私たちはそれが悔しいの！」

仁「それと、もし三人が子供じゃなかったらしてたんだぞ？」

フィ「なにを？」

仁「身体的接触」

イヴ「？？？」

仁「ベッドでふもふも」

フィ「死ね！この変態作者！」

仁「ははっ、同じ手は食わんよ」

ていうか愛の女神であるお前がここまで言ってわからないのが俺は不思議だよ

イヴはまだわかってないのかわかってるのか。二人のやり取りを見ている

イヴ「じゃあ、皆。また次回でね♪」

※レイが契約のさい俺らと言いましたがあれは魔術師の場合ということです

第４５話　買い物は計画的に　（前書き）

もう、この一家だけで世界征服できるよな・・・

第４５話　買い物は計画的に

翌日

レイは市役所に住民票を出してきた。
血のつながりがないため養子として引き取ったということにしておいた。
年齢はどうするか悩んだが彼女達と同じでいいかということにしておいた。
まぁ共通点多いしな。

しかし、受付のお姉さんに変な目でみられたのは言うまでもない

夫　神乃　玲

娘
長女　神乃　銀
次女　神乃　李弐子
三女　神乃　有柴亜
四女　神乃　闇樹
五女　神乃　星音
六女　神乃　雷華

ということになった。

さて、これで問題がなくなったわけではない。
ここにあるのは俺が必要としているものしか置いていないのであい

つらに雑貨などを買いに行かなければならない。
まず、思い浮かんだのがあいつらの部屋だ。
部屋は大きいのを選んでおいたのであの身体なら当分は三人一緒で問題はないだろうがあいつらって成長するのか？
さっそく聞いてみた。

「なぁ星音聞きたいことがあるんだが」

「なんでしょうか」

俺の部屋の本を読んでいた星音に聞いてみた。三人の中では妥当だと思う。

「お前たちって成長する？」

「唐突ですね。そうですね、たぶん、成長するすると思いますよ。前例がないので確証はありませんがおそらく守護騎士と同じ性質だとは思いますがたぶん成長します。しかし、なんでそんなことを？私たちが成長すると困るのですか？」

「いや、成長するなら父親としては嬉しいし、成長しないなら俺個人としても嬉しい。
―まぁなんだ。大きくなったら部屋も個別にするつもりで考えていたからどっかに引っ越すつもりだったからな」

彼なりこれからの考えていたあげく個室、自分の部屋を欲しがるのは成長期の子供にはよくあることだ。まぁ、将来的にも必要だとも思う。

「はぁ・・・？今は特にそんなことを思ってはおりませんが、恐

らく私も私室は欲しいですね。自分の部屋というのは憧れます。今は、三人でいることのが楽しいと思っていますし」

「そうか、ありがとう」

まず、最初の問題は解決された。次は、雑貨。身の回りのものやとくに服だ。最初はあのバリアジャケットを着ていたが今はあいつらにプレゼントしようとしていた服を着させている。星音と同じくサイズはぴったり。

しかし、一着では生活に支障を浸すのでやはり何着か買っておかなければ。

「ということで買い物いくぞぉ」

『は〜い！』

三人と声を揃えて言った。

仲のいい奴ら。

愛車の車でちかくのしま●らにいくことにした。

前になのはか誰かが

―しま●らが本気をだすと凄いんだよ！

と言っていたのでいくことにした。

意味はわからんが恐らくデザイナーが本気をだして作った作品がたまにあるということだろうか？

彼の中で服と言うのは着る相手を自ら選ぶという物らしい。

その服の本当の魅力に気づいてくれる人を待っている。という感じらしい。

「一応何着か買っておけよ。今回は生活に必要なものだけを買えばいいからな。服とが靴下とかああそれと下着とか」

それになぜか反応したのか彼を叩く。

「このスケベ」

「兄ちゃんの変態～」

「失望しました」

などと言いたい放題。
だが、レイは気にせず。

「誰がお前らの服を洗うと思ってんだ？」

『・・・・・』

それを聞くと三人は頬を赤く染め黙った。
言われて気づいた自分が恥ずかしいと思った三人だった。

「さて、着いたぞ・・ってもういねぇ」

しま●らの入り口にもうついていたあいつらはやはり普通の女の子とかわらないと思った。

それからレイも店内に入り店をみていた。
先ほどちらっと見たが意外とセンスは悪くなかったのだがどうもあいつらに合う色は黒か黒と彼女達に合う別の色で赤とか青とか黄色とかピンクとかつまり絶対黒がついている。
まぁ黒だから仕方ない。
レイはというと自分の服はとくに買う予定はなかったのでなのは達に合う服を探していた。
彼女たちの服をあいつらが着てしまっているので代わりを買わなければならなかった。
最近彼は三人に合うものがあると買ってはプレゼントしていた。
理由はなんとなく。
今のところ全部見たがやはり各一人ずつしか見つからなかった。あいつらのいうしま●らの本気とやら商品がこれしかなかったのだ。
それは一般のブランドで出されているものとは比較にならなかった。

―すごいな、しま●らは・・

しみじみとしま●らの凄さを知った彼だった。
自分の用を済ました彼は三人の元へ向かった。

少し前に戻り三人。

「どう？いいのあった？」

「そうだな、我はそれなりに」

「私も同じく」

たった数十分で服を決めるとは子供にしてはめずらしかった。
三人は何着かの服と下着などといったものを選んだ。

一通り終えると雷華が何かを思いついたように言った。

「ねぇ、お兄ちゃんになにかプレゼントしない？」

「どうしてあんな塵芥に」

「どうしてですか雷華？」

「んっとね、これからお世話になるしそれに一緒に暮らしていく家族としてその・・色々とお兄ちゃんには助けてもらってばかりだから今までの感謝の気持ちとこれからの意をこめてプレゼントしようと思ったんだけど・・・」

星音と闇樹は顔を合わせ雷華に言った。

「お前にしては考えたな」

「そうですね、その頭で」

「えへへへ」

―『別にほめてないんだが（ですけど）』

と思いつつも雷華の考えには賛成だった。

少し恥じらいがあった二人だったが。

「そうと決まればさっそく選ばなければな。あいつのことだ。いつも身につけられるものがよかろう」

「そうですね。とりあえず男性の方のコーナーにいくましょう」

「うん」

三人はそういうと選んだ服が入っているかごをもって男性のコーナーの方にいった。

それからレイと合流し精算を済ませ今度は雑貨店にいくことにした一向。

レイは三人の計画には意外と気づいていなかった。

それから車での移動に１０分ぐらい。

近くの雑貨屋に到着した。

ここもなのは達に教えて貰った場所で女の子にも人気はあるが男性にも人気がある雑貨屋として町ではそれなり評判をえているようである。

小物から置きもの。はたまたアクセサリーやぬいぐるみ。財布やバックなども販売している。ちょっと部屋の模様替えにもいい商品があるという。

「さて、お前達好きな物買っていいぞ。ただし数に限りがあるがな」

『は～い』

そういうと三人はまず一直線に何故かぬいぐるみコーナーへ向かった。

「わ～。これかわいい」

雷華はそういうと商品を手にとって見せた。それは犬のぬいぐるみだった。

「そうですね、わたしはこっちの方がいいです」

何故か星音は珍しい？フェレットのぬいぐるみだった。

―やべぇなんかこのフェレットのぬいぐるみ見てるとなんか腹立つ。

レイは自分もそうだったのを思い出したのかライバル視していた。

「ねえ、闇樹はどれがいい？」

雷華は後ろに振り向き闇樹に聞いたがとうの闇樹は

「わ、我はそんなものはどうでもいい」

「えー可愛いけどな」

―さっき三人一緒に走ってたくせに。こいつ素直じゃねーよな

まぁ、二人とも気づいてるんだろうが。

そう思ってると闇樹は大きい黒ライオンのぬいぐるみを眺めていた。

眺めるたびに笑みをこぼし、ちょっと別のをみるとちらっとさきほどのライオンをみてまた手に取っては笑みをこぼしていた。

―仕方ねぇな

彼はその猫のぬいぐるみをかごの中に入れた。

「まったく、素直になれよ」

「わ、我は別に」

ふーと溜息をつき彼女の頭をなでていた。
彼女も恥ずかしながら何もいわずそれを受けていた。

「まっ、そこがお前の可愛いところでもあるんだがな」

「・・・馬鹿」

彼女の言葉はレイに届いていたかはどうかは本人しかわからなかった。

「さて、レジに・・・・・」

かごをもってレジに行こうとしたが彼はあるものに目を囚われた。

それは、ひょこんと他のぬいぐるみと混ざっていた。
それは黒ネコで天使の羽がついているぬいぐるみだった。

「・・・・・」

「――――」

とぬいぐるみを掴み取りかごに入れた。

「ぐう」

気色悪い声が聞こえたような気がした。
そのままレジにいき犬とフェレットとライオンと化け猫の他に食器やコップなどを合計で福沢さんが消えたとは思わなかった。

そして帰りの車の中。

「にしてもお兄ちゃんがこれを買うとは思わなかったな～」

その猫のぬいぐるみを手に取り眺めていた。

「レイ様もそういうのがお好きなのですか？」

「にしてもこのぬいぐるみ・・・変な違和感を感じるのだが」

「・・・そろそろ正体を明かしたらどうだ？」

『・・・？』

運転をしながら言ってはいるが誰にいったのかはわからなかった。
かれは左手をハンドルから離し指でちょいちょいとやるような感じの動作をすると雷華のもっていたぬいぐるみが浮きそのまま腕を下ろすとぬいぐるみがそのまま目の前に飛ばされ、ぶつかった。

「痛っ！」

『しゃべった！』

「やっぱりな」

それから神乃邸

「で、お前何者だ？」

「それはこっちの台詞よ。普通の人間に私が見破れるはずがないはず」

ぬいぐるみと奇妙な会話をしている一人と一匹。
椅子に座る彼とテーブルに座る彼女。

「別に俺は魔術師だし、変な感じがしたからわかったが」

「あら、そうなの？ところであなたいつ頃の魔術師？私の見立てだとかなり生きてるわよね？外道の臭いがするもの」

「そういうお前もな。俺はそうだなかなり前だな。魔女狩りが行われたころか」

「あら～かなり前ね。私はそれからちょっと経ったぐらい」

そんな会話を見てることしかできない三人。

「私は貪欲な女でね、生きながらへたくて魂の転生を繰り返していた。一応言っておくけど人間には転生していなわ。人間の場合リスクが大きすぎるもの」

「ほぉ、少しはできるようだな。で、いつしかそれにとりついたら

店に出されたと」

「そういうこと♪まぁこの身体は意外と気にいっているのよ」

そういうと猫のような仕草をし始めた。

「俺が見る限りお前の魔力の量はそれなりにあるようだな。普段魔力を抑えている」

「そうでもしないと管理局とかに捕まっちゃうんだもん」

「それは心配ない。その管理局の総帥がここにいるからな」

「へっ?そうなの・・それは助かるわ。輪廻転生は一応禁忌だから」

―そこは驚かないのでしょうか?

「ところでお前の名は?」

「雪の魔術師スノーと呼ばれていたわ」

「ほう、あの雪のスノーか」

「知ってるの?」

「ああ、雪を使うのに長けた魔術師だって風のうわさでな」

「あら~私も有名になったわね。私の紹介はしたんだからあなたも教えなさいよ」

「俺か?俺の名はレイル・アンヴァルト・Y・神乃だ」

「・・・え――――――――――!!!!!!!!!!あのレイル・アンヴァルトォ？？？？」

―あっそこは驚くんだ。

「なんだ、俺ってそんなに有名なのか」

「有名ってちょっとあんた自分の存在がどれだけ凄いか認識してるの！？」

「？」

―してるわけがなかろう

「“アンヴァルト一族”ってだけで凄いのよ、それにあなた『歩く悪魔』『協会殺し』『盗人レイ』とか色んな異名で呼ばれてんのよ？」

「あ～前に『女たらしのアンヴァルト』とか言われたことが」

―最低

「それに裏の世界じゃあ賞金かけられてるし」

「まぁ色んなとこ潰したりしたからな」

『ところでその賞金の額は？』

三人は気になってたので聞いてみた

「そうね、今でいうと軽くまるまる世界を買えるぐらいかしら」

―それって数値化できないんじゃ・・・

「へー前に聞いたのは一国を買収できるぐらいって聞いたな」

「それは凄いわね」

―なんで平然としていられるのでしょうか

「ところで私をここにおいてくれない」

「いいだろう、こいつらの監視と教育係を兼ねてな」

「いいわよ、教えるのは嫌いじゃないわ」

「ちょ、ちょっと待て！監視なら納得いくが教育係とはどういうことだ」

監視という言葉には引っかからない闇樹。

「お前達を学校に行かしてやりたいがなのは達がいるからな。ここで教えるしかないんだよ。魔法に関してはスノーが。普通の勉学は俺が教えてやる」

えーと言わんばかりの顔をしている。

「安心しろ。そんな何時間もやらせん。1，2時間ぐらいだから」

まぁそれならという顔をしている。

「ところで、お前ぬいぐるみだけどご飯だべるのか？」

「ん・・・まぁ変身すれば食べられるかな？」

『変身？』

四人合わせて言った。

「そ、まぁ見てて」

と何故かは知らんが浮かびボンっと効果音とともに煙が噴き出た。
煙が晴れるとそこには大人の女性が現れた。

「ひょっと、どう？」

その時激震が走った。
少女たちは直感したこいつは敵だと。
女の敵だと。

その姿は大人でそれは美人に分類されるだろう。
スタイルはよくさらにその服装はメイド服のような服に猫耳に尻尾。

「へー肉体はあったのか」

「ん、まぁ魂だけなんだけどなぜかね？私自身の元の身体＋その時
移った身体に反映されるみたいなのよ」

「便利なのか不便なのかよくわからんな」

「そう、なのよ」

するとまた猫の姿に戻った。

「変身に慣れてなくて後遺症か眠くなっちゃうのよ・・・・は～ちょっと寝させてもらうわ」

そういうとソファーに飛び丸くなって寝た。

「さて、夕飯の準備でもするかな・・・」

彼が椅子から立ち上がると三人は目を合わせて行動を起こした。

「お、お兄ちゃん」

「なんだ？」

「そ、そのお前には色々感謝している」

「はぁ？」

「で、そのお礼とこれからもよろしくお願いします」

「よろしく？」

「あ～もじれったい！これプレゼント！」

すると雷華が彼の胸に差し出した袋。

しま●らとプリントアウトされていた。

「お前らこれいつ？」

「お前がレジで精算しているとき」

「お客様、当店のポイントカードはお持ちですか？」

「いや、持ってないんだ」

「では、新規でお作りしますか？」

―ん、これから買いに来るだろうし一応作っとくか

「じゃあ、そちらの方でこちらに記入をお願いします」

ペンと紙を貰い少し離れたカウンターで手続きをするレイ。
その時三人が動いた。
三人はレジのお姉さんに頼んだのだ。

「あ、あのお姉ちゃん」

「ん？なにかな」

「こ、これもお願いします。そのプレゼントだから」

その店員は彼女達の行動を理解したのか笑顔でそれを了承してくれた。
先に袋詰めをし、彼にばれないように彼女達に渡す。一つではばれてしまうのでいくつかの服を袋にいれ持たした。

「がんばって♪」

『ありがとう・・・』

先に車にいってると彼にいいそれからはさきほどと同じだ。

あのお姉さんに感謝している三人だった。

袋を開け中身をみるそこには帽子、ネクタイ、手袋（滑り止めみたいな奴で一刺し指だけ出ているタイプ）があった。

「そ、それならお前でも身につけていられるだろう」

「・・・俺はあまりファッションとかしないからこういうのは買わないんだ」

―にしてもしま●らってこういうのも売ってるのか

しま●らの凄さを改めてしった彼だった。

というか普通に売っているのに知らないのは彼にそういう知識がないからでもある

「ありがとな」

「お兄ちゃん」

「ん？」

『これから、よろしくね（お願います）（頼むぞ）！』

「ああ、よろしく頼むよ」

そんな楽しげな家族の談話をスノーは２８２８しながら聞いていた。

第４５話　買い物は計画的に　（後書き）

「フィリーヤとイヴのフィリイヴの時間☆」

イヴ「マテリアルの三人、意外と可愛いところあるね」

仁「もちろんさぁ！本家の3人より実はマテリアルの三人が好きだったりする作者です」

フィ「まぁ、なんていうか色んなものが逆よね。性格とかそういうの」

仁「それがいいんじゃないか」

イヴ「さて、それは置いといて。多分読んでわかった人もいると思うけど銀たち三人はどこにいるの？」

フィ「そうそう」

仁「今まで出さなかったのは話を進めやすくするため。そろそろ出すから安心してくれ。ちなみに三人は余波被害を食い止めた後、レイに言われしばらく各々で泊まりにいっていたんだ。だから、家にレイしかいないわけ」

フィ「なるほどね。けど、帰ってきたらたいへんなんじゃないの？」

仁「それは最初だけ。なんだかんだで彼女達はある意味同じだから」

イヴ「なにが？」

仁「本来は消えようとした存在が存在しているという点とか」

イヴ「ネタばれだね」

フィ「それは言わない約束よね」

イヴ「ところで、アンヴァルト一族って？」

仁「最強の魔術師一族の名前。ここではあえて語りません」

フィ「それより地球を買えるっていうけど、売る人なんていないじゃん」

仁「例えるならそれぐらいの賞金」

フィ「女たらしのアンヴァルト・・・あとで問い詰めよう」

イヴ「・・・というわけでまた次回でね～」

第４６話　真・神乃家ファミリー誕生（前書き）

リアルで色々と大変でパソコンを封印してました

けど、ちゃんと更新していくんでよろしくお願いします

第４６話　真・神乃家ファミリー誕生

さて、今日までなんとか続いた平和
だが、それも今日まで

今日はあの三人が帰ってくるのだ。それまでの間に必要なことはしておいたから大丈夫。
ただ、あとはあの三人が納得するかだ

「ただいま～。私たちが居なくて寂しくなかった～？」

ほら、そんなことを考えてたらもう帰ってきた

「ん？これは・・・」

銀はみたことのない靴をみた。

「おかしいですね」

リニスも異変に気付いた

「ああ、おかしい」

そう言いながらリビングに向かう三人

「ねぇ、レイ。お客様でもき・・てる・・の？」

来てるならそんな大声だすなよ

「これは・・」

「え？」

三人はリビングに入るとありえない光景を目にした

「って！なんであんたたち三人がここにいるのよ！？」

「うるさいぞ」

「まったくです。少しは静かにできないのですか？」

「うるさいぞ～♪」

マテリアルズはソファーで各々色々やっていた。

「というか、それあたしのＰ○Ｐ！」

「落ちてから使ってただけだよ？」

アリシアは突っ込むところを間違えているようだ

「これは・・・。レイ、お前が？」

銀は冷静だった。

そもそも三人はある意味自分のせいで生み出された者たちだ。

「ああ、マテリアルの俺に頼まれてな」

「そう、か。危険性はないのか？」

「大丈夫。リンカ―コアは俺が預かっている」

「（その表現はどうかと思いますが）なら、よいのではないですか？彼女達も・・そうですね。私たちと同じ運命にあった者。それをあなたが―」

「わかってるなら話が早い。というわけで・・・」

『第２回神乃家家族会議』

やってまいりました。第２回神乃家家族会議
銀たち三人とマテリアルズが向き合うように座りレイがその中央、議長みたいな位置に座りその彼の目の前にスノーが寝ている

「というわけで、自己紹介から。
なのはみたいなのが星音。フェイトが雷華。はやてが闇樹。それと新しいペットのスノー」

「ペットじゃな～い！」

「ちっ。また、猫ですか？もう、この作品で何回私とキャラ、ダブってると思ってるんですか？」

リニスの性格が変わった

「まぁ、落ちつけ。お前はもう人の姿の方が定着してるからいいだろ？スノーは基本的この姿だから」

―まぁ言われてみれば私あんまり猫にならないでしたね

「わかりました」

「しかし、よくみてみると三人とも似てるようで似てないね。目つきとか、あと性格とか」

「そうなのですか？」

「うん。とくに星音？でいいのよね。あなたなんてなのはと比べれば大人しいし、雷華は子供ぽいし、闇樹は素直じゃないし」

「子供ぽいって。私ってそんなに子供かな？」

「ああ、子供だな」

闇樹が普通にいった

―というか馬・・・いや、言うのは止めよう

「闇の書、あなた―」

星音は銀に話があって闇の書と呼んだ

「闇の書ではない。夜天の外書、いや銀だ」

銀もそれを言われても怒らず普通に訂正した

「すみません、銀。あなたは私たちをどう思ってるのですか？」

「どうもこうも、お前たちは私たちの妹だ。それ以外にあるか？」

「「「・・・・・」」」

星音たちは自分たちが彼女ではないが彼女のせいで私たちが生み出された。そのことをよく思っていないと思ったのだ

「そうですね。銀お姉さま」

「よろしくね、銀お姉ちゃん！」

「うむ。よろしく頼む。銀姉上」

各自自分にあった呼び方で姉と呼ぶ

「私はリニスです。よろしくお願いしますね」

「はい、リニスお姉さま」

「うん、リニス」

「よろしく頼む。リニス姉上」

「雷華はリニスに対して姉と呼ばないのか？」

銀が気になったのできいた

「うん。なんだかそっちのが呼びやすいんだもん」

―まぁ私とてしてもそっちのが助かりますね。

「じゃあ、私もアリシアお姉さまと・・」

「はい、アリシア」

「うん、アリシア」

「ああ、アリシア」

「なんで私だけ!?」

何故かアリシアだけ姉と付けない三人

「だって、お前と三人はあんまり大差ないだろ?」

「「うんうん」」

銀とリニスはその通りと頷いていた

「ひ、酷い」

「それだけ、近いってことだからいいんじゃないのか?別に姉と呼ばれるから姉というわけじゃないだろ?」

「まぁ・・・そうだけどさ・・・・」

―だってお姉ちゃんって呼ばれてみたいだもん。フェイトなんて恥ずかしくて呼んでくれないし

「アリシア、どうしたの?大丈夫?」

心配になったのか雷華が声をかけた

「・・・雷華ぁ」

雷華はフェイトじゃない。フェイトが私の実の妹?だけど・・・

むぎゅ

「???どうしたのアリシアぁ?」

「私、フェイトより雷華がいい!」

いきなり雷華を抱きしめたアリシア

「おいおい(―_―;)」

「ねぇ、雷華。あなただけでもお姉ちゃんって呼んで?」

「どうして?」

とうとう自分の欲を出し始めた

「お願い!」

「う～ん。わかった。じゃあ、アリシアお姉ちゃん！」

「ドキューン！・・・あなたは私の妹よ！ていうかフェイトなんていらないぐらい！」

「はは♪」

―雷華って天然で子供ぽいだけに危険だな

―ええ、まったく

―あやつ、ある意味恐ろしいかもしれないな

―ああ、本家より凄い破壊力だ

―アリシアなんて一殺ですもんね

―それだけ可愛いってことじゃないの？

二人以外の者が念話で話し合っていた

「さて、紹介もすんだし。実はスノーには三人の監視と教育係を任しているんだ。リニス、お前にも頼みたいんだがいいか？」

「はい、構いませんよ」

「よく、考えてみたらスノーは魔術師だから魔法に関してはリニスに任せる。その代わりスノーには監視役を頼むぞ」

「はい」

「はーいにゃ（ワザト）」

と一通りのことが済んだので

「昼飯にするか」

『賛～成』

それから一行はレイの昼飯をたべ一日を普通に過ごしたのだ

そして、ここに新たな家族が誕生したのでした

第４６話　真・神乃家ファミリー誕生（後書き）

「フェリーヤとイブのフィリイヴな時間☆」

フィ「と、本当の神乃家が誕生したと」

仁「そういうことになるね」

イヴ「それにしてもずいぶん更新が遅れたね」

仁「リアルで色々とあったため更新や感想がかけなくて本当すみませんでした
これからはちゃんと更新していきますんで」

フィ「それにしても・・・・マテリアル編はどのくらいやるの？」

仁「なのはたちと接触させて、予定では戦闘を予定しているけど多分なのはＶＳ星音になるかも。あとの四人の戦いはたぶんかけない」

イヴ「どうして？」

仁「書きたいんだけど、なんていうか都合上により？みたいな」

フィ「まぁいいんじゃないの？」

イヴ「そうだね。私たちには関係ないし」

仁「いいのかよ」

フィ・イヴ「じゃあまた次回で」

第４７話　まずはお話から？（前書き）

少し自分でも納得いかない部分があるんですけど結局思いつきませんでした

はやてのとこで

第47話　まずはお話から？

さて、私、管理局総帥レイは今ある悩みを抱えている

いやね、家族が増えて楽しい日々を送ってるんだけどね？

やっぱり隠し事って長く続くわけないじゃん？

だから、そうなる前になにか、きっかけを作ってどうこうしようと思ってたんだ

何かって？

それは―なのは、フェイト、はやて。御本家の三人と我が娘の星音、雷華、闇樹の紹介でもしようかと考えていたんだよ

そう、していたんだよ！

けど、銀の奴が勝手にしくみやがって・・・

・・・・・・

「ん？そのことならもう平気だぞ？」

え、なにそれ

「私がもう、そういう設定にしておいた」

どうやって？

「外書の中にとある記述に関する頁があるのだが、それは人とのコミュニケーションをとるにはばっちりなものなのだ」

へー。それは便利だな

俺はそういって現場に往ってみた。なんでも、もう準備は整っているらしい

そこで俺は目を疑った

そこには、いや、そこは見合い会場（和風）だった

互いに向き合って座る6人。その中央に座る俺。まるで、仲介人みたいだ

「え、えーとこちらが」

珍しく俺は緊張していた

「どうも、始めまして。この人の“娘”の神乃星音です」

「同じく闇樹」

「同じく雷華～」

ブチ

あーあ。なんで火に油を注ぐかねこいつらは（泣）

「ど・う・も初めまして。レイくんの“一番弟子”高町なのはです！」

「初めまして。兄さんの“永遠の妹”フェイト・T・ハロウンです！」

「レイ兄の“料理補佐”八神はやていいます！」

もちろん、三人とも怒のマークつき

ていうかはやては・・・うん。まぁ俺の補佐なんて滅多にできないしすごいぞ

「「「っ」」」

「「「っ」」」

っ　って言った！こいつらっ　って言った！

「娘の癖に調子のらないでくれないかな？」

「別に娘だから甘えて当然では？」

「兄さんの妹は私で十分です」

「？私はお兄ちゃんの妹だよ？」

「調理したろうか？」

「ふん、してみろ塵芥」

もうやだ。帰りたい

「！―なのはちゃん、フェイトちゃん」

「「？」」

はやてはこんなごみごみとした中で何かに気付いたようだ

※小声で喋っています

「いいかぁ？三人には娘や。だから、絶対できないことがある」

「絶対にできないこと？」

「はっ！もしかして・・・」

「そう、結婚や」

「なるほど、それが娘の限界」

「将来きっと私たちが有利になる。だから、今は堪えるんや」

「うん、そうだね」

「はやて、冴えてる」

―と、思ってるんでしょうが

―甘いな

―甘い、甘い。チョコレートなんかより甘いぞ～

マテリアル三人はなのは達三人の考えを見抜いていた

―確かに、我々は娘だが、あやつを諦めたわけではない

―私たちは絶対的な掟により今はそうしているだけです

―そうだよ。レイは私たち家族（娘）のものなんだから

掟

それは『神乃家の掟（娘同士）』と呼ばれているものだ

一人は皆のために

皆二人のために

というもののらしく

レイは一人のものではなく皆（私たち娘）のもの

らしい

※もちろん銀たち三人もこの掟に入っています。ていうか設立したの、この三人

―ていうかこのままじゃラチがあかない

というわけで

「もう、勝負かなんかでケリつけろ」

と半分駄目もとで言ってみた

「じゃあ」

「なのはちゃん」

「うん、任せて」

「では、こちらは星音が」

「頑張れ～」

「仕方ありませんね」

―あるぇ？なんか殺る気オーラが出てるんですけどぉ

というわけで次回　なのはＶＳ星音

乞うご期待！

「・・・・・おかしいな。確かに本にはこうするといいと」

その発端である銀が本を読んでどこで間違えたか調べていた

第47話　まずはお話から？（後書き）

「フィリーヤとイヴのフィリイヴな時間！？」

フィ「なんかとんでもないことになったわね」

仁「なんで、こうなった！？」

イヴ「知らないよ。ちゃんと責任持ってやんなきゃ駄目だよ？」

仁「はいぃ」

イヴ「というわけで次回は珍しく作者が戦闘シーンを書くので期待しないで待っててね？」

仁「酷い・・・
それと今回はやての料理補佐とか言いましたけどアレ、自分では納得いってないんです。はやてに当てはまるものが思いつかなかったんです。もし、よろしければ、はやてにあうレイ兄の○○・・というのがありましたら教えてくれるとありがたいです」

フィ「次回を乞うご期待」

※追記

次回更新はかなり長くなると思います。戦闘シーンに時間がかかるそうなので。

それと来週は期末なんで更新も感想もかけない日が続くと思います。

第４８話　なのはＶＳ星音（前書き）

更新遅れてすみません

期末のために勉強を・・・そんなことしなかったぜ！
実は言うとパズルやっててそれが原因
だってクドだよ！クドリャフカ！
１０００ピースはきついわ・・

第４８話　なのはＶＳ星音

「それじゃあ、二人とも。準備はいいか？」

会場から場所を移し、レイの訓練空間
ステージは主に空中戦を設定している

なのは、星音。両者とも準備はできていた。
星音は先ほど彼からリンカーコアを一時返還してもらった

「私はいつでもいいよ」

「私も構いません」

互いに得物を構える二人

二人の能力は恐らく同じだろう。
互いに同じ存在であり、別の存在であるがために

「では、始め！」

彼の合図でまず、二人がとった行動は―距離の確保だった

―やっぱりとるべき行動は同じか

実況はレイで送りします

「アクセルッ！」

「パイロ！」

『シュートォッ！』

6個のシューターが螺旋を描きながら向かっていく
なのははさらに高く飛び回避行動をとる
しかし、星音は―

「ほう、星音は留まるか」

そう、星音は動かない

「え！？」

なのは一個ずつ確実に落としていくが星音の行動には驚いたようだ

「で、どうする（にやり）」

レイは楽しそうにみていた

なのはの放ったシューターは一個一個別の動きをしながら星音に迫る
そして

ドン！

星音に当たった

「避けない？」

「なんでや？」

彼と一緒に見ていたフェイトとはやては不思議に思っていた

「いや、もう、なのはの後ろだ」

「嘘！？」

レイが言うのと同時になのはも気づいた

「ふん！」

「ん！」

互いにぶつかりあうデバイス

―軽い？

なのははある違和感を感じた

動きは速いのに今受けた攻撃はとても軽いのだ

―そうか、これは。なら

「えい！」

なんとなのはは星音に向かって蹴りを入れた

「ぐぅ！」

その攻撃には驚いたようで弱い攻撃だが星音には十分だった

「うそ」

「なのはちゃんがあんな攻撃するなんて」

「ふむ。星音も星音だが、なのはもちゃんと成長してるじゃないか」

「兄さん、星音のあの動きって」

「魔力を防御にではなく機動力にまわしたんだ。しかも、シューターが自分に当たる寸前の所で、だ。だから、攻撃、防御にまわす魔力も最低限に抑えてるからなのはの攻撃が通ったんだ。しかし、あそこまでいくともう達人の域なんだが・・・あいつ、今の動きもあるがどこで覚えたんだ？」

普通なら、ぎりぎりの所で回避。しかし、星音は本当に自分に当たるぐらいの所で回避したに違いない。そうでなければシューターを止めることはできないからな。

だが、今回リンカーコアを還したばっかりなんだがいつそれを身に付けたがわからなかった

「痛いですね。前に戦った時より少し腕をあげたようです」

蹴られた腹を押さえながら言う星音

「あなたも」

―で、そんな技どこで覚えたんだ？

レイが念話で星音に聞く

―・・・とある本を読んでちょっとやってみたかったんです

「・・・・・・」

レイは隣にいる雷華と闇樹をみた。

―たしか、雷華とかが漫画読んでたがそれを・・・

「さて、あなたを潰すのに遠慮はいりませんね」

「それは私もだよ。今回も堕としてあげる」

「ふふ」

「にゃはは」

『・・・・・』

『ッ』

再び戦闘再開

―星音はともかくなのはまで物騒な言葉使いになってるな

それからというもの二人の戦いはなんともいえないものだった。
理由は簡単だ。二人とも同じだからだ。といっても多少違う部分もあるが。
ただ、見ている側にとってはつまらないものだった

「なんか、同じだね」

雷華がさっそく飽きたようだ

「鏡で写してるようなものだろうな」

闇樹もなんだかんだで飽きている

「そうだな」

レイもだった

空を見上げ激突する二人

なのは・星音ｓｉｄｅ

「あなたがいると迷惑なの！」

「なにがですか？」

「あなたがいると私が困るの！」

「そんなこと知りません。私も言わせてもらいますがあなたがいると邪魔です」

ブチ！

「私だってそうだよ！ただでえ、最近はあってくれないんだから！」

会ってくれるのは特訓のある日ぐらい

「嫉妬ですか？見苦しい」

嫉妬？

「その思いだって私からできたくせに！」

ブチ

「確かにそうかもしれません」

私はあなたを元にして生み出された。この姿も声も思いもあなたのものからだったのかもしれません

けど、今、私が抱いているこの思いは―今の私の感情はあなたではなく私、私自身のもの。

だから、この思いを侮辱されることは

「許しません・・」

なのはは星音に嫉妬し、星音はなのはに怒りをぶつける
この戦いが何を目的に行われているのか
もう、二人にとってはどうでもいいものになっていた。
なのは・星音ｓｉｄｅＥｎｄ

レイｓｉｄｅ

二人の戦いをみているとふと気付いた
―そういえば、星音はなのはを元にして生み出されたんだからレイジングハートも元にしてルシフェリオンが生み出された。ということになるよな
ルシフェリオン。星音がもつデバイスだが、インテリジェントデバイスではなくストーレンジデバイスに近い。
―あいつらの場合純粋な機械な方が戦いやすいからな。
それはさておき、ルシフェリオンもレイジングハートを元にしているなら当然ＴＰＣシステムも積んでるわけだし、それに“アレ”も積んでるわけだよな・・・・
「まぁ、アレが発動することなんて・・・・おっ」
どうやら決着がつきそうだ

レイｓｉｄｅＥｎｄ

「シューット！」

なのはがシューターを放つ
星音は今まで通りにそれを避けようとするが今回は違った
そのシューターはエネルギーの塊だけではなくその球体の周りに金色のリングが装着されていた

「なっ！？」

星音は回避する直後シューターから飛び出した紐によって手足を封じられた。
手足を一つずつ大の字のように

「くっ！堅い」

「それは簡単に外せないよ。これはアクセルシューターのバリエーション。設置型のバインドじゃなくて追尾型。言うなればバインドシューターかな」

この技は私が思いついてレイジングハートと一緒に編み出したもの。
実は言うとシューターについてるリングはおまけなんだけどその方が相手は警戒するという意味もある

「じゃあ、終わりにするるよ！」

『ロードカートリッジ』

間合いをとり彼女の足もとに大きなミッド式の魔法陣が展開された

「うぅう」

それをみたフェイトが怯え始めた

―そういえばフェイトと状況が似てるよな。バインドされてのアレを食らったから少しトラウマになってんだろうな

「スターライトォ・・・・」

なのはの馬鹿げた魔力が集束されていく

―このままでは・・・・

星音自身アレを喰らったら危険という以前に敗北ということはわかっている。

防御をしても貫通してしまう。

逃げることもできない。

―よくわかりませんがアレをやってみますか・・・

「ブレイカァアア―！」

ドドド　ドーン！

当たった。今度は絶対

なのはには自身があった。

あのバインドは絶対ではないが解くのに時間がかかる。その間にこちらが決めれば絶対勝てる。
防御をしても絶対防げない

「はぁはぁ・・・どう、かな?」

爆煙でまだ星音の姿は確認できない

―けど、手ごたえはあったはず

「いや、まだだ」

気付いたのはレイだった

「―少し汚れてしまったようですね」

「嘘・・」

いつものようにふるまう星音。
確かに所どころ汚れている

「そんなどうやって」

「では、今度はこちらの番です。集え紅星―」

血のように赤い魔力が流れ星のように集まっていく

「その技は前に―っていつのまにバインドを!?」

反撃しようしたなのはだがいつのまにか手足を封じられていた

「自分で言うのはなんですがこういうのは得意です」
簡単に言えば隠れて色々やるのが得意ということだ
「さぁ、終わりにしましょう。紅星たちよその砲火で彼女を」
なのはのバインドシューターと同じようなものが出現した。
しかし、周りについているのは円ではなくひし形
「これって・・・」
「そうですね。言うなれば砲撃型―カノンシューター」
「って、私と同じだよ！」
「いいえ、名前が違うから別物です。
では、逝きましょうか。ブラストォ・・・・・」
なのはのディバインバスターと同じそれ。
さらになのはを囲む４つのシューターも発射態勢になる
「ファイヤァ――――――！」
ドドドドド　ドッカ―ン！
計５つのディバインバスター並の威力を持つ砲撃がなのはを襲った
「なのは！」

「なのはちゃん！」

フェイトとはやてが叫ぶがレイはあんまり心配していなかった

―非殺傷設定だしな

爆煙が晴れなのはの姿が現れた。

その姿は星音よりボロボロで右腕を負傷したのか左手で抑えている

「そこまで！勝者　星音！」

レイは二人がいる上空へと向かいながら言い放った

「負けちゃった・・・・」

なのははとても悔しかった。

勝負に負けたのはとても悔しいがなにより星音に負けたのがとても悔しかった。

魔導師としてまたなのはは女として負けたと思った

「―お前の敗因はその迷いだらけの心だ。だから、星音に負けた」

「！」

レイにはお見通しだった。中身ではなくその煩悩というのだろうかそれとも邪念がなのはの敗因ということはわかっていた

―誰のせいでこんな思いしてると思ってるの・・・

なのははは心のなかで怒りに近い思いを抱いた

―それにしてもこれは一体なんの勝負だったのだろうか

「まぁいっか。じゃあ、家まで転移するから」

「え、レイくんちょっとま―」

なにかを言いかけたところでなのは、それに下にいたフェイト、はやても転移した。

残ったレイのマテリアルズだ

「そんなに急ぐこともなかったのでは?」

そう。そんな慌てることもないだろうに。

「ちょっと聞きたいことがあってな。お前、あの時“アレ”起動しただろ」

「・・・ばれてましたか」

「当然だ」

あの時というのは星音がなのはのスターライトを喰らったときのことだ

「えーなになに?星音なにかしたの?」

「お前は黙ってろ」

雷華が興味津々に聞いてくるが闇樹が空気を読んで雷華を黙らせた

「で、いつそれを知った」

「いつといわれましても最初からこれのことは知ってましたがよくわからないので使っていなかっただけです」

最初とは生み出された時からか

「しかし、この姿・・・ＺＥＲＯどう思う？」

先ほどの戦闘をＺＥＲＯに録画しておいてそこの部分だけで解析していた

その映像が映し出される。

そこに写っているのは確かに星音だが周りに変なオーラというのだろうか。

星音の魔力色は紅紫に近いような色だ。それが反転。明るい色をしている

『どう、と言われましてもどうみてアレなんでしょうがアレじゃありませんよね。

なんというか逆のものになっています。

推測するに彼女達はなのは達の逆の存在です。あ、例えるならですよ？

それでルシフェリオンもレイジングハートの機能を受け継いだ。が、逆のものにシステムが変わったとしか』

ＺＥＲＯが冷静に分析をするが正しい答えが出てこない

「まぁそれが妥当だよな。悪から聖に変わってる感じがするし」

「ところでこれはなんなのですか？」

いい加減気になってしかたない星音

「お前が使ったのはそれを起動する前の動作だ。簡単に言えば敵から間合いをとるとかそんな感じでエネルギーを放出したような感じかな。そのエネルギーがバインドとスターライトを中和したのかもしれん」

レイなりに分析したことを伝えるがレイ自身これはまったくの想定外のことなので確証ない

「まぁそれはいいとして結局これなんなんですか？」

レイがにやりとした顔をするがそれはすぐに消え真剣な表情に変わる

「簡単に言えば秘密兵器。けど、人には扱えない代物だけどな」

「けど、私は使えました。その一歩手前ですけど」

「まぁな」

「では、彼女にもあるのですか？」

「もちろん」

まぁ本家があっちだし

「では、彼女がこれを使ったら？」

・・・・

彼は一旦間を置いた

「実は本人にも教えてないが・・・そうだな。あいつが使えば―」

彼は焦らすように喋る

「―死ぬ」

なのはｓｉｄｅ

彼に転移され家についたなのは。

バリアジャケットは解除して今は自分で傷ついた身体を治療中

お前の敗因はその迷いだらけの心だ。だから、星音に負けた。

彼の言葉よぎる

「痛いなぁ・・・・」

軽症だが痛みがまだ残っている。

「心配してくれてもいいのに」

大丈夫か

そんな言葉もかけてもらえなかった

「私より星音のほうがいいのかな・・・」

同じ顔、身体をしてる彼女。
今は彼の娘。

「私ってなんなんだろう・・・」

最近は特訓以外あまりあわない。
最初のころに比べれば減ってきている。
それに私を遠ざけている気もする

レイがなのはを遠ざけているというのは言い方が悪いがそれはなのはだけではなく皆を巻き込まないことだということをなのはは知る由もなかった

「レイくんにとっての私ってなんなのかな・・・」

「もう、どうでもいいのかな・・・」

彼女の心中で闇がどんどん広がっていた

なのはｓｉｄｅＥｎｄ

第４８話　なのはＶＳ星音（後書き）

『フェリーヤとイヴのフェリイヴな時間』

フィ「なんか女の戦いが繰り広げられているわね」

イヴ「それにしてもなのはちゃん可愛そう・・・」

仁「そういう伏線です」

フィ「戦闘は手抜き出し」

仁「戦闘よりその会話が重要なんです」

イヴ「アレとか出てたけどなに？」

仁「それはｓｔｓで。
さて、マテリアル編はこれでお終いになります」

イヴ「急だね」

仁「そうなんです。けど、ネタがあるけど無理っぽいんで諦めました」

フィ「じゃあ、なにかやってからｓｔｓに入るのかしら？」

仁「うん」

イヴ「じゃあ、今回はこの辺で。次回は何故かできあがってるので近いうちに投降すると思うよ♪」

フィ「それじゃあまた次回」

第４９話　依頼（前書き）

今回は本編とは少し離れた話になります。
伏線というのもありますが半分はネタとか面白いから入れてあります。
登場する作品はできるだけ戦闘のプロや銃を使ったりする作品を取り入れました。
ただ、面白半分で出したのもありますが・・

第４９話　依頼

並列世界　地球　メリダ島

「で、これがあなたの依頼ですか？」

小さな少女は彼に聞いた
名をテレサ・テスタロッサと言う

「ああ。けど、いつかはわからない。一応もし、起きたとしての場合だ。実際に起きたらまた別料金で支払う」

「いえ、別にお金はどうでもいいんです。けど、なんで私たちに依頼を？あなたは組織のトップ。なら、部下たちを使えば・・」

「その部下では高確率で相手にならないからだ。それに、あいつらは死を知らない。人の死を」

あんな平和ボケした奴らに人が殺せるとは思えない

確かにそういう事件に関わる者もいるだろう
だが、自分から人を殺したことはない
まして、目の前でそういったものをみた者はいないからだ

「もしかして、相手は―」

「同じ人間だよ。まぁ半分が傀儡だろうが」

どうせ、変な研究に使った実験体とか使いそうだが

「けど、奴らも馬鹿じゃない。有能な配下もいる。魔術師も兵士も」

「そういえばあの教団は魔術師以外にも兵士を派遣してるんでしたっけ？」

「派遣と言うより介入か。いい人材をみつけてはスカウトとか称して色々と実験するつもりなんだよ」

有能な魔術師の才能があるものは魔術師に。それ以外の有能な人間は兵士となる。魔法とを使わず質量兵器を使う厄介な敵さ

「酷いですね」

「酷いってレベルじゃないさ。
それと恐らくＡＳは必要ないからＳＴＲによる白兵戦になると思う」

「わかりました。皆にも伝えておきます」

「助かる」

ＡＳに乗っていなくても彼ら個人の能力は高い。
戦闘に関する技術も一級品だ

「ところで、最近宗介とはどうなんだ？」

「別にこれといって・・・」

「まぁほとんどかなめと一緒だからなあいつ」

こっちにいるより日本に滞在している期間の圧倒的に長い

「はいぃ」

「最近は普通というのも慣れてきたし、そろそろ自分から手を出したらどうだ？」

「でも、どうやって？私、ドジですしそれにそういう経験があまりありません」

「ふっふっふ。そのための俺じゃないか。命令と称してこっちに呼んで任務と偽ってグァムでデートでもすりゃあいいんだよ」

「い、いいんですか！？そんなことして」

「こまぁけえことはいいんだよ。要はそこでどれだけ宗介を自分の物にするかだ」

「私の、もの・・・」

だんだん催眠術をかけているような感じになってきた

「そうだ。かなめには悪いが俺はお前を応援しているからな。そこで、ハグとかキスとかじゃなくてもう大人の階段登っちまえ」

「大人の階段！？」

「そうだ。そうすれば肉体的関係のできあがりさ。とにかくかなめとの差を大きく開くんだ。というわけでマオ！クルツ！」

「「はっ、ここに！」」

部屋の隅っこから忍者のように現れた

「メリッサ！？それにウェーバさんも！？」

「宗介の今後の予定は？」

「特にありません。狙うなら今かと」

「しかし、勘のいい天使のことです。我々の行動に気付くかもしれません」

「あ、あのー」

「よし、善は急げだ。
さっそく宗介を呼び戻せ！グァムの一番いいホテルを確保！」

「「イエッサー！」」

二人は颯爽とどこかへいってしまった
そんな彼らのやり取りをただ茫然としていることしかできなかったテレサである

「でも、相良さんとふふっ。これでかなめさんと大きく―きゃ！」

何もないところで転んだ彼女だった

並列世界　地球　某所

「というわけでお願いできるか？」

レイはとある場所に来ていた

「あなたには借りがある。それを晴らすにはいい機会」

彼が交渉しているのは江漣（エレン）と呼ばれる女性

「あなたもいい？玲二（レイジ）」

「ああ、俺は構わない。キャルもいいか？」

「私は玲二と一緒ならいいよ♪」

玲二と呼ばれる男性に腕を組んでじゃれているのはキャルと呼ばれる女性だ

「・・っ」

今、っ、って言った

レイは密かに思った

「報酬は当分の資金。後はインフェルノの方は俺が何とかしよう」

「そんなことができるんですか？」

インフェルノ
それはかつて三人がいた組織の名。その組織の殺し屋「ファントム」
その名は最強の殺し屋に与えられる称号。三人は元「ファントム」
だった
今は色々あって追われている

「まぁ、色々とな」

不安が残るが三人とってはありがたい話しだ。
これで組織からの追ってもなく静かに暮らせる
けど、もし、狙われることになるのなら殺すしかない。生きるため
に。

「それにしてもお前ら兄妹にしては全然似てないし家族にはみえな
いから色々と大変だろ？」

「え、ええ、まぁ」

「まぁ、私と玲二は夫婦で通ってるけど！」

「・・・キャル、それって私に喧嘩売ってるのかしら？」

「なんのことかキャル、わかんな～い♪」

「・・・」

「・・・」

「くくっ・・・ぷ」

レイは笑いをこらえようと腹を押さえている

「ふ、二人とも喧嘩は・・・」

「「玲二は黙って！」」

「―はい」

尻に敷かれている玲二である。

「お前も・・・く・・たいへんだな（笑）」

「誰の所為ですか。誰の」

最終的に二人の喧嘩は銃を使うところまでいったが玲二がなんとか二人を止めた

レイはその隙にとんずらしていた

並列世界　地球　公安９課

公安９課の課長室に彼は赴いていた

「わかりました。あなたの依頼を受けましょう。少佐も異存はないか？」

課長である荒巻は９課の隊長でもある草薙素子。仲間からは「少佐」と呼ばれている

「ええ。彼には借りがたくさんあるからここで一つ返しておくのも悪くないわ」

「そう言ってくれると助かるよ。素子」

彼と素子は親しい関係で彼は少佐ではなく素子と呼んでいる

「それにしてもこれほどいい話はないよなぁ。前金（内緒で）でこんなに貰っておいて事件が起きたらさらに上乗せ。しかも、弾は全部あんた持ちだ」

彼の名はバトー。まぁいいおっさんである

「なんなら弾は全部そっち持ちでもいいんだぞ？」

「おー恐い」

「しかし、もし起きたとして、内部の戦闘だとタチコマの機動性は中々活かせないわね」

タチコマとは9課のみ配備されている高性能ＡＩロボットである。
これが可愛いんだ。
レイも一機ほしいぐらいだと言っていた

「広い場所にでるならそれなりに活用できるがほとんどが情報錯乱（ジャマー）かな。多くて3機か4機投入が限度だ」

「あの子たちのことだから任務よりも目の前のことで仕事にならないかもしれないわね」

『失礼な！僕たちはそんなことしませんよ！』

いきなり回線に割りこんで現れたのはそのタチコマだった

「お前、また勝手に盗み聞きしてやがったな」

『違いますよ。バトーさん。たまたまです』

「それを盗み聞きと言うのよ。少しは考えないさい」

『はーい』

「タチコマは相変わらずだな」

「それが悩みの種よ」

タチコマのことで頭を抱える素子だった

その後タチコマを一機くれと交渉したが駄目だった

並列世界　地球　ロアナプラ　ラグーン商会事務所

ここはロアナプラ

ぶっちゃけ言えば危ないところ

そんな場所に彼はある知人たちがやっている事務所へと赴いていた

「で、引き受けてくれるか？」

「引き受けるも何もこんないい仕事はどこを探したってないぜ。なぁレヴィ？」

サングラスをかけている大柄男の名はダッチ
ここのボスみたいなものだ

「ああ、まったくだぜ。こんだけありゃ、軍にだって喧嘩を売れるぜ」

二丁拳銃（トゥーハンド）使いのレヴィ。
彼女が言いたいのはその前金で大量の武器を買えるってことだ

「そんなことをしないでどっかのリゾートでも買った方がよっぽどいいと思うけど」

「僕はスーパーコンピュータが欲しいね」

サラリーマンのような格好をしているのがロック。
メガネをかけているヒッキーみたいのがベニー

「ロック、お前はわかってねぇな。そんな金の使い方したら金が泣いちまうぜ」

「はいはい」

「それにしてもレイの旦那。一体どういう風の吹きまわしでこんな仕事を？」

「ん？まぁ保険だ。保険。あまり気にしないでくれ。まぁ、実際に

起きたら派手にやっていいから♪」

「ホントか！？」

「ああ。なんなら戦車だって用意してやろうか？」

「おいおい」

「まぁそういうわけだ。よろしく頼む」

「おう、任せておけって！」

「レヴィの任せろはロクなことにならないからな」

「「言えてる」」

「んだぁと！」

並列世界　地球　カリブ海　マザーベース　司令室

副指令であるカズはある依頼書に目を通している

「・・・なるほど。これほどいい仕事はないないな。どうだ、スネーク？」

隣で葉巻を吸っている軍人はスネーク。ＢＩＧＢＯＳＳと呼ばれる英雄である

「俺は構わない。なによりレイには借りがあるか」

「借り？」

とうの本人は気づいていない

「戦場で、というものある。だが、今を言えば彼女を助けてくれたことだ」

「・・ああ、パス。来る途中助けただけだ」

彼はそういうが知っていて彼女を助けここに連れてきたことは二人もわかっていた

「で、本当に記憶を？」

「ああ、消した。名前の通り平和に暮らしているのが一番似合う子さ」

彼は記憶を消したのだ。ここで起きたことを。彼女がなのためにそんなことをしたのかを

「便利だな。魔法（マジック）ってのは」

「そうでもないさ」

「そうなのか？」

「そういうものだよ。どんなことをするにも色々と対価とかそういうもんが付きまとうものさ」

「・・・ふー。しかし、このダンボールは素晴らしい」

「スネーク！？」

彼はレイが持ってきたダンボールに見惚れていた

「それは、紙の間に超軽量、しかも頑丈な装甲板入れてある」

「素晴らしい・・・。ダンボールはここまで進化するのか・・」

見た目はどうみても普通のダンボールなのにそこまでしてあるとは思えないものだ

「カズ、今すぐにこれを量産しよう！」

「い、いや、まずは皆と相談してからだな」

カズはこんなもん使い道があるとは思えないと思っていた

「そういえばレイ。お前さっきから一回も吸ってないが禁煙でもしてるのか？」

「ん？ああ。教育上よくないと思ってな。それに、最近吸ってないし」

実は彼、前まではタバコを吸っていたのである。しかし、ある日を境に一旦止めていたのだ

「そうか。あれほどタバコが似合う男がな」

「言うな」

「そうなのか！？」

カズが面白そうなので突っ込んでみた

「もう、いいから」

レイはもう疲れていた

並列世界　地球　某所

「やってくれるか黒？」

「俺は構わない。しかし、銀しだいだ」

「私も平気」

「いいのか？」

「うん。彼が言うようにもう、ここにいても私たちは平和に暮らしていけない」

どんなところにいて敵が二人を襲う。
黒がどれだけ銀を守ろうと限界はある。

「そうだな。もう、いいのかもしれない」

「なら、手はずは俺が整えておこう。安心しろ。そこではお前たちを消そうとしている奴なんていない」

「助かる」

「・・・ありがとう」

―ほんと、もっと笑ったどうだろうと思う。

「それじゃあ、その時になったら頼む」

二人は頷き彼は消えた

並列世界　地球　地球書デカベース

「ぐるる」

彼の目の前にいる狼の男・・ドギー・クルーガはデータを見ながら唸っている

「黄金の夜明け団。あのアブレラともつるんでいたという。他にも犯罪者(アリエナイザー)たちと手を組んでいるという噂もあるという」

「ああ。と言っても大半のアリエナイザーは実験体として利用されている」

「それは無視できない話ですな」

「それもある。しかし、そのアリエナイザーたちはデリート許可がおりてる奴らばかりさ」

「で、私たちはその時になったら・・・」

「うむ。そういうことだ。そいつらをデリートしてほしい。他にもアリエナイザー以外にも犯罪者いるからそっちもデリートしていいから。まぁ人間だけど」

「そこは手厳しいところですな」

「お前たちはプロだ。そこは信頼している」

「褒め言葉として受け取っておきます」

「それじゃ頼んだぞ」

「わかりました」

並列世界　地球　某所

（０ｗ０）「今さら俺になんのようですか？」

「今さらって酷いな。たまに会いに来てるのに」

（０ｗ０）「ところでこんな俺になにをしろって言うんですか」

「お前の力を貸してほしい」

（０ｗ０）「こんな俺の力をですか？」

「そうだ。これを」

（０ｗ０）「・・・ブレイドバックル。もう一度慣れっていうんですか？」

「例えお前が人でなくても俺にとって、お前はまだ仮面ライダーブレイド　剣崎一真だ」

（０ｗ０）「俺はまた、こいつで誰かを守れるんですか？」

「なにを言っているんだ。お前は例え怪物の姿でも誰かを守っていた。だから、これからもお前は守り続けるんだ」

（０ｗ０）「ありがとう。レイさん」

「礼には及ばない。じゃあな」

彼はそういうと帰っていた

並列世界　鳴海探偵事務所

疾風「いいねぇ。異世界・・ぞくぞくするねぇ」

切り札「しかし、ガイアメモリ―が異世界に流通してたとは考えなかったなぁ」

疾風「彼らはこの風都だけではなかったのか」

「どういうわけかな」

切り札「正確な数はわかってるのか？」

「数は限られている。あいつらの場合その技術を自分のものにできるかだ」

疾風「なるほど。ガイアメモリーを自分たちで造ろうとしているのか」

「ガイアメモリーのシステムに興味があるのかそれとも別の何かか」

疾風「それにしても厄介なことになりそうだね。翔太郎」

切り札「ああ」

時空管理局本局　総帥の間

彼は次元の海を眺めていた

「準備はあらかた整った。
いつかもわからないのにやりすぎだとは思うが準備に越したことはないだろう」

机の上には『管理局襲撃対策マニュアル』と記された書類があった。

「あいつらと戦うにはここの奴らじゃ役不足だ」

平和の中で育ってきた奴ら
それが自分の部下というのはなんとも言い難い

―・・レイ

頭に聞こえてくる彼女の声

「大丈夫。今はまだ大丈夫」

―うん

「必ずお前は守るから。それが俺とお前の約束だから」

―ありがとう

「・・最悪、局の半分は覚悟しておくか」

それから彼は再び書類の訂正にかかった

それがいつ来るかはわからない

そんなことを思いながらも彼は作業に取り組んでいた

End

第４９話　依頼（後書き）

仁「今回は二人はお休みのため私とレイが担当します」

レイ「やぁ」

仁「それにしても並列世界ばっか往ってるなお前」

レイ「まぁ知り合いがいっぱいいるんだ」

仁「でもどうやって?並列世界だから往くのって無理じゃないか?」

レイ「秘・密」

仁「まぁ知ってるんですけど。時空転移システム辺りを使って・・・銃おろせって」

レイ「ネタばれは死に値いする」

第５０話　約束と彼と私を紡ぐもの（前書き）

さぁいよいよ大詰め

しかし、フラグが立ってばっか

次回で一端幼少時の区切りになると思われます
そこで一回ｓｔｓをつなぐかはわかりませんがそういう話をするつもりです

第５０話　約束と彼と私を紡ぐもの

深夜　なのはの部屋

「すーすー」

なのはは静かに寝息を立てながら寝ていた。

「―は」

なのはとは別の声が彼女に語りかける

「すー」

「―のは」

「ん・・・」

「なのは」

「んん～だぁれ？」

気持ちよく寝ていたのに誰かに起こされた

「すまないな。起こして」

「れい、くん？」

まだ、はっきりと見えないけどレイくんそっくりの顔をした人が立っている

「ああ、ちょっといいか？」

「なに？なにかの特訓？」

だって、それ以外に思いつかなかった

「いや、もっといいこと」

「いいこと？」

「まぁ夜のデートってところかな？」

「・・・デートォ！？」

私は思わず大声をあげてしまった

「しー！」

慌てて口を塞ぐ

「とりあえず、いくぞ」

「え、あ、うん」

彼に引っ張られ私は白い扉、彼の言うゲートに入った

最初は目が慣れなくてはっきりとわからなかったけど今はちゃんと見える
私はどこかの豪邸に来たようだ

「すご～い。アリサちゃんやすずかちゃん家より大きいかも」

「ここは、俺のプライベート空間の“洋”の世界。おっと、パジャマじゃ変だな」

言われてみれば私はパジャマのままだ

パチン

指で音を立てると私の服は可愛い服を着ていた。（イメージとしてダカーポの杏の私服）

レイくんにその洋館の庭に案内されてそこの中央に綺麗な二人用の椅子とテーブルがあった。

「紅茶飲めるか？」

「うん、飲めるよ」

そう言うと彼は紅茶を淹れてくれた

一口飲んでみると

―おいしい・・・レイくんって意外と器用なんだ

それはさておき、私は本題を聞いた

「ねぇ、レイくん。なんで私をここに？」

「ここに呼んだのは誰にも邪魔をされないから。夜とかじゃないとあいつらがうるさいからな」

―あいつらってアリシアちゃんたちのことかな？

「さてと。ここに呼んだのは聞きたいことがあったからだ」

「聞きたいこと？」

「ああ。その・・・なのはは管理局に入るのか？」

「うん。なんていうかそれが今の私にとって一番いいからと思って」

「そうか。で、なにかやりたいことは？」

一応やりたいことは決まっていた

というかそのことについてレイくんに相談しようと思っていた

「んとね。戦技教導隊を目指そうかと思ってるの」

「ほー教導隊か。お前が誰かにそういうのを教えるのか。あんま想像つかないな（笑）」

「ひっどーい。これでも色々と考えてるんだよ？」

「はは。悪い。けど、そうか教導隊か」

レイはちょっと想像してみた。
大きく成長したこの子が若い局員に指導する姿を。きっとこういう性格だから部下には慕われるだろうな・

「そういえばフェイトちゃんは執務官になるって言ってたよ?」

「執務官?クロノの影響かな」

「それもあると思うよ。」

「ふーん」

まぁあいつのことだ。執務官になればそういった事件で巻き込まれた人とか救いたいとか思ってんだろうな。
あいつらしいと言えばあいつらしいが。

「それじゃあ、はやては?」

「はやてちゃんは特別捜査官を目指すって」

「あいつの能力はそういったところで発揮するからいいんじゃないか?」

「うん、私もそう思う」

きっとヴォルケンリッターも一緒だから色々と面倒だろうな。

「にしても、レイくんそういうこと私に聞くなんて、私てっきり知ってるかと思った」

「いや、全然知らなかった」

「もー」

人の夢や目標にとやかく言う気はまったくないだけなんだけどなぁ俺できるだけ見守るのが主義だし。
立場もあるからだけど俺が手を貸したらあんま意味ないと思うし

「でも、それだけのなの？話って」

「いや、これからが本題。実はな、なのはには一応伝えておいた方がいいと思って」

「なにを？」

「俺がずっとお前の傍にいられないこと」

「―え？」

傍にいられない？

なんで？

「俺としてはずっと傍でお前やあいつらの成長をみていたいがきっといつか別れる時がくる」

「・・・どうして？」

私は顔を埋めながら聞いた

「俺がそういう者だからだ」

「意味、わからないよ」

「俺は色んな奴らから命を狙われている。まぁ大半の奴らは死ぬのが怖くてやってこないけど。けど、残りは俺を狙ってくる。現に夜明け団の連中は俺を狙ってる」

「・・・付いていっちゃだめなの？」

「お前はまだ若すぎる。それに子供だ」

「じゃあ、アリシアちゃんたちは？」

自分の家族となった者たちも置いていくのだろうか？

「あいつらは別だ」

「どうして！？」

「あいつらは“イレギュラー”な存在だから」

彼は平然と冷静に言い続けた

「なんで、意味、わかんないよ」

私は駄目で自分の家族はよくて・・・

そんなのずるいよ

「といってもすぐ帰ってくるけどな（笑）」

「・・・・レイくんの馬鹿！私の今さっきまでの悲しみを返して！」

いや、悲しみを返して喜ぶ奴なんているか？

「お前がレイジングハートを所有している限り俺はお前を待っている」

「？」

待ってる？

どういう意味だろ？

帰ってくるのを？これは違う。じゃあ私が大きく、大人になるのを？

「きっとそれが俺とお前を繋ぐ物だから」

「・・・・」

彼から託されたデバイス

今では私のデバイス。レイジングハートがなければ私と彼の繋がりはないと思う

「私、ちゃんとした繋がりが欲しい。私とレイくんを繋ぐものが」

「ん～あ、いいものがあった」

彼がとりだしたのはロケット型のペンダントだ

「ロケット？でも写真ないよ？」

「今からとればいいさ」

と彼はカメラをとりだした

「で、ポーズはどうする？」

ここで、私は少し欲張った

「じゃあね！レイくんの膝の上で！」

「ん？いいよ」

レイはそういうのは鈍感なのでまったくわからないまま了承した

「ん～と、こんな感じかな？」

彼の膝の上に乗り彼の胸におっかかるような感じで座りレイは彼女の肩に両手を乗せている感じだ

「じゃあ、撮るぞ」

「うん」

恐らく魔法でタイマーを押したのだろう

ジッジッジ

「あ、今気付いたんだけどこれがちゃんと二人で撮った写真じゃない？」

「そうだな、言われてみれば」

「じゃあさ、今度皆で写真撮ろうよ。思い出に」

「そうだな」

カチ　パシャ！

その写真に写るなのはの笑顔はとても可愛いものだった。
レイもまた優しい笑みを浮かべていた

それから数分後

「よし、できた」

ロケットに写真をはめ込み私の首にかけてくれた

「レイくんはいいの？」

そうこれは一つしかないのだ

「なんか、俺まで持ってるとフラグが立ちそうで怖い」

「？」

なのはにはあまり理解できなった

「じゃあ、この辺にしとくか。なのはは明日も学校だろ？」

「うん。けど、あんまり眠れなかったような・・・」

「大丈夫。ここと向こうの時間の流れは違うからきっと戻ったらちょっとしか経っていない」

「へー」

「じゃあ、私いくね？」

「ほんと、起こして悪かったな」

「ううん、平気だよ。―それと、私からも一ついい？」

彼の言う通りいつかどこかへいってしまうなら・・・

「約束して。いつかどこかへいくんだったら、必ず帰ってきて。私の所に」

「・・なのは？」

彼女の眼は真剣だった

これほどまでに自分を待っている人がいただろうか？

「―約束する。きっとお前の所に帰ってくる。それかお前と始めて逢ったあの海鳴の公園で」

「うん♪」

互いに小指を出し指きりゲンマンをした

「じゃあ、また明日ね」

「ああ」

彼は手を振り彼女を見送った

「・・・約束か。まだ、果たせてないよな」

それはなのはとは別の約束だった

だから、彼の心のどこかでなのはとの約束もきっと果たせない。そう思っていた

月日は流れた

それから彼女達が管理局に入った

皆自分の進むべき道を目指し頑張っていた

けど、平穏な時間はすぐに終わった。

ある簡単な任務に少女は就いていた。いつもと変わらないものだと
思っていた
けど―悲劇は起きた
それが別れの出来事だとは誰もこの時思っていなかった
彼でさへも
そして、それが新たな物語の始まりだと誰も思わなかった

第５０話　約束と彼と私を紡ぐもの（後書き）

『フィリーヤとイヴのフィリイヴな時間』

フィ「なんかいい感じだったのに所どころフラグが」

イヴ「ホントだね」

仁「まぁフラグですから」

フィ「ところでこう見てみるとなのはルートになってない？」

仁「予定ではｓｔｓ編はなのはがメイン、言いかえればなのはが主軸。
無印だとフェイト、アリシア。Ａ，Ｓだと八神家とか銀が主軸のつもりだった？だよね」

イヴ「意味あるの？」

仁「ある。フェイトとアリシアの関係とかはやてや銀の関係とか？
でも銀のところはちょっと少ないので無理やりやる部分もあるかもしれません」

フィ「ふーん。それじゃああんまりネタばれもよくないし今日はこのへんで！」

イヴ「みんな～またね～」

第５１話　終わる日々（前書き）

第５１話　終わる日々

時空管理局　通路

「心拍数低下！」

「止血は止りましたがこのままでは・・！」

局員の医療部の数名がけが人を手術室へ移送していた

「・・・」

「おい！おい！」

運ばれているのは血だらけの少女。

一緒に早歩きで走るのは鉄槌の騎士ヴィータだった

「ああ、俺だ。すぐ手術の用意を！そうだ、急を要する。

・・・そうか、わかった。患者はこのまま緊急手術室へ移送。

その後は俺と知人による手術を開始する！」

『はい！』

総帥であるレイの的確な命令にしたがう部下たち

「なぁ！助かるんだろ！？アイツ―」

「・・・邪魔だ」

「は―?」

それは今まで聞いたことのない彼の声だった

「邪魔だと言っているんだ!あいつを―なのはをこのまま死なせたいのか!?」

「ヒッ」

ヴィータは彼に恐怖した。彼の顔は今までみたことのないものだったからだ

ヴィータは足を止めるしかなく彼となのははそのまま手術室へ入っていた

ビン

手術中のランプが照られされた

「ヴィータ、なのはは!?」

なのはのことを聞きつけ息をいらしてやってきた

「・・・・」

「ヴィータ・・?」

彼女は震えていた

「はじめてみた・・・」

「なにを？」

「兄ちゃんの・・・あんな怖い顔・・」

「え？」

レイｓｉｄｅ

レイはそのまま服を着替えそして彼女の手術が始まろうとしていた。
なのははの容体は悪くなる一方だった。それなのに助手は彼のいう
知人一人だけだ

「用意はいいか？」

レイは聞いた

「ああ、いつでも構わない」

「よし、これから手術を開始する―」

それから手術は二時間にも及んだ

レイｓｉｄｅＥｎｄ

２時間後

ボン

手術中のランプが消えた

そこにはすでになのはを心配し多くの者が集まっていた
そして、現れたのはレイではなくその助手だった

「あいつは―なのはは大丈夫なのかよ!?」

一番に彼女を気にしていたヴィータがまた気を乱した
それも仕方ない。
自分の所為で彼女があんなってしまったのだから

「落ちつけ」

マスクをとる助手
彼の顔は別の皮膚を移植したらしく変色していた。髪も黒と白と変な男だった

「彼女の手術は成功だ。命に別状はない。ただ・・・」

「ただ、何だよ!?」

「・・・彼女はもう、飛べないかもしれない」

「「「「!」」」」

それは彼女にとっては死ぬよりも辛いことだったのかもしれない。
管理局に入局し、教導官としてその道を目指していた
それが飛べない？
それは彼女自身の終わりを示していた

レイｓｉｄｅ

病室　高町なのは

扉には面会謝絶と看板が出ている
部屋にいるのは寝ているなのはと椅子に座り頭を抱えているレイだった

どうしてこうなった？

なんで、この子はこんな目にあった？

一緒にいたヴィータが悪い？違う。彼女は悪くない

俺の所為だ

なのはに精密検査をしたところ今回の原因は今まで溜めてきた無茶と負担が原因だった

定期的に検査は行っていた

だってそうだろう?

レイジングハートを扱う時点でかなりの負担がかかっていたのはわかっていたじゃないか

あんな小さな子にこれまでの戦いは負担が大きすぎる

精神的にも身体もすべてが未熟で未発達なのに

だから、悟られないよう、心配させないように密かに検査をしてきたのに

それでこの様だ

俺は一体なにをやってきた?

まだ、幼い彼女を守るために距離を少し起き、迷惑をかけないためにそうしてきたのに

そして、彼女の夢を、目標を閉ざしてしまった

「・・なのは」

ベットに寝ているなのはの名を呼ぶ

「・・・・ん・・・・れい、くん？」

「―！」

彼女の目が覚めた

「・・・あれ、わたし、ここって前にもみたこと・・ある」

「ああ、ここは管理局の病室だからな」

彼は切り替えていつもどおりに振舞った

「そっか・・・わたし・・・」

記憶が混乱してるようだ

―どうする。今言うか？もう飛べないことを

結果的にいつか言わなければならいのだ

だが、今言ってどうする？

「ねぇ、レイくん・・・・」

「なんだ？」

「おかしいんだ。なんだか・・足に感覚がないみたい・・にゃはは。

変だよね」

「！」

検査でわかっていた。けど、自分で気づいてしまった。
このまま誤魔化しても意味はない
なら、言うのか？
言っていいのか？

「変、じゃない。お前は―もう・・・・飛べないんだ」

俺は言ってしまった

「え・・。もう、レイくんったら冗談きついよ・・・」

「冗談じゃない。もう、飛べないんだ。このままヘタをすれば歩けな・・・なのは？」

なのはなにかしようとしいた

身体を起こそうとしていた

「おい、なにを・・」

「だ、大丈夫だよ。私、ちゃんとある、ける、よ？」

そのまま床に立とうとするなのは。

それをレイは許さなかった

ガバ！

「レイ―くん？」

レイはなのはに抱きついた

「止めてくれ。頼むから・・・・自分をそうまでして痛めつけるな。頼むから・・・」

それは本当の思い

「いため、つけてなんて、ないよ？」

お前はいつも無茶をする子だから、だから、平気でそういうことを言うんだ
なんで、そうまでして無茶をするんだ・・・

「ねぇ、大丈夫だから。ね？」

「―俺はお前に死んでほしくないんだ！」

「！」

さっきより力が強くなる

「本当にそんなことをしたら今度こそ終わりなんだぞ！？飛べなくてもいいじゃないか。そんなことをしたら歩けなくなってそれどころじゃないんだぞ！？」

子供で歩けなくなる。
はやてを例えて悪いがそれはとてつもなく辛い未来だ。

そんな子供たちを俺は何百人とみてきた
レイはそうなってほしくないから。こうやって言っているのだ

「・・・ありがとう。でもね？私、飛ぶの止めないよ？」

「・・・なのは」

それでも彼女は、この子は飛ぶのを止めようとしなかった

「私ね、レイくんみたいに誰かを守れる人になりたいの」

「・・・・」

俺みたいに？
俺はそんな大した・・・人間・・・いや、者じゃない

「それを、皆に教えたいの。魔法はけして誰かを傷つけるものじゃない。誰かを守るための力でもあるって。だから・・お願い」

お前は、本当に我がまま、いや、決めたら絶対に揺るがないもんなけど―

彼は抱きしめるのをやめ彼女と向き合った

「わかった。俺もこれ以上言わない」

「レイくん―」

「けど、約束してくれ。もし、また、こんなことになったら今度こそ魔導師を辞めてもらう。それができなければ俺は許さない」

それって卑怯だよ

そう思ったなのは

「・・・うん。約束する」

「―わかった。覚悟しろよ?俺の治療方法は半端じゃないからな」

「うん!」

なのはは飛ぶことを辞めない

レイはそれを許した

それが、二人にとってよい選択だったのかはわからない

「なら、今は眠れ」

「うん」

それから、なのはは再び眠りについた

「・・・・レイジングハート」

『なんでしょう。創造主』

彼女の傍においてあるレイジングハートを呼んだ

「お前たちを襲った時の映像あるか？」

『はい。ただいま』

すると目の前でその時の映像が流れてた

そこには謎の機械兵器がなのはとヴィータを襲った

「・・・こいつは」

レイにはそれが見覚えがあった

そう、前にどこかの研究施設でこれに似たような物を・・・

「！・・・あいつか」

思い出した

あいつだ

かつて一緒に研究したことがある

友、と呼べるものではないが親しい仲ではあった

だが、今回は事情が事情だ

例え、お前が直接手を出していなくてもなのはに行ったことを俺は許さない

だから、お前を・・・殺す

あいつらによって生み出された者

―ジェイル、俺はお前を殺す

レイｓｉｄｅＥｎｄ

それから1カ月

レイの指導のもと、なのはの治療が行われた
時間はかかるが彼のやり方なら治すことは可能だった
けど、完全に治すことはできないとレイは言っていた。
そのためには最低でも1年は療養生活をしなければならないと言っていたがなのはがそれを聞くはずはないとレイは思っていた
それでも彼は治療を続けた

そして、彼はその数日後

姿を消した

レイｓｉｄｅ

「はぁはぁ・・・ぐぅ・・・うぇ！」

ベチャ！

口の中にこみあげてくる血を吐いた

「糞ったれ。余計な・・・手間を・・かけさせやがって・・」

辺りには機械の残骸があちこちに散らばっていた
それはなのはたちを襲った機械兵器だった。
そう、ここはなのはたちが襲われた場所から少し離れたところに位置している。
少し前にここにたどり着きそしていきなりドンピシャ。
数はわからない。だが、百単位ぐらいはいたと思う

「ぐっ！」

メキ　メキ　ビシャ

しかし、彼の代償は大きかった。腹にその兵器の脚がまるごと刺さっていた。
腹だけではない。あちこち失血が酷い
だが、軽い傷なら彼の場合すぐに治ってしまう。しかし、今のように妨げになるものがあるから再生ができない

「うぅうぁあああああ！！」

ビシャー！！！

足をとったところから大量の血が流れ出る

「っはっはぁう・・・・あぁぁぁあ」

しかし、それもすぐに塞がる

「っ」

傷が塞がっていくが痛みを感じないわけではなかった

ドクン！

「ぐぁあ・・・」

いきなり心臓が痛み出した

「まさ、か、あいつの呪いがまた？」

遅延性の呪術でもかけていたのか？

いや、そんなことはどうでもいい。

なんで、こんなときに・・・

「ん、ぁああ！」

彼は立ち上がろうとするがそれは叶わなかった

ヒュー　ザクザク・・・・・

彼に突き刺さる槍みたいなもの。

身体には突き刺さらなかったが身動きを封じるためらしく物凄い無理な感じで突き刺さっていた

「・・・これは拘束魔具!?」

魔具。それは魔術師が希に使う魔法道具の略だ

『そうだ・・・それは、導師自らがお造りなったもの。今の貴様では絶対に壊すことはできない』

すると彼の中心とした周囲に夜明け団の傀儡共が現れた

「くっ、動かねえ・・・ぐぁあああ!」

すると魔具から現れる鎖
それは彼の身体中を拘束する

『我らが悪　アンヴァルトに裁きの鉄槌を　集え　その小さな力を集め大いなる力となれ』

傀儡たちが何を詠唱をし始めた

『断罪の鎮魂音』

雲が円を描きながらうごめく
そして、そこからなのはのスターライトブレイカ―の比ではないぐらいの砲撃魔法をレイはもろに食らった

「あああああああ

あああああああああああああああ！！」

バタ

「・・・・・・・・」

叫びそして倒れた

『は、ははははあは！やったぞ。我らが宿敵アンヴァルトを・・・』

傀儡たちは彼を殺せたことに歓喜した

「遅延詠唱解放・・・・・大地は怒り狂い　その岩槍で貫かれる・・・」

ドドド　　ゴォオオ

『な、なんだ！？まさか・・・ありえん！アレを食らったまだ息があるはずが！』

ドバッ！グサリ・・・・

『ぎゃあああああああああ！！』

身体を大地からできた岩の槍に貫かれていく傀儡たち

そして、残ったのは死体と瀕死の彼だけだった

・・・

死んでいった友たち　家族　大切な妹

けど、死んだら約束が果たせない・・

そうだよな。ルリとの約束がまだ、だもんな

けど、おかしい。なにか、約束がまだあった気がする

なんだっけ・・大事な約束だった気がする

どんな、約束したんだっけ・・・そう、小さな・・女の子となにか約束をした

そう、その子はレイジングハートを持っていたな。長年探した適合者・・・

でも、どんな約束をしたんだ・・・思い出せない

そもそも、大事な約束だったか・・・・？

なら、いっか・・・そんなに大事な約束じゃなかったんだろうな・・・

そう、ルリとの約束以上に大事なものなんてなかった・・・・

そう、きっとどうでもいい約束だったんだ・・・・

だから、もう・・・・

「・・・・・・の、は」

薄れゆく意識の中で彼は自然と誰かの名前を呼んだ

けど、それが誰だったのか

もう彼にはわからなかった

レイｓｉｄｅＥｎｄ

銀・アリシアｓａｉｄｅ

「レイ!?」

「感じたか?」

「ええ、けど・・・」

「どうしたのですか?二人とも」

「リニス・・レイの身になにか起きたかもしれないの」

「えっ!?」

銀は言い方を変えれば彼の魔道書。魔道書本体は彼が持っている。魔道書は彼の魔力で活動を維持している。その流れに少し異変が起きた。

アリシアは彼の血が彼女の中にある。それがある意味レイと繋がっている。アリシアはレイになにか起きたと感じたのだ

「場所は?」

「それは私の方でなんとか捕えられる」

「じゃあ、行きましょう!」

「ええ!」

「待って!」

三人を引きとめたのは彼女達の妹たち

「私たちも一緒に連れってください」

「駄目だ」

「どうして!?」

銀がいつにもなく言う

三人の前で膝まづいて言った

「いいか?私たちは家族だ。だから、家には誰かが待っていなければならない。大丈夫だ。きっとレイを—私たちの父親を連れて帰ってくる」

「「「うん」」」

三人は頷いた

「スノー。三人を頼んだぞ」

「ええ、まかせて」

ぷかぷかと浮かんでいるスノー

「それじゃ、いってくる」

銀とアリシア、リニスは彼のもとへ向かった

残された４人

「帰ってきて、くださいね」

星音は願った

大切な家族が帰ってくるのを

なのはｓｉｄｅ

月日は流れた

時間はかかったけど私の脚は治った。今では空を飛べる

けど、あの人がいない

大事な大切なあの人が

そんなある日私の耳に聞きたくないものを聞いてしまった

「総帥が死んだ」

嘘

彼が死ぬはずがない

だって、彼は死なないから

「大量の彼の血と思われる血痕。そして、大規模な戦闘のあと」

だから、それは嘘だよ

だって、約束したもん

必ず帰ってくるって

けど、帰ってこなかったのは彼だけじゃなかった

アリシアちゃん、リニスさん、銀さんも帰ってこなかった

大切な人を失ったのは私だけじゃなかった

大切な姉、家族

私たちにとって彼らは大事な人たちなのだから

それから私は待っていた

だって、約束したから

あの初めて逢った海鳴の公園で

なのはは彼を待ち続けた

一日、一週間、半月、一か月、半年、一年・・・・・六年と

今日も私はこの公園にいる

もう、毎日ここに来てる

けど、彼は帰ってこない

気付けば私はもう１５歳になった

身体も大きく成長した

魔導師としても大きく

それでも彼は帰ってこない

ポツポツ

雨が降り始めた

その所為か今まで我慢してきたものがいきなり溢れ出た

「・・・嘘つき・・・帰ってくるって、私の所に帰ってくるって言

ったのにぃ・・・」

ポツポツ・・・ザーザー

弱かった雨が強く降りなのはに降りかかる

「うぅう・・あああああああ！」

雨で泥になった地面に膝まづき、胸のペンダント―彼からと撮った
写真があるロケットを握りしめた

「嘘つき！嘘つき！嘘・・つきぃ・・・・ぅう」

彼女の顔に一滴こぼれ落ちた

「―レイくんの嘘つきぃ！」

それが彼女のものだったのかそれとも雨だったのかそれはあえて語
るまい

それから私は雨が嫌いになった

あの日の私を思い出してしまうから

そして、また崩れてしまうかもしれないから

なのはｓｉｄｅＥｎｄ

第５１話　終わる日々（後書き）

仁「どうも、仁です。あの二人がショックで出れないため代役を。
さて、レイは・・・・」

とりあえず主人公乙

そして、次回で少しまとめ的な話というかそのあとの話。
それが終わったらｓｔｓ編に入りたいと思っています。

では次回もよろしくお願いします

第５２話　手紙（前書き）

今回はその後のことを描いております
少し変な部分もあるかと思いますがお願いします

そして、次回からｓｔｓ編です

第５２話　手紙

あれから６年の月日が流れた
私たちは大きく成長した
人としても魔導師としても
けど、大切な人たちは帰ってこない
６年経った今でも・・・・

◆◆◆◆◆◆

どうも、私高町なのはです
あれからもう６年たち私たちは中学三年になりました。
もちろん魔導師も続けてます

フェイトちゃんは名をフェイト・Ｔ・ハラオウンに改めました。
執務官試験に二度落ちましたがなんとか執務官になることができました。
管理局では本局次元航行部隊のエリート魔導師と呼ばれたりしてます。

はやてちゃんはユニゾンデバイス。リンフォース?を生み出し新たな夜天の書の主として頑張ってます。
なんでも本局地上部隊の切り札　八神はやて特別捜査官とか呼ばれてるそうです。

ちなみに私は目標だった戦技教導隊の教導官とし管理局に勤めています。
二人から聞いた話だと不屈のエース・オブ・エースと呼ばれているそうです。
ちょっと嬉しかったりします。

私たち三人以外も報告します

まず、ヴィータちゃんはなんかゴルフで史上最年少女の賞金王になりました。けど、すぐゴルフ界から消えました。なんで?
あと、世界モグラ叩き大会で優勝したり、世界ハンマー選手権でも優勝したとかないとか。

シグナムさんはたまにふらっと旅に出ては帰ってきてるそうです。
なんでも全国の剣豪と勝負をしてるそうです。でも、最近は止めたそうです。
フェイトちゃんがいうにはもう剣の師匠から免許皆伝とかでもう一流の剣士だと言われたそうです。

ユキナさんは今でもアルバイトをしています。どんなアルバイトをしてるか聞いたらトンネル開通のバイトだそうでもうすぐ開通するんだとか楽しそうに言ってました。
やっぱりユキナさんは他の皆と少し違うようです

シャマルさんは言うまでもなく6年経った今でも料理の腕は少ししか上達してません。
なんでも炊飯器でご飯は炊けるようになったとかで。
けど、最近あることが発覚したそうです。なんでも、シャマルさん。レシピとかそういうのをちゃんと見れば料理は作れるそうです。炊飯器でご飯を黒こげにしたのは使い方とかそういうのがわかってないからとかないとか

ザフィーラさんは八神家の番犬として過ごしています

八神家は第1世界ミッドチルダに引っ越しするそうです。
なんでもいい物件が見つからないので大変だそうです

そうそう。
星音ちゃん、雷華ちゃん、闇樹ちゃんの三人はいつのまにか管理局に入局してました。
三人ともあの無限書庫の司書になっていました。
星音ちゃんはその司書長に。後の二人はその補佐みたいなものだそうです。
クロノくんから聞いた話では三人のおかげ随分仕事がしやすくなったそうです。
私は気になって理由を聞いたら

「本、好きですから」

と星音ちゃんは言っていました。

本当の理由は別にあるんじゃないかって思ったりもしました。

私たちは自分の道を進んでいます
けど、皆大切な人を失った
でも、私たちは前向きにやっています。
いつか帰ってくるって信じてるから

なのはｓｉｄｅ

私立星祥大付属中学校

私は、今昼休み屋上へと向かっていた。
すずかちゃんに呼び出されたからだ。
すずかちゃんとは違うクラスなのでというかなんで屋上？

キィ

私は屋上の扉を開いた

そこにはもうすずかちゃんがいた

「すずかちゃん」

「あ、なのはちゃん。ごめんね。呼び出したりして」

「ううん。でも、渡したいものってなに？」

伝言を伝えに来てくれたはやてちゃんが言うにはなんでも私に渡したいものがあるとかで。

「うん・・これ」

差し出されたのは一通の手紙だ。
表には『なのはへ』と記されており裏には何も書いてなかった

「すずかちゃんこれってもしかして・・・」

「あ、ラブレターじゃないよ」

ずこ

「にゃはは。そんなことないよね。じゃあこれ・・・」

「それはね？レイさん、からなんだ」

「―！」

今なんて

「レイくん・・から、本当なの？」

「本当だよ」

ぶるぶる

気づけば私の手は震えていた
その時私はレイくんが残した手紙よりなんですずかちゃんがこの手

紙を持っていたことの方が気になってしかたがなかった。
どうして私に直接渡していかなかったのか。
どうして、すずかちゃんを経由して私に渡させたのか

「ねぇ、一つ聞いていい？」

「なに？」

「どうしてすずかちゃんがこれを？」

「・・・レイさんに頼まれたの」

・・・・・・・・

それはレイが消える少し前

―もし、俺が何年も経っても帰ってこなかったからこれをなのはに渡してくれないか

―どうして私に？

―お前が一番適任だと思ったからだ。俺が戻ってくればこれを捨てて構わない。
だが、俺が戻ってこなかったらこれをなのはに

―なんで、直接なのはちゃんに渡さないんですか？

―俺は不器用だからな。こういうのは慣れてないんだ

―でも！

彼は膝をつき私と向き合った

―頼むすずか。こういうことを頼めるのはお前ぐらいなんだ

―そんなのずるいです・・・

そんな顔で言われた誰だって従うしかないよ

―じゃあ、頼んだぞ

・・・・・・・・

「私が適任だって。多分私がそういう立場人間だからだと思う」

彼の言ったことを思い出してなのはちゃんに言うが本当の理由はあえて言わなかった

私だから頼んだって言ったらきっとなのはちゃん壊れちゃう。

どうして。

どうしてあの人は私じゃなくて誰かに・・・

「・・・・っ」

ザ

「なのはちゃん！」

私は走ってその場を後にした

なのはｓｉｄｅＥｎｄ

すずかｓｉｄｅ

「なのはちゃん・・・」

私はただなのはちゃんの背中をみていることしかできなかった。

「すずか！」

すると上から声が聞こえた

「アリサちゃん・・・もしかして盗み聞きしてたの？」

「いやーここで昼寝してたら出たくても出られなくなって・・」

「アリサちゃん」

「ごめんなさい」

やっぱりこのことを聞いて先回りしていたようだ

「もう。それにしてもなのはちゃん、泣いてたね」

「泣きそうになってた。わよ。ホント、あいつ女泣かせるなんていい度胸してるわ」

拳を突き出し怒りをこみあげていた

「それはアリサちゃんだって」

「それを言うならすずかだってそうじゃない。本当はあんただって・・」

「アリサちゃん」

「ごめん。でも・・」

「うん。けど、あの人は私たちに」

「時が来るまで待て。その間に強くなれ。だもんね。あいつ弟子をなんだと思ってるのかしらね」

「はは。そうだね。けど、それが私たちへの命令だもの」

「そうね」

二人は晴れた青い空を眺めた

すずかｓｉｄｅＥｎｄ

なのはｓｉｄｅ

学校が終わりなのは自分の部屋で手紙を開けた

◆◆◆◆

なのはへ

これを読んでいるということは俺は帰ってこなかったということになる。
詳しくは言えないが俺が帰ってこないということは俺は死んだかそれ以外

お前には悪いと思ってる。何も言わずに消えたことを
まだ、完治していないがすべてはシャマルに任せてある。時間はかかるだろうがお前の怪我はいずれ治る。

もう、お前は一人でやっていける程の技量を持っている。教えられなかったことも多かったがお前は立派な魔導師だ。
いずれお前は前に立ち皆を導く存在になるだろう

すまないな。こんなことしか書けなくて。
手紙なんて書いたことなかったからな。

お前は前に言ったな。
俺みたいに誰かを守れる人になりたい。そんなことを言っていたな。

俺はお前が思ってる人間じゃないんだよ。そもそも俺はいつからか自分を人間だとは思っていない。
だから、俺を尊敬とか見習いたいとかそんなこと思わない方がいい。
俺は汚ない。薄汚い男なんだよ。

話がずれたな。
最後に・・・
約束を守れなくてすまなかったな

レイル・アンヴァルト・Y・神乃より

グシャ

気づけば私は手紙をくしゃくしゃにしてしまった

「レイくんは・・・レイくんは汚なくなんてないよ。レイくんは私にとって―」

彼の背中が脳裏を横切る

「レイくんは私の目標だったんだ。あなたみたいに誰かを守れる人になりなかった」

俺はお前が思ってる人間じゃないんだよ。

「そんなことない。現にレイくんは私を守ってくれた。だから私は」

「―あなたのようになりたかった」

なのはｓｉｄｅＥｎｄ

？？？ｓｉｄｅ

第１２４世界　カルビタ

「ぎゃあああああああ！！！」

「助けて！助けて！」

逃げまどう人たち。

建物を壊され辺りを燃やされた。

ある者は身体を切断され、ある者は赤い雨に身体を討たれた

「悪党が救済を求めるなよ」

バン！

「ぁ」

一発の銃弾が男の頭を貫いた

「た、助けて！おおおお願いだから！」

「ん～悪党の癖に張り合いがないなぁ」

銃を持つ仮面の男はどうやら楽しくないようだ。

「そうだ。俺が今から言うことに答えたら助けてあげよう」

「答える！なんでも答えるから！」

男は生きるために魂を売った

「それじゃあ、槍はここにあったな？」

「槍？ああ、ああった。確かにここにあった！」

仮面の男はどうやら探し物をしているようだ。
お目当ての物はここにあった

「で、今槍はどこにある？」

「あ、アレはもう本部へ移送された！だから、ここにはもうないぃ！」

「本部・・・夜明け団の本部か？」

「そうだ！」

黄金の夜明け団。
この世界。ここの教会と言うな名の彼らの隠れ家。支部とも言いかえれることができる。

「そうか、そうか。もう、ここにはないのか。ふむぅ」

彼は腕を組み何かを考えている

―もう、槍はないのか。となると・・・

「まぁいいか。ありがとな。じゃあ」

「助けて・・『ジャキ』え？」

バン！

バタ

頭を撃ち抜かれ寄りかかっていた壁にかえり血が飛びかかっていた

「助けてあげたろ？汚れに満ちた魂を」

仮面で分からないが口元が笑みを浮かべていた。

彼は楽しいのだ

「ふ、ふふ。ははははっははは、ははっははははは！は、はー」

笑い始めたと思ったらすぐにしけた

「さて。後片付け、後片付け」

カチ

ドン　ドン　ドン　ドドーン！

壊れていた協会がさらに爆発しけし飛ぶ。
さらに地面の下からも爆発が上がる

「あー綺麗だ。ん?」

空から二人の人影がこちらに向かってきた

「あー見つけた。どう、そっち終わった?」

「サレナか。こっちは片付いた。ハーデスも終わったようだな」

また仮面を付けた二人の女性が現れた。
女性だとわかるのは胸が女としての特徴がある。しかし、一人だ妙な鎧、甲冑をつけた女がいる。

「ああ。全く歯ごたえがない」

「そうか。物もないようだ」

「そっか。じゃあ、今回も外れかぁ」

「そうでもないさ。すべては一つに集まっている。しかし、それも今日までだ」

「もういいのか?」

「ああ、今のでつ目。すべてあいつらの元にある」

「そっか。じゃあ帰ろう。かえり血浴びたしシャワー浴びたい」

「そうだな。けど、そのまえに・・」

シュ！

「ぐぁ」

キュイーン　ジャキ

彼が放ったのはナイフで柄のとこにワイヤーが装備されていた
放ったところにはまだ生きていた人間が隠れていたようだ

「お見事」

「じゃあ、帰るか」

「はーい」

そして、仮面を付けた三人は消えた。

残ったのは今も燃えている瓦礫と死体と血だけだった

？？？ｓｉｄｅＥｎｄ

第５２話　手紙（後書き）

さて、ここでまさかの新キャラとか伏線だらけ。
伏線作ったはいいけどちゃんと出せるか心配だよパトラッシュ。

ところでフィリーヤとイヴがいないかって？
レイがいないからやるきがないんだとさ。
仕方ない。今度からボン太くんにやらせるか

第５３話　空港火災（前書き）

ｓｔｓ編に突入！というわけでプロローグみたいなものです。
今回は短いです。
あと、ｓｔｓは個人的に難しいので原作とは違う感じになってしまうかもしれませんがお願いします

第５３話　空港火災

新暦００７１年　４月２９日
ミッドチルダ臨海第８空港

「くそぉ！こっちは駄目だ。消火が間にあわない！」

「もっと人をこっちにまわせ！」

燃え盛る火の手。
必死に消火活動をするが火は一向に消えない

「ちきしょう・・・ん、人？」

一人の男が目にした光景。
そこには今まさに火災が起きている中心に人影がみえた
だが、すぐに人影は消えた

「まさかな」

そう、こんな状況下で人がいるわけがないと思った

？？？ｓｉｄｅ

通路を炎が邪魔している中黒い影が横切った。

いや、影ではなく人だ

「・・やりすぎた。火薬の量間違えたか？」

男は仮面を付け黒い髪をし、漆黒のコートを羽織っている。

「―！人の気配、小さいな。まだ、子供か。これも何かのお導きか」

ザ

彼はその方角へ向けて走り出した。
燃え盛る炎の中を

？？？ｓｉｄｅＥｎｄ

ギンガｓｉｄｅ

「けほけほ。スバル・・スバルどこ」

女の子、ギンガ・ナカジマは妹であるスバルを探していた。
しかし、ギンガは知らなかった。
もうすでに本局の魔導師―高町教導官に救助されていた。
彼女はそんなことを知らずさまよい歩いていた
爆発などの影響で彼女の歩いている通路はもろくなっていた

「スバル返事して・・お姉ちゃんが・・」

ミシ　バリ

「スバル・・」

バリバリ　ドォン！

ギンガが歩いていた通路が崩れた。
崩れたのは彼女がいたところから数メートルだけ。上手くいけば一階したの通路に落ちるかもしれないが彼女は手すりを辿りながら歩いていたため運悪く下に落ちてしまったのだ。

「きゃー！」

下に落ちてゆくギンガ。ただ叫ぶことしかできない少女。

ザ！

「・・・え？」

しかし、少女は落ちていなかった

「大丈夫か？嬢ちゃん」

「へ？」

ギンガを上をみた。そこには仮面をつけた不思議な人が自分を助けてくれたようだ。
どうして落ちていないのだろうとみてみるとその人の右腕の袖からワイヤーが出ていてその先には通路、下からみたら天井だがそこにナイフが刺さっていた

「ちょっと待ってろ」

キュイーン

ゆっくりと近くの通路に降りる二人

「しかし、俺が来なかったら死んでたところだぞ」

「で、でも妹が・・」

「妹？ここにはもうお前しかいないぞ？」

「え！じゃあ妹は！？」

「多分救助されたんじゃないか？」

「よかったー」

ギンガは妹が無事だと聞いて安堵した

「あ、助けてありがとうございます。変な“おじさん”！」

ジャキ

少しナイフを握っていた手に力が入る

「俺はおじさんじゃなくてお兄さんだ。嬢ちゃん、よーく覚えておき、な？」

「？」

お兄さんはいきなり私を見始めた。仮面でみてるかよくわからないけど

「ほー。ふーん。そうか、お前―ん？」

「えっなんですか？」

お兄さんは上を見上げた

「さて、捕まる前に逃げるかな。嬢ちゃん、ここを動くなよ。そのうち管理局の人間が来るだろうから。それじゃあな、嬢ちゃん！」

そういうと彼は走り去っていた

「なんだったんだろう」

ドォン！

「そこの子大丈夫！？」

「あ、はい！」

こうして私は管理局の人に助けられました。
あの仮面のおじーじゃなくてお兄さんのことは言いませんでした。
もっとちゃんとした形で礼が言いたかったけどなんかそういう感じの人じゃないって感じがしたので。

ギンガｓｉｄｅＥｎｄ

？？？ｓｉｄｅ

空港から８ｋｍの地点

そこには先ほどの仮面の男が燃えている空港を眺めていた

「あっカオスー」

手を振って現れたのは仮面を付けた女だった

「サレナ。ハーデスはどうした？」

「ちょっと離れたところであそこにいる奴らの情報収集」

「そうか。なら、向こうで合流だな」

「そうみたい。で、それがレリック？」

「ああ」

彼が手にしているのは赤い宝石にしかみえないものだった。
レリックと呼ばれるそれは管理局で一級捜索古代遺産に指定されているロスロギアだった。

「それにしてもやりすぎじゃない？」

「少し火薬の量間違えた」

「そ」

女は聞いたわりにはそんなに興味がないようだった

「じゃあ帰りましょう？あの変態ドクターがそれを待ちわびてるころだし」

「そうだな」

レリックをアタッシュケースかなにかに終い二人は暗い闇の中へと消えていった

カオスｓｉｄｅＥｎｄ

新暦００７５　時空管理局遺失物対策部機動６課が設立する。
八神はやてを部隊長とし有能な部下たちを揃えこの後にＪＳ事件に大きく関わっていくことになる。
そこには高町教導官、ハラオウン執務官や優秀な局員の姿もあった。
そして、レリックを巡る戦いが今始まろうとしていた

第５３話　空港火災（後書き）

フィ「新キャラね」

イヴ「うん、そうだね」

フィ「なんていうかベタよね」

イヴ「でも、ちゃんとした設定があるらしいよ」

仁「その通り！ぶっちゃけその三人はグロイですよ～」

イヴ「そんなこといいからちゃんと書いてね」

仁「はい・・・」

第５４話　機動六課　前篇（前書き）

本編でいう5話の後からになります。
少し設定に自信がないのですが頑張ります
それと新キャラも出ます

第５４話　機動六課　前篇

新暦００７５
機動六課　部隊長室

機動六課。正式名時空管理局遺失物対策部機動６課。簡単に言えばロストロギアと言った危険な物を保護、管理が目的としている。
そんな機動六課は設立し近日、ＦＷ陣による初めての実戦が行われた。
そのことについて部隊長ではる八神はやてと、その前線ＦＷ部隊「スターズ」と「ライトニング」の隊長副隊長たち、そして主任医務官であるシャマルがこの間の戦闘について話し合っていた。

「んー。皆まだまだやけど初出動にしてはいいやないか？」

「うん。まだ、甘いところや危ないところもあるけどまずは実戦の空気を掴めたことがなによりだと思うかな」

答えたのはスターズ分隊隊長　コールサインスターズ１　高町なのは一等空尉

「それに、キャロはフリードの制御もしっかりできてるしエリオとのタッグもいいと思う」

次に答えたのはライトニング分隊隊長　コールサインライトニング１　フェイト執務官
彼女達はみな幼少からの親友である。

「そやね。まだまだやけどきっと一人前になる。そうやね？高町教導官（笑）」

「は。その通りであります、部隊長」

と敬礼をしながら面白半分に答えるなのは

「それにしても今回は当たりやったね」

「はい。今までもレリックに関する情報が入ってきましたがほとんどはガセネタばかり」

「シグナムの言う通り。何者かが私たちを邪魔している。妨害工作ってやつやね」

レリック。これが今現在六課が全力で確保しようとしているロストロギア。

いくつもの存在するが形はどれも同じ。知らない者にはただの宝石に見えてしまい一歩間違えれば大惨事に至る

「それに関してフェイトちゃんが何か掴んだんよね」

「うん。これを」

ウィンドに表示されているのは一級捜索指名手配されている男

その名をジェイル・スカリエッティ。彼は数々の罪状で超広域指名手配されている犯罪者だった

「ジェイル・スカリエッティ」

「うん。改修したガジェットのパーツに彼の名が刻まれていたんだ」
その時のデータが映し出される
「なんともご丁寧だね。こういうことになるってわかってるだろうにね」
「ああ。犯罪者がわざわざ自分のことを教えるか普通」
ユキナとヴィータは彼の行動に疑問を持った。
普通の犯罪者なら自分のことを教えるものはいない。
言うなれば犯行するまえに自分の名を教え今からやりますよーと教えるものだ
「彼はきっと普通じゃない。ううん、犯罪者は皆そういうものだよ」
「「「・・・」」」
「それにしても今回は無事にレリックが確保できてよかったね」
「そうや。これが六課の今の最大の目的やからな」
「はい。ところで神野。お前はさっきから黙っているがなにか意見はないか？」
神野　麻衣　ライトニング分隊　副隊長　コールサインライトニング３
彼女は指定の制服を着ておらずどちらかと言えば私服に近い。
彼女がこれを認められいるのは彼女には特許（特別独断行動許可書）

が与えられているからだ。

「別に。私には興味がありません。では、これで失礼します」

彼女はそう言うと本当に出ていった

まず、怒ったのがヴィータだった

「一体何なんだよアイツ！ラッコだがラッキョだが知らねぇけどあの態度はないだろ！？」

「落ちつけヴィータ。彼女は三提督からの推薦でこの六課に在籍している」

「それにしても不思議な方ですよね。誰とも接しようとしないんですから」

「そもそも、管理局でも彼女の存在をしったのは最近ですし」

「はやてちゃんは何か知ってる？」

「それが私にもわからないんよ。確かに推薦状と一緒に彼女のプロフィールやデータを貰ったんやけどほとんどが秘匿事項。唯一わかってるのは彼女が魔導師ではないちゅうことや」

部隊長であるはやてですら彼女の情報は少なかった。

本局でも謎の局員ベスト１０に最近ランクインしたらしい。

「はやてちゃんでもわからないんだ。けど、彼女がいつも持ってるアレって刀だよね？」

そう、彼女はいつも竹刀をよく入れている袋に入ってそうなものをいつも持っている
形状からして刀だということはその地球出身の彼女達にとってすぐわかった

「そや。それに彼女はデバイスをもっとらんし、何より魔導師でもない。それなのに魔力を持ってるんやから不思議や」

「魔力はランクでいうとどのくらい？」

フェイトが聞いてみた。魔導師ではないから魔導師ランクは当然ないだろうと思った。
けど、魔力だけなら数値化できるはず

「ちょっと待ってな」

彼女に関するデータが表示される

「・・そう、やね。最低でＢ＋。最高でＳ＋みたいや」

「なんだかはっきりしねぇな」

「なんでも魔力は滅多に使わないらしいんよ」

「じゃあ、魔力じゃなくて何であいつ戦うんだよ？」

「氣みたいなんや」

「「「「「・・・・・？」」」」」

氣という単語に皆固まった

「それって悟〇とかクリ〇ンとかが使うアレ？」

ユキナが言っちゃいけない例で言った

「う、うん。そうみたい。資料には歩法とか武空術、浮遊術、虚空瞬動、中国拳法ｅｔｃって書かれてる」

「聞く限り、麻衣さんって私たち同じ地球出身なのかな？」

名前からもそうだけど中国拳法とかどうみても地球だよ

「そうなんかな？」

「どうしたんですかはやてちゃん？」

「そ、それがな？地球って書かれてるんやけど並列世界の地球ってあってな？多分次元漂流者だと思うんやけど」

「えっそうなの！？」

「うん。麻衣っちそんなこと言ってたよ？」

「「「！？」」」

返答したのはユキナだった

それに麻衣っち？

「ゆ、ユキナ？どうして、ユキナがそんなこと知ってるん？」

部隊長であるはやてでも知らないのに何故かユキナは知っていた

「いや、普通に本人に聞いただけだけど？」

「だけだけど？じゃなくて！」

「え？麻衣っち、意外といい人だよ？このまえ一緒にご飯食べたし」

―ユキナって天然というかすごいんだよね・・・

皆ユキナの意外な才能に気付いたのだった。

「そういえばなのはちゃんはそろそろ訓練の時間じゃあないん？」

「あ、言われればそうだ。じゃあ、私は一旦抜けるね」

「うん。私も後からいくから」

「わかった」

そういうとなのはは出ていった。

「「「「・・・・」」」」

「やっぱり、なのはちゃん無茶してるんとちゃう？」

「それはわかってるんだけど・・なのはの無茶は昔からだから。け

ど、食事や睡眠はちゃんととってるし、今のところは問題ないと思う」

いつも一緒にいるフェイトが言うのだから間違いないと思うだろうが見た目だけならそうだろう。

「シャマルは医務官としてどうや？」

「ホントなら療養休暇をとってほしいんです。無理して身体に負担をかけなければいいんですけど」

「そのためにあたいらがいるんだ。少しでもあいつの負担を減らしてやんねぇと」

ヴィータはあの時の事件を引きずっていた。

いや、忘れることなどできないだろう。だから、少しでも負担を減らそうと彼女と同じ道にいる。

「そうやね。まだまだ不安もあるけど皆で頑張っていこ」

「「「はい」」」

麻衣ｓｉｄｅ

六課の通路を一人歩く麻衣。

彼女はただでさえ制服ではなく私服で周りから目立つ。

しかも、日本刀を抱えているので余計に目立つ。

そんな彼女が片手で本を読みながら歩いている。本をは小説ぐらいだろうか？

本のタイトルは『レイ先生の人との接し方　友達編』と書かれた本だった。
彼女はそれは真剣に読んでいるが一旦目を離し溜息をついた

「はー。私には無理ですね。ただでさえこんな性格なのに」

ヒラリ

1頁をめくるとこんなことが書いてあった。

友達ができないのを性格の所為にしてる君。まずは一人でも友達を作ろう。その友達が仲介人になってそれから一人、二人と友達が増えていくぞ。
もし、向こうから声をかけてくれる人がいたらこれはビッグチャンス！
まず、その人と友達になろう！
きっとその人は人間でいう甘ちゃんとかそういう分類に入るので高確率で友達になれるぞ！

「まずは、一人。って、言ってもそんな人・・・あ、いた」

一人いた。そう、ユキナだ。

彼女はここに来てから妙に接してくるんですよね。
人嫌いである私からみれば目障りなのですが最近彼女と話すのは楽しいと思ってきたところです。

「そうか。まずは彼女から・・ご先祖様、麻衣はやってみせます！」

と上を見上げた。

見上げても天井しかないのに。
そんなところを他の六課の人にみられ睨んだら慌てて逃げ出した。

「・・・ご先祖さま。やっぱり麻衣には無理そうです」

再び本に目を向け歩きだす麻衣であった。

麻衣ｓｉｄｅＥｎｄ

はやてｓｉｄｅ

皆とのお会議が終わり、部屋にはリインとシャマルの三人だけになった。

「それにしてもこの機動六課。設立したのはええけど周りからどうもよく思われてないんよね。まぁ仕方ないんやけど」

聖王教会やクロノくんが後ろ盾になってこの六課は設立した。
さらに管理局総帥レイル・アンヴァルト・Ｙ神乃も六課設立の後ろ盾になっている。
名前だけだが

「レイ兄はこのことを見越して色々と用意してくれたんかな?」

「どうでしょう。私は逆に都合が良すぎるように感じてしまいますけど」

◆◆◆◆◆

それは六課を設立する頃。私の所に闇樹がやってきたんや。

「どないしたん、闇樹？」

彼女は司書でなんでミッドに来ているかわからなかった。

「実はお前らがなにかやると聞いてこれを渡しにきた」

渡されたのはデータディスクだった

なにがはいってるか聞いてみた。

「それには必要な資金、資材、人材と色々入っている。必要になったら使うがいい」

「どないして闇樹がそないなことするん？」

「我ではない。奴が遺していった物だ」

「奴って・・レイ兄！？」

「大声を出すな。まぁ、そういうことだ。どういうわけだが知らんが」

確かにこれは助かる。

使える人材は限られているしなにより私をよく思ってない人も大勢いる

「ああ、それと」

彼女は何か思いだしたようにいった

「何かあったら俺の名前を出せ。だそうだ」

「名前を出したってその本人がおらへん」

「まぁ、そうだがな。それに総帥直々の命令書があるからそれを書き換えて使えとも言っていた」

「それって偽造文書ちゃう？」

そこでお勤めをしてる私らが犯罪を起こしてどないすんねんレイ兄と思ったはやて

「知らん。ちゃんと命令書は入っている。それじゃ、またな」

闇樹は用を済ませると帰っていった。

けど、私は

「今度一緒に食事でもどうや！？」

立ち止まりちょっと顔をこっちを振り向き

「ふん、誰が貴様と。・・しかし、時間が空いたら付き合ってやる」

「素直やないんやから」

◆◆◆◆

「そうやね。けど、今は進むしかないんや」

「ところではやてちゃん？」

「ん？どうないしたんリイン？」

今まで状況が状況なだけに中々自分の意見を言えないでいたリインフォース？
新たな祝福の風である

「その・・さっきから会話に出てるレイって人誰です？」

「そっか。リインフォースはまだ知らないんでしたっけ」

「本名レイル・アンヴァルト・Ｙ・神乃。時空管理局総帥であり私たちの大切な人やった人や」

はやてｓｉｄｅＥｎｄ

第５４話　機動六課　前篇（後書き）

さて、新キャラ神野麻衣登場！
かなり前に名前だけ出しました。最初はミサキだったのですか麻衣に変更。一応訂正はしてあります。
オリキャラ紹介はあとでまとめてやりますので待っていてください

第５５話　機動六課　後編（前書き）

さて、後編になります。
しかし、六課ｓｉｄｅよりカオスたちの方が目立ってるかも？

第５５話　機動六課　後編

訓練ｓｉｄｅ

「でりゃあああ！」

「ぐぅうう！」

現在ＦＷ陣は個別の訓練を受けていた。
スバルは今ヴィータの！“普通”の攻撃を受けそれをバリアで受け止めていた。
スバルがヴィータの攻撃を堪えて尚その打撃力に押されている。それでも後ろに少しずつ押されているのだが。

「スバル、お前は筋は悪くない。後は学習と経験だ」

「はい！」

「あたしらのポジションはＦＡ。敵陣へ単身で斬りこんだり最前線で防衛ラインを守るのが仕事なのはわかってるな？」

「はい！」

「まずは、防御スキルの向上だ。防御には３つ種類がある。それを完全に使いこなせることができれば一人前のＦＡ。そして、あたしとグラーフアイゼンを堪えることができたら申し分ない」

―ヴィータ副隊長の攻撃を堪えるなんてキツイなぁ

「なんか思ったか？」

「いいえ！」

「それじゃあ訓練再開だ」

「はい！」

「エリオとキャロはまず回避行動の基礎からやってみようか」

「「はい」」

とフェイトが手本を見せる。最初はゆっくりと動き方を教えていくが途中から速度をあげ二人の目はフェイトを追えず気づけば後ろに立っていた

「実際に戦場ではいつどこから攻撃がくるかわからない。けど、まずはこれを的確に確実に覚えていこうね」

「「はい！」」

バン　ドン　バンバン　ドンドン

ティアナはなのはと訓練をしていた。

ティアナはひたすらなのはが打ち出す魔力弾を撃ち落としていた。

「そうそう。いい感じだよ、ティアナ。精密射撃型のティアナはい

ちいち敵の攻撃を避けながらじゃ仕事にならない」

さらになのはは魔力弾の数を増やす

「だから、足を止め視野を広く、そして誰よりもはやく射撃ポジションを確保。それが私やティアナのポジション。センターガードだよ！」

「はい！」

訓練場郊外

訓練場から見える位置にシグナムとヴァイスは訓練の様子をみていた

「にしても若いっていいっすね」

「若ければ成長は早い。何より教えたことをどんどん吸収していく」

「そうっすね。ところで、シグナム姉さんはいいんですか？」

「私は騎士だ。あの４人に教えることは何もない。それ以前に、私が教えては余計に混乱させてしまう。私のスタイルはあの４人とは合わないからな。それに、私は人に教えるのは苦手な方だ」

―まぁシグナム姉さんの場合、言葉より戦いで教えるタイプだよな

「私が唯一教えてやれるのは戦い方と剣だけだ」

「はぁ？そういえば神野副隊長も剣ですよね？」

「ああ、そうらしい。稽古に付き合ってもらいたいのだが中々うまくいかん」

同じ剣を使うもの同士。できれば練習相手になってほしかったのだが妙に避けるというかいや違うな。なにか変な違和感が残る。

「やはりユキナに頼んでみるか」

「ユキナ副隊長にですか？」

「ああ、あいつは人と分け隔てなく接するというか好き嫌いがないからな。神野ともいつのまにか友達、みたいな関係になってる」

―へー。さすがお姉系。バストだけではなく心も広いとは

「貴様へんなこと思わなかったか？」

「いいえ！」

訓練ｓｉｄｅＥｎｄ

カオスｓｉｄｅ

ここはスカリエッティのアジト。

俺は今現在ここに居候中。まぁ厄介になってるだけだが。

「で、なんのようだ？」

俺は彼に呼び出された。

なんでも見てほしいものがあるとかで

「まぁ、そう慌てないでくれ。これを」

正面に大きくウィンドが表示された。

映像には前回レリックの確保に失敗した映像が流れていた。

「なんだ。この間負けた時のか」

「痛いことを言うね。けど、本題はそこじゃない。彼女、見覚えがあると思わないかい？」

その人物をアップされ表示されたのはフェイトだった。

「・・・プロジェクトFで生み出されたクローンか。興味ない」

「ホントかい？君は妙にアレにこだわっていたじゃないか？」

「興味があったのはプロジェクトの中身。生み出されクローンじゃない。そっちに興味があったのはあいつだろ？」

あいつと聞くとスカリエッティは笑いだした

「くく、そうだったね。私の予感だとこの部隊はかなり厄介になると思うんだけど君はどうみる？それが本題でもあるんだけど」

機動六課に関するデータが表示されていく。

局員の構成や個人データまでとはいかないが局でのデータが表示されていく

「・・・それなり優秀な人材が揃っているな。しかし、まだまだ餓鬼だ。故に単純で脆い」

「君が言うんだからその通りなんだろうね」

「まぁな。ん？なんだFの残滓がもう一人いるのか。しかも、餓鬼。それに召喚魔導師？か。あとは・・・今噂の管理局の白い悪魔か」

「へーそんな噂があるのかい？」

ドクターは興味がわいたようでそのことを聞きたいようだった

「ああ。同業者、というか反管理局派のやつらがそう言ってた。なんでも悪魔のようなんだと」

カチ

ライターに火をつけタバコを吸い始めた

「それは興味があるかもね。それに彼女はアレを持っている」

「ああ、そうだな。どのくらいの成果になっているか観てみたいもんだ」

そんな風に言ってはいるがあんまり興味がなそうにも聞こえる

「私としてはFの残滓を手に入れられると嬉しいんだけだね」

「借りを還すため、お前の依頼を受けているがそんなメンドイのはお断りだ。俺たちは仕事に命をかけている。そして、無駄に命を散らすようなことをしない」

そう、仕事は俺たちにとっての商売（ビジネス）だ。俺たちはプロだ。だから、無残に命を捨てることはしない。仮に奴を捕えようとしてもその仲間がそうはさせないだろう。ただでさえ優秀な部隊なのだから。

「そうかい。それは残念だ。というわけで次の依頼だけど」

「ふー。引き受けよう。で、内容は」

煙を吐き依頼内容を確認する

「実はガジェットがレリックと勘違いして今その場所に向かってるんだけどそこが骨董オークションが行われる場所でね。調べてみたらロストロギアが出展されていたんだ。君にはそれをとって来て貰いたいんだよ」

「つまらない依頼だな」

「それじゃあ、あの二人と競争するかい？」

「いいねぇ～張り合いが出てくる」

「はは」

―冗談で言ったんだけどね

「で、場所は？」

「ホテル・アグスタ。そこに出展、参加する人のデータもあるから後でみてくれ。ああ、それと情報だとここの警備に機動六課が担当されるそうだ」

「ふーん。まぁ実際にどのぐらいの実力か見ておくのも悪くない」

彼はそう言うと部屋から出ていこうとした。
何かを思い出したのか一旦足をとめ彼の方に振り向いた

「そうそう。パーティ用の服を用意しておいてくれ。二人分」

「二人分？君だけじゃないのかい？」

「馬鹿が。そんなところに一人でいくか普通。サレナと一緒にやるから用意しておけ」

「わかったよ。あとでウーノに届けさせるよ」

歩きながら手をあげわかったと合図をし彼は部屋から出ていった
彼と入り違いでクアットロが入ってきた

「ドクター、あいつなんなんですか！ドクターに対してあんな態度。それにタバコ臭いし」

「はは。許してくれクアットロ。彼はそういう人なんだよ」

「犯罪者の癖に妙に正義ぶってますし、いくらドクターの知人でもさすがに」

クアットロはドクターに対してあうゆう態度をとるカオスが許せなかった。
というより私に対して妙に敵視してる

「クアットロ、彼が犯罪者以外の人からなんて呼ばれてるか知ってるかい？」

「いいえ」

「『革命家』とも呼ばれてるらしいんだよ」

「革命家？どこぞの国のゲリラたちと打倒なんとか政権でも掲げたんですか？」

「その通りだよ」

「嘘ぉ！」

「本当さ。まぁ第三者からみればどうみても国が悪者でその反政府組織が正義みえる場所に彼は反政府側についてはゲリラを勝利に導いたとも言われてるんだよ。ごく最近のことだよ」

クアットロがなんで犯罪者がそんなことをするかわからなかった。
犯罪者なら犯罪者らしく誰か殺していればいいんだと思っていた。

「それじゃあ、同業者の人からなんて呼ばれてるんです？」

「身内殺し（テロリストキラー）って呼ばれてみたいだよ」

「身内殺し？えーとつまり・・」

「そう、同業者である犯罪者たちを殺してついた異名、称号さ」

スカリエッティのアジト　カオス達の部屋

依頼を受けたカオスは残りの二人にこのことを伝えに部屋に戻っていた
部屋に戻るとサレナとハーデスはトランプでなにかゲームをしていた。

「ストーレートフラッシュ。私の勝ちだ」

「絶対イカサマしたでしょ！」

「なんのことだ」

「とぼけないで！その鎧に仕込んだんでしょ！？」

とハーデスがゲームでイカサマをしたとかしてないとかで喧嘩していた

「はー。お前ら仕事だ」

「あ、カオスお帰り」

「で、依頼内容は？」

一人はのんきで一人は仕事モードに入っていた

「依頼内容は物の確保」

「レリックか？」

「いや、違う。骨董品を奪ってこいとのことだ。そこで、今回は俺とサレナで会場に侵入。その物を確保しだい脱出。それと物を巡ってあの二人と競うことになっている」

「私の役目は」

「現地から少し離れた場所で待機。何かあった場合援護を」

「了解」

「で、私とカオスはどうやって中に？」

「紹介状を偽造すればいい。あと顔は・・お前の偽装魔法でなんとかなるだろ」

「だよね～。私たち目立ちすぎるもんね」

三人とも変な仮面をつけハーデスに至っては変な鎧をつけている。

「では、各々準備に取り掛かってくれ」

「「了解」」

カオスｓｉｄｅＥｎｄ

ティアナｓｉｄｅ

「はー疲れた」

ベットに横たわるティアナ。やっと訓練が終わった。
相棒、スバルに至ってはもう寝てる。

「・・・私だけ凡人、か」

私だけ何の才能もない。
魔力もそんなにないし。

「兄さん」

大好きだった、たった一人の家族の人を呼ぶ

少女は静かに決意をする

「凡人でもやれることを証明してみせる」

ティアナｓｉｄｅＥｎｄ

第５５話　機動六課　後編（後書き）

仁「あれを引っ張り出すためにティアナを利用しているがちょっと無理やりすぎたかな？」

イヴ「ティアナはいらない子？」

フィ「いらない子じゃないんじゃない。さすがに」

イヴ「けど、ＦＷメンバー存在感薄いよね」

仁「まぁ仕方ないんだよね。他のキャラが大きいから。ちなみにこのｓｔｓ編ではユキナと麻衣がかなり目立つかもね」

フィ「へーあの子がね」

イヴ「そういえば知り合いだよね。一応」

フィ「まぁそれはそうなんだけどね。それじゃあ、また次回で！」

第５６話　ホテル・アグスタ（前書き）

えーｓｔｓ編４話目にしてもうホテル・アグスタです。
早いんですけどまぁ前編だけだと思います。

ティアナをかくのはいいんですけどすごく適当になりがちになってきました
いやはやいらない子ではないですが面倒です

いや、もちろん好きですよティア

第５６話　ホテル・アグスタ

ホテル・アグスタ会場　受付

「いらっしゃいませ。招待状はお持ちですか？」

受けつけの係員に言われ招待状を差し出す５０代の男

招待状の中身をみて本人確認をする

「えージーン・アブレラ様でよろしいですか？」

「ああ」

「そちらは奥さまのアンジェリーナ様で？」

隣にいたご婦人が軽くお辞儀をする

「いやね、妻は骨董品に目がなくて」

「もう、いやですよあなた」

「ははは、それはそれは。今回はそれなりにいいものが出展されますのでどうぞお楽しみに。では招待状をお返しします」

「ありがとう。いこうか」

「はい」

二人は腕を組み会場へと入っていた

―ちょろいものね

―ああ

―そうそう、例の機動六課。来てるみたいよ？

―そうか。奴の情報通りか

「時間までまだ余裕がある。それまではゆっくり待ってればいいさ」

「はい、あなた」

二人が会場に入ってすぐ機動六課も現地に到着。
高町なのは、フェイト・T・ハラオウン、八神はやての三名は会場内の護衛に入った

「とりあえず、警備は厳重だね」

「うん。今フェイトちゃんは他の所を回ってるけど異常はないはずや」

「そっか。さすがにガジェットもここまでは来ないと思うけど用心に越したことはないね」

「うん。外は皆がいるから安心やけど一応な」

―まだ、時間には少し余裕あるし・・

「はやてちゃん、少し外れてもいい？」

「どないしたん、なのはちゃん？」

「ちょっとお化粧直しに」

と舌を出しながらごめんねという素振りをしていた

「ええよ。まだオークション開始には時間あるし」

「うん、じゃあまた後で」

一方フェイトは会場以外を調査していた。
軽くみる限り問題はなかった。

「オークション開始まであとどのくらい？」

『3時間27分』

「ん。じゃあ一通り見て回ろうか」

『了解』

愛機が精確に時間を伝えまだ時間に余裕があるため再び歩き出す
しかし、すぐに足をとめた

「あれ？」

フェイトは今通った向こう側の通路に見覚えのある人がみえた気がした

『何か問題が？』

バルディッシュが何か問題が発生したと思ったのだろう

「ううん。なんでもない」

フェイトは再び仕事に戻った

なのはｓｉｄｅ
化粧室

はやてちゃんに嘘付いちゃったな。まぁ嘘をつく程のことでもないんだけど

鏡の前にたちドレス姿の自分をみているなのは
普段、化粧なんてしないけど今日は何故か念入りに化粧をしていた自分がいた

「あの時のレイくんにはこう見えていたのかな」

あの時、１０年も前。レイくんにデートをしようと言われデートだと思ったら知人の舞踏会に出ることになった私。そこはまったく別の世界で当時の私、子供がいるには場違いな場所だった。
少し拗ねていた私を元気づけようとレイくんがなにか変な薬を私に飲ませたんだっけ。

そう、今思えばその時の私がみた風景は今のこんなような感じだ。

「今の、私をみたらまた綺麗って言ってくれるかな・・」

自分の姿をみる。自分で言うのもなんだけど様になってると思う。
でも、フェイトちゃんには負けるかな。フェイトちゃんのがなんて
いうか似合ってる。

「・・・そろそろ、戻んなきゃ」

なのは深く考えるのをやめ化粧室を後にした

なのはｓｉｄｅＥｎｄ

それから少し経ちガジェットが現れた。
シャマルの指揮の元戦闘が開始された。
新人ＦＷメンバーはホテルの防衛。副隊長たちが迎撃に向かった。

「いくぞ、グラーフアイゼン！」

『久しぶりの登場ぉおおおお！』

シュワルベフリーゲン。ヴィータがもっとも好んで使う技だ。かつ
ては一回に４発しか打てなかったが今では８個を展開し４発ずつ連
続で撃つまでに上達していた。
そして、命中精度も威力も上がっていた

「レヴァンティン！」

『了解でござる』

剣に炎を纏いガジェットを切り刻んでいくシグナム。

「なぁ、レヴァンティン口調変わってないか？」

『そんなことはありません』

「いや、さっきござるって」

「そんなことより目の前の敵に集中しろ」

「わかってるよ！」

一方

ギュイーン

ギィーーーーー！

ドリルが機械を貫く音が響きわたる

『ユキナそっちはどう？』

「シャマル、こっちは問題ないよ。それにー」

シャキン・・・カチャ

ドン！　ドン！　ドン！

真っ二つに斬られ破壊されていくガジェットたち

「麻衣っちも問題ないよ」

『わかったわ。引き続きお願い』

「うん」

通信が消え麻衣の方をみるユキナ

「・・そのユキナ、私を麻衣っちというのはやめてほしい」

「えー！いいじゃん。それに、麻衣っちだって満更でもないくせにぃ」

目を細くして訴えてくる彼女。

ユキナには麻衣のことはお見通しだった

「うぅう。ご先祖様、友達はできましたが麻衣は悪い友達を作ってしまいした」

「はは。ドンマイ！」

「ううー・・・」

ティアナｓａｉｄｅ

ティアナはモニターで隊長たちの戦いをみていた
―これでリミッター付き?どうかしてる
彼女達の力はありえない。と思っていたティアナ。
八神部隊長はどういうコネで六課を設立したかわからない。
歴戦の魔導師、将来を約束されたエリートたち。凡人は私だけ。
「ティア、どうしたの?」
「なんでもないわよ」
証明してみせる。
特別な才能がなくたって、すごい魔力がなくたって
やれるんだってことを
ティアナｓｉｄｅＥｎｄ
ジーンｓｉｄｅ
「遅いですね」
隣に座っていた男が話しかけてきた
私は笑顔で返した
「そうですね。どうしたんでしょうか?」
「あなた?」

「ん？どうした」

「そろそろ時間よ？」

「そうか。それじゃあいこうか」

ジーンとアンジェリーナは立ち上がった。
それをみたとなりの男が聞いてきた

「おや、どちらへ？」

「ちょっと野暮用でね。なに、始まる前には戻ってきますよ

そう言い残すと二人はどこかへと向かっていた

ジーンｓｉｄｅＥｎｄ

ルーテシア・ゼストｓｉｄｅ

「始まったな。優秀な魔導師たちだ。ガジェットでは無理だな」

「うん」

離れた場所から戦闘を傍観している人物が二人
少女の名をルーテシア、男の名をゼストという

『ごきげんよう、騎士ゼスト、ルーテシア』

「なんのようだ」

通信の主はスカリエッティだった

『冷たいね。近くで見てるんだろう？少し頼まれごとをしてくれないか？』

「断る。今回、レリックが絡んではいないのだろう。なら、我々がお前に協力する義理もない」

『確かにそうだがあそこには実験に使えそうな骨董品があるんだよ。それを盗ってきてくれないかい？君たちなら造作もないことだろう？』

「断る」

『ルーテシアはどうだい？』

「いいよ」

『優しいなルーテシアは。今度、お茶とお菓子を奢らせてくれ。アスクレピオスにデータを送ったよ。そうそう、現地には彼がいるからね。彼は君たちとどちらが先に確保できるか競ってるみたいだからね』

「あの人が？」

『そうだよ』

「うん、わかった。じゃあ、ごきげんよう」

『ああ、ごきげんよう』

通信が切れルーテシアは羽織っていたパーカーをゼストに預けた

「いいのか？」

「ゼストやアギトはドクターのこと嫌ってるけど私はそんなに嫌ってないから。それにあの人もいるし、少し遊んでくる」

「そうか」

ゼストはそれ以上言わなかった。

「我は・・請う・・召喚・・インゼクト・ツーク」

「！召喚魔法！？」

「最初に気付いたのはキャロだった」

「こっちでも確認したわ。でも、この魔力・・」

少女の周りに無数の小さな虫が現れる

「お願い」

ブーン・・・

インゼクトはそのまま戦闘が行われている場所へと飛び生き残っているガジェットにとりついた

「なんだ・・こいつら動きが・・」

「ああ、今までとは違う。ヴィータ、お前はホテルの防衛にいけ」

「ああ」

ヴィータはスバルたちのいる

「ザフィーラ、私と合流しろ」

「心得た」

「さぁいくよ」

１１機のガジェットを転送させる

「転送陣！？来ます！」

キャロの言葉と同時にスバルたちのもとに１１機のガジェットが現れた。

その光景にスバルたちは驚いていた

「三人とも、迎撃よ！」

「「了解！」」

ティアナの言葉とともに反撃を開始した

「！見つけた。ドクターの探し物。ガリュー、ちょっとお願いしていい？・・うん、お願い気をつけてね」

腕をあげそこから一筋の光がアグスタへと向かった

バン！　バン！

「ちっ！」

ティアナはガジェットに向けて魔力弾を叩きこむがインゼクトが入ったガジェットは今までの機械的な行動をせずまるで人のように動く。

だが、それも限界がある。ＡＭＦを貫通してガジェット本体にダメージを与えるがインゼクトがあやつるため戦闘不能にはならなかった。

『皆、もう少し持ちこたえてね。ヴィータ副隊長がもうすぐこっちに来るから』

シャマルが皆に伝えるがティアナはそれを否定した

「そんな、守ってばっかじゃ息詰まります！ちゃんと全機落とします！」

『ティアナ！焦らないで。今のガジェットは今までのとは・・』

通信でシャーリーが心配して声をかけるが

「大丈夫です。伊達に毎日、朝晩訓練してないですから。スバル！」

「応！」

スバルがウィングロードでガジェットの的になって注意をひきつける

「証明してみせる。私の、ランスターの弾丸はちゃんと敵を撃ち抜けるんだって」

４発ロードで無理やり魔力を引き出す。

だが、それは無謀でしかなかった。そう、かつてのなのはと同じだろう。

しかし、彼女となのはは違う。

「クロス・ファイヤー・・・シュートォ！」

「！」

それと同時にスバルは退避する

「てりゃぁあああ」

バン　バン　バン

次々とガジェットを落とすティアナ。

しかし、一機逃しそのまま魔力弾はスバルに向かった

「は―！」

ドン！

「はぁはぁティアナ！この馬鹿！」

急いで向かってきたヴィータが誤射を撃ち返した

「無茶やった上に味方撃ってどうすんだこの馬鹿！」

「あぁあ・・」

ティアナは放心していた

「ヴィータ副隊長、今のその」

スバルがティアナを庇うがそんなのウソにしかみえないの歴然だった

「ふざけろタコ！今のは直撃コースだぞ！」

「違うんです！今のは・・」

「黙れ！もういい。お前らすっ込んでろ！」

ヴィータは激怒した。

ミスをした仲間を庇おうとしそれを否定する新人に

何よりそれを認めない自分をたちを

地下駐車場

地下駐車場では数名の警備員がオークションで出展される品を警備していた
地下でも外の戦闘での爆発音が聞こえていた

「ここは大丈夫かよ？」

「大丈夫だろ。防衛しているのは六課なんだから」

「そうだな」

「それにしてもいつ頃終わるかな」

「いや、もう終わるよ」

『？』

自分たちの声じゃないとわかった。
声の方を向くとそこには恐らくオークションに参加している紳士だった

「紳士（ジェント）ここは会場ではありませんよ？」

「いいや、私の会場はここなんでね」

「なにを・・・ぐ」

バタ

紳士はいきなり目の前の男の腹を殴り倒れた

「おい、貴様いったいなにを―！」

「ぐは！」

「ごめん遊ばせ」

後ろには紳士の妻、アンジェリーナが手刀で二人を気絶させた

「えーと、あったあった」

ガチャリ

まるで鎧の音が聞こえた

紳士、ジーンは後ろを向くとルーテシアの守護獣、ガリューがいた

「遅かったな。ガリュー」

ジーンは何故かガリュー知っていた

ジャキ

ガリューは構えた

敵だと、自分の任務の邪魔だと悟ったからだ

「おいおい、俺だよ、俺。サレナ」

「はーい」

パチン

指鳴りの音で彼らの姿が現れた。ジーンの顔は仮面をつけた男に。
アンジェリーナもだ。
それをみるとガリューは構えを解いた

「勝負は俺の勝ちだ。ルーテシア」

『うん、私の負けだね』

ルーテシアとの通信が開いた
ルーテシアは楽しそうに彼とシ喋っていた

『中身はなんなの？』

「オークションに出展されない密輸品だ」

『そっか』

「それじゃあ、後で合流しよう」

『うん、ガリューも帰っておいで』

ガリューは喋れないが頷いて応えた。

「サレナ、いくぞ」

「了解」

地下駐車場から二人と守護獣の姿は消えた。

オークション会場ｓｉｄｅ

「お待たせいたしました。ただいまよりオークションを開催いたします」

パチパチ

はやては会場入る扉の向こう側でシャーリーから連絡を受けていた

『前線のおかげでガジェットはほぼ撃墜しましたが召喚士は追えませんでした」

「うん、まぁよしとしよ。任務は順調や」

「はい」

通信を終えると足音が耳に入った

「そこのお嬢さん。もう、オークションは始まってますよ」

「ご心配なく。これでもお仕事中なんで。どこかの査察官と違って」

「ほう、言うようになったじゃないかはやて！」

男は彼女の頭を撫で始めた

「はは。アコース査察官はお仕事をサボってなにをしてるんや？」

「酷いな。これでも仕事中だよ」

「さて、ここで品物の鑑定と解説を行ってくださいます若き美少女を紹介します。
考古学者でもあり、かの無限書庫の司書長、神乃星音司書長です！」

「「えっ！？」」

なのはとフェイトは任務のことについて話し合っていると見知った名前が聞こえ舞台をみた

「・・どうも、こんにちは」

「星音ちゃん！？」

オークション会場ｓｉｄｅＥｎｄ

ティアナｓｉｄｅ

「ティア・・」

スバルとティアナはホテルの後衛で待機していた

「ティア、私大丈夫だから」

「いいわよ。アレは私のミスなんだから」

「でもティアナは！」

「もういいから！」

「！」

必死に慰めようとうするスバルに八つ当たりするティアナ

「お願いだからあっちいって・・」

「うん・・・でも、私平気だから！」

「・・・」

スバルがいくのを確認すると壁によりかかった

「うぅ・・・・あぁああ」

ティアナは悲しみではない、悔しさという涙を流した

ティアナｓｉｄｅＥｎｄ

第５６話　ホテル・アグスタ（後書き）

『フィリーヤとイヴのフィリイヴな時間」

フィ「ふー。看板も戻ってきたし本格的に復活ね」

イヴ「そうだね。さて、あのシーンを演出するために今現在ティアナが酷い目にあってるけど・・・」

仁「仕方ないじゃん。アレ出すのにティアナがこうなんなきゃいけないんだから」

フィ「仕方ない？ほー。じゃあ、あんた。もしレイが生きてたら彼女も餌食になってたんでしょ？」

仁「いうや、私はｓｔｓ編のキャラあんま好きじゃないんで。ナンバーズとかヴィヴィオとかギンガとかそういうのを除いて」

イヴ「変態」

仁「それが俺の生きる道！」

フィ「変態はほっておいて次回は新キャラ神野麻衣が主役かも？」

イヴ「それじゃあ、また次回

第５７話　無茶をした先にあるものは・・（前書き）

今回は星音登場。
イメージはスーツ姿で伊達メガネをかけ髪をおろしている感じです。

今回は麻衣がかなり目立ってます

第57話　無茶をした先にあるものは・・

戦闘終了後

「えっと。報告は異常かな。現場検証は調査班がやってくれるけど皆も協力してね。しばらくして何もないようだったら撤退だから」

『はい』

六課のＦＷメンバーの事件の後始末をしていた。辺りには派遣されてきた調査班がガジェットの残骸を調べていた。

「で、ティアナは・・ちょっと私とお散歩しようか」

「ぁ・・・はい」

「失敗しちゃったみたいだね」

「すみません。一発それちゃって」

「私は現場にいなかったかし、ヴィータ副隊長が叱ったと思うから何も言わないけど、ティアナは少し一生懸命すぎるんだよね」

「・・・」

「それで少しやんちゃしちゃうんだ。でもね？」

「ぁ」

なのはの手がティアナの肩に触れた。

「ティアナは一つ勘違いしてる。ティアナは一人で戦ってるんじゃないんだよ。私やティアナのポジションは前後左右全部が味方なんだからね」

「っ！」

「その意味と今回のミスの理由。ちゃんと考えて同じことを繰り返さないって約束できる？」

「はい」

「なら、もう大丈夫だね。ちゃんと約束したからね」

「はい」

そう言うとなのははティアナを戻した。

―約束か。今度は私からなんだよ。

今までは彼からだったが今は私から約束をしている。

―ティアナ、思い詰めすぎなければいいけど・・

「ん・・・」

キャロもまたガジェットの残骸を調べていた。
ふとフェイトの方に顔を向けると・・

「なのは隊長!?」

そう、隣には高町なのは隊長がいる

―あ、でもよくみたら髪の毛おろしてるし服装も違う・・

そのなのはと似た人物とフェイトはまるで友達のような会話をしていた

―あの・・シャーリーさん?

―ん、どうしたの?

―その、フェイトさんと一緒にいる人なのは隊長じゃないですよね?

―あ、うん。彼女の名前は神乃星音。その・・本局総帥の娘さんなの・・

―え、そうなんですか!?でも、なんでなのは隊長と顔がそっくりなんですか?

―そのことについて秘匿事項になっててわからないの。ただ、なのはさんたちとは仲がいいみたい

星音ｓｉｄｅ

「にしても、驚きました。管理局の部隊が護衛になると聞いていましたがまさかあなたたちだとは」

「そうだね。私もなのはも星音がここにいるなんて思ってもみなかった」

今の星音はかつてフリフリのスカートではなくスーツを着ている。髪はなのはと違いおろしている。ちゃっかり伊達眼鏡をつけていた

「それに、いつのまに考古学者に？」

司書長になったのは知っていたけど考古学者になっているとは知らなかった

「まぁ、書庫を調べていく内にその土地へ往ったりしてたらいつのまにか。あの人の知人の学者もいたので色々とやりやすかったですけどね」

「そうなんだ。ところで雷華は元気？」

フェイトはもう一人の自分でもある雷華が気になっていた

「あの子は元気すぎる程元気ですよ。ちょっとはあなたみたいに大人になってほしいです」

「ふふ。雷華らしい」

「あ、フェイトちゃん、星音ちゃん！」

「なのは」

「久しぶりです。私」

「もう、いい加減名前で呼んでよ星音ちゃん！」

星音はなのはのことを名前で呼んだことがない。いつもあなたか私と言っている

「それより少しあなたに話があるんですけど構いませんか？」

「ん。平気。じゃあ、フェイトちゃん後お願い」

「うん」

それから二人は茂みの中へ歩いていった

「ホント久しぶりですね」

「ホントだね。こっちに来てから書庫には通ってないから・・」

本局にいた時はよく通っていたが今ではこっちに来てから通う暇もない

「毎日来られても困りますが・・・」

「そう言えば前に聞いたかもしれないけどなんで司書になったの？」
前回は色んな意味で誤魔化されたからちゃんと理由が聞きたかった

「そうですね。まぁいいでしょう。あの人がいなくなる前のこと。私は本を読むのが好きでしたから彼に書庫に連れていって貰ったんです。そこで、あの膨大な中から本を探すために検索魔法を教えて貰って・・それからですか。色々と興味を持ったのは。あの人にも勧められましたし。多分仕事を押しつけたかったんでしょうが。今ではよかったと思ってます」

「そう、なんだ」

やっぱり聞かなければよかった
どうせ、レイくんが絡んでると思っていた

「・・・私からも一つ」

「？」

「―いい加減、あの人のことで悩むのは止めたらどうすか？」

「！」

なんで星音ちゃんにそんなこと言われなきゃいけないのかな

「帰ってこないから。それとも死んだから？一つ いいことを教えてあげます。彼は死んでません」

「え？」

「どう、勘違いしてるかわかりませんが彼が死んでるはずがない。現に私たちが生きてる。それが彼が生きてる証拠」

「話がよくわからないんだけど？」

「私たちは彼の契約で魔力を与えられここに存在しています。なら、その供給源が無くなったら？」

「存在できなくなる」

「そういうことです。だから、彼が死んでるわけがないんですよ」

「じゃあ、生きてるならどうして帰ってこないの？」

「そんなの簡単です。彼、だからです」

そんなのわかってる。私が知りたいのはもっと簡単ことなんだよ

「・・・あなただって予想は付くはずです。彼は総帥。多くの敵に狙われてもおかしくはない人物。それに、彼の敵は他にもたくさんいます。それに巻き込まないために彼は管理局と言う枠にとどまらない」

「黄金の・・夜明け団」

「そう。最近、彼が消息不明を嗅ぎつけたのか妙に裏で動いてます。それに、最近私の所に変な情報も入ってきましたし」

「変な情報？」

そもそも司書長という立場でそういう情報が入ってくるのが不思議だ

「裏で暗躍してる彼らですがそれに伴って多くの施設を破壊されてます。そもそも我々がそれを夜明け団と断定するには色々と材料が必要ですが。まぁそれは置いといて、それを破壊している者の情報、まぁ噂です」

「噂？」

噂ということは実際にそれを目撃してはいるが確定した情報ではないのだろう

「ええ、なんでもテロリスト、犯罪者ばかり狙った犯罪者がいるとか」

「なんなのそれ？」

「さぁ？ただ、噂ではその者は―身内殺し（テロリストキラー）と呼ばれているそうです」

星音ｓｉｄｅＥｎｄ

カオスｓｉｄｅ

六課がガジェットを撃墜してから2時間後

カオスとサレナはアジトに帰ってきていた

「ほれ、頼まれた物だ」

頼まれた物をドクターに渡すカオス

「ありがとう。それでどうだったんだい？」

「簡単な仕事だ。変装魔法も見抜けない警備システムだし、ミッド地上本部に潜入する方がやりがいがある」

「はは、そうかい」

ボ　スー　フー

タバコに火をつけ一回多く吸ってはいた

「そうそう。君が留守の間に連絡があったんだよ」

ここに連絡を教えているのは限られている。そもそも、魔法が使えない世界にも教えている人物がいるが普通に電話して繋がるようにしてある。

「となると、暴力教会か。で、伝言は？」

「頼まれた物が揃ったから運び屋に後は任せた。だそうだよ」

「そうか。で、その運び屋の連絡先は？」

「これ。近々、こっちに来るみたいだよ？」

「ふーなるほど、列車で運搬で合流してこっちで受け取りね。ここ

の捜査官どもは優秀だからな。少し、用心しておくか」
彼はそう言うとその運び屋に連絡をとった
「で、アレはどんな感じだい？是非君の意見を聞きたいんだけどね」
「アレ？ああ、例の機動六課って奴か。別にお前の敵でもないし俺の敵でもない。楽勝だ」
「くく、そうかい。それは実に頼もしい言葉だ」
カオスｓｉｄｅＥｎｄ
ティアナｓｉｄｅ
六課に帰還した前線メンバーは午後の訓練は無しと言われその身体をゆっくり休めていた。
しかし、そこにティアナの姿はなくただ、一人必死に自己練をする彼女の姿があった。
ただ、同じことを繰り返してもう４時間は経っていた。
そんなに続けていれば身体が持たないことはわかっていた。
「あっ」
ほら。
彼女は跪いた

「もう、その辺にしとけ」

「ヴァイス陸曹、見てたんですか？」

「まぁな。それにみてたのは俺だけじゃないぜ？そうですよね？神野副隊長」

「え？」

ヴァイスの視線の方向に目をやると木の枝に座って刀を抱いている彼女の姿があった

「君、いい目をしてる」

「ありがとうございます！」

麻衣は木から飛び降りた

「どうして、神野副隊長がここに」

「君のことが気になったから」

「はぁ？」

―なんで神野副隊長が私のこと気になるのかしら

「それにいいたいこともあったし。えーと」

「ヴァイス陸曹であります！」

―なんで陸曹こんなに緊張してるのかしら？

「そう、ヴァイスくんもそうだと思う」

「やっぱりわかりました？」

「まぁね。ティアナ？だったね。なのは隊長は今日はゆっくり休めって言ったのにどうして訓練なんかしてるの？」

「それは・・・私は凡人だから。だから、こうやって煮詰めてまで練習しないとだめなんです」

そういうと再び訓練に戻るティアナ。

「凡人、ね。ヴァイスくんは今の彼女をどうみてる？」

「そうですね。精密射撃なんてもんはそんな簡単に習得できないものです。ただ、当てるのとはわけが違う。的確な場所に当てる。的なら簡単でしょう。けど、それが実戦になればそんなに簡単には上手くいかない」

「私は魔法や銃のことよくわかんないけど多分そうだと思う」

「何が言いたいんですか？」

ティアナは訓練を辞め二人の方を向いていた

「無理してまで練習しても意味はないってこと。なのは隊長がそういう自主連については言わないのは皆を信じてるからだと思う」

「・・・けど」

「それはただ自分の身体を痛めつけてるだけ。自分を痛めつけてまで練習したって身体は答えてくれない。翌日、全然動けない」

「でも、そうでもしないと私は！」

「私はね？あなたの気持ちとか考えていること凄くわかる。その・・・あなたのことデータみた。あなたが頑張るのもわかる。けど、無理してまで身体を痛めつけてまで頑張ってもその前で倒れちゃう」

「つまり何が言いたいんですか。今すぐ止めて寝ろとでも？」

「おい！」

その怒り口調で喋るティアナをヴァイスが注意するが麻衣はそれを許した

「わかるって言ったのは私も似たような人生を送ったから」

「え？」

「ちょっと昔話をしてあげる。昔、昔あるところに小さな少女がいました。その子の家はとある武家で有名な家でした。少女には兄がいました。兄はいずれその家を継ぐ者として日々修行をしていました。逆に少女は普通に学校に通い友達と遊び普通の女の子として暮らしていました。
しかし、ある日突然兄は死んでしまいました。その日から祖父と父は変わりました。少女は学校を辞めされられ、そして兄と同じ、それ以上に少女に武を叩きこませました。普通の暮らしをしていた少

女にとってそれは一日と持ちませんでした。けど、二人は少女に家のため、名誉と威信、そして一族の真の目的のために少女は朝か晩まで修行。しかし、二人は寝ることを許さず辛い日々が続きました。そしていつしか祖父は寿命、父は過労死。残された少女に自由が与えられました。しかし、少女は自由を手放しました。どうしてだかわかる？」

続くと思ったらティアナに質問した

「・・・わかりません」

「理由はもう少女にはそれしかできなくなってしまったから。その後少女はひたすら修行しました。そして、あなたと同じぐらいの歳で当主となりました。けど、少女は気づきました自分には誰もいない。何もない。あるのは無茶して無理して頑張った武だけ。誰もいない、自分しかいないのでした。終わり」

ティアナは全部を理解できたわけではなかった。けど、なんとなく彼女の言いたいことはわかった気がする

「ティアナ、私が言いたいのは無茶してまで得られるものなんてないってこと。あなたが感じるそれは嫉妬に近い感情。嫉妬したっていい。でも、あなたには仲間がいる。だから、一人で頑張るんじゃなくて皆で頑張ってほしい。ごめんね。こんな話しして。じゃあ、無理しないで頑張ってね」

麻衣はそういうとその場を去っていた。

ヴァイスもその後去っていた

ティアナはその後軽く訓練をしてから隊舎へと戻っていた

ティアナｓｉｄｅ

麻衣ｓｉｄｅ

ティアナと別れた麻衣は海を眺めていた

「ご先祖様、麻衣はどうしてあんな話をしてしまったのでしょうか」

ティアナに昔の自分を重ねてしまったからでしょうか

兄を失いその後を継いだ私

兄を失いそれを無駄じゃない、それを証明するために頑張る彼女

似てるけど、違う私たち

けど、無茶をしてまで頑張るところは似ている

でも、違うものが一つある。それはあの子には仲間がいる。私には

そんな人いなかったから

「麻衣っち」

後ろからユキナの声がした。

麻衣は後ろを振り向かず海を眺めている。

「ユキナ・・・もしかして聞いてましたか？」

「うん。ごめんね」

「いえ、あなたならいいです」

ユキナも私の隣に座り海を眺めている

「その話の女の子って麻衣でしょ？」

「・・・・その時の私にはもうこれしかなかった」

刀を握る力を強める麻衣

「過去形ってことは今は違うの？」

「うん。今はユキナもいる。それにやらなきゃいけないこと、あるから」

「それって大事なこと？」

「うん。大事なこと」

「そっか。それじゃあ、もう遅いし戻ろうか」

「うん」

麻衣ｓｉｄｅＥｎｄ

第57話　無茶をした先にあるものは・・（後書き）

『フィリーヤとイヴのフィリイヴな時間』

フィ「大人版星音登場ね！マテリアルズ好きにはたまらないわね」

イヴ「そうだね。それにしても麻衣ちゃんってかなり辛い人生送ってるんだね」

仁「そうなんだよ・・まさかこういう設定になるとは思ってもなかった」

フィ「よくあることだから大丈夫じゃない？」

仁「うん。そういえばＦｏｒｃｅ3巻限定版の表紙みたらとある掲示板でみたビームライフルをもったなのはがいたことに気付いた。アレってどっかの二次創作かと思ってたんだよね。ていうかどんだけガンダムネタいれるんだろう」

イヴ「ちゃっかり話がずれてる～」

仁「新兵器って聞いてなにかと聞いたがこっち新兵器の凄いぜ！まだ出ないけどな！」

イヴ「とありえずまた次回で」

フィ「ば～い」

第５８話　片鱗（前書き）

今回は原作の８話と９話をもとにしたものです。魔王様のシーンはちょっと少ないです。

でも、ｓｔｓ編では今回でのことが重要になっていくかもです

第５８話　片鱗

機動六課　医務室

「ん・・は！」

ティアナは起き上がり辺りを確認した

「あら、ティアナ。目覚めた？」

「シャマル先生・・・ここ」

「医務室よ。覚えてない？昼間模擬戦で撃墜されたの覚えてる？」

「・・・・」

◆◆◆◆◆◆◆

昼間

ティアナは翌日からスバルと自主練を始めた。

磨いたのは二人のコンビ―ネーション技。それをなのはとの２対１の模擬戦で試した。

だが、それは無茶で無謀なものだった。

スバルが攻撃を受けながら真正面から攻撃を繰り出す前に、ティアナがスバルのウィングロードを走って、魔力刃で頭上から襲うというなのはの今までの訓練を無視したものだったからだ。

それを目の当たりにしたなのはは・・・

「レイジングハートモードリリース・・・」

『Ａｌｌ　Ｒｉｇｈｔ』

戦闘形態から待機形態に戻したなのは。
障壁を解きスバルの拳とティアナの魔力刃を受け止めた。
普通なら自殺行為である。

「・・ねぇ・・私がしてきたこと・・間違ってる？」

「あ、あの・・・」

「練習のときだけ言うことを聞いて、実戦でこんなのだったら練習の意味ないじゃん・・」

「あぁああ」

二人がみたその姿のなのはは異常なまでに別人だった

「ねぇ・・私、間違ったこと教えてかな？」

「！」

ティアナは魔力刃を解除し間合いを取り構えた
その顔は涙で濡れていた

「もう誰も傷つけたくないから！亡くしたくないから！だから、強くなりたいんです！」

「・・少し・・・頭冷やそうか」

なのはの足元にミッドの魔法陣が現れた。
しかし、いつもの桜色とは違う。
薄い黒が混じっている。いや、彼女から発せられている黒いオーラが見える

「クロスファイヤー・・・」

「ファントムー『―シュート』！」

ドン！

「ティア！ッバインド！？」

いつの間にかスバルの身体にバインドがかけられていた

「よく、観て“おきなさい”」

「は！？」

いつもと違う彼女のセリフ。まるで女王のような口調。
そんなことより第二射が撃たれてしまった

「なのはさん！」

ドドン！

直撃だった。
ティアナは反動で吹き飛ばされ下のウィングロードに落とされた

「ティアァ！」

スバルは近づき相棒の姿をみた。
怒りがこみ上げなのはをにらんだ。しかし、そこにはありえない光景があった

「なのは、さん・・なにを・・してるんですか・・」

スバルは聞いた。彼女は笑顔で応えた。

「なにって、お仕置きに決まってるじゃない」

彼女は第三射目を撃とうとしていた。
スバルがみた光景はそれだけではない。彼女の魔力がところどころ黒く染まっている

「じゃあ、し―」

ガバ！

「なのはちゃん流石にそれはやりすぎだよ！？」

「ユキナ、副隊長・・」

「ユキ、ナさん？どうして・・・」

気づけばなのはは攻撃を止めていた

「どうしって、今やろうとしたこと覚えてないの？」

「え・・・？」

なのはは自分が何をしたか自覚していなかった

「なのはちゃん、あなた・・・」

それはビル屋上でみていたヴィータたちもその姿はおかしかった。

確かに最初は一瞬、最後に少しだけ彼女の魔力光が黒くなったのを

◆◆◆◆◆

「はい」

「そう。身体にダメージは残ってないと思うから安心して」

「はい・・・ってもう九時何ですか！？」

外をみると辺りは暗かった

「ええ。本当に死人みたいに熟睡していたわよ？最近寝てなかったでしょ」

「はい・・」

医者にはわかってしまう。例えどんなにそう見せなくて誤魔化していてもやっぱりたくさんの人を見ている医師には叶わないと思った

なのはｓｉｄｅ

なのはは一人事後処理をすませていた

昼間のことが脳裏を横切る。

ついカッとなってやってしまったと思っている。けど、私は許せなかった。

無茶をしてまで仲間を傷つけてまで戦おうとするティアナの姿が

・・・ユキナさんが言ってたけど私三回目なんて撃とうとした覚えなんてない

それに黒かったって・・

「私、どうしちゃったんだろ・・・あ」

そういえばこの間星音ちゃんが・・

「最近妙なことは起きてませんか。特に身体とか？」

「え？全然。元気だよ？」

「そうですか。ならいいです」

「でも、関係ないかな?」

ただの思いすごしだと思った直後

ビービービー

「え、敵!?」

なのはｓｉｄｅＥｎｄ

作戦司令室

「で、ガジェットの目的はやっぱり」

モニターで写しだされている海上で旋回しているガジェットたち

「きっと・・実験機」

珍しく神野副隊長が作戦に参加しガジェットの目的を言う。

そのことについてははやてだけではなく他の局員たちもそうだった

「・・・データをとるための捨て駒。こういうの前にみたことあるからきっとそう」

「こっちの、六課の戦力かそれとも航空部隊の戦力を知りたいかはわからないけど面倒になる前に落とした方がいい」

「私も麻衣っちの意見には賛成」
なぜかユキナも付き添いでいる
「そうやね。場所は空。なら、高町教導官とフェイト執務官、それにヴィータ副隊長やね」
「それが・・・いいと思う。私はあまり空に慣れていないから
「それにしても特許の意見は参考になりますな」
はやてが礼をいった。
照れたの麻衣はユキナの後ろに隠れた
屋上へリポート
「というわけで今回は空戦になるから皆は待機。いいね」
「お前らの指揮はシグナム副隊長だ。ちゃんと指示に従えよ」
「「「はい！」」」
「・・はい」
屋上には前線メンバーが空に出ていく三人を見送りにきていた
麻衣以外

ティアナは昼の件でまだちゃんとなのはをみれなかった

「あ、それとティアナは出動待機から外れておこうか」

「な！？」

それはティアナも予想外だった

ティアナ自身それは理解できていない。昼の件もそうだが魔力も体調もなにより精神的に無理だと言うことを

しかし、ティアナはそんなことにすら気づかなかった

「言うことを聞かないヤツは使えないってことですか」

それを聞いてなのは呆れたに近い感情を抱いた

「自分で言っててわからない？当たり前のことだよ。それ」

「現場での指示や命令だってちゃんと聞いてます。教導だってちゃんとサボらずやってます」

「ん！」

それを聞いてヴィータが動いたがなのはが止めた

「それ以外の場所での努力まで・・・教えられた通りにやらなきゃいけないんですか？

私はなのはさんみたいにエリートじゃないし、スバルやエリオみたいな才能もキャロみたいな稀少能力（レアスキル）もない。少しぐらい無茶したって、死ぬ気でやらなきゃ強くなれないじゃないですか！―は！」

ドガ！

「「「「！！」」」」

殴ったのはユキナだった。その前にシグナムが殴ろうとしたがユキナが間にはいったのだ

「ユキナお前・・」

「ごめんね。シグナム。けど、さすがの私でも我慢の限界」

「ティア・・」

「三人とも速くいって」

「う、うん。じゃあ、いっています」

なのはたち三人は空へと上がった

残された者たちはただみていることしかできなかった

「ティアナ、甘えるのもいい加減にしなよ」

―エリオくん、今のユキナさん恐い・・

―うん

普段優しくていつもまるで姉のような存在な人がいまでもとてもそうは思えなかった

「ユキナ副隊長！」

「なに？」

「確かに今の発言はいけないと思うし、それを止められなかった私も悪いと思います。
けど、強くなろうとしちゃ駄目なんですか！？必死に努力してるのそれを止めろと言うんですか！？」

「スバル、いいか・・・」

シグナムもなにか言おうとしたがそこにシャーリーが現れた

「シャーリー何の用？」

ユキナが怒ったように聞く

「ユキナさんもそこまでにしてください。皆不器用すぎるんです。あとは私に任せてもらえませんか」

彼女も目もまた真剣だった

その後皆はいったんロビーへと向かった
ユキナはまだその怒りを解いていなかった

ロビーにはシャマルも加わってなのはのことと彼女の教導の意味を皆に教えようとしていた

そこは気まずい雰囲気としか言えない場所だった
そんな空気の中シャーリーが口を開いた

「昔ね、小さな女の子いたの。その子は本当に普通で魔法も知らない世界で普通に育っていたの」

ピン

ウィンドが現れそこには幼少時代のなのはが映し出された

「シャーリー、あとでどうなっても知らんぞ」

シグナムがボそっとつぶやいた

そう、これはプライベート（→発音）な映像なのだ

「でも、事件は起きた。魔法も知らなければ稀少能力（レアスキル）もない。ただ、魔力を持っていたから。それだけで女の子は戦いを始めた。想像できる？たった9歳で命をかけた戦い」

映像にはとうとうフェイトまで出てきた。

「これってフェイトさん？」

「フェイトちゃんは今はそうでもないんけど昔は家族関係が複雑でね・・」

シャマルがかわりに説明し始めた。

シャマル自身も聞いた話とデータでしか知らないことだった

そして、映像はなのはとフェイトの決戦に移る

「集束砲！？」

「9歳の女の子が」

「そして、さほど時がたっていないがまた事件は起きた」

「これに関しては私たちがよくからんでるんだけどね」

映像にはヴィータたちが映し出された

「彼女はここで敗北した。そして、当時はまだ実用段階ではなかったベルカ式カートリッジシステムを搭載。再び戦場に戻った」

「それって物凄く身体に負担がかかるんじゃ・・」

「そうだ。それでも彼女は戦い続けた」

「なのはちゃんは誰かを助けるため、自分の意志を通すために無茶をしてきた。
ティアナとは別の無茶をしてきたの」

「・・・」

「だけど、限界は来た」

映像はあり雪の日の映像になった

「入局二年目の冬。事件は起きたの。いつものなのはちゃんなら簡

単に撃退できたんけど今までの身体にかかった負担や無茶が動きを鈍らせた」

「その結果がこれ」

寝台に横たわり包帯を巻かれ眠っているなのはの姿が映し出された

「「「「は！」」」」

その姿にスバルたちも驚いていた

「一命を取り留めたけど検査の結果もう飛べないと通告されたの。けど、彼女はそれを否定し飛ぶことを諦めたかった。その時、なのはちゃんを治療したのがこの人」

現れたのはレイだった

医師の格好をリハビリをするなのはに付き添っていた

「アレ、この人・・・」

「皆も一度くらいはみたことあるでしょ？」

「そうだ、この人管理局の総帥だ！」

「え、そうだったの！？」

そう言い放ったのはスバルだった

「スバルあんた・・・」

「いや、だって、この人よく昔の雑誌に載ってたからなにかの先生だったかなってははは」

「そう、レイル・アンヴァルト・Y・神乃。私たちの上司であり事実上管理局の総帥。そして、なのはちゃんが魔法を手にしたきっかけになった人」

「え？」

「最初にみたプレシア事件にかかわったロストロギア、ジュエルシードは彼がみつけたの。それがすべての始まり」

「また、総帥はなのはさんに魔法を教えた先生でもあるの」

「あの、総帥と・・・」

ミッドでの彼の存在は伝説的かつ英雄と呼ばれているほどだ。そんな人に魔法を教えて貰った。嫉妬するのもわかるだろ

「なのはちゃんが怪我をしたとき一番心配していたのは彼だった。そして、一番なのはちゃんに反対していたのも」

「どういうことですか？」

「レイはなのはちゃんの疲労や負担を知っていたんだと思う、だから、こうなったのは自分の所為だって思いこんだ。けど、なのはちゃんの思いに負け、治療をしたの」

「なのはの無茶は誰かのためだった。しかし、お前のその無茶は、ミスショットはけしてそんなに重要なものだったか？誰かが危険に

さらされたわけでもない。命をかける場所ではなかったはずだ」

「・・！」

「この間。麻衣っち言ったよね？無茶した先にあるものなんてないんだって。なのはちゃんの場合がこれ。なのはちゃんはどうしてあんなことをしたか。どうしてあなたたちに教導してるか。それは自分と同じ目にあってほしくないから、同じ思いしてほしくないから皆がちゃんと帰ってこれるように教えてあげるんだよ？」

「「「「・・・」」」」

それはティアナだけではなく皆に通じるこだった。

「2ついいですか」

「なに」

キャロは挙手してなにかを聞きたかった

「その、総帥と皆さんってどういう関係だったんですか？」

シャマルとシグナム、ユキナは互いに顔を合わせる

「私たちにとっては大事な命の恩人でもあり大切な人」

「じゃあ、たまに出てきたこの人たちって誰ですか？」

キャロが映像を巻き戻しちらっと現れたのがアリシアとリニス、銀、それに星音、雷華、闇樹だった

「フェイトさんと同じ顔をしてるのはアリシア・テスタロッサ。フェイトさんのお姉さん。隣が使い魔のリニスに初代リインフォース、銀。そして、星音ちゃんたちは闇の書の余波被害で生み出されたマテリアル。皆消えていく存在だったけど皆あの人がね、救ったの」

「消えていく存在って」

「それは教えられない。これは本当に互いにプライバシーに関することだから」

屋上ヘリポート

「えー！」

「その・・・ごめんなさい！」

シャーリーは先ほどのことを報告しそして誤っていた

「駄目だよ、人の過去勝手にバラしちゃ」

「でも、あの時はそうするしか・・・」

「もう・・で、ティアナは今どこにいる？」

ティアナｓｉｄｅ

ティアナは一人海をみていた

カ　カ

足を音が聞こえ音の方を振り返った
そこにはなのはが立っていた

「見たんでしょ？」

最初に口を開いたのはなのはだった

「はい、なのはさんの」

「失敗の記録？（笑）」

「違います！その・・・」

「無茶をすると危ないんだよって話だよね」

「はい。私、なにも知らなくてなにもわかってなくて・・・」

アレをみたあとで自分と比較してみた
自分のがよっぽと小さいことで悩んでるように思えた

「なら、少し叱っておこうかな。ティアナは自分を射撃と幻術しかできな凡人だと思ってるかもしれないけどそれ、間違ってるからね。ティアナも皆もそうだけどまだ、原石の状態。けど、言いかえれば原石の塊。磨けばきっと少しずつ輝いてくる部分が出てくる。だか

ら、ティアナ無茶とかそういうのを通り越して焦りすぎてるんだよ？」

「焦っている？」

「うん。ティアナはアレを受けてなんとも追わなかった？アレ、結構避けにくいし痛いんだよ？」

「あ」

クロスファイヤーのことだ

「私としては焦らずゆっくり教えていきたかったんだ。けど、ティアナがやってきたことは間違いじゃないよ。それも立派なティアナの物だから」

なのはは置いてあるクロスミラージュをとり何かを言った

「言ってみて。モード２って」

「モード・・２」

『ダガーモード』

彼女の言葉に応えダガーモードに変形する

「ティアナは執務官志望だったから。執務官になれば個人戦も多いし、なにより接近戦だってあるかもしれないから将来のことも考えて組み込んでいたんだ」

「うぅう」

そうか。私はこんなに皆から心配されて、将来のことまで考えてもらっていてそれなのに、私は・・

ティアナは自然と涙を流していた

「実はねある人にこう言われたことがあるの。戦いとは常に有利とは限らない。時には自分たちが窮地に追い込まれてしまうこともある。そこで、ただ諦めるか。それとも立ち向かうか。どんな窮地に陥っても立ち向かうそんな人が一人でも傍にいたら周りの仲間も共に立ち向かうことができる。そういう人を有能な指導者、またはエース、そしてストライカーと呼ぶ」

「すと、らいかー？」

「うん。この人がいればどんな困難でも乗り切れる。そんな人にティアナたちは慣れるって信じてるから」

「はい・・・」

「私は皆にそういう人たちになってほしいって思ってる。だから、ティアナ。私の教導これからも付いてこれる？」

ティアナは涙を拭き取り真剣にそして笑顔で応えた

「はい！これからもよろしくお願いします！」

「うん！」

ティアナｓｉｄｅＥｎｄ

麻衣・ユキナｓｉｄｅ

なのはとティアナのところから少し離れた木の上。

「どうやら、仲直りしたみたい」

「うん」

「ユキナ、ティアナ殴ったって聞いたけど？」

「まぁあの時、麻衣っちの言ったこと全然理解してなかったから」

「でも、ありがと」

「うん」

二人はなのはとティアナを暖かい目で見つめていた

「ね、その本」

「ん？」

『レイ先生の人との接し方　職場編』

「それで、ユキナは勉強してるの？」

ミッドが管理しているならどこにでも売ってるレイ先生シリーズの本

「うん、困った時これを読めばなんとなくわかるんだ。子供の時は普通にできたことができなくなっちゃって」

「そっか。読むなとかは言わないよ。それが麻衣っちに必要なものだから」

「ん♪ありがとう」

「ところで、その本。そういうの以外にちゃんとした本とかないの？」

麻衣・ユキナｓｉｄｅＥｎｄ

第５８話　片鱗（後書き）

『フィリイヴな時間』

フィ「略されたわね。まぁいいわ」

イヴ「あの魔王のシーンは原作と違うよね」

仁「ＹＥＳ！当初から企画というか設定していたから今回はとても大事なんだｙｏ」

フィ「まぁわかる方にはわかるのよね。今後の展開というか・・」

イヴ「けど、楽しみだよね。なのはちゃんの今後の展開が」

仁「そうですなぁ。さて、次回はオリジナルの話になります。それを予定では３話やってからオリキャラ紹介をしようと思います。麻衣とかカオスとかまとめてやる予定です」

フィ・イヴ「では、また次回で！」

第５９話　密輸（前書き）

今回はオリジナルです！

カオスたちの存在を認識すための回でもあります。

あと二話ぐらいしたらオリキャラ紹介しますので待っていてください！

第５９話　密輸

機動六課　部隊長室

「♪～」

はやては鼻歌をしながら書類に目を通していた。
機嫌がいいと言えばいい方だ。新人たちは色々あったけど今では前よりよくなってるし、なにより平和である。

というより最近はガジェットやレリックに関する報告がないだけである

「まぁ、たまにはこういうのも悪くないなぁ」

「そうですね。はやてちゃん」

『八神部隊長』

となごんでいるとシャーリーから通信が入った

「どないしたん？」

『陸士１０８部隊のナカジマ三佐から通信です』

「ナカジマ三佐が？わかった。お繋ぎして」

『はい』

するとすぐにナカジマ三佐と切り替わった

『よぉ、急にすまねぇな』

「いえ、大丈夫ですよ。で、今日はどういった要件です？」

『ああ。実は内の捜査班がある情報を手に入れてな』

「ある情報？レリック絡みですか？」

『いや、もしかするとレリックより厄介かもしれねぇ代物だ』

「じゃあ、一体なんなんです？」

『それが、質量兵器の密輸なんだ』

「！」

はやてもそれには驚いた。ミッドを始め管理局が管理している世界では主に質量兵器は禁止されている。

質量兵器とは簡単に言えば銃といったものである。はやての故郷。地球では当たり前のように存在していた。

魔法と違いリミッター―も付けられずたった一発の銃弾で人を死に追いやるとても危険なものである。そのため、空港や港では厳重なチェックが行われている

「でも、どこから漏れたんです？その情報」

『それがわからねぇんだ。だが、今はそれどころじゃねぇ。物資の密輸ルートは陸路で列車だ。今、ギンガと部下たちがそれを追跡中だ。うちらじゃ手に負えないかもしれなからお前さんに協力を頼みたいってわけだ』

「了解しました。すぐに現場に向かいます」

『助かる。移動しながら作戦は伝える』

「了解」

数十分後

機内

六課を発ち現場へ向かう前線メンバー。

今回は珍しく神野麻衣も参加していた。彼女はいつも通り私服だ。けど、今回はなのはとフェイトを除くメンバーも私服である。

「でも、どうして私服なんですか？」

作戦内容をはやてが通信で伝えていたので聞いてみた

『ナカジマ三佐からの情報によると物資は一般の民間列車と一緒に運ばれてるみたいなんや。制服だと民間人に不信感を抱かせてしまうし、なにより問題が起きやすくなってしまうからや』

「はい、わかりました」

『じゃあ、作戦を説明するで。まず、なのは、フェイト隊長を除く両チームは先回りして次に止まるターミナルに急行。そこで、現地ですでに到着しているギンガ陸曹と合流し列車に侵入。なんやけど実は少し厄介になりそうなんや』

「どうしたの、はやてちゃん？」

『実は現場の地形はちょっとした特有でな？
２本のレールが走ってて、列車も一緒に走ってるんや。中央に大きな山がありレールはそれぞれ北と南に弧を描くように別れそしてまた合流して次の駅にたどり着くってわけや』

「つまり、一つは陽動ってことですか？」

挙手してティアナが発現する。それは高確率であたっていた

『その通りや。
というわけで、北の列車を０１。南を０２とします。０１をライトニングに。指揮はシグナム副隊長が』

「了解しました」

『０２はスターズに。指揮はヴィータ副隊長が』

「わかった」

『なのは隊長とフェイト隊長は皆を降ろしたあと再度上空で列車を追跡。どちらかが本命だと分かった時点でその方に向かってもらう』

『了解』

「目標地点まで後６００！」

操縦席からヴァイスが報告する

『それじゃあ、皆頼むで』

『了解！』

第２ターミナル

ギンガは連絡を受け先回りしターミナルで目立つ、見やすい場所に立っていた。

私服で列車に潜入と聞いてわざわざショッピングモールで買ったのだ。ショッピングモールも兼ねているターミナルでよかったと思ったギンガだった。

―あとで経費で落として貰わなきゃ

ちゃんとしっかりしているギンガである

「ギン姉～！」

「スバル！」

スバルはギンガに飛び付いた。周りの目など気にせず

『なにあれ、そういうプレイ？』　『百合・・ふふ、いいネタが浮かんだわ』

当然、それを副隊長らが呆れて言った

「まぁ、嬉しいのはわかるが今は仕事中だぞ」

「あ、すみません。つい嬉しくて」

「すみません。ギンガ陸曹これより六課の指揮下に入ります」

と軽い敬礼であいさつをするギンガ。

「ああ、頼む。ギンガはスターズに同行した方がいいだろう。ヴィータ」

「そうだな。スバルと一緒なら動きやすいだろしそれに普通にみえるしな」

「そうだね。ただでさえ家族には見えないんだし（笑）」

「・・・うん」

ユキナが笑いながら言いそれには麻衣も頷いていた

「で、列車は？」

「はい、もうすぐここに到着します。ここの人たちには話をつけてあります。

一応料金はタダです（笑）」

「おー公務員様様だね」

「ユキナ、お前はもっと大人しくしてろよ」

「大丈夫だよ、ヴィータ。お姉ちゃんらしく可愛がってあげるよ？」

なでなで

「お前なぁ！」

そんな光景をスバルたちは楽しそうにみていた

―ヴィータ副隊長って可愛いなぁ

―まぁ確かにね。それに、ユキナ副隊長って天然だからあまり自覚とかないんだろうけど

―ですよね。僕もその・・・弟みたいな感じで遊ばれてますし

―私も・・・

―あんたたちもたいへんね

エリオとキャロの同情するティアナだった

『〇〇時〇〇分より第三ターミナルに向けて発車したします。お乗りのお客様はお急ぎください。繰り返します・・』

「よし、いくぞ」

「「「「コクリ」」」」

標的０１

シグナム　神野麻衣　エリオ　キャロ

標的０２

ヴィータ　ユキナ　スバル　ティアナ　ギンガ

以上の通りに列車に乗り込んでいく前線メンバーたち。
中に入るとそれなりに人はいたが繁盛をしているわけでもなさそうだった。
目標は後部車両。乗り込む前に確認したが１台貨物列車があった。
本来なら一般車両から入れないがここの貨物列車は面白い仕組みで１台だけなら入室が可能になっていた。
各チームは乗客に不自然に思われないよう後部車両に向かっていく

ライトニングｓｉｄｅ

シグナムを先頭に後部車両に向かうライトニングたち。麻衣は相変わらず袋に入った刀を抱きかかえている。
しかし、シグナムが気になったのはそれもあるが一番は今回の作戦

に参加したことだ。特許である彼女は今回の作戦の参加は自由だ。アグスタの時もそうだが最近は積極的に作戦に参加してるように思える

―神野、少しいいか？

いくら彼女が魔法を主にしてないとは言え念話は伝えると思った。

―・・なに？

どうやら通じたようだ

―最近、お前は任務参加してるからどうしたのかと思ってな

―・・・別に参加したくないから参加しなかったわけじゃない

―なら、どうして？

―その・・・笑わない？

―ああ

なんで笑わない？と聞くのだろうか。なにか面白いことでも言うのだろうか

―私、人と接するの苦手、なの

―・・・それだけか？

―・・・うん

―だから、あの時の会議でもあんな態度をとったのか？

―・・・そう

簡単に言えば人みしりということなのだろうか

―最近はユキナのおかげで少しは平気になったから・・・

―そうか。お前も大変なのだな

―・・ごめん

―謝ることではない。その・・なんだ。今度稽古に付き合ってくれないか？

―え？

その質問はユキナも想定していなかったらしくひょんとしていた

―私もお前も得物は剣だ。だから、互いに稽古をすればよいと思ったのだが・・・私も中々話しかけずらくてな

―・・・それは命令？

―違う。これは私からの頼みごと、お願いだ。同じ場所で、同じ戦場で戦う友として

―友・・・それって友達ってこと？

―ん？ああ、そういうこと、だな？

シグナムはいまいちわかっていないようだった。

友だから友達ということになるのだろう・・・

―じゃあ、シグナムと私は友達。だから、今度一緒に稽古する

―そ、そうか。じゃあ、よろしく頼む

―うん！

（なんだ話せばわかる子じゃないか）

と改めてホントはいい子だということを知ったシグナムだった。

（本当にこういう時ユキナみたいなヤツを羨ましいと思うな）

ユキナのあの天然が羨ましいと思ったシグナムでした。

（ご先祖様！麻衣はまた友達ができました！）

ちなみに麻衣はご先祖に吉報を報告していた

ライトニングｓｉｄｅＥｎｄ

スターズｓｉｄｅ

スターズもまた順調に目的地に向かっていた。
特にスバルは姉であるギンガ一緒にいられることが嬉しいようだ。

―ギン姉と一緒に仕事できるなんて思ってもみなかったよ

―私もよ。見つけたのはいいけど私一人じゃ限界もあったしここは父さんに感謝しなくちゃね

―うん！

―それにランスターさんもお久しぶり。妹が相変わらずお世話になってるみたいね

―はは。まぁそれなりに

ティアナもギンガとは面識があったのですぐに溶け込んでいた

一方副隊長であるヴィータとユキナは何故か不意に思った

―ねぇ、ヴィータ。なんだか変な感じがするんだけど

―お前もか。あたしもだ。はやてからは質量兵器の密輸の情報が漏れたから１０８部隊がここを見つけられたって。

―うん。密輸って漏れた時点で密輸じゃなくなるし当然、その本人たちは知らないんだろうけど・・・そんな情報流せる人物は限られている

―ああ。密輸に関係している人物に限られる。それか受け取る人物。どちらにせよ用心しておいた方がよさそうだ

―うん

スターズは後ろから三番目の車両に付き二番目の車両、つまりその向こうが貨物車になる。
3番目と2番目を繋ぐ扉を開けようと手に掛けた時扉の向こう側から声がした

「な、なんであんたがここにいるんだ！」

―ビンゴだ

スターズｓｉｄｅＥｎｄ

ライトニングｓｉｄｅ

スターズが密輸に関係している人物をみつけたのをヴィータはシグナムに念話で伝えていた

―シグナム、どうやらこっちが当たりだ。お前らもこっちに合流を

―いや、それはできん

―なんで？

―どうやらこっちも当たりを引いたようだ。すまんが一旦切るぞ

―お、おいシグ―

「・・気づいているか。神野」

「うん・・・それと名前、麻衣でいい」

こんなときになにを言ってるのだろうかと一瞬思ったがそれどころではない
ライトニングは貨物車の手前の扉の前に立っている

「麻衣、私が思ったことを言っていいか」

「うん」

「密輸をした犯人は二つの列車が走っているここを上手く利用した。一つは陽動。一つは物がある本命。恐らくこうなることを悟っていた」

二人が念話をせず普通に声を出して会話をしている光景にエリオとキャロは不思議に思っていた

「うん・・確かに物はユキナたちの方かもしれないけど・・」

「そうだ。０１（こっち）は陽動ではなく罠だ」

「エリオ・・キャロは下がった方がいい」

「ど、どうしてですか！？」

「私たちだってやれます！」

自分たちも仲間であり共に戦う戦友だということはわかっている。
そんなことはシグナムはもちろん麻衣もわかっている。

麻衣は袋にしまっていた日本刀を取り出し腰にかける

「か、神野副隊長!?こんなこところで」

その行動に驚いたのかキャロがつい副隊長と言ってしまった

―あれ、おかしい。なんでキャロの声に反応しないんだ

大声をあげたキャロに反応してエリオはうしろを向き乗客がみてないか確認したのだが誰もこっちをみていない

「二人は・・気づいていない時点でもう駄目。この扉の向こうにいる人は相当の手だれ。殺気は出していないけど血の・・臭いがする」

「―ひっどーい!ちゃんと毎日綺麗に洗ってるのにぃ!」

「「「「!!!!」」」」

突然扉の向こう側から声がした。
そう、向こうにいる“女”は気づいていたのだ。私たちのこと

―ヴィータ、どうやらこっちもある意味で当たりのようだ

―　一体何を・・・!

―ヴィータ?

―すまねぇ。どうやらそれどころじゃねぇようだ

ライトニングｓｉｄｅＥｎｄ

スターズｓｉｄｅ

先ほどの男の声を聞いてヴィータたちはまず席に座わり向こう側の音を拾っていた。
現行犯で逮捕したいがまだ証言が足りない。貨物車にいれば別だったのだが

「どうして、ここにいるかって？」

―違う男の声。向こうにいるのは二人だけか？声の位置からして密輸をした犯人がそのもう一人の男の向こう側か

「簡単だ。管理局の奴らに横取りされる前に受け取りに来ただけだ」

―ユキナ、大当たりだ

―うん。密輸とそれを受け取る人物、両方いる

「へ、へーそうなのか」

―なんだ、妙に慌ててるな

ヴィータは密輸した犯人がどうも慌てているように感じられた

「・・・・で、誰に買われた？」

「！な、なにを言ってるんだ？」

「俺の情報網を甘くみられちゃこまる。こっちの世界にもそれなりに通じた情報屋がいる。少し前にどっかの運び屋が密輸していた物をどっかの糞に横流ししたって情報があったんだよ」

「へ、へー奇遇だな。俺も運び屋だ」

―運び屋・・・

―ギン姉運び屋って？

―あんたそんなこともしらないの！？

―いや、わかるけど詳しくは知らないだけで・・

―いいスバル？運び屋はその名の通り依頼された物を届けることをいうの。それが普通のとも限らない。
時には麻薬、違法に触れるものまで。依頼されたらそれを届けるのが運び屋よ

―へー

「お前がやろうとしたことを当ててやろうか。まず、この世界に到着し準備を整えた。そして、予定通りこの列車を使い運送。しかし、お前はそのどっかの糞に買われたため芝居を演じなければならない。だから、情報を流した。質量兵器の密輸がされていると」

―「「「「「「！！！！！」」」」」」

―ヴィータ

―ああ。あたしたちはとんでもないもんに首を突っ込んじまったらしい

受け取り人のあの頭の回転の良さ。唯者ではないと悟った。

「そして、さっきの第2ターミナルで管理局の連中がここともう一つの列車に乗ったことを確認したお前は一般乗客に紛れて適当に逃げるはずだった。よく考えたと褒めてやろう。そのまま物を確保した局の連中がそのまま待ち合わせ場所だった第5ターミナルで受け取るはずの俺と鉢合わせし逮捕される。そういうシナリオだったが残念だったな」

―え、じゃあ私たちのことバレてたの？

―そういうことよ。馬鹿スバル。ホント、どんな脳してんのかしら受取人

「おいおい、待ってくれ。なんの冗談だ。そんなジョークは笑えもしねぇ」

―声が少しずつだが遠くなっている。後ろに下がっているのか

「ああ、まったくだ。それにお前は運び屋としてはやってはいけないことを犯した」

「ま、待ってくれ。まだ、代金はいただいてないしお前に損はない

はず！」

「ふざけたこと言ってんじゃねぇぞ二流の運び屋が！こっちはもう教会と支払いが済んでんだよ！前払いってヤツだ。それが友好関係を築くため俺が心がけていることだ」

「は、はは。それはとんだ痛手だったな・・・『ドン（扉にぶつかる音）』」

「ホントにそう思うよ。だから・・・！」

バキィ！

「ぐえええ！」

―！

運び屋は受取人に蹴られて貨物車に吹き飛ばされたようだ

「お前も裏の世界で生きてるからわかるだろ？お前はその中で俺からの依頼を放棄したんだ。そして、運び屋としてやっていけないことをした。だから、それを償うために・・・」

―なんだ・・おい、まさか！

ヴィータは何かを予感した

それが最悪の展開だと言うことを

「―死ね」

スターズsideEnd

第59話　密輸（後書き）

『フィリイヴな時間」

イヴ「今回はオリジナルだね」

仁「オリジナルなのはいいけど世界観はちょっと無視してる。どこで行われてるとかそういうの。俺が知ってるの首都のグラナガンだっけ?そこぐらい」

フィ「まぁ仕方ないんじゃない?」

イヴ「ところでギンガ出たけどギンガってどのくらい重要なキャラ?」

仁「半分半分かな?ギンガ好きだから優遇する可能性大だけど」

フィ「ただでさえスバルたちの存在感薄いのにね」

仁「まぁ仕方ないってことで」

イヴ「じゃあ皆またね〜」

第６０話　闇の四騎将　前篇（前書き）

今日から夏休み
番外編でなんか書いてみようかな海とかそういうの
番外編なら問題はないしレイ出せるし

第６０話　闇の四騎将　前篇

「―死ね」

「いやだぁあああああ『バン！　バン！』――――――」

「いくぞ、突入！」

『了解！』

デバイスを戦闘形態に移行しバリアジャケットを装着するスターズ。
ヴィータがドアをぶち破って車両に突入。
目の前、貨物車の中には暗くて顔はわからないが受け取り人らしき男と床には運び屋の足がみえた

「ほーやっと出てきたか」

どうやら完全に気づいていたようだ。話を盗聴していたのも

「お前が今回の首謀犯だな？」

「首謀犯？あーそうなるのか。で、俺を逮捕でもするのか（笑）」

「質量兵器の密輸及び殺人の容疑であなたを逮捕します」

カチ　ボ

彼はマイペースにタバコに火をつけている

「・・・・なんで殺した?」

ヴィータは静かに聞いた

「なんで?そんな当たり前のことを聞くのか?」

「当り前!?人を殺すのがそんな当たり前のことなんですか!?」

「スバル、落ちついて!」

人の殺すのを当たり前と罵る彼に怒りがこみあげてきているのはスバルだけではない

「ふー。それはお前らの世界での話だろ?俺達の世界では裏切りは死だ。まして、金に目がくらみ横流しをしたんだ。それぐらい当然だ。それにこいつは殺してもさほど問題はない。俺たちと同じ裏の住人だ」

「どういう意味ですか!」

「あーそう怒鳴るな。いいか?こいつは運び屋だがそれなり裏では名の売れている奴さ。これ以外にだってこいつが密輸した物はたくさんある。それにどのくらいか知らないが指名手配されていたし。いわば俺はお前たちの代わりに悪を滅ぼしたってわけだ」

「何悪党が正義なんか語ってんだよ?」

アイゼンを握る力増していく

「酷いなぁ。俺は民間人を殺す主義はない。興味もない。面白くない」

「あなたは・・自分の楽しみのために人を殺すんですか！？」

「まぁそれも一つではあるかな。ただ、そうだな。人を殺すのにそんなことを考えること自体無駄なことだろ？どうせ、もう悪党なんだからさ」

「もういい。そんな話はどうでもいい。さっさとてめぇを逮捕してやる」

「ちなみに弁解の機会はないよ。密輸現場にいてさらに人を殺しているんだから」

フー

煙を吐く男。

その仕草は呆れているような感じだ

「いいか？今回、俺は被害者だ。物は結局横流しされて中は空っぽだ」

そう言うと木製でできた箱が飛んできた。床に落ち箱が壊れた。中身はなにもない。

「たく、支払いが済んでるから文句は言えないし、今度からちゃんとした奴雇えってんだ」

彼はいらいらしてるようで再び銃を構えだし死体を撃ち出し始めた

バン　バン　バン

「お前、何してんだ！」

「なにって、憂さ晴らし。死んでるヤツのことなんぞ知るか」

「最初に聞きたかったんだけどあなたは質量兵器の危険性をわかって使ってるの？」

ユキナ冷静に質問した。

「危険性？じゃあ、お前らのそれは危険じゃないのか？」

それとはデバイスのことだろう

「そう言えばデバイスには非殺傷設定というのがあるらしいな。じゃあ、それを外せば簡単に人を殺せる武器ってことだ。お前らは色々説いているが用は変わらないんだよ。それも、こいつも」

「私たちはそんなことしない」

「そりゃあそうだろうな。人を守る側の人間が人を殺してたら元も子もないもんな。
それにこいつは危険だとか違法とか言うがそれはお前たち、いやこの世界での話だろ？」

「どういう意味？」

「そのままの意味さ。こいつ、銃はこの世界で禁止されているが他の世界に出ればこれが主力。こいつが自分を守るための武器さ。引き金を引けば簡単に撃てる。実にシンプルな武器だ。お前らはみたことがあるか？戦争で目の前で殺されていく家族、友人。その中で自分がいきるためにこれを手にする者は大勢いる。子供でさえも。結局お前ら平和の中でいきているからそういう正義ぶったことを言える。本当は何も知らない」

彼の言うことは正しい。いや正論ともいえる。
現になのはたちの故郷である地球ではそれが当然のように存在している。
それが身を守る武器だと言うこともわかっている。

「―例えそうだとしても」

「ギン姉？」

ギンガ一歩前に出た

「そうだとしても、あなたの言葉を真似るなら“ここ”ではそういうルール。“他”のことなんて今はどうでもいい。私たちはあなたを逮捕する。それが私たちの今やるべきこと。あなたのお喋りに付き合ってる暇はないんです！」

「ギンガの言う通りだ。そうやって他のことを持ち上げて動揺させるのが目的だったんだろ？」

「くく」

「？」

いきなり彼は笑いだした

「ははっは、ははっは。いいねぇ。面白い。実に面白い。データだけでは目も眩まなかったが実に面白い」

そういうと彼は暗い貨物車から姿を現した
その姿は黒いコート。軍靴のような靴。そして、最大の特徴は仮面をしているということだ

彼女たちはその姿特に仮面に驚いていたがギンガだけはそうでもなかった

「・・・あれ?・・・」

「ギン姉?」

「・・そう、四年前・・・」

ギンガは四年前、かつて自分を助けてくれた仮面の人を思い出した。
そう、似てる。この声も服装も

「四年前?」

仮面の男もそれを聞きの逃さなかった

彼は気になったのかギンガに近づいてくる。
皆は警戒するがギンガなにもただ立っているだけだ

「ん~ん~あ、そうか。あの時の嬢ちゃんか。いやーまさかこんな

美人になるとは思わなかったな～」

「／／／／／な、なにを」

その言葉を聞いて顔を赤く染めるギンガ

「そうか、そうか。今日は悪い日だと思ったらそうでもないな。あの時の嬢ちゃんがねぇ。まぁ俺の敵だが」

そういうと彼は間合いを取った

「今日は気分がいい。お前たちに名乗ってやろう」

「は！悪党が自分から名を名乗るのかよ？」

「赤いおちびちゃん。俺は悪党だが悪党を断罪する悪党だ」

―いや、意味がわかんねぇ

「よ～く、聞いておけよ。俺の名はカオス。『闇の四騎将　トライデント』のリーダーカオスだ。そして、向こうに乗ってるヤツの名も教えてこうかな」

「向こう・・仲間がいたのか！？」

「誰も一人とは言ってないぜ」

ライトニングｓｉｄｅ

「もー血生臭いとか言わないでよね。ぷー」

ドアを開け現れたのは仮面をつけた女だった。

「それにしてもあなたたち残念。ここにはお目当てのものはないわよ」

「そうみたいだな」

「ちなみに密輸には私関わってないから。直接関わっているのカオスだし」

「カオス？」

「私たちのリーダー。あ、勝手にバラしちゃった。まぁいっか。今日は私戦う気ないんだけど武器納めてくれない？」

武器を出しているのはシグナムと麻衣である。

未だに構えを解かない

相手が危険だとわかっているから

「ホントなのに。ん？そろそろ合流地点か・・」

合流地点は再び2本のレールが並ぶということだ

「あなた・・・何人殺した？」

「麻衣？」

なぜそんなと聞く？

今はそれどころじゃないだろ

「あなたわかって聞いてるでしょ？・・・まぁいいわ。何人なんていちいち数えてると思う？」

「そう・・じゃああなたは心してかからなきゃいけない」

何人殺したか
それを正確にいえる奴は位で言うなら2流か3流
そして、数えているわけがない。しかも冷静に言える奴は1流と言うより異常。きっと大勢の人を殺している。まして、相手を殺すということに何も思わない。
そう言う判断で麻衣は敵の力量を見極めていた。

「それに、あなたとあなたも血の臭いがするわよ？（ニヤリ）」

「「・・・」」

シグナムはかつて闇の書、ベルカ時代の時は主を守るため人を斬ってきた
麻衣は・・

「私は、主を守るためそうしてきただけだ」

「そう。いわゆる騎士道ってやつね」

「私は・・・生きるため、私はそうしてきただけ。敵がこなければ斬らない」

「ふーん。まぁ妥当よね。私もそうだけど」

―「「嘘だ」」

二人は直感した。
嘘ではないだろうがしかし本当は別の理由だ。いや、敵が襲うのを理由にして人を殺しているに違いない。そう二人は思った。

「で、私も逮捕なわけ？」

「そういうことになるな」

「ふーん。じゃあ逃げるしかないか」

彼女は余裕だ。
この状況を想定してるかのように

「逃がすと・・思う？」

「止めておいた方がいいよ？じゃないと死ぬよ？」

―わかる、それがハッタリじゃないって。けど、逃がすわけにはいかない

「・・・・！麻衣下がれ！」

シグナムが叫ぶ。麻衣は反応して後ろに下がる

屋根を突き破って飛んできたのは無数の血のように赤い槍だ

「もーハーデス。早すぎぃ！」

空いた天井から降りてきたのは鎧をまとった女だった。
女だとわかるのはそんな容姿をしているように思えるからだ。

「お前が遅いだけだ、サレナ。物はない」

「え、そうなの？」

「聞いていなかったのか・・・まぁいい。下がるぞ」

「待て！」

「待てと言われて待つおバカさんはいないよ」

そういうと二人は空いた穴から飛んでいった。

「くそ！」

「どうする・・追いかける？」

「いや、この状況で無理だ。それに、あのサレナと呼ばれたヤツとハーデス・・・できる」

「うん・・危険。何人もの人を殺している・・そんな感じがする」

「私もだ。血の臭いがし過ぎる」

「お二人とも！」

いきなりエリオが叫んだ

どうしたのだと聞くと

「外を見てください！」

「外？」

シグナムと麻衣は車窓から外をみてみた。
すると不思議な光景が写っていた

「これは・・・霧か？」

先ほどまでみえていた景色がすべて真っ白になっていた

「シグナム・・・」

「どうした、麻衣？」

「おかしい・・通信が繋がらない」

「はい、少し前からスバルさんやティアナさん、それに空にいるなのは隊長たちにも繋がらないんです」

「妨害・・・ジャマー？」

「この霧がそういう影響を及ぼしているのか」

恐らくあのハーデスという奴の仕業だな。
広域妨害、錯乱魔法とでもいうのだろうか。ただ視界を奪うだけではなく通信をも遮断するとは

「シグナム副隊長これからどうします？」

「空にあがり隊長たちと合流するのが一番。なのだが・・」

「どうしてだか・・わかる？」

「・・・敵に狙われる恐れがある。からですか？」

「うん・・もうここは敵の領域。下手に動けばこっちが危ない」

「なら、どうするんですか？」

「霧が晴れないのは恐らくスターズの方でまだあるんだろう。逃走用でもありそうだからなこの霧は・・」

ライトニングｓｉｄｅＥｎｄ

なのは・フェイトｓｉｄｅ

上空で待機している二人、ヘリは山の中央を飛行していた。

ただ、間の前、下で起きている現状には驚いていた

「こりゃあ一体どうなってんだ！？」

まず、最初に気付いたのはヴァイスだった。

「ヴァイスくんどうしたの？」

なのはが気なって外をみた。

そこには辺り一帯霧に包まれている

「これは・・・やられた。魔力反応なんて感知してないのに」

「スターズとライトニングの反応は？」

「生きてます！一応追えますがどうします？」

「なのは・・・」

「私たちがいくのが妥当なんだけどこの霧を発生させた敵がどこかで私たちを狙っているかもしれない」

なのははこの霧がただの霧ではないことを見抜いていた

「ただの目晦ましじゃない？」

「うん、それに地上との通信が繋がらない。情報を遮断しているんだ。霧は前に展開している。どうみても私たちを来させないつもりみたい」

「うん。でも、どうして無防備な私たちを落とさないのかな？」

そう、それも気になっていた。

この霧を気づかれず展開しているのだ。私たちを落とすことなんて容易いはずなのに落とそうとしないのには理由がある

「いや、理由がないのかな・・・で、どうして？」

「元々私たちを相手にする気がない・・そう考えるのが妥当じゃな

いかな？」

「フェイトちゃんの言う通りかもしれない。ヴァイスくん、私たちはこのまま上空で追跡。そろそろ列車が合流するから用心してね」

「了解！」

なにはともあれ皆が無事でいてくれることを祈るしかない

なのは・フェイトｓｉｄｅＥｎｄ

スターズｓｉｄｅ

未だに対峙するスターズとカオス

今は均衡を保っていると言うのだろうか。しかし、先に破ったのはカオスだった

「ところで、お前たちはこんな騒ぎをして乗客が騒がないのはどうしてだと思う？」

「！」

彼に反応して後ろを向いた。一つ向こうもみえるが誰もこっちを向いてない

「やっと気づいたのか？こいつらは幻影。よくできてるだろ？お前たち以外を乗せないために人払いの魔法をかけていたからな」

「お前は魔導師なのか？」

「魔導師？俺をどこをどうみたらそうみえる？」

そう言うと軽く回ったカオス

「確かに俺は魔法を使えなくはないが基本的これだ」

銃を強調していう

「魔法よりこっちのが効率いいしなにより・・・・残念だ。お喋りの時間は終わりだ」

「なに？」

「そこ動かない方がいいぞ」

「一体何を・・」

それと同時にライトニングたちと同じように屋根に穴があいた。彼は飛びそこから外にでた。
それをみてスターズは初めて外が霧に包まれていることを知った。

「待て！」

霧に見惚れている場合じゃなかった。すぐに上に飛んだのはギンガとスバルだった。

「何も見えない。スバル注意して」

「うん」

「さて、ここでお別れだ、嬢ちゃん。実に残念だかね。まぁいずれ君とはまた逢うことになるだろう」

「一体何を言ってるんですか？」

近い距離なのに彼の姿がよくみえない。けど、声はちゃんと聞こえる

「カオス」

するとどこから別の声が聞こえた

「よし、帰るぞ。その前に・・嬢ちゃん、名前はなんていう？」

「・・・ギンガ、ギンガ・ナカジマ」

「ギンガか。覚えておこう。それじゃあ、六課の諸君、君たちがやつを追えっていればまた会えるかもしれないから精々頑張ってくれ」

そういうと彼は霧の中へ消えていった。

残された二人。

「あの人一体なにがしたいんだろう。ギン姉の名前だけ聞いくし・・」

「・・・」

ギンガはただ黙って彼がいたあとを眺めていることしかできなかった

スターズｓｉｄｅＥｎｄ

その後霧は晴れた。まるで目的を果たしかのように。
事件は未解決のまま終わった。密輸された物は横流しされさらに首謀者である運び屋は死亡。
そして、新たな敵カオスと呼ばれる敵の出現。ギンガは命の恩人との再会。
しかし、この出会いが後の事件に大きく関わってくるとは誰も思ってもいなかった

第６０話　闇の四騎将　前篇（後書き）

『フィリイヴな時間だよ？』

イヴ「やっほー皆も今日から夏休み？私はいつでも休みだからとくに意味なんてないんだけどね」

仁「ん、ん！それはさておき」

フィ「ギンガ・・・恋しちゃったかな？ムフ」

イヴ「あーカオス、なんであなたは犯罪者もとい敵なの？」

フィ「ギンガ、それは俺がそういう人間だからさ」

仁「なんかロミオとジュリエットな雰囲気を演出しております」

フィ「いいわ。恋する相手が敵。まして自分はそれを捕まえなければならない。こういう展開を私は待っていたのよ！」

仁「でも～そういう話を書く気はないんだよね。というかどうせオリジナルになるからメンドイな～」

フィ「やりなさい！血反吐はいてもやりなさい！」

仁「・・・気が向いたらね」

フィ「女神キック！」

仁「ぐへ！（女神がそんなはしたない攻撃するなよ！）」

イヴ「それじゃあまた次回でね」

第６１話　闇の四騎将　後篇（前書き）

さてさて、今回はカオスたちのことについて書きました。
細かな詳細は次回のオリキャラ紹介でやると思われます。
そして、今迷っているのがギンガなんですね～。どうしようかな・・

第６１話　闇の四騎将　後篇

機動六課　会議室

任務があったその日の夕方。
任務を終え帰還した彼女達はすぐに対策会議を開いた。そこには六課の主要メンバー及び通信で他の局員にも聞けるようにしてあるちなみにギンガもこの席にいる。今回の件ではギンガが一番深い関係を持っているからでもある。

「で、皆の話を元に本局のデータベースにアクセスしたらとんでもないデータが出てきたわけや。シャーリー」

「はい」

はやての命で正面モニターデータが表示される

「この仮面の男。確かにカオスって名乗ってたんよね？」

「ああ。確かにあいつはそんなこと言ってた。なぁ、ユキナ」

「うん。闇の四騎将（トライデント）のリーダって名乗ってた」

それを聞くとはやての顔の表情が険しくなった。

「そうか・・・じゃあ、やっぱり間違いないんやね」

「どういうことだよはやて？」

ヴィータははやてが何かを隠してるように思えてならなかった

「もしかしたら、スカリエッティ以上の厄介事に私たちは関わってしまったかもしれんのや」

「どういうこと？」

するとカオスのデータらしきものが表示される。

「確かにこいつの名はカオスや。ただ、その正体は第S級捜索指定次元犯罪者や」

『！』

あのスカリエッティでさえ1級なのを彼はS級となっているのだ。

「そもそもS級は危険すぎて公開、閲覧規制がかかってるんや」

危険すぎるというのはスカリエッティ以上に罪を犯しているか変態かである。

「けど、質量兵器を保有とかでS級になるものなんですか？」

「いや、せいぜい2級か1級・・・けど各地で大量虐殺をしてきた犯罪者なんや」

そのことに関する映像がながれる。

それはほとんどが戦闘の後。崩れた建物。死体辺りに飛び散る血。

「酷い・・」

「けどな、こいつが起こした事件には毎回ある共通点があるんや」

「共通点？」

「そう。殺された者が皆犯罪者なんや。それは指名手配されている者やされていない者まで皆」

細かく言えばマフィヤや裏組織といったものまで

「あ」

ヴィータはあいつの言葉を思い出した

―俺は悪党だが悪党を断罪する悪党だ

「そうか、そういうことだったのか」

「どないしたん、ヴィータ？」

「いや、あいつ自分で悪党だが悪党を断罪する悪党だって言ったんだ」

「そう、それでこいつに付いた異名が身内殺し。テロリストキラー」

「身内殺し（テロリストキラー）・・・それ星音ちゃんが言ってた。最近、裏で犯罪者ばかり狙った犯罪者がいるって」

「星音が？」

「うん」

―どうして星音が知ってるんや？この情報の閲覧許可はさすがに司書長でも降りてないはずやけど・・・

「あれ、でもおかしくないですか？」

エリオをが挙手して聞いた

「だって、犯罪者ばかり狙ってるんですよね？それっていいことじゃないんですか？」

「いいことじゃないんよ。エリオ。人を殺すのがいいことになると思う？」

「いや、確かにそうですけど」

「エリオの言いたいことはわかる。けど、人を殺してるんや。犯罪者に変わりはあらへん。でも・・」

いきなり言うのを止めた。

なにか思うところがあるようだ

「でも、こいつはな？他の世界だと別の呼び名で呼ばれてるんや。『革命家』または『英雄』って呼ばれてるんよ」

それに関する映像が流れる。

そこはどこかの国らしき場所で国の非道な政治に国民が反旗していた。
この世界に魔法はないらしく銃が主な主力武器だった

「こういった反政府組織と言った所に加担し指導し勝利に導いた。それが仲間や国民から『革命家』『英雄』とまで呼ばれている原因なんや。そういった人から彼は犯罪者ではないという意見も上がってきて色々と議題に何回か上がってきたこともあるほど」

「なんだかこれを見てるとそうは思えませんね」」

「うん」

唯一その映像が流れている映像をみる者たち。そこには仮面をつけた彼がいる。銃を持ち政府、国と戦っている。その仲間と共に

「そして、あと三人やつには仲間がいる。名をサレナ、ハーデスと呼ばれてるんやけど情報がカオスと違ってあんまりないのが痛いところ。サレナは噂では斧使い」

「斧使い・・」

フェイトは自分の姉も斧使いだったということを思い出した

「ハーデスは恐らくやけど中距離・遠距離戦にすぐれた魔導師。常に鎧を纏ってる。これしか情報がないんよ」

「あ、でも、あと一人は?」

「・・・こう言うのもなんやけどないよ。あと一人の情報がなに一

つない。名前もわかっておらんし。四騎将って名乗ってるくらいやからあと一人いるのは確かなんやけど・・」

そういえば先の任務では三人しかいなかった

「どうやっても最後の一人は出て来んのや」

「でも、不思議ですよね。四騎将なのにトライデントなんて。トライデントって3ってイメージがあるのに」

ティアナは恐らく気づいてるものは皆このことに疑問を持っただろう

「それもこいつらの謎の一つでもあるんよ、ティアナ。4なのに3。まるで四人目はいません。それともその逆か」

「情報をかく乱する意味もあるんですかね？」

「そういうことにしとかんと切があらへんからな」

情報をかく乱。それが一番近いかもしれないが政界ではない。だから、深く考えすぎるといけない。無駄に混乱してしまう。だから、そういうことにしておかなければならない

「さて、あとは・・ギンガ」

「あ、はい！」

「カオスもギンガも互いのこと知ってたみたいやけど・・・」

最悪の解釈をすれば内通者と疑われてもおかしくはないだろう。

しかし、ギンガが彼に出会ったのは陸士候補生時代。そう思われても仕方がないと言えば仕方がないが・・・

「私が彼と会ったのは四年前のあの空港火災の時なんです」

「え、じゃあ、私がギンガを助ける前に？」

当時ギンガを助けたのはフェイトだ。しかし、それは二度目

「はい・・通路が崩れて落ちるところをその人に。そのあとまだ火災が起きてる内部へと向かって行きました」

「ますますわからへんな。悪党の癖に」

悪党なら民間人を助けたりはしない

いや、助ける理由がないということになる

「けど、彼らはきっとこの先私たちの邪魔をしてくるよ」

「うん。彼は私たちが追っているヤツがいればまた逢うことになるだろうって。ヤツとはスカリエッティのことだと思う」

「レリックも絡んでるとなると色々と大変なことになる・・・」

―そろそろリミッタ―解除も近いかもしれん

現場にいた副隊長の話を聞く限り彼らの相手は彼女達にしかできない。スバルたちでは相手にすらならないと言っていた。

やっぱり覚悟を決めんといけないんかな・・・

「それじゃあ、会議はここまでや。皆今日はホンマお疲れや。じゃあ、解散」

ギンガｓｉｄｅ

会議のあとギンガはロビーで一人くつろいでいた。

まぁ迎えが来るのを待っているだけなんだけど・

両手でコーヒーを持って彼女は彼、カオスのことを考えていた。

お前らはみたことがあるか?戦争で目の前で殺されていく家族、友人。その中で自分がいきるためにこれを手にする者は大勢いる。子供でさえも。結局お前らは平和の中でいきているからそういう正義ぶったことを言える。本当は何も知らない

彼の言うことは正しい。間違いではない。けど、それが正論だとは限らない。

私はここしか知らない。だから、あんなことを言えたのかもしれない。

彼に反発して放ったあの台詞。

他のことなんて言ったけどそれって管理局に勤めてる人間としては言っちゃいけないよね

「はぁ～」

「どうしたの、溜息なんかついちゃって」

「フェイトさん」

フェイトはギンガの隣に座り一緒にコーヒーを飲み始めた

「私は実際にみてないけど初めて遭った時の印象ってどうだったの？」

「初めてって四年前ですか？」

「うん」

「そうですね・・」

といってもまだ子供といえるぐらいの歳だったからなんていうかその仮面をつける時点で変な人って思ったんだっけ

「最初、変なおじさんって言ったらお兄さんだとか言ってました（笑）」

「・・へ？」

「あとは・・・まぁ不思議な人でしたってどうしましたフェイトさん？」

そんな驚くような話でもないんだけど・・

「いや、ギンガが楽しそうに話すから」

「え？」

私、そんな顔をして話したの？

「いや、その・・・自分でもよくわかりません」

咄嗟に誤魔化したわけではないけどそう言ってしまった。

「じゃあ、聞くけどギンガは彼のことどう思ってるの？」

なんでそんなことを聞くんだろうと思った。

でも、応えないといけない雰囲気のようだし・・

「率直に言えば・・私は彼がそんな悪人には思えません。人を殺すのはいけないことだとわかっています。けど・・彼は違う。『革命家』とか『英雄』って呼ばれているってことはそれだけ多くの人に慕われているってことですよね。だから、私は・・」

「・・・そう、ありがとう。安心して。これでギンガをどうするってわけじゃないから」

「はぁ？」

フェイトさんはそういうとどこかへ行きました。

って！今の台詞ってちょっといけなかったか？

いや、内通者って思われても仕方ないんだろうけど

「あー私どうしちゃったんだろう！」

私は公務員もとい局の人間。あっちは悪党。
あー母さん私どうしたらいいんですかぁー（T＿T）
その後部下が迎えに来て自分の部隊へ帰ったギンガでした。

ギンガｓｉｄｅＥｎｄ

カオスｓｉｄｅ

ミッドチルダ首都グラナガン郊外

カオスは先の仕事の後直接アジトに戻らず首都に訪れていた。
辺りはもう暗いがさすが首都だけあって明るい。だが、明るいほど影は大きく広がる。
そんな人目がなく暗い場所にフードをかぶった彼が現れた。
彼は近くにあるベンチに近寄った。ベンチの下をのぞみこみあるＡ４ぐらいの封筒を取り出した。
中身を取り出しあったのは何かが書かれた紙一枚だった。
そこに記されたのは横流しされた物がどこに流れたかの情報だった。

「組織名は『こだわりのある革命家の集い』・・・・こんなのに奪われたのか・・・」

どこの変態組織だよ

「場所は・・管理外世界か。何人か魔導師がいるな。主な戦力はテロ組織だから質量兵器か。まぁそっちのが都合がいいか。そうなる

と俺以外の弾薬も武器もあるのか・・・。ぶっ潰すのは簡単だが貰えるもんは貰っとくか。となると俺一人だと面倒だな。訓練がてらあいつのを借りるか」

一応訓練教官だし。そうだな・・・チンクがいいな。うん。後はディエチとウェンディだと弾薬まで破壊しかねん。となるとセインとノーヴェがいいな。セインに武器庫を探してもらって俺とチンクとノーヴェで暴れまくればいいか（笑）

「さてと」

ライターで紙を燃やし証拠を消した。

「盗られたもんを取り返しにいきますか」

カオスｓｉｄｅＥｎｄ

第６１話　闇の四騎将　後篇（後書き）

『フィリイブな時間だよ！』

フィ「とまぁカオスたちのことが上がってたけど犯罪者のくせに英雄とかかっこよすぎー」

イブ「それにＳ級もちょっと大げさじゃないかな？」

仁「それほど危険な奴なんだよ。メタルギ○だって一人で倒せるんだぞ（嘘」！」

フィ「まぁいいけど～。それよりギンガよね。恋だけど恋じゃない感情に振り回されてるあの子可愛いわ～」

イヴ「だね。どうするの？ルパ○みたいに盗みにいく？心でも」

仁「いいね。それ。けど、メンドイからいいわ」

イヴ「でも、番外編で書いたっていいんじゃない？世界観無視して」

仁「ん～じゃあ書いてみようかな（どうせ書かないけど言ってみた」

フィ「よし、これでヒロインの座はギンガね！」

イヴ「そもそもヒロインって誰だっけ？」

「「「・・・・」」」

オリキャラ紹介5（前書き）

オリキャラ紹介5

神野（かんの）　麻衣（まい）
ＣＶ恋姫無双の恋
モデル　マジ恋のまゆっち
年齢／２７
性格／冷静な天然でもある性格。しかし、ある人だと性格が一転する
口癖「ご先祖様・・・麻衣は・・・」と最初にご先祖様とつく最後に麻衣と言う
容姿・特徴／　身長は１７５異常で黒髪で髪の毛を後ろで縛っている。
　あと胸がユキナと同等の９（ｒｙ
　年齢の割には１０代並の若さと美貌を兼ね備えている
出身／並列世界の地球
所属／元時空管理局本局
　現在機動六課
役職・階級／　元時空管理局特別局員・二佐（非公式）
現在ライトニング分隊　副隊長　ライトニング３
称号／特許（特別独断行動許可書）
神野家第１３代目当主・神野流師範代・神野流免許皆伝（非公式）
　神の代行者（非公式）
武器／日本刀・鋼糸（予定）
魔力色／？
魔法術式／―
魔導師ランク（魔力ランク）／Ｂ＋～Ｓ＋
氣による技／歩法、武空術、浮遊術、虚空瞬動、中国拳法ｅｔｃ
戦闘能力（非公式）

近接技能／ＳＳＳ
中距離技能／Ａ
遠距離技能／／ＢＢ
氣保有量／ＳＳ

本人から一言
「・・友達・・になってくれる人・・募集中・・だよ・・」

作者から一言
設定をみればかなりチートキャラだけどそれは接近戦だけだから安心してくれ。
作中では魔力以前に戦闘シーンがないが彼女の場合魔力は補助的なものだが氣と魔力を混ぜた技を繰り出す（神野流）。

カオス／混沌
ＣＶ／関智一
年齢／推定３０代前半
性別／男
性格／戦いを楽しむ性格。人を殺すことに何も疑問を持たない野郎
癖／タバコを吸ってると煙で遊ぶ。〇とかそういうの
容姿・特徴／仮面を付けた謎の男。仮面で髪を隠しているのか髪の毛が見えない
　黒いコートを羽織りその中には銃やらナイフが収納されている
出身／不明
所属／闇の四騎将（トライデント）のリーダ。
　現在とスカリエッティの元で仕事をしている
役職／傭兵・殺し屋
武器／禁止されている質量兵器を使用・近接武器・ナイフといった

ものを使用する
称号／第Ｓ級捜索指定次元犯罪者・身内殺し（テロリストキラー）・革命家・英雄
戦闘能力
近接技能／？？？
中距離技能／？？？
遠距離技能／？？？
魔力保有量／？？？
氣力保有量／？？？

本人から一言
「コッペパンが食いたいな～」

備考
数年前から活動しはじめたテロリスト。禁止されている質量兵器を使用し大量虐殺をおこなってきた。しかし、彼が殺した者はみな指名手配されている犯罪者で破壊した施設も違法なものばかり。裏の世界では『身内殺し（テロリストキラー）』と呼ばれている。また、他次元の世界の紛争に加担し『革命家』『英雄』とも言われている。ただ、同業者からは忌み嫌われている。

ブラック・サレナ／黒百合
ＣＶひぐらしのレナ
年齢／２０代前半
性格／優しい性格。誰かを殺すとき家族だったらそいつらの前で殺してあげる優しい性格
容姿・特徴／仮面をし、ショートの髪をした女。
（服装は恋姫の曹操を元にスカートが長ズボンになったＶｅｒで腕の袖は肩までである）

出身／不明
所属／闇の四騎将の将
役職／傭兵・殺し屋
称号／第Ｓ級捜索指定次元犯罪者・身内殺し（テロリストキラー）
　偽善者
武器／情報によれば斧を使うという
魔力色／黒
魔法術式／ミッドチルダ式
魔導師ランク／不明
戦闘能力
近接技能／ＳＳ＋
中距離技能／？？？
遠距離技能／？？？
魔力保有量／？？？
特殊技能／？？？

本人から一言
「サレナで～す♪私に殺されたいのは誰かな～？」

備考
闇の四騎将の一人。目撃証言、噂によれば斧を使うというが報告されている。斧の形状は毎回異なる。彼女に殺された者は身体のどこかを真っ二つにされている。
曲がった性格なのか自分を優しいといい、殺そうとしている人物を生きてる者の目の前で殺す。それが家族や知人だったら尚更。結果から言えば人の死を面白がっている。

ハーデス／冥府の神
ＣＶブラックラグーンのバラライカ

年齢／２０代後半
性格／無口な方な性格。仲間以外とはあまりしゃべらない質。
しかし、そう思ってるのは本人のみ
容姿・特徴／同じ仮面をし、ロングの髪をした女。
　常に鎧を装備している（エリシオン編でハーデスが身にまとったクロスのような物）
出身／不明
所属／闇の四騎将の将
役職／傭兵・殺し屋
称号／第Ｓ級捜索指定次元犯罪者・身内殺し（テロリストキラー）
　堕天使
武器／魔法だが正確なことはわかっていない
魔力色／血のような赤
魔法術式／？
魔導師ランク／不明
戦闘能力
近接技能／？？？
中距離技能／ＳＳ＋
遠距離技能／ＳＳ
魔力保有量／？？？
特殊技能／？？？

本人から一言
「・・・んちゃ」

備考
闇の四騎将の一人。他の二人とは違い常に鎧を纏っている。三人の内中距離・遠距離戦に優れている。彼女と戦い死んだ者の身体には無数の穴があいているという。そして、辺りは血のように赤く染められている。

闇の四騎将最後の将
詳細不明

その他
そういえばユキナはオリジナルだから階級を紹介していなかったので。
ユキナの階級は一等陸尉です。当然と言えば当然だな。

仁「さて、今回はこんなところか。
しかしオリキャラが女ばっかてぇのはちょっとな。男出すか。マルス？いたっけそんなの？」

レイ「女だけでもいいだろうに」

仁「いや、なんか愛すべき馬鹿みたいなキャラとか出したいじゃん？あとはそうだな。お前に関連して魔術師のオリキャラを出したいな」

レイ「スノーがいるだろう？」

仁「いやぬいるぐみだし」

レイ「そういやそうだ」

スノー「・・・・」

第６２話　盗られたら取り返すそれが俺たち（ｒｙ（前書き）

今回はカオスメインのオリジナルです。
チンク、セイン、ノーヴェも登場します。
ちなみにナンバーズはチンクから皆俺の嫁。それ以下は嫌い。
でも、やっぱチンクとセッテだよ。

第６２話　盗られたら取り返すそれが俺たち（ｒｙ

第６６管理外世界　ルッカス

ミッドチルダから少し遠く離れた世界にあるこの世界。
この世界に魔法は普及していない。いるとしたらそれは手品師（マジシャン）ぐらいだろう。その中に希に本物の魔導師か魔術師がいるぐらいだ。
そんな世界にカオスと三人の少女が草木に隠れとある豪邸とまではいかないがそれなりに広い土地を持っている屋敷をみていた。

「くしゅん！ずる・・・寒い」

それもそうだろう。この世界の今の季節は冬だ。今も雪が降っている。
そんな中４人は目立たない格好をしているのだ。

「別にコートぐらい羽織ればいいだろう。セイン」

「そりゃあチンク姉はコート着てるからそう言えるけどさぁ・・ノーヴェは寒くないのか？」

「あたしは別に。これも兄貴のいう特訓らしいし」

戦闘機人と呼ばれる彼女たちの格好いつもの通りの格好である。
その割に寒さを感じているのは雰囲気的に寒いかだろうか？

「で、兄上。目標は？」

双眼鏡を覗いて偵察しているカオス。

「そうだなぁ・・・あちこちに監視カメラ・・それに防犯装置みたいのがあるが問題ないな。むしろ問題なのは兵士だろうな。魔導師か魔術師かはわからんが数人いるのは間違いない。そうじゃなきゃここまで運んで来れないからな」

「それで、あたしらの役目は？」

「ていうかなんであたしたち？」

セイン今さらながら聞いてきた
カオスも普通に応えた。

「それはお前たちが適任だったから」

「理由を聞いてもいい？」

「ああ。理由その一。他の奴らだと俺の物まで破壊しかねないから。理由その二。クアットロとか俺嫌いだから」

半分納得。半分ただの好き嫌い

「あーもうわかったよ。じゃあ、帰ったらなんか作ってくれよ？」

「あーいいぞ。さて、ノーヴェの言う通りお前たちの役目だが、まずセインは武器庫を探せ。お前の能力なら簡単だろう？」

「まぁね」

彼女の能力『ディープダイバー』無機物ならどんな物でも通り抜ける。と言う表現の方が伝わりやすいだろうか。
生活機能を持たないものならどんなものでも通り抜けるという今回の仕事にはうってつけだ

「セインが仕事をしやすいように俺たちは暴れまくる」

「陽動ですね」

「その通りだ、チンク。俺たちは手当たり次第やればいい。敵はテロ組織だ。潰したって庶民は困らないからな。とりあえずノーヴェは前衛」

「わかった」

「けど、無茶はするな？敵は質量兵器だ。魔法と違って厄介だからな。攻めては下がるという戦いがいいだろうがそれは俺とチンクがカバーする。だから、思う存分やっていいぞ」

「おっし！」

「わかりました」

「じゃあ、いくとするか。よっこらせ」

ガチャリ

三人は目を疑う。
一体そんなものをどこから取り出したのだろうと。

彼がとりだしたのはＲＰＧ－７。
頻繁に使われているロケットランチャーだ。

「セイン。俺が撃ったらいけ」

「了解～」

「二人とも準備はいいな？」

「ああ」

「はい」

ノーヴェは構え、チンクはスティンガーを手に持つ

「それじゃあパーティの始まりだ！」

ドン！　ヒュ～ドッカーン！

「ぎゃぁああ！」

「ぐへ！」

「ヒデブ！」

門の手前で警備をしていた者たちが爆発に巻き込まれ死んだ。

『敵襲！敵襲！ただちに敵を排除しろ！これは演習ではない！繰り返すこれは演習ではない』

襲撃に気づきただちに敵も応戦体勢を整えた。
あちこちから武装している兵士がやってきた。
門の前でそれをみたカオスは関心していた
「おー対応が早いな。よく訓練をしている」
「おーーーーーー！」
とさっそくノーヴェが突撃もとい吶喊していた
「姉としては武装した大勢の敵に突撃する考え方はどうかと思うのですが・・」
「まぁそうだろうな。そのための俺達でもあるが・・よっと」
彼が取り出したのは二丁のＰ９０カスタム突撃砲装備（マブラヴでよく使用されるアレ）
普通のＰ９０と違うのは通常の砲身の上にもう一つ砲身が装備されている。上部に装備されているのはマガジン式のグレネードだ。
彼は銃口をノーヴェを迎え撃とう左右に展開する敵部隊に向け引き金を引いた
ＤＡＤＡＤＡＤＡＤＡＤＡＤＡＤＡＤＡＤＡＤＡＤＡ！！！！！！
ヒュン　ヒュン　ヒュン・・・プス・・・バタリ
「な、なんだ！おいどうした！」
「馬鹿野郎！敵は突っ込んでくる奴だけじゃね！とにかく撃つんだ

よ！」

「手の空いてるやつは回り込め！」

ＤＡＤＡＤＡＤＡＤＡＤＡＤＡＤＡＤＡＤＡＤＡＤＡ！！！！！！！

数人の兵士が包囲しようと展開した。

「チンク、後ろは任せた」

「はい、兄上」

カオスがチンクに背中を任すのは彼女を信頼しているからだ

チンクはスティンガーを構える。敵は今もなお自分たちに向けて発砲している。

なぜ、当たらないのか。世界の不思議だ

左右に三人ずつ・・・いけるな

「ッ！」

シュッ！　グサ！

スティンガーが敵兵死の頭や胸といった急所に刺さった。

「お見事」

前を向きながらだがそれをしっかりみていたカオス

「まだ兄上には及びません」

「なに謙遜することはない『ＤＡＤＡＤＡＤＡＤＡＤＡＤＡＤＡＤＡＤＡＤＡＤＡＤＡ！！！！！』うるさいな」

ＤＯＮ！！！

グレネードが前方に展開する敵兵を吹き飛ばす

「ぎゃぁああ！」

「おかあ（ｒｙ！）

「懐に入れば・・・覇ッ！」

雪の上を走ってるのも関わらずノーヴェは軽々と敵の懐に近づき正拳突きと蹴りを喰らわせる。

「ぐへ！」

「こいつ動きが！―・・・・」

「通常の三―・・・」

一撃一撃が重くそして速い。一人倒し、また一人と敵に撃たせる暇を与えない。

それをカオスは評価していた

「そうだ。撃たれる前にやれ。それの連続だ。アサルトライフルじゃ接近戦に向かんからな」

「兄上、アレを」

「ん？」

チンクに言われ目を向けると大型の車でも入りそうな車庫の扉が開こうとしていた。
それが装甲車か戦車だとカオスは予想した。

「チンク、アレやっていいぞ」

「わかりました・・・ッ！」

持てる限りのスティンガーを連続で車庫に向けて投げる。しかし、スティンガーでは貫通はできず壁や屋根に刺さるのが限度だった。
しかし、それだけ十分だった

「ランブルデトネイター」

パチン

指を弾くと車庫が爆発した。正確にはスティンガーを中心にして。
しかし、スティンガーの爆発だけで車庫を丸ごと吹き飛ばすことはできない。だが、中か外に燃料タンクまたは火薬に引火し爆発力を高めた。

「上出来だ。スティンガーのストックは？」

彼は今も尚を銃撃戦を繰り広げているため前をみながら聞いてきた

「申し訳ありません。今ので全部使ってしまいました」

「そうか、なら俺のを使え。懐にあるから」

「／／／／え、いや、それじゃあ失礼して」

チンクは少し恥ずかしそうに言い、彼の背中に抱きつくような形で手を伸ばし彼のナイフをとった。

―堂々と前からとればいいだろうに

カオスはチンクがなんで効率の悪い行動をしたのか理解できていなかった

「一応俺のお気に入りだからな。壊すなよ？」

「わかってます。それじゃあ・・いきます！」

後ろを守る役目を終えたチンクは前面に展開している敵兵士に迫った。

それに一人の兵士が気づいた

「餓鬼だからって！」

ＤＡＤＡＤＡ！！！！

銃口をチンクに定めフルオートで放つ。

「ッ！」

チンクは小刻み、ジクザクに動き狙われないように動く。その動きは子供いや人間とは思えない動きで銃弾を避ける

「ありえない！こいつ人間かよ！『カチ　カチ』くそぉ！」

弾が切れたが弾を交換している暇はないと直感し装備していたナイフを構える

チンクが目前に迫りナイフを振るう。

しかし、彼とチンクでは身長差がありすぎるためチンクはしゃがめば軽々と避けられた。

チンクは男に隙ができるのと同時に胸にナイフを刺し仕留めた

「兄上のは使いやすいがやっぱりスティンガーの方がいいな」

カオスが持っているナイフはちょっと特殊でナイフにしては長く中心が空いている。（ＤＴＢの黒が使用している物）

まぁスティンガーも兄上が私用に改良してくださったものだが・・

「と、それより外はあらかた片付いたな。ノーヴェそっちはどうだ？」

「こっちも・・今片付いた」

「「兄上（兄貴）は？」」

気が付いたら銃声は止んでいた

彼がいたであろう場所に目を向けると彼は・・・

死体を探っていた。

というより兵士が持っていた武器を取り出しては捨て、良い状態な

物は盗っている

「ん～ほとんど持ってるヤツばかりだな～」

「兄貴何やってんだ？」

「いや、質量兵器は入手が難しいからこうやって楽して入手してるわけ。けど、今回の奴らはほとんどＡＫだったし弾薬だけだな。今回は」

俺はこれでもガンマニアなのだ

弾代だって馬鹿にならないしこうやって楽に儲けるのがコツだ

「でも、どうします兄上？外はあらかた片付けましたが中にまだいるかもしれません」

「・・・確かに人の気配がいくつかある。十人ぐらいはいそうだな」

―なんでそんなことわかるんだろ？

ノーヴェはそれが不思議でならなかった。あたしたちで言うなら魔法でわかるけど魔力を持たない相手だと（デバイスでならわかるが）自分で見つけるのは一苦労だ。

兄貴曰く「戦いの中で自然と身に付けた」らしい。

「どうする？俺はちょっとここのボスに用があるんだけど」

「チンク姉はどうする？」

「私は兄上と一緒にいこう。お前はセインと合流して兄上の物を守ってくれるか？」

「わかった。じゃあ、兄貴またあとで」

「おう」

ノーヴェはジェットエッジを走らせノーヴェがいるであろう弾薬庫へ向かった。

「さて、いくか。チンク」

「はい、兄上」

二人は屋敷の扉の前と歩きだした。
カオスは武器をエンフィールド？１ＭＫ１スター改（サクラ大戦のマリアが使用していた銃）
を構え、チンクは先ほどカオスに借りているナイフを持っている。

「違和感はあるか？」

「ありませんけど・・やっぱりスティンガーのが使いやすいです」

「そうか。後少し我慢してくれ」

「い、いえ別にそういうわけでは／／／！」

「？ならいいが」

カオスはいまいち彼女が慌ててる意味がわからなかった。

ただ、使い慣れたものじゃないからあと少し我慢してくれと言っただけのだが・・

そんなことを思ってるうちに扉の目の前に来ていた。
屋敷だけあって普通の家の扉とは違い通常のと数倍はある大きさだった。

―でかけりゃ良いってもんじゃねぇよな

「さて、お邪魔しま～すッ！」

ＤＯＮ～！

そういうと扉に向けて蹴った。すると二枚開きだった扉が二枚とも吹き飛んだ。

「どうやらここに敵はいないようだ。さて、チンク。二手に分かれるか？」

「そうですね。一応この屋敷広いですから」

「それじゃあ、後で合流しよう」

「はい」

チンクは一階を、カオスは二階を捜索し始めた。
しかし、敵は“何故”か二階に集結していた。
そのためカオスは階段を上るとすぐ３人ぐらいの兵士と接敵した。

ＤＡＤＡＤＡＤＡ！！！！

「おっと」

彼は横に飛び銃弾を避ける。避けながら一発一発を正確に撃つ。

ＢＡＮ　ＢＡＮ　ＢＡＮ

バタ・・・・

「いきなり出くわすとは。当たりを引いたかな?」

面白半分に言ってみたが実際そうなった。

奥へ進むたびに敵を鉢合わせに撃ってきてきは撃ち返す。ただ、それの繰り返しだった。あとたまぁに魔導師がいるぐらい。

なぜ、彼の方に敵が集まっているのか。それは、彼に懸けられている賞金が理由だった。裏の世界、掃除屋（スイーパー）や賞金稼ぎなどで彼に懸けられている賞金の額は８８８億$。しかも生死問わずだ。

日本円に計算すると・・・わかんねぇや。俺頭悪いから。

つまり、彼を殺せば金は手に入るし名をあげることもできる。まさに一石二鳥とはこのこと。

だったが・・・

世の中上手くいくわけもなく敵兵士たちは天に召されていくだけだった。

一方チンクはというと・・・

「・・・なぜ敵がいないのだ?」

敵はほとんどカオスの方に向かっているためチンクがいる一階には誰もいなかったのだ。

そんなこんなでカオスは敵のボスらしい部屋についた。

「どうも、こんにちは」

ＢＡＮ！

「おいおい、いきなり発砲とは・・」

彼が部屋に入った瞬間デブでひげを生やしたおっさんが彼に向けて発砲したのだ
おっさんは銃を構えながら震えていた。

「お、俺の、俺の部隊が全滅だとぉ！？たった三人に！」

「正確には４人だがまぁいい。お前だな？俺の物を横取りしたのは？いい度胸してるよ、アンタ。俺に喧嘩を売ってるのと同じ行為だというのに」

「し、知らなかったんだ！あ、あんただって知っていればこんなことは・・」

「やってから気づいたって遅いだろうが。で、誰から教えて貰った？密輸の情報を知っていたのは商品を買った教会か運び屋だ」

今回ここを襲撃した一番の目標がそれだった。物の奪還も大事だがカオスにとってなぜ第三者が密輸の情報を手に入れられたのか。そ

れが謎だった。

「た、タレこみ・・いや、そういう情報を教えてもらったんだ！」

「誰に？」

「女、女だ！声からして女だった！間違いねぇよ！」

女・・・

彼にはいくつか思い当たる節があった。まず、自分の仲間である彼女達は除外。あとは、このことを知っているのはスカリエッティ。もし、俺とあいつの会話を聞いていたなら・・あるいは・・いや、彼女達はそういうことをするやつらじゃない。たった一人を除けば・・。

「あいつか」

俺らやゼストやルーテシアといったスカリエッティと関係ある者の中で特に俺を嫌ってるやつがいた。

あの・・・

「エビフライ女め」

「な、なぁもういいだろう？教えることは教えたし物だって返す。だから・・」

「駄～目♪」

ＢＡＮ！

「うっ！」

仮面をかぶっているが彼は満面の怒りを込めた笑みを浮かべているだろう。

「リーブ〇1通ってれば・・・ガクシ・・・」

なんか髪の毛生えてれば生きていられた。みたいな遺言というか最後の言葉を残して死んでいった。

「いや、そんなんで生存率上がんないから」

―兄貴ぃ～終わったか～

なんともダルそうな声で念話を送ってきたセイン

―ああ、終わった。今からそっちに合流する

―了～解～

「きっと暇で仕方がなかったんだな」

恐らくというか高確率で今回一番暇だったのはセインだ。敵はこないしただ待っているだけのだから。

「あ、いた。兄上」

「おーチンク。その様子だと何もなくここに来たな？」

「ええ、まぁ」

なにせ敵は全員彼に当てられていたのだ

「さて、セインたちと合流するか」

「はい」

二人は屋敷から少し離れた武器庫へと向かった。
武器庫へいくとセインとノーヴェがやっぱり暇だったらしくものすごく退屈な顔をしていた。
中に入るとズラリと並ぶ銃や弾薬があった。それをみるとカオスは目を光らせていた。
その後物を回収し武器庫と屋敷を爆破してルッカスを去った。
彼らが去ってから数時間後。地元の警察などが駆けつけたりマスコミが来たりしニュースや新聞にも大きく載ったが管理外世界なので管理局にはその情報が伝わることはなかった。
事件は何者かにテロ組織が壊滅ということでまとまったらしい。

スカリエッティのアジト　通路

ルッカスから戻ってきたカオスは一人通路を歩いていた。

「～～♪」

物を取り返しさらにおまけも手に入ったのでかなりご機嫌がいい

「～～♪～・・・・・・」

しかし、彼は不機嫌になった。
向かい側から歩いてくるクアットロをみて

「あらぁ随分ご機嫌じゃああありませんか。身内殺しのカオスさん♪
今日も同業者を殺してそんなに嬉しいのかしら？」

無言

彼は彼女の言葉を無視して歩いてくる。

「今日も家の妹たちを勝手使ってくれちゃって」

彼はクアットロを通り過ぎると足をとめた

「そのおさげをエビフライにしてやろうか？」

「ッ」

―ドクターの友人だか知人だか調子に乗って・・そうじゃなければ
あなたなんか消してるのよ

「そうそう。一つ“忠告”だ。声もちゃんと偽装した方がいいぞ。
敵に”女“という情報を与えるからな（笑）」

「なにが言いたいので？」

「別に。深い意味はないよ」

そう言い残し彼はその場を後にした。

一人残ったクアットロは

「あの変質者め！いつか絶対あの仮面を剥いでやる！」

怒りと共に心に誓いクアットロもその場を去った。

クアットロに言ってやったぜ！みたいな感じで嬉しそうな彼だが実はあることを考えていた。

―あいつの計画も近い。それにあの機動六課も色々と邪魔してくるだろうな・・やっぱ情報が少ないな

機動六課の情報はある程度教えてもらったが個人の正確ないや私的な情報や六課の情報も少ないのだ

「というわけで頼めるか？」

チリーン

鈴の音が響き渡る。

「それが主の望むことなら」

どこからか声が聞こえる

「それじゃあ頼む」

「はい」

チリーン

また鈴の音が響き渡る。

しかし、それ以降鈴の音もその声も聞こえることはなかった

第６２話　盗られたら取り返すそれが俺たち（ｒｙ（後書き）

『フィリイブな時間っす』

フィ「まぁ管理外だからって派手にやるわね」

イヴ「それにエビフライ女って。ちょっと無理あるよね」

仁「いいじゃまいか。案がなかったんだから。ちなみに最後に登場したチリーンの人が最後の将だったりますよ」

フィ「ちゃっかし教えてる」

仁「それと次回は番外編を出す予定です。時間軸とかは関係あるようでないです」

イヴ「というわけで今回はここまでなのでまた次回ね」

番外編その１（前書き）

その１ってことあ２もあるってことだけどやるかわからないぜ！

番外編その1

むかし、むかしミッドチルダという国がありました。そこでは宝石、絵画や銅像など有名で美術品が世界で名を広めていました。

しかし、それを盗む泥棒も多くいました。その中でミッドチルダ一番の盗人カオスという男がおりました。彼はどういうわけか犯行予告をして盗んだりするという少し変わった盗人でした。変わっているのではそれだけではなく同業者の者まで容赦なく潰し逆に宝を盗んだりしていることで有名でした。

そんな彼を捕まえようとする一人の少女がいました。その子の名をギンガ・ナカジマ。あのナカジマ警部の長女なのです。ミッドチルダでカオスとナカジマ警部の名を知らぬ者はおりません。それは二人が永遠のライバルだったからです。
ギンガもまた彼を捕まえるたまに警官になりましたが・・実はそれには理由があるのです。

それは彼女が１３歳の時のことです。妹のスバルと美術館へやってきた二人は離ればなれになりスバルはどこかに。ギンガはその時一番人気があった絵画の展示コーナーにいたのです。しかし、どっかの変態紳士によって絵画と一緒に盗まれてしまったのです。

「あーれー」

「心配しないでくれお嬢さん。私は紳士だ。売り飛ばす前まではな

にもしない（キリ）」

こいつは何を言ってるのでしょうか

とそんなところに最近噂の盗人カオスが紳士を本当の紳士として倒しギンガを助けました。

「あ、ありがとうございます」

ギンガはお礼をいいました。しかし・・・

「え、別に君は“たまたま”いたから助けただけだけど？」

なんと彼は絵画が欲しかっただけでギンガは助ける気はなかったのです！

「こらぁーカオス！家の娘に手を出したらただじゃおかねぇぞ！」

とどこからかナカジマ警部の声が

「心配すんなって、とっつぁん。俺、餓鬼を愛でる趣味ないから」

と彼は颯爽と去って行きました

それからというとギンガは警察官になりました。

理由は「なんかむかついたから」

それもそうでしょう。自分は絵画のおまけだったのですから

しかし、ギンガが警察官になってからというもの・・・

カオスは中々物を盗めなくなってしまったのです。それもそのはず。

とっつぁんとは違い若いし頭も切れる。
いつしかギンガは周りから姉御とまで呼ばれるたくましい警察官になったのです。

ある時は

「ははっは！嬢ちゃんがとっつぁんの娘？甘い甘い」

「なにをー！」

ある時は海で

「海は俺の友達だ」

とイルカの上に乗って逃げる彼

「私だって！？」

とウィングロードで追ったりとまさにルパ○と銭○

彼との出会いから４年後。
ギンガはミッドの王の花嫁として嫁入りしなければなりませんでした。
その王子の名をスカリエッティ・・略してスカのもとへ嫁がなければならないのです。しかし、この王子。変態とよく呼ばれており既に１２人の妻がいるのです。変態が気に言った女は皆彼のコレクションにされてしまうのです。

「駄目だよ！なんでお姉ちゃんがあんな変態のところへ行くの！？」

「仕方がないよ、スバル。私たちは国民で向こうは王族だもの」

「けど、お姉ちゃん、本当は―」

「いいの。私は警察官。あの人は泥棒だから」

「お姉ちゃん・・・だったら代わりに私が・・」

「駄目よ。スバルは馬鹿だから・・」

「お姉ちゃん・・・さらっと酷いこと言ってない？」

それは国を挙げての結婚式になりました。
しかし、これで１３回目。街の人は皆ギンガを憐れみました。もちろんとっつぁんも。しかし、国の王には逆らえないのでした。
そんな結婚式前日。

『変態王子へ　結婚式当日、花嫁を頂にまいります。　カオスより』

と王子に予告状が届いたのです。
それはもう厳重な警備が敷かれました。よくいう蟻一匹も入れませんよ的な。

結婚式当日

ウェディングドレスに身を包んだギンガはそれはもうとても綺麗でした。

しかし、式が始まってから未だに彼は現れません。式はとうとう誓いの言葉を追え、えーとキス？というところまで来てしまったのです。（ちょっと作者ちゃんとしてよ）

「おい、アレを見ろ！」

ざわ・・ざわ・・

なんということでしょう。

空の上からフリー○ムがやってきたではありませんか。

フリー○ムは着陸し腕を伸ばし祭壇へと着けました。ハッチが開き出てきたのはカオスでした。カオスは周りの護衛していた騎士を倒し変態王子に一発入れてから

「悪いが花嫁はいただいていくぜとっつぁん！」

「カオスおめぇ・・・」

「勘違いするなよ？俺は欲しいものはどんなことをしたって奪う。それが・・俺が惚れた女でもな！」

「え？え？」

どうやらギンガは混乱しているようです。

「お姉ちゃんよかったね！」

「スバル・・」

「たまには連絡よこせよ」

「父さんまで・・・」

家族は皆祝福していました。それだけではありません。町中の皆がギンガを、二人を祝福していました。

「うぅう、私のコレクション・・・」

「私はそんな安い女じゃありません！」

「あべし！」

花嫁の鉄拳が変態を倒しました

「それじゃあいこうかギンガ」

「はい♪」

こうして二人はフリーダ○に乗って遠い異国の地。和の国という国で幸せに暮らしました。

「ところで、仮面はとってくれないの？」

「はは、そうだな」

彼は仮面をとりました。

「え、えーーーー！！！？？？？」

コックピットに花嫁の声が響き渡りました。

そして、二人は末永く幸せに暮らしましたとさ。

めでたし、めでたし

CAST

主人公兼ヒロイン　ギンガ
泥棒　カオス
とっつぁん　ゲンヤ
ギンガの妹　スバル
変態紳士　変態
変態王子　変態ドクター
街人　不知火仁
ナレーション　愛の女神

原作　魔法少女リリカルなのは

シナリオ　不知火　仁

編集　不知火　仁

撮影協力　ミッドチルダの皆さん
　　陸士１０８部隊のみなさん
　　オーブの皆さん　変態の〇ラ様

撮影場所　ミッドチルダ　オーブ

ＭＳ（フリー〇ム）提供者　天空世）』

ＯＰ『カオスのテーマ（ルパ〇三

ＥＤ『？？？』

提供　本局総帥
　　ミッドチルダ
　　オーブ
　　プラントの歌姫
　　ｅｔｃ

宣伝　ミッドチルダ第三放送局（仮）

なぜなにスタッフ一同

時空管理局

機動六課

ＴＢ〇

Ｙａ〇ｏｏ

ニコ〇コ放送局

総監督　不知火　仁

速報！！！

続編決定！！

「それほんとうかな？」

「どうせ予告詐欺よ」

ＥＮＤ

・・・・・・

「・・・は！・・・なんだ夢か」

変な夢だったなぁ。私が花嫁になってあの人にさらわれていくんだもん

ギンガは自分の机の上で寝ていたことに気付いた。

「それにしても・・・あの人の素顔どこかで・・？」

夢なのに実際みたこともない彼の素顔。なぜかどこかでみたことがあったような気がした。

一方カオスは・・・

「は！・・・酷い夢だった・・」

俺がどっかの騎士で連れ去られた姫（ギンガ）を救うために魔王に挑む変な夢だった。

魔王はどっかでみたとあるような気がしたが覚えていない。

「けど・・・」

「にしても・・・」

「「変な夢だったなぁ（だ）」」

番外編その1（後書き）

はい夢オチ
無駄に凝った演出をした気がする。
これが本編に影響することはあんまりないと思われます。
だぶん

では今日はこのへんで・・・・

疲れた・・

第６３話　面影

シグナム・ユキナ・麻衣ｓｉｄｅ

六課の空き地。よくティアナが個人練習していたところでシグナムと麻衣は剣の稽古をしていた。ユキナはそれをみているだけ。互いに木刀を握り振るう。

シグナムは麻衣の太刀筋をみて驚愕した。その一つ一つの太刀筋がとても美しいのだ。技（スキル）ではなく術（アート）に近いと言った方がいいだろうか。それほどまでに美しい太刀筋だった。

「凄いな、麻衣は」

「・・なにが？」

「いや、美しい太刀筋だと思ってな」

「・・そんなことない。シグナムもいい太刀筋。私が・・術（アート）ならシグナムは技（スキル）」

「私はひたすら技、強さを求めていたからな。術（アート）は必要としていなかった」

「けど、シグナムも綺麗」

「そ、そうか／／／」

「珍しく照れちゃって♪」

「う、うるさい！」

二人の稽古をみていたユキナがシグナムが珍しく照れた顔をしたので少しからかってみた。

「そういえば麻衣の剣術はどういうのなんだ？」

「あ、それ私も気になってた。確か麻衣っちはそういう家の人だよね？」

前にティアナに話した昔話。その話が本当なら麻衣はその家の流派を会得していることになる。

「・・うん。神野流って言うんだ」

「ほーじゃあ、飛天御剣流みたいなものか」

かつて自分が学んでいた流派を思い出した。

「飛天・・？比古さんとこの？」

「なんだ知っていたのか」

驚きだ。あんな山にひっそりと暮らしているあの人を麻衣が知っていたとは

「うん・・前に戦ったことあるよ」

「本当か！？」

そっちのがもっと驚きだった。比古殿はテスタロッサの方をみていたので私は彼の実力を知らなかったのだ。稽古をつけてもらうとしても駄目だしされてしまった

「・・戦ったというか練習試合みたいなものだよ？私が神野家の人間だって知ってたから相手をしてくれたみたいなものだから・・」

「そうなのか。で、比古殿はどのくらい強いのだ？」

「・・比古さんはなんていうか最強の文字が合う人・・」

「・・・納得だ」

最強という言葉で納得してしまうのは本当にそうだから

「しかし、麻衣はどのくらい強いのだ？」

「・・・一応神野流は飛天御剣流に劣らないけど・・まだ、私は比古さんには及ばないかな。剣心くんには勝てるけど」

「そうなのか。私はそれなりだな。勝つ時もあるし負ける時もある」

緋村殿とはほとんど稽古をしていたのでそれなりに彼の戦い方や癖を見つけなんとか勝てた。今は・・・勝てるような気がする

「けど、飛天御剣流派と比べない方がいいよ？アレはちょっと度を

超えてるから。私の神野流もそうだけど」

「そうなのか？」

「うん」

実際にみてみたい気もするが話から推測するに彼女は見せたがる人間ではない。

だから、これ以上は言わないし詮索もしなかった。

「ところで麻衣、お前歳は幾つだ？」

今思えばなんでそんなことを聞いたのだろうか

「？・・２７だよ？」

「「！！」」

それにはシグナムだけではなくユキナも驚いていた

「嘘ォ！それで２７！？どうみても１０代後半よ・・・」

「そう・・なの？」

頭を傾けシグナムに聞いた

―い、いや私に振られてもこまるのだが・・

「ま、まぁそうなんじゃないのか？」

「それって・・いいこと？」

「いいことすぎるよ！」

―そもそも私たちは姿を変えられるんだがな

そう彼女達は一応プログラムなので若くしたりできなくはないのだ。

ただ、この姿が気にいっているので変えていないだけだ。

「ってユキナ・・つんつんするのやめて」

「いいなぁ・・・若いって」

麻衣のほっぺたをつんつんしているユキナ

―これはもう稽古どころではないな

シグナム・ユキナ・麻衣ｓｉｄｅＥｎｄ

スバル・ティアナｓｉｄｅ

「ふーいい湯だった」

「そうね」

夜の訓練を終えお風呂にあがった二人。

入浴場を出ていつも通り自分たちの部屋に帰る道を歩いていた時あるものをスバルはみつけた

「なんだろうこれ？」

「ペンダントじゃない？」

銀色で丸く帯びたペンダント。ペンダントにしては少し大きいしちょっと変だった

「あ、ロケットじゃない？」

「言われてみればそうね。けど、隊のなかでこれをしてる人なんてみたことないわよね？」

「うん・・」

スバルは適当にロケットを弄っていると『カチ』ロケットを開けてしまった

「あわわ、どうしよう！」

しかし、開けてしまったのものは仕方がないし中身をみないと持ち主がわからない
という理由で二人をロケットを覗いた

「「あ」」

そこにあったのは一枚の写真だった。写っているのは小さいなのはとレイだった。
二人は最初誰だかわからなかったけどすぐに思い出した。

「これ、なのはさんのだ。可愛いなぁ」

「あんた涎垂れてるわよ。それにしても・・この人総帥よね？」

ロケットのため小さくて見づらいが記憶が確かなら管理局総帥だ。

「そんなことより渡しにいかないと！いこ、ティア！」

「え、ちょっと！スバル！」

スバルに引っ張られるティア。

その光景はまるでアラレちゃんみたいだった。

ティアは「あ、人って魔法使わなくても宙に浮けるんだ」と思った

スバル・ティアナｓｉｄｅＥｎｄ

なのは・フェイトｓｉｄｅ

スバルとティアナがロケットを拾った頃。なのはとフェイトは自室でデータ整理をしていた。

なのは一息つきふと窓をみた。

ザーザー

大嫌いな雨が降っていた

その時の彼女の表情はとても切ないそんな顔をしていた。

「どうしたのなのは？」

「あ、ううん。なんでもないよ」

コンコン

「？」

「なのはさん、スバルです。少しいいですか？」

「どうしたんだろう。入ってきていいよ」

扉が開きスバルとティアナが入ってきた。

「どうしたの二人とも？」

「いや、大した用じゃないんですけど・・」

「廊下でこれを拾って」

差し出されたのはなのはがいつも大事にしていたロケットだった。
それをみたなのはは自分の身体を詮索し『あ・・』と声をあげた

「ありがとう、二人とも。あれ、ということは・・みた？（笑顔で）
」

「・・はい（￣＿￣；）」

まぁみないとわかんないよね。みせたことないのに

「まぁ、でもありがとう」

「なのは、それなんなの？」

ビク！

フェイトの声に何故か反応したなのは。

―そういえばこれ誰にもみせたことないんだった・・・どうしよう

「ロケット？誰かの写真でも入ってるの？」

「はい、小さいなのはさんと総帥が」

「スバル！」

ティアナが突っ込んだが時すでに遅し。

なんていうかこう『ゴゴゴォー』という効果音がフェイトの背中から聞こえてきた

「なのは。それどういうこと？（笑顔）」

「えーと、そのままの意味だよフェイトちゃん？」

「どういう意味なのかな？」

―ねぇティアなんだかフェイトさん恐くない？

―ない？じゃなくて恐いのよ。悪夢だわ

「兄さんと一緒の写真・・・私だって撮ったことないんだよ？」

「これは・・その・・そういう雰囲気だったというか・・」

―スバル、逃げるわよ

―え、でも。

―馬鹿、ここにいたって命がいくつあっても足りないわ。それに・・これは二人のプライベートな問題なのよ?

―そっか

空気を読んだのか二人は気づかれないようにその部屋を去った

「なのは、それ裏切り行為だよ?」

「裏切りもなにも、私はレイくんとの繋がりが欲しかっただけ」

「え?」

「フェイトちゃんは子供頃からレイくんのこと知ってて、私はあの人のこと何にも知らなくて・・少しずるしたっていいじゃない」

ロケットを握りしめ悲しい顔をしている彼女

「なのは・・・」

―そうだった。一番ショックだったのなのはだったよね

「ごめん。もうこの話止めよう」

「うん」

それ以上二人がそのことに言うことはなかった。

言えば互いに傷つくしなにより言う度に彼の面影を思い出すから

なのは・フェイトｓｉｄｅＥｎｄ

第６３話　面影（後書き）

今回はちょっと二人はお休み

実はこれ投稿するか迷ったんですけど出しました。なんていうかなのはの気持ちの再確認というかそういう部分を確認するために出しました。

もっと別のキャラの話もあったんですけどネタがなくて・・・

次回からはｓｔｓの中盤ぐらいになるかな

次回更新は今日中にできる予定ですので楽しみに待っていてください

第６４話　高町なのはの休日　前篇（前書き）

機動六課の休日ですがなんとなのはの休日です。
でも、本当はあまり休日なこと書いてないんですけどね・・・

第６４話　高町なのはの休日　前篇

どうも、皆さんメインヒロインの高町なのはです。最近影が薄くて困っているのが悩みだったりします。
とまぁそれは置いといて。
本日、スバルたちの第二段階が終了したので初めての休暇を与えました。もちろん、私たちは普通に仕事だったのですが・・・

◆◆◆◆◆

スバルたちを送り出し少し経ったあと宿舎の入り口でなのはは私服に着替えていた。

「本当にいいの？それに私だけ・・」

なぜか私にも休暇を与えられてました。部隊長直々に。

「遠慮せんといて。なのはちゃん最近気張りすぎやし、たまにはな？」

「でも・・・」

「いいから、お前の分の仕事はあたしがしとくって」

「ヴィータちゃん」

ヴィータも念を押してなのはをいかせようとする。

「二人の言う通りだよ、なのは。こっちは心配しないでゆっくりしてきて」

「フェイトちゃんまで・・・それじゃあお言葉に甘えて、行ってきます」

「「「いってらっしゃい」」」

と彼女を笑顔で送る三人。
見えなくなると手を振るのを止めた。

「なんとかいったみたいやね」

「ああ。あいつ本当に自分じゃあ気づいてないからな」

「うん。たまには強引にやるのもいいもんだね」

三人が何故そうまでしてなのはをいかせたのか。それは少しでも彼女の身体を休めるためが一番の理由でもある。幼少からの無茶は今だって続いている。主治医であるシャマルもその案には賛成だった。一日でも身体を休めるだけで変わってくるということらしい。

「それじゃあ私たちは仕事しなきゃね」

「そうやね」

「あーだりぃ」

結果的に言えばヴィータの仕事は二倍になったのだ。自分が言っておいてなんだけどね。

「にゃ～」

「「「？」」」

といきなり猫の声がした。

茂みの中から黒猫が出てきた。フェイトは猫を静かに抱いてあげた。

「猫？どうしたのかな。迷いこんじゃったのかな？」

「でも、首輪ついてるし飼い猫ちゃうん？」

よくみるとネームプレートらしきものが付いている。ＲＩＮ・・・とあとは削れてるのだろうか。読み取れなかった。

「でも、弱ってるみたいだし捨てられたのかな？」

「にゃ～にゃ～」

声からして弱ってるように聞こえる。

「可愛そう。とりあえず私この子看病してくるね」

そういうとフェイトは猫を抱きかかえたまま走り去っていった。

「さて、私たちも戻ろうか」

「ああ」

◆◆◆◆◆

そんなこんなでなのはは一人ショッピングをしていたのだ。

「でも、一人でいてもつまらないんだよね」

フェイトちゃんやもう一人誰かがいるのならともかく一人でこんなことをしていてもつまらなかった。

「あの～」

「？」

誰かが私に声をかけてきた

「もしかして、あの管理局の高町なのはさんですよね？」

「え、はい。そうですけど」

「おい、やっぱりそうだってよ」

「おお、生で見るとすっげー美人」

―ああ、ナンパか

別にナンパされたのが今回が初めてというわけではない。過去にフェイトちゃんと一緒にこうして出かけた時よくされたものだ。

―けど、今回は多いなぁ。４人もいる

「一人なら俺たちとお茶いない？」

「あ、結構です」

「そういわずにさぁ」

―ナンパ師がよくやるパターンだよね

そうなのははいつも通りの反応をしたが今回は少し違った。
一人の男が強引にもなのはの手を掴み無理やりさせようようとしていた

「ちょっとあなたたち」

「別にいいじゃん。どうせ、男なんていないんでしょ？」

ブチ

それを聞いてちょっとムカついた。
けど、そうしたくてもできない理由があった。それは、私が公務員だから

―さすがに不味いよね。一応護身術習ってるけど民間人にやるのはさすがに・・

どう対応しようと迷った時だった

「いてててて！」

一人の男が腕を後ろにまわされていた。

「・・神野さん?」

なぜかここにいるはずのない麻衣がなのはを助けていた

「姉ちゃん・・よくもトシくんをやってくれたな」

「・・・・失せろ」

「「「は?」」」

その言葉にはなのはも驚いた。シグナムやユキナから聞いた話ではそんな普通に喋れる子ではないらしい。むしろ、おどおどというかとてもゆっくり会話をするらしい。

「もう一度言う。失せろ」

その目はいつもの彼女の目ではなかった。まるで例えるなら殺意を込めた目だった。

「おいいくぞ」

「待ってよ、タケやん!」

そういうと男どもは去っていた。
麻衣は溜息をつきなのはをみた

「・・・大丈夫・・?」

彼女の喋り方はいつものに戻っていた。

「はい、私は平気です。でも、どうして神野さんがここに？」

「・・あなたを・・あなたたちを守るのが・・私の使命」

「え？」

―どういう意味？

「，・・とりえず場所を移す・・」

「あ、はい」

珍しく麻衣は自分から行動していた。

―そういえば神野さんって私たちより８歳年上なんだっけ？

これもシグナムやユキナから聞いていたことだった。これで２０代後半は少し反則でしょ？

ギンガｓｉｄｅ

同じころ地下道でトラックの横転事故が起きギンガ現場検証に駆けつけていた

「どうも、陸士１０８部隊のギンガ・ナカジマ陸曹です」

「ごくろうさまです」

「それにしても一体何が？報告では爆発物があったらしいと」

「はい、そうなのですが」

彼に案内され後ろについていくギンガ。辺りにはトラックから放り出た荷物が転がり落ちている。中身は爆発物などない食料品や日常品といったものだった。

「これを・・」

「これは・・」

目に写ったのはガジェットだった。

「それにこれは・・生体ポット！？」

みた様子だとまだ新しい。

それにガジェットがこれを襲撃したならレリックが近くに？

ギンガｓｉｄｅＥｎｄ

スカリエッティ・カオスｓｉｄｅ

『追跡していたドローン？型全六機が破壊されています』

ギンガがガジェットを目撃した同じころスカリエッティにもそれは伝わっていたのだ

「ほー。破戒したのは局の魔導師か、それとも当たりを引いたか」

『確定はできませんが恐らく後者ではないかと』

「素晴らしい。さっそく追跡をかけるとしよう。君にもお願いできるかい？」

頼んでいるのはもちろんカオスだ

「まぁやってもいいが“俺たち”もそろそろ自分の仕事をしたい。今回は外れさせてもらう。もちろん、緊急な状態に陥ったら援護はする」

「そうか・・なら」

彼はあるところに通信を開いた

「聞こえるかい？優しいルーテシア。レリック絡みだ。少し手伝ってくれるかい？」

彼はルーテシアと交渉をし始めた。

カオスはその場から立ち去ろうとするとノーヴェがやってきた

「兄貴はいくの？」

「ああ。その様子だとお前もいきたそうだな」

「うん。自分の目で確かめたくて」

「そうか。しかし、この前の戦闘でお前のデバイスは調整し直しているから今回は諦めろ。どうせ、あいつらもそう言う」

「・・・わかった」

ノーヴェは悔しいのか残念そうな顔をして立ち去った。

―まぁ気持ちはわからなくはないが

彼も彼女の心情は察していた。だが、今回の任務はノーヴェには向いていない。

「さてと。俺らもいくか」

「は～い♪」

「久しぶりに戦えるのがこうも嬉しいとは」

闇の四騎将もまた動き出そうとしていた。

スカリエッティ・カオスｓｉｄｅＥｎｄ

第６４話　高町なのはの休日　前篇（後書き）

『フィリイヴな時間』

フィ「前話では都合とかいわれたけど今回は出たわよ」

イヴ「それにしても全然休日要素がまったくないね」

仁「んまぁそうなんだけどさぁ・・タイトル思いつかなくて。
とあとぶっちゃけていうと中編と後篇で麻衣のある信実が明かされます！」

「「なん・・・だと・・」」

仁「というわけでまた次回で～」

第６５話　高町なのはの休日　中篇（前書き）

もうなのは休日じゃねー

第６５話　高町なのはの休日　中篇

なのは・麻衣ｓｉｄｅ

二人は先ほどナンパされた場所から少し離れたところのベンチに座っていた。

―やっぱり、こうしてみると神野さんって綺麗だよね

あまり彼女をちゃんとみたことがなかったので改めてみていると見惚れるほど綺麗だった。

「・・・どうしたの？」

「い、いえ。なんでも。それより神野さん」

「・・・麻衣でいい」

「え？」

「・・・だから、名前、麻衣で言い」

どうやら今日の麻衣は積極的だ

「そ、それじゃあ麻衣さん」

「・・なに？」

「私たちを守るのが使命ってどういう意味ですか？」

そう私を助けた時に『・・あなたを・・あなたたちを守るのが・・私の使命』と言っていた。

「・・それはその・・・」

麻衣は言えなかった。つい言ってしまった自分を今さらながら責めていた。

そう、これは私があの人に頼まれた、私だから任された約束、使命。

麻衣の言葉の意味。

それは１０年も前に遡ることになる

◆◆◆◆

１０年前

それはまだレイがいなくなる前のこと。彼は自分を選んだ神であるフィリーヤに呼び出され神の世界へ訪れていた。

「フィリーヤ、俺は急いでるんだ。要件を速く言ってくれ」

「そう焦らないの。用があるのは私じゃなくて―」

「！」

レイはフィリーヤを抱きかかえ後ろに飛んだ

「あら、大胆」

「それはどっちの意味でだ？」

レイがいきなりフィリーヤを抱きかかえたのかそれともいきなり斬りかかってきた彼女のことか

「というわけで用があるのは彼女よ」

彼女よっていきなり俺に斬りかかってきたあの子がか？

「しかし、見ない顔だな。新顔か？」

「まぁあなたは普段こっちこないからだけど今回は私もよ。アレスの空席にアストレアに決まったの」

「うへ、アストレアの代行者かよ・・」

「で、彼女の名前は神野麻衣（かんのまい）」

日本人？

「違う！」

「「！？」」

フィリーヤが彼女の名前を言った途端麻衣は激怒しった

「おい、人の名前間違えるとかお前最低だぞ」

「え、違うの？」

「私の名前は神野麻衣（じんのまい）！」

「！」

「え、それってでも・・」

―・・・神乃・・・神野・・・なるほど。やっぱり

「ねぇ、レイどういうこと？」

「そうだなぁ。簡単に言えばその子は俺の孫だ」

「へー孫ね・・・って！ちょっとそれどういうことよ！？私の知らないうちにどっかの女に孕んだのよ！」

「ええ、やめい！恥ずかしい！」

そんな危ない発現をするなよ女神が！

「孫なんかじゃない！この一族の裏切り者め！」

「一族って？」

「一族というか神乃家のだな。一つ聞くが君は何代目だ？」

「・・・13代目だ」

一代をだいたい１００年でいけばそんぐらいか

「にしても若いな」

「そんなことはどうでもいい！私はお前を―」

「殺すか？まぁお前たちがそう思うのも仕方ないんだよな・・きっと」

「ねぇ、話が見えないんだけど」

第三者的な位置にいるフィリーヤにはまったく話がついていけなかった。

なんていうか二人だけの世界？みたいな

「話せば長くなるが・・・始まりはきっと俺の親父、神乃家３代目神乃天山。自称天ちゃん」

―なにそれ

「まず、親父は放浪癖というかそんなんで家を出ていったんだ。龍馬みたいな感じで世界は広いじゃけんみたいな？親父は当時というか神乃家は将軍を守る武士として有名で代々その将軍に使える剣豪だった。けど、親父は自称最強で当時相手になる人間がいなくてだから家を飛び出した」

「つまり、家を放り出して自分の野望に忠実だったと」

「まぁそんな感じ。親父には弟がいたらしくてつまり弟に神乃家を

任したわけ」

「うわー無責任・・」

「と簡単に説明したがその子がなんで俺を恨んでるかなんだよ」

―そうよね。それだけじゃレイを恨んでる理由には少し足りないわ

「教えてくれるか？」

「教えてやる。３代目がいなくなったことで天山の弟地天が４代目となった。けど、ある日地天はあることに気付いた。神乃家の家宝である刀と書物を持ち出したことに」

「それってそんなに大事な物なの？」

「家宝ってぐらいだからな」

有名な家ほど家宝はかなり価値がある。
それを盗んだも同然

「神乃家の使命を捨てた時点で天山は３代目ではなく裏切り者。あなたはああ言ってたけど実際はそんな優しいものじゃなかった。神乃家は強すぎるがためそれを世間に広まることを恐れていた。だから、常に将軍の影として存在し続けた。それを放棄した天山は神乃家だけではなく将軍をも敵に回した。当時の戦力で言えば神乃家、その分家と将軍の兵を合わせてたった一人に１万もの軍を派遣した。しかし、結果は惨敗」

「まぁ自称最強って名乗ってたぐらいだからな」

「それにより神乃家は将軍の信頼をなくした。だから、地天は自らの腕を斬り落とした」

―さすが戦乱の時代。やることがすげー

それは流石に口に出して言えなかった。

「それから神乃家は神野家と名を変えた。神野家はそれからも将軍の元で使えそして、今もどこかで生きているであろう裏切り者の子孫を殺すことを使命としてきた」

―なるほど

「つまり復讐ね。で、天山の“息子”である俺を殺してその積年の恨みを晴らそうと」

「そうだ！・・・って息子！？」

「そ。息子」

「う、嘘だ！そんなことありえない！」

麻衣が混乱するのも無理はないだろう。

彼のことを知らないのであれば

「本当よ。彼、不老不死だから」

彼の代わりにフィリーヤが言ってくれた

「だから、君の宿願である天山の子孫ではなくその息子が目の前にいるんだ。どうだ?嬉しいか?」

―また挑発して・・

「・・・そんなことはどうでもいい!刀を抜け!お前もヤツの息子なら教わっているだろう!」

―こいつ人の話を聞いてたか?不老不死だぞ。不老不死

「仕方ない。ＺＥＲＯ、宝物庫?００と０１を」

『了解』

すると彼の手元に刀と古びた書物が現れた。

「これが、親父が持ち出した刀と書物だ。ほれ、書物はやるよ」

と彼はもういらないかのように放り投げた

「その本。どんなことが書いてあるか知ってるか?」

「・・・伝承では神乃流の奥義が記されていると」

「まぁ合ってると言えば合ってるな。開いてみてみろ」

彼は嫌々本をめくった。今にも破れそうでとても古い。

めくるとそこに記されているのは日本語ではなかった。当時の文字でもなかった。

「それは確かに奥義書だが実は魔術書なんだよ」

「どういうこと」

「初代神乃家の妻は日本人ではなく遠い異国の女だったらしい。あくまでだっただ。確証はない。俺の推測はその女が魔術師だったんじゃないかと仮説をたてた。それから生まれた子供にはまぁ2代目だな。その子には魔術師の血が入ってるわけで当然魔力も備わって生まれてきた。神乃家の奥義は他の流派とは異なる。それが最強の由縁でもあった。きっと初代当主にも少なからず魔力があったんだろうな。神乃家の奥義は剣術と氣、そして魔力を混合して繰り出す三位一体の技。だから、その書物が初代当主の女が記した物なら説明がつく」

「じゃあ結局これは私たちには読めないものだったの?」

「そういうことになる。ちなみに中身は半分奥義書ぽいものが書かれた物とその妻の日記だ」

魔術書と表現したのは魔術師がかいたものだからだ。
確かに奥義らしいものが書いてあるが自分がやったわけでもないものだし奥義と呼べるものでない

「だから、神乃家に普通にある書物が神乃流のすべてだ」

「・・・そう、ならこんなものどうでもいい。私はもう神乃じゃない。神野家当主神野麻衣」

「あっそ」

「それにその刀が家宝だった刀なんでしょう？」

「ああ。ちなみにお前これがどういう風にみえる？」

「？普通の刀だ」

ほーそれなりの実力はあるってことだ。伊達に当主じゃないってか。

「いいだろう。なら、勝負といこうじゃないか」

彼は刀を腰に挿し構える。麻衣もまた構えた。

「神野家１３代目当主神野麻衣、いきます」

「一ついいことを教えてやろう。俺は親父より強いぞ？」

「・・・・」

「つまんないな。まぁいい。そうだな、名乗るなら・・神乃家３代目当主神乃天山の息子にして神乃家最後の当主レイル・アンヴァルト・Ｙ・神乃参る」

神乃家と神野家の因縁の対決が今は始まろうとしていた。

第６６話　高町なのはの休日　後篇（前書き）

夏休みだからこうして連続投稿もできるんだお

第６６話　高町なのはの休日　後篇

「・・神乃家３代目当主神乃天山の息子にして神乃家最後の当主レイル・アンヴァルト・Ｙ・神乃参る」

自分も名を名乗りフィリーヤが二人の中間にたち腕を振り上げ、振り下ろした

「はじめ！」

キィン！

開始直後二人は互いに刀を抜きぶつかり合う音が響き渡る

フィリーヤも二人の剣捌きと言えばいいのだろうか。恐らく常人には認識できない速度で斬りあっている。

―どうやら麻衣の方が攻撃的ね。レイは防戦一方

「ほー中々やる」

「ッ！」

レイはまだ余裕だった。

軽々と彼女の攻撃を受け止め、かわす。

「神野流地走り」

「ならこちらも」

麻衣は刃を地面（本当はないがどうやらフィリーヤが用意したそうです）にそれを振り上げるように振るう。地面を削り上げながらレイに迫るがレイも同じことをしていた。
レイが繰り出した地走りによって消滅する。

「お前もわかってると思うが同じ流派の者同士が戦う時、勝敗は技量や経験によって左右される。技の対処法もわかってるからな」

「そんなの言われなくても！」

「始まってるようだな」

「アストレア！あなた知ってたわね？」

観戦していたフィリーヤの隣にアストレアが現れた

「当然だ」

「けど、どうして麻衣を代行者に？」

「その言葉、お前にそっくり返す」

「うっ」

そのことに関してはフィリーヤはなにも言えなかった

「言えるとしたら私は彼女の強さに惚れた。彼女の素性ももちろん

知っている。だから、彼女は歴代の当主の中で上位に入るだろう」

「ふーん。でも、レイには勝てないわ」

「ふん、あいつなど知ったことか。我々に喧嘩を売ってきた愚か者だ」

アストレアかつてレイがこの世界で神に行った過ちを許したわけではない。

「あっそ。あら、二人ともケリをつけるみたいよ」

同じ技。同じ戦い方をする者同士ではこうなるのが当たり前だった。
麻衣は少し息を切らしていたがレイはまだ余裕だった

「そろそろケリをつけようじゃないか」

「―！神野流奥義・・」

先に仕掛けたのは麻衣だった。
彼女を中心に魔力のオーラが現れた。氣としても受け止められたが表現的に魔力のが正しい。

「レイも言ってたけどやっぱり氣と魔力の混合（ハイブリット）みたいね」

「麻衣自身もそれが魔力ではなく氣だと思ってらしいがな」

「ふ～ん」

「蜃気楼！」

するとレイは桜の花びらに包まれた。
あたり一面ピンクの世界だ。

「蜃気楼ね・・・それなりの幻術じゃないか」

神乃流の特性は魔力を持っているためその技がまるで魔法みたいな技になってしまうのだ。この蜃気楼のように無意識のうちに幻術を作りだしてしまっている。

「これで終わりだ！」

すると四方八方から無数の刀がレイに向けて振りかかる
当然技を知っていたレイだが彼は動かない。

―数えるだけで２００いやもっと多いな

ぱっと見で彼は刀の数を数えていた。

―で、どこまでが本物でどこからが幻術かな？

彼は障壁を張り振りかかる刀を防いだ。
次々と振りかかる刀だがすべてが防がれていく。
しかし、途中からすり抜けていくものもあった。
そして、攻撃は止み幻術も消えた

「そんな・・・」

「上出来だと褒めてやろう。前半はよかったな。ほとんどが実物と同じくらいの質量を持っていたが後半からは幻影になっていたな。神乃流奥義が一つ『蜃気楼』これは幻術で相手を閉じ込め無数の幻術の刃で混乱させその隙に一撃で仕留めるという技だがこれを極めると今のように幻術だった刃が本物と同じ質量をもったものになりそれで敵を串刺し、切り刻むことができる奥義。集団戦でも個人戦でも有効な技だ」

「はぁはぁ・・」

「しかし、お前は氣の使い方はいいが魔力の使い方がなってない。だから、氣を無駄に消費するからもうバテてるんだ。だから、見せてやろう・・・本当の『蜃気楼』を」

すると景色が変わった。麻衣は自分がどこにいるかわからなかった。ただあるのは桜並木。

―これが蜃気楼?私のとはまったく違う

「神乃流奥義『蜃気楼』」

彼の言葉が聞こえた。すると風が吹き桜が飛び散る。最初は緩やかにしかしだんだん早く突風に吹かれたように速くなる。そして、自分のとは比にならない無数の刃が現れた。

「ありえない・・・こんな数」

「これが真の『蜃気楼』だ・・・・さて、これで終わりだ」

刃が麻衣の方に向き直る。
そして、一斉に刃が落ちてくる

―こんなにも・・こんなにも差が。申し訳ございません。神野家の宿願は果たせませんでした。

麻衣はこの時を願って死んでいった先代に向けて言葉を放った

・・・・

しかし、彼女の身体刃に貫かれることはなかった

「・・・あれ」

ポン

「痛」

気づけば蜃気楼は消えており鞘に納めた刀で麻衣の頭を叩いた

「俺の勝ちだ」

「待ってください！こんなの・・」

「復讐の原因である息子が言うのもなんだが復讐なんて止めろ。そんな理由で刀を振るうな。いつか身を滅ぼすぞ。復讐の先になんてなにもないんだから」

ポツ　ポツ

「なら・・私はどうしらいいのですか。復讐を止めろと言われてもこれしかもう私にはない・・」

彼女は泣きながら言った

「・・お前、友達いないだろう?」

コクリ

彼女は無言で頷いた

「私は・・・そのために友達を捨ててしまったから・・」

―この子はただ家の所為で自分の人生を狂わされたのか。人ごとじゃないが・・

本当に親父は色々とやってくれたみたいだな

「じゃあ、俺がお前の友達一号になってやる」

「・・え?」

「言い方を変えれば孫だがまぁいいだろう。どうだ、俺が友達一号じゃいやか?」

フルフル

横に顔を振るう

「じゃあ、今日から俺とお前は友達だ。だから、もう泣くな。な、

麻衣」

―いつぶりだろう。私の名前を呼んでくれたの

いつしか自分は一人だった。隣には誰もいない

けど、目の前にいる、復讐すべき人は私の名前を呼んでくれた。友達になってくれると言ってくれた。

そう思うと涙が止まらなかった

「う、うぅうご先祖様～！」

麻衣は泣きじゃくれた。

「おいおい・・・まったく。この歳で孫を持つとはな」

娘もいるのにさらにちゃんと血縁関係のある孫までできてしまった

それから彼女が泣きやむまでレイは優しく抱いていた

そして、レイと一緒に麻衣は地上世界に戻ってきた

「麻衣、実はお前に頼みがある」

「なんですかご先祖様♪」

たった数時間でこうも人が変わるのは初めて見た気がした

「俺は、もしかしたら帰って来れないことになるかもしれないから。

だから、俺の代わりにこの子たちを守ってやってほしい」

差し出されたなのはたちのデータ

「で、でも私どうやったら・・・」

そう、麻衣はこの時から人みしりだった

「とりあえず、そうだな。俺の娘たちと友達になるといい。それからそう言うことになった時用に手はずは整えておく」

「うぅう・・わかりました」

「それと、そんなお前にこれを読んでおけ」

それは『レイ先生の人との接し方　友達編』

「これを呼んでおけばばっちりだから」

「はい！」

「じゃあ、頼んだぞ」

◆◆◆◆

それから彼は本当にいなくなった。

彼の言う通り娘である星音たちと友達になってそれとあとご先祖様の直属の部下の二人とも友達になった。

私は、あの人との約束、使命を果たすため今回の六課に入隊した。

星音たちの協力もあって三提督のおじいちゃんたちとの協力を得られた。

そして、なんとか六課に入隊したのはいいけど友達が中々できなかったけど今でそれなりにできた。

「で、どうしてなんですか？」

と思いだしていたらすっかりぼーとしてた

急いで言い訳を考える

「・・え・・えっとね。私が一番の年長者だから。私からみればみんなまだ子供だから。だから私が皆を守るの」

「・・まぁそういうことにしておきます」

「・・うん・・」

―改めて考えると私って守られてばっかかも。子供の時は当然親から守られてたしなによりあの人にも守られていた。大人になった今では自分が今度は守る側だと思ってた。けど、こうしてこの人に私は守られてる。やっぱりまだ子供なのかな？

「・・・麻衣さん、もう帰りません？」

「・・そうだね・・ここにはいい人はいなさそうだ」

なのはと麻衣は街から離れた。

道中、エリオとキャロの通信が入り結局休暇は終わってしまった。

なのは・麻衣ｓｉｄｅＥｎｄ

第６６話　高町なのはの休日　後篇（後書き）

『この時間はイヴで送ります』

イヴ「こんにちわ。皆の母イヴだよ。今日は連続投稿してさらにフィリーヤさんは本編に出たのは今日は私が独占」

仁「まぁそれぐらいはな」

イヴ「でも全然休日要素がなかったね。麻衣ちゃんとレイのことについてだし」

仁「んまぁ他で出すと思ったけどここがちょうどいいかなって」

イヴ「ふ～ん。で、あたしの出番いつ？」

仁「かなり先でございます」

イヴ「ボン太くん。やっちゃって」

「ふ・ふもっふー！」

仁「いやーやめて散弾銃はやめてー！」

イヴ「次回はとても期待というか楽しみな展開な予感なのでお楽しみに～」

技&用語説明（前書き）

今回ものすごく簡単で手抜きです

技&用語説明

技紹介

神乃流（神野流）『地走り』　モデルはるろうにの土竜閃。剣を地面に立てそのまま突きあげるような感じ。頑張ればシグナムでも会得できる。
威力はＡ＋（基本）レイや麻衣が使用するとＡＡ～Ｓまでは上がる

神乃流奥義『蜃気楼』　モデルブリーチの千本桜
技を発動すると一種の幻術に閉じ込め敵が混乱したら無数の幻術の刃でさらに窮地に追い込みさらに自らの刀で止めを刺す。
しかし、それが蜃気楼の第一歩でありその次が重要になってくる。蜃気楼の極意とは幻術までは同じだが幻術の刃から違ってくる。極めれば幻術は実体をもち本物と変わらない質量を持つ。串刺しにするも切り刻むのもよし。
使用者によって幻術の風景は変わる。使用者の心理描写に影響されるという。

威力は奥義は基本的Ｓ以上

用語説明

神乃家
地球の歴史で言えば平安時代から存在していたとされている。（当時は遣唐使が廃止されたがそれまでに日本に来ていれば初代当主の妻が異国の女だと言う説明がつく）
代々将軍の影として存在し将軍の敵を排除してきた。表だって活動

していないため世に広まることはなかった最強の流派である。かの飛天御剣流を凌駕したとも言われている。
しかし、神乃家は3代目で終わり4代目以降神野家としてそれからも将軍の影として存在し続けた。元々神乃家（初代当主から）には魔力が備わっていたが当人たちはそれを魔力も氣だと勘違いしてしまっていた。それに気付いたのが3代目当主でありそれを調べる目的もあって家を飛び出した

神乃流
最強の剣術と謳われていた。その強さの由縁は剣術と氣、そして魔力の三位一体からきている。
技の根源は自然と生まれ代を重ねるごとに増えていくものだったらしいが3代目でそれは止まった。4代目以降は固定されている。
魔力のほとんどが奥義に使用されることが多い。
神乃流の特徴として奥義以下の普通の技は同じだが奥義からは使用者によってところどころ違う。
例としては麻衣は蜃気楼を使った時いきなり桜が舞っていたがレイの場合最初は桜並木から少しずつ舞い始めた。

神乃流の極意は常に自然と共に歩むこと。さすれば新たな道（技）を開くであろう

ちょこっと紹介

神乃天山
自称最強を謳っていた剣豪。日本には相手がいないため世界に飛び出した。また、神乃家の家宝である書物の謎、つまり異国の物では

ないかという直感的なもので感じ取りそれを調べるために家を飛び出した。
世界に出てからレイの母親と遭遇、戦闘、一目惚れ、結婚、という兄貴にも勝る速さで人生をエンジョイした。レイやその妹ルリにも神乃流を叩きこんだ。（ルリは少し）だから、事実上レイが４代目ということになるがレイが最後の当主という響が気にいっている。
また、さすがレイの父親なのかネーミングセンスがない。無駄にカッコイイ漢字で名前をつける。例えば狼に雨流風（うるふ）とかつけたり無駄にカッコイイ漢字を使う。

そして、最強の称号は息子に引き継がれた。というか父という壁を簡単に越されてしまった。（父涙目）

第６７話　覚醒（前書き）

展開が急で少し視点が少し難しいかもしれません
けど、今回一番肝心なのが最後らへんなのでいいかな

第67話　覚醒

エリオとキャロの通信を得て六課も迅速に動き出した。
現場に近かったスバル、ティアナ、それになのは、麻衣も現地で合流。ヘリで合流してきたシャマルとフェイトも到着した。
少女とレリックを保護をした矢先にガジェットが地下と空からやってきた。
はやての指揮の下ガジェットの迎撃と少女とレリックの保護を指示する。
そして、ギンガも今回の件で同じ物にいきあたるということで合同捜査を行うことになった。

しかし、動いていたのは六課だけではない

ルーテシアｓｉｄｅ

ルーテシアは現場に近い場所にいた。そこから街を眺めていた

『ルーテシア』

「兄さん」

カオスから通信が入った。恐らく仕事の内容のことだろう。

『ゼストとアギトは今別行動か？』

「うん」

『そうか。お前にはガリューがいるから心配はないと思うがもし危なくなったら妹たちか俺がかけつける。』

「ありがとう」

『それじゃあ内容についてだ。レリックは空と地下に1ずつある。空は俺と妹たちがやる。地下の方はお前たちにやってもらうがいいか？』

「うん、任せて」

『そうか。それじゃあ頼む』

「・・じゃあいこうかガリュー」

彼はなにも言わないが彼女の言いたいことはわかっていた。

そして、ルーテシアはどこかへ転移した。

ルーテシアｓｉｄｅＥｎｄ

それから六課の前線メンバーは順調にガジェットを破壊していた。

しかし、戦況は一転する

スカリエッティから送り出された一人はクアットロ。彼女のＩＳ『シルバーカーテン』により幻術のガジェットが出現したためだった。

それを少し離れた空でみていた人影が三

「エビフライ女はこういうことには役にたつ」

「そうだよね～。でも、全部潰せばいいことだし」

「で、どうする」

―向こうはどうせ幻術だと見破れてないんだ。となると砲撃型でいっきに潰しにくるだろうから

「部隊長自らがお出ましかな？」

「となれば」

「私の出番のようだな」

ハーデスが名乗り出た

「そういうことだ。俺は一度ルーテシアと合流するサレナは市街地の方にいけ」

「了解～」

そして、彼の思惑通り部隊長自らが出陣した。

「それじゃあいくでー。フレースヴェルグ！」

超長距離射程を誇る炸裂魔法弾。

これにより一気に幻術と実機のガジェットを殲滅したかのように思えた。

ただ、レーダーには一つの機影が残っていた

「撃ち漏らし？」

『八神部隊長！高エネルギー反応感知！避けてください！』

「！？」

キュ～ピン！

刹那はやてがいるすご横で彼女の以上の長距離砲撃が通った

「そんなこんな馬鹿げてるとし言いようがあらへん」

これでは自分と同等もしくはそれ以上の長距離砲撃

『アンノ―ン接近！』

「距離を詰められたら・・・」

はやての魔導師ランクは総合ＳＳ。総合なだけに接近戦は弱い。

はやてみたいな後方支援型に接近戦はキツイ

『アンノ―ン目視できる距離に入ります！』

「く！」

すると彼女に目に写ったのは黒き翼を纏い強硬な鎧をまとった者だった

はやては直感した。こいつが

「お前がハーデス？」

「御名当。お前が八神はやてだな」

「だとしたら？」

「・・私を楽しませてみろ！」

すると彼女の脚元にベルカ式の円陣が現れた

―ベルカ式！？それにあの羽

『主、いえ、はやて・・・』

大切な家族だったもう一人のリインフォースを思い出してしまった。

―違う！あの子は、銀はそんなことせん！

「いくで！」

地下水道

スバルたちはギンガと合流し広い場所に出た。そこでレリックを確保したがルーテシアとガリューに妨害されていた

スバルたちはルーテシアをただの少女と思ってるらしく必死に説得をするが無理に決まっている。

ちょうどその時カオスも到着した

「ねぇ、君本当にそれ危ないんだよ!?」

「・・・・」

「―お前ら馬鹿ぁ?」

「「「「!」」」」

空洞のためどこから声が響いているかわからない
そして、コツコツと足音も近づいてきた

「お前らに攻撃してるんだから立派に敵だろ?」

「・・・その声カオス!」

ギンガが叫ぶ

「ん?この声・・ギンガか。いやーお前がいるとは思わなかったなぁ」

「兄さんどうして?」

「ちょっと心配でみにきた」

彼はルーテシアに近寄った。彼の手には一応エンフィールドが握られていた

「カオス・・あなたも逮捕します」

「そう言われ捕まるとでも？」

―ルールー

―アギト？

―3秒後に目を瞑れ

―でも、兄さんが

―いいから！

3、2，1

『スターレンゲホイル！』

「「「「「！！！！！」」」」」

突如轟音と閃光が空洞を包み込んだ

「くっ！」

立ち去ろうとするルーテシアにティアナは魔力弾を放った

ＢＡＮ！

しかし、カオスに撃ち落とされた

「あぶねぇあぶねぇ、仮面をつけてなかったらどうにかなっていた」

なんという仮面万能説

「ちっ！」

「ちっ。じゃねぇよアギト。お前別行動してたんじゃないのか？」

「うるせぇ！それよりルールー。一人で動くからこうなるんだぞ？」

現れたのは小さな少女。リインと同じくらいの身長だ。

「アギト・・ありがとう」

「ま、まぁこのあたし、烈火の剣精アギトさまが来たからにはもう大丈夫！」

と後ろで小さな花火が上がる

「花火師アギトの間違いじゃねぇか？」

カオスは容赦ない突っ込みをした

「うるせぇ！だいたいなんでお前がここにいるんだよ！？」

「別に。ある事をする前にちょっとした準備運動でもと。けど、俺はこれで戻るから」

「はや！」

「それじゃあ、ギンガ。また後でな～」

「ま、待ちなさい！」

しかし、彼は一瞬のうちに消えた

「あいつ、なにがしたかったんだ？」

「さぁ？」

ルーテシアにもそれはわからなかった

結局そのあと地上に出たら捕まってしまった。

ピンチになったら助けるにくるといったカオスはというと

―助けにこないじゃん！

―・・・

はやてｓｉｄｅ

「ほらほら、どうした！」

「ちっ！」

はやては緩まることのないハーデスの攻撃を避けていた。

「どうしてこんなことするん！」

「お前らのそういう平和ボケした考えを叩き直してあげるてんじゃないか」

「なにを！」

「お前らはいつも思想論しか語ってないってことだよ。結局夢物語、夢幻だ」

「そんなことない！」

「そういう反応をするのが特に甘い！現にこうして犯罪者である私がここにいる。ちっとも平和じゃない」

「・・・・」

「平和と言う言葉を簡単に使わないことだ」

「それでも、私たちは自分のやるべきことをやる！私たちの役目はレリックの確保。お前の相手をしてる暇はないんや！」

「だったら私を倒してみろ。八神はやて！」

はやてｓｉｄｅＥｎｄ

クアットロ・ディエチｓｉｄｅ

「さて、そろそろ撃っちゃいましょうか」

「本当にいいの？」

「ええ、ドクターが言うにはアレが本当に『聖王の器』なら死なな

いそうよ」

「ふ～ん」

相槌を売ってディエチは自分の得物イノ―メスカノンを構える

クアットロ・ディエチｓｉｄｅＥｎｄ

『高エネルギー反応推定Ｓランク！』

「なのは！」

「うん！」

ロングアーチから報告と同時にその魔力反応を感知していたフェイトとなのは。

全速力でヘリに合流するが

「―悪いけどあなたはいかせないよ」

「きゃ！」

「フェイトちゃん！」

突如フェイトは落とされた

下の市街地に粉塵が舞う

―なのは止まらないで！

―・・・うん！

今はヘリを守る。それが優先事項
なのはは単独でヘリに向かう

廃墟に叩き落とされたフェイトはその何者かと対峙していた

「あーあーいっちゃたよ？」

「問題ない。それに・・・あなたがサレナ？」

「そう、サレナは略してるから本当の名はブラック・サレナ。それにしてもあなた・・・」

「？」

「似てるわね～あの時の子に」

「今・・・なんて言った？」

「え、だから前にあなたと似てる子。みたことあるのよ」

「！」

それはもう一人の私。大切な姉妹。大事な姉さんのことだった。
そして、目の前にいるこいつはそれを知っている

「けど、そんなことよりヘリ落ちるわよ？」

「！！」

「発射」

膨大なエネルギーがヘリ目がけて飛んでいく
誰もがその光景をみた。
しかし、その隙に捕えたルーテシアとアギトそしてレリックを奪われた

「ん～最高。で、ちゃんと落とした？」

「黙って。今確認中」

映像だけならまだ煙が晴れてない。でも、おかしい。落としたならヘリの残骸が落ちると思うんだけど・・

「ごめん」

「え？」

「邪魔された」

「こちらスターズ１ヘリの防衛成功！」

『やった！１なのはさんとレイジングハートのエクシードモード間にあった！』

まさに間一髪というところだろう。

「一さすがそいつを所有してることだけはあるな」

「！」

なのはは顔を上に向けた。そこにはカオスが・・・浮いていた

―嘘・・魔力は感じられない。じゃあどうして浮いてるの？

それが氣、武空術、浮遊術によるものだとはいうことは知る由もなかった。

『え、いつのまに！？』

そうレーダーは捉えていなかった。もちろん映像でそんな姿はさっきまでなかった

「なのは！？」

「おっとあなたの相手は私だよ～」

そういうとサレナは自分の得物を構えた

「・・なぜ・・」

「？」

「なんでそれをお前が持っている？」

サレナが持っているのは今は行方不明の姉の愛機ハルバードだった。

「これ？あー、前の持ち主から貰ったんだ」

「・・貰った・・？」

「そう。確か８年とか１０年ぐらい前かな？ある辺境な場所で。その女がいきなり私に襲いかかったんだよ。ちょうど目の前で死にそうな男を殺そうとしたのが私だと勘違いして。それで私もウザいから・・・殺しちゃった♪」

「・・え」

今なんていった・・ころ・した？

「聞こえなかった？だから、殺したの。まぁ簡単には殺さなかったけどね。痛いほど痛めつけて血反吐させたり・・・それでね？その男の辺りにぶっ飛ばしてあげたんだ。優しいでしょ。そしたらあの・・金髪だったかな？その女はね、男の名前を叫んでたよ。「レイー、レイー」って。ははっ、気持ち悪。

それで、これを餞別っていうか私を襲った罰として貰ったの。機械のくせにウザいから初期化して私用に使いやすくしたんだ♪」

「・・・」

「あーそれともう二人いたっけ。けど、男が死んだ途端そいつも消えたよ？なんでかな？

あと一人は簡単に殺してあげたんだ。どう？私って優しいでしょ」

「貴様ァアアア！」

フェイトの堪忍袋の緒が切れた。それ以前にフェイトの理性が壊れかけていた

同じころなのははフェイトの状況をしることなくカオスと対峙していた

「あなたが・・カオス？」

「・・しかし」

「？」

「お前はまだそいつを使いこなせていないようだな」

まるでレイジングハートを知っているいやまるで作った本人のような言い草だった

「あなたはレイジングハートを知ってるの？」

「はは」

彼は笑っていた

『マスター危険です！離れてください！』

「レイジングハートでも一！」

彼は目の前に現れた。
いつのまに。いったいどうやって？

「解除コード入力××××・・・封印解除」

すると変なデータが具現化したものがレイジングハートに送り込まれた

『・・・も・・ど・・リリース・・・・・ザ』

「レイジングハート！？」

待機形態に戻ったレイジングハート。
さらにカオスは距離をとって離れている

『封・・・印・・解・・除・・カクニン・・センメツ・・Ｇｅｎｏｃｉｄｅシステム・・キドウ』

「え、なに？何なの！？」

すると魔法陣が展開した。しかし、桜色をした彼女の魔法陣は黒く赤くに塗りつぶされた。そこから黒いオーラが現れる

『・・・・魔王生誕』

「きゃぁーーーーーーーー！！！」

突如なのは黒い光の柱に包まれた

その光景をみたカオスは笑みを浮かべていた

「ははっは！これがあの実験機？どうみても完成してるじゃないか。あいつは相当いい適合者をみつけたようだな！くくっく、いいねぇぞくぞくする」

そしてだんだんと光は集束していく

「さぁ姿を現せ！人を超え、しかし人として生誕する―」

そして、柱は消えた
なのはは無事だ。しかし、違う。
エクシードモードの状態だが違う。レイジングハートは胸に固定されている。
そして、なによりジャケットの白い部分が黒く、青いところが血のように赤くなった。彼女のトレードマークであるリボンも黒く赤い模様が描かれている。ちらっとみれる彼女の瞳は赤い。

その姿をみて彼は叫ぶ

「そして、すべてを破壊する『魔王』よ！」

第67話　覚醒（後書き）

『フィリイヴな時間』

ぶるぶるぶる

仁「つ、ついに降臨されてしまった」

イヴ「わおー」

フィ「わー」

仁「この作品当初から企画していたがついにご降臨された」

イヴ「次回が怖い」

フィ「恐ろしいやー」

第６８話　魔王降臨

麻衣ｓｉｄｅ

まだ、なのはがカオスと遭遇する少し前。
麻衣は一人市街地を詮索していた。エリオからの通信のあと麻衣は一人で行動していた。

「いやな感じがする」

そうなのはに言い別行動をとっていた。しかし、カオス、サレナ、ハーデスは別々に動いていた。これが麻衣が感じたものでない。いや、これなのかもしれないがきっとそうじゃない。麻衣はそう思っていた。
そして―なのはとカオスが接触しなのはに異変が起きた頃

「なに・・この負の波動・・」

波動を辿り目に写ったのは何かが起きたなのはの姿だった

「アレは・・・・」

白いジャケットが特徴だった彼女のジャケットは黒く赤く染まっていた。

「一体なにが・・・」

麻衣ｓｉｄｅＥｎｄ

なのは（？）・カオスｓｉｄｅ

「くくっく。覚醒だ。誕生だ」

彼は異変が起きたなのはをみて嬉しそうに笑っていた

「魔王の・・降臨だ」

―ディエチ、クアットロ死にたくなかったらすぐアジトに戻れ

―兄さん？

―なんであなたの命令を聞かなきゃいけないのかしら？

―じゃあ、死ね。どうなってもしらんからな

慈悲。それとも忠告とでも言うのだろうか。

ディエチはどちらかと言えば彼を嫌っていないので彼の言うことを聞いてその場を去る

クアットロも嫌々撤退していく

「・・・いらないわ」

「？」

やっとなのはが口を開いた

「気にいらないわ。私より上にいるのが。それ以前にこの私を見下しているのが。だから・・・」

その喋り方は普段のなのはの喋り方ではなった。まるで別人だ

「跪きなさい」

「！」

彼女は静かに喋り腕を下に振り下ろした。その瞬間

ＤＯＮＮ～！

恐らくそれはディバインバスターだろう。大きさで言うならビルを丸ごと包み込むぐらいの大きさだろうか。それを何の動作いや腕を振り下ろしただけでやって見せた。

カオスの真下にあったビルは跡方も無く消しとんだ。

爆煙が晴れるとビルの後にカオスはいた。しかし、普段の彼ではない。まるで重装備の鎧を纏っていた

「あら、生きてたの」

「・・・危ねぇ。これを発動してなかったら危なかった」

赤い鎧を纏った彼だがところどころ傷が付いている

無傷とはいかなかった。

彼は鎧を解除した。

「やってくれるじゃねぇか。流石、あいつが創った兵器だけはあるな」

彼はエンフィールドを構え撃った

ＢＡＮ　ＢＡＮ　ＢＡＮ　ＢＡＮ　ＢＡＮ　ＢＡＮ

装弾数６発をすべて撃った。

質量兵器は魔法と違ってみえない。魔導師が放つ技はすべてわかるが質量兵器は撃ったら真っすぐとシンプルだが普通は見えない。だから、魔導師がそれを防ぐには障壁を張るしかない。しかし、彼は対魔導師対策をしており銃弾には対魔力弾になっており魔導師の障壁ぐらいなら破壊できる。

しかし―

キィン　キィン・・・

いとも簡単にしかも自分からかなり前ではじいた

「おいおい。ヒビも入らないのかよ。なら・・・」

彼は愛用のナイフを取り出し飛んだ

銃撃戦ではラチが明かないそれ以前に無謀だと判断した

「レイジングハート私の剣（つるぎ）を」

『はい、マスター』

なのは（？）の目の前に具現化されたのは刀だった。それはかつて彼との特訓の時初めてＴＰＣシステムで具現化したものだった。

「ッ！」

「―」

キィン～！

金属と金属がぶつかり合う。
得物で言えばなのはの刀の方が軍杯が上がる。しかし、カオスはもう一本懐から取り出し容赦なくなのは目がけて刺した

「ふ」

「な・・」

刃の先に小さな魔法陣が展開し受け止められたのだ
さらに、カオスのナイフは両刃だが中心が空いている。これは相手の武器を受け止める際に使うのだがなのははそれを逆手にとり刀でどうやってやったのかそれを折った。

バキィン！

「非常識すぎるな。まったく」

彼は一旦距離を置いた

「そろそろ出し惜しみは止めたら？」

「あぁあ？」

「さっきの防いだアレとか。それにもっと隠してるでしょう?」

「それに応えると思ってるのか?」

「私の言うことが聞けないのかしら?気にいらないわ。さっさと死になさい」

彼女は再び刀を構える。
そんな時下から彼女の名を呼ぶ声が聞こえた

「・・・なのはちゃん!」

「アレは確か・・・」

カオスにも心当たりがあった。
そう確か神野麻衣だったな。

―一体どうなってるの。いつもの彼女じゃない

そう思った刹那それを目の当たりにする

「気安く私の名を呼ぶなんてあなた何様のつもりなのかしら?」」

「・・・え?」

「まずは―跪きなさい」

放ったのは黒い魔力弾
麻衣は鞘から刀を抜きそれを弾く

「・・・なにを・・するの！？」

「あら、意外とやるわね」

「・・なのはちゃん・・一体どうしたの！？」

「だから、私の名前を気安く呼ばないでくれないかしら？そんなに呼びたいなら・・そうね―様付けか女王様（クイーン）と呼ぶことを許してあげるわ」

「・・あなたは・・なのはちゃんじゃない・・」

―なんか俺のけ者にされてね？

途中から完全に空気になっていたカオス

「何を言ってるのかしら？私は正真正銘高町なのは・・ッ・・・」

「「？」」

彼は頭が痛み出しのか頭を押さえている

―そろそろ時間切れね

なのは（？）・カオスｓｉｄｅＥｎｄ

フェイト・サレナｓｉｄｅ

ＤＯＮ　ＤＯＮ

一方市街地でフェイトとサレナの激しい接近戦が行われていた。

「言え！アリシアはどこにいる！？」

「も～シツコイな～。だから、殺したって言ってるじゃん」

フェイトは完全に切れていた。しかし、サレナそんな彼女を簡単にまるで子供と遊ぶかのように相手をしている

「受け続けるの暇だし・・・デュアルハーケン」

『ヤー』

アックス形態から二本の小さな斧に変形するハルバード。

「いくよ！」

今度はサレナから仕掛けた。

斧と言うのは振る時大きく隙ができる。それはバルディッシュも例外ではない。どんな攻撃にも隙というのはある。しかし、デュアルハーケンは小ぶりで振りは小さく相手の懐に入っても十分活用できる。

「ッ！」

フェイトはとっさに一太刀はバルディッシュで受けるがもう一太刀は受け切れなかった

「ああ！」

フェイトは一瞬死んだと思った。しかし、受けたのはダメージだけ。

「・・どうして」

相手は何にもの人を殺している犯罪者だ。だから、例え彼女のデバイスでもリミッター―を外しているものかと思っていた

「なんで、死んでないかって？教えてあげる。それはカオスが殺すすぐとつまんないからだって。まぁ少しは歯ごたえがあるすぐ死んでもらうと困るんだけど」

「そんなこと・・」

フェイトはバルディッシュを杖代わりにして立ち上がる

「はは。そうこなくちゃ」

―サレナ、帰るぞ

と、これからが楽しいのにという所でカオスが邪魔された

―え、もう～？

―用は済んだ。それに愛用のナイフを・・折られた

あーあ、イジケちゃった。

カオスはアレで自分の物を壊されると凄く脆いし怒りやすいんだよね

―うん、わかった。それでハーデスは？

―もう、伝えてある

―そう。じゃあ、あとで合流ね

―ああ

「というわけで残念だけどじゃあね～」

「ま、待て！―くっ・・」

彼女の一撃が今になってさらに響いてきた。
彼女はどんどん遠ざかっていく

「・・・アリシア・・・リニス・・兄さん・・」

フェイト・サレナｓｉｄｅＥｎｄ

はやて・ハーデスｓｉｄｅ

サレナが離脱した同じころ。ハーデスも攻撃を止めていた

「？」

「残念だ。今日はここまでのようだ」

「待って！あんたたちのトライデントの目的はなんや！？」

「目的？私たちは自らの欲を埋めるために行動しているだけだ。あの変態のもとでレリック集めを手伝っているのはカオスがそうしているだけだ。だから、私たちはこうしてお前たちと戦ってその乾きを埋めている」

欲？それってアレかいな。人を殺すのがそう言いたいんか！？

「次に合う時は本気を出して戦ってもらいな。それは戦う相手に失礼だ。それではさらばだ」

自分の翼で身体を覆いハーデスは消えた。

あの翼。前にみたことのある翼と似ていた。けど

「ちゃう。あんなの銀とちゃう」

はやて・ハーデスｓｉｄｅＥｎｄ

なのは・麻衣・カオスｓｉｄｅ

「うっう・・・時間切れか・・」

突如、なのはは苦しみ出した

―・・・“本人”の意識が戻ろうとしているのか・・まぁいい。今回はこれが見れただけでもよしとしよう

ザ！

カオスは一瞬のうちにしてその場から消え去った

「！いつのまに・・・・『あぁあああああ！』！」

いきなり叫び出したなのははは落下した。

その時姿はまるで汚れた服を水につけて落としてるかのように黒いオーラが落ちていった。

「！」

麻衣はすぐ彼女を抱きとめた

「うっ・・」

「・・・なのはちゃん？」

「麻衣・・さん？アレ、私・・」

―記憶がない？

「大丈夫？」

「う、うん。一応飛べる」

「・・・」

―いつもの彼女だ

そういつものなのはである。喋り方も雰囲気も。

―じゃあ、アレは一体“誰”？

間違いない。断言できる。アレは別人だ。

けど、どうやったらああなるのか。確かに断言できる。けど、それを例えば皆に説明できる確定要素がなかった。

しかし、今はそれを確かめる術がなかったのであった。

今回の事件は六課が少女レリックを保護という六課の勝利に思えた。

しかし・・・後味が残るものとなった。

なのは・麻衣・カオスｓｉｄｅＥｎｄ

聖王医療院ｓｉｄｅ

なのはは任務のあとあの少女をみに来ていた。麻衣には休んだ方がいいと言われたがあの少女が気になったのだ。

道中フェイトと念話で先のこと話していた

―そう、サレナがハルバードを・・・

―うん。アリシアも・・リニスも・・銀も・・兄さんも

その声は今にも泣きそうな声をしていた

けど、なのははそうでもなかった。

―フェイトちゃん、サレナの言ったことは嘘だよ

―どうしてそんなことが言えるの？

―星音が言ってたんだ。あの人が死んでいるなら私たちは生きていないって

―あ・・

フェイトもそれを聞いて気づいた。

―だからね？アリシアちゃんも皆もきっとどこかで生きてる

―うん

―それじゃあまたあとでね

―うん

なのはは念話を切りちょうど売店の近くを通りかかった。
すると小さなうさぎ？のぬいぐるみを買った。

少女がいる病室へはいり彼女の隣に買ってきたぬいぐるみを置いた

「・・パパ・・ママ・・どこ・・」

「―大丈夫ここにいるよ」

なのははそっと苦しんでいる少女に語りかけるのだった

聖王医療院ｓｉｄｅＥｎｄ

カオスｓｉｄｅ

「あ～あ～」

アジトに戻ってきたカオスはとても鬱になっていた

「サレナ姉さま。兄上はどうしたのですか？」

傍にいたチンクはサレナに聞いた

「ん？なんでも愛用のナイフを一本を折られたとかで」

「！それは・・・相当ショックですね」

「ええ」

「あ～貴重なヤツだったのに」

「兄貴も大変だな」

セインもあとからやってきてカオスの状態に少し驚いていた

「あら、セイン。レリックは外れだったんだって？」

「う～そうなんだよ～」

「まぁそう落ち込むなセイン」

「チンク姉～」

と泣き抱きつく

「よしよし」

そんな姿をサレナは笑っていた

ガチャリ　ガチャリ

と鎧の音が聞こえた

「カオス」

「あ～？」

「あいつから暗号文が届いた。とりあえず潜入に成功したそうだ」

「・・そうか。無理せずじっくり念入りに行動しろと伝えてくれ」

「わかった」

カオスはそういうとその場を去っていた

「なんのこと？」

「さぁ？」

サレナは知っているのか知らないのかそれすらチンク達にはわからなかった。

カオスｓｉｄｅＥｎｄ

第６８話　魔王降臨（後書き）

仁「なんかこの魔王だしたのまずかったのかな？」

フィ「なんでまた」

仁「いや前話を投稿したらなんか少しお気に入り登録が減ったからさぁ。なんか減る＝ああ、もういいやてきな感じがしてやなんだよね。俺性格上なのかどうでもいい数字は気にしないのこういうことに関しては気にしちゃうんだよね」

フィ「あなたも大変ね」

仁「まぁ出したからには続けるけどね」

フィ「それと今後の展開を私から。原作で言うその日の機動六課からはかなり略したものになります。とくにゆりかご戦も一部文章のみで略すかもしれません。
作者はオリジナル展開を考えているためどうしても原作の話を略してしまうそうなので。では、今回はこの辺で」

第６９話　彼が遺したもの（前書き）

タイトルの意味はまぁ六課の設立にあたってのこととか魔王のこととかを含めてですね

遺したした時点で死亡説確定ｗｗｗ

第６９話　彼が遺したもの

聖王教会ｓｉｄｅ

先の事件から数日後。
地上本部からの査察が六課に来ることとなった。それに関してフェイトがはやてに六課設立の本当の理由を聞くためなのはとともに聖王教会へとやってきた
そこには騎士カリムと（本当に久しぶりの）クロノも立ち会っていた

「で、六課の本当の設立について。まずは表向きは」

六課の設立の表向きは古代遺産の保護と少数精鋭による実験部隊だ。後継人はカリムやクロノ、リンディと平たく言えば聖王教会と本局が後ろについているということになる。さらに、非公式で三提督も許可してくれている

「そして、なによりこの六課の設立の一番の後継人がこの人だ」

「「レイくん（兄さん）」」

「そう、時空管理局総帥レイル・アンヴァルト・Ｙ・神乃総帥だ」

「でもどうして？」

そう、彼は今いないのだ

「それは私から説明する。一言で言えばこの六課の設立の辞令は総帥が命令した。ということになってるんや。データ上では」

「でも、それって偽造だよね？」

フェイトが恐る恐る聞いた

「そうなんやけど・・レイ兄がこういうことを見越してそういう物揃えておったんや。だから、最終的に表向きは総帥自らが命令して設立した。ということになってるんや」

「でも、それは表向きでしょ？」

「ここからは私が説明します。三提督まで六課の設立の後ろ盾をしているのには私の能力『プロフェーティン・シュリフテン』が関係しています」

彼女は軽く自分の能力を話した。最短で半年、最高で数年先の未来を予言できるということ。

しかし、古代ベルカ文字で記されているため解読は困難で実用性も低かった。

だが、数年前からある予言が記された。

簡単に言えば

「ロストロギアをきっかけに始まる時空管理局地上本部の壊滅と管理局システムの崩壊」

「それって！」

「ああ。特に管理局システムの崩壊はまずありえないんだ」

クロノがありえないと言うのはそれは管理局に勤めている人間なら誰もが知っていることだった。
理由は本局も地上本部に使用されている管理局システム。それを発案し組み上げたのがレイだからである。例えウィザード級のハッカーでも絶対突破できないシステムになっておりこれを破壊できるとしたら恐らく本人だけだ。

「そして、もうひとつ」

「もうひとつ？」

「ええ。ところどころなんだけど・・・」

選ばれし※※は我ら人類を※※※世界を※※へと導くであろう
だが、同じ力を持った者がそれを阻むであろう
それは※王か　それと※使　女※なのか
それはまだわからない

「とこどころ大事な部分が抜けてますね」

「面目ないと思ってるんだけど、これが限界。それに選ばれし・・というのが一番気になるの」

「選ばれし・・勇者とか？」

「なのは、その発想はどうかと思うよ」

「え、そうかな？」

「けど、それに近いのは確かね」

カーテンを開け緊張がほどけた

「そういえば、あの六課が保護した少女はどうなってるの？はやて」

カリムが気になって聞いた

「そうやね。二人ともどんな感じなん？来る途中も色々あったみたやけど」

「まぁそのいかないでって離なかったけどなんとかスバルたちが」

「それにリンにとても懐いてて」

「リン？」

「あ、なのはにはまだ言ってなかったね。黒猫で多分迷いこんだんだけど飼い主が見つかるまで預かってるの」

首についていたプレートにＲＩＮとあったのでリンとなずけたらしいヴィヴィオもすっかりリンになつき逆もしかりで。

「はは、それになのはママにフェイトママかいな」

「もう笑わないでよう！」

「ごめんごめん」

―でも・・・今の姿をみたらレイ兄なんて思うやろ?

聖王教会ｓｉｄｅＥｎｄ

なのはｓｉｄｅ

聖王教会から戻ったなのはシャマルのところで訪れていた。理由は簡単だ。先日のアレのことだ。

しかし、検査では異常がなくまだレイジングハートにも異常はなかった。ただ、データの中に『Ｇｅｎｏｃｉｄｅシステム』と新たな項目が記されていた

このことについてなのはやフェイト、八神家（ユキナを除く）、シャーリーに実際に目撃した麻衣も集まっていた

「やっぱり、わからないわ。リイン、シャーリーはどう?」

「こっちもお手上げです」

「リインもです」

なんど調べてもシステムについてのデータは出てこない。

原因もわからない

「やっぱり、あの人の聞くのが一番か」

「誰なのはやてちゃん？」

「まぁみればわかるよ。シャーリー」

「はい」

と繋いでいたのかすぐに現れた。通信の相手はエイミィだった

「エイミィさん！」

『皆、久しぶり。じゃあ要件でだけ言うよ？こっちも忙しくて』

「いえ、こっちこそごめんな」

『いいよ。力になれることがあるならね。さて、実はこの『Ｇｅｎｏｃｉｄｅシステム』はね？前にレイジングハートとバルディッシュが大破した時があったでしょ』

エイミィはあえて闇の書事件とは言わなかった。アレはいいことも悪いこともあったためエイミィなりに気を使ったのだろう

『その時にね？本当にたまたま偶然このシステムをみつけたんだ。それに総帥・・レイさんに聞いたの』

「で、なんて？」

『これは一体なんなんですか？私はそう聞いたの。そしたら―』

『ああ、これ。気にすることはない。まだ、当分先のことだろうから』

『私は気になってレイさんに追求したんだ。それがねこのシステム・・・』

エイミィは一瞬躊躇った。けど、すぐに言った

『対殲滅用殺戮システムって言ったんだ』

「「「!!!!!」」」

「対殲滅用殺戮システムなんてそんなモノがなんでデバイスに組み込まれてるんですか!?」

自称デバイスマスターのシャーリーが怒り立ち上がった

『それは・・『エイミィ、それは私から説明します』レイジングハートいいの?』

『いいんです。あなたもそんなに知りませんし、なによりもう隠し通すこともできません』

レイジングハートが宙に浮き皆に説明するため色々とウィンド表示した。

『シャーリー。あなたは私が誰によって創られたか知ってますか?』

「え、うん。時空管理局総帥でしょう?」

『その通りです。私が創られたのはもう何百年も前のことです』

「「「「！」」」」」

シャーリーやリインは驚いた。しかし、他の皆も驚いたが彼が関わっているとなると話は別だった。

『マイスターは私を実験機として創りだしました』

「実験機？なんでなのレイジングハート？」

『マスター、私はマイスターのデバイスＺＥＲＯの完成のため生み出され実験機として稼働してました。ＺＥＲＯは当初マイスターですら性能が不安定で使用するには困難な状態でした。そのため私を創りだしそのデータを元にＺＥＲＯを完成させる。それが私の生まれた理由です。しかし、問題が一つありました。私を使用できる者が存在しなかったのです』

「どうしてや？そんなのレイ兄自らやれば・・」

『マイスターは研究者、技術者でもあり自らを素体にしてまでは至りませんでした。その中で私と適合する者を見つけては実験をしました。基本的なデバイスとしての機能は問題はなく一番の問題がＴＰＣシステムとこのＧｅｎｏｃｉｄｅシステムといったものでした。その時の映像がこれです』

使用者は男だった。レイジングハート（待機形態）をもちＧｅｎｏｃｉｄｅシステムを起動した。

『ぁあああああああああああああああああああああ』

突如悲鳴を上げ死んだ

「酷い・・」

『やっぱ駄目か・・・。やっぱり俺じゃなきゃ駄目かな?』

「兄さん」

彼の姿が映し出される。その姿はまったく変わっていない。いつもの彼だった

『そして、いつしか自らを使って実験をしました。もちろん、マイスターは私を完全に使いこなせていたのでまったく問題はありませんでした』

「レイジングハートよ」

『なんでしょう?』

シグナムが問う。

「レイ殿がそのシステムを起動した姿はあるのか?」

『・・ありますよ。それがこれです』

それはどこか戦争が起きている場所だろうか。
彼の姿は異形だった。背中には悪魔のような翼。服装も魔王らしい姿だった。
その姿で彼は人を殺していた

『シャーリー、あなたはいいましたね？なんでこんなものがデバイスに組み込まれているのかと』

「う、うん」

『この時代ではそれが当然だったからです。今のような平和な世界ではない。常に戦争が起きていました。それにマイスターの敵はあなた方のように犯罪者だけではありませんでした。時には国、魔術国家、宗教、傭兵、殺し屋、はたまた悪魔まで。そのためにこれが必要でした。私は何故このシステムをマイスターが創ったのかは記録していません。ただ、生きるために必要だった。それは確かです』

「だけど、でも、なんでこんな時代になってもそれを残して置くんですか？」

『だから、言ったでしょう。敵を殺すためだと。そもそも、マイスターはデバイスを創っている気なんてなかったんです。兵器として私は生み出された。私だけではなくＺＥＲＯも』

だが、よく考えればデバイスは兵器としても置きかえることができる。これが誰がなんというとも武器なのだから

「レイジングハート一つ聞いていい？レイくんは、これを私にも使わせる気だったの？」

『はい』

「！」

『しかし、子供の時のあなたに使わせる気はありませんでした。もっと身体も心も大きく成長してから教える気でした』

「人を殺すためのシステムを私に？」

『いいえ。確かに私はこのシステムを対殲滅用殺戮システムと言いましたがそれは過去の名称です。今は『魔王形態』とマイスターは呼んでいました。それに、あなたに人殺しをさせる気もありませんでした。これは、このシステムはあなたがもっと誰かを守るために、強くなるためにそして継承者としているために必要な物でしたから』

「つまりどういうことなの？」

こんなものが誰かを守れるの？強くなるためのなの？

それに継承者って

『遠い言い回しで言うならあなたのためでもありマイスター自身のためでもある』

「よくわからないんだけど？」

『いずれわかります』

―マスターあなたは彼に選ばれたのです。だから、あなたは彼と共に歩みそして彼を阻むものになるのです

その後私たちは解散した。

私は一人思い悩んでいた。

私はこの力をどうしたらいいのか。誰かを守れる？現に私は麻衣さんに攻撃したらしい。強くなれる。確かにこれなら強くなれるかもしれない。

けど・・・

レイくんはいつか私にこれを使わせる気だった。それはなんのため。私のため？それとも自分のため？

「ねぇ、レイジングハート」

『なんですか？』

「私ね、いつからか・・あの人みたいになりたかったんだ」

『知ってます』

「うん。あの人みたいになりたくて追いつきたくて・・・彼の後ろじゃなくてけど、前でもなくて私は隣に立ちたかった。今でもそう思ってるよ？でも、今の私じゃ絶対あの人の隣には立てないと思うの。だから、もし、これを私が使いこなせたら私―隣に立てるかな？」

『使いこなす・・そうですね。私を完全に使いこなすことができればそうなれるでしょうね。けど、そんなこと前に誓ったじゃないですか。共に強くなろうと』

「うん、そうだね」

そう、意識がなかった私だけどわかっていることが一つある。

アレ

「だから、負けないよ。私自身にも」

そうきっとあれは・・・

『その意気です。その専門を呼びましたから』

「え、専門？誰？」

ていうかこのシステムって他に積んでるデバイスがあったの？」

『はい。星音です』

「え、えーーー！！」

なのはｓｉｄｅＥｎｄ

第６９話　彼が遺したもの（後書き）

『フィリイヴな時間」

フィ「なんかクロなんとかっていうキャラいなかった？」

イヴ「気のせい気のせい。そんなどうでもいいキャラなんていなかったよ」

仁「そうそう」

ｋ「ひど（ｒｙ」

仁「なんか誰か喋った？」

「「いや？」」

仁「さて、次回は再びマテリアルズ登場。なんと新キャラ？じゃないけどそんなものも出るかもよ？」

第７０話　マテリアルズ再び（前書き）

全体でもう８０部を超え話でいうならもう７０話。長かったな・・・

第７０話　マテリアルズ再び

？？？ｓｉｄｅ

「あなたは誰？」

「私は、あなた。あなたの闇。あなたが作りだした闇が私」

「違う、私じゃない」

「いいえ、違わないわ。あの日、彼を失ってから私は本格的に生まれ始めた。大切な人がいなくて寂しい私。自分以外の女と一緒にいて嫉妬する私。彼を独占したいという私」

「違う！私はそんなこと思ってない！」

「私は彼と出会ったばかり。けど、親友であるフェイトたちはずっと前から知っている。私の知らない彼を知っている。羨ましい。私だって私にしか知らない彼を知っている。けど、彼女達に比べればほんの一部。

日が経つにつれて彼に付き纏う女は増えていった。そして、彼は私から離れ家族をつくった。酷い。もう、私はどうでもいいの？あーなんで私をもっとみてくれないの？」

「レイくんがそうしたのは・・・そうしたのは・・・」

「あなたが邪魔だったのよ」

「！」

「あなたがいると邪魔だったのよ。だって彼はあなたよりフェイトたちのことを気に入ってるもの」

「嘘・・嘘」

「嘘じゃないわ。プレシア事件の時、彼はフェイトを誰よりも気にかけていた。あなたよりも」

「それは・・・フェイトちゃんを」

「闇の書事件では密かにはやてや騎士たちとあったり・・・彼女達を心配していたわ。あなたがリンカーコアをとられたときよりフェイトの時の方がとても心配して、焦っていたわ」

「・・・そんなの」

「それからだってそうじゃない。銀やアリシア、リニスたちと一緒に暮らしてたけど、滅多に彼はあなたに会いに来なかった。マテリアルたちもそう。なんであれアレはもう一人の私よね。顔もそっくり。身体もあなたと同じ。けど、彼は彼女を可愛がっていた。１対１の勝負であなた、負けたわよね?そのときだって彼、あなたの怪我とか心配した?ただ、敗因したことしか言ってなかった?」

お前の敗因はその迷いだらけの心だ。だから、星音に負けた。

目の前にその時の映像が流れた

「・・でも、私が大怪我したときは」

「そうね、心配してたわ。けど、彼、魔導師をやめろって言ったのにあなたは反対した。彼は止む負えなくそれを受け入れた」

「そんなはずない・・」

「でも、彼はこうも言ったわ。もう一度こういうことになったら今度こそ魔導師を辞めてもらうからなって」

「だから、私を心配して」

「心配しているのにあなたは魔導師を続けたいって言ってたじゃない。それって矛盾よ?」

「違う・・違うの・・」

「そして、彼はまだ完治してないあなたを放っておいてどこかへ往った。約束をしたのに結局彼は約束を破った。その後のことよく覚えてるわよね?彼が残した手紙をすずかが持っていた」

「そう・・持ってた」

「自分に直接ではなくてすずかを経由して。ということは彼、すずかともいい関係だったってことじゃない?魔導師でもないのに」

「だって、アレはそうなったときのためにすずかちゃんに・・・」

「そう、確かにそうね。でも、彼女。私だから頼んだって、て。そ

れって信頼してるって証拠でしょう。あなたより」

「私より、すずかちゃんを信頼してた・・・・？」

「彼女と比べればあなたの方がさきなのに、自分より信頼していた。」

「私を信頼していなかった・・・・もう、私はどうでもよかったの？」

「そう、彼はもうあなたのことなんてどうでもいいのよ。ただ、あなたはこれを使えただけの女の子だった」

レイジングハートをみせる闇

「それ、だけ・・・」

「そう、ただの実験体。自分のためだけにあなたは利用されていたのよ・・・」

「利用・・・ただの実験体」

なのはの身体がだんだん黒く染まっていく

「けど、私なら彼を振り向かせられるわ」

そっと手を伸ばす闇

「・・・ほんと？」

「ええ、大好きな彼をあなたのものにできる。いいえ、私たちのものにできるのよ。彼を愛しているのは、一番大好きなのは―私たち」

「彼を一番思ってるのは・・・私・・」

闇に飲み込まれれていくなのは

「そう、だから私にすべてを任せなさい。大好きな彼を振り向かせてあげる」

「・・・・」

なのはは完全に呑みこまれた。いや、一つになった

「眠りなさい、私。起きた時には彼がいるわ。けど、あなたは私だから起きることはないかもね。ふふっふふふ、ははははっはは！」

それがあの時私に起きたことだった
まるで夢のように語りかけてくる彼女（私）
私にはそれが本当に私の願いを叶えてくれるものだと思っていた。

なのはｓｉｄｅＥｎｄ

ミッドチルダ
首都高湾岸線（仮）

今は夜。もう少しで夜が明ける時間になってきた。
ここ首都高ではこの時間前から走り屋が走っていた。そこで、自分の力を出し切り誰よりも最速を目指していた。首都高で一番の走り

屋と名高い湾岸なんとかが今日も走りこんでいた。

「今日も俺は世界を縮めた」

「流石兄貴！」

と自称兄貴と子分が乗っていた。

「兄貴なにか後ろから来ますで」

ミラーをみると確かになにかきている。しかし、車にしては小さい。バイクか？

パカラ　パカラ

「あ、兄貴変な音が聞こえませんか」

「ああ、確かに・・・」

「ヒヒ～ン！」

「「馬ァ！？」」

なんと馬が彼の横を通り過ぎていった。

ていうかなんで馬が・・・

「あ、兄貴今度は車が来ます。しかもこいつら・・・パッシングしてやがる！」

パッシング。ここでは勝負の合図。

いいだろうやってろう

「いくぜ！」

クラッチを踏みギアを切り替えそしてアクセルを一杯に踏む

走り屋の夜はまだ終らない

機動六課

早朝訓練終了後

「は～終わったぁ」

「そうね。第二段階も馴染んできたわね」

「はい。僕もです」

「私やスバルさんはあまりかわりませんけどね」

と今日のことを話がら宿舎に戻っていく４人その時だ

「ヒヒ～ン！」

「「「「馬ァ！？」」」」

いきなり馬が飛んできた?
近くの広い原っぱのとこに着地した。しかも、誰か乗っている

「アレ・・・?」

後姿はどこか誰かに似ているなぁと思ったキャロ

ブオン　ブオーン!

「こ、今度は何!?」

ティアが驚いて音の方へ向いた。すると1台の車が猛スピードで六課の駐車場に侵入。恐らくハンドルを切りサイドブレーキでもしてターンをしてなんていうか凄い技で駐車した。

「凄〜い」

「ていうか誰でしょうね?」

「・・・まったく、あなたはまともに運転ができないのですか?」

「いいだろう、別に。それにしてもここの走り屋は遅いな。まだ、秋名のが速い奴がいたぞ」

と現れたのは星音と闇樹。二人は私服ではなくいつもの仕事用の服でスーツを着ている。(二人ともスカートではなくズボン)。

「「「「えーーー!!!」」」」

スバルたちは驚いて大声をあげた
しかし、二人はそんなこと気にせず

「おーい雷華」

「あ、やっと来た。遅いよ、二人とも」

馬から降りる雷華。彼女は私服に近いがミニスカートをはいている。
ちゃんとスパッツも。

「お前が速すぎるだけだ。どこの世界に車より速い馬がいるんだ」

「ここにいるよ？」

「まぁそれは置いといて、いきますよ」

三人と一匹は訓練場に向かった。

―ね、ねぇアレってアレって！？

―落ちつきなさいスバル！

―で、でもフェイトさんがもう一人ぃぃ

―エリオをも！前にデータみたじゃない。原因はわからないけど三人と同一人物なだけ？なのよ！

―でも、なのはさんに似ている方はアグスタでみかけましたよ？

キャロは実際に星音とフェイトが話し合っているところを目撃したことがある

一応三人はご本人たちと区別はつく。星音は髪をおろし伊達眼鏡をかけているし雷華は髪の色も違うし昔通りツインテールだし闇樹はまず目つきが違うのでちゃんと区別がつく

―でも、アレが総帥の娘なんだから驚きだよね

―そう・・なんですよね。総帥って一体どんな人なんでしょうか？

「おーいなのはちゃん～」

なのはが後処理をしてると後ろから声をかけられ一瞬フェイトちゃんかと思ったけど私のことちゃんづけで呼ばないからなんとなくだけどわかった

「あ、雷華ちゃん。それに星音ちゃんも闇樹ちゃんも。皆やっぱり来たんだ」

星音だけとレイジングハートは言ってたけどどうせ三人とも来ると思っていた

「ええ、レイジングハートに呼ばれて」

『ご苦労様です』

「これから朝食なんだけど三人はどう？」

「そうだな。まだ朝食はまだだったな」

「ええ」

「わーいご飯」

「にゃはは。それじゃ案内するよ」

なのはに連れられ六課の食堂へと向かう一向

食堂ｓｉｄｅ

ざわ・・・ざわ・・

今日の食堂はいつもと違う。どちらかと言うと騒がしい

ざわ・・・ざわ・・

理由はもちろんこの三人だった。

星音、雷華、闇樹の三人。

一緒に相席しているのはなのは、フェイト、はやて。

どうみてもそっくりさんとしか思えない６人

しかし、彼女達はそんな回りを気にしないで食事を進める

「にしても、来るのはわかってたけどこんな速く来ることはなかっ

たんとちゃう？」

来るなら時間で言えば１０時ぐらいがちょうどいいとはやては思っていた。いつくるという連絡は受けていなかったからそれぐらいかと思っていた。

「それがね。闇樹が朝方じゃないと走り屋がいないからって言うんだよ？」

「走り屋？まぁいるって話は聞いてるけど」

「それで、闇樹が片っ端から抜いていったんです・・・・パク」

喋りながら口に運ぶ星音

「指定速度をぶっちぎって」

「闇樹、一応あんたも公務員なんやからちゃんと守らんといかんよ？」

「ふん、我の知ったことではない」

―にしても闇樹が走りこんでるとは思わんかったな

「ところで・・・あの馬なに？」

なのはがとても気になって仕方ないことを聞いてみた

いや、だって気になるじゃん

「ああ、風か。前にどっかの世界に調査にいったときに見つけたんだ。雷華が気にいったらしくてそれから」

「なんで、風？」

「風雲なんとかって書いてあったから風ちゃん」

雷華が3杯目のご飯をたらいあげていった。
朝からこんなに食うのかこいつは

「ところで、私からもあなたに聞きたいのですが・・・」

「ん？」

「その子誰の子ですか？」

「「「ブ！」」」

なのはとフェイトはいざ知らずついついはやても吹いてしまった

「なのはママ、フェイトママが二人いる・・・」

「「「ママ・・・ぷ」」」

三人もそれを聞いて笑いをこらえていた

「この子の名前はヴィヴィオや。つい最近六課で保護したんよ」

「そうですか。初めましてヴィヴィオ。私が本当のママです」

「初めましてヴィヴィオ。私が本当のママだよ」

「初めましてだ、ヴィヴィオ。私が本当のママだ」

「え?え?え?」

「もう、三人とも!」

「「「ぷ・・くくっく」」」

どうみてもからかっているだけだった。

というか三人は面白ネタを見つけたようなので物凄く弄っている

「しかし・・その猫は?」

「あ、リンのこと?ヴィヴィオを守ってくれる頼もしい猫だよ?」

それは勝手なことをしないよう見張っているということでは?

「ちょっとまた猫?」

「「「?あ、スノー」」」

ざわ・・・ざわ・・

さらに回りが騒ぎだした

同じ猫で翼が生えているぬいぐるみの猫がしゃべっているのだ。
まぁ手触りとか本物なんだけど

「スノーも来てたんだ」

「モチのロンよ。私は三人のボディーガードだからね」

ぬいぐるみなのに？

「にゃ～」

「なによ、アンタ」

「にゃ～」

「ちょ、ちょっと・・」

「にゃ～」

「止めてよ～」

とリンに追いかけまわされるスノー

スノーを放って置いて食事を済ませた彼女たちだった

食堂ｓｉｄｅＥｎｄ

第７０話　マテリアルズ再び（後書き）

『フィリイブな時間ですよー』

フィ「風ちゃんってわかる人には一発よね」

イヴ「なに、また動物？」

仁「なんか出しちゃったんだよ」

フィ「それにしても・・闇樹が走り屋になってるじゃない」

仁「半分ネタ。半分遊び」

イヴ「暇ね～」

仁「ネタがないんだよ。それにｓｔｓもう疲れた。ｖｉｖｉｄやりたい」

フィ「黙らっしゃい！そんなわがままが通ると思ってるの！？」

仁「ちっ」

イヴ「まぁそのヴィヴィオもそんなに出番ないけどね」

フィ「ほんとスバルたちも空気よね」

仁「・・・・・」

第７１話　特訓・対話・迫りくる予言（前書き）

なのはが闇に呑まれた。とそういう展開を期待していた方すみません。

なんていうかこう・・・こんなにあっさりしてていいの？みたいな・・・

それではどうぞ・・

第７１話　特訓・対話・迫りくる予言

訓練場ｓｉｄｅ

朝食のあと再び訓練場へ。なのはも星音たちもすでにジャケットを着ている。
三人ともなのはたちはあまり変わらない。少し違うと言えば変身した星音はメガネをかけていない。ジャケットはアグレッシブモード。雷華はフェイトと同じだけどコートを羽織っていない闇樹は上に羽織っていたジャケットがないだけ。

「さて、魔王形態の説明はレイジングハートからあったと思います」

「うん」

「これを使いこなすにはまず・・己を受け入れなければなりません。自分の心の闇を」

「・・・・」

「心当たりがあるようですね」

「うん」

あの時。あの時の出来事がきっとそう。アレが私の心の闇

「レイジングハートはＴＰＣシステムを積んでいます。これは自分

のイメージしたものが具現化するものです。魔王形態は使用者の心理描写、状態に影響されます。普段の自分とは逆、つまり心の闇が出てくるのです」

自分で言うのもなんだけどアレってどうみても嫉妬、だよね。

「では、私がなってみましょう。ちょっとあなたとは違うのですが見ていてください」

「勇者形態（ブレイブモード）」

星音が呟くとなのはと違い白いオーラに包まれた。するとなんといえばいいのだろうか。その姿は普段のなのはの姿なのだが輝いている白をしている。
目もなのはの場合は赤いが星音は白い

「私の場合はあなたと“順番”が逆なためこうなります。私も使用するとあなたみたいにそうですね。白い私が語りかけてきますがそれをまず認める。それが第1段階」

「第1段階？」

「ええ、まず起動して対話を行ってください。多分すんなりといきますから」

「う、うん」

すんなりっていくけど最初は失敗？してるんだけどな

「じゃあ・・」

星音の合図で他の二人の位置につくなのはを中心に三角形に。そして、結界を張る
暴走したときようのためだ。

「じゃあ、やってください」

「・・・魔王形態」

『Ｓｅｔｕｐ』

「来ます！」

あの時と同じようになのはは黒いオーラに包まれる。
そして、魔王が姿を現す

「・・・・あなた？」

「・・・できたのかな？」

今度はなのはだった。三人は結界を解いた

「一応どんなことがありました？」

「えーと・・」

なのはの精神世界ｓｉｄｅ

『あら、また来たの？』

私と同じ姿をしている彼女。けど、目は赤く黒い。

「・・・あなたが私の心の闇？」

『ええ、そうよ、私。で、あなたから見てたけど大変ね』

「なにが？」

『力を使いこなすのが？』

彼女自身もわかっていなかった。
その力が自分なのだからそうなのだろう

『まぁ前回はあなたがピンチだったから私が出ただけだけど』

「ピンチってそんな状況でもなかったよ」

『あなたはわかっていなだけよ。まぁいずれわかるわ』

「？」

同じ私なのに私が知らないでなんで彼女が知っているのだろうと疑問に思った。

『これからは安心しなさい。私は滅多にでないから』

「・・・本当？」

『最初に言ったでしょう?私もあなたと同じなの』

『・・・信用していいんだよね?』

『しつこいのは嫌いよ』

そして、私の意識は現実へと戻った

なのはの精神世界ｓｉｄｅＥｎｄ

「なるほど。とりあえず第1段階終了ですね。第二段階は自分の力を行使できるかです」

実際に星音が演じてみせた。最初はその白い魔力、オーラで色々やって見せる。これが第1段階。

次に見せたのは、姿はそのままだが魔力がいつもの彼女に戻った。

これが第2段階

「第1段階はなんていうのでしょうか。あなたでいうなら心の闇の力が魔力となって漏れているんです。だから、あなた本来の魔力は使われていないんです。第2段階は自分の魔力を行使できればＯＫです。これは少し難しいかもしれません」

実際にやってみると確かに難しい。彼女の言うことが確かなら今自分には2種類の魔力が存在しているということになる。それを切り替えろと言っているのと同じだった。

「感覚的には黒い方が使いやすいですが本来のあなたの魔力を引き出すのは難しいでしょうね。だから、イメージとしては普段の自分

を思い描けばできるはずです」

―普段の自分・・・・

とりあえず言われた通りイメージしてみた。杖はないから腕をあげ構える形。

「ディバイン・・バスターーーー！」

「「「！」」」

いきなりディバインバスターを放ったなのは。幸い誰も当たってはいないが一言言ってほしいものだ。

ただ、威力はあの時放ったものと同等だった。色も彼女の魔力色だ。

「で、どうだった？」

目を瞑っていたので本人はわかっていない

「ええ。上出来です。あとはその繰り返しです」

「うん！」

それから数時間後なのはは魔王形態をとりあえず使いこなすところまでに至った。

自分の魔力と闇の力。

星音は「流石私です」と褒めていた。

訓練場ｓｉｄｅＥｎｄ

スノーｓｉｄｅ

スノーは珍しくはやてに呼ばれ彼女の部隊長室へと赴いていた。
その場には八神家とフェイトもいる

「で、私になんのようなの？」

なんと奇妙な光景だろうかテーブルに座って喋る猫というのは

「スノーにちょっと聞きたいことがあったんや」

「聞きたいこと？」

「そう。スノーはレイ兄と同じ魔術師やからレイ兄のことよく知ってると思って」

忘れがちだがスノーはこれでも輪廻転生を繰り返して生きている魔術師である。

「まぁそれなりにだけど。けど、それまたどうして？」

「一番の原因はなんでレイ兄があんなものを創ったかやけど」

「でも、理由はレイジングハートから聞いたんでしょう？つまり、あなたたちが聞きたいのはレイ本人の事でしょう？」

「まぁそうなるかな」

「そうね。レイ、私の世界ではアンヴァルトと聞けば最強の魔術師ということぐらいからしら。多分、私と彼同じ世界の出身だと思うけど異世界、まぁこっちとかに来てからも彼の噂はたまに耳にしていたわ。『協会殺し』『破壊者レイ』『悪魔のレイ』『夜明けのレイ』とかまぁ色々と呼ばれてたわね」

「なんていうか色々と呼び名があるね」

「まぁ色々としてきたから」

そう彼は色々してきたのだ。
小さなことから大きなことまで

「前置きはこれくらいにして。多分シグナム達は昔彼にあったこと何回もあったって聞いたから多分わかると思うけど・・あなたたちが思ってるほど彼は善人じゃないわよ」

「「え」」

驚いたのはフェイトとはやてだけだった。シグナム達が驚かないのはそれを知っているからだ

「そりゃあ民間人とか女、子供も容赦なく殺してるわけじゃないけど敵には容赦なく殺し、破壊し盗み自分のために色々とやっていたと聞いているわ。いつからか世界を統一して総帥とかになってたけど。でも彼は自分のためにやっていたと思うわ」

「どうして、そう言えるの？」

「私たちは魔術師であるまえに研究者いえ、魔術師だからこそ自分の研究のためなら手段を選ばない。私だってなんの苦労もなしに輪廻転生を会得したわけじゃないわ。彼もまた自分の研究のためならどんなことでするわ」

「例えばどんなこと？」

「私やレイはしないと思うけど町を丸ごと一つ実験に使う奴だっていたわ」

「「！！」」

「驚くのも無理はないけどそれが魔術師よ。人を利用し利用したら捨てる。そういうもの」

―私・・兄さんのこと全然知らなかった。でも、今それを聞いて私の中の兄さんが嫌いなったりはしない

「逆に聞くけど、シグナム達は昔のレイと今の・・まぁ再会したころは結構違ったんじゃないの？」

シグナム達は互いに顔を合わせた

「まぁ兄ちゃんは変わらない部分もあったけどやっぱり違ってた」

「ああ。彼はあんなに・・なんていうのだろうな」

「人と接してないよね～。まぁ当時は私たちぐらいだったからだと思うけど」

「ええ、そうね。レイさんはあまり人との関わりを持とうとしてなかった」

「で、しょうね。自分が不老不死だから。というのもあると思うけど。今のように笑ったりしてなかったと思うわよ？」

―レイ兄・・・。でも、私はあの時の今の彼しか知らない。彼のことを知りたいと思ったこともある。けど、知らない方がいいのではないかと思ったこともある。

「さて、もうこの話は止めましょう。本当に彼のことが聞きたいのなら帰ってきたら実際に聞けばいい。彼の口から」

「「うん」」

「でも、大丈夫よ。彼はあなたたちを大切に思ってるわ」

そう言い残しスノーはぷかぷかと飛んでいった

本当、彼は今どこにいるのだろう

スノーｓｉｄｅ

夕方

夕方にはなのはは既に魔王形態を使いこなすまでには至った。

魔王形態はデバイスを持たないことがある意味特徴。ほとんどがイメージや手で構えて撃つモノばかり。

―星音からは魔王形態になればＴＰＣシステムが自動的に発動するからそれも使ってみるといいと言われたけど私には難しい。けど、彼女（わたし）ならできる。そう思ってしまった。

だから、少し試したくなった。

―ちょっと意識を集中して・・・・・

「あなた？」

隣にいた星音が声をかけたが返事はない

精神世界ｓｉｄｅ

『あら、なんのようかしら？』

再び会ったもう一人の私。やはり彼女は全体的に黒くそしてなにより赤い目をしている。

「ちょっと聞きたいことが」

『私ならＴＰＣシステムを使えるかって』

「うん」

やっぱり私だから考えていること同じなんだ

『まぁあなたよりは使えると思うわ。でも、私は使わないわ』

「どうして」

『必要ないから。大抵の相手にＴＰＣシステムを使う程の状況にはならない。けど、そうね。役割分担で言うなら私が近接とＴＰＣシステムであなたが中距離・遠距離の戦いじゃないからしら』

「そうなんだ」

『まぁそういう風に分ければね』

「そっか。じゃあ、私もういくから」

なのはそう言うともう一人の自分から姿を消した

『・・・あの子いつのまにそんな器用なことができたのかしら?』

精神世界ｓｉｄｅＥｎｄ

「あなた！」

肩を掴まれたいきなり叫ばれた

「！なに星音ちゃん?」

「あなた、もしかしてまた向こう側に行ってたのですか?」

「う、うん」

「いいですか？それはできるだけやってはいけませんよ？」

「どうして？」

「アレはいつでもあなたを乗っ取ることができるんです。だから・・・」

星音ちゃんは彼女が私の心の闇、私の欲だからそのために私の身体を乗っ取ってしまうかもしれない。
そう言っていたけど私はそうは思わなかった。なにせ私だから

その後
星音ちゃんたちは「もうやることを終えたので」といい帰りました
私は見送るよと言ったけどいいですと言われ玄関で別れた。

駐車場

「で、どうだったのだ？」

「まぁさすがあの人が選んだ方ですかね。普通は闇に呑まれてしまうとあの人は私に言っていましたから」

「でも、なのはちゃん凄いよね～」

「ああ。本当に魔王だったな」

「ふふ、そうですね」

『うわ～ん～みんな～（泣き）』

泣き叫ぶ声が聞こえる。
上を向いたらぬいぐるみが闇樹に泣きついてきた

「スノー！お前どこに」

「うぅう、はやてに呼ばれたあと皆のところにいこうとしたらヴィヴィオと遊ぶことになってリンに追いかけまわされて・・・うわ～ん！」

「「「お前猫だろ（でしょうに）（なのに）」」」

「猫（ぬいぐるみ）でも怖いのよ～！」

実は言うとスノー初めて野生の世界を体験したらしい。
同じ猫に追われるという恐怖感。さらにヴィヴィオの無邪気な子供の乱暴さ。

―恐いよ～

「・・・星音・・」

木の陰からひょこっと現れたのは麻衣だった。

「？・・・麻衣！」

「あ、麻衣だ～」

「お、麻衣」

「麻衣ィ～」

昔少し一緒に暮らして友達になりそしてあの人の孫。

「・・・皆久しぶり」

「それはこっちの台詞です。ちゃんとやっていけてますか？」

「・・うん・・友達もできた」

「そっか。よかったね。麻衣」

「・・うん・・」

久しぶりの再会を喜ぶ彼女達

「・・・麻衣、時が近いです」

「・・？・・あ」

「私たちもそれなりに準備をしてます。それに・・・あの子。ヴィヴィオといいましたか」

「どうだったんだ、スノー？」

「―やっぱり人間じゃないわ。人造魔導師？だっけ。それよ」

私たちの目的はただ単になのはのことだけではない。
むしろヴィヴィオという子が問題だった。

「あの子はなんなの？」

「それを私たちの方で調べています」

「けど、用心した方がいいよ」

「ああ」

「・・・うん」

「それでは私たちはこれで」

星音と闇樹、スノーは車に乗り込み雷華は風に乗った。

「・・・じゃあまた・・」

「じゃあね～」

『ヒヒ～ン！』

そして颯爽と去っていた

「・・安全第一・・」

ギンガｓｉｄｅ

陸士１０８部隊

ギンガは先の事件であの少女たちが戦闘機人であるということが本局技術主任でもあるマリーにより発覚。そのことについて六課とデータを照らし合わせるため六課に赴くことになりギンガは先に外で待っていた。

「・・・・？」

夜なので暗くてわからないが微かに人の姿が見えた。
時間はまだあったので気になっていってみた。たまに迷い込んでしまう子供もいたりしなくはないからだ

「誰かいるの？」

「先日はどうも」

「！」

慣れ親しんだ声に気づき後ろを振り向く
その先には夜と一体化したカオスが現れた。

「カオス！・・・・」

ブリッツキャリバーを構えるギンガ。しかし、彼に敵意はないと悟った

「今夜は一体何の用ですか？」

「・・知りたいんだろ？お前の母親が死んだ戦闘機人事件の真相を」

「―！なんでそれを・・・！」

「それにお前が戦闘機人だとも知っているよ」

「・・・」

自分が戦闘機人だということはスバルもわかっている。それでもあの人は母さんは私たちを自分の娘として受け入れてくれた

「それにお前たちの前に現れた少女たちが戦闘機人だということに気付いたんだろ？」

「あなたの目的は？」

「お前を迎えに来た。お前はこちらにいるべき存在だ」

「黙りなさい！」

「まぁ断るのは想定済みだしな。それならば実力行使でお前を迎えにいくよ」

「どういう意味？」

「ああ、それと一つ」

彼は立ち去る間際足をとめた

「精々頑張るんだな」

「だから一体何を」

ギンガは何一つ彼の意図が掴めなかった。

「また会おう」

完全に彼の気配は消えた。
私は一人その場に残された。

ギンガｓｉｄｅＥｎｄ

第71話　特訓・対話・迫りくる予言（後書き）

『フィリイヴな時間』

フィ「えー今日はゲストでなのはちゃんの闇に来てもらってます」

闇「ちょっとあなた、私に向かってそんな口聞いてただで済むと思ってるのかしら？少し頭冷やした方がいいんじゃない？」

フィ「仮にも私は女神よ！」

闇「私は魔王でもあり女王様よ？これからは女王様（クイーン）かなのは様と呼びなさい。私はクイーンの方がいいけど」

仁「は、女王様。紅茶です」

クイーン「気がきくじゃない」

仁「ありがたきお言葉」

クイーン「素直な子は好きよ。あなたもこれぐらいはしてほしいわね」

フィ「ちょっと作者！？」

仁「貴様、女王様の御膳であるぞ」

フィ「あんた・・あとで覚えておきなさいよ・・」

クイーン「それじゃあ次回もよろしくね」

第７２話　祭りが始まる（前書き）

正直にいえばもう３，４話書き終えてるです。けど、一気に出すのは楽しみが減るっていうかなんていうかそんな感じなんですよ。

さて、今回ですが漫画の１５，５話です。ちょっと新たな展開があるかもです

第７２話　祭りが始まる

新暦００７５年　９月８日

プランＩ－Ａ「ゆりかご」案件の進捗は順調

初期製作機であるわたし（ウーノ）から？４“までの”戦闘機人はすべて私たちの創造主Ｄｒ．ジェイル・スカリエッティが指し示す未来に向かって揺らぐことなく忠実に進行中。

しかし、？５以降の妹たちはＤｒのお客で知人でもあり、戦闘教育係でもあるカオスを慕っている。彼の教育はデータだけしか理解してない彼女達にはとても効果のある教育である。ある意味彼がいなければ彼女達は戦いというものを知らなかっただろう。

そのため彼の存在は必要不可欠だったとも言えなくもない。約８年前から私たち行動を共にしていた闇の四騎将。カオス自身はもっと前からＤｒと知り合いだったらしい。

ガジェットや戦闘機人についても彼がいなければここまではこれなかったとも言える。

だが、最近は妙な行動が多すぎる。

妹たちを許可をとっているとはいえ多様に使い、私たちに内密に単独行動をとっている。

特にタイプゼロの一体を特にとても興味があるようだ。

だが、今となってはどうでもいいだろう。

祭りの日は目前

４日後に控える対抗組織襲撃も準備は万端
最終製作機?７・８・１２も機体・武装ともに調整完了
プランはすべて問題なし
そう問題など
ない

ナンバーズ・カオスｓｉｄｅ

?５からの戦闘機人たちは訓練場に集まり最終製作機である?７セッテ、?８オットー、?１２ディードの最終調整をカオスの指導の下行っていた

「唸れ光渦の嵐ＩＳレイストーム!」

「ＩＳツインブレード!」

オットーとディードの技が炸裂する。
姉たちやカオスもその出来には○をくれていた

「二人とも上出来だ。これなら実戦でも使えるな」

「「ありがとうございます」」

「チンク、お前はどうだ？」

「はい、姉としても上々かと」

「そうか。ならあとは・・・」

あと残ったのはセッテだけだった。

「カオス、私はあなたと模擬戦をしたいのですが」

ナンバーズの中でカオスのことを兄と呼ばないのは？４以下を含めてセッテの５人だった。

「理由を聞こうか」

「あなたとの模擬戦はとてもいい経験になると思ったからです」

―本当に感情のない機械的な考えだな

「いいだろう。相手をしてやる。銃を使うがいいか？」

「構いません」

そういうと二人は模擬戦用の場所へと移動した。

そこは言うなればドームだろう。辺りには無いが壁は頑丈に出てきている。

ちなみに気が散るといやなのでギャラリーは今回断っている

「じゃあ始めようか」

「はい」

互いに距離をとっている二人。初めは少しずつ横に回るように歩く。
最初はゆっくり。そして少しづつ速く。
互いの得物を考えると先に仕掛けたのは―カオスだった

今では馴染みのエンフィールドを構えカオスは容赦なく撃った

ＢＡＮ　ＢＡＮ　ＢＡＮ

キィン　キィン　シュッ

セッテはブーメランブレードで自分への直撃コースはそれで弾きそうでないものは無視する。そう、機械のように無駄な動きがない。

円を描くように動いていた二人だが今度は直線、ぶつかり合うような形で走りだす。

ＢＡＮ　ＢＡＮ　ＢＡＮ

残りの3発を撃つがさすがのカオスでも全弾をセッテに当てることはできなかった。そのうちの2発はセッテに向かったがやはり軌道を読まれているのかブレードで弾かれる。

「ッ！」

そして、セッテの領域。ブレードを構えカオスに容赦なく横一閃に振るうがカオスは前に跳ぶような形でそれを避けその空中に舞って

いる間に弾丸を排出し新たに弾を込める

「「ッ！」」

着地したカオスが振りかえり銃を構えるセッテもそのまま回転をつけブレードを向ける

しかし、二人は一旦動きをとめる。
カオスのエンフィールドがセッテの胴体に銃口を向け、セッテのブレードも彼の腹の所で止まっている

「「・・・・」」

二人は後ろに跳び距離をとる
カオスは銃をしまい愛用のナイフを抜いた

「いくぞ」

「・・・」

前に走りブレードとナイフの斬り合いが始まった。
斬りかかれば避け、受け止める。ただ地味な戦いが繰り広げられている

シュッ　ザ！

セッテは一度後ろに跳びそして加速をつけ距離を詰める。

シュッ　キュィ―ン！

カオスは腕に隠してあるワイヤーナイフを天井に向け上にあがった。

「！」

カオスはそのままナイフを抜き天井を蹴って落下してくる。

「―！チッ」

しかし、そうはいかなかった。いつ投げたのかブーメランブレードを投げていた。
カオスは体勢を変えそれを防ごうとするがブ―レドがありえない軌道をした

―セッテのＩＳスローターアームズか！

「ハッ！」

さらに、もう一個のブーメランブレードが迫る。

「面倒だな」

地上に落ちながら次々に迫るブレード弾きカオスだが、不規則な動きをするため読めない。
しかし、それを物凄い短時間でその軌道を先読みする。

―非常識すぎる。私の思考を読んでいる？

スローターアームズは私の思った通りに軌道を逸らすことができる。
攻撃を弾かれる寸前に軌道を変えて敵を斬り裂くことだってできる。
それを目の前にいる彼は私の一歩先を読んでいる。フェイクをして

もそれがフェイクだと見破られてしまっている。
それはもう・・

―人間の域を超えている

ドスン！

着地した彼はまっすぐこちらに走ってくる。
セッテはとっさにブレードの軌道を彼の背後に誘導した。このままいけば背中からグサリといくが彼はセッテの下に走ってくる
そして―セッテはそのままカオスに押し倒されてしまった。
ナイフを突き付けられ彼は言った。

「―こうすればお前のスローターアームズは役に立たないだろう？」

「・・・・そうですね」

スローターアームズは軌道をそらすＩＳだ。速度をあげたり落としたりできるものではない。そのままの軌道をとっていればブレードはカオスに刺さるがこの密着している場合セッテ自身も巻き添えを喰ってしまう。

「お前の判断は正しい。余計なことを考えず、無駄な動きも無くまさに“機械”のような動きだ。ある意味お前は姉妹の中では傑作かもしれんな。だが―“機械”なだけに読みやすい。例えるなら・・そう、マニュアル通りだ。だから、スローターアームズで軌道を変えても俺にはわかる」

「・・・・」

「わからないか。簡単に言えばお前は“機械”そのものなんだよ。もっと自分の考えを持て、人間らしくなれ」

「しかし、これが私です」

「そうだ。それもまた“個性”と言えるのだろうな。もう一度言うが少しは人間らしくやってみろ。人を罰するのは機械ではない。人を罰するのもまた人だと言うことだ」

「わかりました。私なりに解釈し改善してみます」

それが機械だと言うんだ。

しかし、カオスはあえて口には出さなかった。

「―それより」

「なんだ」

「手、どかしてくれませんか」

カオスの右手はナイフを持っている。じゃあ左手は？

モミ

彼の左手はセッテの胸を掴んでいた

「なんだ、恥ずかしいのか（笑）？」

「・・・違います」

「つまらん」

彼はそういうとセッテからどいた

「それじゃあ、模擬戦は終わりだ。しっかり休めよ」

「わかりました」

彼はそう言うとドームから出ていった。残ったセッテはというと・・・

セッテは彼に掴まれた胸に手を置いていた

「・・・・／／／／／／」

ナンバーズ・カオスｓｉｄｅＥｎｄ

カオスｓｉｄｅ

ガジェットが並ぶ倉庫と言えばいいのだろうか。彼から見える場所にスカリエッティと数人の姉妹たちが何かを話している。

スカリエッティは嬉しそうに笑っていた

「祭り、ね。俺にはどうでもいいが」

カオス達は少し離れた場所でそれを見ていた

「で、どうするの？」

「ハーデス。準備は」

「万全だ。お前とあいつが造ったプログラムなら一瞬だ。そう、一瞬で終わる。私たちがすべてを操れる」

「そうか。ゆりかごは？」

「確証はないが大丈夫だろう。アレもプログラムでなんとかできる範囲だ」

「そうか」

「で、私たちはどうするの？」

「したいようにやるさ。ただ、それまではあいつの祭りに付き合ってやるだけだ」

「そうだな」

ＰＰＰ♪

「ん」

彼の秘匿回線を通じてなにやらデータが届いた。

「これは例の部隊のデータか？」

「そっか。上手くやっているみたいだね」

「そのようだ」

彼らの周りに表示されているデータはすべて六課の人間の個人データだ。完全に言えばすべてが載っているデータだ。出生から今までのこと。各々様々。

「さて、あとは待つだけだ。―祭りが始まるまで」

カオスｓｉｄｅＥｎｄ

第７２話　祭りが始まる（後書き）

仁「セッテはやっぱ可愛いぜ・・・じゅるり」

フィ「変なよだれが出るわよ」

仁「くそ、原作でもなんでセッテがあんな扱いなんだ！まぁこの作品じゃあセッテは・・ニヒヒ」

レイ「駄目だな。精神科往った方がいい」

フィ「そうね。おーい」

「ふも？」

レイ「こいつを病院に」

「ふもっふ！」

そして、作者はボン太くんに病院へと連れていかれました

第７３話　崩壊（前書き）

少し前に予告した通りかなり略していて大事な部分しかかいていません

文章能力なくてすみません

第７３話　崩壊

９月１４日

祭りは始まった。交換意見陳述会での最中にスカリエッティの計画の第１段階とでも言うのだろうか。それが行われた。

クアットロのシルバーカーテンを使い困惑させ、セインのディープダイバーで内部に侵入破壊。そして、ルーテシアによるガジェットの遠隔召喚。内部に侵入したチンクが動力炉を破壊。ディエチによる遠距離砲撃。

ガジェットのＡＭＦで本部のバリアを中和し、さらに外部との通信を遮断。

たったそれだけで地上本部は簡単に襲撃された。

空の航空魔導師部隊はトーレとセッテにより全滅。そして、本部に向かうゼストとアギト。それを喰いとめ空にあがるヴィータとリイン。

地下では合流地点に向かっていたスバルたちはノーヴェたちの襲撃を受ける。

そして、地上での最大の目的であるタイプゼロ、ファーストの捕獲。つまり―ギンガだった。

チンクと戦闘をしていたギンガ。しかし、チンクの前では無力に等しかった。

そしてそれを目の当たりにしたスバルは・・・

「返せ・・・ギン姉を返せ！」

戦闘機人モードにスバルは移行した。その強さにさすがのチンクもなすすべがなかった

しかし・・・

「よくまぁチンクを痛めつけてくれたなぁ嬢ちゃん」

現れたのは闇の四騎将のリーダーカオス

「なんだよ・・邪魔をするなよ・・」

「駄目だ。ギンガは・・俺のものだ」

「黙れぇえええええええ！！！」

彼女が怒りが力となりカオスにその拳を叩きこもうとするが彼もまた右手に黄金の鎧を纏いいとも簡単に吹き飛ばした。

「ぐぅ・・・返せ・・・ギン姉を・・」

ボロボロになり血を流しその機械の身体をさらそうともスバルはただ姉を助けるためにだけに動いていた。

「いらんな。こんな欠陥品」

「あ、にうえ」

倒れているチンクを抱きかかえるカオス。

「よっと。チンク大丈夫・・じゃないな。セイン」

「はいはーい。セインさん登場！」

彼女のＩＳで下から現れたセイン。

「チンクを頼んだ。俺はこれから向こうにいくから」

「了解」

「兄上・・」

「チンク、喋るな。いくら戦闘機人だからって痛みは感じる。だから、今は休め」

「・・・はい」

「じゃあ、途中まで送っていくよ」

「ああ、頼む」

セインのＩＳでチンク、カオスも姿を消し残されいつのまにか気絶していたスバルだけが取り残された。

同時刻

機動六課は残り組の妹たちが襲撃していた。そこにはハーデスの姿もあった。

「降りそそげ―血の雨（ブラッディ・レイン）」

六課の上空に雨雲が集まりそこから雨が降り出した。しかし、それは赤くそして鋭い槍だった。六課の屋根を壁を道を次々に赤く染め貫通させていた。

「ＩＳレインストーム」

ディードのＩＳでいとも簡単に六課を破壊炎上させるその力。残っていたシャマルとザフィーラでもそれは無に等しかった。

「シャマル、なんとかならないか！」

「無理よ。こんな状況じゃ・・」

チリーン

こんな戦闘の最中鈴の音が二人の耳に聞こえた

「え・・・リン！あなた、なんでここに」

シャマルの目には何故かここにリンが写っていた。本来ならばヴィヴィオと一緒にいるはず。いや、いたはず。

「―本当に簡単でしたよ。いくら、これがもう一つの姿でもあんなに警戒もされず受け入れてもらえるとは思っていませんでした」

リンが・・・喋った？

「あなた・・使い魔だったの？」

「ええ、そうですよ。私は今も昔も使い魔です」

「シャマル離れろ！」

「は！」

一筋の光が二人の間に直撃した。

「・・・リン、あなた・・」

「本当に簡単でした。潜入してから六課のデータを盗むのは。いえ、簡単すぎましたね。全局員すべての情報。いくら制限があっても簡単すぎました。特にあなた方のデータも」

「あなた何を・・」

「いくら１０年とは言え忘れてしまっているは愚かですね」

リンは歩いてきた。しかし、歩くたびに身体は光に包まれいつのまにか人型になっていた。

そして、その姿は・・・

「―・・・！？」

「久しぶりですね。シャマル」

「・・・あなた！・・じゃあ、ハーデスは！」

「シャマル！」

「！クラールヴィント！」

咄嗟に障壁を張るがいとも簡単に破れてしまた。

「シャマル！？―うぉおおおおお！」

シャマルの姿を見てザフィーラが撃ったハーデスに突っ込むが簡単な攻撃に吹き飛ばされる

「ザフィーラ！？」

「弱くなったな。それでは何も守れない」

ハーデスが近づいてくる

「あら、ハーデス。お久しぶりね」

「リン・・いいのか？」

「ええ。どうせ、ここで殺す予定ですもの」

「そうだな」

ハーデスは腕をあげて構えた

「・・どうして・・どうして・・なんで、こんなことを・・」

シャマルが力を振り絞って二人に言う

「結局お前らは（管理局）は何も守れないということだ。あの少女でさえも」

少女・・？

「ヴィヴィオの事！？」

「これから死ぬ奴には知ることのないことだ」

ハーデスの放った光がシャマルとザフィーラを包んだ

「派手にやったな」

「カオス」

「主様。役目を終えただいま帰還しました」

リンはカオスに跪き役目を終えたことを報告していた

「ああ。ご苦労だったな。リン」

「はい」

「で、器を？」

「ああ。俺が今からいってくる」

「では、お気をつけて」

「ああ」

カオスは燃える六課に向かって歩いていった。

「はぁはぁはぁ・・」

ヴァイスはただ一人残ってガジェット撃ち落としていた。一般の魔導師が使う杖で
彼はひたすら角から現れたガジェットを撃ち落としていた。
だが、今度は違った

「なんだ。まだ生きてる奴がいたのか」

「ッ！」

ヴァイスは容赦なく撃った。彼自身もカオスのことは知っていた。
本来なら逃げるべきなのだろう。しかし、彼は逃げなかった

「そんな攻撃が通ると？」

簡単に防がれた

「・・・なぜお前は自分の武器を手に取らない」

「なん・・だと・・？」

「その杖の持ち方。普通はそうは持たない。そうだな・・・狙撃銃の型と似ている」

そういうと彼の周りにウインドが現れた。
ヴァイスにもそれはみえた。それは六課の局員のデータだ

「なんで、テメぇがそれを・・」

「ヴァイス・グランセニック。かつて誤射で人質に取られた少女の目を狙撃」

「なんでそれを!?」

「しかも、それが自分の妹とは・・・滑稽だな」

「うるせえ!」

「だから、もう銃を握らないのか?」

「・・?」

「それは逃げているだけだ。それではお前は一生過去に囚われているだけだ」

「お前に・・お前になにがわかる!」

「誤射で妹を撃った。けど、お前の妹はまだ生きている」

「だから、なんだっていうんだよ!」

「なぜ、向き合わない」

「だから・・なんなんだよ！」

「所詮人間などその程度か・・・失せろ」

彼の放った攻撃で壁に叩きつけれたヴァイス

「ぐわ！」

ちきしょう・・・なんなんだよ・・

カオスはそんなことを気にせず足を進めた

その先の向こうには先に来ていたルーテシアとガリューが器を連れ去ろうとしているところだった。器は泣きながら拒んでいた

「二人とも」

「兄さん」

「俺が連れていく。お前らは外で待っていくれ」

「・・・わかった」

カオスは二人が去ったのは確認するとヴィヴィオをみた

「こないでぇ・・・こないでぇ！」

「迎えにきたよ。オリヴィエ・・」

彼は別の名でヴィヴィオを呼んだ

「・・・違う・・ヴィヴィオはヴィヴィオ・・・」

さっきまで泣いていたのに今では少し泣きやんでいた
彼は膝をつき仮面をとった

「・・・パパ・・？」

「さぁ、いこうオリヴィエ。・・・いやヴィヴィオ・・」

「・・・パパ・・」

ヴィヴィオはいわれるがままにカオスに抱きついた
カオスは仮面をつけ立ちあがった

「さて、いこうか。君を、聖王をゆりかごが待っている」

「・・・」

ヴィヴィオはいつの間にか気絶いや・・・寝ていた

六課の外に出たカオスはヴィヴィオを連れてアジトに戻ろうとしていた。
そんな時本部からやってきたエリオとキャロが来た

エリオは連れ去られるヴィヴィオをみて過去の自分をみてしまいカオスに向けて突撃した

「Fの遺産の小僧か。興味はないな。ディード」

「はい。失礼坊や」

「うわぁあああああ！」

ディードによって撃墜されるエリオ。オットーのバインドで海に落ちるキャロ。

そして、本部上空。

そこにサレナはフェイトを待っていた。再び戦う二人だが今回の作戦が終了したのと同時にサレナは武器を下げた

「残念だけど今日はここまで」

「待て！スカリエッティはどこにいる！？」

「いずれはわかるわよ。それと・・・今のままじゃ私には勝てないわよ。“フェイト”」

「！」

私を呼ぶそのいい方。間違いない。けど、頭の中でそれを否定していた

それは最悪の結果だから

その後ガジェットによる施設破壊が行われたが民間人や魔導師には手を出さなかった。

スカリエッティ自らが演説をしまったく似合わない演説をしていた

「似合わんな」

「なら、君がやるかい？」

「遠慮しとく」

「そうか。仮に指導者とも呼ばれていた君だ。いいと思ったんだけどね」

英雄とまで言われた彼だ。彼がやればそれなりに効果のあるものになるだろう

「そうそう。ギンーファーストだが俺の方でやらせてもらうぞ」

「？まぁアレは手に入ればどちらでもよかったものだ。別にかまわないよ」

「そうか」

了解を得たのかカオスはその場から去っていった。

「くく。何を考えてるか相変わらずわからないな。彼は」

スカリエッティはただ一人は薄気味悪い笑いをしていたのだった

カオスは培養液にいるギンガをみていた

「もう目を開けられるだろう？」

『・・・はい』

「身体の具合は？」

『問題ありません』

「そうか、なら、出てごらん」

ピキ　バリィン！

培養液が流れ出てそこからギンガ出てきた

「さぁ、俺のために演じてくれ。ピエロのように」

「はい。カオス」

機械的な笑みを浮かべギンガは微笑んでいた

第７３話　崩壊（後書き）

『フィリイブの時間だよ～』

フィ「六課襲撃・・・汚い花火ね～」

イヴ「それ女神がいうことかな～」

仁「本当に省略してすみません・・・」

フィ「そうよ！謝りなさい！ここが好きっていうひとだっているかもしれないんだから！」

イヴ「襲撃されてるところが好きな人っているのかな・・・？」

仁「俺は好きじゃないな。さて、ここで少し次回予告。次回は原作で言うとゆりかごになりますね。そこでも少し文章で略しています。ていうか当分は略してしまいます」

フィ「ごめんなさい」

イヴ「ごめんなさい」

仁「お前らまで誤ると俺がわるいみたいだろ！」

「「だって・・・そうじゃない」」

仁「・・・うわーん！」

第７４話　それぞれの戦場へ（前書き）

あ、頭痛い・・・

さて、原作で言う『ゆりかご』です。でも、スバルたちは空気です。別に嫌いってわけじゃないんですけど・・そういう話なものでして・・・

第７４話　それぞれの戦場へ

隊舎を失い、多くの負傷者を出す痛手を負った機動六課。しかし、誰一人死んではないなかった。そう、誰一人。
シャマルもザフィーラもあの光の中消えていたと思われていたが二人ともちゃんと生きていた。しかし、ザフィーラはシャマルより重症であった。また、ヴァイスもカオスに受けた傷は大きいが命に別条はなかった。
なぜ、殺さなかったのか。疑問が残ったが今はそれどころではなかった。
フルメンバーではないが本部を廃棄処分される予定だったアースラに移設し決戦に臨むのであった。

アースラ　会議室ｓｉｄｅ

「と言う訳や。地上本部は私ら本局には一切情報は表示されへん。けど、私たちが追うのは地上本部テロ事件でもスカリエッティでもない。ロストロギア『レリック』。その捜査線上にスカリエッティとその一味がおるだけ・・そういう方向や。そして、その過程で誘拐されたギンガ陸曹とヴィヴィオの救出する。それだけや」

六課自体レリックと言った古代遺産を保護管理することが表上の理由である。それを通せば何をしようと構わないのだ。

「で、両隊長はなにかある？」

「ないよ。でも・・・無茶してない？」

「大丈夫や。後継人の意見は固めてある。それに私たちには総帥直々辞令が降りてるんやから」

総帥と言う立場は本局でも地上本部でも同じ立場である。だから、彼の意見には誰も逆らえない。そして、その命令で動いている六課をなにか言うこともできないのだ

「なら、異存はありません」

「私も」

「そうか。じゃあ、解散かな。捜査開始は今日中や。各自万全の状態にしておくことや。それじゃあ解散」

「「はい」」

皆が会議室を出る中シャマルから通信が入る

『はやてちゃんちょっといいですか?』

「シャマルどないしたん?」

『少しお話が。なのはちゃんとフェイトちゃんも残って聞いてください。それ以外の人は出て貰って・・』

シャマルの言うことに従いはやては会議室にいるものを退出させた

「で、話って」

『その・・・これは秘匿回線なので盗聴されることはないしあ、あとヴィータちゃん、シグナムとユキナにも繋いであります。それで、本題なんですけど・・・』

彼女から発せられた一言。それはリンのこと。本当は使い魔で六課に潜入しデータを盗んでいた。
しかし、それが本題ではない。この時点でシャマルは言うかどうか迷った。でも、言わなきゃいけない。そう思って伝えた。リンの正体を・・・

「！・・・そう、なんだ。じゃあ、カオス達も・・」

『恐らくは・・・あまり信じたくないですけど・・』

「私も薄々感じてはおったよ。でも、そんなはずはないって否定していた」

「けど、私はこのあいだで推測が確信に変わった」

「フェイトちゃんそれって・・」

「うん・・。リンがそうならサレナは・・・ブラック・サレナは黒百合の別名。黒百合の花言葉は復讐。きっと私に向けていたんだ。いつも」

「・・・」

『これからどうします?』

「・・・私はな?その時になったら六課の部隊長としてではなく八

神はやてとして向き合うつもりや」

「はやてちゃん？」

「だって、そうやろ？きっと私たちの時間は8年前から止まってるやから」

笑みを浮かべていうはやてだがそれはともて辛いものになることはわかっていた

「そうだね。はやての言う通りだよ。なのは」

「フェイトちゃん」

「けど、その前にこの事件を終わらせよう」

「「うん」」

待っててね。ヴィヴィオ

会議室ｓｉｄｅＥｎｄ

シャマル・ヴィータｓｉｄｅ

寝台で仰向きに横たわるヴィータはシャマルのメディカルチェックを受けていた。

理由はゼストでの戦闘。しかし、それだけではなかった

「わかってるよ。再生が遅いとか蓄積ダメージが抜けずらくなってるのは」

「ヴィータちゃん」

「あの日、あたしたちははやてを必要とせず自分の命（魔力）で活動できるようになった。最初はこれではやてに負担をかけなくすむ。そう思ってた。けど・・」

「その代わり自分が受けたダメージは自分の魔力で修復しなければならない。幸い今のところは予想の範囲内」

「なら、いいじゃねぇか。それにあたしは今のままでいいと思ってる」

「どうして？」

「だって、人間みたいじゃないか。プログラムであるあたしたちがさ。そりゃあ成長はしないけどでもいつかは魔力切れて死んでいく。今回で最後。はやてや皆と一緒に死んでいける。それがあたしは嬉しいよ」

「ヴィータちゃん」

それは確かそうだ。けど、同時に悲しい現実でもあった。

「あたしはこれで良かったと思ってる。兄ちゃんに感謝してる。こういう風にしてくれたこと。ちゃんと死を迎えられることが」

「そう、ね。確かにそうね。私たちは長く生き過ぎたもの。はやて

ちゃんのもとでこの限りある命を使えることが私も嬉しいわ」

「だな。でも・・・」

「？」

「兄ちゃんは死ねないんだな」

兄ちゃんは私たちと同じ永遠を生きてきた。私たちより前から。
今思えば死を向かえられないのがどれほど苦しいのがわかる

「・・・そうね。多分同じ永遠を生きてきた私たちだからこそあの人のことがわかる。あの人も苦しんでいたでしょうね。自分が死ねないことに・・・」

シャマル・ヴィータｓｉｄｅＥｎｄ

なのは・リインｓｉｄｅ

通路で会った二人は一緒に歩きデバイスのことについて話していた

「で、クロスミラージュたちのリミッター解除していいんですね？」

「うん。たぶんそうでもしないと生き残れないか」

「・・・スバルたちもそうですけど、私はなのはさんとレイジングハートの方が心配です！」

「リイン？」

「ブラスターだって相当なのはさんの身体に負担をかけるし。なによりあの魔王形態だって！」

リインは心配だった。絶対今度も無茶をすると女の勘でそう感じていた

「ありがとう。でもね？魔王形態に関しては問題ないよ」

「どうしてですか？」

「私がそう言ったの？」

「え？」

「ああ、私の心の中の私。もう一人の私がそう言ったの。システム起動による身体への負担はないって。身体より精神的なほうにいくと思うけど・・」

「お願いですから無茶しないでくださいね」

きっとそう言っても無茶してしまうんだろうとわかっている。けど・・・

《その子、あなたが心配なのよ。どうせ無茶するだろうから》

もう一人の私が語りかけてきた。最近たまに彼女から声をかけることが多くなってきた。

（そうかな？）

《そうに決まってるでしょう。それと・・あいつがでない限り私は手伝わないから》

（うん）

《それじゃあね。私》

（またね。私）

奇妙なものだと私は思った。けど、いつのまにかそれに慣れてしまっていた。

「なのはさん・・」

「うん。大丈夫だよ。きっと大丈夫」

なのは・リインｓｉｄｅＥｎｄ

シグナムｓｉｄｅ

シグナムは一人訓練場で正座をしていた。

―先の本部ですれ違ったあの騎士

騎士というのは恐らくゼストのことだった。あのユニゾンしたヴィータを倒したオーバーＳランクの魔導師。いや、騎士か。

―きっと私が相手をすることになる。いや、それ以前に彼と戦いたいのかもしれない

しかし、不安もあった今の自分で彼に自分の剣が届くのだろうかと

「・・レヴァンティン。アレはいつでも用意はできているな」

『もちろんです。あなたの指示があれば一瞬のうちに』

「すまんな」

『それが私の役目でござるので』

「口調」

『これは失礼』

シグナムは溜息をつき傍にあった木刀を握り素振りを始めた

シグナムｓｉｄｅＥｎｄ

ユキナ・麻衣ｓｉｄｅ

「・・・ユキナ？」

「！ま、麻衣？」

「どうしたのそんなボロボロになって？」

アースラの一角でボロボロになっているユキナをみつけた麻衣
知る者は少ないがユキナはあの魔王の一件以来六課にはいなかった。
先の六課襲撃を聞いて戻ってきたのだろう

「そ、その色々と・・・」

「・・？・・・手見せて」

「え」

「・・いいから」

麻衣はいつにもなく強引だった。ユキナの手を掴み手のひらをみた。
たくさんの傷。タコまでできてはつぶれている。

「・・・どうしたの？」

「えーとーその・・・・」

言えない。特訓してドジったなんて

「アレ？紅蓮が二つ？」

彼女の首元にはいつも待機形態のドリルがたのペンダントが一つあるのだが今は二つあった

「ち、違うよ！見間違いだよー！」

「・・あっユキナ！・・・いっちゃった」

ユキナは麻衣から逃げるように去っていった

「・・・

ユキナ・麻衣ｓｉｄｅＥｎｄ

フェイトｓｉｄｅ

フェイトは一人でアースラのある場所にいた。フェイトは一人で苦悩していた。

なぜ、彼女がその道を選んだのか。私にはわからなかった。

「・・・１０年前、言いそびれたまま、なんだよね」

１０年前彼女と公園で話こと。彼女は私に何かを言いたそうだった。いや、むしろ今思えばアレが本当の理由ではない。なぜかそう思えた。

「だから、言わなきゃ。ううん。伝えなきゃ。母さんの言葉を」

それはリンディではなく本当の母親だったあの人の言葉。

１０年前伝えられずここまできた。だから、伝えなければいけない。

あの人の言葉を

フェイトｓｉｄｅＥｎｄ

そして、再びナンバーズの襲撃が始まった。地上本部が地上防衛の要とするアインヘリアルが、三基とも破壊されてしまう。
同時期にスカリエッティのアジトをヴェロッサとシャッハが発見する。二人からアジト制圧戦力の派遣を要請される。
一方破壊を終えたナンバーズは一斉に地上本部に向かっていた。
そこで、受けいれ痛くない光景があった。ナンバーズと同じユニフォームを纏ったギンガ共に疾走しているのだ。
さらに、アジト周辺の大地が崩れ巨大な船が姿を現す。
それこそが聖王のゆりかごだった。

「事態は急を要する。これから作戦を説明をします。まず、地上。戦闘機人たち、あくまでギンガを保護するためにスバル、ティアナ、エリオ、キャロ」

「「「「はい！」」」」

「そして、空。ゆりかごやけど、これは内部に侵入し駆動炉を潰しかない。それか聖王であるヴィヴィオの救出。これに、なのは隊長、ヴィータ、ユキナ、麻衣副隊長」

「「「「うん（ああ）」」」」

「ヴェロッサ査察官からの要請でアジトの制圧にはフェイト隊長が」

「わかった」

「あと、情報であの騎士も本部に向かってる。これに、シグナム副

隊長とリイン曹長が」

「「はい」」

「私も出るけど航空魔導師部隊の指揮を執ることになりそうや」

『八神部隊長！』

「どいないしたん、シャーリー？」

『未確認の勢力を発見！数はそれほどではありませんが・・まず映像を』

映し出された映像。おそらく私たちより上に位置しているところで
今の状況を見下ろしているかのようだった
その姿にはスバルたちを覗くなのはたちにはわかっていた

「黄金の夜明け団・・・」

「でも、一体どうして！？」

「目当てはゆりかご？」

「・・・はやて」

困惑するなか麻衣がはやてに意見をした

「・・悪いけど私は単独行動をさせてもらう」

「！確かに特許であるあなたにはその権利がある。でも、この状況

では・・」

「あいつらの相手は私がやると言っている」

口調がかつての麻衣のものに戻った

「理由をお聞きしても？」

「君たちはやるべきことがある。しかし、普通の魔導師では相手にならない。だから、私一人がやると言っている」

「確かにそうかもしれませんが」

「・・・任せて。お願いだから」

いつもの口調に戻り彼女は必死な顔で頼んでいた

なのはは前の彼女の言葉を思い出した

―あなたたちを守るのが私の使命だから

ああ。そうか。きっと私たちを守ろうとしているんだ。

「・・・わかった。なら、あなたの行動を許可します」

「・・・ありがとう」

麻衣は礼をいうと早速彼らの下に向かった。

「時間がない。けど、最後にこれだけは言わせてもらいます。皆、

必ず帰ってくるように」

「「「はい！」」」

「それじゃあいこうか」

地上、空へと向かう少女たち。

しかし、彼女達はあることを見落としていた。どこにも闇の四騎将の姿がないことに

第７４話　それぞれの戦場へ（後書き）

（）の部分がなのはで《》の部分がクイーンです。

できるだけわかりやすく表記したつもりですが・・・大丈夫かな？

さて、次回からは各々戦闘になりますが原作と順番が違ってきます。

あと、文章で片づけてしまうところもあります

では、次回でまた

第７５話　いつかまた同じ夢の話をしよう（前書き）

今日はどちらかというと涼しい方です・・・群馬に住んでますが暑い日も多いです。昨日は祭りがあったけどバイトだった。でも、バイト先で花火みれたからいいや

さて、今回はちょっとしたネタというか台詞があります。以外といい台詞だと自分は気にいっています

では、どうぞ

第７５話　いつかまた同じ夢の話をしよう

ゆりかご。古代ベルカ、聖王の時代に生み出された究極のロストロギア。
それが今姿を現した。
ゆりかごが姿を現した同じっこアジトのとある部屋では・・・

「で、問題はないのか？」

「ああ。君の身体はもう完全に治ったよ」

その部屋にカオスとスカリエッティしかいなかった。その部屋の機材を見る限りでは医務室に近い。

「しかし、君でも解けない呪いとかあったんだね」

「かかってしまったものは流石にな。しかし、ある程度なら俺でも解けるがアレは少し違っていた。俺でも解けない呪いだった」

「そうか。でも、その治療に８年もかかったよ」

「その分の礼は返したはずだ」

「ああ、もちろんだとも。君には感謝しているよ」

「それじゃあ俺たちは“ここ”までだ」

「そうか。それは残念だよ」

「俺はそうでもないがな。じゃあな」

カオスは転位魔法でその場から消えた

「やれやれ。今度は敵同士ってことかな」

最高評議会ｓｉｄｅ

そこは不思議な空間。あるのは３つの培養液の中に脳がある不気味な場所。

その脳だけの三人は旧暦の時代、バラバラだった世界を一つにし管理局を設立した４人のうちの三人。彼らは自らの身体を捨て世界を管理することを選んだ。

『奴はやりすぎた』

『レジアスもまだ重要な駒だ。今失うのは惜しい」

『しかし、ゆりかごは奴の手の中だ』

現状で起きていることは彼らの所に届いていた。

『だが、止めねばならん』

『そのためにジェイルを失うのは痛い。あれは貴重な個体だ』

『しかし、アレはもうよかろう。我らが求めるは優れた指導者。ジェイルはそれに達しているものではない』

『その通りだ。消して奴ではない』

『―あいつか。我らと共に管理局を創り奴だけは今なおその頂点に君臨している』

『だが、奴がなにをした。奴にとって管理局はただのその時の遊びだろう。あいつが本当にやっていたと思えない』

「―失礼いたします。メンテナンスのお時間です」

討論をしている最中一人の女性がやってきた

『会議中だ。手短に頼む』

「そうですか・・なら、もう休まれてはどうですか？」

『なにを…！？』

『貴様！？』

女性は先ほどまで管理局の制服を着ていたが今では違う。ナンバーズと同じユニフォームだ

『そうか、奴の戦闘機人か！』

「はい。ドクターからの伝言です。そろそろお休みしたほうがよろ

しいですよと」

『そんなことをしてこの世界が・・我らがいなくなったら誰がこの世界を管理すると言うのだ！』

「そんなことどうでもいいですわ。それではお休みなさい！」

ジャキ！

「！」

「「「！」」」

しかし、彼らが死ぬことはなかった。

「・・あなた・・カオス！どうしてここに！」

「ドゥーエだったな。お前は次の任務に移行しろ。こいつらの始末は俺がやる」

「それを素直に聞けと？」

「・・いからいけ！」

「！」

咄嗟に放たれた殺気がドゥーエを包んだ。彼女は殺気当たられ遺憾ながら彼のいうことに従うしかなかった

「さて、邪魔ものはいなくなった」

『誰だ、貴様?』

彼は仮面をとり素顔をみせた

『貴様!生きていたのか!?』

「久しいな友よ。だが、お前たちはやり過ぎた。ジェイルの事も戦闘機人のこともゆりかごのことも。お前たちはやりすぎた。過ぎた力はいずれその身をも滅ぼす」

『お前に何がわかる!我々はこの世界のために行ってきただけだ!』

『ただ、総帥の椅子に座ってなにもしていなかったお前とは違うのだ!』

「・・・ああ、そうさ。俺にとって管理局はどうでもいいものだ。ただ、都合がよかった。それだけだ。個人ではできないことを組織をつくればそれを可能にしてくれる。それだけさ。あとはただの“砦”ぐらいにしか思っていない」

『やはり、貴様は我々をも利用していたのか』

彼は一旦間をあけていった

「そうだ。お前たちはよくやってくれたよ。お前たちなりに。けど、もうここまでだ。お前たちのその目的のために犠牲にしてきた命。そして、命をもてあそぶお前たちを俺は止める。それが友として俺が唯一してやれることだ」

静かに彼は銃を抜き構えた。

『ま、待て！』

ＤＯＮ！

バリィン！

脳みそごと撃ち抜かれた。まず、一人。

「アルハザードの知識を持ってあいつを生み出したことを俺が知らないとでも思っていたのか？」

そう言いながら照準を次の者にあわせる。

「結局、お前らはあいつに利用されていただけだった」

『お前に・・お前になにが―』

ＤＯＮ！

「わからないね。平和？笑わせる。平和なのはお前たちが管理している世界だけだろうが。管理外のことなんて目を向けてすらいないだろうに」

『貴様にだってわかるだろう。時間がかかるのだ。だから、我々はこの道を―』

ジャキ

「言葉だけなら何だって言える。そういう奴らはいや・・平和に溺れている奴は皆そうさ。中の事は知っていても外のことは知らない。古代遺産の保護・管理。質量兵器の禁止ｅｔｃ・・そういうことを他人押し付けるが結局それはお前らのエゴだ。そういう身でありながら俺はこれを使っている」

『だが、お前だって自らロストロギアの保護をしてきた。お前なりのやり方で』

「ああ。そうだ。古代遺産は俺にとってはただの研究材料か玩具にしかすぎない」

『お前は変わらない。今も昔も。結局お前は自分の私利私欲のために行っているだけだ』

「・・・そうだ。そうだとも。俺は魔術師。自分の目的のためならどんなことでもする！今さらそんなことを言ったってどうにもならんよ」

『この・・・偽善者が！いつかお前も私たちのようになる！友であるお前に殺される我々のようにお前もまたその報いを受けるのだ！『ＤＯＮ！』―』

そして、最後の一人が逝った

「偽善者・・。魔術師は嘘つきなんだよ。なんってたって魔女だからな」

かつて、４人の男が夢をみた。

それは世界を統一するとういう大きくとても無謀な夢。しかし、長い時間をかけてそれは成された。
一人は不老不死で今なおその頂点に在り続け、残りの三人は身体をすて裏で世界を見守ることを選んだ。
しかし、いつしか彼らの理念は共になかった。いや、最初からそんなのなかっただろうか。
そして、今その3人が逝った。
残された一人は3人が犯した罪を裁いた。それでも彼はたった一人でもその理念が違うともその頂点に居続けることを選んだ

「しかし、まだ俺は偽善者でいよう。まだ、終わっていない。戻るのはそれからだ」

仮面を再び装着し彼は振り向き前を歩く

「さらばだ、友よ。いつかまた逢えたら同じ夢の話をしよう」

そして、彼がいなくなったその場所は爆発し跡方も無く消し飛んだ

最高評議会ｓｉｄｅＥｎｄ

同時刻

タイムリミットは3時間。
ゆりかごが軌道ポイントに到着するのとクラウヴィア艦隊が到着するのに3時間。
その3時間でなのはたちのやるべきことには時間が少ないのかもしれない。

ヴィヴィオとギンガの救出。スカリエッティの逮捕
そして、なのは、ヴィータ、ユキナはゆりかご内部に侵入。フェイトはシャッハと合流。ＦＷ陣は各々の相手を。シグナムとリインはゼストとアギトを。そして、麻衣は―

ゆりかごの遥か上空

数十人の傀儡たちがそれを見下ろす

『アレがゆりかご』

『導師が求めているもの』

『どうする？』

『預言者が言うには誰かが止めるらしい』

『その一瞬しかなかろう。我々にはゆりかごの情報がない』

『だが、今回。奴はいない』

『そうだ。そうだとも』

夜明け団が宿敵である彼はいない

「悪いけど・・・そうはいかない！」

「「「！」」」

彼らの前に立ちはだかるは一人の少女

『誰だ、貴様・・』

「ライトニング・・・いや。正義の女神アストレアが代行者。神野・・神乃麻衣！」

『神乃！・・奴に娘が！』

『縁起が悪い。ここで堕とす』

「悪いけど、容赦はしない」

『ほざけ！』

麻衣は第三勢力『黄金の夜明け団』との戦闘に入る

そして、この空と地上には管理局と本部の魔導師部隊とスカリエッティ一味とそして黄金の夜明け団が存在していた

第７５話　いつかまた同じ夢の話をしよう（後書き）

『フィリイヴな時間っす』

イヴ「もう、突っ込むのはやめよう」

フィ「まぁ私は女神だからもちろん知ってたけど・・・まだいっちゃいけないのよね」

仁「さて、最後にカオスが言った言葉。タイトルもそうだけどガンｘソードです。個人的には大好きなアニメです。スパロボＫは買ってないけど友達がいうにはめっちゃ強いとかガンソードの機体だけでクリアできるとか言ってました。まぁｋは駄作だったからなぁ」

イヴ「さて、さて。次回は各場所での戦いになるよ。メインはそうだね。シグナムとかフェイトかな？」

フィ「とういうわけでまた次回で」

第７６話　それぞれの戦い　前篇（前書き）

最初に言っておく。俺はティアナとかをか～な～り空気にした！

そして、文章で略した

もう、これ何回いったかな・・・

第７６話　それぞれの戦い　前篇

それぞれ互いの目的のために戦地へ向かう。
だが、それを蚊帳の外で嘲笑う者もいる。戦いを楽しむ者もいる。
助けようとする者もいる。守ろうとする者もいる。

フェイトｓｉｄｅ

アジトへ侵入したフェイトを待ち構えていたのはトーレとセッテ。
狭い室内での戦闘、さらに2対1という状況のなかでフェイトは防戦一方だった

『いや、こんにちは。フェイト・テスタロッサ』

「スカリエッティ!?」

なぜ、今通信をしてくるのか

『それとFの遺産と竜召喚士の二人、聞こえてるかい?』

『『!?』』

『どうだい?楽しんでるかい。私が用意した祭りを』

「何が祭りだ!今も地上を混乱に陥れている重犯罪者め!」

『重犯罪者?酷いなぁ。私はこれでも君の生みの親の一人だよ?私

がその根幹を設計し君の母君、プレシア・テスタロッサが完成させたプロジェクトF。少しは感謝してもらいたいものだね』

「誰がお前に感謝などするものか！人の命を操り運命を弄び・・お前のそれは傲慢だ！」

『人の命？運命？私とってはなんの価値も無い無駄な命だよ。そんな価値のない命を実験材料として役立ててあげてるんだよ』

「貴様ァ！」

ザンバーを振りかざすがそれは赤い糸によって止められさらに魔力刃を砕かれた。

「ははっは。まったく君は彼女にそっくりだよ。普段は温厚でだが、いざとなると感情をあらわにする」

『フェイトさん！』

「く！」

フェイトｓｉｄｅＥｎｄ

シグナムｓｉｄｅ

互いにユニゾンしたシグナムとゼスト。相性でいえばシグナムとリインが優勢だがゼストにはそれを上回る力があった。

剣と槍がぶつかりあう

「前回の赤い騎士といい、素晴らしいと言っていこう」

「ヴィータのことですか」

「だが、私も成さなければならないことがある。そのために・・押し通る！」

急激な加速をし距離を詰めるゼスト。シグナムは咄嗟に反応して鞘で受け止めるが長くは持たなかった

「ち！」

「君は強い。だが、負けるわけにはいかないのでな」

『旦那・・』

「リイン、ユニゾンアウトだ」

『え、でも』

「頼む」

『・・わかりました』

「「？」」

なぜ、今ユニゾンを解除したのか。さすがのゼストでもその意図はわからなかった

「騎士ゼスト。あなたとは騎士として戦いたかった。だが、私も引くわけにはいきません。私は侍としてあなたを止める」

「サムライ？」

「レヴァンティン！」

『はいでござる』

「え、レヴィティン？」

彼の喋り方に違和感を感じたリインだがそんな時シグナムの騎士甲冑は別のものへとかわる

一言で言えば新撰組が着てるような服だろうか。青い衣を着ていない姿と言えばわかるだろうか。腰は彼女のレヴァンティンではなく一刀の日本刀だった

・・・・・・

数年前
それは八神家が引っ越しする少し前のこと

彼から教えてもらった場所でもう何年かたった
今も緋村殿と稽古をしている

「シグナム殿はすごいでござるな。もう、拙者と渡り合えるほどまで成長したでござる」

「馬鹿。お前が甘いんだよ」

「その・・・ありがとうございます」

「それが俺たちの仕事だったからな。そうだ、剣心。姉ちゃんにアレを渡してやんな」

「アレ?ああ、アレでござるか。ちょっと待ってるでござる」

一旦稽古を中断して緋村殿は小屋に戻っていったがすぐに戻ってきて風呂敷かなにか布に包まれているなにかを持ってきた

「ほれ、姉ちゃん。これをやる」

「・・これは刀ですか?どうして」

「アイツに言われてたんだ。いい頃合いになったらそいつを渡してくれってな。二人が来る前に実は俺の所にきてこいつを置いていったんだ」

シグナムは鞘から刀を抜いた。

「これは・・・私でもわかります」

「まぁそいつはあいつが造ったヤツだからな」

「レイ殿が!?」

「ああ。そこらへんよりは頑丈にできるし軽い。抜刀術にはもって

こいだ」

「・・・」

しかし、これを使うときが来るのだろうか

「大事に扱ってやんな」

「はい」

・・・・・

使う時が来る。それが今

「サムライ・・・そういうのを言うのだろうな」

「さぁ、始めましょう」

シグナムは右足を出し刀を構える。一回きりの大勝負にでた。これならば通常の倍の速さで刀を抜くことができる。

ゼストはそれに警戒しつつもあえて目に入れずただ斬ることを考えいてた

「いくぞ！」

「！」

それは一瞬のできごとだった。

ゼストはシグナムを通り過ぎていた

「確かに速い。神速と言ってもいだろう。だが・・ユニゾンしてる私が一つ上手だった」

ゼストの腹に横一閃の傷跡がある。しかし、致命傷ではなかった。

「ぐ・・」

バリン！

刀は砕けシグナムは落ちた

「いくぞ。アギト」

『お、おう』

「シグナム！」

リインが咄嗟に魔法陣をはりクッション代わりにした。

「・・すまないな。私の我がままに付き合ってもらって」

「シグナム・・」

「私は試したかったもしれないな。今の自分の強さを」

ユニゾンしていれば私は勝ったかもしれない。しかし、それでは自分の力を証明できなかった。だから、ワザトユニゾンを解除してまで挑んだ

だが、それももう果たした

「追えるか？」

「はい！」

再び騎士に戻ったシグナム

―あなたから貰った刀。申し訳ない

心の中で彼に謝罪した

シグナムｓｉｄｅＥｎｄ

スバルｓｉｄｅ

「ギン姉・・・」

今目の前にいる姉は敵として立ち自分に拳を振るう

「助けるから・・絶対助けるから」

「・・・・」

「立て」

「？」

今まで無言だった姉が初めて喋った。

「それでは誰も守れない。救えない」

何を言っているの？

「！」

一瞬のすきを突かれ彼女の攻撃をもろに受けた

「ぐわぁ！」

「ぎ・・ギン姉！」

何を言っているかわからない。けど、やらなきゃいけない

私がギン姉を・・

「助けるんだ！」

スバルｓｉｄｅＥｎｄ

なのはｓｉｄｅ

なのはは玉座の間に到着した。道中ナンバーズの一人ディエチを保護した。

しかし、目の前にいるヴィヴィオは覚醒してしまった。

「ヴィヴィオ・・わたしだよ！なのはママだよ！」

「違う・・ママを返して！パパはどこ！？あなたなんか・・ママじゃない！」

それはなのはには辛い言葉だった。あの子の言うことは事実だし本当の母親じゃない。

それでもなのはヴィヴィオを助けようする。

―でも、たまに放つパパという言葉・・

《変わりなさい！ああいうただをこねる子には私が・・》

（駄目！ヴィヴィオは私が助けなきゃ駄目なの！）

《ここまで来るのにどれだけ魔力消費したと思ってるの！？私の身体でもあるのよ！？》

（わかってる。わかってるけど・・お願い。ヴィヴィオは私が・・助ける！）

《・・わかったわ。けど・・やり遂げなさい》

（うん）

なのはｓｉｄｅＥｎｄ

第７６話　それぞれの戦い　前篇（後書き）

今日中に後篇をあげたいと思っています

第７７話　それぞれの戦い　後篇（前書き）

今回の目玉はヴィータとユキナかな。
読めばわかるんですが・・・ユキナは本当にこのために生み出したオリキャラなのかもしれません

第77話　それぞれの戦い　後篇

かつて共に夢をみた二人がいた。一人は地上を守るため。一人はそんな友の力になるために。二人は同じ夢をみていた。
しかし、その夢はいつしか野望と変わり果てたかもしれない。最高評議会、スカリエッティ。男の夢は確かに実現しつつあった。だが、それが正しいものではなかった。
そのために男は大切は部下を失った。死んだはずの自分が生き返りそして、本当の真実をいくため彼は再び友の前に現れた。
そして、答えを聞こうとした。

だが・・・

「レジアス！」

彼の胸はかぎ爪によって刺された。

「これで、あなたの役目もお終いです」

「ぜ・・すと・・俺は・・・―」

「俺は遅すぎる。いつも遅すぎる・・・ふん！」

「なっ！」

ＤＯＮＮ！

アギトともにかけつけたシグナム。

「これは・・あなたが」

「そうだ。俺が殺した。すべては・・遅すぎた」

そして、彼は再びシグナムと対峙する。
自らの最後を飾るために。彼に後悔はなかった。アギト、ルーテシア心配だった二人はもう彼女達に任せた。
だから、彼には思い残すことはなかった。そして、彼は友が待つ場所へと旅立った。

フェイトｓｉｄｅ

「君の母上。プレシア・テスタロッサは実にすばらし人だったよ。なにせ、私の研究を完成させたのだからね。だが、君は失敗作だった。実の娘。アリシアとは似ても似つかない。まぁ私とっては十分完成だがね。」

「・・・」

「しかし、そのアリシアも実は蘇っていたそうじゃないか。彼の手によって」

「なんでお前がそれを・・・」

表示されたのは彼の姿。

「彼もこの計画には関わっていたのだよ」

「知っている」

前に言っていた。自分も関わっていた。けど、そんな彼女を止められなかったと。

「そうか。けど、彼もまた彼女に協力はしていたがその研究も自分のものにするためでもあった」

「どうしてそう言い切れる」

「彼と私はちょっとした知人みたいな関係でね。私の研究もちゃっかし盗んでいたのだよ」

「なんで・・・兄さんが」

なんで兄さんがスカリエッティと

「さぁね?私も彼の研究をみせたことがあったが私より異常だったよ」

「兄さんはそんな人じゃない」

「違うといいきれるかい?彼はね私と同じ立場いるんだよ」

「違う!・・・ライオットブレード!」

『ライオットブレード』

「兄さんは・・そんな人じゃない」

ザンバ―が小さくなり片手剣になった

「はぁ！」

拘束されていた赤い糸斬り裂く

「それが君の切り札か。けどまぁ・・よく持っているってところかな」

アジトもゆりかごとおなじＡＭＦ化になっている。

「しかい、いいのかい？ここで使っても。プロジェクトＦは使えば便利なものでね。私のコピーはすでに戦闘機人たちの体内仕込んである。どれか一つでも生き残ればすぐに私の記憶が蘇る」

「馬鹿げている」

「そうでもないさ」

「ッ」

「そして、この事件は私を含め戦闘機人全員を捕えなければ終わらないのだよ」

「な！」

再び赤い糸で身体を拘束されるフェイト

「君と私実に似ている。君が保護した二人も戦うために教えこんだ。私と同じさ」

「違う！」

「そうかい？あの二人もそうだろう。自分をみてくれる人がいなければ自分に愛情を注いてくれる人がいないけばと。君も同じだろう？母親の愛情を、笑顔のためあの事件を行った。しかし、結果は・・」

「違う！母さんは・・母さんは私を・・娘だと言ってくれた！」

『オーバードライブ』

「「「！？」」」

『真・ソニックフォーム』

「母さんは私を娘だと言ってくれた。今でも私はプレシア・テスタロッサの娘に誇りを持っている」

二刀になったライオットザンバーを構えるフェイト

「装甲が薄い。当たれば堕ちる」

「はい」

「悪いけどこの姿になった以上にあなたたちに勝ち目はない」

「挑発ですか？」

「自身もいいところ！」

セッテがまず斬りかかるがその瞬間にセッテは落とされた

「な！とらえきれない！」

「終わり！」

「ぐわ！」

トーレも落とされ残されたのはスカリエッティただ一人

再びザンバーに戻し斬りかかる

「あー欲しい。実に欲しかったよ。この力」

「ッ！」

素手で彼女の攻撃を受け止める彼

「けど、これで君はここで足止めを喰う。私がゆりかごに託した夢は終わらんよ！」

「ッはぁあああ！」

ザンバーをバットのように振るい吹き飛ばしたフェイト。

「広域次元犯罪者・ジェイル・スカリエッティ。あなたを逮捕します」

同じころ、ヴェロッサとシャッハによってウーノとセインは保護された。

しかし、まだ終ってはいない

フェイトｓｉｄｅＥｎｄ

少し時間を戻しゆりかご駆動炉。

「はぁはぁ・・ヴィータちゃん大丈夫？」

「それは・・はぁはぁ・・こっちの台詞だ」

二人は傷つきながらも駆動炉にたどり着いた。
そして、ヴィータは新たに追加したシェアシュテールングスハンマーでユキナモード天・天元突破・ドリルクラッシャーで駆動炉を攻撃するが・・・
傷一つ付かなかった
さらに防衛機能が働き攻撃に専念できない

「ぐ・・もう・・カートリッジも少ない・・ヴィータちゃん！」

「あたしは・・・まだやれる・・」

―ああ、言ってるけどさっきのガジェットの所為で胸を刺されてさらに体力も消耗してる。それに時間もない・・アレを使うしかないか・・

・・・・・

八神家が引っ越しする前。ユキナは最後のバイトを迎えていた

「3」

「2」

「1」

ドッカーン！

「・・・光・・」

「光だ！」

「やった開通だ！」

トンネル開通工事。最後の仕上げも今日で終わった

「やったな姉御！」

「うん！」

『ははっは！』

皆で笑い喜びあう

「ユキナ、ちょっといいか」

「なに親方？」

ユキナは親方と一緒に彼の部屋にきた

「どうしたの親方？」

「今日で最後。レイさんの言う通りお前は大した奴だよ」

「えへへ」

素直に喜ぶユキナ

「ユキナ、最初のお前はただ掘るだけだった。けど、お前はもう声が聞こえるまでに成長した」

声

それは大地の声とも言いかえることができる。ごくまれに穴掘りし、ユキナみたいにドリルを使うものにはその声が聞こえると言う。ドリルだけではなく穴をほるものには聞こえると言う少しちょっとした伝説

「うん。声が聞こえてから掘るのが物凄くスムーズにいった」

「だから、もうお前は一人前のドリラーだ」

「ドリラー。へへ、カッコイイかも」

「それで、俺からのプレゼントだ」

小さな箱を渡されたユキナ。あけるとそこにはドリルペンダントがあった。いや、違うとユキナにはすぐわかった

「親方これって・・」

「レイさんに頼んでデバイスに改造してもらった」

「じゃあ、親方も？」

「俺はそんなもんじゃない。今も昔も穴掘り・・いや、なんでもない。そうそう。お前、このサングラスも欲しがってたな」

台に飾ってあった赤いサングラス。親方はそれをいつも大事にしていた

「いいの？」

「ああ。多分、兄貴も喜ぶ」

「？」

「なんでもない。それじゃあ、ユキナ。これからもがんばれよ」

「うん！」

・・・・・・

親方・・。

アレからというものこのもう一つのドリルを使いこなすために特訓してきたけど成功はしなかった。

「けど、やるしかない！ヴィータちゃん！いけるよね？」

「あったりめーだ。馬鹿野郎！」

「私が絶対貫いてみせる。だから、そこをヴィータちゃんが！」

「おう！」

っていったはいいがもうシェアシュテールングスハンマーは駄目だ。
だから、アレしかない

「アイゼン、いけるな」

『おっしゃあああああ！』

ギガントフォームに変わり黄金に輝きだすアイゼン。それはヴィータも同じだった

「こっちはいいぞ。ユキナ！」

「うん。・・・お願い力を貸して親方・・」

サングラスを頭にかえ首元にあるもう一つドリルを握る

「螺元起動！」

紅蓮と同じように杖状態で姿を現す螺元。

ここまで順調。次が・・

『お前が信じるお前を信じろ』

過去にそんなことを言った人がいたっけ。今はいないけど。
昔はわからなかった。自分が信じる自分ってなに？けど、今ならわかる。

「自分が信じられないで誰かを信じるなんて無理だよね！」

そうだよね、レイ

『そうだぜ、ユキナ！』

紅蓮が応えてくれる

『俺はお前を信じてる。だから、絶対出来る！』

「うん！いくよ！融合装着！」

二つの杖を上に掲げる。
するとユキナ自身も光に包まれた

「これが・・私たちの新の姿。新・天元突破『紅蓮螺元』！」

それはモード天と同じ姿と言えるかもしれない。しかし、一番の特徴はドリルだ。赤い一筋の螺旋と元々あった色と混じりあっている。なによりユキナの魔力色はオレンジ。しかし、今は青緑を発している

「・・・・」

神経を研ぎ澄ます

どこ・・例え無傷でも今まで私たちが攻撃したところには少しのダメージが残ってるはず
相手は大地じゃないけど・・今の私なら・・・

「そこだ！貫けぇえええええええええ！」

『うぉおおおおおおお！

ギィイイイ！

ドリルの先端が駆動炉を覆っているシールドと接触する

ドッカ―ン！

「ユキナ！」

爆発が起き状況がつかめない

爆煙の中からユキナが落ちた

「ユキナ！？」

「・・・大丈夫・・・ヴィータちゃん・・今！」

「！アレは・・・」

ドリルの先端がシールドに喰いこんでいた

『長くはもたねぇ・・』

「ユキナあとは任せろ！いくぞ、アイゼン！G．S．W．起動！」

『よっしゃあああああ！』

・・・・・・

「G．S．W．？」

「そう。G．S．W．（グラビティ・ショック・ウェーブ）。黄金の鉄槌状態で発動できる追加システムだ」

「ふーん。で、威力は？」

「どんなもので破壊できる。ただし、使用限度は一回だ。アイゼン自身の負担も大きいし、お前にもどんな影響がでるかもわからない。万全状態で使えれば申し分ないが最悪の状態で使えばどうなるかは・・想像がつかない」

「大丈夫だって。あたしを信じろって」

「・・そうか。けど、無茶するなよ？」

・・・・・

ごめん、兄ちゃん。やっぱ無茶するわ

「もっとだ！もっともっと！」

『わかってるってぇの！』

今までにない輝きを発するヴィータ

「いけぇえええええ！ゴルディオン・パニッシャー！」

簡単にいえばトンカチと釘だ。ドリルが釘の役目をし、そのままヒビが地点から全体に広がる。

G．S．W．の能力はここからだ。叩いた瞬間重力波が全体を包み込み特赦な電波つまりウェーブでさらに包み込み

「これで、終わりだぁあああああ！」

最後の一振り。

それにすべての思いを込めた

DON！

さらに眩しい光を放つ

『・・・俺たちの勝ちだ・・』

ドッカーン！

駆動炉の破壊に成功した。

しかし、ヴィータは力尽き堕ちる

「・・・あたしらの役目もここまでだ」

「―ヴィータ！」

「・・はやてちゃん・・」

「はやて・・・」

ついさっき内部侵入したはやてが合流した。
ヴィータを優しく抱いた

「ふたりともよう頑張った」

はやては傷ついている二人をみて涙を流していた

「泣くなよ、はやて。まだこれからだ」

「うん・・」

同時期にフェイトによってスカリエッティは逮捕された。そして、ティアナによってノーヴェ、ウェンディ、ディードも保護された。
残っている戦闘機人はクアットロ、ギンガのみ。
そして、ルーテシアもまだ暴走したまま。さらに、ヴィヴィオもまだなのはと交戦状態。
あとは順調にことが運ぶ予定だった。
ある並列世界ではゆりかごも破壊される。そういうことになっていた。しかし、そうはならなかった。
そして、とうとう彼らが姿を現す―

第７７話　それぞれの戦い　後篇（後書き）

『フィリイヴな時間だＺＥ！』

仁「はい、ガオガイガ―とグレンラガンです」

フィ「・・まぁ世間でもヴィータはそういうネタあつかいじゃない？」

イヴ「きっとユキナの紅蓮を出した時点でそういうことを予想したと思う」

仁「そうかも。それと近々アンケートを取るつもりです。内容はその由来にしたオリキャラの名前の予定です。一人とかならいいんですが５，６人ぐらい出す予定などで皆様のお力を借りたいと思います。できるだけ早くアンケートを募集しますのでお願いします」

フィ「じゃあ、また次回で」

第７８話　終わらぬ戦い

カオスｓｉｄｅ

「駆動炉が落ち、奴も逮捕されたか・・・。頃合いだな」

彼はどこかですべてを見ていた。クアットロと同じ、それ以上のもので。最初から最後まで。

エリオ・キャロ・ルーテシアｓｉｄｅ

「ひとりぼっちは・・いやだぁあああ！」

「ルーちゃん！」

暴走するルーテシア。彼女の思いに応えて暴走するガリュー、地雷王、白天王。

『ルーテシア、もういい』

「「カオス！？」」

通信ではなく擬似映像で現れたカオス。

「ひとりは・・ひとりは・・！」

『お前はもう、一人じゃない。メガーヌも帰ってくる』

「ほ・・んと？」

『本当だ。お前はもう・・一人じゃない。だから・・今はお休み。ルーテシア』

「・・・ん・・」

彼の言う通りに彼女は眠った。ガリューたちも戻っていた

『そこの竜騎士。この子を頼む』

「え・・お前は一体？」

足元から消えかけている彼。そんな彼が消える間際に

『そうそう。いいことを教えてやろう。お前らの隊長の所にいきな。面白いものがみれる』

最後にそう言い残し彼は消えた。

「エリオくん・・」

「どう意味かわからないけど、いこう」

二人はルーテシアを保護し、アジトにいるフェイトのもとへ急いだ。

エリオ・キャロ・ルーテシアｓｉｄｅＥｎｄ

スバル・ギンガｓｉｄｅ

「ギア・エクセリオン！」

マッハキャリバーに蒼い翼が現れギンガに突撃するスバル
ギンガも構えそれを迎え撃つ

―ギン姉を助けるためには魔力ダメージでやるしかない！

衝突する二人。互いの攻撃を受け止める二人。ギンガの右腕はドリルのように回転し始める。

「ディバイン・・・バスー」

―ギンガ、もういい

―・・・はい

―すまなかったな

―いえ、私は・・あなたの力になりたかっただけですから

―・・・ありがとな

「・・・私の役目もここまで」

「！ギン姉！？」

しかし、発射態勢入っているためもう止めることはできない。ギンガはバリアを解きもろにディバインバスターを喰らった

「ギン姉・・どうして!?」

「・・ごめんね・・私はあやつられてなんかいなかったの」

「え?」

「私はピエロだったの。役者を舞台に引きつけるための・・・」

ギンガは話した。カオスによって多少の改造はされたけどそれはスカリエッティを欺くためで、人格はそのまま。私にこだわっていたのは私をスカリエッティから助けるため。

「でも、カオスは犯罪者なんだよ!?」

「彼は・・・違うわ。確かに人を殺してきた。私もそう思っていた。でも、犯罪者しか殺してないのは確かなの。私、調べたの。どれも生死問わず（デッドオアアライブ）」

「え、それって・・」

結果的に言えば彼のあやめた犯罪者たちは殺しても問題はないということだった。なぜ、彼が犯罪者扱いされているか。それは管理局が勝手にそうしているだけだった。

「もうじきこの事件も終わるわ」

「なら、私も」

「その必要はないの。直にゆりかごは止まるわ。そして・・・」

ギンガはスバルの抱かれながら空を見ていた。
まだ、戦いが続いている空を

スバル・ギンガｓｉｄｅＥｎｄ

玉座の間ｓｉｄｅ

玉座の間ではいまだになのはとヴィヴィオの戦いが繰り広げられていた。
防戦と拘束魔法でヴィヴィオと戦うがヴィヴィオはそれを破りさらに物凄い速度で学習していく。容赦ない攻撃をするヴィヴィオ。

そんな親子の潰し合いをゆりかごの最深部で笑いながらみているクアットロ。

「本当滑稽ね。それに駆動炉も壊されたけどすぐに再生するからいいし。それにしても皆駄目ね。最後に残ったのは私だけど・・私がいればなんとかります。そうですよね、ドクター」

自分のお腹を優しく撫でるクアットロ。

『クアットロ』

とまさか通信してくるとは思っていなかったあいつから通信が入っ

た。

「あら～カオスじゃない。どうしたのかしら～」

『まだ、聖王と六課の魔導師は戦っているな？』

彼は知っているはずなのにあえて聞いた

「・・・そうですね～」

『戦っているな！』

今度は少し強めに言ってきた

クアットロは面白くないと舌うちをした

「ええ、まだ互いに殺し合ってますよ～」

『そうか。俺とやりあう前につぶれても困るしここで閉幕だな』

「あなた何を・・！」

するとまるで今まで動いていたものいきなり止まるような音がした。

『悪いがガジェットの操作系統とゆりかごのシステムはハッキングさせてらったよ』

外の映像をみると次々に起動を停止していくガジェット。

「ありえない、どうしてゆりかごまで！ゆりかごは聖王の命で動くのに！？」

『ゆりかご起動キーが聖王なら止めるのもまた聖王。しかし、ちょっとした裏技があるんだよ』

「裏技？そんなもの」

『お前がそこから聖王をゆりかごを操っている。そこにハッキングし、亡霊（ゴースト）を流したのさ』

「亡霊？」

こいつは一体何を言っている？なんだかんだで最終的には聖王の命がなければゆりかごは止まらない。それ以外に存在しない

『ゆりかごのシステムも一種のＡＩまたコンピューター。聖王がいて初めて起動する。だから、ハッキングも可能』

「例えハッキングできたとしてさっきも言った通り聖王の命令ではないと受けつけないのを知らないわけじゃないでしょうに」

口元しか見えない彼の表情はまさにニヤリとしていた

『そのための亡霊。その亡霊とは前聖王のデータつまり遺伝子データを組み込んでいるのさ。だから、亡霊をゆりかごのシステムが聖王と判断する』

「ありえない！前聖王の遺伝子データ！？聖骸布に僅かに付着していたものしか存在していないわ！

『確かに“現在”はな。俺には当時のデータがあるんだよ。実際に

本人から採取した血液が』

「そんなバカな話を信じろと！？」

『現に俺はゆりかごのシステムを掌握した。それに・・・お前の位置も彼女のデバイスに転送したよ（笑！）』

「！」

『マスター！最後の戦闘機人の所在地が判明しました！』

「！？」

―そんな速い。サーチャーが見つけるのにしては速すぎる。けど、今は・・

「ヴィヴィオ少し待っててね！」

ヴィヴィオを拘束しクアットロがいる場所に照準を合わせる

「でも、ここは最深部。ここまで来られる人間なんて」

『あいつにそんなことは必要ないさ。壁ごとぶち抜く』

「―！」

いつしかの空港火災事件。彼女はそれを行っていた。

それを知って恐怖するクアットロ

「ブラスター3！」

最後のブラスターが解かれる

「ディバイン・・ッ！」

「助けて！あなたは私たちの―！？」

自らの危機におびえ今まで貶していた彼に助けを求めるクアットロ。

『残～念。もう、それはお終い。それと最後に一つ』

「バスターッッ！」

「！？」

『俺、お前のことが大嫌いだったんだよ！』

「貴様ァアアア！」

壁ごと撃ち抜いてくるディバインバスターによってクアットロは倒された。

しかし、クアットロを倒してもヴィヴィオの体内にあるレリックが暴走する。

「ヴィヴィオ・・・」

『聞こえるな？』

「？」

ウィンドが現れるがサウンドオンリーと表示されている。声は確かにカオスのものだった。

『彼女の体内にあるレリックが暴走しているだけだ。適当に魔力ダメージだけで破壊すれば止まる』

「どうして、あなたが」

『俺が困るからだ。そいつを終わらしてさっさと来い。待ってるぞ。“なのは”』

「！・・・ヴィヴィオ、少し痛いの、我慢できる？」

「・・うん・・」

「いい子だね。それじゃあいくよ！」

そして、なのはの切り札でもあるスターライトブレイカーによって

体内のレリックを破壊した。
直後はやても到着しクアットロを保護しゆりかごを後にした。

フェイトｓｉｄｅ

「ゆりかごが止まった？なのはたちが上手くやったの？」
でも、おかしい。完全に機能が停止しているようにも見える
「くく、そうか。彼か。そうでなければ説明がつかない」
「なにが可笑しい！？」
「なに、結局私も利用されていたんだよ」
「一体誰に―！？」
刹那
拘束していたスカリエッティが消えた。いや、連れ去られた。
『まだ追えます！』
「うん！」
フェイトもすぐに追った。

―しかし、一体だれが・・・

フェイトｓｉｄｅ

なのはｓｉｄｅ

脱出したなのはとやてはヴァイスが乗ってきたヘリに一時合流した。
そこにはスバル、ティアナそしてギンガいた

「ヴィヴィオをお願い」

「わかりました。けど、なのはさんは・・」

「私はまだやらなくちゃいけないことがあるから」

ボロボロの身体なのに彼女は笑顔で応えた。

「なのはさん」

「ギンガ・・！？」

「あの人が待っています」

「・・うん。それじゃあ行ってきます。はやてちゃん」

「うん」

なのはとはやては再び空へと向かった。

「なのはちゃん・・」

「うん・・」

「待っていたぞ」

「「!?」」

目の前にいきなり現れたのはハーデスだった。
彼女はついてこいといい二人は彼女のあとについていった。
場所はそんなにゆりかごから離れていない場所だった。そこには彼が・・待っていた。

「よく、来たな」

「カオス・・・」

「だが、俺たちは次だ」

「次?」

「なに。ちょっとした姉妹喧嘩だ」

二人のもとにも表示される映像。彼女たちは今傍観者となっていた。

???side

アジトを出て森に入っていた。とスカリエッティは認識していた

「まさか、君が助けに来るとは思ってもみなかったよ。サレナ」

彼を助けたのはまさしくサレナだった。

「助ける？勘違いしないで。あなたはただの餌よ。舞台にあの子をおびき出すための」

「そうかい。じゃなにかい？用がすんだら殺すのかい？」

「それもいいわね。私はあなたが大嫌いだからね」

「くく」

サレナある程度見開いた場所にでると足をとめた。その数十秒後。フェイトも追いついた。

「サレナ・・スカリエッティをどうするつもりだ！？」

「別にこんなやつどうでもいいのよ」

「「フェイトさん！」」

「エリオ、キャロ！？」

二人は彼に言われここまでやってきた。しかし、フェイトはどうして二人がここに来たのかわからずサレナは薄々わかっていた

―余計なことを・・・

「ま、そんな部外者いようといなかろとどうでもいいけどね。さて、じゃあ、こいつを―」

サレナはハルバードをスカリエッティに向けて振り下ろした

「止めろーー！」

エリオが咄嗟に反応して止めに入るが何者かに止められ先いた場所に吹き飛ばされた

「エリオくん！」

「う・・」

しかし、スカリエッティの首は落ちていない

「まぁこんなヤツ殺す価値もないんだけど」

「大丈夫ですか？」

「うん、ありがとうリニス」

「・・・・リニス」

そう、そこに立っているのはリニスだった。黒い強化服に身を包み先程のエリオの攻撃を弾き飛ばしたのも

「久しぶりですね。フェイト」

「どうして、フェイトさんの名前を・・」

「そろそろ、外してもいいんじゃない？」

フェイトは動じてはいなかった。リニスのことはシャマルから聞いていた。あの自分が助けた猫がリニスでリニスによって六課のデータを盗まれさらには襲撃の手助けをしたと。

「・・・そうね」

仮面を外すサレナ。仮面をとるとそから綺麗な金色の髪があらわになった。

その素顔はかつての姉だった。

「―アリシア」

「久しぶりね。フェイト」

前の間に立つは自分の姉で・・そして、敵だった。

アリシアｓｉｄｅＥｎｄ

第７８話　終わらぬ戦い（後書き）

『フィリイヴな時間』

仁「どうもです。とうとうアリシアが登場。次回は姉妹対決になります」

さて、ここでアンケートを実施したいと思います。
夜明け団の幹部の名前を募集します

『火の魔術師』『水の魔術師』『風の魔術師』『大地の魔術師』の名前を募集しｍす。これらに由来するものやなんでもかまいません。
あとモデルも教えいただくとありがたいです。
フルネームでなくてもかまいませんのでお願いします

第７９話　アリシアとフェイト　前篇（前書き）

まずこれを読んでアリシアを嫌いにならないでください・・・

悪役のためそういう台詞を言っているので。ちょっと書いてて切なくなりました

第79話　アリシアとフェイト　前篇

「久しぶりね。フェイト」

立ちはだかるはもう一人の自分であり大切な姉。行方不明となり消息を絶っていた彼女が今自分の前に立ちはだかっていた。

「フェイトさんとそっくり？」

「そんな人形と一緒にしないでくれる？」

「！」

かつて母に言われた言葉と同じ言葉を言う姉

「フェイトが私にそっくりなのよ。プロジェクトFで生み出された私のクローン」

「・・・・」

「そういえばあなたもクローンなのよね？死んだ子供を生き返らせたくて生み出されて・・・結局見放された可愛そうな・・・人形！」

「！一それ以上・・・言うな」

彼女の言い方はかつての母とまったく同じだった。

「事実を言ってるだけじゃない。私とそっくりに造られてけどそれは偽物だった。あの人が言ってたわ。器を似せても同じ者は生まれないって」

「黙れ！」

「・・・そういえばあなたは執務官になったんですってね」

「・・・」

いきなり話題を変えた。

「執務官になってその二人みたいな子を保護して・・立派ねぇ。自分と同じ思いをしてほしくない？傷ついてほしくない？本当立派ねぇ。けど・・・反吐が出るわ」

その場でくるくる回るアリシア

「例えフェイトさんのお姉さんでもなんでそんなことを平気で言えるんですか！？」

「・・・あなたたちは運がいい。こう言ってもわからない？」

「運がいい？」

「だって、そうでしょう。捨てられた自分を助けてもらって愛情を注いでもらって・・・でも、あなたたちみたいな子はこの世界に何人もいるのよ！」

手を広げまるで役者のようなふるまいをする彼女

「あなたたち、外の世界をみたことがある？ここみたいに平和で誰もが笑っていると思う？違うわ！管理されていない世界なんて戦争、戦争、戦争。戦争がある世界でもない世界でいるのよ。捨てられた子供。路地の暗い隙間の中か光がともった街をみる子供。戦争で一人になってしまった子供。その中であなたたちは運がいいわね～。自分を見てくれる人がいて、愛情を注いでくれる人がいて」

「・・・結局なにが言いたいの？」

「わからない？結局あなたたちがしているのは管理されている中だけってことよ」

「それは・・」

否定はできなかった。管理外世界に赴くことは滅多にないだろう。次元航行部隊のように世界を見回っているときになにか事件がないかぎり訪れない。最初の私となのはのように

「私は見てきた。この目で、この足で！」

彼女はさらに語る

多くの管理外を渡ってきた私たち。
戦争がある国やない国。ほとんどがそういう世界ばかりだった。私たちがそこで目にしたのは裏路地で蹴られる子供。唾を吐きつけられる子供。食べ物に飢えている子供。戦争で家族を失ってなく子供。怯えて隠れている子供。武器をとって戦う子供まで。

「私はね。そういう子供たちをみてね、彼が手を差し伸べるとは思

わなかった。どうしてだかわかるフェイト？」

「・・・一人に手を差し伸べればそれに集るものが次々と出てくるから・・・」

「よくわかったわね。さすが、私の“妹”ね（笑顔）」

「・・ッ・・」

「でもね、彼は手を差し伸べたの。何も言わずただ手を。彼は自分が届く者は皆助けた。けど、限界はあった。全員を救うなんてその世界全員を救うのと同じ。そこで彼がしたことは戦争の根源を断つことだった。戦争にも原因がある。善悪がある。彼はそれを見極めた。そして、あなたたちも知っての通り『英雄』とまで言われたわ。彼がしてきたことはね？あなたたちができないことを代わりに一人でやっていることなの」

さらに彼女はいった。彼が管理局を離れているのはそういうことをするためでもあったって。

私にはアリシアの言っていることは正しいと思う。けど、認めたら私が、ううん、私たちがやってきたことが無駄ってことになってしまう

「だから、わたしはその子たちが運がいいと言ったの。たった一人でもあなたたちは保護という名目でいきる場所があったわけでしょう？けどね、私たちが観てきた子供は家なんてない。水は泥水を飲んでいる子供だっていた。だから、あなたたちは運がいいの。場所があって尚且つ自分を助けてもらえて」

「そ、それはあなたたちが助けた子供だって」

「ええ。そうね。けど、あなたたちより立派に生きていたわ。必死に生きていた。駄々をこねず生きようと努力していた。だから、あなたたちは・・中のことしかみていなくて外のことなんて目も傾けない」

エリオとキャロもそしてフェイトも何も言えなかった。そうだとしか思えさせざるをえなかったからだ。中、いや、目の前のことしかみていない。そういうことだった。

「さて、前置きはここまで。そろそろ聞きたいんじゃない？私たちがあなたの前にいる理由」

「・・どうして、犯罪者なんかになったの」

「？ああ、“アレ”ね。ただの建前だから。本当はそこじゃないわ」

「？・・・建前？」

「私があなたの前にいる理由。それはね？あなたを・・・殺すためにいるからよ」

「！」

「私はね・・あなたが大嫌いだったのよ！」

―フェイト・・私はね。あなたが・・・大嫌いだったのよ！

何度も母と同じことを言う彼女。しかし、その言葉今までより心に

響いた。
あまりのことで膝をついてしまったフェイト。声をふるえながら言った

「・・どう・して」

「どうして?簡単よ。あなたが母さんのことをその程度しか思っていなかったから」

「―!そんなことない!今でも私は母さんことを!」

「嘘!」

「!」

その言葉今までのと違い重みがあった

「１０年前、あなた私に言ったわよね?『どうして、リンディさんの養子にならなかったの』って」

１０年前、あの公園で私が聞いたこと。

「あの時言ったことも事実だけど、本当はね?母さんのことが忘れなかったらよ。私には母さんを忘れられなかった。まだ、母さんが私の母さんだけだって。なんていうのかな。心の整理?区切りがついていなかったのかな。けど、私はあの人の養子になるつもりは最初からなかった」

「・・・それは私だって・・」

「違う！違うわ、あなたは違う。リンディさんから養子になるって話を聞いたときのあなたの顔。今でも覚えているわ。とても嬉しそうな顔だった。私には母さんのことなんてそれぽっちにしか思ってなかったんだって。そう思った」

「違うよ！私は・・確かに嬉しかったよ！？けどね。私だって」

「迷ってた？私にはそうは見えなかったけどなぁ。あのあとリンディさんに優しくしてもらってまるで“母親”のようであなたはそれに甘えていた。だって、そうよね。母さんがあなたにしたことは調教だけだもの。失敗したら鞭で叩かれて優しい言葉なんてかけて貰えなくて・・・。そんなことをされたら誰だって甘えるわ」

「違う・・違う！」

フェイトは否定し続けた。確かに母さんにはそういうことしかして貰えなかった。けど、私を娘だって言ってくれた

「それにもう一つ理由があるの。それはね私が死んでからレイの傍でずっと母さんをみていたときよ。私を生き返らせるために研究する母さん。だからね、あなたには期待していたわ。母さんをきっと笑顔にしてくれるって。けど、無理だった。それから、私はあなたが嫌いになっていたのよ」

「・・・」

「もう、お喋りはここまでにしましょう」

アリシアはフェイトに近づいていく。

一歩一歩ゆっくり。

「じゃあね、フェイト」

ハルバード振り下ろすアリシア

「「フェイトさん！」」

キィン！

「・・・私は・・・アリシアがなんて言おうと私はいまでもプレシア・テスタロッサの娘！母さんがそう言ってくれた！例えあの時闇の書がみせた夢だとしても母さんは私を娘だと言ってくれた！」

ハルバードを弾きたちあがるフェイト。

「・・それが・・それが何だって言うのよ！？母さんはあなたを許したけで娘だとは言っていなかった！最後に笑顔で逝った母さんの顔は今でも覚えてる。あなたにはわからないわ！目の前で逝った人が笑顔をのまま逝く姿なんて！」

「・・もう、終わりにしようアリシア。死んだ人はもう帰ってこないんだよ」

フェイトが放った言葉アリシアの逆鱗に触れた

「どの口が言ってるのよ！」

再び斬りかかるアリシア。互いにアックス形態で攻防する二人。

「死んだ人は帰ってこない！けど、私たちの心の中で生き続けてる

！思い出と一緒に！」

「だから、嫌いなのよ！そういう甘ったれたことを言う奴らは！」

「ぅ！」

フェイトが少し押され気味になりエリオが前にでようとするが

「フェイトさん！」

「止めなさい！」

彼の前に立ちはだかるリニス

「どうして止めないんですか！？あなたは使い魔でもわかってるはずです！」

「これは二人の問題。あなたたちが手を出していいことではありません！」

「でも・・！」

「黙りなさい！」

「「！」」

「もう一度いいます。手を出さないでください。これは二人の姉妹の問題なのです」

―姉妹の・・問題・・

エリオとキャロにはその言葉の意味がわからなかった。ただ、二人の戦いをみてることしかできなかった

過去になかったフェイトとアリシアの戦い。
得物は同じ斧でもリーチでいえばフェイトの方が長いし、最終的にはザンバーやブレードがある。逆のアリシアはどの形状も斧である。
しかし・・

「チェーンアックス！」

ダブルトマホークは上下に斧があり両刃である。その杖の部分が離脱し魔力でできたチェーンが上下に跳び出しアリシアはそれを振るう

「は！や！」

フェイトはライオットブレードに両手でもち弾きながら距離をとる。

「やるわね・・この８年でさらに腕をあげたじゃない・・けど、遊びはここまでよ」

「？」

攻撃を止めたアリシア。その場に立ち空を見上げていた。

―・・・リミッター外して

―いいのか？

―いいの

―わかった

「悪いけど、あなたはもう終わりよ」

『リミッター解除確認』

「？リミッター？」

アリシアにリミッター―が？

「いくわよ・・・」

ザ！

消えた。一瞬にしてアリシアの姿が消えた

―どこに・・！

「フェイトさん後ろ！」

「！」

咄嗟に反応してブレードを後ろにまわしその一撃を防ぐが―重い。

今までのより何倍も

「駄目じゃない、外野がそんなことしちゃ・・。ふふっふ。驚いた？私のリミッターはね。魔力とかじゃないの」

「え？」

「私の魔力はあなたみたいにSランクもないわ。精々ＡＡＡ。頑張ってSいくかいかないか。魔力でいえばあなたのが上ね。それに、嫌だけど母さん譲りの魔力変換資質『電気』もあるんだから」

確かにアリシアには魔力変換資質を持っているけどかなり微力。リニスのがまだ大きい。

もともとアリシアは魔導師としての才能はなかった。だが、それを彼が目覚めさせた。

「けど、私も魔力変換資質『大地』を持ってるわ」

「大地？」

聞いたことがない。確認されているのは電気、氷結、炎だけだ

「こういう風にできるわ」

ゴゴゴゴ　ドン　ドン

すると地面から浮きあがる土。バラバラに生えてくるそれは障害物になっていた。

「そして・・私には稀少能力『生命との会話』もある」

「稀少能力！？」

初耳だった。アリシアにレアスキルがあるなんて

「でもね、私はこれをあまり使わないの。使うと伝わってくるのよ。生き物たちの痛みが・・・」

ハルバードを持って優しく撫でるアリシア。少し悲しい表情を浮かべていた

「そして、私のリミッター。それは私自身の力を抑えるためのリミッター！」

また視界から消えたアリシア。今度は目の前。やはり反応するだけで精いっぱいだった。

「あなたも知ってる通り私は一度死んでるの。人間はね、日常では３割の力しか使えないの。それはそれ以上使えば自分の身体が持たないから。脳は私たちが考えているより有能なの。危険を察知して無意識のうちに枷をかけているんだから。けど、私は一度死んだことでその枷が外れたの。普段は出せない人間の１００％の力を出せる！」

フェイトの周りを消えたり現れたりを繰り返すアリシア。
どうみても挑発してるようにしかみえなかった。

「あなたのそのソニック・フォームでも追いつけないわ。それ以前で人間であるかぎり無理」

「きゃ！」

一瞬のすきをつき次々に攻撃をするアリシア。容赦がない。迷いがなかった。

「私は生きる亡者。だから、あなたは私には勝てない」

「そんなこと・・ない！」

「いえ、もう終わりよ」

アリシアはフェイトの背後に回り込んだ。フェイトですら知覚できない早さだった。そして、彼女は愛機を高く振り上げ躊躇いもなく振り下ろした」

「―ぁ・・・」

「「フェイトさん！」」

斬られその場に倒れるフェイト。それをみて二人がかけよろうとするがやはりリニスが止めた。

「離して！フェイトさんが・・フェイトさんが！」

「フェイトさん！」

「・・・・」

アリシアはただフェイトを見下ろしていた。

ああ、私負けちゃったんだ。結局なにもできないまま。

アリシアの言っていることは正しい。確かに私は、母さんのことをどこかで・・忘れたかったのかもしれない。私に酷いことをした母さんを。覚えていればいいのは優しい母さんのことだけでいいって思ってた。けど・・そうじゃないんだよね。アレも母さんなんだもんね。だから、アリシアの言っていることは正しい。間違っているのは・・私

―本当にそれでいいのか？

―！

声が聞えた。大好きなあの人の声が

―お前は、彼女に伝えることがあったんじゃないのか？お前たちの母の言葉を

―・・そうだ。例え、アリシアに殺されてもいい。けど・・・伝えなきゃ。あの言葉だけは―！

「・・・・！」

突如倒れていたフェイトの身体黄色の光に包まれた。
いや、魔力のようにみえるそれは魔力を通り越して雷そのものだ。

「これが・・彼がバルディッシュに搭載した、フェイトの変換資質

を引き出しそれを固定しさらに、増幅器で増大させ自らの身体を常時雷化・・・」

立ち上がりバルディッシュを手に取るフェイト。彼女は既に人を超えている。人と言う概念を超えている。だが、人の形をしている。

「その姿はまさに・・・雷神」

第７９話　アリシアとフェイト　前篇（後書き）

フェイトの雷化はネギまのネギの・・アレです。名前が思い出せない。
アレに近いようなものです。

本当は詳細を書いたほうがいいんですけど一通り終わるまでは無理ぽいです。
あとでまとめてやると思われます

あ、でも、フェイトの雷化の通称はゴロピカリフェイト、かみなりフェイト、ピカピカフェイト、ピカチュウとか・・・色々案があります。

第８０話　アリシアとフェイト　後篇（前書き）

この話で姉妹喧嘩は終わりです。

この話は互いの認識の違い。そして、姉妹との関係を再認識させるのが目的でかきました。

それではどうぞ

第８０話　アリシアとフェイト　後篇

「雷神？」

「そう、フェイトは今雷そのものになった」

身体全身が光り輝きピリピリとまるで電気を内外へ放出してるような感じだ。そう、まるで黄色いネズミが電気ショックをするかのような。

―・・・余計なことを。けど・・・まぁいいわ

フェイトが覚醒したのは彼の横やりがあったということはなんとなくわかった。
けど、そんなことはどうでもいい

「さぁ、見せてみなさい。あなたの力―！」

今度はアリシアがそれを目の当たりにした。一瞬で視界から消え去るフェイト。

「ハーッッ！」

「ッ！」

ライオットブレードを振り下ろすフェイト。ブレードも雷を帯びている。まさに雷剣。

それに少し触れただけでまるで静電気のようにピリッとくる。

「この！」

弾き返すがすぐに消え今度は左。視力ですらもう人の域を超えているアリシアにとって捕えらないわけがなかった。

「そこ！」

しかし、それは残像だった。

―スピードは私より上！？いくら、常時雷化になったからって・・

「捕えられないなら・・捕えるまで・・『フロータ・ロック』」

アリシアは自分の周りに障害物となる岩を出した。あちこちに現れるだいたいサッカーボールぐらいの大きさの岩が浮きその周りに電気を帯びている。

―今のフェイトが雷ならきっとすれ違ったときに反応するはず・・

「私の攻撃が接近戦だけだと思った？」

「！」

「サンダ―ボルト！」

上空から降り注ぐ雷。アリシアはそれを回避するが不規則に降り注ぐ雷を完全には避けきれない。

「はぁはぁ・・・やるじゃない・・。ハルバード、Ｆｉｎａｌモード」

『ヤー』

かつてみたことがあるそれとは大きく違っていた。いや、小さくと言っていいだろう。前にみたそれはヴィータのように巨大化し杖全体を魔力が覆っているものだった。しかし、それは今は普段の状態で魔力を覆っている。

「別に巨大化しないとできないわけじゃないのよ・・・」

アリシアも余裕がなくなってきた。放出する魔力をとどめて縮小化はものすごい負担がかかっていた。

「そろそろ終わりにしよう、アリシア」

姿を現したフェイト。彼女もまた二刀あるライオットブレードを一つにし構えた。

「フェイト・・・私ね」

「？」

最後になって彼女はあの日の優しい声で喋った

「私はあなたが大好きで大嫌いだった。あなたの笑顔が大好きで、私の妹であるあなたが大好きだった。けど、母さんを苦しめて、レイからたくさん心配してもらってたくさんの友達がいるあなたが大嫌いだった！」

それは告白。今まで溜めてきた思いをぶつけた。そして、フェイトも

「私もアリシアが大好きで大嫌いだった。私のお姉さんでいつも私を妹としてみてくれたアリシアが大好きだった。でも、母さんから愛されてて、兄さんといつも一緒にいるあなたが大嫌いだった！」

互いのことを大好きでけど嫌いで・・姉妹だからまた一人の少女として。けど、それは誰もが思っていることなのかもしれない。

「だから・・」

「終わりにしよう」

少しの間静かになった。その間がとても長く感じられた。

ねぇ、フェイト

なに、アリシア

私たち姉妹なのになんでこうも違っちゃったのかな

それは、私たちが姉妹で一人の女の子だからかな

そっか

うん

「「・・・・」」

「我に断てないものはない。それが―妹であっても！ハァーッ！」

「雷神一閃！」

一振り

それですべては終わった。

互いに反対の位置に立ち斬ったままの状態でいる。

「「・・・・」」

「・・ぁ・・」

バタリ

最初に倒れたのはアリシアだった。

バリン！

ブレードがおられフェイトもまた倒れた。いや、膝をついた

「アリシア！」

リニスが駆け寄る。

「「フェイトさん！」」

エリオとキャロもまたフェイトのもとへ駆け寄った

「アリシア、大丈夫ですか！？」

「・・うん・・。私、負けちゃったよ・・リニス」

「はい・・・」

「・・アリシア・・」

「・・フェイト・・」

フェイトも傷つきながらも立ち上がりアリシアの傍に近寄った

「闇の書の夢の中でね。母さんが言ったんだ」

―アリシアに伝えて。きっとあなたは私のことで悩むと思う。けど、私のことは忘れて。ううん、忘れることなんてできないけど、私の事は心なかに思い出の中にしまっておいて。だから、あなたのしたいことをしないさい。けど、無茶をしちゃダメよ。それとあなたはお姉さんなんだからちゃんと妹を守るのよ。だから、姉妹なかよく元気に暮らしてね

「例え、夢が見せた幻でも母さんの言葉には間違いはないから・・・だから」

「うぅ・・母さん・・私・・」

「だから、“お姉ちゃん”もういいんだよ？」

―私のことお姉ちゃんって呼んで！

初めて私たちが出会って私が最初にお願いしたこと

ああ、やっと呼んでくれた

私は心のなかでそうつぶやいた

「フェイト・・」

「お姉ちゃん！」

二人は抱きしめあった。泣きながら何度もごめんねと誤った。

「ごめんね。馬鹿なお姉ちゃんで」

「うん、そんなことない。私はお姉ちゃんのこと大好きだから」

「うん、うん。ごめん、ごめんね」

「私もアリシアの気持ちに気づいてあげられなくてごめんね」

「うん」

そんな二人の姿をみてリニスも涙を流していた

「本当に・・よかった」

「あなたたちもごめんなさいね。酷いことを言って」

「え、あ・・その・・」

「わかってる。演技だったんでしょう。でも、受け止めたから。アリシアが言いたいことは」

「うん。演技だけど本当のことを言ったまで。だから、あなたたちも心に気にとめてほしいの。中だけじゃなくて外のことも見てあげて」

「「はい」」

「じゃあ、いかなきゃ」

「え？」

アリシアはそんな身体でも立ち上がった。
リニスの肩を借りてなんとか姿勢を保っている。

「いこう、リニス。まだ、私たちにはやるべきことが残ってる」

「はい」

「二人とも、なんなの？やるべきことって」

「あなたたちにも見る権利はあるわ。二人の戦いを」

アリシアは空を見上げた。まだ、始まっていない。
でも、これから始まる。

彼と彼女の戦いが

第８０話　アリシアとフェイト　後篇（後書き）

アリシアの敗北
というよりこの戦いに勝ち負けはないと思っています。

フィ「これで一つの戦いが終わったわね。あとは・・」

イヴ「うん。そうだね」

仁「次回はいよいよ最後の戦いが始まります。次回も色々とたいへんそうです」

第８１話　彼と彼女の戦い（前書き）

※〈〉の部分がなのはで《》がクイーンの台詞です。

そういえば前回のアリシアとフェイトの会話のなかにでガンソードネタがあったのに気付いた人いるかな？

第８１話　彼と彼女の戦い

上空　ゆりかご付近

「どうやら終わったようだな」

先ほどフェイトとアリシアの姉妹喧嘩が終わった。彼はそれをみている最中一回も表情を変えていなかった。
興味がないから？それともこうなると初めからわかっていたから

「さて、俺達も始めようか。“銀”、邪魔をするやつが来たら頼む」

「わかった」

「それじゃあついてこい」

なのはは彼の言う通りについていった。その背中をみていることしかできないはやてとリイン。そして、銀

「もう、とったらどうや？」

「―そうだな」

しかし、声はハーデスのものだった。だが、仮面をとると

「・・・久しぶりですね。はやて」

かつての彼女の声だった。黒髪も仮面をとると彼女のもとの髪型に戻っていた

「はやてちゃん・・もしかして」

隣にいたリインがもしかしてと思い聞いた

「そうや。彼女が初代祝福の風。リインのお姉さんみたいなもんや」

「・・・お前が二代目か。はやて、いい子を生みだしたようですね」

「リインは立派に祝福の風や。・・・で、私たちも戦うん？」

フェイトちゃんとアリシア、そして、彼となのはちゃん。順番でいけば私たちも戦うものかと思っていた。

「いえ、私たちはただ見ているだけです。彼と彼女の戦いを」

「ただ、見ているだけなん？」

「そうです。私は、あなたに何かを抱いているわけでもないし憎んでもいない。私は、彼の邪魔をするものを排除するだけ」

「あの人は結局なにがしたいんや？」

彼女は少し黙りこんだ。けど、すぐに口を開いた

「一つは彼女を見極めるため」

「見極める？なにを」

「彼女が真にアレを使用するものとして相応しいか。そして、自分の隣に立つべき存在なのか」

―アレってレイジングハートのことか？相応しいとか隣にたつ？意味がわからへん

「二つ目は？」

「二つ目は・・ただ彼が戦いたいだけのかもしれません」

「戦いたい？」

「ええ。成長した彼女と本気の戦いを。彼はどこかで望んでいたのかもしれません。自分と対等に戦える者を・・・」

銀の瞳はどこか寂しく、悲しい目をしていた。

「八神部隊長！」

ヘリのプロペラ音が聞こえた。そこには先ほどわかれたばかりのスバルとティアナ、それにフェイト、エリオ、キャロ、そして、アリシアとリニスがいた。

「皆どうして・・」

「アリシア、お前が？」

「ええ、まぁ見る権利はあると思うの」

「そう・・だな。きっと他の奴らもどこかでみているだろう。さて、役者は揃った。そろそろ始まるだろう」

銀は二人が向かった空を見つめていた

そして、二人は先ほどから少し離れた場所へとやってきた。ここに着いていからカオスは喋らなくなった。だから、なのはが先に口を開いた

「・・仮面、とらないの？」

第一声がそれだった。

「・・・・」

だが、彼は応えない。

「・・始めようか」

「うん」

レイジングハートを構えるなのは。しかし、カオスは構えない

「・・今魅せよう。我が力を―古びた鎧（アルト・リーゼ）」

その姿は一度暴走した時に放ったディバインバスターを受け止めた

姿だった。あの時は一瞬でよく覚えていないが確かにこの形をしていた。

見る限りは分厚い装甲。右腕にはステーク。左手には三連ガトリング砲らしきもの。方は縦に分厚い。背部に機械の翼があった。そして、頭部には角が。そして、全体的に赤い。

「いくぞー！」

「！」

開始の合図を放った瞬間彼はまっすぐ突っ込んできた。なのは咄嗟に下に避ける。

「危なかー《馬鹿！なに気抜いてるのよ！？》え！？」

何故か彼女が言ってきた

「甘い！」

前を向いたまま彼は左手のガトリング砲を放った。弾は見る限り魔力弾だ。それは物凄い連射力だ。

「ッ！」

なのははただそれを避けることしかできなかった。雲に入れば雲ごと穴をあける

《それに一発でも当たったら動きを止められて終わりよ。とにかくシューターかなにかで反撃しなさい》

「ディバインシューター！」

なのはは疑問を持たずに彼女の指示に従う。

なぜ、彼女にそんなことがわかるのか。なのは自身少しは理解していた。自分が戦いに集中している分、彼女はそれ以外のことに目を向けている。私を通してこの戦いをみているのだから

「そんなものでこいつを貫くことはできない」

彼はシューターをもろに受けた。しかし、傷一つ使いない

「自動追尾ミサイルセット」

両肩の分厚い部分が上下に開く。

「発射！」

小型のミサイルが発射されなのはに向かって飛んでいく

《アレは逃げても無駄よ！撃ち落としなさい！》

「わかってる！ブラスタービット！」

４つのビットが飛んでいくミサイルを撃ち落としていく

「足を止めていいのか？」

「しまッ！」

「貫け！リボルバー・ステーク！」

右腕の回転式のカートリッジが3回程ロードしたように聞こえた。
ステークは魔力を帯びそのままなのはを貫こうとする

《馬鹿！》

咄嗟に避けたがジャケットの右肩を斬り裂かれた。
それだけで済んだのは彼女が一時的に身体を動かしたからだ

「はぁはぁ・・・ありがとう」

《油断するじゃないわよ。それと・・わかったわ。あの鎧の弱点》

「え？」

とりあえずなのはは動いた。彼女の言う通り止まったら今みたいになっていまうからだ。

《いい？アイツ最初の攻撃をしてから今みたいに突っ込んでくるまであの場所から動いていないわ。どうやら、あの鎧は前だけにはかなりの機動性があるけどその分重いのよ。そのためのあの分厚い装甲なのよ》

「・・つまり」

《そう、突っ込んでくるその一瞬が勝負。避けたら私が奴にデカイのをぶちかましてあげるわ》

「わかった！」

なのははは待った。ただ、止まるだけでは誘いだとわかってしまうだから・・・

「今度はどうかな！」

再び放たれたミサイル。それをなのはを待っていた。一直線に自分に飛んでくるミサイルをなのははレイジングハート構え、それと同時に彼もこちらに向かってくる体勢を整えていた。

「エクセリオンバスターッッ！」

ミサイルごとなのはは落としさらに砲撃は彼に当たった。しかし、彼はそのままなのははに向かって飛んでいく。まるで、一度動いたら目的まで止まらないもののようだった。

（今！）

なのははミサイルを落としたのも計算に入れていた。撃墜したミサイルの爆煙でこちらの姿はある程度見えない。それを利用した。だから、煙を抜けた一瞬で魔力を機動にまわした。

（今だよ！）

「！？」

『―そんなこと言われなくてもわかっているわ！』

Ｇｅｎｏｃｉｄｅシステムを即座に起動していたなのは。今の姿はなのはではなくクイーンだ。

「チッ！」

カオスは急停止しようとするがあの速度では止まるのにも少しの時間がかかる。

それが二人の狙いだった

『堕ちなさい！』

彼の顔の目前で手を構え彼女はあのディバインバスターを放った

『ふふっふ。これは私の身体を傷つけたくれた礼よ・・・』

（容赦ないね）

彼がいた場所では爆煙が彼を包み彼の鎧がぼろぼろとおちている。

『あなた、手を抜いたらこっちがやられるのわかってる！？』

（それはそうだけど・・・）

「もう、勝ち誇ったつもりなのか？」

『！』

なのはは風で飛ばされた。すぐ傍をまるでジェット機が通り過ぎたようだった。

「よく、アレを止められたと言っておこう。アレは元々突撃強襲用だからな。1対1には向いていないんだ。だが、それでもこの姿に

なるためには仕方がなかったと言えば仕方がないんだけどな」

『なに？今度は騎士のつもり？』

彼の姿は彼女の言う通り騎士だった。先ほどとは違いスマート、コンパクトとも受け取れる。白き鎧を纏い背中には白き翼が生えている。いや、よくみれば機械のような羽だった。

「『円卓の騎士（ランスロット）』それがこの鎧の名前だ。さっきのそうだがこれは魔法と機械を組み込んで造った魔道甲冑ってところだ。現にさっきミサイルとか出たろ？」

ご丁寧に説明してくれているがこちらとしては状況が悪くなったにしか過ぎない

（さっきのより機動力が数倍。下手したら私たちより速い）

『わかってるわよ。騎士って言ってるんだからどうせ、接近戦。私の・・得意分野よ！』

『Ｅｍｂｏｄｙ（具現化）』

彼女の手には最初に具現化した刀が握られている。

『いくわ！』

（うん！）

「俺に接近戦を挑むか」

彼は腰に備え付けられている剣を抜いた。

キィン！

剣と刀。強度で言えば剣だ。しかし、重量で言えば刀だ。
クイーンは受け止めるのではなく受け流すように剣を受け止めている。

『―堕ちなさい！』

左手を離し魔力弾を叩きこんだ。
それはあえて言うなら卑怯とも言える。しかし、戦いの中で卑怯と言う言葉通用しない

『・・・チッ』

「まぁ悪くないな。しかし、この『ブレイズルミナス』は魔力攻撃はおろかすべての攻撃を防ぐこともできる」

ちょうど彼の目の前。クイーンが魔力弾を放った場所にひし形のような形をした透明な壁が浮き出ていた。

「だが、その姿になっても所詮はその程度か」

『気にいらないわね』

「もう、終わりにしよう！」

（速い！）

彼の速さに目は捉えきれず耳でも音は拾えてもまったく見当がつかない

『（落ちつくのよ。例え見えなくてもきっとどこかで一瞬止む。それの合図がこっちに来る合図）』

目を閉じ耳を澄ます

音からして周りを飛んでいるのは間違いない

ザッ！

『そこ！』

後ろ斜め左

彼女の耳は確かに音を捕えた。しかし、飛んできたのは彼の剣だった

『フェイク！？』

クイーンはそのまま剣を弾くがその隙に彼は彼女の後ろをとった

「いい読みだ。だが、接近戦だけだという読み違いさえなければの話だが」

（後ろ！）

『まにあわ―！』

「堕ちろ、地の底に」

カチ

トリガーを引く音が響いた。
その長身のライフルから発射されたとは思えない高エネルギー砲。
その攻撃に包まれた彼女は彼の言う通りに落ちていた。地の底へと
その姿は通常のなのはの姿に戻っていた

《チッ！してやられたわ。けど、今度こそ！》

（駄目だよ）

《どうして！？あなたじゃ絶対無理よ！》

（それはあなたも同じだよ）

《でも、勝率でいけば私の方が上よ？》

（そうかもしれない）

《だったら！》

（でも、駄目。私たちがいちいち切り替わってたって絶対にあの人には届かない）

《じゃあ、どうするのよ》

その通りだった。
彼女の言うことは正しい。けど、一つだけ。そう一つだけ可能性があった。

―いいですか。今は認めているかもしれませんが、それはどう否定しようとあなたの闇。あなたが望んだ姿。それを受け入れなければ次には進みません

あの時来た星音ちゃんが最後に言った言葉。最初はわからなかった。けど、今ならわかる。その言葉の意味が

（あなたは私。私はあなた）

《それがどうしたのよ?》

（今やっと気づいたの。私はきっとどこかであなたを否定していた。こんなの私じゃないって。けど、どう否定したってあなたは私。だから、受け入れる。これも私なんだって!）

《で、どうしたいの?》

彼女は嬉しそうに言った

（だから、一緒に戦おう!私はあなたの力が必要。でも、あなたも私の力が必要でしょう?だから、一緒に戦えばそんなの関係ない!）

《まったく。あなたは私の癖にいつも気づくのが遅いのよ!》

（にゃはは。ごめんね。けど、これも私だから！）

《ええ、そうね。さぁ行きましょう！》

（いこう！私！）

《私じゃない。クイーンと呼びなさい！》

（うん！クイーン！）

彼女達の思いは一つだった

（あの人に！）

《私たちの本当の力を！》

≪見せてあげよう！（あげましょう！）≫

それはなのはが初めてシステムを起動したときと同じだった。いや、違う。あの時は黒い柱だったが今目の前に現れた柱は白い。それは地上から空までを貫いていた

「その力は破壊の限りをつくした。しかし、その惨劇をみて知る。痛みを。苦しみを。だから、今度はこの力を守るために使おう。すべてを包み込むような優しい光ですべてを―」

光の柱を見上げながら彼は謳うように呟いた

「とうとう、ここまで・・・ここまでお前は辿りついた」

声を震わせしかし嬉しそうにつぶやいていた

その光景は離れてみていた彼女達もみていた

「アレは一体・・・」

「覚醒したな」

銀が知っているかのように言った。それに、アリシアも

「ええ、なのはちゃん。ついに辿りついたのね」

「これが、彼が造り出した最後のシステム」

「どう意味や?アレはあの『Ｇｅｎｏｃｉｄｅシステム』の時と同じや」

「『Ｇｅｎｏｃｉｄｅシステム』?ああ、レイジングハートはそう記録してたんだ」

「え?違うの?」

「まぁ間違ってないんだけど本当はね?『魔王システム』って言いかえたらしいよ。Ｇｅｎｏｃｉｄｅだと今の時代じゃ縁起が悪いと

かで」

アリシアはいつものノリで応えた

「じゃあ、アレは？」

「アレは自分の闇を知りそして受け入れた先。破壊しか生まない『魔王システム』を使い痛みを知った先に得たもの」

「それは、その強大な力を守るために使うことを」

「それは優しい光ですべてを包み込み、誰かを守るためにその力を振るう」

「彼は人を超える力を求め、しかし、人であることを捨てない力を求めた。それは魔王でもあった。だが、それは己の知るためだった。己を知らなければ他人を知ることなどできない。そして、彼は辿りついた」

「アレこそが」

「彼が求め、生み出した」

「最後の力」

『女神システム』

第８１話　彼と彼女の戦い（後書き）

次回とうとう決着。このことがひと段落ついたら人気投票でもしようかな・・

それにしても・・夏がそろそろ・・終わりに近づいてきた・・・

第８２話　女神と彼と（前書き）

これでも魔王と言うか！？ってなぐらい女神モード頑張りました。
詳細は後ほどになっちゃいますが。本文にも簡単に記しておきました。
さて、とうとう彼との決着がつきますが・・・今回作者の趣味が積み込まれた戦いになっております

では、どうぞ

第８２話　女神と彼と

地上

ガジェットの侵攻が停止してからは地上は静かだった。しかし、それにより傷ついた者を多くいた

「おい、大丈夫か！？」

「あ、ああ。すまない」

一人の男が傷ついた男を助けた。

「おい！アレを見ろ！」

「「なんだ？」」

二人はその先をみた。その方向は激戦地だったゆりかご周辺。一筋の光の柱が立っていた

「なんだ、あれは・・・」

するとまるで卵の殻を破って翼が現れるかのような光景だった。その姿をみた一人が言った

「まるで、天使だ・・・」

「いや、俺には・・・女神にみえる」

第８２話　「女神と彼と」

「・・・アレ、私・・」

《気づいた？》

「あ、クイーン」

今までは声だけだったけど、今では隣にまるで幽霊のような姿で薄っらと私の隣にいた。

「それに、この姿・・」

それは今までの姿はまったく違っていた。

※詳細は後程まとめ記載しますが簡単に言えばああっ女神さまっのベルダンディーが封印を解放した女神服の姿です。そして、胴体に金色の鎧。例はバトスピのダンの後期のバトルフォームに近い存在です。全体ではなく胸の周りについてる感じで前には出ていない。

《本当、女神みたいね》

「う、うん」

そして、なにより違うのは服装だけではない。両サイドポニーが普通のポニーになり目は右が赤く、左がいつもの彼女の目になっている

「―誰が今休戦だと言った！」

少し動揺している二人に対して容赦なく斬りかかってきた

《構えて》

「―うん」

左手を前に出す。

「ハァーッ！」

『ディバイン・・バスターッッ！』

「！」

それは魔王の時と同じだった。しかし、色はいつもの彼女の色で少し白が混ざっている感じである。

「うん！これなら」

《ええ》

「・・やってくれる」

剥がれ堕ちる彼の鎧

「モードリリース。古びた鎧（アルト・リーゼ）」

そして、再び赤き鎧を身にまとう彼

《こっちもいくわよ！》

「え！？」

『了解。自動創製開始・・具現化『ＯＲＣＨＩＳ（オーキス）』！』

「え、ええ！？」

ガッシャン！

まるで何かとドッキングするかのような音が響いた。
それは自分とそれがドッキングしたのだと今気付いた。

※ガンダム００８３のデンドロビウムの人型サイズを想像してください

『さぁここからは私のターン！』

（あ、いつのまに！）

『制御は私がやるわ。レイジングハート。あなたはシステムのサポートを！』

『はい』

『いくわよ！』

「チッ！」

彼がとった行動は下に逃げることだった。大きさでも見た目の装備でもわかるように火力差でこちらは負けているのだ。
古びた鎧は直線だけならなのはのオーキスをも上回る。

『逃げるんじゃないわよ！』

クイーンも追いかけるが下に墜落することを恐れていないのか速度を緩めない

『こんな加速状態であたるかわからないけど・・・』

彼女の意志どおりに右側に備えつけられている巨大な砲の照準を合わせる

カチ

引き金を引くイメージをするとそれは放たれた。威力はどうみてもスターライトブレイカー並と言ってもいいだろう。しかし、ちゃんとロックオンすらできないこの状況では牽制するのが精いっぱいだ。

「リミッター解除。最大出力！」

推進機関のリミッターを外した彼。スラスターが燃え尽きるのもお構いないようだ

「地上まで、3、2、1、逆噴射！」

体勢を立て直しぎりぎりの所で減速をし

「吶喊！」

そして、再び上空へ。こちらに向かってくる彼女の正面衝突するようだ

『チッ！』

「貫け！リボルバー・ステーク！」

『Mフィールド・ジェネレータ出力最大！』

レイジングハートがサポートをしバリアを張る。

―堅いな・・だが！

「連続ロード！」

ＤＯＮ　ＤＯＮ　ＤＯＮ　・・

合計6個の強化弾を連続でロードした。

ステークはパルバンカーのようなもので強化弾で放たれたと同時に魔力を帯びさらにその衝撃でパイルバンカーのように突き出るのだ。

しかし、6回と連続で撃てばさすがのステークも持たない

5発目にしてフィールドにヒビが入いる。

「ぶち抜け！」

バリィン！

『フィールド消失！緊急回避！』

「遅い！」

激突していたさっきまでもスラスターを全開にしていたのだ。止めるものがなくなったらどうなるか。それを目のあたりにする

『ぐぅう！』

彼のステークはオーキスのコンテナの装甲をはぎ取っただけだったがその衝撃で体勢を崩す。

『姿勢制御スラスター全開！』

傾きかけている方に噴射し体勢を持ち直す

『被害報告！』

『第一コンテナ中破。誘爆の危険性なし。制御にも問題はありません』

『デカイだけにこっちが不利なのはわかってるけど、こうやられると痛いわね』

（クイーン）

『ええ、次でアレをブチ壊すわ。そのためにもあなたにも協力してもらうわよ？』

（もちろん！）

『いい返事ね。それじゃ、いくわよ！』

再び彼の向かった空へと向かう

《いい？機体の制御は私がやるわ。火器管制、つまり砲撃はあなたに任せる》

「うん」

ＴＰＣシステムは術者のイメージを素直に表現してくれる。だから、それは実際に使用するのでも同じだ。二つの意志がある。こんなデカイものを動かすには勿体ないぐらいにだ。一人は操作を、一人は攻撃を。互いに役割分担できるのだ

「・・見えた！」

「もう、来たのか！」

『出力安定いけます！』

「フルオープン・アタック！」

オーキスの上部にあるコンテナが展開しさらに横にはオプションらしきものが展開する。

ミサイルやら魔力弾が彼を襲う
彼は腕を堅めそれを防ぐ。
「まだまだ！」
爆煙で見えないが声だけは聞こえていた
「ぐぅお！」
その長い砲身の先を彼を突きあげた。さらに、まだ上昇しているためGがかかりボロボロの鎧では酷だった
「零距離魔道砲！」
それは彼にとって三度目の出来事だった。しかし、二人は予想もしていた。また、今の状態を開放してあの機動型の鎧に変わるのかもしれないと。だから―
「その次も一緒に破壊する！」
「ぐぅおおお！」
二人の思惑通り赤き鎧がすべて剥げ落ち白い鎧が露わになる
―ブレイズルミナス最大主力！
彼の正面だけに展開するブレイズルミナス
「強制解除！」

後ろから鎧を脱ぎそのまま盾に彼は離脱した。そのままコントロールを失ったランスロットは爆発した

「しまった！」

《機動修正！》

そのまま大きく弧を描き向きを変える。

「やるな。だが、そんなデカイ図体などただの良い的でしかない！」

彼も距離を詰めながら両手に魔力を集中していた。

『高魔力反応！』

《Mフィールド・ジェネレータは！？》

『駄目です、さっきの衝撃と連続使用によりオーバーヒートを起こしています！』

《チッ！》

「ホルボルト・ブレイカー！」

彼の両手には二つ長い円柱の先がドリルみたいなもので急に回転をし始めた。

そして、まず一発目を投げた

《避けなさい！》

「わかってるんだけど、機体が重い！」

《今になってダメージが来てる！》

そうは言っても攻撃は迫ってくる。一発目はなんとか避けたが二発目は直撃を喰らった。真横に撃ってきたのでなのはに直接被害は出なかった。

『強制排除！』

レイジングハートのおかげですぐさまオーキスと分離した。

『天使の翼展開（エンジェルウイング）』

胴体に装備されている薄い鎧。背中には小さく尖ったモノがついていた。それが大きく展開しまるで翼のような形をそこから光が発生しまるで本当の翼のようになった。

「ハァーッッ！」

翼に見惚れていると彼があの刀を振りかざしていた。

「こっちも！」

『大丈夫です』

「え？」

なのはは応戦せずただレイジングハートの言葉を信じた。

キィン！

「これは・・・」

『光の装甲正常に稼働中（ホロニック・アーマー）』

なのはの目の前には盾の形をした透明なものが彼女を守った。
彼は距離をとり魔力弾を放つがどこに撃っても彼女に当たる攻撃はすべてそれによって防がれた。

「はぁはぁ・・・厄介だな」

（今はあの刀がちゃんとしたものに見える）

初めてアレを見せてもらった時はボロボロの刀にしか見えなかった。けど、今は違う。ちゃんとした刀にみえる。

（私、それなりに強くなったのかな？）

《それじゃあ、今度は私たちが終わらせましょう》

長引いてもこちらが不利になることだってある。だから、決着をつける。

「うん。レイジングハート！」

『ＹＥＳ　ＭＹ　ＭＡＳＴＥＲ』

なのはの足元に魔法陣が現れる。

「いくよ」

「バインド！？」

彼の両足両手首。さらには胴体までがバインドシューターによって封じられていた。

「・・・・」

腕をクロスし構え意識を集中する。

そして、翼は一旦消えた。だが、それと同時に流れ星がなのはに注いでいた。いや、違う。辺りにある魔力素をとりこんでいるのだ。発射態勢は違うとはいえそれはスターライトブレイカーと同じものだった。

「術式展開」

彼女の目の前に5つの魔法陣が展開する。そして、それは大きく前面に展開し線を紡ぎ合わせていく。それはまるで☆の形をした五芒星だった。

「これはあなたが最後に私に教えてくれたこと」

―いいか、なのは。お前は俺達魔術師でいうと属性は星だ

―星？

―そう、星。星は夜でなくても宇宙（そら）ではいつも輝いている。その力

を少し借りればお前の魔法はもっと強くなる。その呪文は・・・

「星よ　宇宙（そら）を照らす星星（ほしぼし）よ」

（あのあと少しずつ練習していたこの呪文。結局完成できなかったけど）

『今少し　我にその力を分け与えたまえ』

《けど、今の私たちならできるわ》

すると晴れた空。もっと二人のもっと上から本当の流れ星のようになのはに降り注ぐ
それはまるで流星群

「これが私の、私たちの最後の攻撃！」

彼女の言葉と共に消えていた翼が再びさらに大きく現れた。

―ここまで、か

≪スターライト・・・ッッ≫

―強く、なったな

≪ノヴァッッ！≫

―なのは

五芒星から放たれた5つの流星。それは一つ一つがスターライトブレイカーを上回る攻撃だった。最後には5つの流星が混じり合い一つになって彼に直撃した

DONNNNN！　パリィン！

かつてない爆発。そして、何かが砕ける音が響いた

「はぁはぁ・・・」

《さすがに魔力を全部使いきったわね》

『冷却装置作動』

プシュー

どこからか煙が噴き出た

「はぁはぁ・・・ごめん、もう無理・・」

《ちょっとあなた!?》

なのはは力尽き飛ぶことも叶わなかった。
ただ、なのはは下へと落ちていった

《レイジングハートなんとかならないの!?》

『完全なガス欠です』

クイーンが変わればいいと思う者もいるだろう。しかし、なのはの

魔力切れは彼女も同じなのだ

だが、しかし、彼女は落ちることはなかった。

なぜなら・・・

「まったく、お前は相変わらず無茶をするな」

彼が彼女を受け止めていたから

「えへへ。だって、無茶しなきゃ・・レイくんに勝てないもん」

そう、彼女の目の前には8年前と変わらない大好きな彼がいるのだ

「ＺＥＲＯ。魔力を少し分けてやれ」

『はい』

魔力の光がレイジングハートに渡る

「これで、飛べるだろう？」

「う、うん・・」

「・・・・」

「・・・・」

互いに無言の時間が続いた

一方戦闘が終わると同時に銀たちは

「さて、終わったようだ。私たちもいこう」

「ええ。アリシア、飛べますか？」

「うん、平気」

二人はヘリから飛び出した

「ちょ、ちょっと三人ともどこに！？」

「どこってあいつの所へ、だ」

「フェイトたちは先に戻ってなさい。あなたちの家に」

「家って六課のことか？アレは銀が・・・」

はやては最後まで言えなかったが現に破壊した張本人がいるのだ

「心配いりません。戻ってみればわかることです」

「絶対帰ってきてね！？」

「「「もちろん」」」

三人は一緒に応えた。そして、彼女達は彼のいるところへと向かった

麻衣ｓｉｄｅ

麻衣は未だに戦い続けていた。誰にも知られずたった一人で。けど、それが寂しいとかそういうことは思わなかった。だって、それが自分のやるべきことだった

「はぁはぁ・・さすがに一人じゃこれが限界かな・・」

『よくぞ、一人でここまで』

傀儡は褒めていた。なぜならたった一人で傀儡たちを１００人は倒している。倒しても倒しても現れる傀儡たちを。

『だが、向こうも終わった。我らもいかねばなるまい』

「ま、待て!ぐぅ・・・」

傷が悪化した。
傀儡たちはそのままどこかへと消えていった
麻衣は先ほどなのはが戦っていた場所へ目を向けた

「アレは・・ご先祖様。なら、麻衣は皆と待っています。だから、帰ってきてくださいね」

麻衣もまた自分の家へと向かった
あの人が帰ってくると信じて

麻衣ｓｉｄｅＥｎｄ

レイ・なのはｓｉｄｅ

アレからまだ無言の冷戦状態だった。

《ああ、もうじれったい！》

クイーンはそれを見てしびれを切らしそうになっていた。
そんな彼女の焦りもなのははわかっていた。だから―彼女から言いだした

「あ、あのね！『なのは』―え？」

折角言おうと思ったのに彼が口をはさんだ

「なのは、六課に戻っていろ」

「え、どうして？」

「まだ、終わってないんだ」

終わってない？確かにまだ、ゆりかごはあるけど・・

「もう、出てきてもいいかのう？」

「！？」

その声は老人だった。
レイが見つめる先をみた。そこにはまるで空間を割ったように老人

が現れた。

「よぉ、爺。まったく、タイミングが悪いぜ？」

「なにを言う。これでも空気を読んだつもりじゃぞ？」

―レイくんはこの人を知ってるの？

「なのは、戻るんだ」

「わ、私も一緒に！」

彼は振り向きあの優しい顔でいった

「頼む。今度こそ“約束”を果たさせてくれ。海鳴じゃないけど約束通りお前の元に絶対帰ってくる。だから・・」

ああ、ちゃんと覚えていてくれたん

素直に嬉しかった。忘れてると思った。けど、彼は覚えていてくれた。それがとても嬉しかった。

「絶対、絶対だよ！？」

「ああ」

「もし、帰って来なかったら私たち二人でＯ☆ＨＡ☆ＳＨＩ☆だからね！」

「ああ」

―アレ、たち？二人？ていうか帰らなかったらお話もなにもできないんじゃ・・・

変な違和感を感じたがすぐに目の前の“敵”に戻った

「もう、恋愛ごっこはいいかのう？」

「ただの会話だよ」

「いや、どうみてもそうにしかみえんがのう」

「黙れ、爺」

「相変わらず口がなっとらんのう」

「テメェに敬語なんか絶対使うか。まだ、老人ホームの年おりに使ってやるよ」

睨み合いながらも隙を見せない二人

「単刀直入に言う。ゆりかごを貰い受ける」

―やっぱりな。ロストロギアコレクターだからな、爺は

「だが、断る。アレはオリヴィエの形見みたいなもんなんでね！」

パチン

彼が指を鳴らすと時空に飲み込まれていくゆりかご。

非常識にも程がある

「相変わらず非常識なやつめ」

「ふん。で、用がなくなったんだ。帰れよ」

「なぁに、それともう一つ用事があるんじゃよ」

「なに？」

「さぁ来なさい」

すると老人が放った言葉と共に空間がさけそこから傀儡やらなんやら人か人でない物まで現れ始めた

「・・・まだ、幕は降りそうにないな」

レイ・なのはｓｉｄｅＥｎｄ

第８２話　女神と彼と（後書き）

『フィリイブな時間っす』

フィ「とうとう帰ってきたわね。まぁいたといえばいたんだけどね」

イヴ「そうだね～」

フィ「でも、まだ終わらないのがパターンよね」

イヴ「A-S編もそんな感じだったよね」

仁「ぎくぅ！」

フィ「それはいいとして。今後私たち出るのかしら？」

仁「そうだね。イヴはなんていうかちゃんとした話があるから出ると思うよ。いわゆるイヴ編（仮）だけど」

イヴ「やった」

フィ「わ、私は！？」

仁「出たい？」

フィ「出たいです！」

仁「考えておくよ」

フィ「わーい」

仁「さて、次回で一段落がつくのでご報告。またかよと思われるかもしれませんが新作を出します。
タイトルは未定なんですがもし、レイが帰ってきていたらその後どうなっていたか。という話を書いていくつもりです。作者としては学園ものを書きたく。また、なのはたちの日常を描きたかったらです。原作だと中学編はエピローグだけでしたので。いわゆる学園なのはを描きたいと思っています。もしかしたら一個削除するかもね（笑）なんていうか優柔不断でもうしわけない。詳しくは活動報告にでも書きたいと思います。では、また次回で」

第８３話　神野家と夜明け団（前書き）

これで、一段落

ＳＴＳ編はまだ終わりませんが内容的にいえば終わりみたいなものです。

では、どうぞ

第８３話　神野家と夜明け団

機動六課跡地

彼と別れたなのははは彼の言う通り六課に向かっていた。しかし、待つにしてもアースラがあったのになぜ、六課なのか。六課はもう・・・

「見えた」

雲を抜けると目に写ったのは・・・破壊される前の六課だった

「どうして・・！」

「なのは！」

「フェイトちゃん！皆」

路上からなのはをみつけ彼女の名前を叫ぶ

「どうして、皆が・・」

「銀たちに言われたんよ」

「そっか。じゃあ、アリシアちゃんもリニスさんも」

「うん」

―よかった。皆無事で・・

《まぁ、当然よ》

（どうして？）

《彼らが私たちを倒そうとするわけがないもの。アリシアって子は別だったとしてもね》

（そうだよね）

「それにしてもなのはさん」

「なに？」

スバルが聞きたいんだけど聞けないような顔をしていた。

「その格好・・・」

「え、あ、これ？」

姿はまだ女神システムのまま。しかも髪型も違うし目もオッドアイだし・・・

「これはその・・色々あって・・・」

「ママー！」

「ヴィヴィオ！」

大好きなママを呼びながら走ってくるヴィヴィオ。なのはの手前でジャンプしなのはは抱きとめる

「ママ・・・なんだか天使みたい」

「ヴィヴィオにはそう見える？」

「うん！」

「そっか。ありがとう」

素直に嬉しかったなのはである

「でも、天使とも言えるかもしれんけど、どちらかと言うと女神に近いかな？」

「あ、それ私も思った」

さっきまで戦っていたのが嘘みたいにいつもの日常のような感じがした。

確かに事件は解決した。けど、まだ・・・

「レイくん・・・」

彼がいる空をみた。そこは少し黒く淀んでいた

レイside

「紹介しよう。これが私の家族じゃ」

家族

そういうには少しというかかなり多いし人間以上謎の生物以下まで存在している。

―これを家族とか。ちょーウケルんですけど

とレイは内心思っていた。

「そして、紹介しよう。我が8人の人柱たちを」

―人柱ね・・

「火の人柱―力イグニス」

そう言うと爺の横に現れた男。なぜか、飛んでるのに跪いてる

「水の人柱力―アクア」

「風の人柱力―ヴェントス」

「大地の人柱力―ソルム」

「氷の人柱力―ジェイド」

こいつは知っている。闇の書の事件の時、邪魔したあいつだ。

「太陽の人柱力・アポロ」

「月の人柱力・ディア」

「そして、神の人柱力・マルス」

聞いたことのある二人目の名前

「久しぶりだね」

約１０年も経つと老けてるかなぁって思ったら全然老けていなかった。

「なんだ、おっさんじゃないのか」

「ははっは。もう、僕はとっくに人間じゃないんだよ」

―まだ、こいつ自分を神とか言ってんのか？

「そして、最後にこの儂。黄金の夜明け団の創始者にして導師。アレスター・クロウリー」

―自分で言ってて恥ずかしくないのか？

「こちらの紹介は済んだ。今度はそっちの番じゃないのか？」

やっぱり

彼はそんな顔をしていた。
というよりこういうことになるんじゃないかと彼は呼んでいた。

「―いいだろう。我が神乃家の長女。銀」

彼が銀の名前を呼ぶと上からやってきた

「あの時はどうも」

軽くあいさつをする銀

「・・闇の書か」

爺はぼそっと呟いていた

「次女のリニス」

「初めまして」

軽くお辞儀をするリニス。でも、やっぱり猫耳と尻尾は生えている

「三女のアリシア」

「・・・」

アリシアは無言だった。アリシアはどちらかと言うと彼ら敵意むき出しだ。かつて、私を捕えようともしてたしフェイトもそういう目に遭わそうとしていたからだ

「あの大魔導師の・・そうか。お前が生き返らせた子か。禁忌を恐れぬやつよ」

「・・・」

それには彼も無視していた

「四女の闇樹」

すると転移魔法が現れ闇樹が変身した状態で現れる

「ふん」

「五女の星音」

「・・・」

闇樹と一緒で無言。ていうか興味がないらしい。

「六女の雷華」

「と私の相棒の風ちゃん」

風に乗って雷華は現れた。それにはレイも予想してなかったらしく・・・

―そんなのいつのまに・・・って、というかどっかで見たことがあるような・・

と今はそれよりと邪念を振り払う

「そして、ペットのスノー」

「スノーちゃん登場！」

「スノー・・？そうか、あの雪の魔術師スノー」

「久しぶりね」

「なんだ、知り合いか？」

レイもスノーと爺が面識があるとは思っていなかった。意外とも言える

「ちょっと前に勧誘されたんだけど断ったのよ」

「貴様が来れば人柱の一人になっただろうに」

「うるさいわね。私、あんたらに興味ないのよ」

それは二度目の決別を意味していた。そして、一通りの紹介が済んだ。

「と、ここまで我が娘とペットだ。そして、あと二人。俺直属の特殊部隊で部下でもある・・・・」

かれは一間をおいて

「灼熱の魔剣士・アリサ・バニングス」

「どうも～♪」

「月光の魔銃士・月村すずか」

「初めまして」

二人はなのはたちの親友。そして、彼の直属の部下である。

「たく！いきなり呼ぶなんていい度胸してるじゃない！」

さっそくアリサはこの8年間の怒りをぶつけようとしていた。しかし、そう言う割にはノリノリで登場してきていたが

「まぁまぁ」

そして、いつものごとくすずかがそれを静める

「ほぉ、若いのに大したものじゃ。さすが、お前が育てただけはある。たったの１０数年しか生きていない餓鬼が」

「餓鬼とは失礼じゃな～い。レイ、殺っていい？」

聞いてはいるもののすでに戦闘態勢に入っているアリサ

「駄目だ。今日は戦いをするわけじゃない」

「そうだよ、アリサちゃん」

「チッ」

「そして、最後に。この俺、レイル・アンヴァルト・Y・神乃」

これで、互いの紹介は終わった。

対峙するレイたちと夜明け団。彼の言う通り戦うわけではなかった。

「そうそう、一人忘れておったわ」

「？」

「我が盟友でもありお主も知っている・・・」

「実際に会うのは初めてかな？エヴァが選んだ子供よ」

「アダムじゃ」

爺の前に現れたのは赤い髪をしている男だった

「エヴァ？ああ、イヴね」

「で、エヴァは元気にしているか？」

「お前が今現れなきゃ、きっと元気だっただろうな」

「つれないな。あいつも」

「当然だろう？お前とは縁を切ったって言ってるぐらいだからな」

「それで、お前の所にか？本当に困った女だ。優しい男ならその身をゆだねる痴女め」

ブチ

―あ、切れた

恐らく銀たちには聞こえていたのだろう。なにかが切れる音が

「そういうんだから、見捨てられるんだよ。お前みたいな屑な男は」

「黙れよ・・いくらお前があいつが選んだ餓鬼だからって殺さないわけじゃないんだぞ・・」

殺気を放ちながらいうアダム。しかし、レイは微動だにしない。

「殺ってみろよ。殺ってやるから」

逆に殺気を放ち対抗している

「“父”に逆らうか」

「反抗期なものでね」

「減らず口を」

「それに・・・お前が選んだ奴はどこにいる」

「あいつははずかしやがりなんでのう」

なんで、爺が応える？

そういえば爺にはありえないが娘がいたような・・・

「まさか・・・」

「そうだ。俺が選んだのはこいつの娘だ」

「・・・ありえん。この爺にしてこの爺の娘なんてありえん」

レイは酷く落ち込んでいるようだ。

ていうか・・・

『私たち（俺たち）蚊帳の外』

もう、話に参加できない双方の家族たち

「まぁ、落ちつかんか。今日は戦いに来たわけではない」

『・・・ふん』

レイとアダムはタイミングよくシンクロした

『チッ』

息が合ってしまったことに舌うちをしたがこれもシンクロしてしまった。

『・・・』

「さて、わしらは帰るとしよう」

導師の一言で黒い渦の中に消えていく彼ら

「随分引きがいいじゃないか」

「それもそうじゃのう。では、これでも遊んでるとよかろう」

「？」

『来たれ　我が盟約の名のもとに　３つの首　３つの意志　３つの魂を持つ　異形なる獣』

「おいおい」

導師の足元に五芒星の魔法陣が現れ黒いオーラが巻きあがっている。

『地獄の番犬　ケルベロス』

ＧＹＡＡＡ

『わかってるじゃないか。我ら魔界に住む者は皆お前を殺したくて仕方がないのだッ！』

「チッ！」

いきなり口から黒炎を放つケルベロス。彼は魔法陣を展開しそれで防ぐ。

「それではさらばじゃ」

「あ、爺！」

最後に残った彼はそれを少し見てからアジトへと帰っていた

「仕方ない。お前らは先にいってろ。後からいく」

ケルベロスの攻撃を防ぎながら後ろにいる娘たちとアリサとすずかにいうレイ。

「助太刀は？」

「こいつは俺にしか目がないからな。だから、いけ」

「わかった。それじゃあ、皆いくぞ」

銀の言葉に頷き六課の方へと向かう娘たち

「ちゃんと帰って来なさいよね」

アリサが釘をさしていう

「今回は私もアリサちゃんと一緒です。絶対に帰ってきてくださいね」

あのすずかまでも念をおしていった。

当然と言えば当然だ。そして、レイ自身もそれは理解していた。

「ああ」

そして、そして残ったのはレイとケルベロス

「さて、カッコつけたのはいいが流石の俺も限界なんだがな・・・」

『ですよねー』

原因はいうまでもない。なのはとの戦闘。何回も鎧を壊され、零距離魔道砲をくらいさらにはあのＳＬＢの何倍もの威力のある攻撃をくらったのだ。再生は今も行っているがそんなすぐには回復しない。それに、こっちもかなりの魔力を消費した。

「戦闘可能時間は短いな・・・」

『どうします？リミッター外します？』

「いや、いい。それより刀を」

『わかりました』

神乃家の家宝である刀を手に取る

『高ぶる、高ぶる。お前と殺し合いができるのがこんなにも嬉しいとは・・』

「俺は嬉しくないがね・・いくぞ、番犬！」

レイｓｉｄｅＥｎｄ

六課ｓｉｄｅ

あの黒い渦が消えてから３０分が経った。消えたあと少したつお銀たちが戻ってきた。レイくんはまだ戻っていなかった。しかし、かわりに・・・

「なんで、アリサちゃんとすずかちゃんが！？」

なのはの反応は当然の反応だろう。二人は確かに私たちのことを知ってる。けど、二人が魔導師？になってたなんて聞いていない

「「あ、ははは」」

「え、どうして！？」

フェイトも驚きはやても聞いた

「二人とも大学はどないしたん！？」

そう、二人は今大学生の筈なのだ

「私たち、成績いいから」

「だから、問題ないの」

いや、そういうことじゃなくて・・・・

『！』

「？」

銀たちが何かに反応したのか空を見上げた。

「何か来るぞ」

「え？」

すると魔法陣？らしきものが現れそこから何が落ちた。
砂ほこりが舞い視界が遮られる。

「いったいなにが・・・」

ＧＡＹＡＡＡＡＡＡＡＡ（鳴き声）

「ワァーッッ！デッカイザフィーラだ！」

おい

確かに似てなくはないが例え方が可笑しい。
それに、なにそのわービッグなんとかみたいな叫び方

『む。ここは・・ちょうどいい。腹が減ったからお前たちを喰うとしよう』

『は？（・o・？）』

と大きな口を開きながらこちらに迫ってくるデッカイ犬

「きゃーーーーーーー！」

「どさくさにまぎれてなにやってんだお前！」

ブシャーーーーーー

頭を斬り落とされ血が吹き出る

「あーッッザフィーラの頭が！」

いいからザフィーラから離れろよ

「たく、いくら3つ頭があるからって分裂は卑怯だろ」

『くく、お前がいうことか』

頭を斬り落とされたのに喋っているケルベロス？

『我は・・もう消える。久しぶりに魔界にでもこい。あのお方が寂

しがっておられる』

「気が向いたらな」

『そうか。さらばだ、アンヴァルト』

魔獣や精霊はこちら側では死ぬことはない。彼らの死は彼らの世界ではないと迎えることができないのだ。

「はぁーやっと終わった。・・・あ」

視線を皆がいる方にむける。

いざとなるとなんて言ったらいいかわからなかった。

とりあえず皆のもとへ歩こうとしたが逆に彼女から彼の元へ走ってきた。

『レイくん!』『兄さん!』『レイ兄!』『兄ちゃん!』

『レイ殿!』

『レイさん!』・・・

「あ、ああ。皆・・・」

彼を囲むように彼女達はレイの所に集まった

皆いいたいことを言っている。けど、どう返したらいいかわからない。8年も行方を暗ましていてそれにあんなことをしてきたのだ。

どんなことを言われても仕方がない。

でも、こういう時なんて言ったらいいのだろう・・

「レイくん」

「・・なのは」

と、目の前に立つなのは。なにかを言いたそうに見えた。なんていうのだろうか。もじもじしている。それに近い。

「あのね、レイくー」

『ご先祖様～ッッ！』

「へ？」

ボイン♪

なのはを振り払いレイに抱きついたのは麻衣だった。

ちなみに変な効果音が聞えたかもしれないけどそれは幻聴です。

「おっと！おお、麻衣。元気だったか？」

「はい！麻衣はこの通り元気です！」

「ははっは。そうか。お前も頑張ったな」

「はい！」

「あの・・・レイくんって麻衣さんのこと知ってたの？」

なのはが皆の代わりに質問した。その光景を目を丸くしている皆。

「知ってるっていうか、まぁなんだ。遠い俺の孫」

『へー、孫ね。・・・・って！一体誰の女の子供よ！？』

感動の再会から一転。殺意が飛び交う再会になっていた。それと、神乃家はそのことを前々から知っていたので対して驚いていなかった。

（な、なんかデジャヴを・・・）

前にこんなことがあったような気がしてならないレイだった。

『だから一体誰の女の―！』

しばらくお待ちください

それから少ししてやっと落ち着いた。

「はぁー帰ってきてそうそうこんな目に逢うなら帰って来なきゃよか『ギロ』・・・・なんでもありません」

同時に殺意の籠った視線を向けられ言いたくても言えなくなってしまった。

「で、帰ってきたらからには当然説明してくれるんやろうね？“総帥”」

はやては総帥を特に強調していた。

「ああ、わかってるよ。けど、今日はもう休ませてくれ。流石にもう眠い・・・」

意外と説明と言われても反応が薄かった。

レイはもう立ってるだけで限界だった。現にかなりふらついている

「まぁ、事件も解決したし。皆よくやってくれたし今日は―」

「じゃ、俺寝るから。勝手に部屋借りるぞ」

「あ、ちょっとレイ兄！」

『あ、じゃあ、私も』

と彼のあとをついていこうとする彼の娘たち。

だが、しかし！

それを簡単にいかせる彼女達ではなかった。

『調子に乗るな』

『だが、断る！』

そのあと色々揉めたが血の惨状になることはなかった。

結局、レイは六課の宿舎の一室に勝手に入り込んで寝ていた。

短く、そして長くもあった戦いは幕を閉じた

ＪＳ事件と呼ばれたこの事件で時空管理局総帥”レイル・アンヴァルト・Ｙ・神乃”が”カオス”として裏で暗躍していたということは世間、また局内で知られることはなかった。

第８３話　神野家と夜明け団（後書き）

レイ「やぁただいま！」

フィ「とりあえずおかえり」

イヴ「お帰り～」

レイ「なんか素っ気ないな」

仁「当然だよね」

「「うんうん」」

レイ「ツマラン奴らだ。さて、一通り終わった感じなので第一回キャラクター人気投票でもやるか？」

仁「やる？」

「「やろうー！」」

仁「らしいので詳しくは後ほど。でも、今回色々と突っ込むところがいっぱいあったような・・・」

第８４話　果たされた約束（前書き）

今回はちょっと短いです。
けど、レイが相変わらず鈍感です

第８４話　果たされた約束

翌朝

まだ、朝日が昇ったころ。
今日はさすがに訓練はなかったので皆自分のベットでぐっすり寝ていた。けど、一人の女性はいつもになく早起きしていた。

「寝癖は・・ない、よね」

窓に薄らと写る自分の髪をみえて寝癖がないかチャックをする我らが教導官高町なのは。

「よし、じゃあいこうかな♪」

彼女が向かった先は彼が寝ている空き部屋である。
一緒に寝ているフェイトちゃんには昨晩睡眠薬入りの飲み物を飲ませて眠らせたし。ヴィヴィオはまだ当分起きない。他の皆もまだ当分起きない。起きたとしてもドアにちょっとした細工をしてきたので大丈夫。

あ、やったのは私じゃなくてクイーンだからね。私じゃないよ。

「ここかな」

あっという間に彼のいる部屋へと着いた。
なのははそ～っと部屋に侵入した。

（レイくんのことだからまだ寝てるよね）

そう思いながらもそ～っと部屋に入るなのは。けど、実際に目に写ったのは

「お、なのは。おはよう」

「お、おはよう。レイくん！」

彼は起きていた。これで『レイくん朝だよ作戦』は失敗に終わった

「なんだ、随分早いじゃないか」

「う、うん」

「まぁ丁度お前の所に行こうとしてたから行く手間が省けたよ」

「え？」

「少し付き合ってくれないか？」

彼に言われて宿舎を後にした二人。二人は今六課の敷地内を散歩している

―子供の時は上を見上げなきゃレイくんが見えなかったけど今は違うんだ・・・

自分も成長しこうやって一緒に歩けるだけでも嬉しかった。

「懐かしいな。昔はよく、お前の肩に乗って歩いたり走ったりしてたのにな」

「あ、フェレット？今でもなれるの？」

「ああ」

彼は実際になって見せた。その姿はあの時と変わらない。彼はそのままなのはの肩に乗った

「ここで見る景色も少しは変わるもんだな」

「だって、私だって成長したんだよ？」

「そうだな。本当に、たった8年でここまで成長したんだな」

彼は肩から飛び降りまた大人の姿になった

私と向き合うように立つ彼。

「？―まだ、それ持っていたのか？」

「うん・・だって、私とレイくんの繋がりだもん」

そうやってロケットに手に取る。レイくんはロケットをあけなかの写真をみた。

「俺は変わらなくて、お前はこんなに変わった。皮肉なもんだな」

その時の顔はとても悲しい顔をしてるように見えた

「で、なにか言うことがあったんじゃないの？」

「・・・そうだな。これだけは言っておきたくて」

「？」

彼は何故か少し照れているようにもみえた。

「その・・えーと、ただいま」

その時の彼の笑顔はとても輝いているようにも見えた。それに、今までに魅せたことがない笑顔だとも思った

けど、私は嬉しくて、嬉しくて・・やっと・・

「おかえり、レイくん♪」

涙を流しながら私は応えた。

でも、我慢できなくて抱きついた。レイくんも優しく抱いてくれた。

「本当に心配かけてごめんな」

「そうだよ、一杯心配したんだよ」

「けど、もう、大丈夫だから」

「本当？」

「ああ、多分」

その返答は彼らしいとも思った

「馬鹿」

「うん。それに・・・」

「？」

「綺麗になったな」

「本当？」

「ああ。あの時みたお前と同じだけど実際にみるともっと綺麗だ」

あの時

あの舞踏会の時、私は彼の薬で大人になったらしい。私自身それはわかっていたけど自分ではその姿をみることはできなかった。

「これなら一緒に舞踏会にも出れるよ（笑）」

「ははっは。そうだな」

綺麗なドレスをきて、一緒に踊ったり・・・あの時はできなかったことが今ならできる

「ねぇ、レイくん。私、レイくんの隣に立ててるかな？」

私の目標であった彼。前より隣がいい。そう思ってた。けど、その

道は険しいものだとわかっていた

「お前はもう俺の隣に立てるだけの力はあるよ」

「本当に？」

「ああ。真のレイジングハートの正式継承者として認める」

「それってどう意味なの？」

「お前を俺の相棒（パートナ）として認めるってこと。まぁ形だけだけど」

「・・・・」

なんていうかパートナって言われて凄く嬉しかったけど形だけと言われショックを受けた。

まぁそういうところが彼らしいと言えば彼らしい

「レイくんの・・・馬鹿、鈍感」

ただ、それだけは言っておきたかった。

「？」

しかし、鈍感王はその意味を理解してるはずもなかった。

近くにあったベンチに座った。もちろん、手をつないだままで。周りからみればカップルなのだろうが、レイはそんなことを微塵とも思っておらず。なのははそれを知った上でこうしている。つまり、鈍感なんだから色々できると悟ったのだ。

「ねぇ、レイくん」

「なんだ」

「朝食までこうしててていい？」

「いいぞ」

ほらね

「ありがとう？」

もちろんその？は彼に届くわけがないのだが別に使ったって問題はない。

そんな光景をどこからみているものもいる。

もちろん彼の娘たちである。

「まぁ今日は多めにみましょうか」

「そうだな。それに、少しは譲ってやらんとな。私たちはずっといたから」

「そう言われると仕方ないよね」

上からリニス、銀、アリシア。三人はきっと誰かがレイを起こしにいくとわかっていた。だから、こうして見張っていた。

あえて手を出さないのは言い方を変えれば彼と一緒にいたわけだから今は彼女達を甘えさせてやろうというものだった。

「しかし、私たちは？」

「う、うむ。そうだぞ」

「そうだよ～」

娘ながら一緒にいられなかった3人は反抗していた

「まぁまぁ。六課が解散したら家にずっといられるんですから」

「まぁ、そうだな」

「しかし、あの方ですから」

「でも、今日だけは見逃してあげなさい」

「そうだね。皆よりちょっと抜け駆けしてるけどね」

「そうだな。そのために色々とやったみたいだし」

「ええ」

一方宿舎では。

「あ、あかん。扉があかんよ！？」

「おかしいな。ロックは外れてるんだけど・・・」

「ねぇ・・フェイトママぁ～なのはママわぁ？」

「―しまった！」

「一体どうなってるんだ？」

一部の扉には少し細工がされていた。一部と言うのは、なのはの好敵手たち。しかも、自分の部屋にまで細工をしたのだ。

細工と言うのが扉の横（閉まるところに）にアロンαX！を一滴、二滴たらしただけである。全自動が仇に出たのだ。しかも、決行したのは夜中で、自分の部屋は出るときに。

なのはの言う通りしたのはクイーンであった。

《ふふっふ。私たちのためなのよ》

（そうだよ。私たちのためなんだよ）

「あそこまでするもんなの？」

「お前だってやるんじゃないのか？」

「ええ」

「まぁ恋する乙女は怖いってことよ」

アリシアが胸を張って言う。

『なに、上手くまとめようとしてんだ？』

その後、最終的には扉を破壊することになってしまい。無駄に修理費がかかってしまった。請求先は高町なのは宛てだっということはなのはも後で知って半分後悔。半分満足だったらしい。

それと余談だが、二人は朝食の時間になり食堂に向かった。手をつないだままで。

それを、当然六課の人間は目撃したので色々と騒がれた。

第８４話　果たされた約束（後書き）

フィ「なんかなのはちゃん、怖いわね」

イヴ「恋する乙女は怖いなぁ」

仁「まったくだ」

なのは「乙女だもん♪」

レイ「しかし、漫画などではもう少し２０代後半・・・」

なのは「レイくん、私は、１７歳なんだよ？」

レイ「・・・それ、中の人だろ？」

第８５話　帰ってきた先生　前半（前書き）

いやー久しぶりにアレをやりますよー
ちょっと気合いを入れて書きましたね

第８５話　帰ってきた先生　前半

朝食を済ませた彼らは各々の場所に戻りながら仕事をしていた。ただ、はやてや隊長陣、ＦＷメンバー、神乃家は会議室で待機していた。

「あの、ここで何をやるんですか？」

スバルが気になって聞いた

「今回の事件、レイに・・総帥が色々と絡んでたんでその話を聞こうというわけや」

「なるほど」

（あ、そういえばギン姉がいないや）

ギンガがいないことに気付いたスバルは色々と不思議がっていた。

（あー、今回はギンガか）

アリシアは知ったように思った。

すると目の前にウインドが表示された。

『３』

『こ、これは！？』

反応したのはなのはとフェイトである

『2』

「え、二人とも知ってるん？」

ちなみにこれをやったのは無印のためA，Sの人たちは知りません

『1』

『ドッカーン！ワーイ』

『帰ってきた』

『なぜなになのは！ｓｔｓ編』

と上からちっちゃなボン太くんが降りながらそのタイトルは現れた。

テッテッテーテッテッテーテッテッテ♪

「な、何これ？」

『お、おーい、皆集まれー！なぜなになのはが始まるよー！』

「ギン姉！？」

いきなりギン姉がミニスカメイド姿で現れた。

『集まれ～♪』

「麻衣さん！？」

今度は麻衣がウサミミバニーＶｅｒであらわれた。ぴょんとうさぎのような仕草をするたび二つのスイカが揺れていた。

『じゃあ、今日の講師の先生を呼ぶよー。せーの』

『レイ先生～』

二人が呼ぶといきなり上から落ちてきた

『どうも、レイル・アンヴァルト・Ｙ・神乃です。今日は皆さんの質問にじゃんじゃん応えるかもしれないのでよろしく』

会議室はというと

「なにこれ」

「また、始まった」

「懐かしい」

「ギン姉、ハァハァハァ」

「麻衣さん可愛い」

などなど

『ちなみに、この放送は六課全部署に流れているので皆緊張するなよ～』

それをみた六課局員男どもは

「ギンガ陸曹ハァハァハァ」「麻衣副隊長ヤバいって！」「く、くそ、見えない」

「絶対領域キター（。∀。）」「お、落ちつくだ。相棒！」「お、俺のエクスカリバーが」

まぁ、それは放っておいて

『さて、じゃあさっそく始めるか』

『じゃ、じゃあ、質問ある人～？』

「じゃあ、はい」

「・・はい。なのはちゃん」

口調がいつも通りになっていた麻衣

『こら、麻衣。口調』

『ごめんなさい。ご先祖様！』

（なんか・・・腹立つ）

そう思った隊長陣

「えーと、カオスの件とか丸丸まとめてなんでレイくんはあの変態のとこにいたんですか？」

『だそうです』

『いい質問だな。・・言葉で話すのメンドイな。おーい。アシスタント』

『はーい』

とホワイトボードを運んできたアリサとすずか

『なんで、私がこんなこと』

『はいはい、ツンデレツンデレ』

『はい、先生』

『ありがとう』

すずかからペンを渡されそこにひたすら書いていく

遡ること8年前

なのはを襲ったアレ＝レイは変態だとわかり奴を殺しに向かった

しかし！そこで思いのほか邪魔が入りレイは重傷を負った。そこに銀たちが駆け付けた。

しかもなんと何故か変態自ら登場。レイは重症で一応知人だという変態の言葉を信じ銀たいは変態の所へ

『まぁそこで、殺してもよかったんだけど、ほら、怪我とか“呪い”とか色々と治して貰ったから恩を仇で返すようなまねは流石に俺

でもできなかったというわけよ。んで、カオスとか名乗ってまぁ色々やったわけ』

「兄さん、質問です」

『はい、フェイトさん』

「アリシアが言ってたんですけど、カオスとかは建前ってどういう意味ですか？」

『ああ、それ？カオスを指名手配させたの俺が管理局のデータに忍び込んだだけ。ぶっちゃけ犯罪者のほうがお前たちもやりすかっただろう？』

だろうって言われても困る面々

『話は戻って。アイツのもとで世話になりながら色々とナンバーズとか教育しながら凄してたわけよ。まぁアイツがゆりかご治してたから完成したら俺が横取りするつもりで今までいただけ。自分は手を出さず他人が一生懸命治した物を横取りするのって気持ちいいよね～』

『あ、もちろんあいつを逮捕するのも忘れてないぞ。オマケとして』

おまけかよ

『とまぁ、こんな感じか。次の質問は？』

「はい」

『では、シャーリーさんどうぞ』

「シャリオ・フィニーノ一等陸士です。総帥が開発されたあの『Ｇｅｎｏｃｉｄｅシステム』について質問です。なんで、あんものを造られたのですか？アレは異常すぎます！」

『だそうですが・・』

『だって、お前らのとの基本概念が違うから』

「え？」

『今のご時世。確かにアレはいらない。ただ、それは現在だから』

彼はレイジングハートと同じことを言った。
当時は戦争。戦争以外の武器を造るやつがどこにいる。武器なんてもんは使う人間によって意味が違ってくる。
造るヤツを責める？違うな。造った奴が悪いんじゃない。使う奴がそういう方に使うからいけないだけだ。

『それに、俺が造ったもんを他人の一等陸士に批判される筋合いはないんだが？』

その一言で空気が凍った。

「あなたそれでも人間ですか！？貴方が使っている映像を見ました。でも、あんなのって」

『映像？・・・ああ。なるほどね。だって、その時の映像は戦争が起きてた時代だから当然じゃん。でも、相手は・・夜明け団じゃなかったか？』

『ええ、そうですよ』

レイジングハートが補助した

『魔王システムは元々己の力を引き出すものだ。それが自分の欲とか闇とかになってしまうのは人間だから仕方がない。それに、アレは俺が使うとああなるだけでなのはが使ってても平気だったらだろう？』

「それは、そうですけど・・・」

『己を知り、例えどんな使用者でもその力は強大。まさに、破壊の力。しかし、それを知り、その力を守るために使う。それを理解したとき魔王は神となる。まぁ女が使うと女神システムとかになるんだけど』

「じゃあ、レイくんが使ったらどうなるの？」

『俺か？ぶっちゃけていうとそれは使ってない。魔王だけ』

「そうなんだ」

『それとＺＥＲＯをもとにレイジングハートを造ったけどそのシステムが搭載してるのレイジングハートだけだから』

「そうだったんだ」

『そういうこと。で、フィニーノ一等陸士。これで、納得していただけたかな？』

上手く流された気がしなくもなかった。けど、これ以上言ったって同じだ。

「最後に一ついいですか？」

『どうぞ』

「本当に戦うためだけに造ったんですか？」

『・・・そう、だな。その通りだ』

そうだ。と普通に応えるべきだったとあとで俺は後悔した。その少しの間が彼女達に不信感を抱かせた。

しかし、追求してこなかったのでよかった。

アレは・・復讐のために造った

なんて言えなかった

「ありがとうございました」

『じゃ、じゃあ、次の質問は』

「はい！総帥はカオスの時にしつこくギン姉のこと追いまわしてたけどもしかして総帥は『ギロ』・・・ギン姉をどうしたかったんで

すか？」

あまりに恐ろしい殺意の籠った視線を浴びてたてなくなっしまったスバル

『ああ、それはあいつがギンガに変な改造するかもしれなかったら俺の方で保護したかったんだよ。アイツだったらギンガにもアイツのクローン埋め込まれてたかもしれないし』

『それは私も嫌です。でも、総帥のだったらいいです』

（こいつはドサクサに紛れて何をいってるんだか）

（けど、彼は鈍感だから無意味）

『それで、怪しまれないようにまぁ、腕だけ弄りました。でも、いいじゃん。もうちょっと弄ればロケットパンチだって撃てるかもしれない！』

「ロケットパンチ！？」

スバルは目をキラキラと光らせていた。

『ああ。もし、ロケットパンチが欲しくなったら俺の所に来ると言い。背中に真っ赤な翼も付けてやる』

（それどこの城？）

「本当ですか！？」

「ちょっとスバル・・」

長い付き合いだからわかる。スバルは本当につけてほしいらしい。しかし、レイもそれは想定外でまさか本当につけてほしいと思っていなかったらしい。

『・・・さて、ここで一旦ＣＭです』

レイは逃げた

『『『え?』』』

画面が切り替わり変な映像が流れる

『学校に行っても一人。友達になりたいと思っても慣れない。そんな君もこれを読めば大丈夫!あの教えて!?シリーズでお馴染のレイ先生直筆!『教えて!?　レイ先生の友達をつくろう!　学校編』が数年の歳月を得て新作の登場!全国の書店で予約受付中!速くしないと売り切れちゃうぞ♪』

「「「「なにこれ」」」」　「「「「うわ!新作ジャン!予約予約」」」」

『え～と、後半に続きます♪』

といきなりギンガ現れウインクをして何故かハートが飛び出した

『ギン姉ハァハァ・・・』　『うぉお!ギンガたん!』　『誰か

！映像を編集してプロマイド作れ！』

というわけで後半に続きます

第85話　帰ってきた先生　前半（後書き）

ボン太くん「ふもふも」

イヴ「え、なぜなになのに僕の出番がない？そうだなよね。一瞬出てたけどね」

ボン太くん「ふもー」

イヴ「いい加減帰ってこないかな。本当だよね。早く帰ってこないかな」

ボン太くん「ふふふもる」

イヴ「え、僕もゲームにとうとう出演したけど地雷ゲーだった？うーん。私はよくわからないけどＰＶとかで釣ったんじゃない？ただの実写だったし。機体で釣ったんだよ。きっと」

ボン太くん「ふもふもっふもっふ！」

イヴ「でも、今回はボン太くんがボン太くんによるボン太くんのための新作だった。そうだね。さすがに皆の人気者だね」

ボン太くん「ふもっふ！」

第８６話　帰ってきた先生　後半（前書き）

前半が長かった分後半は短くなってしまいました。最近かくペースが落ちてしまい更新が遅くなる一方です

第８６話　帰ってきた先生　後半

長ったらしいＣＭが約８分流れた。内容は言うまでも無くレイの本だったり管理局の宣伝ＣＭだったりと視聴者側にとってはとっと始めろだった。

『はい、長らくお待たせいたしました。後半の始まりです』

『というわけで質問ある人～』

当の本人はすでにやる気がなかった

「じゃあ、聞くけど。なんで、アリサちゃんとすずかちゃんがいるんですか？」

多分それが今回の本題の一つでもある。二人は確かになのはたちのことを知っているが彼女たちは今大学生である

『それは簡単。ＮＥＥＤ　ＴＯ　ＫＮＯＷ。君たちには知る権利がありません』

「な、それはないんとちゃいます！？」

『たかが、一局員に教える義理はない。これは機密事項である。わかるか？知る権利がないんだよ。お前たちには』

それは総帥として。また、組織の頂点としてだ。

この中で一番の階級ははやてだ。しかし、そんな彼女でも知ること

は許されない。

『あ、でも、機密事項でないとすれば二人は俺の秘書である。以上』

「そんないい加減すぎるよ」

『じゃあ、データで探してみろよ。二人とも俺の秘書だから』

そう言われて管理局にアクセスに検索した。すると確かに二人のデータがある。一般局員とか至って普通のことが記載されている。そして、確かに総帥秘書と記されていた。

（ここにある時点で機密もないもないんじゃ・・・）

『あーめんどくさくなってきたな。次で最後の質問にするわ』

（いい加減すぎる！）

最初はノリノリでやっていたくせにもう飽き始め、ていうかソファーでくつろいでるんですけど

「じゃあ、兄さんは結局なにがしたかったの？」

彼は少し間をおいて応えた

「そうだなぁ。ま、色々確かめたかったのかもしれないなぁ。局のこととか世界のこととか。なにより成長したお前らがどんな風になっていたのか」

最後の言葉なんとなく嬉しかった。この８年間の間、私たちのこと

を思っていてくれたのだから

『さて、今日はここまでだ。今日は皆にプレゼントお知らせ。先着でこのバニー麻衣ちゃんとメイドギンガたんを先着各1名様にプレゼント。応募方法は近日発売の新作の帯の応募券を切とってこの宛先まで送ってくれ。それではまた次回、どこかで放送しているだろう』

するとCMが流れもう一度応募方法の確認とか流れた。

余談だがこの話は本当だったらしく六課男性局員ならびにこの放送が流れた一部地域の男性は書店でこの本を大量に購入したらしい。

しかし、誰一人景品が届くことはなかった。

レイがそれを渡すはずがなかったのだ。

つまり釣りだったのである。

夕食

なのはたちの食事をとっていた。しかし、面識がないものたちはその光景はとても不思議な光景だった。

「・・・（普通の味だな）」

美食家でもあるレイはここの食事は不味くも無いしまた上手くもな

く感じた。

「・・・？どうした、おり・・・ヴィヴィオ」

足元からヴィヴィオがひょこっと顔をだしてきた

「“パパ”・・・おいしくないの？」

「いや、そんなことはない。ヴィヴィオは好きか？ここの料理」

「うん、大好き」

「そうか」

なでなで

レイはヴィヴィオの頭を優しく撫でた。ヴィヴィオはそれがとても嬉しそうだった

「えへへ」

「けど、ピーマンは食べなきゃな」

「うぅう」

「「「「・・・・・・」」」」

その光景は不思議ではなく異常とも言える。ヴィヴィオが彼に懐いている。何故？そして、なんでヴィヴィオが嫌いなピーマンのこと

を知っているのか。

「あの、レイくん？なんで―『シー』？」

彼は静かにしろと言ってきた。

（・・・プロペラ音・・・1機だけか）

レイはヴィヴィオをなのはのもとへ向かわせた。その直後六課に謎の黒服の集団が10人ぐらい入ってきた

『な、何だ？』

すると彼らはレイを囲むいや守るように円陣をくみその一人がレイのもとに近づいた

「総帥。お迎えにあがりました」

「・・・そろそろ俺を頼るのはよしてもらいたいんだが？」

「そう言わないでください。あなた今でもこの世界の象徴なのです」

「・・・準備は？」

「事通りなく。あとは総帥が参られれば始められます」

彼はコーヒーを胃に流し込みたちあがった。

「わかった。往こう」

「はっ」

要人警護をするかのようにレイは黒服のものたちに守られながら外へ向かっていた

「れ、レイくん!?」

「ニュースでもみてろ。そうすりゃわかる」

まるで遺言のようだった。

それから彼にいわれた通りニュース番組をみていた。内容は事件のことなどが多く報道されていた。

『大変申し訳ございませんがここで臨時ニュースをお伝えします。今回の事件について時空管理局総帥レイル・アンヴァルト・Y・神乃氏による記者会見が行われるようです。放送内容を一時中断しだいまから会見を生中継でお伝えしたいと思います。現場のビリーさん?』

ざわ・・ざわ

これを聞いてなのはたちは少しザワメキだした

『はい。現場のビリーです。急に各放送局宛てに連絡が入りアンヴァルト総帥による記者会見が行われるということで報道陣が多く集まっています。私たちにとって『英雄』的存在であるアンヴァルト総帥。ここ数年は行方がわかりませんでした今再び姿を現すこととなりそうです』

場所からしてどこかの放送局か施設。しかし、記者会見と言うより演説に近いセットになっている。

すると会場がうるさくなり皆視線が壇上へ向かう。リポーターもカメラマンに指示をだしていた。

『あ、見えました。総帥です！』

先ほどまでと違う服装で現れた彼。雰囲気だけでもさっきまでとはまるで違う。

一体なにをしようというのだろう

そして、彼は壇上に立ち始めようとしていた

何を？

決まっている

彼らしくもないことを言い

しかし、それは現実で確かなもの

彼は――――

お得意の偽善者（ピエロ）を演じるのだ

第８６話　帰ってきた先生　後半（後書き）

と今回はここまでです

書くペースが遅いため色々と手間取っています。

次回はレイの演説みたいなものです。これにはかなりてこずる予定。

それが終わったら設定などをかいていこうかなぁと思っています。

それでは今日はこのへんで

第87話　祭り上げられた英雄（前書き）

前話で『Ｎｅｅｄ　Ｔｏ　Ｋｎｏｗ』の意味が違うという指摘がありました。

これの意味は任務において、必要な、最低限の知識のみをもつ
それは自分たちが知る権利はないという意味で、そして、知らないからこそ責任を持たせた飼う手もいいという意味が込められるという意味です。

元ネタがマブラヴになりこれは使えると思って使用しました。
誤解を招き大変に申しわけございませんでした

第87話　祭り上げられた英雄

ミッドチルダ地上本部　記者会見フロア

『この場に立つのも久しいとな。そして、初めてみるものもいるだろう。だが、これから言うことを心して聞いて欲しい』

椅子に座る者。立っている者。現場を録画するもの。多くの報道記者たち、そしてあたりにはＳＰの姿もある

『広域次元犯罪者ジェイル・スカリエッティが起こした今回のの事件。鉄壁を誇ったこの地上本部を襲撃され多くの施設を破壊された。そして、その中でレジアス中将は殉職された。彼は最後まで事件を止めるためにその身を捧げたが奇しくもその命を落とした。そんな犠牲を払い今回の事件を止めることはできた』

レジアスの死。しかし、真実を知っている者は限られている。そんな彼の死は『英雄』のように祭り上げられている

それでも彼は嘘を通した。本当のことを言っても無意味だからだ

『事件解決。いいかえるなら勝利とも言えるだろう。しかし――』

『君たちは敗者である！』

『『『！！！！』』』

その言葉には記者団だけではなくそれをみていた管理局皆が驚いた

『我々の仕事は危険遺失物の保護・管理。事件を未然に防ぎ凶悪な犯罪者から人々を、世界を守ることにある。しかし、今回の事件。事件を事前に防ぐことはおろか民間人まで危険にさらした！古代ベルカのロストロギア『ゆりかご』。あの存在だけでどれだけの市民が恐怖に怯えただろうか？そして、なにより主犯スカリエッティのある一言を覚えているだろうか？

『民間人には手を出さない』だ。舐められているとしか私には思えない』

さらに会場が慌て始める

『かつて私は管理局を設立し、世界を管理してから今日まで。一度たりとも勝利というものを得たことはない。なぜか？私は常に敗者だからだ。私はすべてというわけではないがすべてを、完璧に止めたことはない。私は“人間”ではなく“人”だ」

俺はよく自分を“人間”ではなく“人”表現する。なぜか。人間は種を現すものだと俺は思っている。

なら、人は？

俺にとって人とはそのモノの形を現す。我々は人の形をしている。俺は人の形をした別の存在だと俺は思っている。だから、いつの日か俺は人間ではなくなっているのだと。

『君らはいつしか私を『英雄』と崇めた。また『救世主』だとも言った。君たちにとってそれらは何だ？絶対救ってくれるヒーローか？悪いがそんなモノを請け負ったつもりはない。俺自身その看板を今でも背負っているつもりだ。それは、君らが持ち上げたからではない。こんな私にでもそれができるのなら背負うと。自分の“意志”で、“覚悟”を持って』

『そんな私でも“人”でしかない。神ではない。だから、絶対とい

う保証はない。それでも私は君らを、世界を守ると言った。これに嘘偽りはない。だが、先も言った通り私は絶対ではない』

『それは我々管理局も同じ。海も陸も同じだ。犯罪者を出した時点、事件を起こした時点で負けなのだ。私が、君たちに敗者だと言ったのはそういう訳だ』

それでも、すべて存在は弱者なのかもしれない。それは、この世界に強者などいないからだ。

『敗者だからそこで終わりなのか。違う。敗者だから次の事に向かって歩むことができる。それが次のステップとなる。明日への希望へと繋がる！』

『今回の事件は君たちに強い印象を与えただろう。だが、もう一度言おう！我々は勝者ではない。敗者だ！そのことを胸に、心に深く刻んでほしい！』

『私もここで宣言しよう。私は絶対ではない。すべてを守ることはできない。しかし、私はこれからも『英雄』でいよう。それが、君

たちの不安を、恐怖を少しでも和らげるのなら、少しでも希望を持ってくれるなら。これからも、私は『英雄』でいることを誓う！』

『そして、最後にこの戦いで尽力を尽くし、最後まで戦い抜いた君たちに感謝の意を述べる。ありがとう。よく戦い抜き、守ってくれた。そして・・・御苦労であった。私が言ったことを忘れずこれからも世界と人々のために戦ってほしい。以上だ』

彼は敬礼しその場を去った。さりながら記者たちとその場に居合わせた者たちは立ち上がり拍手をした。その音が会場に響き渡るのであった。

六課に向かうヘリ　機内

行きとは違うヘリでレイは六課に向かっていた。ヘリパイロットの名は知らない。ただ、レイト操縦者の他にいるとしたら彼の秘書であるアリサとすずかであった。

「中々様になってたじゃない」

「すずかちゃん」

誰にでもわかる。アリサはレイをからかっていた。あんなことをし

て誰が面白いものか

「もう、こりごりだな。ピエロを演じるのは」

「そうですか?私にとってレイさんはピエロではなく本物だと思いますよ」

「よしてくれ。わかっているだろう?」

お世辞はいい。聞き飽きた。

「けど、すべてが嘘じゃない」

「そうですよね」

「―否定はしないさ。けど、組織である以上そうしなければならない。外の世界をどうにかしたいと思っても俺はその組織のトップだ。この8年間、いい意味で俺は少しだけ外の世界を救うことができた」

そこでも俺は救世主と呼ばれた。(カオスだったが)

そんな俺でも彼らの希望となり前を見て歩けるようになればそれでよかった。

世界にはよき指導者が必要だろう。

しかし、それ以前に自らが前を歩む意志がなければ無意味だ

「レイさんはなんだかんだで優しいですから」

「そんなことはない」

「本当、素直じゃないんだから」
「お前に言われたくはないな」
「なによ！」
ぽこぽこと彼の頭を殴るアリサ
「けど、改めて」
「そうね」
「？」
「「おかえりなさい」」
ここで言うか？とも思った。けど、二人にも心配かけたのは間違いない
だから
「ただいま」

六課ｓｉｄｅ

演説が終わってから六課の者たちは彼の言葉の意味を考えていた。
それはもちろんなのはたちでもある

「勝者ではなく、敗者か。言われてみればそうだよね。私は、ヴィヴィオを救うことで一杯で」

「私はスカリエッティを捕まえるために必死で」

「私たちはゆりかごを止めることに全力で」

結果的に言えば事件の主犯を捕えてたのは六課かもしれない。しかし、事件を終わらせたのはレイなのかもしれない。

「事件が終わってかなり安心してるけど、よく考えてみると私たち勝ったわけじゃないんだよね」

「どうしたの、スバル？」

「なんていうかさ・・私たちは確かに戦ってる。でも、勝者とか敗者とかそういうのよく考えたことがなかったなって」

「そうね。模擬戦で負けるのは確かに敗者ね。けど、事件を解決するのに私は勝ち負けもないんだと思ってた」

「どうしてですか」

エリオが聞いた

「だってそうでしょう。私たちは勝敗を決めるためにここにいるわけじゃない」

「それもそうですよね」

「けど、総帥の言葉を聞いて改めて考えてみるとやっぱり私たちは敗者なんじゃないかしら。事件を解決しても傷ついた人もいるし、ないより今回は最悪の場合ミッドチルダにいるすべての人たちを巻き込んだかもしれない」

「ティア・・」

「ゆりかごが起動して、本部が襲撃を受けてやっぱり私たちは敗者」

「でも、総帥の言った通りそれを次に生かす。ですよね」

「そう。痛みを知っているから。だから、守る。強くなりたいと願う」

「だから、頑張ろう皆！」

「「「「はい（ええ）」」」」

ギンガもその放送をみて彼の言葉を思い出していた

それはナンバーズに囚われ自分の意識が戻った時のこと

私は彼に聞いたのだ

なんで、あなたはこんなことをするのですか？

と

彼の目的などを聞く前に私はそれを聞いた

彼はこう応えた

―俺は守らなきゃいけないから。そういう存在だからそうしなければならない。例えどんな手段をとっても

大事な人たちを傷つけても。ですか？

―ギンガ、どんな世界でも人でもあらゆるものに犠牲はつきものだ。対価とも言いかえられる。それを行うために俺は犠牲にしてきたよ。思いも感情もただ守るための手段として

―総帥・・

―だから、ギンガも覚えていてほしい。この世は便利にできていないんだ。犠牲を対価を支払って得るものばかりだ。けど、それはけして悪いわけじゃない。ただ、俺たちはそうすることしかできないだけなんだ

・・・・・

―レイさん。そこに立っていたあなたは皆にそれを伝えるために自ら偽善者になったのですね。本当の自分を犠牲にし、総帥でいる自分をつくるために

―だったら、私は少しでもあなたの力になりたい。その重みを少しでも軽くできるなら。

ギンガも心の奥底で堅い決意をした

―こうみてると効果は出てきたみたいね。銀

演説を聞いて彼女達の様子を窺っていたアリシアたち

―ああ。今回の事件は双方に大きな影響を与えた。自分たちが常に強者ではないことを

―あの子たちも色々と新たな目標に向かっていくみたいだし。レイの演説はかなり効果が出てる

―そうだな

―ところでギンガのことだけど。こちらに引き込むの？

今回ギンガ少しながら私たちの事情を知ってしまった。特にレイのこと。なんでこんなことをしたのか。

―それはレイ次第だな。だが、レイもギンガをかなり気にいってる

ようだし目に見えているな

―ま、ギンガも普通じゃないし

アリシアのいう普通。ギンガは戦闘機人である。人ではあるが人間ではない。

私たち家族もそうだ。私たちは既にいない存在であるが彼によってこの世に留まることができた。

―最終的にはギンガ自身が決めることだ

―まぁそうだけど・・・・

―どうした？

―ライバルが増えるなぁと思って

―なにを今更。それに、私たちの場合はアイツのもとにいられるだけで幸福なのだ

―そうね。あの人は・・私たちの“父親”なんだから

―しかし・・

とリニスが念話に入り込んできた

―お父さん。と呼べないんですよね

―『・・・・同感』

私たちが家族になってからというもの。私たちは『お父さん』と呼んだことはない。なぜか。今までレイと呼んでいたのが原因でもあるが・・・

レイはそういう風にみえるのだが中々お父さんと呼べない。

けど、本当の理由はお父さんと呼べば私たちは娘として認めたことになる。だから、まだ言えないのかもしれない

でも、きっと言う時は来るのだろうと私たちは思った

六課ｓｉｄｅＥｎｄ

第87話　祭り上げられた英雄（後書き）

仁「こういうのはあんまり書いたことがないので少し不安です。なんかどっかの演説でもまねようとしたのですが話が違うため断念」

イヴ「それにしても、レイの総帥の一面ってこれがある意味初めてじゃない？なんていうかちゃんと仕事をしているの」

仁「まぁそうだよね。口調を全部私に統一したからね。もしかしたら俺があったら教えてもらいたいです」

イヴ「それにしてもこれからどうするの？」

仁「まぁ六課解散までほのぼのとやっていこうかな。まぁ人気投票もやる予定だし」

イヴ「私はロリ部門で一位は確定だよね」

仁「ナンデスカソレ？」

第1回キャラクター人気投票！！

第1回キャラクター人気投票！！

仁「どうも、不知火仁です。個人的に言うと本編の話が一旦切がいいのでここで人気投票をしたいと思います！」

レイ「今までもしようと思っていたんだがなんかタイミング悪くてな」

仁「とういうわけなんです。この人気投票の結果によっては新章まで。まぁ六課解散までの間の話に大きく左右されます。そして、残念な子は空気以上、表舞台に出ることはないでしょう・・・（予定だけど」

レイ「普通に人気投票って、のもアレなんでいくつか部門にわけることにした。それは以下の通りだ」

お姉さん部門
ま、今作品のお姉さん的キャラです。大半はこちらにいってしまうかと思われます。Ｓｔｓ編のなのはたちはこっちにも分類されちゃいますし

合い言葉は『お姉ちゃん～』

ロリっ子部門
紳士のあなたは絶対に投票する筈！なんか人数は少ないと思うので無印からA，Sまでのロリ。まぁなのはの幼少時代もｏｋにしたいと思っています。

合い言葉は『ＹＥＳロリＮＯタッチ！』

妹部門
多分発表の時に消えているかもしれない部門。何人かのキャラは兄さんと呼ぶ人がいるので一応作ってみた

合い言葉は『お兄ちゃん・・私・・』

？？？部門
タイトル未定。内容はなんかサブキャラ的存在なのになんか濃いキャラクター。あ、サブじゃなくてもいいよ？
作者的にはまぁ・・・ボン太くんとか？

合い言葉は『ふもっふ』

可愛そう部門
簡単に言うと今作品で全シリーズを通して切なく可愛そうなキャラ。今作品では一部だと思われますが

合い言葉は『・・帰ってきてよ・・』

頑張った部門
全シリーズを通してこの子は頑張った。称賛に価する。
後はヒロインよりなんかヒロインぽく見えちゃったキャラとかもｏｋだよ。

総合部門
全部を含めてになります。他のどうみても女ばっかりだけどね。
作者的にはオリキャラも当選してほしいぜ

あとアンケートもとりたいと思います（自由）

1このキャラとこのキャラとの話がみたい。（例　レイと誰かとか）

2このキャラの出番を一回でもいいから増やして！

3その他にあれば募集

仁「とま。こんな感じです。総合部門以外は3人。総合部門は5人まで投票できます。計7部門もあるのですがお願いします。総合部門だけだと残念なキャラクターも出てくるので。できれば簡単でもいいのでどうしてそのキャラクターを選んだのか理由を書いてもらえると嬉しいです」

レイ「それと発表の形式。総合部門以外は3位までは発表するぞ。総合部門は5人なので10位まで発表する予定だ。ポイントだが総合部門以外は1位が3ポイント。2位が2ポイント。3位が1ポイントだ。総合部門は1位から5から1ポイントだ。5位でも1ポイント貰えるんだからいいよな」

仁「って、それは結果発表当日のがいいじゃ・・」

レイ「気にするなって。それとアンケートだが返答は自由だ。あればそれを参考にしてつくるし、なければ人気投票の結果をみてつくる予定だ」

仁「六課解散は時期的に3月、4月だったから結構余裕はあるんだよね。だから、じっくりとネタを考えられる」

レイ「俺は仕事したくないな」

仁「悪いけどお前仕事してもらうから」

レイ「・・なん・・・だと・・」

仁「アリサとすずか出したから秘書をしているとこがみたい人もいるだろう?だから、一回ぐらい仕事しろ」

レイ「この間演説したばかりだというのに・・」

仁「そして、最後になりますが投票については感想または活動報告。メールなどでお願いします。今まで感想などを書いてこなかった人も是非今回だけでも参加していただくとありがたいです。多いほど

人気投票は盛り上がるので」

レイ「付けたしで投票機嫌は今日から・・・そうだな。来週の後半あたりにしておこう。ちゃんとした日程は来週あたりに」

仁「それではたくさんのご応募お待ちしております」

第８８話　とある日の総帥　前篇（前書き）

書いていたら長くなってしまったため二部構成にしました

それと人気投票の期限は金曜日に決定しました。お願いですから投票してほしいです（泣き

第８８話　とある日の総帥　前篇

レイの演説から数日

レイはその後も六課にその身を置いていた。ただ、用も無いわけがないはずなのだ。彼は総帥なのだ。しかし、彼は―

仕事したら負けかなぁって思ってる。だから、俺は勝ち組だ。

そんな彼は六課の屋上で朝から訓練に励んでいる彼女達をみていた。煙草をふかしながら

「事件が終わってからも訓練とは。精がでるねぇ。これで管理局も安泰か（キリ）」

「キリ、じゃないわよ」

声が聞えたので後ろを振り向くと仁王立ちしているアリサとすずかがいた。

「さ、いきますよ。レイさん」

「ｗｈａｔ？いったいどこへ？」

二人はニッコリと笑いながら言った

「それは」

「もちろん」

『仕事に！！』

時空管理局本局会議室

「で、先日の事件で我々の被害は・・・・」

「その件について機動六課からの報告は・・・」

この部屋にはいるのは総帥を始め、各部署の提督、階級が少将以上。
そして、三提督もこの会議に出席している。

「主犯であるジェイル・スカリエッティは・・・」

「更生プログラムを受け入れなかった戦闘機人たちも・・・」

長い机に向かい合って座る提督たち。そして、メインモニター前に座る総帥。そして、その両サイドに立つ秘書の二人。

「それとミッド地上本部から予算を少し回せと・・・・・申しておりますが」

「いくらだ？」

足を組んで手に顔をつきながら聞いた。

「軽くこのぐらいです」

そいつはブイサイン。つまり2のサインをしている。

「え、なに、２円!?（笑顔）」

「い、いえ」

「じゃあ、２０円?」

「・・・」

「総帥」

すずかがふざけるなとアイコンタクトしてきた

「・・・2億ぐらいか?」

「いえ、２０億」

ブチ!

「実際に見てきたが・・・ほとんどの修理費を押しつけてるだけじゃねぇか」

「しかし」

「間をとって5億ぐらいくれてやれ。それと、今回の事件に関する“すべて”の資料とその他もろもろこちらに提供しろと伝えろ」

目つきが変わり口調も変わった

「どう伝えますか？」

「レジアスのこと。マスコミに漏らされたくなければ。と伝えろ」

「了解」

こちらの情報部も実を言えばレジアスが裏でスカリエッティと繋がっていたという情報は掴んでいた。そして、それを知っているのは地上本部のレジアスの一部の配下。

「で、他は？」

「はい。他には・・・・」

それから2時間経ち会議は終了した。

「終わったぁー」

「はいはい。次は・・・」

「却下だ」

「もー。駄目ですよ。レイさん」

「別に俺がいなくてもいい案件だろうが。それよりちょっといくとこがある。あとで俺の部屋で合流な」

「もう、レイさんたら」

「仕方ないわよ。アイツが仕事なんてしたらそれこそ天変地異の前触れよ」

「ふふ。そうだね」

二人はなんだかんだで総帥の代わりに会議に出席するのであった。

その後レイは局のとある部屋の前に立っていた

「ミゼット入るぞー」

ノックもせず同等入室するレイ。マナーというものを知らないのだろうか？

彼が入った部屋は伝説の三提督と呼ばれる提督の一人。ミゼット・クローベル提督の部屋である

「・・・まったく。あなたは相変わらずですねぇ」

別にこれが初めてではないので少しは免疫があった。

「とりあえずお茶ぐらい出しますよ」

「あんがと」

彼女にお茶を入れてもらって向き合うように座る二人

「で、会議のあと私のところに来たのはなぜです？」

「ま、礼を言いにな。六課のこととかもそうだが、なにより家のモンが世話になった」

「もしかして、麻衣ちゃんの事かい？そりゃあ、あの子は最初掴みどころのない子だったけど可愛い子だよ」

「それにアリサとすずかのこともな」

「なに、少し昔を思い出しながらやってたから楽しかったよ」

ミゼットには俺がいなくなったあと、麻衣も含め3人の面倒を見てもらっていた。麻衣にはまずこの世界のことなどとか局のこと。アリサとすずかに戦い方や仕事の仕方などを教授してもらっていた。

「任務はほとんどがお前たちの警護だもんな」

「それでも若い子と話すのは楽しかったよ」

「そういうもんか？」

「そういうものですよ」

年を喰うと色々と変わるもんなのか？

「ところで、他に要件が合ったんじゃないのですか？」

「まぁ、な。８年もほったらかし、前はもっと放置していたがそろそろ自立してほしいとこだな」

「・・・仕方ないと言えば仕方ないじゃないのかい？」

「この間の演説だって本当は俺がやるはずじゃなかったからな。いい加減俺を頼るのは止めてもらいたいね」

「そうかい？中々、様になってたけどね」

「茶化すな。ま、俺が総帥の座を退かないのも原因の一つではあるが。俺が世間に不老不死を認めてもらっても色々と面倒なことになっちまったし」

「確かに管理局はあなたがいなくもて機能している。けど、象徴が、指導者が必要なのは確かさ」

「・・・」

最高評議会が居なくなった今局を操作するものはいない。レイ以外を除いて。

表舞台で君臨している以上成さなければならないのも確かだろう。

「できれば、俺の後継者が現れることを祈ってる」

「そんなことない癖に」

「さ、どうだろうね」

「「ははっは」」

軽く世間話をしたあとレイはミゼットのもとを去った。

総帥の間へいくとまだ二人は来ていなかった。レイは奥の本棚のとある本を奥に押した。すると隠し扉が現れレイはそこに入り地下へと向かった

ピン

扉が開くとそこは相変わらず暗くただ一つの柱におさまっている青いポットが光りだけがその部屋を照らしていた

『おかえり、レイ』

「ただいま。イヴ」

『・・・・・』

無言。いつもなら他愛も無い会話で少しは盛り上がるのだろうが今日は少し違っていた

「アイツに会ったよ」

「・・そう、なんだ」

「時が近いかもしれない」

「・・・・うん」

イヴの表情はとても暗かった。

「ここにいる限りはお前の存在は絶対にバレない。ただ・・・あいつらの行動は宣戦布告みたいなものだ。速くてあと数年で仕掛けてくる」

「・・・・」

レイはポットの目の前、ポットの中にイヴと向き合うような位置まで歩く。

「大丈夫だ。言ったろ?絶対に守るって」

ガラス越しに手を重ね合う二人

「うん」

「だから、安心しろ」

「うん」

「それじゃ、いく」

「うん、またね」

「ああ、またな」

そして、レイはその場を後にした。

総帥の間に戻ったレイは暇だった。仕事もあったので暇だったのでやった。ただ、判子を押すだけだったが。
それから少しした後二人が戻ってきた。さらに、書類も持ってきたので仕事は再会した。
再び作業を開始してから数１０分後。

♪～

部屋にとりつけられてた外線の電話がなった。

「はい、もしもし」

すずかが電話に出た。この外線はいわゆる異世界からかかってくるもので並列世界の地球からかかってくることが多い。どうやって繋いでいるかは謎である

「“総帥”お電話です」

なんか棘のある声だった

「誰からだ？」

「“綺麗”な声をしたリインさんの声に似ている“女性”からのお電話です」

なんかすずかが黒いオーラを纏っているように見えるのは気のせい

だろうか

「なぁ、すずか。もしかして、怒ってる？」

「いいえ、怒ってなんかいませんよ」

レイは一つミスを犯した。さすが鈍感王と言うべきというところだ。これは怒っているのではなく嫉妬に近い物である。電話の相手が女という時点ですべては決着している。アリサが出ずに済んだのは不幸中の幸いだ

「はい、もしもし」

恐る恐る受話器を手に取る

「あ、あー。テッサか。久しぶり。で、何の用？」

―知り会いみたいね

―・・・そうだね

「え、アマルガム潰したはいいけど一文無しで困ってて部隊を再建しようにも金がないし設備も無い？」

―なんか金絡みよ

―・・・そうだね

「ああ、それなら金くれてやるよ」

『！！！』

―なんか相手も驚いてるわね

―・・・・そうだね

「軽く１００億ぐらいでいいか？機体とかダナンとか。データのバックアップは俺が持ってるからそれも送ってやるよ」

―１００億だって。ミッドの予算の２０倍よ

―・・・・そうだね

それから数分はそういった話だったのだが・・

「で、アイツはどうなったんだ？」

―アイツ？

「え、かなめを助けてからまた三角関係になった？それで、今は一緒に暮らしてる？」

―なんかいきなり話が変わったわね

―本当だね！（にっこり

相手がレイの知り合いだけだとわかったすずかは笑顔に戻った

「まぁ、そのなんだ。頑張れ。それじゃ」

受話器を置きはぁーと溜息をつく

「で、本当に１００億あげるの？」

「ああ」

「レイさんって友達思いなんですね（笑顔）」

（あ、いつものすずかに戻った）

「そ、そうかもな」

ちょっとどっかの誰かさんみたいで少し怯えてしまったレイであった

「さて、二人とも帰っていいぞ。すまないな、付き合ってもらって」

「だって、あんたの秘書じゃない。“一応”」

「ええ。そうですよ”一応”。レイさん」

「ははっは。そうだな。それじゃ、お疲れさん」

『は～い』

二人が部屋を出たのを確認するとレイは再び外線用の受話器を手にとった

「・・・あ、俺です。レイです。・・・お久しぶりです。時間空いてますか？・・・・・はい。それじゃ、臨海公園で」

受話器を置き覚悟を決める

「ふー。一応ケジメっていうか迷惑をかけた方としてはやっぱり、な」

腹くくるというわけではない。ただ、そうしなければならない。それはわかっていた。

たが、わかっていてもやっぱり・・・

殴られるとやっぱり痛いんだろうな・・・

そんなことを思いながら彼は局のとある場所へ足を運んでいた

前篇ＥＮＤ

第８８話　とある日の総帥　前篇（後書き）

イヴ「フルメタネタがあったけど気にしないでね♪」

仁「うん。ま、ネタがなかったので。長編も完結したからちょうどいいかなって」

イヴ「そういえばおまけもかく予定では？」

仁「残念ながら間に合わなかったのです！後篇に乗せようかなと思っております！」

イヴ「おまけの内容は？」

仁「電話の向こうの話でもと」

イヴ「さて、前書きでもかいた通り投票の締め切りは今週の金曜日なりました」

仁「投票マジでお願いします」

イヴ「それではまた次回で」

第８９話　とある日の総帥　後篇（前書き）

今回はとても重要な話になります。この伏線が今後重要になるものだと思われます。そして、レイのある秘密が明かされる・・・

第８９話　とある日の総帥　後篇

彼は再びある人の部屋の扉の前に立っていた。ミゼットの時と違い、彼はかなり緊張していた。

「ふー。よし」

コンコン

「はい。誰ですか？」

「お、俺だ」

「・・・どうぞ」

扉が開くとリンディが立っていた。しかも、恐い顔で。

「で、なんのようです？」

「わかって言っているだろ。それ」

「そうですか。自覚あるんですね。それじゃあ・・・・！」

ドン！

「ぐぅ！」

レイはいきなり顔を殴られた。

「お、お前グーはないだろ！？」

レイ自身叩かれる程度だと思っていたのだろう。

「あなたにそれを選ぶ権利があると思っているんですか！」

「・・・」

無言。それはわかっているという合図。

「あなたが突然いなくなって突然帰ってくるのは昔もよくあったので私は慣れていました。けど、あなたの所為であの子がフェイトが・・いいえ、彼女たちがどれだけ悲しんでいたのか知っているんですか！？」

それは母親としての言葉だった。

「フェイトだってなのはさんと同じくらい悲しんで・・・泣いていたんです。あなたがいなくなったと聞いてその日は部屋に閉じこもって泣いてて・・・。それから数日はご飯も食べないで学校にいっていつものように振舞って。あなたはいい加減待たされる身のことも考えてください！」

「リンディ。お前・・」

「私は、私だって同じことを味わされた一人で。私だってあなたを待っていた時もあった！けど、あなたは何も言わずに消えて、帰っ

てきて・・・」

母親として、また、一人の女として今まで言いたかったことを吐いた。けど、少しずるいと私は思ってしまった。
母親として怒っているのに女としての後悔も一緒に吐いていた。

「いい加減、逃げるのは止めてください。・・・先生」

泣きじゃくれたまま彼女はレイの胸によりかかる。

「知らないフリをするのは止めてください・・」

「・・・俺だってわかってる。けど、駄目なんだよ」

「どうして!?」

「俺は・・・俺は・・・化け物だから」

彼から発せられた言葉は意外なものだった。けど、そんなことは知らない。いや、関係ない。私は一度たりともそんなことを思ったことはない

「あなたは人間です!私たちと同じ・・『違うんだよ』・・え?」

「俺は“人”なんだ。“人間”じゃない。人の形をした化け物なんだ」

「なんで、なんでそうやって・・」

「知らないフリをしてたってわかっちゃうんだ。それでも、俺は駄

目なんだ。昔にもこういうことたくさんあったけどいつも答えは『NO』なんだ」

リンディは少なからず彼の事情を知っている。彼がそういうのは不老不死だから。けど、それは逃げるための言い訳にすぎないとも思っていた。

自分は１００年しか生きられない。けど、彼はずっと前からそして、これから未来へと生き続ける。自分を置いて皆逝ってしまう。それが一番の理由なのかもしれない

「だから、今起きたことは忘れてくれ。それじゃあ、俺は行かなきゃいけないから」

「・・・桃子さんの所にですか？」

「・・ああ」

「・・・・」

もう一発殴られてこい。とも思った。けど、そんなことは今の状況では考えられなかった。

「じゃあ、また」

「・・・」

返事はなかった

レイはそのままリンディの部屋を後にした。

彼がいなくなったあとリンディは一人残され呟いた

「あなたは化け物なかじゃありません。化け物だったら謝ったりしません・・・」

「あなたはそうやって・・・逃げているだけ」

ああ、言ってやった。この思いは昔に置いてきた物。だから、結婚したし息子を産んだ。
けど、言っておきたかった。
一言でかたずけるなら・・・吹っ切れた。

「さてと、仕事に戻りましょうか」

結果的には振られたけど、この思いを密かに娘に託していた。なんていうのだろうか。娘に期待をしているとも言える。
だから、娘を応援しようと思った

レイｓｉｄｅ

六課　屋上

帰って来た時にはもう夜だった。彼は食事をとらず屋上の柵におっかかり煙草をくわえ夜空をみていた

「今日は・・・星がみえないな・・・」

そんなことを呟いた

「まだ・・痛ぇな」

殴られた頬に少しふれる。本日二回も殴られ、打たれたリンディと別れたあと、桃子さんと会った。先ほどと同じ場所に打たれた。殴られるかと思ったら打たれたのだ。

・・・・・・

『私だって殴りたいんですよ・・・でも・・』

その時、俺には何故殴らなかったのかがわからなかった。きっと俺にはわからないと思った

『親にとって娘は自分の命よりも大事なんです・・。あの子は私たちの前ではいつものように振舞っていました。けど、そんなやせ我慢すぐにわかりました。だって―『母親だから』―』

「でしょ？」

「・・・！」

今度は腹を殴られた。

「調子に乗らないでください」

（さ、さすがなのはのお母さん・・・お、恐るべし）

「レイさん、私はこれ以上言いません。けど、これだけは約束してください」

「？」

「娘をもう二度と泣かせないでください」

「・・・善処します」

約束はできなかった。前科も多くある。だから、泣かせないように努力しろ？
無理だ。

俺は『女泣かしのアンヴァルト』とまで言われた男だ。

「・・・今回のことはレイさんが自分で気づいたのでもう良しとしましょう。けど・・・」

ゴゴゴゴゴッ！

なんていうのだろうか。目の間の桃子さんの後ろ。すぐ後ろにピンクのオーラを纏った何かがいるような気がした。

「今度泣かせたら私と“デート”してもらいますから♪」

そんなオーラを纏いながら放った言葉がそれだった。
俺は逆らうことができず、また、『桃子さん、亭主がいるんじゃ』とは怖くて言えなかった。

・・・・・・

「リンディのやつ気づいてたんだな」

（やっぱり気づく奴は気づくんだな）

レイは思った。知らないフリ、気づかないフリをし続けてきたことに。

（けど、リンディ。ごめんな。本当は違うんだ。お前の気持ち受け入れてもいいって思ったこともあるんだ。けどな？駄目なんだ）

確かにそういう思いを抱いたこともあった。もっと昔から何回もあった。けど、自分は不老不死だから。そう言って逃げてきた。

それも確かな理由だ

理由なんだ

けど、心のどこかで俺は何かこう・・・付き合えない

そういう思いがあるんだ。ただ、純粋に不老不死とかそういうのじゃなくて真面目に

付き合えない

その思いがあった

なんでかは今でもわからない

ただ、なんとなくだけど言えることは・・

きっと何か大切なことなんじゃないかって

レイｓｉｄｅＥｎｄ

おまけ

「大佐殿、レイ殿はなんと」

「資金援助してくれるそうです」

「ちなみにいくらなんですか？」

「１００億」

「「・・・・・」」

「それより！」

ガバ！

彼女はいきなり抱きついた

「もう、ミスリルもないんですし大佐殿はやめてくださいって言ったでしょう？サガラさん♪」

「は、はい。すまない、て、テッサ」

「はぅ・・・もう一緒に教会へレッツゴーですよ！」

「ちょっと待ちなさいよ！なに勝手に二人だけの世界に入ってるのよ！？」

「いいじゃないですか。ここぐらい。かなめさんは原作でイチャイチャすぎなんです！ここなら作者は私の味方です！」

「なに、リアルな話してんのよ！？ソースケもソースケよ！いい加減離れなさい！当てたってありゃしないんだから！」

カチン！

「いいんですよ！ちょっとあるぐらいのが！大きすぎるとあとで飽きますよ！それに、私はこれからなんです！」

「テッサあんたね、いい（ｒｙ！」

「かなめさんこそいい（ｒｙ！）

二人の火花が散っている。

「レイ殿、速く助けてください・・・」

届かぬ言葉を祈りを込めて言うのだった

第89話　とある日の総帥　後篇（後書き）

仁「レイは鈍感ではなく鈍感なフリをしていただけだったんです！」

イヴ「な、なんだって！」

フィ「そ、そんなことがあっていいと思ってんの！？」

仁「その理由は今は語れません。かなり先になってしまいます」

フィ「でも、これからどうするのよ？フリならもうデートとか無理じゃない？」

仁「確かにフリなんですけどレイはそれでも鈍感な部分があるのでｏｋ！ちょっと無理やりだけど」

フィ「大変だわ」

イヴ「それにしても・・・レイが皆のこと気付いていたんだ。それはそれで嬉しいかもね」

仁「ハーレム＝鈍感ではなくなってしまったが今回はとても大事な話だったんです。それでもデートの話とかしますけどね」

イヴ「次回からは普通にやっていきまので更新は一週間に3回できればと思ってる作者です」

フィ「それじゃ投票は明日までなのでよろしくお願いね～」

第1回キャラクター人気投票結果発表！（前書き）

なんていうか物凄い結果になった

第1回キャラクター人気投票結果発表！

『第1回キャラクター人気投票結果発表！！』

仁「さぁ、お待ちかね。第1回キャラクター人気投票結果発表のお時間です。司会は私不知火仁と」

フィ「愛の女神フィリーヤです・・・・」

仁「元気ないけどどないしたん？」

フィ「・・・あのさ、一つ言っていい？」

仁「どうぞ」

フィ「司会＝私は『却下します』どうぞって言ったじゃん」

仁「そういうことは言ってはいけません。出番があるだけましだと思え」

フィ「・・・・わかったわよ」

仁「さぁ、気を取りなして。まずは、今回の内容の再確認。普通のじゃつまらないので系7部門。『姉部門』『妹部門』『ロリッ子部門』『???部門』『頑張った部門』『可哀想部門』そして『総合部門』によって投票してもらいました」

フィ「人気投票はただ順位を競うだけではなく。その小説によって各キャラの扱いは違うので読者がそのキャラをどう思ってるのがわかるものでもあると作者は思ってるみたい」

仁「まぁね。でも、ヒロインが違うとかそういう大まかな所になるだけでほとんど変わらないんだけどね」

フィ「というわけで発表していきましょうか！」

仁「よっしゃ！それじゃ、まずは『姉部門』からだ！ドラムロール！」

デデデデデ～♪（これでいいんだっけ？）

『姉部門』

1位　銀

2位　ギンガ

3位　アリシア・ユキナ

4位　リニス

になります！

フィ「なんていうかこの作品の姉キャラは限られてるけど・・・銀なんだ」

仁「家族という設定で長女ですから。また、選んだ理由で一番よかったのがマテリアル編で星音たちを受け入れた所が私的にいい理由でした」

フィ「次にギンガは・・・ｓｔｓ編作者が唯一優遇したキャラです」

仁「だって、ギンガ好きだもん。番外編とか色々やったけどね。でも姉らしいことはあんまり書かなかった気がする・・・」

フィ「3位は二人ね。アリシアの場合はフェイト限定になっちゃけ

ど」

仁「ユキナも姉らしいところがあったと思われます。特にアリシアはフェイトの戦いの時の台詞がよかったと高評価です」

フィ「4位だけどリニスか。なんていうか意外でもないんだけどなんていうか。ね？」

仁「そうだね～」

フィ「本当ならここでご本人登場といきたいんだけど長いんで省略！」

仁「では、続いて妹部門！」

デデデデデデ！

妹部門

1位　フェイト

2位　ティアナ

3位　スバル

フィ「フェイトか」

仁「妹だよね。一応」

フィ「ティアナもスバルも一応妹だもんね」

仁「そうなんだよね」

「「・・・・・」」

仁「すみません。なんていうか意外性がないので書きづらいです」

フィ「じゃあ、気を取り直して次いこうか！」

デデデデデデ！

ロリッ子部門

1位　星音・フェイト（9歳）

2位　雷華

3位　闇樹

フィ「うわ！マテリアルズ！しかもフェイト（9歳）！」

仁「ん、ま、妥当？現在3人は大人の姿ですよ。一応」

フィ「それよりフェイト二冠じゃない。子供だけど」

仁「多分ちっちゃいフェイトの方が好きな人の方が多いのではないだろうか？」

フィ「なるほど。皆ロリコンってことね！」

仁「ちゃうわ」

フィ「あっそ。じゃあ次」

ふもふもふもふもふもふも！

？？？部門

1位　ボン太くん

仁「正直にいいます。こいつ以外にいませんでした」

フィ「今作序盤から存在していたクロスキャラめ！」

仁「なんていうかコメントしづらいよね・・」

フィ「そうね・・・」

「「・・・次いこうか」」

デデデデデ・・・・・

頑張った部門

1位　フェイト

2位　なのは

3位　麻衣

以下　ギンガ・レイ

「「・・・・・」」

フィ「はいはい。三冠オメデトウ。1位はいいから2位からいきましょ」

仁「よかったな。なのは。投票されてて」

フィ「ちなみに、フェイトとなのはの理由は似たようなものね。アリシアとレイと戦っていた時のことみたい」

仁「麻衣がいたのは驚いたわ。なんでも『ご先祖様～』とレイのために頑張ったのよかったらしい」

フィ「えーとギンガはピエロを演じていたところで、レイが裏で色々と頑張ったところだって。ここにきてやっと主人公ね」

仁「さて、次は可哀想部門。やらなきゃよかったとあとで後悔した自分です」

デデデデデデデデデ

可哀想部門

1位　元祖ユーノ・マルス

2位　イヴ

3位　スノー

「「・・・・・」」

フィ「元祖？」

仁「・・・・・」

フィ「イヴとスノーは出番が少ないから。マルスは簡単にいうと可哀想だから」

仁「うん」

フィ「で、元祖って？」

仁「・・・存在が消されたからだよ。ていうかどこもそうだろうよ」

フィ「ふーん・・・」

仁「さ、次で最後！総合部門！」

フィ「それじゃいってみよう！」

デデデデデデデデデデデ

総合部門

1位　フェイト

2位　レイ

3位　銀

4位　アリシア・ギンガ

5位　麻衣

6位　なのは・雷華

7位　シグナム

8位　星音

9位　レジアス

「「・・・・・・」」（あまりにアレなので言葉がでない）

仁「あ、おえういあ？」

フィ「しっかりしろ！現実を見るんだ！」

仁「は！危ない。あまりの光景に頭がいかれちまったぜ」

フィ「仕方ないわよ。だって、7部門中“四冠”なんですもの！」

仁「えー総合部門については2位と9位を除けば嫁の嵐かと思われます」

フィ「でも、あんたとしてはオリキャラ、主人公が2位なのは嬉しいんじゃない？」

仁「まぁね」

フィ「というわけで、登場してもらいましょう！第1回キャラクター人気投票総合部門1位。さらに7部門中4部門1位のフェイト・T・ハラオウン。いらっしゃ～い」

仁「（なにその新婚さんなんとかみたいな）」

フェ「皆、ありがとうね！」

フィ「おめでとうフェイト。さっそくだけど帰って頂戴」

フェ「え、なんで！？」

フィ「るっさいわね。四冠とったんだからさっさと出て行け。しっし」

フェ「嫉妬かな？見苦しいよね。さて、こんな女ほっておいて。兄

さんやったよ！私1位だよ！」

となぜか登場する主人公

レイ「よかったな」

銀「私は3位か。まぁまぁだな」

アリシア「私はギンガと一緒か。ギンガの株も急上昇ってやつね。この間のメイドがそんなに気にいったのかしら？」

ギンガ「は、恥ずかしいので言わないでください！」

麻衣「ご先祖様！私5位です！」

レイ「よかったな。Ｓｔｓからなのに頑張ったな」

麻衣「はい！」

なのは「私・・ヒロインなのに、リリカル“なのは”なのに・・」

雷華「やったー！」

シグナム「わ、私が7位か」

仁「理由がおっぱいおっぱいだってよ」

シグナム「斬る！」

星音「8位ですか。顔が私なのが原因ですね」

9位のかたは残念ながらあの世に連絡がとれないので出れません

フェ「あ、アレ?私の立場が・・・」

仁「さて、フェイトクン。MVPの君に一つだけ願いを叶えてあげよう」

フェ「本当!?じゃ、じゃ・・タイトルを『魔法美少女リリカルフェイト　兄さんとドッキドキ♪』にかえてほし『トントン』?」

誰かが肩をたたいので後ろを向いた

そこには魔王がいました

「あなたちょっと調子に乗ってないかしら?そうよね。私」

「そうだよ。ちょっと乗ってるよね。クイーン」

フェ「えーとなのは、さん?」

「そんな歴史をかえることしちゃ駄目だよフェイトちゃん」

「そうよ、M女」

フェ「え、M?」

「ちょっと頭冷やす?」

「それとも冷やさせたほうがいいかしら？」

フェ「に、兄さん助けて！？」

レイ「で。今後どうするよ？」

仁「オリジナルになるからね。予定ではｖｉｖｉｄの温泉のとこまでいかないとどうにもならないんだよね」

レイ「ん～先は長いな。まだ、六課解散してないし、チンクたちのこともあるし」

仁「そうなんだよね。ナンバーズの一部は原作通りで、一部はちょっと違う。ギンガのことも気になってるだろうから・・・・」

レイ「ふむふむ」

フェ「・・・・ぐす」

「「さぁ、お前の罪を数えようね（なさい）」」

フェ「うわーーーーん！」

そして、フェイトは夜空に輝く星となったとさ

緊急告知！

高評だった番外編その2をやることに決定いたしました！

で、そのヒロインを誰にするかのアンケートをとりたいと思います！

本当はフェイトでもいいんだけど４冠だからさ。ちょっとね。

ヒロインは以下の通り

なのは　フェイト　銀　ギンガ　アリサ　麻衣　シグナム　星音

雷華　闇樹

一応制限はないのでヒロインにしたいキャラを選んでくれればｏｋです

でも、俺には選べない！という方は全部と書いてくれればｏｋです

個人的な意見をいいますと本編かくより番外編をかくのが楽しいです

そして、舞台、まぁ内容なんですがこれもリクエストがあればお願いします。絵本てきな話でもいいし、アニメ（作者がわかる範囲）を元にでもいいです（制限無なのでどんどんかいてください）

ガンダムなら０８小隊　シローとアイナのような関係

ま、一番いいのはシンデレラみたいなもんだよね

予定では内容が決まったら一度報告する予定

これに期限はないのでよろしくです

「それでは最後になりますが今作、それは永遠を生きる魔術師を頑張って連載していきます。最近今作だけではなく他の作品も停滞気味。受験など色々ありまた作者の鬱が最近多発してるため投降は遅くなっていまいます。それでも、頑張って連載していきますのでお願いいたします！」

第1回キャラクター人気投票結果発表！（後書き）

えーと我らがフェイト嬢が見事４冠です

フェイト派にはたまらない結果でしょう

というわけでまたアンケート出したのですがお願いします

次回はレイとヴィヴィオの話？かも

第９０話　総帥と聖王？の関係？（前書き）

さて、久しぶりの投稿です

え？まだ４日？いやいや私にはもう１週間ぐらい放置てきな感じですよ

さて、今回は９０話なのでそれなりの話と気付いたのが今。

あー９０話だーやべぇどじった

更新は１週間に２話できればと思っている予定です

ではどうぞ

第９０話　総帥と聖王？の関係？

新暦００７５　１１月

ＪＳ事件から既に１カ月が過ぎた。壊れた建築物は今もなお復興に励んでいる。
対して六課と言えば、彼女達が動くことは滅多にないのでいつも通りの日常を過ごしている。

機動六課　食堂

レイの演説も１カ月が過ぎた。最初のころはアリサとすずかに連れていかれ多分仕事をしていたのだろうが今でもこうして六課の食堂でコーヒー（ブラック）を片手に持ち、もう片方の手でノートパソコンをアリエナイ速度でうっている。

そもそもこの世界でノーパソってどうよ？

「んー・・・出力がいまいち安定しないな。やっぱ丸ごと新しいのに換えるか・・。やっぱ、格納庫はいらないか・・いやでも、格納庫は必要だしな・・ブツブツ」

なにやら彼は何かの作業で悩んでいるそうだ。

「・・・・」

そんな彼の膝の上に座る小さな少女が一人本を読んでいた。面白くも無く、つまらなくも無く、ただ普通に本を読んでいた。

その小さな少女と言うのがヴィヴィオである。

彼の膝の上で

男の膝の上で

大事なこｒｙ（言いました

「ねぇ、“パパ”」

「なんだ？」

「いつもここでそれと向き合ってるけど楽しいの？」

「楽しいって言われると困るな。別に楽しくなりたいからしてるわけじゃないからな」

「ふ～ん」

「逆に聞くがいつも俺の膝の上で本を読んでて楽しいか？」

「うん♪」

楽しい。と応えられても困るレイ。
別に仕事をしづらいわけではない。あまり邪魔ではないしむしろこの歳で静かに本を読んでいるのが不思議なくらいだ。

「さて、そろそろ午前の訓練が終わるころだ。なのはのとこにいくか？」

「うん！」

外へ出る二人。手を繋いでいこうにも身長差が少しあるためレイはヴィヴィオを肩車して訓練場へ向かっていた

「わ～高～い！」

普段とは違う目線からみる光景に驚いているヴィヴィオ

「あ、フェイトママだ」

「丁度終わったみたいだな」

「―！」

フェイトは二人の今の姿をみて物凄く驚いていた。
ま、普通にみれば肩車しているだけだが

「午前の訓練は終わったのか？」

「う、うん。兄さんは何しに？」

「フェイトママとなのはママを迎えに来たんだよ」

「そっか。ありがとうね。ヴィヴィオ」

ちょっと背伸びしてヴィヴィオの頭を撫でる。

（いいなぁ。私も肩車して貰いたかったな・・・）

しかし、この年ではそれはない

（あ、でもお姫様抱っこなら・・・）

頬を赤く染め勝手に照れてるんだからなんだがよくわからず身体をくねくねしていた

（しばらくみない内に変になったか？）

その後なのはと合流して隊舎へ向かい食堂で昼食をとる

席の配置は４人で座りレイの隣がヴィヴィオ。なのはの隣がフェイト。という形になる。
今日の昼食は至って普通なのだがヴィヴィオは皿の端っこに緑色の物を避けていた。

ピーマンである

子供の時は誰しも苦手な野菜であったのではないだろうか？
ま、小さい頃から好き嫌いをさせないのも親の仕事でもあるだろう。
なのははどちらかと言えば我慢して食べなさいという派。フェイトはその逆で無理せず食べなくてもいいよ派。だろう（作者の自己解釈）

レイはと言うと

「ヴィヴィオ、ピーマン」

「うぅだって苦いんだもん」

「別に無理しなくてもいいが少しは食べなさい。それが作ってくれた人への礼義だ」

「れいぎ？」

「そ。食べ物は勝手に出てくるわけじゃない。農家の人が汗水たらして栽培し、それを料理人が工夫を凝らして出す。それを嫌いだからという我がままで食べないのはよくない」

「「・・・・」」

二人の母親は彼のなんとも説得力のある言葉に打たれていた

「それに、好き嫌いしてると“大人”になれないぞ」

「！―大人・・・」

小さい子供というのは大人という言葉の印象が強い。それは自分をみて欲しいという意味も込められているだろうが。

「大人ならピーマンぐらい食べれるよな～」

「・・・！」

パク！

お～

ヴィヴィオが目を瞑って口に入れた。その姿を見て二人は関心していた

「うぅう苦い・・・」

ナデナデ

彼は無言でヴィヴィオの頭を撫でた。
いわゆる飴と鞭の容量だと思われる。

「頑張ったから俺のデザートをやろう」

「ありがとう“パパ”！」

「「！！」」

ニコニコと笑うヴィヴィオ。
しかし、少し暗い顔をしている二人。

「――――ところで」

「？」

「なんで、ヴィヴィオはレイくんのことパパって呼ぶの？」

「そうそう」

「「・・・・」」

レイとヴィヴィオは互いに顔を見合せていた

「・・・どうしてだ？」

「ん～わかんない」

「だって」

ガクシ！

だって。と言われても困るんですけど！

ヴィヴィオがレイをパパと呼ぶのはなのはとフェイトをママと呼ぶのと同じ理由である。

初めて出会った時、ママを探していたようにパパも探していた。なぜ、それがレイなのか。

それは彼女の血が原因だと、レイは推測していた。

「・・・・」

（ほら、レイこっちですよ！）

（オリヴィエ、勝手に城を抜け出しても知らんぞ？）

（たまにはいいじゃない）

（お前のたまには週に４回はあるぞ）

（細かいことは気にしませんことよ）

（いきなり女王に戻るな）

（ははっは）

彼女の笑顔を思い出す。乱世と言えたあの時代。あんな少女が人の前に立ち勝利を導いていた。今思うとそれは今も昔も変わらないと思ってしまう。

そして、最後の聖王のゆりかごとしてその命を落としてしまった。

（本当。そっくりだ。髪の色も。顔も。）

そして、彼女の生まれ変わりとでも言えるヴィヴィオ。最初はオリヴィエと呼んでしまっていたが彼女はヴィヴィオであって彼女ではない。

少し残念でもあり嬉しくもあった。

「――ぱ・・・・パパ！」

「！」

「もう、パパぼおっとしないでよぉ」

「あ、すまん」

我ながら過去に浸っていたことに後悔。

「ねぇ、パパ。お願いがあるんだけど」

「なんだ？」

「・・えーと、今日・・一緒に寝てもいい？」

「別にいいぞ」

「「「「「「！！！！！！！」」」」」」

コンディションレッド発令！　繰り返す　コンディションレッド発令！

「だ、だめぇーーーーー！」

叫んだのはなのはだった。

「なんで、駄目なの、ママ？」

「駄目ったら駄目！ママは許しません！」

皆さんはおわかりだろう。今のなのはは正しい。そう正しいのだ。

ヴィヴィオはパパと呼んでいるが流石に駄目だ！

神が許しても世間が許さない。いや、彼女たちが許さない。

「なんで？」

レイが聞いた

「教育上よくありません！」

「教育って、まだ5歳だろ？一緒に寝るぐらい普通だろう。な、ヴィヴィオ？」

「うん。ヴィヴィオもそう思う」

「ちょっと、ヴィヴィオ！？」

「ヴィヴィオ子供だから細かいことわかんなーい」

「それに、お前だって俺と一緒に寝たことだってあるだろう？」

ピキ！

何かに亀裂が入ったような音がしたのは気のせいだろう

「そ、それは私がまだレイくんのこと・・知らなかったからで・・・・」

「風呂だって入っただろう？」

バリバリ！

「なのは“一等空尉”」

となのはの後ろに立っているのはシグナムだった。笑っている。笑っているのだが怒ってる。

「し、シグナムさん？」

「ちょっと話があるんだ。なに、時間はとらせん」

「あ、なのは“隊長”。ちょっと渡す書類があるからちょっとええか？」

「はやてちゃん！？」

「ねぇ、なのは。私もちょっと話があるんだ」

「ふぇ、フェイトちゃん～」

「さ、いきましょう。“皆”待ってますよ」

「み、皆って誰～！？」

と連行されたなのはでありました。

「ママどうしたのかな？」

「仲がいいだけさ。さ、部屋にいこうか」

「は～い」

最初の時と違いレイの部屋には他に3人もいる。広さはなのはたちと同じぐらいの部屋なのだがどうやったのか。レイは部屋を改装し4人でも寝れる部屋にしてしまったのだ。

そのためかレイはヴィヴィオを銀たちに任せるつもりだった。
特にアリシアはヴィヴィオを可愛がっており
『おもちかえりぃ～』
などと言っているぐらいだ。

案の定、ヴィヴィオを部屋に連れていくとアリシアに盗られた
「ヴィヴィオは髪が綺麗ね」
「そう？」
「うん。綺麗」

先ほど風呂から戻ってきたのでアリシアはヴィヴィオの髪を乾かし手入れをしていた。
「髪は女の子にとって命より大事だから」
「そうなの？」
「ええ」
「じゃあ、今度は私がアリシアお姉ちゃんの髪やってあげる」
「そう？ありがとう」

子供の時からそうだったがアリシアとフェイトは似ている。初めて見た人には区別がつかないぐらい。しかし、ヴィヴィオは一回教えただけで区別がわかるそうだ。
髪型が違うと言うのもある。試しに同じ髪型にしてやってみたら見事当てた。
理由は本人もわからないらしい。

ただ――

「フェイトママはフェイトママだし、アリシアママはアリシアママだから」

なんとも言えない

それとヴィヴィオがアリシアをママと呼ぶのはアリシアがそう呼んでと言ったらしい。
アリシアはヴィヴィオが可愛くて可愛くて仕方がないのだろう。

それから消灯時間を過ぎレイたちも眠りにつく
ダブルベッドで上が銀たち。下にレイ。
ヴィヴィオは銀とアリシアに抱かれて寝ている。リニスは猫状態でヴィヴィオに抱かれている。

しかし、こういうのはお約束が許さない。

「ん・・・トイレ・・・」

ハシゴを降りてトイレにいくヴィヴィオ。
トイレから出るとヴィヴィオはレイのベッドに入り込む

「・・・・」

「すー・・・むにゃむにゃ・・・」

人の気配に敏感なレイはヴィヴィオが潜り込んだことに気付いた。
彼は起き上がり風を引かないよう上からかけてあげた。
そのあとレイも静かに眠りについた
その姿は父と子のようだった

「すー・・パパぁ・・・だいすきぃ・・・」

ＥＮＤ

おまけ

時間は少し戻り

「違うのぉ・・・あの時はレイくんフェレットだったんだよ～」

「嘘をつくな！証拠は上がってるんだ！」

「フェイトちゃんは知ってるんよね！？」

「―知らない」

「小さいから許されると思ってるんかいな？」

「それはいけないですよね。はやてちゃん」

「なのはちゃんずるいなぁ。私だってレイとあんなことやこんなことしたいんだよ？」

「私が言うのもなんだけどちょっとお仕置きかしら」

「って、クイーン！？」

（誰？）

「どうやって！？」

「ちょっと実体化しただけよ。モノや人には触れないけど魔法は使えるから」

「私を裏切るの！？」

「違うわ。これはお・仕・置・き♪」

「・・・・・」

「あー、それとなのは隊長。この間の扉の件やけど・・報告書と請求書、さらに反省文をかいてもらうから」

「うわ～ん～だからフェレットだったんだって～！」

おわり

第９０話　総帥と聖王？の関係？（後書き）

フィ「最後危ない発言したわよ！？」

仁「・・・大丈夫じゃね？」

フィ「結局パパと呼ぶ理由は曖昧ね」

仁「途中の回想はオリヴィエとレイの会話です。
なんで知り合い？って思った方。レイは不老不死だから平気なんだ・・・」

フィ「作者は外伝と称してオリヴィエとレイの関係を書きたいといつか思っています」

仁「さて、これからのことについてご報告させていただきます。
これからは人気投票にも影響してそのキャラの話をかくつもりですと前に報告したと思います。
まず、最初はというか多分ノ―カンだと思うんですけどなのはの話になります。
内容はクイーンの存在をレイは知らないからそれを認識させておかないといけないということなんです」

フィ「そういばそうね」

仁「それから順番は実際に違いますが」

なのは　フェイト　はやて　シグナム　ヴィータ・シャマル（予定）

ギンガ　スバル（未定）　ティアナ　マテリアルズ　ナンバーズ

仁「を、予定しています。とくにナンバーズは大事なのでちゃんとやります」

フィ「長いわね～」

仁「それと番外編の件なのですがもちろんやります。時間かかりますが。ヒロインは色々と言われてるんですが肝心の舞台（内容）が決まっていないのでこれも時間がかかると思われます」

「しかし！とあるネタを思いついたので予告編と称して近々投稿するつもりです。
我ながらよくひらめいたと思いました」

フィ「それでは次回をお楽しみに～」

番外編　予告（嘘？）（前書き）

思いついたのでかいてみました

別に本編が進んでないからって出したんじゃないんだからね！

ま、遊びでかき、また設定もウル覚えだったので間違いが多くあるかもしれません

番外編　予告（嘘？）

番外編　アフター　予告編！

新暦００７５
１５年前に起こった大災害・セカンドインパクトで総人口の搬送近くを失った人類は使徒と呼ばれる新たな脅威にさらされていた

「やっぱり、繋がらないや・・・」

かけても出ない電話。

ＤＯＮＮＮＮ！

山の向こうで起きる爆発
飛び交う戦闘ヘリ

「お待たせ！待った？」

今日逢うべき人と出会った

変な場所へ連れて行かれそして案内された場所は特務機関ＮＥＲＶと呼ばれる国連直属の非公開組織

「お母さんは嫌い？」

「はい」

「そ、私と同じね」

暗い場所へ連れていかれいきなり光がともされる。

「・・ロボット？」

「これは汎用人型決戦兵器エヴァンゲリオン！」

そして、そのロボットの頭の上に立ち私を見下ろしているのは――

母だった

「ママ・・・」

「久しぶりね。ヴィヴィオ」

「どうして、私を呼んだの？」

「必要だから」

「ママは私がいらないんじゃなかったの！？」

ＤＯＮＮＮＮ

「チッ。とうとうここを嗅ぎつけたみたいね。乗るのなら早くしなさい。乗らないなら・・・帰れ！」

一体なんなの
分けがわからない

すると担架で運ばれてきた男の子。爆発で倒れてしまい私は彼を助ける。身体中が包帯で巻かれている。

逃げちゃダメ　逃げちゃダメ　逃げちゃダメ

「乗ります。私が―乗ります！」

「僕の名前は綾波――綾波レイ」

「レイ？」

パパと同じ名前だった

「君は死なないよ」

「どうして？」

「俺が守るから」

「あなたは馬鹿ですか？」

「え？」

私と同じオッドアイの少女

そして、セカンドチルドレンとの出会い

使徒に侵食されたエヴァ参号機

「あれに乗ってるのってリオ？」

友達が乗っているため戦えないヴィヴィオ

「なぜ、戦わない」

「だって、友達が―リオが乗ってるんだよ!?」

そして、ダミープラグラムにより操縦を奪われる

「ママ、一体なにをしたの?ねぇ、何をしたの!?」

そして、初号機の口が参号機のエントリープラグをかみ砕いた

「止めてぇえええええええ!」

「もう、私はエヴァに乗りません」

エヴァに乗らないことを決意したヴィヴィオ

しかし―使徒が襲来

アインハルト・弐号機がゼルエルと交戦―敗北

「ダミーを拒絶！」

「もう一度やり直して。・・どうして私を拒むの？レイくん」

そして、再び戦うことを決意するヴィヴィオ

「乗らせてください！私は、私はエヴァンゲリオン初号機パロット・神乃ヴィヴィオです！」

ゼルエルと交戦

しかし、エネルギーが切れる。だが、初号機は暴走

そしてパイロットは取り込まれる

「パパの・・・臭いがする・・・」

そして、最後の使者を倒し人類補完計画が始動する・・・

「全部で１２機・・・一機２０秒しか時間がありませんね・・・」

「エヴァシリーズ再起動！？」

「まさか、ここで起こすの？サードインパクト？」

「さぁ、いこう。レイ」

「駄目」

「え？」

「ヴィヴィオが待ってる」

「私を・・・拒絶するの？」

「パパ・・そこにいたんだね・・・」

世界は神乃ヴィヴィオをどうするのか？
そして、この世界はどうなるのか？

番外編　アフター

新世紀エヴァンゲリオンｖｉｖｉｄ（仮）

乞うご期待！

嘘かもだけどね

番外編　予告（嘘？）（後書き）

エヴァでいうと男から女にかわっただけです。ちなみにちゃんと設定していなので誰が誰とかは想像にお任せします

さて、本編かくか・・・

第９１話　総帥と女王と（前書き）

どうも、お久しぶりです。最近はクラスの皆が就活で忙しいです。
今日面接のやつもいました

いやーたいへんだね、この時期

と思う今日この頃

それとタイトル簡単ですみません

では、どうぞ

第９１話　総帥と女王と

新暦００７５

１１月某日　　レイもとい神乃家の部屋

カーテンの隙間から朝日が差し込むレイたちの部屋。この時間帯であればそろそろＦＷ陣は起き訓練へ向かうことだろう。

レイはベッドではなくソファーで寝ている。テーブルを見る限りパソコンやら資料やらがたくさんある。徹夜でベッドにいくのが面倒だったのだ。

彼は仰向けになって寝ている。普段と変わらない朝になるはずだったのが

しかし――事件は起きた

「ふふ」

それは第三者の声。

レイを含め銀たちも眠っている。

なら、誰か？

「本当、可愛い寝顔」

レイの頬に優しく触れる手

「これぐらいのことはさせて貰わないとね。ね、“私”」

しかし、返答はない

「あ、まだ眠ってるんだった」

もうお気づきであろう。
彼女は――――クイーンである。
ちなみに今の体勢はレイの上に跨っている状態である。いわゆる騎〇〇である。

なぜ、彼女はレイの上に乗っているのか。それは昨夜まで遡る

昨夜　１１時頃

「・・・・・」

一向に減ることがないこの請求書と反省文。はやてちゃんから渡された請求書は、この間扉にアロンαXをつけたのが原因で、結局扉を破壊する羽目になりその請求書が私にまわされた

「私じゃなくてクイーンなのに・・・」

自分がやったわけではないがそんなの周りが受け入れてくれるわけがない
なぜなら、皆はクイーンの存在を知っているようで知らないからだ。

「・・あーもうだめだぁ。もう、ここで寝ちゃえ・・・・・」

だが、結局睡魔には勝てなかった。

しかし――――

『ここからは私のターンね』

どこかのナイトみたいな台詞である
それから身体をクイーンに支配されて部屋に戻り、着がえ、何故か厳重にロックされている彼の部屋のセキュリティを一回で外し中に入った

ちなみに扉のセキュリティ。難易度はウィザード級でなければ簡単には開かないようになっておりました。

そして現在

なぜだ？

俺、レイル・アンヴァルト・Y神乃は今ほど自分が愚かだと思ったことはない

この俺が人の気配に気づかなかった

自慢ではないが長年生きてきたので戦場で気配を消すことはもちろん気配を悟ることも身に付けた。

それは長い時間をかけて俺は誰よりも身に付けたと思っている。

だが、それはたったいま打ち壊された

気づけば俺の上に“彼女”が乗っている。

“彼女”とは高町なのはのことである。しかし、長年（空白の時間の方が長いが）付き合っている仲である。彼女がこんなことをする人間ではないとわかっている。

ただ、それを絶対に確定させる材料がない。

今の彼女は髪をほどきパジャマは乱れ下着が見えている。
ただ、唯一わかることは彼女の眼が赤いことである

だからなのだろうか。
つい言ってしまった

「お前は誰だ？」

『あら、よくわかったわね』

どうやら合っていたようだ
そして、レイは面倒事になると予測し一旦部屋から出た。
二人が向かった場所は医務室である。

「で、お前は誰だ？」

『私は、クイーン』

「クイーン（女王）？」

『ま、名前は区別するためだけだけど』

しかし、一体どうなっているんだ？
さっきから色々考えてはいるがこれはいわゆる『二重人格』では？

『私のことを考えてるんでしょうけど原因はあなたよ？』

「は？」

クイーンは簡単に説明した。
簡易版ですが

レイ（カオス）が魔王システムを機動させた＝システムの影響により己の欲が現れた＝

＝本来はそれで終わるはずだったが何故かもうひとつの人格が形成されてしまった＝

＝もう一人のなのは誕生

「つまり、お前はなのはの“欲”または“闇”でいいのか？」

『ま、そういうことになるからしらね』

「・・・・・」

『なによ？』

「いや」

あいつの欲がこれだと思ってしまうとなんとも言えない。現にさっきの行動がそうだとすればあいつの欲はそういうことになる

（ま、原因はお前だけどね）↑天の声

「で、なんで俺の上に乗ってかっていた？」

『あなたの寝顔をみるため』

「真面目に応えろ」

『真剣とかいてマジよ。私、あなたのこと“好き”だから』

スーートライクッ！

どうやらレイはまさか直球で言ってくるとは思わなかったようだ

『ちなみに、私、あなたがカオスだって初めから知ってたから』

「は？なんで？」

ていうか今それ関係ないだろう?

『愛の力よ』

「・・・」

それが言いたかっただけか

「一つだけ言っておくがその・・気持ちはなのはのであってお前では『違うわ』」

『違うわよ。これは私の思い。あの子が元になったかもしれない。けど、今あなたをみて、触れて、この胸の高鳴り。身体はあの子のものかもしれないけど、でも、この思いは私のモノ。だから、違わないわ』

「・・・はぁ。もう、何も言わん」

『そ、だったら続きしましょ!』

バッ!

椅子に座る彼の上に再び乗るクイーン

ま、第三者がみたらとても大きな誤解をするのは間違いないだろう

「なにをする気だ?」

『そうね。キスぐらいいいでしょ？』

「いいでしょって。お前な」

『あら、それぐらいの償いはした方がいいんじゃない？』

「ッ」

償いとはレイが行方を暗ました期間とか彼女を傷つけたということ

『だから、これぐらいのこと・・・目を瞑りなさい』

「―ぅ・・・」

クイーンは彼の唇を奪った。レイは抵抗をしようとは思わなかった・

『ん・・・ぁ・あ・・』

ただ、キスならすぐ終わると思っていた。何故か調子に乗って舌まで入れようとする。さすがのレイもそれは許さず

「調子に乗るな！」

バシッ！

『いたぁ！』

頭に彼の手刀を喰らった

「調子に乗りすぎだ」

『・・・いいじゃない。別に。どうせ、あなたは――――“鈍感”なフリをするくせに』

「！」

思いもよらない言葉が返ってきた。
すると彼女は腕を彼の首に周り抱きついた

―わかってるのよ

―・・・

彼女は念話で話しかけてきた

―あなた、そうやって鈍感なフリをしてるの

―どうしてそう言いきれる

―だって、あなた、私、ううん。私たちのこと見てないでしょ？

―今だってみてるじゃないか

ポコッ

「いて」

―そういうことじゃないわよ、馬鹿

―・・・

―私が言いたいのはね？あなたは、私たちのこと見てるかもしれない。けど、あなたはどこか目を逸らしている。真っすぐみてない

―・・・

―私は、あの子がみているものや、皆がみているものとは別のモノが見えてくるの。だから、あなたのそういうところに気付いた

クイーンはレイから降り髪を撫でた

「で、お前はそれを俺に言ってなにを」

『勘違いしないで。私は、それが本当か確かめたかっただけ』

「・・・で、確かめてどうするんだ？」

彼女はニヤリと笑った

『あなたをあの手この手使って私のモノにするのよ！』

なのは・・・じゃなかった

こんなヤツ長年生きてた中じゃ始めたかもしれない。俺のことに気づく奴はいた。現にリンディだって気づいた。

けど、こいつは知っていて尚俺を振り向かせるとか言いやがる。

面白いと言えば面白い。しかし、興味はない

だから

「ま、頑張るんだな」

『ふふ、そうするわね。それじゃ、あとよろしく』

「よろしくって、おま―！」

すると彼女は意識を失ったのかいきなり倒れた。しかし、すぐに反応したレイが受け止めた

「たく、なんなんだよ」

そう言いながらも彼は彼女をおぶって医務室を出た。
すると白衣を着たシャマルに丁度出くわした

「あれ、レイさん。・・・！？なんでなのはちゃんが・・・」

「あ、ちょっと医務室借りてたから」

「ち、ちなみになんで？」

「いや、ちょっとその・・・」

「まさか、言えないことを！？こんな朝から！？」

「う、ま、そうなる」

「！！！―で、なんでなのはちゃんは寝てるんですか？」

「なんか、（話の）途中で意識を失って」

「途中！？」

だんだんパニック状態になっているシャマル。それをみてレイも流石に話が食い違い始めていることに気づく。

「そ、それじゃあ、俺なのはを部屋に送っていくから」

レイは「逃げる」を選択した

そして、一人残されたシャマルは・・・

「は、ははは、はやてちゃん～！！！！」

と主に今のを報告しに彼女の元へと向かった。

そして、これがすぐに広まり

『総帥が高町隊長を奪った』

『〇ったとか』

色々と噂が流れたがなのは本人はなんのことかさっぱりで。

レイはレイで色々と誤魔化した

ただ、やったといえばキスぐらい

しかし、それはなのはではなくクイーンなのでなのはは少し残念なことになったのだ。

『ふふ、“私”のファーストキス。あげちゃった？』

とクイーンは喜んでいたが

「別に俺、キス初めてじゃないしな」

だそうで。

ま、そのことを知るのはクイーンはおろか誰一人知らないのであった

第９１話　総帥と女王と（後書き）

仁「えーと、キスしちゃったね」

レイ「別にキス初めてじゃないし」

仁「ええ、そうなんだよね。プレシアともしたし」

レイ「昔、から数えればキスだけは回数が多いな」

仁「この糞野郎が！」

レイ「なぜ、怒る？」

仁「ま、こんなやつ放っておいて。次回はシグナムあたりの話にするかな。あ、でもフェイトが先か。それではまた次回で」

第９２話　夢オチと騎士と侍？（前書き）

まず、タイトルは決まらずちょっと投げやりになってしまいました

ネタはあるんだけどかけないのはつらいですねー・・・・

第９２話　夢オチと騎士と侍？

？？？？？

「――――ト」

なんだろう、誰かの声がする

「――――――――――――ェイト」

もうぉ、誰？

「フェイトッ！」

「ひゃい！」

「フェイト、お前って奴は・・・」

いきなり怒鳴られて目を開くと映ったのは大好きな兄さんだった。

「に、兄さん!?」

「・・・・」

「え!!!???」

いきなり彼は彼女を髪の毛に触れた。左手で優しく撫でながら彼女の頬にそっと触れる。

「に、にににににに兄さん／／／／／／!?」

「フェイト・・・可愛いな、フェイト」

「え、え、え、え、え」

「もう、お前しか見れない」

そして、彼はフェイトを抱きしめた。
さらに、フェイトは赤面し混乱している

「だ、駄目だよ!」

「なにが駄目、なんだ?」

「だって、兄さんは私の兄さんだし。それに――」

「それに？」

「・・だって、兄さんにはなのはが・・・」

そう。兄さんにはなのはがいる。私は、なのはの気持ちを知っている。

親友だから。だから――

「なのはは関係ないだろ・・。俺はお前がいいんだ」

「―兄さん！」

私も、腕を伸ばし彼に抱きついた

「本当に、私でいいの？」

「ああ」

「兄さん・・・」

「フェイト・・・」

目を瞑り私は彼からのキスを求めた

けど、そうはならなかった

目を開けると彼は私を突き放した

「ど、どうして!?」

「・・・お前は俺のこと。言葉だけなんだな」

「え?」

私は気づいた。身体が震えていたことに。

心どこかで恐れたのだ。友達を、親友を裏切ってしまうことが。

「・・・やっぱり、お前じゃ駄目だ」

「え!?」

その時ガラスが割れたかのような効果音が響いた

「レイ~!」

すると後ろから声が聞えた。直後彼の腕に抱きついたのは姉であるアリシアだった

「どうして・・」

「やっぱり、お前じゃなきゃ駄目だ。アリシア」

「だから、言ったでしょ。フェイトじゃ、駄目だって」

「―！」

「ああ。お前の言う通りだよ」

「でしょ？じゃ、もう行こうよ」

「そうだな。プレシアの約束通りお前を幸せにしてみせるよ」

「レイ・・・・」

「やめてぇーーーーーーーッ！」

ガバッ

「はぁはぁ・・・。はー。ゆ、夢・・・・」

フェイトは寝台から飛び起きた

途中まではよかったのにぃ・・・

原因は・・・これ・・？

目をそれに向ける。それは恐らく自分の上に乗っかっていたヴィヴィオが原因であると思われた。

「あーせっかく・・兄さんとキスまで迫れたのに・・」

『ふ～ん。そこのところ詳しく教えて貰いましょうか？』

「！」

ブンブン

謎の声に反応に顔を横に振るが誰もいないし二人は起きていない。

しかし、何故か背筋が寒気が・・・

そして、今日一日、何故かなのはの傍にいる時だけ生きた心地がしなかったフェイトでした

（夢オチでごめんね！）

さて、ここからが本編です

１１月　下旬

機動六課

今日も機動六課は平和です。
そんな平和の中でも訓練は怠らず行われています。
そんな中、ちょっとした場所で二人の侍と騎士が対峙していました。

「ハッ！」

「―」

ぶつかり合う剣と刀。
剣―愛剣レヴァンティンを振るうのはライトニング２シグナム。
対して刀―神乃家家宝を振るうレイル・アンヴァルト・Ｙ・神乃。

「・・・・・」

「―チッ・・・ハァーーーッ！」

先ほどから余裕の表情で攻撃を受け流す彼に対してシグナムは少し焦ってしまった。

「焦りを見せればそれだけ隙も出る！」

彼女の剣先を軽々とかわし刀を彼女ののど元ギリギリにつきつけた。

「参りました」

互いに得物を納め一礼する

「しかし、成長したな。シグナム」

「ありがとうございます」

「ま、アレだな。成長なんてお前たちにあんまり似合わない言葉だな」

「ふふ。そうかもしれません」

今まで何回も繰り返した彼女に成長とはあまり合わない言葉だとレイは思ったのだ。

「そういえば、最初のあの言葉どう意味なのですか？」

「最初？ああ。こいつがどうみえるか。か？」

レイが持つ刀。過去にこれをみせた者に聞く

「お前にはこれが何にみえる？」

答えは２つ

１つはボロボロの刀

２つ目は普通の刀

「こいつは特殊でな？持ち主を選ぶんだよ」

「持ち主を選ぶ。ですか？」

「そう。ま、見える奴はそれなりの実力を持つが見えないものは実力がない奴ってことになる」

「そうなのですか」

「ま、みえてもこいつは抜けないがな」

「え？」

すると彼はシグナムに刀を渡し、抜いてみろという

しかし、抜けない

「こいつは俺以外の主を認めていないのさ。だから、俺以外には抜けない」

「不思議な刀ですね」

「俺もそう思うよ」

「あ、刀と言えば・・・」

シグナムは話した。

修行を終え貰った刀を壊してしまったことを。

それが彼の打った刀だと知った時はとても痛い気持ちになった。

だが、彼は怒るどころか別に大したものじゃないと言った。

「刀が欲しいなら打つが？」

「・・・考えておきます」

「そうか。無理に扱うものではないしな。お前は根っからの騎士だからな」

「そうですね」

「――――ご先祖様」

すると茂みの向こうから声がした。

ま、ご先祖様と言うのは麻衣以外にはいないのだが

「麻衣、どうした?」

「実はご先祖様にお願いがありまして・・」

「なんだ?」

「その・・・本家に来てほしいのです」

(本家?)

シグナムは一人話がついていけなかった

「理由を聞こうか」

「はい。もう、神野家としてではなく神乃家として戻るべきだと私は思ったからです。

よくよく考えれば私たちがしたことは逆恨みみたいなものです。ですから――」

「和解のために来てほしい。か」

「はい」

「・・いいだろう。俺も親父のしたことを償えるのは俺だけだからな」

（しかし、大本の原因は親父なんだよな・・・）

「ありがとうございます！」

「それじゃ、いくか」

「はい！」

（私、おいてけぼりか・・）

「シグナムも来るか？」

「―！いいのですか？私は部外者ですよ」

「う～ん。暇だしいいだろう。それに本家ならそれなりに腕の立つ奴ぐらいいるから鍛錬にもってこいだろう？」

と麻衣に振るレイ

「・・そうですね。ま、シグナムの相手が務まるかはわかりませんが」

（今気付いたが麻衣の口調が普通になっている！）

シグナムは何故か別のことに気づいて驚いていた。

「じゃあ、行きましょう。シグナム」

「あ、ああ」

何故かいつもの“のほほん”としているというか天然というかそんな感じの麻衣がちゃんとした人にしかみえなくてどうしたらいいか混乱している

「ゲート解放」

すると光の扉が現れる

「でもなぁ、俺がいくと結構混乱すると思うんだけど」

「大丈夫です。私がなんとかします」

「そうか」

「・・・・やっぱり私は・・」

「さ、いくぞ。シグナム」

「いきますよ。シグナム」

「・・・はい」

ぶっちゃけいうと二人はシグナムをからかっていたのだ！

しかし、シグナムはこの後麻衣のとある一面をみてさらに驚くことになり、さらに二人のことを少しなろうとはこの時思ってもみなかった

第９２話　夢オチと騎士と侍？（後書き）

フェイトの話はある意味おまけ
あまり本編には影響はありません。

次回はあまり語れなかった神乃家の事情みたいな話をしようと思います
たぶんレイの父がちょっとでるかもです。あ、予定ですけど。

父の設定はなんていうかパワフル？チート？みたいな人物像を浮かべながら考えております

では、次回でまた

第９３話　帰省（前書き）

お久しぶりです・・・

こんなに間をあけたの久しぶりだ・・・

今後もそうなのですがとりあえず今願書を出すため忙しく執筆が進まない状況なのですがそれが一段落したらたぶん今までどおりに戻るかもしれません

では、どうぞ

第９３話　帰省

並列世界　地球
西暦２０ＸＸ年

日本　京都

京都。数々の世界遺産に登録されている建築物が数多くあり、また、昔ながらのモノをたくさん残しているところでもある。
京都にはいまだにかつて将軍と呼ばれてた者たちが少なからず存在する。しかし、それは何世紀も前のことだ。その地位が代々に渡り今も残っているということになる。
そこには神野家も存在していた。現代風に例えるならどこかの組のようなものになるのだろう。
神野家の役目は将軍、今で言うのならば総理大臣や皇帝陛下を守ることである。それは過去から今まで変わらない宿命みたいなものである。

そんな神野家のとある一室。
レイル・アンヴァルト・Ｙ・神乃は眠りについていた。

『いたッ！おい、レイ。なんで息子であるお前が父に勝つんだ！』

『うるせぇよ。親父が弱いだけだろう？』

『なんだと！？これでも日本一の大剣豪―剣帝と呼ばれたこの父を弱いと言うか！』

『だって、本当のことじゃん』

この時レイは生まれて5，6年。既に剣を握り父と稽古をしていたのである。

『でもさぁ、どうやったら刀から魔法弾みたいな光線がでるんだよ？』

『まぁ、あの人も少なからず魔力を持ってるからかしらね』

『あ、母上』

『なんで、お前は俺を父上と呼ばない？』

『尊敬してないから』

『ムキー！おっし。もう一回だ！今度はとっておきをみせてやる！』

『餓鬼かあんた・・・』

・・・・・・

「・・・・・夢、か」

懐かしい夢をみたと思う。いつぶりだろうと思う。
ここ、数百年。家族の夢をみたことがない。原因はやはり・・・・
帰ってきたからか？

言い方を変えればここは俺の第二の帰るべき場所でもあるからだ。
彼は起き上がり廊下に出た。
そこは見事な庭園だった。ま、簡単に言えば池があり鯉が泳いでいる。

「レイ殿」

「――シグナム。似合ってるじゃないか。着物も」

「そ、そうですか／／／？」

今のシグナムの姿はいつもの六課の制服ではなく一般的な着物を着ている。しかも、髪はおろしている。これで、髪の色が黒だったら大和撫子と言えるかもしれない。

「しかし、昨日は大変でした」

「まぁな」

二人は昨日のことを思い出した

昨日

ゲートをくぐるとそこはとある場所に出た

「ここは・・・？」

「ここは地球の日本、京都だ」

「地球！？ということは」

「残念だけどシグナムの言う地球とは少し違います」

相変わらず変な喋り方の麻衣が言った。（ま、これが普通なのだが）

「お前の、なのはたちの地球とは異なる世界。俗に言う並列世界の地球」

「並列世界・・ですか？」

「そ。ただ、同じような世界のようで違う世界。それが並列世界。あ、ちなみに俺の故郷ここだから」

「！」

あまりに突然に言うから驚いた。しかも、彼の故郷がこの世界の地球？

「だってそうだろ？俺の子孫もとい麻衣の家がここにあるんだから」

「確かにそうですか・・・」

「さて、この話はひとまず置いておいて。で、『当主殿』？どうする？」

「止めてください。ご先祖様が存在している限り当主はご先祖様です」

「だが、それはお前が神野家を納得させてからになる」

「―はい！」

麻衣の目は真剣。やり遂げる、成し遂げようとする目だった。

そして、三人は門の前まで向かった。

そこで問題が一つ。

どう入るかだ。

やっぱりアレか？

『開門』

とかいうのだろうか

「開門！」

「・・・・」

そのままだった。

彼女の言葉に反応し門が開く。開くとそこには一人の老人がお辞儀をしながら立っていた

「お帰りなさいませ。麻衣様」

「九条、ご苦労様です」

『お帰りなさいませ。麻衣様』

「「・・・」」

なんというかドラマのままとしか言えない。

老人の後ろにはおそらく玄関まで続いているであろう場所まで、両サイドにずらり並んでいる。神野家に使える分家から弟子などであ

ろう。

「ところで麻衣様。後ろのお二人は？」

「一人は私の友人です」

「・・・友人ですか」

九条と呼ばれた老人は少し涙ぐんでいた。レイとシグナムは麻衣のことを知っているからシグナムが友人と聞いて嬉しいのだろう。麻衣には友人がいなかったのだから。

「で、そちらの男性は？」

「・・・えーと・・・（汗（ー＿ー；））」

（お前、自信満々に言っておいて結局それか！？）

「麻衣様？」

「えーと（ー＿ー；）・・・えーと（ー＿ー；）」

「はー。“神乃”レイだ。いいか？お前たちが復讐したがっている“神乃”だぞ～」

レイは神野家の宿願ともいえる自らの名を言った。しかも、挑発するように
そして、その言葉にすぐ様反応したのが九条だった。

「皆の者！刀を持てぇい！」

するとどこから出したのか腰に備えていないのに刀を取り出し構える。

「麻衣様！それとご友人の方。こちらへ！」

麻衣とシグナムを守りながら俺から距離をとり包囲する彼ら

「なに、そこまで嫌われてたの？」

「麻衣様、本当なのですか？」

「え、あ、はい」

「麻衣～少しはフォローを『黙れ！麻衣様の名前を軽々口にするな！』・・・」

「いいのです。皆、刀を下げなさい」

「しかし・・！」

「これは命令です！」

「わかり、ました。皆の者。刀を納めよ」

当主の命に逆らえない彼ら。
その後、三人は最初の時のように並んでいた彼の道を歩き、本家へと足を運んだ。
ただ、レイだけはもの凄い視線が浴びせられていたのは言うまでも無い

本家　応接間

とりあえず三人は応接間に案内された。やはり、和風なだけあって畳に障子などがある。テーブルの上にはお茶とお茶菓子も置いてあった。
ただ、レイは縁側に座り外を見ながら茶を飲んでいた。ただ、不思議とどこからと現れた猫で遊んでいた

「お待たせいたしました」

襖があくとそこにはおそらく４０代のおば（ｒｙ・・・なのだがどうみても２０代にしかみえない女性がいた。

「お母様！」

「え！？」

驚いていたのはシグナムだけでレイはそんなに驚いていなかった。

（だって、リンディだってピ～～だぞ）

おや、モザイクがかかったようです

「あなたが、“神乃”レイさんですね？」

「ま、正しくはレイル・アンヴァルト・Y・神乃。レイで構わない」

「そうですか。私の名前は神野静香（じんのしずか）と申します」

「で、麻衣の母親であるあなたが何故？」

「皆を代表してお話を」

「ふ～ん。いくら、当主である麻衣の命令でも納得いくわけないよな。
まあいい。本題移ろうか」

それから麻衣とシグナムをのけ者に話は進められた。

まず、神野家が俺、もとい、親父を憎んでいるのは当主である職務を放棄したこと。
これは現代でもわかるように、高い位にいるものが勝手にその職務放棄をしたらそれなりの罰を罰せられる。それと似たような物で親父、神乃家は将軍に（当時もっとも偉い人）絶大な信頼を得たいたためそれを裏切ったことになるため将軍の逆鱗に触れた。

そして、もうひとつが当時神乃家の家宝であった書物と刀を盗んだこと。
これは代々当主にのみ与えられるものだが当主である親父が持っていてもおかしくはないのだが何故かそこのところを勘違いしているらしい。

「で、その書物は返してもらいましたが・・・刀の方は？」

「駄目」

「どうしてもですか？」

「あんな糞親父でも俺の親父なんでな。親父の唯一の“形見”なんでな」

形見と聞いて静香も刀の件は保留にした。ただ、あとで刀は彼にしか使えないと聞いて結局諦めた。

「さて、本題は、神野家を神乃家に戻すことらしい。ま、俺にとっては字が違うだけなんだけど」

「そんなこと言わないでください～よ～ご先祖様」

「クスクス」

「母上も笑わないでくださいよ＝」

普段みない娘の姿に思わず笑いをこぼしてしまった

「しかし、神乃家に戻ってしまったら、レイさんが当主になるのでは？一応かの、神乃家三代目当主神乃天山の子孫なのですから」

「？いや、子孫じゃなくて息子だが？」

「へ？」

「さっき言ったろ？親父の形見だって」

「・・・・麻衣」

「母上？」

「私・・・耳が遠くなったのかしら？」

「いえ、ご先祖様は確かに息子ですよ」

「アハハハハ」

「母上!?」

（・・・意外と非常識なことは認めないのか）

その後静香が暴走して話どころではなくなった。
麻衣の話では一応静香は分家の人間らしく、それなりに武術を学んでいた。

ただ・・・いきなり薙刀を持ちだしてビームが雲を切り裂いた

「・・・まさか、親父と同じことができる人間がいるとは!」

ま、今の俺でもできるけどさ、原理がわかんないんだよな

それはさておき、結局会談はこれで終わり与えられた部屋で一晩過ごした

・・・・・・・

「にしても、私もできるようになりたいものです」

「何を?」

「剣からビームを」

ガシッ！

レイはシグナムの方に手を置きそれももう真剣な顔で

「頼むから止めてくれ」

「え、いや、でも」

「お前はおっぱい魔人という称号を持っていながら今度は変態騎士という称号が欲しいのか！？」

「へ、、変態・・って！？」

ジャキ

ズバ

バサリ

ぎゃあああああ！

「レイ殿。今度言ったら斬ります」

「も、もう斬ってるじゃねえか・・・ガクシ」

（まったく、誰がお、おおおっぱい魔人だ！好きで大きくなったわけじゃない！）

朝から死体が一人できあがりました

その後麻衣と合流し朝食をとっている中。麻衣と静香から神野から神乃へと名を変えることを皆に話したそうだ。
最初は戸惑う彼らだったらしいが麻衣の必死の説得によりすべてではないが彼らは納得したようだ。

「そうか。良かったな。麻衣」

「はい！」

「それじゃ、俺ちょっといくところあるから」

「どちらへ？」

「ん・・・内緒」

彼は立ちあがり外に出るとゲートを開放し「ちょっとしたら戻るから」と言って、どこかへいってしまった。

地球　某所

ここは麻衣の生まれ故郷である地球。神乃家から遠く離れた異国の地。
そこには自然しかない。いや、ここにも家はあった。

そう、あったのだ

しかし、それは跡しか残っておらずそこには草木が生え花が美しく咲いている場所になったしまった。
その村があったような場所を見下ろせる小さな丘があった。そこには大きな石がある。
それはまるで墓石のようだった。
そんな場所に彼は来ていた

花束を持って

「――ただいま。皆」

とても冷たく、切ない目で彼はみていた

「全然帰らないでごめん。今日はたまたま来たから寄ったんだけど」

・・・・・

「親父、あんたの我がままのせいであんたの実家はたいへんなことになったんだ。
ま、麻衣のおかげと俺のおかげで和解したよ。俺に感謝しろよ」

誰がお前なんかに感謝するか！

「・・・。じゃあ、もういく」

彼は墓石に背を向け前を歩きだした。
少し歩いたあと彼は一度振り返りふとつぶやいた

「なあ、ＺＥＲＯ」

『なんですか？』

「他にもいかなきゃいけない場所があるような気がするんだ。お前知ってるか？」

『あなたが知らないのであれば私も知りません』

「そうか。多分気のせいか」

何か、不思議な感じに包まれながら彼はシグナムと麻衣のもとへ戻った。

その後、正式に神乃家となり、麻衣の名は神乃麻衣となったのだ。

そして、三人はこの世界をあとにしなのはたちのいる世界（リリカルなのはの世界）に戻っていった

第９３話　帰省（後書き）

まず、最初にレイと麻衣の出身世界は同じです。違ったらおかしいもんね

それと最後の場面はレイの故郷になります。設定ではヨーロッパ辺りの予定です

それとところどころフラグみたいなのがあったりします。

実はそれが新章で繋がる予定。

では、今回はこの辺で

第９４話　迎えるために（前書き）

書いてたら思ってたのとは別のものに・・・

最近はパソコンすら起動しない日々・・リア充に俺はなりつつあるのか？

第９４話　迎えるために

新暦００７５
１１月中旬

数多の世界へと繋がっている次元の海。そんな海に漂うに建築物、時空管理局本局。
その中にある無限書庫と呼ばれる施設は少し前までは使う者は多くはなかった。
しかし、最近あの総帥の娘である―神乃星音・闇樹・雷華の三人が司書になることで書庫として機能し始めた。また、三提督の協力もあり人材も検索魔法に特化している人間が当てられ書庫の整理は各分野ごとにまとめるのに約2半もかかり整理することができた。
その功績もあり星音が司書長に昇進した。

星音が司書長となってから各支部や局内、提督らからの仕事の依頼も数多く受け持つようにもなりまた、管理外世界へ赴き遺跡調査なども行いその分野では彼女達3人の名はそれなりに知れ渡るようになる。
特に星音は博士号を取得。教授としても活躍している。

そんな彼女達三人は特に有名な理由は神乃の娘であること。
そして・・・局内で次の世代を担うとも言われている高町なのは一等空尉。フェイト・Ｔ・ハラオウン執務官。八神はやて二佐と似ているというか似すぎの問題が一部あったがあまりにも性格が違い過ぎてそれは違うという話に

そんな彼女達は今かつて住んでいた場所へと帰ってきていた。
その家主の彼と一緒に

地球　日本　海鳴市　某マンション　神乃家

「懐かしいな・・・・」

「私たちにとってはもう当たり前の光景ですが」

今、レイと星音はかつて住んでいたマンションへと訪れていた。
レイが居なくなったあと三人は一時リンディに保護されていたのだがなんだがそれが気に食わなかったのか勝手に自分たちで色々やっていたらしい。
いなくなる前から彼女たちは局に入局していたので生活には困らなかった。ただ、一々こちらに戻ってくるのも手間がかかるので局の宿舎で過ごす日々が多くなっていた。
ただ、名残があったのか部屋は解約せずそのまま残したまに掃除にもきていた。

「まぁ、なんだ。もう、こっち（海鳴）にいる必要もないしもういいだろう」

「・・・そうですね。少し寂しい気持ちもありますが」

「すまないな」

「もう慣れっこです。それに、これからは傍にいてくれるのでしょう？」

「そのつもりだ」

「その時は私たちも連れて行ってほしいですね」

「善処するよ」

相変わらずだなと思う。
けど、それが彼らしい。

「早めに向こうでいい土地探さなきゃな」

「そんなに急ぐものですか？」

「ん？ああ。できれば六課が解散する前には完成したいな。それに、新しい“家族”も増えることだし」

「家族ですか」

少し前、いや子供の時だったら私たちはそれに嫉妬したかもしれない。
けど、今は嫉妬よりとても嬉しい。なぜなら家族が増えるのだから。

私たちは彼の“娘”。
けど、女としては彼を好いている。私達はそれで構わない。彼と一緒に居れればそれだけで。
それに、私たちの家族になるということはその子たちはそれなりに訳ありの子たちだろう

「なに、お前たちならすぐ仲良くなれるさ」

「それはいいんですけど」

「？」

「今既に6姉妹がさらに増えるのですよね」

「まぁ、なんていうかどっかの大家族だな」

「一応聞きますが何人家族になるのですか？」

「ん～予定では二人」

「8姉妹ですか。あなた、一体何がしたいんですか？」

彼はそう質問されると少し黙っていた。
自分でもよくわからない。なんで、自分はこうまでするのだろうか。
今の彼女たちは特別だ。個人的なこととしては他の奴らに任してはおけない。
ただ、そうまで俺は家族と言うモノに拘っていた。いや、執着して

いるとも言っても間違いではない。

「―なんていうか家族が・・・いやなんでもない」

ふと私は思った。
最近の彼はどこか変だと。妙にハッキリしないところが特にだ。
彼は一体何をしたいのか。
娘である私にもわからない。

『―ところで』

「「？」」

それは二人の声ではなかった。
声の方に顔を向けると猫で天使の羽が生えている

「スノー。久しぶり」

「あなた、いつ？」

『だって、だって作者が全然出番くれないからなんか出して貰ったのよ！』

（ヒヒヒ、サーセン）

「で、なんか用があったんじゃないのか？」

『そうそう。風のこと。どうするのよ？』

「ああ、風ちゃんですか」

「風？」

そういえば居たな・・・なんか白い馬

「えーと、なんだっけ？遺跡の調査でどっかの世界にいったら砂漠を歩いてたところを保護したんだっけ？」

「雷華が！ですけど」

「あいつも好きだよな」

『しかも、風は雷華にとても懐いてるのよ』

あ、思い出した。あいつの馬なんだよな。

・・・どうせ、あいつの所が嫌で逃げてきたんだろうな。

あいつ、年の割にはこき使うからな・・・

隠居してると思ったらまだ何かやってたのか

あの、おさげ東西南北の東。

「しかし、雷華に懐いてるのか。意外だな」

「そうでもないですよ。彼女、よくそこら辺の動物とよく遊んでいましたから」

『あ、私も一緒に』

もう野生じゃん！

「となると・・小屋も建てるのか・・・・」

「あと、結構な敷地もですよ。多分、あの子の事だから捨て猫とか拾ってきますよ」

「別にそれは構わんさ。あいつだって働いて金持ってるんだから。自分で面倒をみるなら許可するし」

「あ、私たくさん本が置ける部屋が欲しいです」

「書物室を別につくるから大丈夫。予定では和と洋を混ぜた感じを予定してる」

『私もマイホームが欲しい！』

「「・・・ダンボール？」」

『違うわよ！』

「冗談だ。別にお前いらないだろう。猫だし」

「そうですね」

『うぅう・・』

泣き崩れるスノー。猫が泣くのもなんいうか凄いのだがそこはあえてスルー

「じゃあ、帰るか」

「はい」

『・・は～い』

そして彼らは帰るのだが・・・・

「なんていうか締まらない終り方ですね」

『オチがないとも言う』

「・・・・作者に言えよ」

（ｏｒｚ・・・サーセン・・・）

第９４話　迎えるために（後書き）

なんか変な終わりかたしちゃったな

あ、でも次回は本気書きますよ！

大丈夫ですって！少しのやる気と明日の飯さえあれば！

なんてたってナンバーズの話ですからね・・！

やる気がみなぎってきたーーーーー！

第９５話　変わる彼女と変わっていく彼女（前書き）

お久です

とりあえず願書をなんとか提出できました！！

これでなんとか執筆速度が戻ればいいんだが・・・

それと相変わらず自分はタイトルを考えるのが苦手だと思ったこの頃です・・

第９５話　変わる彼女と変わっていく彼女

新暦００７５
１１月下旬

陸上警備隊　陸士１０８部隊　隊舎

「失礼します」

「おう入れ」

「はい。で、お父さん。何の用ですか？」

ＪＳ事件で受けた怪我はすでに完治している我らがギンガたん

たんはやめてください！

（これはサーセン・・）

「まぁ、座れや。実は、お前直々に命令、まぁ、任務だ」

「任務ですか？」

言葉で話すより実際に見た方がいいと思いゲンヤはその命令書をみせる。

・・・・・・・・・

命令書

ギンガ・ナカジマ陸曹。貴官には先の事件で捜査に協力した戦闘機人たちの更生プログラムの教師をやってもらいたい。

貴官が選ばれたのには理由がある。

まず、一つ。貴官もまた戦闘機人であること

二つ、同じ者として現代社会にちゃんと適応できることを収容されている戦闘機人たちに教育することができる者であること。

主に以上の点で貴官が適任であると判断した。

というわけで貴官には頑張って貰いたい。

尚、これを断った場合。先の収録で隠し撮りした写真を局とかマスコミに流すので夜・露・死・苦

時空管理局　総帥　レイル・アンヴァルト・Y・神乃より

・・・・・・・・・

「・・なんか、後半脅迫文になってるんですけど・・・」

「まぁ、そこは気にするな。俺からしてみてもこの任務にはお前は適任だしな。
スバルは六課の方で忙しいし、あいつにはこういうのは向いてないしな」

「まぁ・・そうですけど。で、いつから任務につけばいいんですか？」

「あ、ああ。多分、もうくると『お～いゲンヤ。ギンガを貰いに来たぞ～』」

ノックもせず我らが自由気ままな総帥は部屋に入室してきた。

本当に総帥なのだろうか？

「そ、総帥！？」

「お、ギンガ。じゃあ、ゲンヤ。ギンガ貰っていくから」

さて、ここで大事なことを言おうか・・

普通この場合はお姫様抱っこなのだろう。
ただ、彼にはそんなお約束は通じないのだ。
彼は、ギンガを・・まるで引っ越しの荷物運びのように彼女を片手で持ち上げ肩に置くような感じで抱いている。

「あ、はい」

「お父さん!?」

いくら、父と言えどそんなあさっりと答えるなんて・・・

「その・・なんだ。ギンガ、頑張ってお勤め果たしてこいよ」

白いハンカチを出して我が子を送るゲンヤ

「さぁ、いくぞ!」

「ちょ、ちょっとま、スカートがみえ・・!」

「大丈夫だ。みた奴は消すから（＾－＾）」

「そんな、笑顔で言わないでください～よ（泣）」

頑張って手でスカートを抑えるがそれでもその姿を１０８部隊の皆にみられてしまう。

ただ、さっきのレイの言葉を何人か聞いたらしく

『ま、まさか・・・ギンガ陸曹は・・総帥の嫁!?』『ま、待て・・貫われたのでは?』

『あ、ああ。現にナカジマ三佐が差し出しようにもみえたが?』

『まさか、娘を売ったのか!?』

『いや、もう、総帥にさらわれたってことでＯＫ?』

その後、１０８部隊はその話題で騒いでいたのでした

どこかへ向かう車の中

「もう、いきなり過ぎですよレイさん!」

「ははっは。ごめんごめん」

「本当ならおひめ・・・がよかったです」

「何か言ったか？」

「いいえ！」

儚くも乙女の思いはそいつには届かないのである。

「けど、本当に私でいいんですか？」

「ああ。お前が適任だ」

「はあ」

「それに、お前だってあいつらと面識あるだろ？」

「と言っても私はあまり面識ありませんけど」

実際はそうだった。

ギンガは事件の時は洗脳のフリをしていたので喋ってはいないしあまり面識もない。

「まぁ、大丈夫だ。あいつらは人懐っこいからな」

「そうですか？」

「そうだよ。それとお前にちょっと用もあったしな」

「用？」

彼から渡されたのは一枚の紙。いまどき紙とは・・・

「あのこれ！！」

「・・・・・」

しかし、彼は無言だった。

その紙に書かれていたのは・・・極秘指令だった

内容は簡単に言えば―

ギンガ・ナカジマ陸曹。貴官を総帥直属の特殊部隊への移動を要請する。

尚、入隊後、貴官が例えどんな場合で死亡したとしても事故死として扱われる。

また、我が隊は秘匿性の高い部隊であるため外部への情報漏洩はそれなりの罰が罰せられる。

この指令は強制しない。貴官の意志で判断してもらいたい

「一ついいですか？」

「なんだ？」

「なぜ、私なんですか？」

「俺の部隊はちょっと訳ありの連中ばかりでな。簡単に言えば“普通”じゃない」

その訳ありと普通と聞いてギンガは考えた

「私が戦闘機人、だからですか？」

「それもある。ただ、お前は少し、俺の事情を知っているからな」

「・・・・」

彼の事情。

私はスカリエッティに捕まった時に彼から少し聞かされた。

言うなればもう関係者なのだろう。

「それと―」

するとギンガが持っていた紙に文字が描かれた

―紙でみせたのは盗聴の恐れがあるからだ。紙なら消して証拠も残らない。

「そんなことが？」

―管理局すべてが俺を信頼しているわけじゃない。一部の人間は俺の存在をよく思わない奴だって大勢いる。ま、それに関しては昔からよくあることだからあまり気にはかけていないが。

「な、なんか凄いですね」

―それに、これはお前を守るためでもあるんだ

「―！どうしてですか？」

―お前もスバルも戦闘機人。結果からいえばその完成体がいるのをどっかの上層部が黙って見過ごしているわけないだろう？今まではゲンヤがいた。だが、奴らが本気でやろうとしたらゲンヤでも無理だ。管理局を別にいいかえるなら軍だ。上には逆らえない。

「・・・」

―それに、先の事件で戦闘機人が民衆や局にも知られてしまった以上それをネタにして脅してくる可能性だってある。だが、スバルは六課にいる限りは安心だ。教会やら本局の提督らがいるからそう簡単には手出しはできない。
逆にお前はスバルよりも盾になってくれる人間が少ない。だから、入隊してくれれば俺がお前を守ることだってできる

「総帥・・そこまで」

―けど、入隊するかどうかはよく考えてくれ。極秘扱いになるから１０８部隊には居られなくなる。人との接触も限られてしまう。ある意味人生を握られているのと同じようなものだ。だから、そこのところよく考えてくれ

「―わかりました」

「ああ」

彼は紙をとり窓から外に出すとボッと火をつけ燃やした。
証拠を残さないためだ。

「あいつらが収容されている場所まであと少しだ。なにか世間話でもしながらのんびり行こう」

「そうですね」

先ほどまでの暗い雰囲気を晴らすためレイはあえてそう言った。
その意図をギンガはちゃんとわかっていた。

そして、1時間後。車はナンバーズ達がいる場所へと着くのだった。

ナンバーズｓｉｄｅ

「あ～暇っす・・・」

「お前はさっきからあ～あ～うるさい」

「ノーヴェはいやじゃないんすか？」

「それは、まぁ身体がなまりそうでいやだけど」

戦闘機人である彼女達に身体がなまるという表現はどうかと思うがそれはあえて気にしないでおこう。

「まぁ、ウェンディが騒ぐのも無理はないさ」

「チンク姉もそう思うッすよね！」

「ただ、お前は我慢が足りない」

「う～」

操作に協力だったとかで結局は隔離施設に収容されてるんだから何とも言えない。

しかし、それが間違いだったとは思わない。

ただ、不思議なのは――セッテがいることぐらいだ

「にしてもあのセッテがねぇ」

「そうですね。私たちの中ではある意味一番ドクターに忠実でしたからね」

「クアットロに影響されてたらね～」

独房に収監されたのはスカリエッティ、ウーノ、トーレ、クアットロ。だが、セッテはそこには入らなかった・

協力的なのかどうかは定かではないが現に彼女は更生プログラムを受けていた。

しかし、施設で暮らすようになっても皆と間を置きいつも一人で何

か考えているようにも見える。

「本当、世の中不思議っすね」

「そうだね」

これが今の彼女達の日常である。
ある意味彼女たちらしい暮らしとしてるのかもしれない
だが、今日は一味違うものになった

「お～す。お前ら元気か～？」

「あ、兄上！」

一番に反応にしたのはチンクだった。チンクは一番彼を好いている。

「お、チンク。その様子だと元気そうだな。ウェンディなんか暇で仕方ないだろう？」

「はっは。わかるっすか？」

「で、今日は何しに来たの？」

「ふっふ。今日はお前たちの講師を連れてきた！」

と皆が扉に注目する。
そして、ひょこりとギンガ顔をだした

『あ、１３』

「えーと、初めまして?今日から講師としてあなたたちの面倒をみるギンガ・ナカジマです」

「一応ギンガは姉だからギン姉とか呼んでおけばいいぞ」

「ちょ、ちょっとレイさん!」

「ははっは。じゃあ、あとよろしく～」

とギンガを残してレイはルーテシアとアギトの所へ向かう

「兄さん・・」

「んだよ、お前か」

「よ、久しぶり。調子はどうだ?」

「別に普通」

「そうか。母親のことなら心配するな。そろそろ目を覚ますころだと医療チームから連絡がきている」

「本当!?」

「ああ。それと、ここを出た後彼女と一緒に暮らす場所もそれなりに手配してあるから安心しなま、アギトはもう決まってるようなものだし、俺がわざわざ何かやることもないからな」

「ふ、ふん!別にまだ、あいつの所にいくって決めたわけじゃ・・・」

「もっと素直になったらどうだ?」

「うるせぇ!」

ナンバーズたちと違い二人は早く釈放される。
その後は、ルーテシアは母―アルピーノと一緒に暮らすだろうし、アギトに関してはシグナムの元へ。つまり八神家の一員になる。
なんだかんだでその後のことは決まってる二人である。

レイ自身も二人のことは既に大丈夫だっと踏んでいた。
一番気になっていたのは―セッテだった。今回も言いかえれば彼女が気になって来たとも言える。

皆といる場所から少し離れている所にいるセッテ。
木に背中を預けどこかうわの空だ。

「よ、久しぶりだな」

「・・・・・か―んむぐむぐ！」

言おうとしたその瞬間彼の手が彼女の口をふさいでいた。

「俺は“レイ”だ。セッテ」

「・・・じゃあ、レイ。一体なんのようですか？」

「まぁ、簡単に言うとお前と話がしたくてな」

「―私がここにいることについてですか？」

なんだ、自覚してるんじゃないか

「そうだな。多分他の奴らはきっとあいつらと一緒の場所にいると思っただろうな。
でも、お前はここにいる」

「私も、よくわからない。ドクターと一緒にいってもよかった。けど、そうしなかった。
その原因が私でもわからない」

セッテは簡単に言えば命令忠実。機械のようだった。
そんな彼女が主を裏切るとは思えないだろう。

「俺が思うに、お前は自分で決めたんだ。
自分で、考えて悩んで決断した。それだけだ」

「自分で、決断・・」

「俺は前にこう言ったな。お前のそういうとこも“個性”と言えると。また、もっと人間らしくなれとも。少しずつだが、お前は“普通”になろうとしてるんじゃないか？」

「普通？」

「そ。普通っていても色んな意味がある。お前の場合は人。いや、意志を持つモノなら自分の考えで行動する。それをお前はしているんだと思う。ただ、命令されるだけじゃなくて自分で考えて、な」

「私が自分で考えた・・・。そうかもしれない」

「コギト・エルゴ・スム」

「？」

「我思う。故に我あり。こんな言葉がある」

間違いなくこの世界では存在しない言葉かもしれない。とレイは思

った

「今、お前がこうしていることが答えだ」

「そう、ですね・・・」

セッテは微笑んでいた。初めてみたとレイは思った。

「お前はここから出たあとどうする気だ？」

「何も考えていません。私にはもう帰る場所はありません」

「そうか。なら、俺の所に来るか？」

「え？」

「お前にそう教えこんだのは俺だし、責任は感じている。お前がよければ俺の所に来ないか？」

「・・・考えておきます」

考える

いい傾向だな

少しずつだが、彼女も変わろうとしているのだと改めて確認した。

その後、レイは彼女達が元気なのを確認するとギンガと共に帰ることに。
施設の駐車場でギンガが何を考え込んでいたが車に乗り込む手前で彼女は言った

「あの、レイさん」

「ん？」

「私、決めました」

「なにを？」

「私はあなたの元へいきます」

彼はわかりきっていながら聞いていた。でも、それでも、再び問う。

「なぜ？」

「私は・・・あなたと共にいたい。
あなたの力になりたい。どんなに傷ついても、どんなに他人から恨まれても、私はあなたの少しでも支えになりたい。それが、“普通”ではできない。私にしかできないことだから」

「ごめん」

「謝らないでください。私が、決めたことですから」

「そうか。本当、迷惑ばかりかけるな。俺は」

「ふふ。そうですね。でも、それは私だけじゃないですよ？」

「―そうだな」

彼はコンクリートの天井を見あげた。

自分はどれだけ誰かを巻き込んでいくのだろう

利用して・・・利用して・・・

結局は己のため

そんな自分に付いていくと彼女も、彼女達は言う

だから、俺はこう思った

いや、わかっていた

いつの日か贖罪の日が来るんだろうと

第９５話　変わる彼女と変わっていく彼女（後書き）

仁「今日はギンガの転属とセッテについてでした。
セッテは違和感なく入れられたかな？」

フィ「いいんじゃない？」

仁「ちなみに特殊部隊と何かに気付いた人もいるかもしれませんが
アリサとすずかはこれに属していますよ」

フィ「まぁ・・・派手に出てたわね？」

仁「そのこともちろん六課解散前に書く予定です。アリサとすず
かどうやって力を手に入れたかとか・・・」

フィ「あとは？」

仁「そうですね。シリアスものでアリシアを中心にレイたちが行方
をくらましていたころの一部を書きたいと思っています。ただ、難
しいの時間がかかる・・」

フィ「まぁぼちぼちやっていくってことで！」

仁「けど、次回はその話の予定だもんね」

第９６話　心の傷　それは深く消えることのない痛み（前書き）

今回はアリシアメインなのですがちょっと可愛そうな話に。
なんで、俺、アリシアにはキツイ話ばっかするんだろう・・・

第９６話　心の傷　それは深く消えることのない痛み

第？？管理外世界
紛争地帯―クルジス

「はぁはぁ！」

私は走っていた。ただ、闇雲に走っていた。

ドォォォン！

ＤＡＤＡＤＡＤＡ！！

遠くで、でも、近くで爆発音や銃撃戦が繰り広げられている

「はぁ・・もう・・走れないよ・・」

「止まっちゃダメ！もう少しで・・」

私ともう一人子供がいる。私は彼の手をひっぱりながら走っていた。
もう、何十分も走っている。

私も息があがっているけど、彼は私以上に疲れている。
でも、止まったら終ってしまう。

―すべてが

「はぁはぁ―！」

「え！？」

私は角を曲がる瞬間彼を抱え後ろに跳び身を隠す。

「どう『しッ！』」

彼の口を塞ぐ。
角からそっとその向こうを見た。そこには、武装した兵士が警戒している。

私たちを息を殺してその場にとどまっている。

「「・・・・」」

バキィ

「！」

「「！！」」

彼が声だか何かを踏んだようだ。

「おい」

「ああ。村の奴らか？」

「誰だっていいさ。皆殺しだ」

音でわかる。こっちに近づいてくる。
彼を抱きかかえながら私は願った。

誰でもいい。誰か―助けて！

ＰＡＮ！

一発の銃声が響いた。

「え・・？」

「ちっ！ゲリラ―『ＰＡＮ！』ぅ――」

先ほどの兵士の気配はしない。
私は角から出て道路らしき場所に出た。そこには銃を持つ彼がいた

「レイ！」

「アリシア！無事か？」

「うん・・うん！」

彼は私を抱きしめてくれた。

「お姉ちゃん・・？」

「彼は？」

「合流する前に助けたの」

「そうか」

「さ、いこう」

「うん」

彼もこちらに向かって歩いてくる。

私はこの時安堵していた。レイが一緒なら大丈夫。
そう思っていた。

「―来ちゃダメだ！」

「―！！？？」

レイは叫ぶと私を抱え後ろに跳んだ。私たちが地面に倒れると先ほどの目の前の場所に爆発が起きた。

ドォォォォォンン！！！

「え・・・・」

私は起き上がりその場所をみた。

「見るな、アリシア！」

彼に言われる前に私は見てしまった。それを見てから私は目が離せない。いや、脳裏に焼き付いてしまったようなものだ。

先ほどまで生きていた彼は――死んでいた。
いや、身体の原型をとどめていない。目を向ければあちこちに彼の

腕や足らしきものが見える。

「あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝！！！！！」

この時、人が死ぬをみたのは2度目だった。母さんので1度目だけど、あの人は幸せで逝った。
だからある意味これが私がみた最初の人が死ぬ光景だった。

新暦００７５
１１月下旬
機動六課―宿舎

「――――！！！！！！」

私は夢から覚めた

「ぁぁ・・・」

私は怯えていた。
怖かった。
自分が死ぬのも、なによりさっきまで生きていた人が突然目の前で死んでしまったことが。

「ごめんね・・・ごめんね・・・」

何故か謝っていた。

彼女が謝る必要はない。なぜならアレは戦争で、誰かが死ぬのは当たり前だったからだ。
それでも彼女はごめんねと謝っていた

「どうした、アリシア？」

きっと私がうなされていたのに気づいたのだろう

「レイ――――」

私は彼に抱きついた。
怖かったから。だから、彼に縋った

「どうしたんだ？」

彼は優しく私の頭を撫でてくれた。

「夢を、みたの」

「夢？」

「何年も前。私が、あの子を殺してしまった夢」

あの子・・殺した・・・

そうか。あの時の。

レイも思いだした。
彼女は酷く自分を責めていた。
俺はその子をみたぐらいだがアリシアにとっては自分の所為で殺してしまったと思っているのだろう。

「アレは、お前の所為じゃない。戦争が、そうさせた」

「違う。私があの子を殺したの。正義ぶって、絶対に助かると思って。
だから・・・」

「アリシア・・・」

強く抱きしめる

「俺は言ったよな。今なら引き返せるって。だけど、お前たちは受け入れ俺と一緒にいた。覚悟は―できていたはずだ」

「わかってるの。わかってる」

「アリシア。あの子のことを誰も知らなくてもお前だけは知っている」

「レイ？」

「生きてる奴は、死んだ奴のことを語り継がなければならない。誰かが、戦場でそう言ったんだ。俺は、あの子をことを何も知らない。けど、あの子も必死で生きていた。
生きようと。必死に“死”という運命に抗っていたんだ」

詭弁でもいい。アリシアの重荷を少しでも軽くしてやれるなら。

「だから、お前だけは絶対に忘れるな。あの子のことを。心に刻むんだ」

「うん・・・うん・・・」

それからアリシアが喋ることはなかった。
涙を流しながら笑顔でまた眠りについていた。

「・・・」

レイは、あの時のことを思い出していた。
その子が死んで、その夜。彼女に変化が起きたことを。

数年前
まだ、レイたちが行方を暗まして1年も経っていないころ

その世界のクルジスという場所は紛争地帯で知れ渡っていた。
原因は軍の一方的な虐殺。
人を守るのが軍人なのに反対のことをしていたのだ。
しかし、軍と言っても大本は政府である。指導者が変われば政治も変わる。それが一番の原因だ。だから、こうなってしまった。
もちろんその内戦でゲリラもいた。また、各国の軍隊もその紛争に参加してはいるが戦況は変わらなかった。

レイはその世界に付くとそのゲリラたちを助けると言い出した。
彼は言った。

「この戦いはどちらが悪で、どちらが正義かがはっきりしている」

と。
だから、彼は協力した。
そして、私たちにも言った。

「引き返せるのは今のうちだ」

ある意味、これが初めての世界への介入だった。

けど、彼女達は彼についていくことを決めた。

また、彼から条件も出された。

「こういった魔法が存在しない場所で魔法は使うな。絶対に」

理由は簡単だ。

在りしもしない力を使えば人はそれに縋りゆくゆくは象徴として祭り上げられる。

そして、利用される。

最後には死しか待っていない。

だから、魔法を使うなとレイは言ったのだ。

では、魔法が使えないならどうやって戦えばいい？

レイは言った

「お前たちは戦わなくていい。戦うのは俺だけでいい」

彼はそう言った。

レイは、彼女たちに殺しをさせるつもりはなかった。

しかし、彼の願いは儚くもすぐに消えてしまった。

最初に、人を殺したのは・・・アリシアだった

―ゲリラの隠れ家―

あの村で子供が死んでアリシアを連れてゲリラの隠れ家に戻ったレイ。
レイは今、ゲリラたちのリーダーとも言える男。
ジョン・ランボーと話し合っていた。

「ここには歩兵2個中隊が滞在している。ここを夜襲して装備などを確保するのが一番の目的だ」

「地形は悪くないな」

「ああ。作戦内容は俺ができるだけ先行してできるだけ数を減らす。時間になったら君とゲリラの皆が残りを殲滅。奴の装備はできるだけ無傷で手に入れたいから、ゲリラの中で狙撃が得意な奴を選ぶ」

「わかった。あとは俺の方でなんとかする」

「そうしてもらえると助かる」

二人はだいたちの確認を終えると一息ついた。

「君は不思議な男だ」

「何が？」

「わざわざ、こんな場所に来て一緒に戦わせてくれ、なんてどうかしている」

「それは君もだろう？ランボー」

「俺は・・・銃を捨てられなかったんだ。あのミャンマーの地で、一度は戻りかけた世界を俺は拒んだ。俺にはこいつしかないんだと」

「・・・そうか」

「だが、君が来てくれてとても助かっているのは事実だ。ただ―あの子たちをここに連れ来ているのはどうかと思うが」

あの子たちと言うのはアリシアたちのことだ。

「特に、金髪の少女。あの子はまだ幼い。さっき聞いたが目の前で死をみてしまったんだろう？」

「ああ。かなり落ち込んでいる。自分が殺したと思い込んでいるらしい」

「―俺にもあった。ただ、俺は復讐と言うやり方しかできなかった。だから、言う。あの子たちだけでも帰らせた方がいい」

「俺も最初に言った。だけど、あいつらは自分で決めてここにいる。だから、俺はもう何も言わない」

「そうか。なら・・仕方ない」

互いに何か思ったのだろうか。
いや、二人は同じことを思っていた。
戦争に、女を、子供を巻き込ませるものではない。
戦争はキタない大人たちが始めたこと。終わらせるのもまた、大人なのだと。

「―レイ!」

「どうした、銀?」

いきなりテントに入ってきた銀。どこか、とても慌ててるようにみえる。

「アリシアが、アリシアがいないんだ!」

「なんだって!?あいつ、テントで・・」

「そうなんだが、私とリニスが気づかない内にどこかへ行ってしまったんだ!」

「一体どこ・・・まさか！」

「お、おい！」

ランボーが慌てて彼を止めようとするが

「ランボー、お前はゲリラと戦闘配置についていてくれ！」

「なに！？」

「すまないが俺とリニスでいく！銀、お前はランボーの指示に従うんだいいな！？」

「ああ」

レイは指示を出すとある場所に向かった。
勘なのかもしれないがそこが一番近く、また、そうだと確信してしまうのだ。

「リニス！」

「はい！」

今リニスは猫モードでレイの肩に乗っている

「アリシアの魔力を辿れるか？」

「はい、なんとか」

「よし！」

そして、１０分後。
レイとリニスは惨劇をみることになる。

「これは・・・」

軍が滞在している場所につくとそこはある意味戦場だったかもしれない。
彼らが建てたであろうテントなどは火が燃え移り燃えている。
そして、あちこちには人の死体が転がっている。

「ぎゃあああ！！！」

「こっちだ！」

声の聞えた方に向かう二人。
そして、そこには・・・大の男の首を片手で締めあげているアリ

シアの姿があった。

確かに、筋力の鍛錬はしていた。しかし、今の彼女は魔力を使わず自身の力で男を締めあげている。

「一体どうして・・」

「まさか・・・」

「レイ？」

「リニス、アリシアは一度死んだ」

「え、ええ。そうです。あなたが生き返らせた」

「そうだ。俺の場合は、彼女の“肉体”を使って生き返らせた。魔導師とか関係なく人は本来持っている力の3割しか使えない。何故だかわかるか？」

「それは、脳が危険だと無意識にリミッター―をかけているから？」

「簡単に言えばそうだ。そして、それは肉体が持たないとも言える。しかし、アリシアは一度死んだ。そして、リミッター―が外れた」

「まさか！」

「そうだ。今のアリシアは１００％の状態の人間なんだ」

１００％の人間。リミッター―が外れ、元々持っている人間の力。

それに気づいた時レイは酷く自分を責めた。

くそっ！どうして、気づかなかった！

「や、やめて・・・」

「・・・・」

「「！！」」

兵士の言葉で目の前の現実に再び目を向ける二人

「やめるんだ、アリシア！」

ゴキ

「なんてことを・・・」

男の首は折れその場に倒れる

アリシアはゆっくり二人の方へ向く

「あ、レイ」

彼女は笑っていた

「みてよ、私は魔法を使わないで人を殺せたよ！」

「アリシア・・・お前・・・なんで」

「なんで？だって、これは“戦争”でしょ？」

戦争。

戦争で人は変わる。例えば、優しい青年があるきっかけで人を殺すとする。すると、まるですべてをひっくり返したかのように青年は人殺しになってしまう。

「ああ、そうだ。だが、お前はこんなことしなくていい！」

レイはアリシアを抱きしめた。強く、強く。彼女を抱きしめた。

「違うよ。私がしたくて『お前がしているのは復讐だ！』・・・」

「復讐なんてやめるんだ。復讐なんて・・・」

「違うよ、復讐じゃないよ・・・」

「お前がそんなことする必要はない。お前のこの手は血で濡れちゃいけないんだ！」

「・・・嘘つき」

「！」

「私は、覚悟があるからここにいるんだよ？だから、レイは引き返せるなら今だっていったんでしょう？」

彼女の言っていることは的を得ていた。

「それで、私たちにもこうやって人を殺させようと『パチィン！！』・・・え？」

俺はその時、初めて彼女を叱り、頬を叩いた。

彼女自身もかなり驚いている。リニスもまさか彼が打つとは思っていなかったのだろうか。かなり動揺している。

「お前のそれは覚悟でもなんでもないんだよ！！ただ、目の前で死んだ餓鬼が可哀想で可哀想で、それを自分の所為にして、それを口実にして復讐というやり方で人を殺してるだけなんだよ！」

「違う・・よ・私は」

「お前、最初にこいつら殺して楽しいとか自分は強いんだとか思ったんだろう？」

ビクン！

身体が無意識に反応してしまった。

「そういう風に思ってる奴はなぁ、ただの人殺しなんだよ！いいか？！人を殺すってのはな！そいつのすべてを背負うってことなんだよ！そして、誰かから疎まわれ、憎まれそして、自分を殺しに来るんだ！今のお前にその覚悟はあるか？ないだろ！」

「あ・・ああ」

「俺の言っている覚悟ってのはそういう意味なんだよ！誰かを殺すってことは、誰かに殺されるってことんだよ！
だから、俺は言ったんだ。お前にはその覚悟がない。ただ、人を殺すだけだ」

「違うの・・私は、私は・・・」

「―俺は矛盾しているかもしれない。お前の言う通りお前たちに誰かを殺させるつもりだったかもしれない。だから、少しずつ教えるつもりだった。わかってもらいたかった。人を殺すのは簡単なことじゃない。そして、これが俺のいる世界だってこと」

俺は彼女達の手を血で染めたくはない。だけど、彼女達がそれを選んだ。だから、教えていくつもりだった。

「ごめん・・なさい・・・ごめんなさい、ごめんなさい・・・うぅ」

「うわぁぁぁぁん!!!」

彼女は一杯、一杯泣いた。
俺は彼女が泣き終えるまで抱きしめていた。

そして、アリシアは変わった。ちゃんと向き合うようになった。

なにに？

それは俺にはわからない。
ただ、もしかしたらそれは現実(いま)かもしれないし、目の前で起きていることなのかもしれない。

それからの事を少し語ろう

俺はアリシアに戦いを教えた。
魔法を使わないことから使うことまで。

彼女の覚悟を、俺は認めたからだ。

そして、なにより、彼女は人を―殺した
必要だから。誰かを守るために。
あの子はその力を振るった。

守るために命を殺す。
俺はそれが間違いだと思わない。むしろ、妥当なことだと思う。

何かをするには犠牲はつきもの。
それが命。それだけのことだから。

「すー・・すー」

「・・・」

彼女の綺麗な髪をなでる。

お前の、お前たちの覚悟はもう揺らがない。
迷うことはない。

その力を俺のために捧げていること

「ありがとな」

「・・うん・・・」

寝言にしてはタイミングがいいな

「―今は、お休み。アリシア。いい夢を」

「・・・ありがとう、レイ」

「リニス、起きてたのか」

「私では、あの子の苦しみを和らげてあげられないから」

「何を言っているんだ。誰にだってできないことはある。お前には、お前にしかできないことがある」

「―そうですね」

「お前にはずっとアリシアと一緒にいてほしい」

「わかってます」

「俺にだって、限界はあるさ。だから、これからも迷惑をかける」

「もう、慣れっこです」

「そうか。ありがとうな」

「いえ、私は、私たちはあなたについていくと決めましたから」

「そうだったな」

「それじゃ、お休み」

「はい、お休みなさい」

そして、二人も眠りに就く。

今度はいい夢を

第９６話　心の傷　それは深く消えることのない痛み（後書き）

アリシアには酷いことばっかするな。
いや、嫌いってわけじゃないんだけど・・・話を書く段階でそうなってしまうんだ

次回は銀の話をしようかと思っています。ただ、どういう話にするかは未定です

それとご報告なのですが、番外編がとうとう動き始めました。
内容はシンデレラをもとにしたんですが・・・なんとも言えない・・・

主役はなんとティアナです！

これで、ピンときた人は凄いですよ。たぶん。

（原因は彼女が希少価値のツンデレだからなんだよね

～シンデレラ？いいえ、ツンデレラです～（前書き）

注意

このお話はとてもキャラの扱いのバランスが悪く、また出ないキャラもいます。

こんなの違うと思った方は戻ってください

そして、作者的にはうまくツンデレができなかったようなので心してみてください

また、苦情の感想はやめください。

本人は一番わかっています

それでも大丈夫の方はどうぞ

～シンデレラ？いいえ、ツンデレラです～

ミッドチルダという大きな大陸にある王都、グラナガン（アレ、なんか設定がにている？いいえ、気のせいです）

そこの一国の王。レイル・アンヴァルト5世がいました。

しかし、彼というか彼の臣下とか親族は深い悩みをかかえていました。

それは、彼には妻、つまり王妃がいないのです。

理由は簡単。

「ただの、女には興味がないんだよなぁ」

どっかの世界を大いに盛り上げるなんとか団、団長みたいなことを言いだすのです。

悩まされる彼らはパーティーを開くことにしました。

そのパーティーには臣下たちがみつけた『ただの女じゃない奴ら』を集めました。

それは小国から隣国。さらには城下の民たちまで。

そして、ヒロインであるシンデレラ・・じゃなかった。ツンデレラは・・・

ゴシゴシ

床を拭いていました。

「はー、なんで私がこんなことしなきゃいけないのよ」

ツンデレラ（ティアナ）はボロボロの服を着て床を磨いていました。

こうみても、ツンデレラはちょっと前までそれなりの女の子なのですが兄が悪い女と結婚していまい、兄も何故か事故で死んでしまい家の実権を握られてしまったのです。

その、義姉というのが通称糞眼鏡ことクアットロというエビフライな女です。

そりゃあ、髪ほどいたらそれなりの女にみえたけど・・・俺はお前大嫌いだから！

ごほん

そんなクアットロには妹がいるらしいのですが今はおりません。

何故かって？

そういうキャラがいなかったらわけじゃないんだからね！

そして、今日もうざい、女の嫌味を聞く

「あらぁ～ツンデレラ。まだ、掃除は終わらないの？」

「はい、すみません。えび・・・お姉さま」

「あなた、今エビフライって言おうとしたでしょ」

「あ、自分でも自覚してたんですか？」

「だまらっしゃい！いい、今夜、私はパーティーに呼ばれているからご飯はそこらへんのでも食べてないさい！」

「はいはい」

こうして、姉は去って行きました。

一通りの仕事を終えるとツンデレラはポケットから王子の写真をとりだした

「王子・・・は！わ、私は別に王子のことなんかなんとも・・・」

「ていうか、だいたい王子なんてこんな顔してるけど本当はニートみたいな性格してるのよ。絶対！」

はー。これがツンデレというのかどうかは置いといて。

実はツンデレラ。王子にあったことがあるのです。

それは子供の時です。

まだ、その頃は兄も結婚しておらず両親も健在していました。
ある日、ツンデレラはお花畑で遊んでいました。
そんな時。同い年か少し年上の男の子が迷い込んできました

「ふ、さすがの親衛隊も俺にはかなわないか。ま、当然だな」

その男の子というのがこの王国の王子なのです。
まあ、王子というのは、子供時代にはよく城から逃げ出すのが定番です。
脱走するのも日常茶飯事になっていたある日。

彼はツンデレラと出会ったのです

「あなた誰よ？」

「生意気な女だな」

「なによ。文句ある？」

「あん？」

二人の出会いは最悪でした
しかし、何回もあう内にそれなりによくなりました

「で、お前名前は？」

「ツンデレラ」

「変な名前」

「わ、わるかったわね！そういうあんたはなんていうのよ！」

「俺？俺の名前はレイだ。レイ様と呼べ」

「は？あんた馬鹿なの？アホなの？死ぬの？」

「王に向かってその口答え許さん！」

と、結局喧嘩してばっかりです

しかし、喧嘩する程仲が良いといいますか。
もし、その光景を誰かがみていたら仲がいいと思うに違いありません。

でも、本当にその光景をみている者がいました。
その者はリニスといい、彼の世話係でもありメイド長でもある彼女でした。

―ああ、王子があんなに感情を露わに・・・

普段は無口で感情を表に出さないのが彼だった。
しかし、例外もありそれはリニスだけの時は普通に感情を出す。それはいつも傍にいるから彼も信用しているのだ

―それにしても、あの女の子誰かしら?

王子を狙う暗殺者。というわけではないし、大丈夫かしら。

とりあえず王子の害になるモノではないと判断し、リニスはそれからも二人を見守っていました。

そんなある日のこと

王子はいつものように城を抜け出しお花畑へとやってきました。
しかし、どうでしょう。元気が取り柄な彼女が膝を抱えまるで泣いているようでした。
いつもの彼ならばからかっている所でしょうがさすがの王子も何かを悟ったようです。

「どうした？」

「・・・お父さんとお母さんが死んじゃったの」

「・・・そうか」

「でも、お兄さんがいるから一人ぼっちじゃないからいいの」

「・・・そうか」

「「・・・・・」」

王子もなんと言っていいかわからなかったのです。
ただ、彼は傍にいてあげました。
彼女が元気になるまで・・・

ツンデレラの両親の死から数年。
二人は大きく成長しました。特に王子はやはり、子供の時とは違いそう簡単には抜け出せませんでした。しかし、かならず2回は彼女と会う約束をしていました。

そんな時、彼女の兄が結婚したと言ってきました

「へー、よかったじゃん」

「・・うん」

「なんだ。嬉しくないのか？」

「嬉しくない・・わけじゃないけど・・・相手がちょっと、ね」

「ふ～ん」

彼女を察するにそんないい人ではないのだろうと王子も薄々わかっていました。

「―実は、さ。もう会えないかもしれないんだ」

「え！？」

「その・・色々と家の都合で」

「そう、なんだ」

会えない理由は簡単です。王子はもう子供はないのです。そして、今の国王が病にかかり、死ぬ前に彼を次の国王にする予定なのです。そのため、国王となったら国を守らなければならないのです。

「じゃあ、約束しないさいよ」

「なにを？」

「もし、もう一度会えたら・・・私と■■しなさいよ」

「お前、馬鹿？」

「う、うるさい！いい！？もし、他の女と付き合ってたら一生恨んでやるんだからね！」

「・・・俺さ、会ったときに言おうと思ったことがあるんだ」

「な、なによ。急に」

「お前、その髪型似合ってない」

ガーン！！！

なんというフラグブレイカー。

ちなみにツンデレラの髪型はツインテール。

「お前は、髪をおろしてる方が可愛いぞ」

「／／／／ば、馬鹿！褒めたってそんなことしてあげないんだからね！」

「はいはい」

そして、二人は別れました。
けど、それが最後の出会いでした。

ツンデレラは、兄が仕事でいない間、義母や姉たちに虐められ。
王子は、国王になるために様々な勉強を。

いつしか、ツンデレラは彼の面影を忘れてしまいした。
しかし、もう一度会う。という約束だけは覚えていました。

王子の写真をみても彼があの時の子だとは思っておらず、ただ、似ているな。と思ってるぐらいでした。

では、王子は？

「はぁ・・・。城を抜けだそうにも、警備は前より厳重だし。

それに、あいつも変わってるだろうしな・・・」

なんと、王子は全部覚えていました。
そして、彼女と再会の約束も。

「けど、再会したら・・・って。どんな思考してんだよ（笑）」

正直に言って、彼は彼女以外の女性にあんなに自分らしく振舞ったことがない。
唯一自分を王子ではなく、一人の男として接してくれた彼女。
まぁ、王子ってなのってなかったからな。

「王子」

「リニス・・・」

部屋に入ってきたのはメイド長のリニス。
彼女は不安な顔で聞いた

「王子は、なぜご結婚なさらないので？」

「・・・」

「確かに、求婚を申し出ているのはどこも王子とこの国との関係を

持とうとする国ばかり。
しかし、もう時間はありません。国王が病に侵され数年。生きているのが奇跡です。
ですから、国王が安心して逝かれるよう王子も・・」

「わかってるよ。けど・・・」

「やはり、あの女の子がいいのですか？」

「・・・知っていたのか？」

「ええ。できれば私も王子が好きな方とご結婚されてほしいです。しかし・・」

「・・・今回のパーティは平民も参加できるようになってる。
それで、現れなかったら・・・俺も決断する」

「はい」

≪　パーティー会場　≫

そして、夕方からパーティーが行われました。
そこには各国の王女から、平民から招かれた美しい女性たちばかり。
しかし、王子の求めている彼女はいませんでした。

「では、王子。私たちが選んだ王女たちをご紹介します。
まずは、マオウ国からやってきななのは王女です」

「王子、私とO☆HA☆NA☆SHI☆しましょう！」

「やだよ」

「次は、雷の国からやってきた双子の王女。
アリシア王女とフェイト王女です」

「わたしと結婚しよ！」

「王子・・・好きです！」

「直球すぎだろ」

「次は、メロン国やってきた。シグナム王女、マイ王女です」

「王子私と」

「結婚する？」

「デカイからって頭に栄養がいかなったのか？」

「次はまな板国からやってきたヴィータ王女です」

「貧乳はステータスだ」

「あっそ。よかったね」

そして、次々と紹介されていく中我らがツンデレラは・・・

≪　ツンデレラの家　≫

「はぁ・・・ドレスなんかないし、それに、いくら平民も出られるからって招待状はあの人が持って行っちゃったし・・・」

そう、ツンデレラにはドレスも無ければ招待状もないのです。

そして、時刻は１０時半を回ってしまっています。

「はぁ・・・もう駄目なのかな」

『諦めんなよ！』

「え？」

どこからか声がしました。彼女は辺りを見ますが誰もいません

『どうして、そこで諦めんだよ！私だってあんたのためと思って今まで出番を待ってたのに！』

「へ？」

ボン！

変な煙が舞いあがりそこからまあ、なんとも魔女らしくない魔女がいました

「困ってる人の味方。魔女っ子女神★フィリーヤちゃん参上！」

「は？」

「もう・・今回は出番があったようね」

「いや、だからなにを？」

「いい、ティアナ！あなたの願い。この私が叶えてあげるわ！」

「私、ツンデレラですけど」

「細かいことは気にしたら負けよ！」

すると彼女は杖を取り出し

「ツンツンデレ～目の前のツン子ちゃんよ。綺麗なお姫様になーれ！」

ボボン！

すると、どうでしょう！
あんなボロボロだった服が一瞬で綺麗なドレスに大変身。
髪型もツインテールではなくロングに。

「やっぱ、あなたはツインよりロングね。
さて、準備は整ったわ。あとはこの招待状と、この馬車に乗っていけば王子にあえるわ！」

「どうしてそこまで・・・」

「ふ。私は恋する乙女の味方なのよ。
さ、いきなさい！ツンデレラ！あなたのツンで王子を魅了するのよ！」

「なんかよくわからないけどありがとう！」

そして、ツンデレラは馬車に乗って城に向かって行きました

「でもね、ティアナ。ツンデレは一度、デレに入ると１００％デレなのよ・・・」

「・・・にしても、何か大事なことを忘れているような。はて？」

≪　パーティー会場　≫

「ヤンデレ国からやってきましたコトノハ様です」

「王子。私一緒に幸せになりましょう」

「誠氏ね」

未だに紹介される王女たち。
しかし、未だに彼が待つ女性はいません。
目を逸らし、会場を見渡しても見当たりません。

はやり、彼女は来ないのか

それともこの国にいないのか

それか、約束を忘れてしまったのか

どちらにせよ、ここに現れなければ俺はこの女たちの中から一人選ばなければならない。

本心はいやだ。
だが、現実を受けいれなければならない。

ざわ・・・ざわ・・

ガヤガヤ・・・・

思いつめていると会場が騒がしい。

「王子！」

「どうした、リニス？」

リニスが慌ててやってきてた。
なんでも・・・物凄い美人がやってきたとか

その彼女が通る前にいる者たちはどんどん道を開けていく。

彼女は王子の元へまっすぐ歩いていった。

「アレは―！」

ふつくしい

ただ、この一言に尽きる。

彼女は王子の前までいくと軽くおじきし

「王子、私と一曲踊ってくれませんか？」

「ああ、もちろん」

♪～

音楽が入り、二人だけではなく周りの者たちも踊りだす

（不思議。ダンスなんて踊ったことがないのに踊れてる）

ダンスとは無縁の世界にいたツンデレラにとって今、初めてダンスを踊っている。

「不思議な気分だ」

「え？」

「君とは初めて会った気がしない」

「へ？ー！」

「おっと」

体勢を崩しそうになった彼女をフォローする彼。

「実は一私もそんな感じがします」

「世の中不思議だな」

「そうですね」

それから二人は音楽が終わるまで踊り続けた。

そして、ダンスが終わり、彼は彼女を自分の部屋と招待した。

23：11：23

23：12：11

・・・・

「あ、あの王子・・」

「ん？」

ダンスが終わったあといきなり部屋に案内されたツンデレラは混乱していた

「で、もう一度聞くけど。前にあったことない？」

「確かに私もそんな気はしますけど、王子とあったのはこれが初めてです」

「そうか」

23：57：22

≪　王子とツンデレラがいる部屋の近くの外　≫

「もう少しで０時。何か・・ん～」

魔女っ子★女神フィリーヤちゃんは何か肝心なことを忘れて仕方がなくこうして様子を見ている。

「０時・・・０時・・・あ！」

≪　二人がいる部屋　≫

２３：５９：４５

「そういえば、君の名前を聞いていなかったね」

「え、そうですね」

２３：５９：５５

「私の名前は－ツン」

２４：００：００

ボボボボ～ン！！！

０時の鐘が響くと同時にツンデレラがいきなり爆発した。

「けほけほ・・・一体・・・な！」

「もう～一体になによ～・・・王子？」

彼は凄く驚いている。
私を見て驚いているので私は身体を見渡してみた

すると・・・

「え・・・なんで」

するとどうでしょう。
ツンデレラの姿は変身する前までのボロボロの服を着た姿になってしまったではありませんか

それを丁度外で見ていたフィリーヤちゃんは

「あ、言うのを忘れてた」

「君は・・・」

「みないでください！ごめんなさい！だまして。でも私『ツンデレラ・・』え？」

「やっぱりツンデレラじゃないか！このあんまり似合わないツインテール。
そうだ、やっぱりお前だ！」

「どうして、私の名前・・・・？」

「覚えてないか？レイだよ。子供の時よく遊んだ」

「・・・・」

しばらくツンデレラは硬直してました
それから数秒後

「えええええええ！！！！」

「思い出した？」

「え、なんで、アンタが！？」

「ははっは。そうそう。その喋り方」

「は！そ、そのごめんなさい！」

「いいよ。謝らなくて。そっちのが君にあってる。
それより、一体？」

「それは・・・」

ツンデレラはすべてを話しました。
兄がなくなり虐められ続けたこと。パーティに出たくても出れないところに、なんか魔女が助けてくれたことを。

「そうか。大変だったんだな」

「うん・・」

「よし、結婚するか」

「は？ど、ど、どうしてそうなるのよ！」

「だって、お前が言ったんじゃないか。再会したら結婚しようって」

「嘘・・・」

ツンデレラは記憶を掘り返した

もし、もう一度会えたら・・・私と結婚しなさいよ

「言ってる・・・」

「だろ?それに」

「う、うるさい!いい!?もし、他の女と付き合ってたら一生恨んでやるんだからね!」

「とも言ったぞ。だから、俺はお前をずっと待ってた」

「嘘・・」

自分は忘れてて彼は覚えていてくれて。

私、最低だ。

彼女は気づかず涙を流していた

「嘘じゃない。・・・ほら」

「え？」

彼は彼女の髪を縛っていたリボンをほどき髪をおろした

「やっぱり、お前はこっちのが可愛いよ」

「／／／・・・馬鹿」

「だから、結婚しよう」

「どうなっても知らないからね」

「上等」

「馬鹿・・・」

本当、その魔女には感謝しないとな

彼はそう思い、窓に目を向ける。

するとそこには箒にのった魔女が・・・いた

まったく。母上も遊びが過ぎる

なんと、魔女は彼の母だったのです。
彼女は子供ころに出会ったツンデレラを影でみていたのです。
そして、今回の件で彼女を助けたのです。

『魔女っ子★女神フィリーヤちゃんは乙女の味方よ！』

≪　エピローグ　≫

パーティから数ヵ月後

おめでとう

おめでとう

お幸せに

町の人々が二人を祝福する

「愛しているよ。ツンデレラ」

「はい。王子・・」

こうして、二人は幸せになりましたとさ・・・

ＥＮＤ

『シンデレラ？いいえ、ツンデレラです製作委員会』

ＣＡＳＴ

ツンデレラ　ティアナ
王子　レイ
魔女っ子（ｒｙ　フィリーヤ
極悪な姉　エビフライ？
マオウ国の姫　白い悪魔

雷の（ｒｙ　アリシア
メロン国　フェイト
　　シグナム
　　麻衣
まな板国　ヴィータ
ヤンデレ国　コトノハナ様
ナレーション　不知火仁

原作　魔法少女リリカルなのは

シナリオ　不知火　仁＆ボン太
　　くん

編集　不知火　仁＆ボン太
　　くん

撮影協力　ミッドチルダの皆さ
　　ん

撮影場所　ミッドチルダ
　　どっかの王国
　　機動六課

特別ゲスト　桂　言葉様

ＯＰ『ツンデレラ』

ＥＤ『魔女っ子★女神フィリー

ヤちゃん☆』

提供

本局総帥

ミッドチルダ

ｅｔｃ

宣伝　ミッドチルダ第四放送

局（仮）

なぜなにスタッフ一同

時空管理局

機動六課

ＴＢ〇

Ｙａ〇ｏｏ

ニコ〇コ放送局

ボン太くんず

その他諸々　ボン太くんず

総監督　不知火　仁

速報!!!

番外編　長編企画始動!?

主人公は・・・変態?

ヒロインはツンデレ?（中の人的な意味で）

舞台は異世界？

そして、主人公は・・・

使い魔？

次作の企画について

ボン太記者『どうしてやろうと思ったふも？』

作者『なんか閃いたんだよ』

ボン太記者『本編すらまともに更新できていない上に番外編なのに長編？
ばっか言ってんじゃねえふも』

作者『いいんだよ。やっちゃＺＥみたいなノリで』

ボン太記者『救いようのない馬鹿ふもね』

作者『うるせ』

ボン太記者『信じるか信じないかは君しだいふも。
多分、嘘かもふもよ?』

～シンデレラ？いいえ、ツンデレラです～（後書き）

第９７話　二人の祝福の風（前書き）

最近小説がみやすいように色々工夫をし始めました。
けど、見やすいかどうかは人によってさまざまなので難しいところですよね。

なんか、いいやり方があったら教えてほしいです

第９７話　二人の祝福の風

＊＊新暦００７５＊＊
１２月上旬

≪　銀　≫

ふと、思ってしまう
私の存在について
かつては『闇の書』と呼ばれ
彼女から『祝福の風・リインフォース』の名を貰い
そして、彼から『銀』という今の私の名前を貰った

『今の私は一体何なのか？』

という疑問を持ってしまったのだ。彼と旅をしている最中私は彼に聞いたのだ

『お前にとって私はどういう存在だ？』

彼は言った

『例え、名は違ってもお前は『祝福の風』だ。俺たちに祝福という風を運んでくれる。
そして、俺の自慢の娘だ』

私はそれが嬉しかった

だから、私は今でも『祝福の風』だと気づいた

例え名は違っても

私は私（祝福の風）なのだと

第９７話　「二人の祝福の風」

もう、あの事件から2カ月が経った。
しかし、未だに神乃家は六課に居候中。しかも、何もしないで。
そんな神乃家長女、銀は散歩でもしようと外へ向かうため通路を歩いていた。
そして、ロビーを通りかかった時

「はっは！くすぐったいです～」

「？」

銀は、気になってロビーを覗いた。

そこにはレイと―もう一人の私、とも言える『リンフォース？』がいた。

何をしているのかとみてみると何やらレイは彼女で遊んでいるようだった。

「ん～本当にちっこいな。お前」

まるで人形を弄るかのようにリインを持つ。ていうかそれセクハラ？

「や、や、めて・・ですぅ・・（笑）」

第三者が聞けば絶対に誤解される会話である。

「小さくて不便じゃないのか？」

「それは・・その不便じゃないと言えば嘘になりますけど・・・色々と便利ですよ？」

「ふ～ん」

周りから見れば妙な組み合わせだと思うのが妥当かもしれない。
銀自身気になって覗くのをやめ二人の所へ向かうことにした

「なにをしているんだ？」

「お、銀」

「あ、“お姉さま”」

「お、お姉さまぁ？」

驚いたのはレイだった。

経緯を話すと・・・
リイン自身初めて銀と合った時なんて言えばいいか悩んだらしい。
それで、はやてに相談したところ・・・

「ん～。銀は先代『祝福の風』やから・・・お姉さまでええんやないか？」

ちなみに、お姉さまと適当に言ったと思われるが実はそうではなくはやてがそっちのが面白いと思ってつけたらしい。

「やあ、リイン」

正直に言えばそれを呼ぶには少しの抵抗があった。
なにせ、私の名前でもあったのだから。

「で、レイは何をやっていたんだ？」

「いや、リインに色々と話を」

「はい。レイさんとの会話は色々と楽しいです」

「そうか？」

「で、話は戻るがリインって成長するのか？」

「すると、思いますよ？」

彼が一番気になっていたのはそこだった。

※Ｆｏｒｃｅではリインが大きくなっている設定ですがアレってどうなってるの？
と疑問抱きました。
可能性としてはリインを含め、シグナム達は容姿を変えられるらしいからそれが妥当なのかもしれない。（まあ、元はプログラムだし）

しかし、それではつまらないので

「大きくなれる薬があったらどうする？」

「え！」

「は？」

二人はかなり驚いているようだ。

「えーと、なんだ。そのビッ○ライトぉ。みたいな装置でも造ったのか？」

「失敬な！ちゃんとした大きくなれる薬だ！色んな意味で！」

「その色んな意味が恐いですよぉ」

「心配するな。例えるならボン、キュン、ボン。みたいな感じだから！」

一体何が彼をそこまで駆り立てるのだろうか

銀はそう思ってしまった。

しかし、わからないわけではない。

彼は単に、面白そうだからやっているだけだ。

もう、何年もの付き合いだし、何より娘だからわかる。

「ボン、キュン、ボン・・・えへへ」

リインは少しそうなった自分を想像していた。

それは、私だって女の子ですし！少しはそんなこと思ったことありますよ！？

でも、ヴィータちゃん以外皆胸大きいし、いや、私は小さい（身体が）からそれでいいんですけどぉ！？

簡単に言うと、リインはその“なってみたい”という欲望に誘惑されていた

（その欲望をどうするかが大事だと思うんですよ！）

あれ、なんか声が・・・？（いくら中繋がりだからって・・・）

「そ、それより私も一つ聞きたいことがあったんです！」

「「？」」

リインは流石にこのままだといけないと思ったのか話題を逸らした

「その、お姉さまとレイさんってユニゾンしたことってあるんですか？」

「―！」

「ん～」

レイは首を傾げた。しかし、銀は何故か赤くなっている、

「何回かやったような、やってないような・・・」

「や、やったぞ。１２回ぐらい・・／／」

「そんなにやったっけ？」

「あ、ああ／／／／」

再び第三者が聞いたらとても、とて～も、誤解される会話である。

「そうなんですかぁ。レイさんとのユニゾンってどんな感じですか？」

「え、そ、そうだな・・」

「そうだな。結構相性いいかもな。なんていうか・・・シンクロ率。中々なもんだと俺は思ってるがね」

「へ～凄いです」

「なんなら、みてみるか？」

「「え！！？？」」

≪　訓練場　≫

「と、いうわけで新人どもを相手にちょっと“遊ぶ”から」

なにが、というわけで

なにが、新人どもを相手に

遊ぶのだろうか

それぞれの隊長であるなのはとフェイトは思った。

「じゃあ、リイン。ちょっとここでみてろ」

「あ、はい！」

「よし、いってみるか。銀」

「う、うん／／」

（なんで、銀さんは照れてるんだろう？）

二人は思った。
そもそもなんで彼女までが一緒にやるのだろうか？
リインに聞いてみると

「かくかくしかじかなんです」

「あ、そうなんだ」

「へー。やっぱり、銀さんと兄さんってユニゾンできるんだ」

「「・・・・・」」

なぜか、互いに顔を見合わせるなのはとフェイト。

『いや、ダメでしょ！！！』

「なんでですか？」

「だって、ね？」

「う、うん」

「？」

ただ、リインだけは状況が飲み込めていなかった。

ここまで、言えばわかる方もいるだろう。
なぜ、二人がそこまで慌てているのか。

それは・・・

ぶっちゃけというとユニゾンって意味が男と女がつまり『合体！！』してるように聞こえるっていうかそう妄想してるだけなんだよね

どっかのアクエリアンエイジじゃなくて三機のゲットマシンみたいのが合体すると女パイロットが

『気持いぃぃ』

とか思ってるのです。
すみません、例えがふざけ過ぎました。

≪　FWメンバー&レイ・銀　≫

「というわけで、若く管理局を支える子供たちよ。
俺と戦って生き残ることができれば戦場で死ぬことはないだろう」

（なんでいきなり総帥と模擬戦？）

（私は別にいいけどなぁ）

（総帥と模擬戦なんて滅多にないんじゃないですか？）

（というよりあの時の印象が強いから模擬戦どころじゃないよぉ）

キャロのあの時、というのがケルベロスをまぁ・・・頭をちょん斬った時だと思われます。

「んじゃ、銀。ユニゾンいくか」

「／／／」

「お前、さっきから変だぞ？」

「い、いや。なんでもない」

「？そうか。なら、いくぞ―」

『ユニゾン―イン』

訓練場に眩い光が照らされる。
白い丸い球体が現れ、そして、球体は弾け飛ぶ。

「アレが・・・お姉さまとレイさんのユニゾン・・・」

「うわ・・・綺麗・・」

「ていうか似合わないようで・・・なんなのかな・・」

三人がいう二人のユニゾンとは・・・

まず、レイの容姿は髪の毛が銀と同じ色に。
彼の服。基本的黒いコートに赤いラインが入る。そして、左目にも縦に赤いラインが。
そして、背中には黒い翼が。

その姿はかつてのリインフォースを沸騰させるものだった。

「よ～し、まずはブラッディ・ダガー千本。いってみようか」

「「「「え・・」」」」

するとレイの周りにダガーが円をつくり、くるくると回り始める。
そして、彼の合図で四人に向かって飛んでいく

「さあ、落とすなり、斬るなり、逃げるなりなんでもしてみろ！」

「いやぁあああああ！」

「当たった！？ってありすぎぃいいいい！」

「なんで、振り切れないんだぁあああ！」

「ごめんなさい！逃げます！」

叫びながら落とす者、叫びながら斬る者。そして、逃げる者

これは、例えるなら『子をせんじんの谷に落とす』かのようなものである

「ははっは。逃げろ逃げろ♪」

であると、信じたい

一方問題の銀さんは・・

『・・・熱い・・ん・・／／』

※はい、全国のリンフォース好きの皆さんごめんなさい
でも、よかったら『いいぞ。もっとやれ』と言ってください

そして、明日を生き残るための逃亡劇は終った
言うまでも無いがＦＷメンバーはあまりのことで放心状態でした。

「いやー楽しかった。また、頼む」

「駄目」

なのはは速攻で断った

「なんで」

「駄目ったら駄目！」

「ケチ」

「兄さんの馬鹿」

「なんで」

追い打ちをかけるようにフェイトが言う

「最低」

「なんか酷くないか？」

『レイくんの（兄さんの）変態！！』

バリーン

何かが割れるような音がした

「なんだろう・・なんかいい響き・・？」

レイはおかしくなってしまった

「さて、おふざけは後にして。リイン。どうだった？」

「あ、はい。とても凄かったです！」

「そうか。よかったな。で、銀。お前はなにもじもじしてんだ？」

ユニゾンを解除してからどこか様子がおかしい

「う、うるさい。気にするな」

「そうか」

「あ、あの。レイさん！」

「ん？」

「私も・・お姉さまみたいになれるでしょうか？」

そうだなと、言うような顔でレイは言った

「なれる。じゃなくて、なるんだ。お前は、お前が望む『祝福の風』になれ。
お前ならできるさ。なんてったって、こいつの妹だからな」

「――はい！！」

最高の笑顔でリインは答えた。

そんな会話を聞いて銀もどこか嬉しそうだった

第９７話　二人の祝福の風（後書き）

仁「久しぶりの本編投稿！
皆、待たせてごめんね！でも、俺受験生だからさ！」

レイ「まあ、皆。察してやってくれ」

仁「しかし、その・・もう一度この場で
全国のリインフォースは俺の嫁だと思ってる皆さん！
誠に申しわけございませんでした！（土下座」

レイ「今回、色々とはっちゃけたな」

仁「まあ・・・銀がなんであんな赤くして、もじもじしてたかは言うまでもないからあえて言わない」

レイ「まあ・・・久しぶりだから少しは許してほしい、一応受験は終わり、まだ結果まちだから。落ちたらまた投稿が遅くなるんだ」

仁「ははははは・・・・」

第９８話　いまさらですが（前書き）

アリサのなんとか。

なんか消しました

あれは夢です。忘れてください・・・・

第９８話　いまさらですが

＊＊＊新暦００７５　１２月上旬＊＊＊

≪　聖王病院・特別医療室　≫

どうも、お久しぶりです。
最近、出番が少ない高町なのはです・・・

どうも、４冠なのに出番が少ないフェイト・Ｔ・ハラオウンです・・・

私たち二人は今、聖王病院にいます。
何故かって？
気づいたら私たちは車の中にいました。まあ、簡単に言えば拉致られたんです。

レイくんに

で、そのあと案内されてこの特別医療室に入ってたのですが検査とか言われ、服を脱がされ、下着の上に検査用の服を着ています。

相手が相手だけにともて恥ずかしいです・・・

そのレイくんはというと、白衣を纏い伊達眼鏡をつけ、カルテをみています。
多分、今まで検査したものだと思います

「よし、二人とも。そのカプセルの中に入れ」

『はい』

そのカプセルとは。
例えるならこう・・・未来的なもので、半分空いていて、上から何かX線みたいので検査するようなもの。

二人はこんなものここに置いてないと知っていたので聞いてみたら

『俺の医療チームから持ってきた』

だ、そうです。
どうして、そこでやらないかと聞いたら

『秘密』

と言われてしまいました

・・・数分後・・・

検査を終えた私たちはお茶を飲みながら検査結果を待っていました。
残念ながら着がえさせてはもらえませんでしたが。

「よし、じゃあ検査結果と一緒にお前たちの新しい能力説明でもするか」

「今さら？」

「仕方ないだろう。（作者が）忘れてたんだから」

「ふーん」

「じゃあ、まず『フェイト・Ｔ・ハロウン雷神Ｖｅｒ』から」

「・・うん？」

「お前の方は特に問題はない。あっても肩こりぐらいだ」

「そんなに軽いの？」

「ああ。で、お前の能力だが・・」

目の前にモニターが現れた。映っている映像はアリシアとフェイトが戦っている場面だった

「これは、俺がバルディッシュに搭載した魔力増幅装置によって変わった姿だ」

「魔力増幅装置？」

「まあ、正確には変換資質である『電気』を増幅して、さらに、お前の魔力を『雷』そのものに変えちゃうってわけ」

「それってすごいね」

「当然。俺が作ったらからな。
これによって、常時雷化。力の配分を工夫すれば攻撃・防御・回避の強化にもなる。
ただ、弱点が一つある」

「弱点？」

意外だった。フェイトだけではなくなのはもそう思った。
彼が作ったものだから弱点とかないと思ってた

「弱点はとても簡単でな？わかりやすく言うと電池切れ」

「あー、なんとなくわかるかも」

「え？」

なのははなんとなく理解しているようだがフェイトはいまいちのようだ

「雷を・・まあ魔力を全部使うと雷が空っぽになるんだよ。まあ、充電すればいいんだけど」

「それってまったく電池と同じだね」

「ああ。電池だ」

「もう、電池電池いうなー！」

怒ったフェイトいただきましたー！

「で、その充電ってどうするの？」

「え、無視？」

「簡単。雷に打たれればいい」

「へー簡単だね（棒読み）」

「簡単じゃないよ！死んじゃうよ！」

「大丈夫だって。雷になったお前は別に雷に打たれても死なないから」

「あ、それもそうだね」

「なのは！？」

なんでか、最近のなのははとても冷たいよぉ

別にフェイトちゃんが４冠したのがとても気に食わないわけじゃないんだよ？

女の嫉妬は怖い・・

「で、私はどうだったの？」

「そうだな。単刀直入に言うと、お前この仕事辞めろ」

「ちょ、ちょっとなんで！？」

「まあ待てって。いきなりすぎたのはすまいが本当のことだぞ？」

「・・・どうして？」

「まず、第一に。あの時の怪我。まだ、完全には治ってない」

「・・・」

あの時とは。

それは、レイが消える前になのはが大怪我をした時のことである。

命を取り留めることには成功したが足へのダメージが酷く、当初は歩けないとまで診断されたのだ。

「本来は療養をとるべきはずがお前はとらず、仕事に専念してきた。その中で、ダメージがだんだん蓄積されてきた。お前の力はお前自身に負担をかける技ばかりだ」

「・・・うん」

なのは自身もそれは理解している。

けど、彼女は無茶を平気でしてしまう。周りに気づかれないようにしていてもやっぱり気づかれてしまうのもまたわかっていた。

「そして、この『高町なのは魔王＆amp;女神Ｖｅｒ』だが・・・。前に説明したかもしれんが精神的なダメージというか後遺症はない。どちらかという肉体的なダメージの方が多いな」

「うん、まあ」

「身体へのダメージもそうだが、最近はストレスと言うか悩みもあるしな」

『あら、それって私のこと？』

「！！！」

ブン！

フェイトは、なのはの声なのだがまるで別人のような声を聞いたように反応した。しかし、彼女はいつもの彼女だ

（おかしいな・・・最近私疲れてるのかしら？）

（すげぇ・・・いきなりポニーが逆になって戻ったよ）

レイはもの凄い光景を目撃したのだ。いつもは左なのにいきなり右になったのだ。
その速さはおそらく高速を超えていることに違いない

「魔王の時の能力は対して変わらない。アグレッシブでもエクシードでも発動できる。
ただ、魔力というか技の威力は上がる」

「そうだね」

「女神の時は、ＴＰＣシステムがフル稼働で、その他諸々機能が付いている。この前に具現化した奴は自動的にレイジングハートに登録されているから多分登録番号は・・・００２ぐらいだな。それを言えば使える」

「そのことだけど、私はあまりこう言うのは苦手だよ」

「そういうのはクイーンにやらしとけ。多分、アイツのが得意だろうな。お前の逆だし」

「あ、そっか」

「？？」

フェイトは頭に？の文字を浮かべているようにもみえた

「あとは、そうだな・・・。この『スターライト・ノヴァ』だっけ？こんな技をする奴が“まだ”いるとは思わなかったな」

「まだ？私以外にもいたの？」

「え、いないだろう？」

「だって今“まだ”って。それって私が以外にも似たような技を使ってたってことだよね？」

「・・そんなはずは・・いや、いたような・・・」

「兄さんも検査した方がいいんじゃないの？」

「どの口が言うんだ。あん？！」

「ご、ごめんひゃさいいぃぃ！！」

フェイトは彼に頬を引っ張られすぐさま謝った

「まったく！」

しかし、確かに最近おかしいな。長生きし過ぎでボケたか？
ちょっと、あとで調べてみるか

「で、話は戻るが。なのは、辞めろとは言わんが訓練とかはあまりお前がわざわざ相手をしなくてもいい。ヴィータだって、フェイトだっているんだ。少しは、休め」

「う～ん」

「お前は、無茶をする天才だからな。今度何かあったら首輪でもつけて『ピ～（自主規制により何も聞えません）』するからな」

「・・・いいよ、レイくんになら・・・ボソ」

「私も・・兄さんの・・・ボソ」

二人は彼に聞こえないように呟いていた

「さてと。こんなもんかな。どうだ？これから飯でも」

『賛～成！』

「じゃあ、着がえてこい。俺は車で待ってるから」

「その前に、もちろんレイくんの奢りだよね？」

「ああ」

『了解。迅速に着がえて参ります』

と、二人は隣の更衣室へと入っていた

「ふー。調子がいい奴らだ。それにしても・・・
何か、大切なことを忘れている。そんな気分だな」

ＥＮＤ

≪二人の能力説明講座≫

『フェイト・Ｔ・ハラオウン雷神Ｖｅｒ』
説明
バルディッシュにある魔力増幅装置で魔力を増幅され、魔力も、彼女自身も雷になった姿。
雷を自由自在に使えるので攻守ともスピードにも変換が可能。
ただ、電池切れという弱点があるため長期戦には向かない
呼び名／カミナリフェイト・ゴロピカリ・フェイチュウとか？
容姿／どっかの戦闘民族がスーパーになった感じ（オーラ的な意味で）
技
『サンダーボルト』
威力・ＳＳ　命中率・Ｂ（ＳＡＢＣ判定）
空から雷を落とす技。威力は高いがその分命中率は悪い。理由は、雷と同じで不規則に落ちるためである。

『雷神一閃』
威力・Ｓ＋　命中率・Ａ
ザンバーを一つにして放つ技。一つになった分軽いし、何より集中力が増す。
雷の配分は『８：２』８が剣に、２が身体。剣を振るう速度は神速に近いが（身体を雷で強化していた場合）どちらかというと麻衣やシグナムのが速い。
また、斬られるというより、触れた時の電圧によるダメージが大きい。例えるならスタンガンみたいなもの。

『高町なのは魔王＆ａｍｐ；女神Ｖｅｒ』
説明
レイジングハートに搭載されたレイが創りだしたシステム。魔王が基本的に魔力増幅などだが、女神は様々な機能がつく。
正直にいうと女神モードになったら勝てない。
システムがチートすぎるため
呼び名／魔王・女神・天使とか？
容姿／魔王時・基本的黒と赤　女神時・サイドポニーが仏のポニーに。髪留めも白と赤が混ざりあった感じ。目も右が赤く、左が普段の色
機能（主に女神）
『光の装甲（ホロニックマーマー）』元ネタ　ゼーガペイン
防御力・Ａ＋
女神モードになると常に使用者と中心に球体上で展開している。その形は光の盾がいくつも存在しており攻撃があたるとその形が浮かぶ。

『天使の翼（エンジェルウイング）』　イメージはＶ２ガンダムみたいなもの
主な機能としては機動力が＋され、また羽を盾としても使用可能である。
（女神なのに天使っておかしくねって思った方、細かいことは気にしないでね！）

ＴＰＣ起動時
登録番号００２
『ＯＲＣＨＩＳ（オーキス）』　元ネタ　ガンダム００８３
使用者・メインはクイーン。サブでなのは
イメージとしてはアレの小型版。メガ・ビーム砲の形は丸ではなく三角のような形。

M・フィールド・ジェネレーターというのはIのようなもの。ただ、ビームサーベルはないのでもう一門付いている。
技
『零距離魔道砲』
威力・S　命中率・B－
コンテナミサイル
威力・B　命中率・A－
その他諸々

登録番号００１
『刀』
使用者・クイーン
幼少のころ、レイに教わり真似たもの。特に能力はなくなのはが彼に近づきたいと思い具現化したもの

『スターライト・ノヴァ』　元ネタ　サイバスター
威力・???　命中率・???
なのはが魔術を取り入れた技。五芒星（☆）の術式が☆を現すような位置に現れなのはの最大限の魔力を放つ。
発射態勢はスパロボのサイバスターと同じ感じ。一旦翼が消え当たりの魔力素と自然エネルギー、万物からその力を吸収し発射する前には再び翼が展開する
範囲は正面。

案はあったけど出なかった技

『天使の羽音』　元ネタ　フルメタルパニック
能力はこれを発動した範囲数キロ圏内に展開しているデバイス・バリアジャケットの強制解除。敵、味方問わず。

ただ、自身は動けないわけではないのでスコアをどんどん稼げます（笑）
つまり、これを発動したら無敵（笑）

『ブラスタービット改』
従来のブラスタービットを小型化し、大量創製。その分、威力は少し落ちるがその分は数で補っている。
操作は基本的に片方の人格か、レイジングハート。

あと、いまさらですが

クイーン（高町なのは）
容姿／どういう原理か主人格がクイーンになるとポニーが逆になり黒いリボンをしている。
性格／なのはと逆。また、ツンデレ・ヤンデレを会得している可能性が高い（レイのみ）
利き腕／右（なのはと逆だから）
口癖／女王様？

備考
魔王システムによって目覚めたなのはの心の闇。しかし、別に身体を乗っ取るかそういうことはしない。なのはの欲でもあるためレイを独占しようと色々する。レイ以外にはツン１０対０（デレはない）。普段レイにはツンでいようとするが彼には無意味なため一方的なツンをとり勝手にデレる。ヤンデレ発動条件は他の女といるときで自分よりいい雰囲気の時になるらしい。

1957

第９８話　いまさらですが（後書き）

本当にいまさらですみませｎ・・・

それと、試験発表が近くなり、鬱が・・・

とういうわけで更新、遅くなる模様

第９９話　暴力教会（前書き）

久しぶりの投稿になります

最近はところどころ伏線などを置いているので気付いてもらえると嬉しいなぁ

第９９話　暴力教会

＊＊＊新暦００７５　某日＊＊＊

ミッドチルダ

≪グラナガン　郊外　沿岸部≫

ここは例えるなら海鳴の臨海公園に近いところだ。
ただ、違うと言えばこちらの世界の海の方が透き通っていて綺麗だということぐらいだろうか。

そんな場所には多くの親子連れが来ている。
また、海に面しているということで釣りをしている者も少なくはない。

その中に彼はいた。
いつもとは違う服装で。麦わら帽子をかぶり白いシャツにジーパン。
椅子に座り隣には魚を入れるボックスを置いて。

「まだかな～」

先ほどから一匹も連れてはいない。違うところに目をやると他の釣り人が魚を釣っているのが目にはいる。

だが、彼が待っているのは魚ではない

「隣いいですか？」

「どうぞ」

「「・・・・・」」

「どうです。釣れてますか？」

「残念ながら」

「ははっは。私は大漁ですよ」

「そうですか・・・」

「「・・・・・」」

聞いては無言という返答を繰り返す

「周囲の状況は？」

それを言ったのは隣にいる男だった

「問題ない。情報が漏洩することはない。それに、俺の部下も待機

している」

「そうですか」

「で、状況は？」

「はい。計画の進行度は予定の半分を消化しています」

「ふむ。順調だな」

「はい。それと、総帥の要望だった装備などは総帥が手配してくれていたので受け取るだけでした。しかし・・あんなデッカイものが必要なんですか？」

「ジョ～イお前ってやつは」

まるで呆れたかのように彼は言った。

「臨機応変に対応できてこそプロだ」

「しかし、半分は総帥の趣味ですよね？わざわざ、格納庫まで造って」

「ふん。俺のだから問題はない」

「まったくぅ。それとそれに関して技術部のR氏とU氏から伝言です」

「？」

「えーと、R氏からはたまには顔だせ。U氏はあの機体弄っていいか？だそうです」

「ま、六課が解散するまでは当分こっちにいるからそれが終わったら顔だすつもりだ。
それに、実際に自分の目でみないとわからないことあるからな」

「それは助かります。では、総帥から依頼のあった報告も上がってきています」

「―！速いな」

依頼したのはＪＳ事件が解決してから少し経ったあとだ。予想していたよりかなり早い

「それが私たちの特技ですので。さて、ご報告を。各世界の大規模の組織から小規模の組織まで。不審な行動が見られます。誘拐、麻薬取引、武器の仕入れなど。活発に行われています」

「・・・なるほど。誘拐は実験材料。麻薬は活動資金。武器の仕入れは――戦争をするための準備」

「恐らくは。
こちらでも武器や弾薬の確保は随時平行して行っていますが入手は困難な状況です。
総帥の伝手で暴力教会。さらには“政府”にも裏ルートで取引して

もらっています」

「“政府”と武器の売買してるなんて知ったら終わりだよな～」

「そうですね～」

二人とも現実逃避しているかのように遠い海を見ていた

そもそも政府という単語はアウトだろう

そのあとも細かな報告を受けた。しかし、そんな中でも魚は釣れなかった

「では、私はこれで」

「ああ。って。いいのかコレ？」

彼は持ってきたボックスを持っていかなかった

「はい。大量に釣れたので差し上げますよ」

「ムッ！・・・ありがたく貰っておくよ」

「では、私はこれで」

そして、彼は姿を消した。

彼がいなくなり、ボックスをあけてみた。そこには確かに魚が入っている。
それとおまけにデータディスクも一緒にだ。
彼は立ち上がり帰ろうとすると少し、目の前の風景が揺らいだ。
しかし、彼はわかっているように言った

「ご苦労だったな。“すずか”」

「はい。ありがとうございます」

するといきなり現れたのはすずかだった。
しかし、それではいったいどうやって現れたのか?

「好調じゃないか。流石、技術部」

「はい。この新型光学迷彩は凄いです」

光学迷彩。簡単に言えば、透明人間になるという優れモノ。だが、この世界(ミッドチルダ)、いや地球でもまだこれを開発することは難しいだろう。

だが!!!!!!

これを開発できる俺の直轄の技術開発研究所もとい、技術は流石だ!!!!!

管理局の技術は世界一いいいい

してな?
色々知りすぎちゃって命狙われることになって、それで他国へ亡命しながら生きながらえてたんだがもう、2重スパイどころか何重スパイとか思われちゃって。で、もう駄目だと思ったときに俺が助けたんだよ」

「なんか、凄いですね。マイケルさん」

「それに、腕も確かだ。俺の信頼している部下の一人でもある。家の諜報部は優秀だねーまったく」

「ふふ。そうですね。
では、“総帥”次にいきますよ。外でアリサちゃんが車で待っていますから」

「そうか。確か、次は“暴力教会”のところだったな」

「はい」

わかる方ならおわかりだろう。あの、レイが仕事を文句言わずしていることに。

「じゃあ、いこうか」

「はい」

場所は移り――

≪ミッドチルダ某所≫

そこは、不気味な場所だった。例えるならゾンビゲームにありそうな森のステージ。
そして、待ち構えるはいい雰囲気が出ている教会。

その教会はその道の者たちなら誰もが知っている教会。人はそれを『暴力教会』と呼ぶ。

＊＊教会内部＊＊

「へー珍しいじゃない。あんた自ら来るなんて」

「別に。俺は忙しいから来れないだけだ。シスターマリア」

シスターと呼ばれる女性はまさに、シスターの格好をしている。こんな不気味な場所にいるのが不思議なくらいだ。
ただ、普通のシスターと違うのは・・・ホルスターに銃をぶら下げているところだ。

「まあいいわ。依頼通りあなたには優先的に品物を手配しているわ」

「そうか。で、奴らから依頼はない。よな？」

「ええ。私たち暴力教会は信頼できるものにしか武器を売らないわ。確かに、奴ら『夜明け団』はある意味信頼できるでしょうね？その道の、私たちの裏の世界じゃ有名だもの」

こういう裏社会で取引をしているものならば誰でも売るのが普通だ。しかし、彼女達は違う。

「ではなぜ？」

レイのとなりにいるすずかが尋ねた

「簡単よ。私は、奴らが嫌いだから。私が信頼を置けるものたちはみな私の判断。用は好きか嫌いかよ」

「じゃあ、あんたはこいつが好きだから商売してるってわけ？」

「そうよ。まあ、彼には色々とこちらでの頼みごともやって貰ったこともあるし、誰よりも信頼できからね。それと小娘。今度からはシスターと呼びな。もし、また言ったら今度はこいつをブチ込むからね」

「！」

―ここは、彼女言う通りにしろ

―でも！

―いいか、アリサ？ここでは彼女がルールだ。わかるな？

―・・・わかった

「・・・ごめんなさい。シスター。今度からは気をつけるわ」

「そう。それでいいのよ。で、話は戻るけどこの前はすまなかったわね。あれは、どうみてもこちらに非があるわ」

この前というのはかつて、レイがカオスを名乗っていた時に弾薬などを頼んだのだがその運び屋が裏切ったため管理局がでる羽目になってしまったことがあったのだ。

「それを知ったらすぐさまブチ込みたかったけどあなたが始末したそうだから」

「なに。それがこちらでのルールだ。“裏切らない”それが俺たちのルールだ」

「そうね。お礼、ってわけじゃないんだけど。最近いいのが入ったの」

パチン

彼女は指を鳴らすと奥から大きな木箱を運んでくる他のシスターたち。
そして、前の前に持ってきて一礼するとまた戻っていた。
シスターマリアはふたをあけ中身をみせた。

「ほ～。軍用対物狙撃銃か」

「アンチ・マテリアル・ライフル。これはアメリカ製の『バレットＭ８２Ａ１』ですね」

「嬢ちゃん。よくわかるね」

応えたのはすずかだった。シスターも意外と驚いているようだ。

「ふーん」

彼はそれを片手で持つと、構え始める。
そのライフルの重さは公式では１２９００ｇ。普通なら片手で振りまわすことは困難だ。
しかし、彼はいともたやすく振りまわす。

「いいじゃないか」

「でしょう?で、どうだい?」

「そうだな。・・・すずか」

すると彼はライフルをすずかに投げ渡した。
その時、シスターは思った。

“こんな人一人殺せなそうな小娘が持っても無意味だと”

“どうせ、知識だけだと”

そうシスターは思っていた。
だが、実際は違った

ジャキ！

「！」

それを見た瞬間私は自分がこれほど愚かだと思ったことはない。
自慢ではないがこれでも多くの戦う者たちを見ている。私は、見るだけでそれを判断できる自身はあった。
最初、すずかを見た時はただの小娘程度にしか思っていなかった。
だが、現実は違う。
彼女はプロだ。ライフルを持った時に顔つきが変わった。いや、目つきと言った方がいいかもしれない。

「アンヴァルト。彼女は一体なんなのよ？」

「ん？俺の秘書」

「嘘おっしゃい！あの動き、どうみてもプロよ！」

「だってなぁ、俺が鍛えたし・・」

「あなたが！？どうりで・・・」

「お前のとこにも多分入っていると思うが、今噂の『月光』は彼女だぞ？」

「嘘」

「ホント」

「本気とかいて？」

「マジ」

・・・まさか、あの『月光』が彼女とは

『月光』

それは今裏の世界で広まっている噂である。噂では、魔法を使うらしく、魔導師であると思われたが奇妙なことに銃を使うらしいということしか情報にはない。

ただ、凄腕ということは確かなのだろう

「では、『灼熱』はその子？」
「なんでそう思う？」
その子とはアリサをさしていた
「『月光』にはつねに『灼熱』がいる。その逆もしかり」
「なるほど。確かに、この子が『灼熱』さ」
「そう。小娘と思って馬鹿にしてたわ。ごめんなさい。改めて名乗らして頂戴。私は、暴力教会取締役、シスターマリア」
「初めまして。『灼熱の魔剣士』アリサ・バニングス」
「私は、『月光の魔銃士』月村すずかです。よろしく、シスター」
「ええ、よろしく。で、どうかしら。貰ってくれる？」
「いいんですか？」
「もちろん。あなたなら大歓迎よ」
「では、お言葉に甘えて」

ここで、簡単に『灼熱』について説明しよう

『灼熱』の影に『月光』あり
と呼ばれる程、この二人は常に共に行動している。
月光はあまり、魔法を使わないのに対して灼熱は魔法使う。使うのだが、その魔法が特殊で魔法そのものが炎と噂され、辺りは一面焼け野原という話がある。

その後、彼らは依頼品のリストを確かめ、アリサとすずかはライフルの試射に外に出ていた。レイとシスターはちょっとした雑談をしていた

「ところで、最近妙に聖王のやつらが私たちのことを嗅ぎまわっているようなんだけど?」

「なに?」

初耳だった。
この暴力教会は言わば、聖王教会の逆の存在のようなものだ。
聖王教会は人のためにと掲げるならば、暴力教会は悪党に力を貸すとかかげるだろう。
悪党には銃を。聖王教会には鉛の弾丸を。

「あんたも知ってるだろう?あたしたちが聖王のこと嫌いなの」

「ああ。聖王教会というより管理局が。だろ？」

「・・・そうね。私たちは魔力を持たない」

「ああ」

「単に言えば、力を持つ者と持たないものに分けられる」

「そうだな」

「私たちは、奴らの理念に虫唾が走る。なにが管理だ。なにが平和だ。目の前のことしかみれない奴らがなにを偉そうにいう！」

それはかつて、アリシアがフェイトに向けていった言葉と同じだった

「だから、私たちは力を持った。そして、この力で虐げられているものたちを助ける。そして、悪党にはあたしたちが大嫌いな奴と撃ちあってくれる。こんなに嬉しいことはないさ」

聖王教会もまた管理局と同じ。自分のことしか考えない。それだけのことだった。

暴力教会には決まりがある。

1つ。頼まれれば武器を売る。売る相手は見極めること

2つ。自分たちが不利益なことはしない。

3つ。同じ境遇の者を助ける。

「そして、あたしたちが奴らを殺したい程憎んでいる理由が」

「・・・管理局の犯したあの愚かな過ち」

「そうさ。私たちは忘れない。奴らが行ったあのことを！」

「・・・」

「―話が逸れたね。最近、聖王の奴らがうろちょろしているのを目にするんだよ」

「足は掴まれないはずでは？」

「どうだろうね。あたしたちは物を売る代わりにあたしたちのことは他言無用。それができないのであれば取引は無し。けど、人間そうはいかないものさ」

「もしもの時の逃走経路は？」

「滞りなく準備万端さ。教会っていうくらいだからここが丁度よかっただけ。いざとなればすぐに場所は移す」

「わかった」

「それと、もう一つ変な噂を聞いた」

「変な噂？」

「これだけは、あんたに伝えた方がいいと思ってね。あんたの所の諜報部には一応伝えてあるから」

あれか

少し前に、うちの諜報部課長からもらったあの中に入っているということだ。

「わかった。あとで確認する」

「そうしなさい。・・・どうやら試射が終わったようね。あの子、凄いわね」

「まあ、自慢の教え子だからな」

彼は笑顔で言っていた。
しかし、彼女は理解していた。

彼の教え子ということは・・・いや、やめましょう。

チリーン

彼女は鐘を鳴らした。
すると部屋に一人のシスターが入ってきた

「お客様がお帰りよ。シスターニャ。無いと思いますが近くまで送って差し上げてください」

「わかりました。シスターマリア。では、アンヴァルト様。こちらへ」

「手間をかけるな」

「いえ」

マリアが無いと言ったのは何者かによる襲撃だ。だから、近くまで護衛しろと言うことだ

彼が乗る車と、うちのシスターが乗った車が出ていった。
二階の窓からそれをみていたマリアはふと呟いた

「本当、世間が知ったら驚くでしょうね。この教会を設立したのが彼だって知ったら」

彼女は不敵な笑みを浮かべて彼らを見送った

≪時空管理局　本局≫

＊＊総帥の間＊＊

総帥の間。そこはどこよりも安全な場所かもしれない。
彼がわざわざこっちに戻ってきたのは訳があった。盗聴されないためだ。

彼は今日、諜報部課長から渡されたデータをみていた。
内容は各世界の状況や、リストのデータ。そして、シスターが言っていた情報をみると彼は・・・笑い始めた

「くくく・・ははっははは！！！」

笑いをこらえていたのか。それとも面白いことがあったのか。
どれも違う。

彼は、嬉しくて笑っているのだ

「ここ数百年・・いや、つい数年前を最後に行方をくらましたのにこうも早くみつかるとはな！」

「ははっははははははは！！！」

再び笑う彼。
その笑いはとても不気味だ

彼は机にあるボタンを押し、扉の向こうにいるすずかに連絡を入れる

『はい』

「スノーを呼んできてくれ」

『わかりました』

通信を終える彼はまた笑いだした

「ははっはははははは!!!・・・・・・はぁー。こんなに笑ったのは久しぶりだ。
そんなに嬉しいのかねぇ。奴を――――殺せることが」

それは自分に言っているのか?

それとも・・・

しかし、それは誰にもわからない

彼にでさえも

おまけ

新キャラクター簡易版

≪灼熱の魔剣士　アリサ・バニングス≫
詳しいことは後ほど記載します

≪月光の魔銃士　月村すずか≫
上記と同じです

≪マイケル？≫
なんでも７２通りの名前を持ってるとかないとか。
彼直轄の諜報部課長という役職についている。かつては元の世界で色々やったためにレイに助けられスカウトされた

≪シスターマリア≫
ＣＶ田中理恵（銀様）
“暴力教会”の取締役。簡単に言うと一番偉い方。レイのことをアンヴァルトと呼ぶ。
魔法を持たない一般人だがかなりの手だれ。聖王教会＝管理局を恨

んでいる。

≪シスターニャ≫
“暴力教会”シスター。

用語説明　簡易版

≪暴力教会≫
聖王教会とは敵対している。悪党に武器の売買をしている。
構成員は大半が魔力を持たない。
教会らしいのか孤児などを引き取っている

≪管理局が犯した愚かな過ち≫
レイが呟いた謎の言葉。管理局が何か起こしたのはわかるが詳しいことは不明。
ただ、シスターマリアの怒りはこれが原因でもある

第１００話　雪女と総帥（前書き）

やっほーとうとう１００話だ！

本当は１００話記念とか考えたけどめんどかった

それと章管理？というものをやっている方がいたので自分もやってみました。

まあ、といっても最初は原作通りだからそのまんま。

オリジナルの話になったらなんとか編とかかいてそれがサブタイトルになる予定だったけどちょうどよかった

第１００話　雪女と総帥

＊＊＊?:?:?:＊＊＊

≪スノー≫

私は、今見知らぬ土地にいる。
その世界は至って普通だろう。しかし、私の目の前にある“魔法教会”を除けば。
魔法教会というのは言うなれば市役所みたいな役割をしている。
そこには数多くの魔術師たちのデータが保管されている。また、教会に属する者は教会からの任務をする。という至ってシンプルなものになっている。

ここが、私の生まれた世界ではないことはわかる。もちろん彼の世界でもない。
彼とは――今私が仕えている魔術師。『レイル・アンヴァルト・Y・神乃』のことである。

仕えているというのは変かもしれないが今の私は彼に養われているようなものであるからだ。ただ、私は既にいくとこもないし、また、今の私には守るべき子たちもいる。

話がずれた。
こんな、黒猫で天使の羽が生えたぬいぐるみのスノーは今人の姿を

している。
隣には彼がいる。

なぜ、こんなことになったのか。それは数時間前に遡る

≪数時間前≫

＊＊総帥の間＊＊

彼に呼び出された私は、すずかに案内され彼の部屋に来ていた

「で、なんのよう？」

「お前にちょっと手伝って貰いたくてな」

「？もしかて、魔術師関連？」

「まあ、そんなところだ。それに、そろそろお前の実力も見たかったしな。
『雪使いのスノー』または・・・『雪女』と呼ばれたお前の。“実力”を」

それを聞いて私はぬいぐるみから人の姿へ変身した。
私は『輪廻転生』によって魂だけだが不思議と今の身体を媒介にすれば最初の身体になることができた。

私は、それを聞いてわかったのだ。
彼は私を試しているのだと。だから、つい昔の口調で喋ってしまった

「穏やかじゃないわね。そんなに私の力がみたいの？」

「いつまでも居候では困るんだよ」

「・・・いいわ」

「それと、その前に聞きたいことがある」

「なに？」

「お前、『黒装束』と呼ばれる魔術師を知っているか？」

「黒装束？・・・さあ？私、ぬいぐるみ生活の方が長いから」

「そうか。・・・・・なら、いくぞ」

・・・・・・

そして、現在にいたるわけ。

彼が言っていた“黒装束”という魔術師。
実を言えば知らないわけじゃない。言わなかったのには理由がある。
彼が私に“魔術師”関連で聞いてくると言えば“黄金の夜明け団”かさきの魔術師関連ぐらいだ。
言っておくが私と彼は同じ世界の出身である。
これ大事だからテストに出るよ?

さて、私が話さなかったのは私が知っている情報はもう彼が知っていると思ったからだ。
彼は言い方を変えればこの世界のトップと言えるべき人間だ。彼の知らないことはない。
そんな彼が私に聞いてくると言うことは彼も知らないことなのだろうが・・・

“黒装束“

私は噂でしか聞いたことがない。
多分私たちと同類な不老不死で、黒い装束を纏っている。そのまんまだが。

多分このことは彼も知っている。

あと、私が知っていることは・・・ない

ないのだ

“黒装束”は確かに名のある魔術師だが何故か情報が少ない。
逆に、レイは有名すぎる程だ。

だから、私はあえて言わなかったのだ

まあ、彼のことだ。私のことも見抜いているだろうが。

・・・話は戻り

「で、あの教会を潰すの？」

「ああ」

「あそこにはなにがあるの？」

「なにも」

「じゃあなんで潰すのよ」

「ただの憂さ晴らし」

「・・・・（嘘だ）」

なにも無しにこんな場所にはこない。
おそらくここは夜明け団の参加の一つの魔法教会だ。
そして、ここにはその“黒装束“でもいたんだろう。そんなことは彼もわかっている。

ただ単に私の力がみたいだけ。

「・・・？」

すると教会から人が出てきた。どうやらこの世界の魔術師は普通の服装をしている。
私の世界なんかおとぎ話に出てきそうなフードをかぶった魔術師だ。

「見つかったわね」

「そうだな」

今の彼は本当、腹が立つぐらいムカつく。ワザト煽っているのだろうが普段の彼をみているからこそ腹が立つ

「まあいいわ。まさか、私一人でやれと？」

「俺もそれなりには手を出すよ」

「・・・わかったわ。じゃあ、いきましょう」

今思えば、これが彼との初めての共闘だった。

『火の精よ　我が杖に集い　我が目の前の敵を撃ち滅ぼせ　ファイヤーボール！！』

無数の火の球が二人に降り注ぐがそれは寸前で消滅した。
いや、消滅したというのは間違いだ。
無数の火の球は落ちる前に凍ったのだ

「まずは、場づくりからかしら？ふー」

彼女は普通に息を吹いた。するとどうだろう。元々暗かったこの場所もさらに暗くいや、白くなり始める。そして、だんだんと雪が降り始めそれは次第に―吹雪となった

「敵も魔術師か！」

「くそ、精霊が・・・アレ・・足が・・・冷たい・・」

自分の異変にようやく気付いた魔術師たち。足元に積もった雪はいつのまにか氷漬けになっていた。

「ふっふ。雪は溶ければ水となり、水は凍れば氷になる。このフィ

ールドにいる限り私には逆らえない・・」

「寒い、寒い・・・あああああ！」

足から、腰へ。そして、身体全体を氷漬けにしていく。
それは、氷の結晶。生身の人間を元にして創りだされアートだ。

私が雪女と呼ばれるのは触れた者を氷漬けにするからそう呼ばれ始めた。
最初は抵抗があったが今では気にいっている。だから、服装も白い着物だ

「この化け物め！」

一人の魔術師がスノーに向かってくる。身体が妙に光っているところをみると“加護の術”でも施しているのだろうか。それでも、この吹雪の中で耐えられるところをみるとそれなりの腕のようだ

よくみると杖ではなく剣を持っている。魔剣士のようだ。
彼はそのまま向かってくるがスノーは動こうとすらしない

「はっ！！！」

彼は剣を振るう。しかし―その剣をスノーの身体をすり抜ける。そして、その剣は凍りづけにされた。

「馬鹿な・・・！！」

「“氷の剣”」

グサッ！！

「うっ・・ぶはっ！・・・・・・・」

氷でできた剣はとても透き通っている。そして、美しい。その芸術品に綺麗な赤い色が流れ落ちる。
スケッチブックのような満面に広がる雪にその赤い色をした――血が塗られるがすぐ振り積りまた白に戻る

「残念ね。私に肉体はないのよ。今の私は雪そのもののようなモノ。物理攻撃は効かない」

スノーはそうは言うがそれを誰も聞いていないことに気づく。そして、見渡せばもう敵はいない。

「さて、これで私の実力を・・・っていない」

何故か、彼の姿がなかった。

逃げた？

いや、それはない。では、どこに？

＊＊教会内部＊＊

≪レイ≫

戦闘が始まりスノーの戦いを少しみたレイはすぐさま内部へ侵入。
確かに、今回は彼女の実力を見るのが目的だがそれ以外にもあるのだ。
まあ、スノーの実力は予想以上だったが。

内部に侵入した彼はこの教会の支部長を探していた。
例の情報が確かならここに奴が立ちよったはず。それを確かめるためにここにきた

そしれ、彼は標的がいるであろう部屋に辿りついた

部屋に入ると神父服を着ていた男をみつけた、男は酷く怯えている

「き、貴様らは何者だ！！！」

「貴様も夜明け団参加の魔術教会なら知っているはずだ。俺はお前

たちの敵だ」

「まさか！裏切り者のアン・・ぐあぁぁ！！！」

レイはいきなり彼の首を掴み持ち上げた

「一つ聞く。ここに奴は来たのか？」

「や・・つ・・？」

「そうだ。黒装束と呼ばれている魔術師だ」

「・・・はっは・・あのお方のいう・・通り・・だ・・・」

「なに？」

「聞か・・された・・のだ。近い・・日に・・一人の魔・術・・師・・がくる・と・・・」

都合がよすぎる。やはり、奴が自身が情報を・・・

ビクン

「！」

するといきなり男の身体から力が抜けた。
だらっと死人のようになり果てた

彼はまだ、“殺してはいない”のにだ

ガバッ！

「ちっ！」

いきなり力が入ると彼は男を放り投げた

なんだ、いきなり意識が・・いや、生気が感じられない。それに、
なんだこの感じ・・・どこかで・・・

『くっく。約１０年ぶりだなぁ・・・』

「その声！！」

それは男の声ではなかった。しかも、男は白目の状態で動いている

『今日はただの気まぐれだよ。お前の顔が見たくてやったことだ』

「・・・テメェ・・・」

『ふむ、私がかけた呪いは解けたようだな。どうだね、動物になった気分『ＢＡＮ！！』』

彼は容赦なく頭に弾丸をブチ込んだ

男は倒れるが顔だけレイの方へ向いていった

『まあいい。さっきも言った通り今日はお前の顔が『ＢＡＮ！！ＢＡＮ！！・・・』・・・』

俺は奴の声を聞きたくなくて男の顔に銃弾を何発も叩きこみ喋れないようにした。
そして、俺はその部屋を後にした。

情報の確認をするはずだったのが本人と再会・・みたいな形を果たしてしまった。
憎むべき相手のはずなのにさっきは苛立ちしか湧かなかった

―数日後―
＊＊時空管理局本局・無限書庫＊＊
≪スノー≫

無限書庫内でいつもスノーは守るべき三人の子供たちをみている。
といって普段は寝ているのだが。

「なあ、スノー」

「なに、闇樹？」

「この間はあいつとどこに行ってたんだ？」

「別に、なんでもないわ」

「そう、か」

「なに、嫉妬（笑）？」

「ば、馬鹿。そんなわけじゃない！」

「素直をじゃないんだから～」

こうやって話を逸らす。私たちは家族も同然だからこういうのはよくないのだが・・・

・・・教会殲滅後・・・・

戦いが終わり、私たちはなぜか・・・かまくらをつくって鍋をしていた。

もちろんかまくらをつくったのは私だし、鍋はレイだ。

「・・・」

「・・・」

互いに無言の時間が続いた

「ねえ、結局今回あなたは『スノー』なに？」

彼はいきなり口を挟んできた。持っていた箸をおくと

「今さらだが、お前にもう一度頼みたい」

「なにを」

彼はいきなり土下座をし始め頭を下げた

「あいつらを・・・いや、俺の娘たちを守ってやってくれ」

「ちょっと、いきなりそんな！頭をあげなさいよ！」

「きっと俺は自分のことで精いっぱいだ。あいつらを守ってやるこ

とは多分できない。
だから、お前に頼んでいるんだ。お前ならあの子たちを守ってやれる」

彼は真剣だった。わからないほうがおかしい。

「・・・そんなのあんたに言われるまでもないわよ。それに、私たちは家族でしょう？」

「家族、か。そうだな」

・・・・

でも、俺の娘たちを守ってくれ。か・・

なんだかんだで、父親らしくなってきたのかしらね

「本当、このまま同じ時が流れればいいのに」

私は、叶うことのない願いを呟いた

2001

第１００話　雪女と総帥（後書き）

さて、存在が薄かったスノーですがここにきて覚醒しちゃいました

基本的この作品の強さ関係?みたいのは

魔術師＞＞＞＞越えられない壁＞＞＞＞魔道師

理由は、魔術は守るためのものではないからです。
殺傷設定がされている以上は絶対に勝てません

戻りますがスノーは肉体を持っていないため基本的不死身です。
ぬいぐるみである器がなくなっても次の器に転生しちゃうので問題なし

スノー最強説ｗｗｗｗ

では、また次回で

2002

綾崎さんとのコラボ作品です！（前書き）

こうやって一からコラボ作品を作るのは初めてなので色々と力不足です・・・

2003

綾崎さんとのコラボ作品です！

≪？？？≫

＊＊地球・海鳴市＊＊

ここは、海鳴市。
その街を聞けばわかる者もいるだろう

『あ、なのはじゃん』

というお約束は置いといて

海岸沿いの道路を一台のバイクが走っていた。

「盗んだバイクで走りだすぅ～」

あ、別に盗んでないけどな

彼の名は、小野寺駿介。簡単に言うと、仮面ライダークウガである。
彼は元々この世界の住人ではない。
偶然か、それとも必然か、どっかの神様の所為でこの世界に転生したのだ。

とまあ、説明はこの辺で。
彼は、ただいま愛車、トライチェイサーでドライブ中。

「あー最近は平和だね～」

いやね、平和が一番なのはわかってるよ？
けどさ、ちょっと刺激も欲しいよね？

すると、少し目の前に光の壁が現れた

「？」

そして、そこから・・・人が落ちてきた。

「！！！」

人が落ちるのと、トライチェイサーがぶつかるのはほぼ同時だった

キィィィィ！！！

ドォォォォン！！！！

「・・・やべぇぇぇよぉぉぉぉ！！！やっちゃったよ！
いや、刺激欲しいとか言ったけどこりゃあねえだろう！？」

小野寺駿介。初めて人を引き殺してしまった・・・・

「くそ、一体どうしたら！？」

『駿介。とりあえず、１１９番じゃない？』

とどこから声がする。
声の主は妙な箱に入っていた。それはデジヴァイスである。その中にはアグモンがいた。

『それと１１０番だね』

もう一匹はガブモンである。

（未だに、この二体は人気のあるデジモンだと俺は信じたいね）

そんな二人？二匹の助言を受ける駿介。

彼が出した答えは・・・

「・・・よし、逃げる」

『『だめだ、こいつ』』

どうやら運がよかった。周りに人はいない。

まずは、遺体を海に・・・『痛・・・・』

「「「？？？？」」」

なんと、引かれた男は生きていた。

「こいつ、人間かよ？」

「ん？少年。バイクは１６歳からだ。いくら、仮面ライダーになりたいからってそういう遊び心はよくないぞ。」

なに言ってたんだこいつ？」

「ていうか、俺仮面ライダーだし」

「あーこりゃあ駄目だな。病院いかなきゃ。最近は『俺がガ○ダム』とかいう危ない人もいるから。大丈夫だ、少年。いい医者を知っている。きっとそんな君でも治して『いや、まずはあんたがいけよ』・・・生意気な餓鬼だな。アレ？」

すると、どうみてもおっさんのような奴は辺りを見回し始めた。

「少年」

「あ？」

「ここはどこだ？」

「日本の＊＊の海鳴市」

「・・・ん～どうやら並列世界に来ちゃったかな？」

「？」

＊＊＊海鳴市・喫茶店翠屋＊＊＊

二人は場所を移し、喫茶店翠屋に訪れていた。

駿介はとてもこのおっさんがどうにも怪しい人物だと直感した。
なんていうか普通じゃないオーラが漂っているのだ。

しかし、実際。おっさんは普通に馴染んでいるかのようにドリンク
とケーキを頼んでいた

「で、おっさん。名前は？」

「おっさん？お兄さんと呼びたまえ」

「うるせえ。で、名前」

おっさんは溜息をつくと自分の名前をいった

「レイル・アンヴァルト・Ｙ　・神乃。長いからレイでいい。で、
お前は？」

「小野寺駿介」

「小野寺？はて、どこかで聞いたような・・・まあいいや」

小野寺ってそんなに珍しいか？

「ところでなんでいきなり落ちてきたんだ？」

「いや、普通に転移しようとしたらなんか変な邪魔が入ったんだ。そしたら、こっちの世界と繋がって、こちら側に来てしまったと」

「転移？こちら側？」

なんとなくわかるが、突然すぎてついていけん。

「まあ、細かいことは気にするな。にしても・・・いつ頃の世界だ？なあ、高町なのはって知ってるか？」

「！！」

「知ってるようだな。あいつ、今何歳？」

なんで、こいつなのはのこと知ってるんだ？

こんな奴、あいつと知り合いなわけがない

「・・・１４歳だ」

「・・そうか。丁度知らない時か・・・」

「あんた一体何者だ？」

それを聞くと、彼は怪しげな笑みを浮かべ言った

「それはお互い様じゃないかな。駿介くん。いや、仮面ライダークウガ？」

「！！」

「なんでって顔だね～。でもさ、あのバイク乗ってて、自分は仮面ライダーって言ってるんだから誰だってわかるさ」

「・・・ちっ。そうだよ。あんたの言う通りだ」

「素直が一番だ。で、俺はお前のことを色々と知りたいね～」

憎たらしい顔だな。

けど、こいつに隠し事はできそうにない・・・

「俺は・・・」

≪レイ≫

それから、俺は彼から色々と話を聞いた。

彼は元々違う世界の住人で?転生した?ってらしい。

もの好きな神もいるもんだ。誰だかは知らんけど。

にしても、仮面ライダーかぁ・・・。

クウガだっけ?知っているだけでも二人はいるよ。五代と小野寺の二人。

いやー世界は広いね

「で、俺のことは話したんだ。あんたのこと話せよ」

「え、俺?見ての通り“先生”です」

「嘘つけ!」

彼の言う通りどこからどうみてもそんな風にはみえない

「本当なんだけどなぁ・・・ずず」

2012

そんな嘘ついてませんよ、っていう顔をされても困る駿介。

「あ、駿介君いらっしゃい」

「！」

「おお。なのは、店の手伝いか？」

「うん。あれ、この人は？」

「ああ、こいつは・・『初めして。ただの先生です』・・だそうだ」

「ふ、ふーん。じ、じゃあ、私仕事があるからごゆっくり～」

凄く引いていたのは流石のレイでもわかっているだろう

（なんでそんな変な人的な目でみるかな？）

いや、わかっていなかった

「なんで、そんな目をしてるんだ？」

駿介はそんなことを聞いた。

彼は、どんな目をしてるんだと聞いてきた。
駿介は答えた
「なんていうか、悲しんでるような後悔しているような・・・なんていうかそっち系の目をしてた」
それを聞くとレイはやっぱりと言った
「なあ、あんた一体なんなんだよ？仮面ライダーのこととか、それに、なんでなのはのこと知っているんだ？」」
「隠す必要もないか・・・。まず、俺のことについてだな。俺は、この世界とは別の世界から来た」
「？？？」
「わからないか？お前だってここことは別の世界から来たんだろう？」
「あーなんとなく理解できた。あんたは俺と同じようなものか？」
「まあ、それでいいわ。多分、お前と違うところがあると言えば・・。
そうだな。簡単に言うとお前は、仮面ライダーがいる世界から来た人間。

俺は、高町なのはがいる世界からきた人間、と言うことになる」

「おい！ちょっと待てよ。それじゃ・・・」

「そ。ここと似たような世界から来た。ちなみに聞きたいんだけどあいつ、どうやって魔導師になった？」

「ん？確か、ユーノっていう奴からレイジングハートを貰ったって言えばいいのか？」

「あーいい。なんとなくわかった」

ユーノって俺が偽名で使っていた名前じゃないか・・・

それに、レイジングハートも。

・・・なるほど。この世界に俺は多分いないんだろうな。その代わりここのユーノって奴が俺の代わりになったんだな

うん、理解した

「しかし、１４歳かぁ。丁度みれなかったからなんか新鮮だな」

「なんでだ？」

「ま・・・色々あってな」

「そうか」

にしても暇だなぁ・・・

ん？なのはは今１４歳。

ということは中学生＝フェイトたちも中学生・・・

―テンテンテンテン・・・―

ティンときた！

しばらくこっちに滞在して制服姿の写真とかその他諸々隠し撮りして、向こうに持って帰って六課の奴らに売りつければ・・・にやり

「くっくっく」

「なんか凄い悪だくみしてねえか？」

「ナンデモナイヨ」

「じ～」

「はっはっは『ドォォォン』―！」

「！」

2016

どこかで爆発が起きた
窓から街を見てみたが黒い煙があがっていた

「おいおい・・・こっちの世界は物騒だな・・」

「そうか?もう、日常過ぎて慣れちまった」

『そんなこと言ってないで早くいかないと!』

「ん?デジヴァイス?へーお前『いいからいくぞ!』・・え、俺もいくの?」

さすがの駿介も『当然だ』という顔で（ちょっとキレ気味）威圧してきた

＊＊＊爆発現場＊＊＊

「・・・コラボだからって気合い入れすぎじゃね?」

彼らの前に立ちはだかるは・・・グロンギや、ワームとかド一パントとかショッカーの戦闘員とか・・・とにかく一杯いる

戦闘員以外の敵の名前は多いので作者は把握というか面倒なので名称だけ・・・

「ちっ・・多いな。量より質ってことでアグモン、ガブモン！ジョグレス進化だ！」

「なんか、大人げなくね？」

「こまけぇことはいいんだよ」

そして、ジョグレスした・・・オメガモンが現れた

作者も大好きなデジモンです！

この度プラモ化おめでとう！

買わないけどね！

「じゃあ、俺も・・超変身！」

今回はサービスでライジングアルティメットです。

サービスかどうかは置いといて

≪一方やられ役の皆さんはというと≫

オメガモンが現れた時は・・・

「あれ、なんかおかしくね？」

「いやいや、無理っしょ」

「俺たち、ライダーしか相手にしねぇし」

「そうそう。俺たちライダー以外とは皆仲良し（棒読み）」

「ていうかカッコイイな」

そして、駿介がライダーになると

「ヒャッハーライダーだぜ！」

「ライダーは俺たち共通の敵だ！」

「イーーーー（勝ったら幹部昇進！）」

≪レイ≫

レイは敵の皆さんがなんだが楽しそうだったので

「俺、あっちにつこうかな」

「あんた馬鹿だろう！ていうか戦えよ！」

「ちぇ。しゃあない。ライダーってことで・・・ヘシンッ！」

すると彼はベルトを装着しヘシンした。
彼がヘシンしたのは仮面ライダーブレイド。ちなみにキングフォーム。
細かいことは気にするな。
ちなみに、作者がとても好きなライダー

「あんたも・・ライダーだったのか？」

「いや、今日は、ライダー」

「？まあいい。いくぞ」

「えー」

「あーもういくぞ、オメガモン！」

『おう！』

2020

≪やられ役の皆さん≫

『ガルルキャノン！』

ドォォン

『イーーーー（泣き）』

「とりゃあああああ！」

『憎きライダーめ！』

「とりあえず・・ウェーーーーーイ」

『なにがとりあえずだぁぁぁぁぁぁ！！』

なんで、俺たち怪人は・・やられる運命なのだろうか・・・

『グレイソード！』

俺たちは・・・ライダー以外と戦わないのに・・・

『ライジングアルティメットナックル！』

俺たちは・・・ライダーを倒したいだけなのに・・

『ロイヤルストーレトフラッシュ』

ていうか、今回・・車爆発させただけじゃん！・・・

＊＊＊とある戦闘員＊＊＊

『イー（今度俺、結婚するんだ）』

『イー！！（おめでとうございます先輩！）』

『イー（そしたら、俺この仕事辞めるんだ）』

『イー！？（そんな・・・でも、お幸せに）』

『イー（ありがとう）』

そして、現在

「とりゃあああ」

ドッカーン

『イー！！！（先輩ーーーー！）』

『（やっぱ、怪人と結婚すんじゃなかった・・・ガク）』

・・・・・・

「なんか、あの戦闘員やたら叫んでるな。って、なんで泣いてるんだ？」

何故か、レイは涙を流していた

「ううん、いや、あいつらも苦労してんだなっと思って」

「？」

2023

レイは何故か、戦闘員や怪人の声が聞えていた

「上司のパワハラなどいじめを受け方、職場に困っている方は下記の番号にご連絡ください。
＊＊＊＊－＊＊－＊＊＊＊
我々管理局はそんな方を救済します。例え戦闘員でもこき使ってあげます」

「なに、宣伝してんだ？」

「いや、なんとなく」

≪戦闘終了後≫

「なんか、あっけなかったな」

『そうだね～』

オメガモンは進化を解き、デジバイスに戻っていた。
今回の件は別に車が一台爆発しただけである。
街に被害はそれ以外なかった。
いや、あるとしたら・・・オメガモンが撃ったとこに大きなクレーターができるとか、なんか電柱が折れてるとか、斬撃の放ったあと

があるぐらいである。

海鳴市は予算が破産しそうで怖いですね

「さて、と。俺は帰るか」

「なんだ、もう帰るのか？」

「こっちは居心地が悪いんでね」

「そうかい」

「そうそう。一つ確かめたいんだが・・・お前、はやてのこと好きだろう？」

「ぷ！」

「やっぱな～」

「お前なんで！？」

「別に、心覗いたわけじゃないｙｏ」

「覗いたのか！？」

レイは口笛を吹きながら明後日の方向を向いている

「で、忠告だが・・・ちゃんとはやてをしつけとかないと将来大変だぞ（変態的な意味で）」

「大きなお世話だ」

と言ってもうちのはやては至って普通だが・・・変態化したら脳を初期化してやる

「それと、これやるよ」

「何だ？なにかのデータか？」

「管理局のちょっとした秘密さ。困った時に使うといい。もしかしたら役に立つかもしれないがね」

中身は局の色々と危ないデータが入ってたりするんだけど・・

「そうか。ありがたく貰っておくよ」

「ま、頑張れよ。仮面ライダーくん」

「ああ、あんたもな」

彼は別れを終えると光の扉が現れそして、消えていった

「そういえば、結局・・・あいつ何なんだ？」

『さあ？』

＊＊＊時空管理局　本局　総帥の間＊＊＊

「レイさん、一体どこへ行ってたんですか？」

秘書であるすずかはたったの数時間だけだが彼と連絡が取れなかったので心配していた

「ちょっと遠くへお出かけ」

「そうですか。楽しかったですか？」

「まあ、それなりにね。すずか、お茶」

「はい」

「本当、面白かったよ」

≪後日談　駿介≫

「しゅ、駿介！これみてみて！！」

「どうしたはやて？」

差し出されたのはとある雑誌のようだ。
そこのとある特集に・・・

なぞの、男現る？！日本の借金全額返済！？
日本を救ったヒーロー！！
彼は言った。『金がないなら毟り取ればいい』

なんだこれ？

と馬鹿にしていたが新聞をみたらそっちにも乗っていた。といか今話題の人らしい。
で、写真も載っていたのでみたら・・・

「あいつかよ！？」

≪後日談レイ≫

六課某所

「へい、らっしゃい。今なら隊長たちＪＣ版をセットで１０万でお買い得だよ～」

「総帥高いっすよ！」

「店長と呼べ店長と」

「店長高いっすよ～」

「馬鹿。二度と手に入らないプレミアだぞ」

「にしても高いっすよ～」

「もし、買ったらおまけに副隊長らの私服写真を好きなので選ばしてやるぞ」

「でも、高いっすよ～」

「うっせ。お前ら、公務員だろうが」

「そうですけど・・」

『ここか！あくどい商売をしている悪の巣窟は！？』

「ちっ！みつかった。この声はおっぱい魔人だ！」

「店長、早く物を！っていねええ！！！逃げやがった！！しかも物もねえしぃぃぃぃ！！！」

『貴様ら～覚悟はできてるんだろうなぁ～』

「「「ひぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃ」」」

その後捕縛された彼らは一言も店長のことを喋らなかった

おわり

綾崎さんとのコラボ作品です！（後書き）

今回コラボさせてもらったのは綾崎さんの作品の一つである『魔法少女リリカルなのは　仮面ライダークウガの介入』ですなのは好きの方もライダー好きの方も是非読んでみてください

執筆に約数週間はかかってしまった・・・

綾崎さんお待たせして申し訳ありませんでした・・・

それではまた次回で

第１０１話　管理局は秘密で一杯（前書き）

長らくお待たせいたしました。

今回は新章に入る前にやっておきたかった話の一つです。

それと、今年までにはｓｔｓ編終わるといいな・・・

第１０１話　管理局は秘密で一杯

＊＊＊本局・秘密訓練施設＊＊＊

ここは、一般の局員は愚か管理局幹部、提督ですら知られていない場所である。
ここ以外にも一般には知られていない非公式な施設がある。

そして、ここはその一つ。秘密訓練施設は総帥である彼の直轄の部隊だけが使用できる場所である。
現在、この施設を使用しているのは・・・

「ッ！」

「もっと早く、鋭く、無駄な動きはするな」

組み手をしているのはレイとすずかである。レイは普段の格好であるがすずかはトレーニング用の服を着ている。（一応ジャージみたいなの）

「ハッ！」

「相手の動きをよくみろ。相手が一人なら視野を狭め、相手だけを見ろ。

集団なら視野を広く持て。そして、周りにあるものを利用しろ。それは、武器にもなり盾ともなる。そして―」

「―！テヤッ！！」

レイは不意打ちで正拳を放つがすずかはすぐさま反応しそれは右腕で弾き彼の空いた右側のわき腹に拳を当てようとするが彼は見抜いていたのかそれとも反射的に反応したのか彼女の拳を受け止めたらいつのまにかすずかは床に叩きつけられていた

「きゃ！」

「そして、あらゆる攻撃を想定し、どんなことにも対処できる判断力を身につける。
わかったな、すずか」

「は・・い」

「ほら」

「ありがとうございます・・・」

彼は手を差し伸べ彼女を置きあがらせた

「といっても俺が不在ながらかなり腕をあげたな。上出来だ」

「／／／／えへへ」

「やっぱり、お前は身体能力が他の奴らと違っていいな。俺としても教えがいがある」

「自慢じゃないですけどなのはちゃんたちよりは体力あるつもりですよ？」

「当り前だ。あいつらは、“一応”身体も鍛えているが基本的には魔力に頼り過ぎだ」

「レイさんがあまり魔力を使わないのもそうなんですか？」

「まあそんなところだ。俺は魔力っていうか魔法をより銃のがいいし」

銃を撃つあの快感がさ・・・

「さて、今日はこの辺で終いにするか。向こうも終わりそうだし」

向こうで訓練しているのはアリサと麻衣である。
そして、たった今麻衣がアリサに一本を入れた

「いった～～～」

「・・・やった」

「もう！麻衣、少し手加減してよ！」

「手加減しすぎたら訓練にならないよ」

「そうだぞ、アリサ。手加減したら訓練にならん」

「あんたの場合は手加減を全くしないじゃない！」

麻衣はそれなりに合わせて手加減をするがレイはまったく手加減しない。

・・・と思っているらしいが少しは手加減している（本人は）

「手を抜いたら意味ないだろ？それに言うじゃないか・・・そう愛の鞭？」

「／／ば、馬鹿！な、なにが愛の鞭、よッ！」

アリサは照れてその場で彼に飛び膝蹴りを彼にお見舞いしようとしたが彼は軽々と避けた。

「はっはっは。甘い甘い」

「／／～～～～～いくわよ、すずか！」

「あ、待ってよ。アリサちゃん～」

アリサは逃げだした。
すずかはアリサを追いかけたが多分更衣室に向かったんだろう

「ご先祖様意地悪」

「そうか？」

「うん。じゃあ、私もシャワー浴びにいってくる」

「ああ、そうしろ」

ボッ

彼は麻衣がいなくなるのを確認すると煙草を吸い始めた

「・・・ふー。本当、あいつらが自分で選んだとは言え、大人の都合で子供を巻き込むのは気が引けるな」

『・・・・辛いですね』

「・・・慣れているからこそ、辛い」

≪シャワー室≫

「もう、アリサちゃん。なんで、逃げたりしたの？」

「別にいいじゃない・・」

「素直をじゃないんだから～」

すずかはわかっていながらも聞いていた。でも、相変わらず彼女は素直をじゃないことに呆れてもいる

「それにしても・・また赤く染まってるね」

「そう？」

彼女の髪を洗いながら気づいた。彼女の髪は金髪なのだがところどころ赤く染まっている

「また、染める？」

「いい。前までは、親とか学校とかあったから赤くなるたびに染めてたけどもういいわ」

「でも、不思議だよね。“力”を使う度に赤く染まっちゃうんだから」

本当不思議。あいつは後遺症じゃないけど命に別条はないっていってたからいいけど。

「本当。けど、最近は気にいってたりもするのよね」

「ん～アリサちゃんって意外と赤い色が似合ってたりするかも」

「どうして？」

「なんか前世は赤い髪だった気がする」

「はっは。案外そうかもね」

多分、今のように刀を持って空を飛んで・・・戦ってると思っちゃうのよね・・。

ガチャリ

シャワー室のドアが開き誰かが入ってきた

「あ、麻衣」

「お先です」

「うん」

ポヨン♪

彼女が頷くと不思議な効果音が流れた？
きっと気のせいだ。うん。

「「それにしても」」

「・・・どうしたの？」

「大きい」

「そうだね」

「二人も大きいと思うけど？」

「え？」

「そ、そう？」

ポヨン♪×２

「ん～言われてみるとアリサちゃんも麻衣さんと同じくらい・・モミモミ」

「ちょ、ちょっとすずか！」

「そういうすずかもあると思うけど・・・モミモミ」

「きゃ！麻衣さん！もうぉ」

「む、仕返しよ！・・・モミモミ」

互いに向かい合いながら相手の胸を揉み合っている光景はなんとも言えない・・・

※これ、本当に余談だけど、アリサとすずかの大きさは公式だとかなりデカイらしいぜ。
ちなみに麻衣の大きさはシグナムと同等かそれ以上という設定だぜ☆

＊＊＊極秘開発研究施設＊＊＊

先の訓練施設と同じようにここも極秘施設である。
そもそも、本局にはまだ開発途中であり未開発地区もある。
そういった未開発地区に極秘施設があったりするのだが・・・そもそも一般施設ですら非公開な場所がある。なぜ、疑問に思わないのか？
簡単である。誰も不思議と思わないからだ。

大半の局員は『総帥だから』で納得してしまう。
では、そこに属している局員はどうなのか？
大半は一般の局員として登録はされている。だが、それは嘘。フェイクだ。
とりあえず怪しまれぬようの建前である。

で、ただいまここに総帥が訪れてイルノデス

「お～す」

これがトップのあいさつなのだが

『うぃ～す』

部下も部下である。

で、ここがこの研究施設の中枢で多くのモノが画面に向かってカチカチとキーボードの音を立てている。
そして、メインモニターには長い箱・・・ではなく艦が映っている。
しかし、メインモニターに割りこんできた者がいた

『お、旦那じゃねえか！珍しいな』

「おお。ウリバタケじゃねえか。相変わらずのようだな」

『絶好調だ！けど・・久しぶりに人型を弄れるのは嬉しい限りだぜ！』

スパナを持って物凄い嬉しそうな顔をしている。

「整備の方は頼む。アレを整備できるのは人が限られているからな」

『任せろって！だてに、整備班長は名乗ってねえ！』

「あいつにまかせっきりだとどこまで改造されるかわからないぞ」

すると後ろから声が聞え振り向くとそこにはちびっこで金髪で白衣をきた少女がいた。

「よお、レベッカ。相変わらずちっちゃいな」

「ちっちゃいいうな！・・で、今日は何しに来たんだ？」

説明しよう。このちびっこはなんとここの技術開発部部長なのだ！だが、ちびっこと言うと怒るから気をつけろよ

「様子見だ。あいつから報告は受けてはいたがな」

「あいつ？ああ、諜報部の。で、どうだ？実際に見た感想は？」

「・・・形にはなっているが・・」

彼が言っているのはモニターに映っている艦のことだ。彼の言う通り形にはなっているが装甲がまだ完全に張られているわけではなく例えるなら障子が貼られていない襖のようなものだ。

『無茶言うなって。こっちもギリギリの人数でやってんだ』

「その通りだ。技術部、整備班は同時進行で艦だけじゃなく、局内の防衛システムの極秘裏の移行。Ｂシリーズの配備、装備の開発、情報操作、調査などなど。あげるとキリがないんだぞ」

『つまりだ。影でこそこそやるには時間がかかるってことだ。それに、ここは専用の造船所じゃねえからなんとも言えないんだが・・・』

「やるならそれなりの場所、か」

『そういうことになるな』

「憶測で、機能するのにはあと数年ってところか」

「私も同じ意見だ」

「わかった。人手の方はなんとかしよう。それじゃ、またあとでな」

そういうと彼は部屋から出ていった。
彼が出ていっても誰も仕事を止めることはなかった。

＊＊＊総帥の間＊＊＊

「ふー」

彼はタバコをふかしながら書類やデータなどに目を通している。
いわゆる、仕事モードという奴だ。

バサッ

彼は書類をデスクの上に投げると天井を見上げた。

「・・・・マイケルか？」

その部屋に彼以外はいない。しかし、彼はかの諜報部課長の名を呼んだ

「―はい。しかし、今はケニーと名乗っていますが」

「はいはい。で、何のようだ？」

「実は、内部調査をしていた部下から報告がありまして・・・ヒソヒソ」

ケニーは彼の耳元で囁き始めた

「・・・ほう」

「近々会議もあるそうで。で、どうしますか？」

むぅと彼は腕を組んでいるが実際はもうやることなどはっきりしている。

「調査はそのまま継続させろ。ただし、足がつかれないようにな」

「そんなヘマはしませんよ」

「それと、すずかにも内偵させる。すずかには俺から伝えておく」

「よろしいので？」

「問題ない。あいつは“優秀”だ」

「くっく。そうでしたな。では」

気配もなく彼は姿を消した。

「・・・・さてさて。どうなることやら」

彼はこの先の・・・管理局の未来を予想しながら再び仕事に戻った

《簡易新キャラ紹介》

この作品はクロスオーバーだから問題ないの巻

『ウリバタケ』

某戦艦の整備班班長です。あ、ご本人ですよ?
奥さんから逃げだしたところ彼が拾ったそうです。
ちなみに彼のバックには某会社のスケコマシ会長がいます。まあ、
レイのスポンサーの一人なんだけどね☆

『レベッカ宮本』

某漫画の天才ちびっこ先生。
天才なのでレイが勝手に連れてきた。学校？ええ、言ってますよ。
ちなみに彼女のバックには某大学と某学校の校長と宇宙人がいます。
彼らも彼のスポンサーです

第１０１話　管理局は秘密で一杯（後書き）

最初に言っておく

俺はか～な～り、すずかとかを優遇しているからな！

なぜかって

「なんか、この作品の裏ヒロイン化してきたんだよね～」

ハーレム予定だけど、もうすずかＥＮＤでいっか（笑）

あ、冗談ですよ。冗談。

ここで、次回予告みたいなものですが・・

神の世界と魔界を描いた話なるかと思われます。まあ、近々ｓｔｓ編が終わるのは確実なので色々とやっていこうと思っています。

それと、最近更新が遅く申し訳ありません。ちょくちょく書いてはいるのですが中々・・・

では、また次回で

2050

オリキャラ紹介6（前書き）

今回アリサとすずかもありますがネタばれ注意！

オリキャラ紹介6

※注意
今回は一部ネタばれを含んでいる項目がありますので『そんなの関係ないんだよ！』という方はどうぞ。もし『ネタばれ？え、ちょ、無理』という方は飛ばしてお読みください。

≪アリサ・バニングス≫
通称／灼熱の魔剣士
容姿／髪はロングのまま。しかし、ところどころ赤い髪の毛に染まっている
所属／時空管理局
役職／時空管理局総帥秘書・護衛兼特殊部隊隊員（ボディーガード）（非公式）
階級／大佐（総帥の直属の部隊であるため（非公式））
魔方術式／不明
魔術色／真っ赤。ぶっちゃけ炎
魔力値／※リミッター付きでＡ＋
　解除後不明
基本装備／贄殿遮那（日本刀）
稀少能力／『カグヅチの剣』モデル漫画版舞ＨＩＭＥ※１
魔力変換資質？「炎」※２

※１精霊の神が一つ『カグヅチ』から譲り受けた剣。レイが契約していたがアリサに譲渡したためアリサが正式な契約者。剣を介して

『カグヅチ』を召喚することができる。

※2レイも理解していない物であり、魔導師に目覚めたアリサが手にした謎の能力。変換資質とは異なるとレイは解釈している。魔力を解放すると自然にこうボワーって炎が出るため。恐らく炎が魔力そのものだとレイは推測している。そのため魔導師と呼ぶには難しい。

通称灼熱とも言える。発動すると常時身体に炎を纏う。下級魔法なら大抵は燃える。しかし、これは魔力消費せずアリサが自身で止めなければまるでガスのように永遠と噴き出る。
だが、さすがに疲れるらしい。炎でできた翼を纏い空を飛ぶ。（イメージシャナ）

戦闘・使用時間が長いと髪の毛が変色する

≪月村　すずか≫
通称／月光の魔銃士
容姿／A，Sの時と同じ（作者的にドラマCDでのすずかの髪型は嫌いだから）
所属／時空管理局
役職／時空管理局総帥の秘書・特殊部隊隊員（非公式）
階級／大佐（総帥の直属の部隊であるため（非公式））
魔法術式／ミッド式
魔力色／パープル
魔力値／最大でAAA＋
基本装備／ベレッタM93R×2（弾は魔導師相手なら特殊弾※1。その他は実弾）
背中に布で包まれた十字架の形をしたものを装備している（通常時

特殊能力
『超感覚』※２
『転移魔法』※３

バリアジャケットは『ゼロイン』という漫画のみくるが着ている戦闘服

デバイス『ティファ』
すずかのデバイスで待機形態は三日月の形をしている。
能力
主に隠密行動をするすずか専用に様々な装置が備わっている。
『ステルス迷彩』
『変装』
『魔力反射システム』
『小型Ｍフィールド発生装置』
などなど。

※１
特殊弾というのは実弾と違って当たっても死なない弾のことである。でも、当たると痛い。
本当は魔力カートリッジに似たようなもので弾に魔力が込められている。

※２
いわゆる反射の域を超えたモノ。極希に兵士に備わっているもので、無意識的に相手の次の行動が読める。一種の未来予知みたいなものだが少し違うらしい（イメージとしてはガンダムでありがちなＮＴと思ってください）

※３

レイゆずりの転移魔法。主に銃のため転移などで弾を補給したり銃を変えたりする。

≪ウリバタケ≫
所属／総帥直轄技術開発研究所整備班
階級／整備班班長
元所属／本局技術部

レイがスカウトをしてきた優秀なメカニック。かつては、戦艦にもいた経験もあり彼の行っている開発の要でもある。
一応彼の後ろにはレイのスポンサーである『ネルガル』という会社が彼の本当の役職である。会長と知り合いなため、たまに色々頼んでいるらしい。

彼にスカウトされた当時は本局の技術部に所属していたが周りが彼についてこれなかったためレイも『やっぱ無理か』と判断し、移動した。

≪レベッカ宮本≫
所属／総帥直轄技術開発研究所
階級／技術主任

レイが天才だからとスカウトした。本人も面白いからやってるらしい。
しかし、ほとんどは元の世界に戻って教師をしているため向こうで仕事をこなしている。

『さすが天才』

現在行っている研究・開発を指揮しておりそれなりの能力はある。また、彼女のスポンサー（レイのでもあるが）は『ＭＩＴ』と『桃月学園校長』と『宇宙人』である。

余談だがちびっこというと怒る

≪マイケル≫
所属／総帥直轄諜報部
階級／諜報部課長
特技／変装

とある世界の優秀な男だったが色々と知りすぎたため国から追われているところをレイが助けた。

諜報部の癖か、偽名を使うためよくころころと名前が変わる。ちなみに本人は気にいっているそうだ。ちいなみに今は『ケニー』

そんな彼だが、能力は群を抜いており諜報活動から情報収集、潜入捜査、工作などなど。素晴らしい技術を持った男である。
たまに、すずかと仕事をするが一応彼女の能力は認めているらしい。

≪シスターマリア≫
所属／暴力教会シスター
武器／グロック１９

※彼女は魔力を持たない人間である。

暴力教会シスターだが教会の取締役に近い存在である。
過去に因縁があり、それ以来管理局を恨んでいる。
しかし、レイには信頼を寄せている。

裏の世界ではそれなりに顔が効くため自身自ら行動するときもある。

※彼女が出た回でレイとあいゆう会話をしていたが実際は彼の傘下だったりする。

≪重要語句≫

『総帥直属の組織（部隊）』
設立者／レイル・アンヴァルト・Y・神乃
目的／不明
構成人数／不明
拠点／管理局本局や各世界にあらゆる所にあるが大半は使用されていない

特殊部隊
構成員不明。目的不明。ただ、総帥が手掛けた隊員たちが所属している

諜報部
幅広く活動しているレイ自慢の諜報部。今日の隣の家の晩御飯～国家機密まであらゆる情報を集めてくれる。
実際の人数、経歴などはレイにしか知らない。また、諜報部だけに

誰が誰だかわからない。
課長は『マイケル（偽名）』であり、彼を筆頭に日や頑張っている。

技術開発研究所
通称技研。レベッカを主任とし（所長はレイ）幅広く開発を行っている。また、管理局の主な装備はここから出ている。しかし、そのことは一般には知られていない。
レイ自らスカウトした優秀な者たちで『材料があれば核だってつくってやる』がモットー。
最近は忙しいらしい。

技術レベルは玩具から巨大戦艦ぐらいつくれる。
ちなみに、データがあればなんでも作ってみせると自信を持って商品を送り届けます

余談だがブラックボン太くんはここで生まれた

整備班
ウリバタケを筆頭に彼直轄のメカニックたちの集まり。技術部なのに整備班なのはおかしいがただ、たんに彼らが好んで呼んでいるだけである。しかし、技術は他のものたちより数段上である。

『暴力教会』
設立者／とある神父（レイル・アンヴァルト・Y・神乃）
目的
武器の売買・麻薬取引・情報収集などなど。
また、孤児たちを受け持っている
指導者／シスターマリア

構成人数／数百人ほど。半分以上が魔力を持たない者たちで構成されている
拠点／現在はミッドチルダ某所

裏の世界では特に有名な所である。特に、ミッドチルダに拠点を構えているため裏の仕事をしている者には助かっているらしい。

そんな教会だが、いつ設立されたかは不明。そして、ここを設立したのがレイであるということ。理由は彼にしかわからない。

また、構成員の大半は教会に拾われた孤児であったりする。
特に、管理局を嫌っているが理由は不明

≪レイのスポンサー≫
『ネルガル』　『ＭＩＴ』　『桃月学園校長』　『宇宙人』
『海馬コーポレーション』　『２１世紀警備保障』　『プラント』
『オーブ』
『地球連邦政府』　『ＣＢ』　『ジャンク屋組合』　『ラグーン商会』
『ホテル・モスクワ』　『大帝国劇場』　『セレブラント』　『早乙女研究所』
『ネルフ』　『香月博士』　『夜明けの船』　『宇宙警察』　『ミスリル』
『紳士の会』　などなど（作者が思いつく限り増える予定）

オリキャラ紹介6（後書き）

今回でオリキャラ紹介は最後の予定です。
新章に入るにつれキャラクター紹介をまとめたものをかこうと思っていますので、もしできたら今後はそこに描き足していくつもりだです。

それと、スポンサーと書きましたが私が思いつく限りなので、今後とも増えます。
増えると何かが起きるかもよ！（嘘

あと、予定ですがあと5話以内でｓｔｓ編が完結するだろうと思っています。
では、また次回で

第１０２話　神と魔（前書き）

どうも。
やはり、皆さんお怒りのようです。あの石原さっさと死ね。

とまあ、それは置いておいて、今回は速く更新ができました。内容は神の世界と魔界のお話になります。

これを書くのにかなりの時間がかかりましたがなんとか完成。
では、どうぞ

第１０２話　神と魔

＊＊＊神の世界＊＊＊

彼は今、神の世界へ来ていた。
いや、来させられた。と言うべきか。彼の手は手錠みたいので拘束されている。

今、ここでは裁判が行われていた。

『では、愛の代行者レイよ。貴様は、数年この世界において必要のない武力介入、戦争行為、殺人・・・これはすべて代行者の行動に反するものである』

『そもそも代行者とは、我らの目である。その世界へ赴きその世界を監査する。その世界をどうすべきか。それは我らにある。けして、お前が判断すべきことではない』

「・・・」

『だんまりか』

彼がここに立たされているのは彼が、“カオス”としてやってきた行動を裁判しているのだ

『貴様は、自分を過信し過ぎている。我々は、貴様にそこまでの自由を与えたわけではない』

「なら・・・」

初めて彼が口を開いた

「なら、どうして俺を代行者として選んだ。俺はお前たちからみれば異質すぎると思うが？」

『我々が代行者を選ぶ時の条件は三つ。
一つ。力を持っていること
二つ。人として特質している者
三つ。我らに相応しい人間であるか。貴様は三つ目を覗いては素晴らしい程の力を持っている。』

それは矛盾していた。

『貴様は、我らが選んだ“最初の人間”だ。それなりに愛着もある。それに、功績もある』

俺は玩具か・・・

『だが、今回の件。貴様はやり過ぎだ。確かに、貴様の行いで救われた人間もいるだろう。しかし、それでは困るのだ。貴様が世界を管理しているように、我々は貴様らを管理しているのだ』

俺は前々から考えていたことがある。それは、目の前にいる“神”という存在についてだ。

確かに、神はいるのだろうと俺も思っていた。それは、不確かなものだが神という存在はいたと過去から未来へと語り継がれてきたのだ。もしくは、架空の存在とも受け止めてもいた。

よく、誰かが言う。神を信じれば、とかなんとか。

けど、俺は思う。神は居たって何もしてはくれない。ただ、見ているだけだ。

神は気まぐれだ。

現に今の発言がそうだろう。“管理している”どうでもいいくせにだ。別に、この世界はこいつらがいなくても時間は進むし、人は自分の意志で動いている。

『人は愚かだ。故に、我々が導かねばならん』

「・・・・」

『もう、話すことはあるまい。判決を言い渡す。貴様にある、代行者としての権限を一時剥奪。しばらく、頭を冷やすことだな』

≪レイ・フィリーヤ≫

解放されたレイはフィリーヤと一緒に歩いていた。

「迷惑をかけたな」

「あら、あなたからそんな台詞が出るなんて。明日は雨かしら？」

この世界に明日も、雨もないだろうにと心で突っ込んだ。
しかし、彼もこの世界での彼女の役割はわかっているつもりだ。だから、とりあえず謝罪した。

「それに・・・あなたがやったことは正しいと思っている。確かに、代行者は必要だと思うわ。私たちの代わりに目となって世界をみる。そして、行動する。けど・・・」

「それを判断するかどうか。か？」

彼女は無言で頷いた。
例えば街が襲われているとしよう。それを代行者を通じて神たちはそれを助けるか、助けないかを決める。助けるとは限らない。
それがフィリーヤが気にいらないことだった。

「あなたは、正しい。間違っているのは私たちなのよ。そうやって、ゲームみたいに物事を決めるのは『もう、その辺にしとけ』・・・わかってる」

例え、同じ神同士でもそんなことを言えば反逆行為とみなされてしまう。

レイはそれに気づき彼女を止めた

「で、最近どうなの？」

「まあ・・・ぼちぼち」

レイは先日の件をあえて話さなかった。

彼女も彼の復讐の相手『黒装束』のことは知っている。ただ、レイは話さなかった。

「麻衣ちゃんもなんか元気みたいだけど、一緒に暮らしているの？」

「ん？ああ、向こうとこっちを行ききするのは面倒だから局の居住区画に住んでるよ。まあ、俺の娘と同棲してる」

ちなみに、向こうと言うのはレイと麻衣の故郷で、こっちがなのはたち（ミッドチルダ）である。

「そうなの？そういえばあなた家建てるって言ってなかった？」

「建てるよ。ただ、今忙しくてな。それに、家族が増えてからにしようと思ってる」

ちなみに予定はグラナガンの郊外を予定しています。

「あら、また増えるの？」

「予定だと二人、かな。さすがに全員は無理」

「はは。大家族ってレベルじゃないわよね」

「既に8人だからなぁ（笑）」

「あなたも不思議な人よね～。なんで、そんなに家族にしようって思うのかしら？

アリシアちゃんはわかるけど・・・そこから大家族に発展だもんね」

アリシアは確かにプレシアから託された。そこから彼は彼女達を何故か養子にしていった。

そして、家族になった。

「俺はさ、家族っていうのをどこかで求めていたんだよ」

「家族を？」

「俺には家族がいなかったからな」

「あ・・・うん。そうだったわね」

フィリーヤも彼から聞いただけだが彼の本当の家族は皆この世にはいないのだ。

「そう言えば私も・・・似たようなものね」

「そうか？神だって子供を・・つくってないか？」

神に対して子供をつくるというのは変だが人とは違う生まれ方をするのであえてそう言った

「まあ・・・私たちってなんだかんだで一人なのよね。だから・・ちょっと前までのあなたと一緒よ」

「ちょっと前までの俺、か。確かにそうかもな」

ちょっと前。

それは俺にとっては何百年前という年月だ。フィリーヤと会うめでは俺は戦い続けた。

友はいた。仲間もいた。だが、最後に残るのはいつも俺だった。

だから、俺はある意味一人だった。

彼女も同じで、父親と呼べる存在はいる。しかし、彼女もまた一人なのだと。

「似てるな。俺たち」

「ふふ。そうね。ねえ、私たちってなんなのかしらね？」

「急だな・・でも、言い例えるなら、主と僕、または男か女。だが、俺はお前も“家族”だと思っている」

「え？」

「血が繋がっているから家族じゃない。俺は、お前を信頼している。なんていうかファミリー。かな」

家族もファミリーも同じ意味だ。

でも、俺は彼女も俺たちの家族だと思う。

「そっか。家族か。なんだか嬉しい」

「そうか」

彼女は笑顔だった。

俺もどこか嬉しかった。

もう一度言うが、俺は家族を求めていた。“俺の家族”を。
それは、誰かを求めているとかそんなものではない。
いや、もしかしたら求めているのではなく“なりたい”と思っていたのかもしれない。
そんなことを俺は今も考え続けている。

そんな時。俺たちの前に三人の“女神”が現れた。

「あら、レイさん。お久しぶりですね。フィリーヤもこんにちは」
「やあ、ベルダンディーにウルド。それとスクルド」

過去・現在・未来をつかさどる女神。
この『神の世界』も色々あって、彼女達三人は『お助け女神事務所』という所に所属している。

「なにが“それと”よ！」
「はぁい♪色男さん。色々大変だったわね～」
「そうよそうよ！代行者の権利をはく奪されたんでしょう！？」
「まあな。ていうか、別にあってもなくてもどっちでもいいんだけ

ど」

「そう言っちゃうっと何も言えないわね。あなたの場合、その言葉の通り、関係ないから」

「自業自得よ！人間の癖にあれこれやりすぎるか、らぁぁあああ！」

レイはちょっと悪戯したくなってスクルドの頬を引っ張った。

「うるせえよ。そういえばベルダンディー。螢一とは最近どうだ？」

「え／／その・・普通ですよ」

「ああ、あまり進展してないと」

「けど、この子にとってはそれが一番の幸せだもんね～」

「ね、姉さん！」

「三人とも元気ね～。羨ましいわ」

「そういえば、“フィリーヤ”。あんたペナルティとかないの？」

スクルドは普通のように『フィリーヤ』と呼んだ。彼女の本当の名は『アフロディーテ』だが、やはり女同士だからか。そこんところをわかっているのだろう。

「ないわけじゃないけど、別に気にすることでもないし」

「ふ～ん。あなたがそう言うんだったらそうなんだろうけど」

「まあ、心配しなくても大丈夫よ。どう？このあとお茶でも？」

三人は賛成だったがレイは断った。
なんでも、よることころがあるとかないとかで。

「それじゃあ、また」

「バイバ～イ」

ちなみに、今回は肉体ごと来ていたので彼は妙な光となって下へと堕ちていった

≪神々たち≫

レイの裁判が終わると一部の神たちは集まっていた。

「しかし、奴には困ったものだ」

「ああ。勝手なことをしてくれる。そのおかげでその世界の歴史が変わってしまうのだから」

世界はいくつもあり、異なる時間を進んでいる。そんな一つの世界のあるべき歴史が彼の手によって変わってしまうことが気に食わなかった。

「なにより、我々の楽しみがなくなってしまう」

もし、こんな台詞をあのゼウスが聞いたら彼らは亡き者にされてしまうのだろう。

しかし、何が悪い。人々は我々を求めている。ある者は救いの手を。ある者は幸福を。

だが、あんな下等生物の言うことを何故聞かねばならぬのか。

例えるなら彼らはチェスや将棋と言った駒。我々の娯楽。我々が楽しむために存在しているのだ。

ただ、そんなことを考えている半面。我々は思う。彼はそれほどまでにいなければならない存在なのか。

人間は愚かだ。罪だ。

だから、生きていていい存在なのかと思い始めていた。

「そういえば・・例の報告のあった人間ども。なんて言ったか」

「確か・・黄金の夜明け団という集団では？」

「そうだ。そういう名前だった。私は奴らの理念に賛成したくなってきたよ」

「しかし、人にそれができるか？神である我々とて、それは犯してはならない領域」

「なに、やってみせるさ。言うじゃないか。人は時に神をも超える存在だと」

「そんなことはありえんがな」

「そう、ありえない。しかし、この世はそういうことができてしまう世界なのさ」

＊＊＊＊魔界＊＊＊＊

魔界。

我々がそれを聞くと想像するのは暗くて、いつも雷雲で、魔獣がいて、森があって、いわゆる魔王の塔とか城とかそんなような場所を想像すると思う。

まあ、神の世界の逆だと思えば簡単だ。

ちなみに、ここの魔界はそんなところだ。

レイは、神の世界のあとここに寄っていた。理由はなんとなく。
そして、彼はこの魔界で一番偉い人と喋っていた

「ふ～ん。代行者じゃないんだ。いいじゃない、別に」

「まあな。で、聞きたいんだが夜明け団と契約している奴らはどのくらいるんだ。ヒルド？」

ヒルド。
この魔界のトップであり、レイの・・・・一応魔界側で契約している悪魔？の一人である。

「ん～普通は言っちゃいけないんだけど私はあなたにぞっこんだから教えてあ・げ・る？」

「はいはい。で、どのくらいだ？」

「もうぉ、つれないわね。―そうね。魔獣ならざっと１０数人。悪魔でいうなら数人。
ちなみに、ルシファー（サタン）とケルベロスは向こう側。正直に言って向こうの契約者は皆即席よ。使ったら捨てて、また使っての繰り返し」

おそらく、仮契約なもんか。人にではなく組織に使えるみたいな感じだな

「そうか・・・ふむふむ」

「ところで！」

「？」

「いつになったら私を召喚してくれるのかしら？」

「・・・だって、召喚したらお前、その世界が終るし」

「ぎく」

「それに、対価はどうするんだよ？」

「それはアフターサービスで無料に」

「そもそも、お前を召喚することなんて滅多にない・・相手が神じゃない限りな」

「まあね～」

彼女、ヒルドは大魔界長と呼ばれている存在だ。彼女の力は強大だ。レイ自身も戦えば自分が負けると判断している。神とならそれなりに戦える。

この差は至って簡単。魔界のものたちは破壊といった感情が強く手加減などしない。
逆に神は簡単に命を奪うことをしない。つまり手加減するからだ。

「なあ、もし。もしだ。神を殺してくれと願ったらお前は叶えてくれるか？」

俺は今きっとどんでもないことを言ったんだと思う。

「・・・・」

彼女は少しの間沈黙していたがすぐに口を開いた。

「あなたが望むなら。ただし、代償は大きいわよ」

彼女は深く静かに忠告した。そう、忠告したのだ。

「わかってるよ・・・。なあ、ヒルド」

「なに？」

「俺はこの先、どうなると思う？」

それは弱音なのかもしれない。いや、再認識したかったかもしれない。

「わかってて聞く？ていうかわかってるか。そうね。
・・・あなたはきっと戦ってるわ」

「そうか、そうだよな」

俺は微笑した。俺だってわかってて聞いた。
けど、誰かに聞いてみると『ああ、やっぱり』と思ってしまった

―俺が戦っていないことなどないのだと―

ＥＮＤ

第１０２話　神と魔（後書き）

前回に、あと何話で終了と報告していましたがネタがなかったため次回六課解散のお話になります。

普通ならレイと皆が模擬戦なんでしょうがその予定はないです。なんていうか次章の予告というかエピローグみたいな所に力を入れたちと思っているので。

では、また次回で

第１０３話　六課解散そして次なる物語へ（前書き）

はい。というわけで六課解散です。
どちらかというとそのあとが大事なんですけどね。

それと新連載と先日活動報告にかきましたがただいま順調に考案中です。

それでは、どうぞ！

第１０３話　六課解散そして次なる物語へ

＊＊＊新暦００７６　４月＊＊＊＊
≪機動六課　メインホール≫

年が明け、数か月。まだ、寒さは残るものの太陽の光に暖かさを感じる季節となった。
４月。それは、桜が咲く季節。
４月。それは、出会いと別れの季節。

それは、彼女たち六課の者たちも同じだ。
機動六課の試験運用期間は１年間。
今日機動六課は解散の日を迎えたのだ。
彼女達は、ここで様々な体験をし、経験を得た。

辛かった。大変だった。傷ついた。失敗もした。たくさん涙を流した。
けど―最高の一年だった。

そして、機動六課では解散式を迎えていた。
丁度、部隊長であるはやてが祝辞とも言える言葉を述べていた

「今日で、この機動六課は解散です。この1年間色んなことがありました。
けど、それは皆にとって大切な、貴重な経験となったはずです・・・・」

はやては、この一年間を思い返していた。
自分の部隊を持ちたちと思ったあの日から今日まで。ある意味、私の目標?夢?が叶った。
けど、それも今日で終いや。

「そして、最後に。これで、皆それぞれの場所へ戻っていく。もしかしたらっていっても大半が同じとこで働いているから会うこともあるんだと思う。
私は、この機動六課は最高の部隊でした。私はそれを、皆を誇りに思っています。
一年、　ありがとう」

「敬礼!」

ザッ

「では、続いて総帥に一言っといきたいところですが・・・その総帥がいないので飛ばします。続いて・・・」

予定では総帥から一言貰う予定であったがその本人が姿を暗ました。

まあ、彼を知る者は皆

『逃げた』

と思っている。

ちなみに、麻衣もさりげなく姿を暗ましていた。

そして、さほど時間はかからず解散式は終了した

≪トレーニングスペース≫

解散式が終わった後スバルたちはトレーニングスペースへと訪れていた。

来て驚いたのはあたり一面の桜。

正直、これは実物ではないがそれでも本物とあまり区別はできなかった。

そして、隊長陣も揃い彼女達に告げられたのは

『全力全開！手加減なし！六課最後の模擬戦だよ！』

といきなり告げられたのだ！

ただ一人フェイトを除いて。

まあ、そんなフェイトは放っておいて話は進み皆戦闘態勢。

なんだかんだでフェイトもやる気まんまんだったりする。
ちなみに、はやては不参加。
そして、今まさに始まろうとしたときだった

「お前ら、最後だってのに物騒だな」

彼女達は一斉に声の方に顔を向けた。
そこには、シートを敷きその上には重箱らしきものがずらりと並んでいた。
いわゆる花見をしていたのだ。
彼と彼の娘たちは。

「「「「「れ、レイくん！！！（兄さん）（兄）（殿）（さん）（総帥）（・・・）」」」」」

「本当にそうですね。あ、レイさん。どうぞ♪」

「ああ、すまないな。すずか」

レイの隣に座っているのはすずかで彼女はレイにお酌をしていた。
まあ、周りからみればどうみても馬鹿プルにしか見えんが。
逆に、反対側ではアリサは料理を食べていた。ちゃっかしレイに食べさせていたのは秘密だ。例の『あ～ん』で。

「なにやっとるん？」

「家族サービス！」

「いや、ただの花見ですよね？」

「いいがかりはよしてくれよ」

「あ、ギン姉も来てたんだ」

「あら、スバル。私も総帥に呼ばれてね」

嘘かもしれないけど、本当にレイさんに呼ばれたんですよ。仕事を放棄して。テヘ♪

「もぐもぐ！ん～おいしい！やっぱり兄ちゃんの作る料理はおいしいね。ね、風もそう思うでしょ？」

「ヒヒーン（僕もそう思うよ。特にこのニンジン。無農薬だし最高だね！）」

「まったく、お前はもっと落ちついて食べられないのか？」

そう言いながらも闇樹は雷華の口元についているご飯粒をとってあげている。

いやぁーお姉さんだね

「銀、サンドウィッチをとっていただけますか？」

「ああ・・・お前、食べながら本を読むな」

「なにを言っているのですか？サンドウィッチとは片手で本を読みながら食べるために存在しているのです」

「はあ」

やれやれ。と溜息をつく銀。
彼女は彼女なりに苦労しているようだ。

「フェイト、あなたも一緒にどうですか？」

「レイの作る料理はおいしいよ」

「え、あ、その」

フェイトは未だに混乱したためどうしたらいいかわからないでいた。

「もう！とにかく模擬戦するからどいて！怪我しても知らないからね！」

「別に、当たらないし。なー」

『『『ねー』』』

『ブチ』

おやおや。これはさすがに皆さんお怒りのご様子。

「もう知らない！」

なのはは「皆いこ！」と言い、彼女達もそれに続いていきました。
レイたちが宴会をしている場所から少し離れた場所で模擬戦をすることにしたそうです。

しかし―事件は起きてしまいました。

「クロスファイヤー・・・シュートッ！」

ティアナちゃんの放った無数の魔力弾が隊長陣に跳んでいったのですが・・・その一つをあの赤い小さな女の子。ヴィータちゃんがお得意のハンマーで“弾いて”しまったのです。

「おら！」

そのままどこかへいくと思ったらさあ大変。
今度はエリオくんの方へ飛んでいき・・・

「うわわわ！」

ブン！

バットのようにストラーダを振りまあ、いいとこでヒットでしょうか。そのままどこかへと跳んでいくと思いきや

「甘い！」

シグナムさん。あなた剣をそんな風に振っちゃダメでしょうが。
と言いたいばかりに斬るのではなくハタいてしまったのです。

「わ！なんか来た！」

そして、今度はスバルくんへ。何故か彼女は拳ではなく蹴りで魔力弾を撃ち返してしまい・・・

「え、ええと・・・えい！」

あのドクターも絶賛の『フェイトホームラン』を見事に決めた我らがフェイトたん。
そして、そのままキャロちゃんのとこに跳んでいき・・・

「ふ、フリード！」

「きゅる！」

彼女自身ではなくフリードにやらせたキャロちゃん。フリードは火炎弾を・・放った！！！
そのまま魔力弾と相殺するかに思えたと思ったら！！

なんとそのまま魔力弾を呑みこみそのまま最後の一人一高町なのはのもとへ・・・

キラーン☆

何故か、彼女の目が光って効果音がなった

『ふふ、私の出番のようね！』

（ちょ、ちょっとクイーン！）

おおっと！クイーンがなのはの身体を乗っ取ったぞ！

ゴォォォォX！！！

そして、火の球がなのはに迫る

キュピーン☆

『見切った！』

ブン！

カキーン！

なにが見切ったのか知りませんが見事撃ち返しました。２アウトランナー１塁２塁。逆転サヨナラホームランです！

まあ、レイジングハートをバットにしましたけど。

そして、そのまま火の球は飛んで行きました

レイたちの・・宴会の場所へ

ひゅ～～～～どっかーーーーーーん！！！！

「「「「「「「ウェ？！！！？？」」」」」」」

するとどうだろう。
いくら最新の立体映像だとしても・・こうも桜が炎上しているのは何とも言えない。

そして・・・

＼デデーン／

そして、今なお燃えている桜並木から人影が現れた

だんだん彼らが近づく音が聞こえてくる。
しかし、彼女達にとってその音はまさに死を宣告するカウントダウンだった・
姿を現した彼らは一言で言えば黒焦げだ。服はところどころ燃え、彼女達の綺麗な髪は黒くなってしまっていた。

なのは達はこの時、思った。いや、誰もが同じことを思った。

『当たらないって言ったじゃん！！』

「ああ、わかってる。俺は冷静だ。クールだ」

いきなりわけのわからないことを言いだしたレイ。

「だから・・・テメェら全員地獄逝きだ・・・」

「ねえ、レイ。やっていいよね」

「そうだよ」

「料理をこんなにしてくれちゃって」

「さらに、私たちもこんな黒焦げで・・・」

「フェイト・・・あなたにはがっかりよ」

「スバル・・・お仕置きね」

「塵芥の分際で・・・」

「死あるのみ・・・」

「・・・あんたたち覚悟はいいわね」

「流石の私も・・これぱっかりは・・・ね、良いですよね？“総帥”」

「ああ、殺っちまえ」

『いや～～～～～～～～～～！！！！！』

その後は語るも涙。聞くも涙のお話でございます。
なのは達に向け、撃ったり斬ったり。それはもう地獄絵図そのものです。
ただ、アリサもすずかも何故か刀とか銃とかをおっとこれはまだ先のお話でした。
とまあ、治まったのはそれから３０分後のことです。

ま、これもいい思い出になったということで。

彼女達はこれからは自分の目標に向かって歩いていく。
そして、彼らは・・・

＊＊＊＊海上隔離施設＊＊＊＊

「釈放おめでとう」

「もう、よしてください。兄上」

「・・・・」

今日やっとナンバーズたちの更生プログラムが終わり解放された。
レイは新しい家族を向かい入れるためにやってきた。

「どうだ。久しぶりの外は」

「あまり変わらない」

「セッテ、姉としてはもっと気のきいたことを言ってほしいものだ」

「はは。しかしな、チンク。お前は下から2番目でセッテは一番しただぞ？」

『『！！』』

「まあ、あいつらのことだ。仲良くしてくれる」

「そうそう、セッテ。最初に言おうと思ってたんだがな」

「？」

「ヘッドギアがない方がお前可愛いぞ」

「／／／馬鹿！」

「ほう、お前もそういう顔ができるんだな。姉としては嬉しいぞ」

「ち、チンク！」

「ははっは。さて、チンク、セッテ。今日からお前たちは家族で俺が父親だ。だから、父さんと呼べ」

「え、あのその・・・ちちちち！！！」

「呼べるか」

「・・・だって、あいつら一人も俺の事父さんって呼んでくれないんだもん」

妙に子供みたいに拗ねているのがウザい。

「さあレッツお父さんと呼んでみろ！」

「・・・その、父上・・でもいいですか？」

チンクは照れながら言うがそれがまた可愛い。

「ああ、いいぞ。さ、セッテも！」

「・お・・・とう・・さん」

「ん?ん?」

彼はワザとしている。それはチンクにもわかった。

「・・・お父さん・・・」

セッテはチンク以上に照れていたがそれがまたキュートだった。

「もう一回」

「・・お父さん」

「もう一回」

「お父さん!」

「なんだ、セッテ」

「え?あ・・・馬鹿!」

「くくく」

セッテはあまりに照れていたせいではめられたことに気づかなかった。

「さあ、いこうか。皆が家族が待っている」

「はい、父上」

「うん。お父さん」

三人には笑顔が溢れていた。
例え血が繋がっていなくても本当に親子のように思えた。

≪ギンガ・スバル≫

「どう？湾岸特別救助隊は」

「うん。なんていうか・・やりがいある。かな？」

ギンガとスバルは互いの休暇を合わせ久しぶりに姉妹水入らずのお買いもの。

「そう。でも誰かを助けたい。そういうあなたの目標、夢が叶ったんだもの。
頑張りなさい」

「うん。ところで、ギン姉は最近どう？」

「え・・・うん。いつも通かな。そんなに事件とかあまり起きないし、事務仕事ばっかり」

「・・・そうかな？」

「どうして？」

「いや、そのなんだかギン姉・・・変わった？」

「う～ん。ちょと胸が大きくなったかな（笑）」

「え！！それ本当！？」

「ふふ。どうかしら？」

スバルはジト目でギンガの胸を凝視している。

なにをやっているのだろうね、まったく。

「・・・ごめんね」

「え、なにか言った？」

「ううん、なにも」

この時、ギンガはとても切ない顔をしていた。悲しみとは違う。後悔とも違う。
スバルはそのことに気づいていなかった。
そして、彼女が自分とは遠い場所にいるということを知らなかった。

（ごめんね。スバル。私はもう、あなたたちと一緒にはいられないの）

ギンガは心の中でたった一人の妹に謝っていた。

≪アリシア・フェイト≫

「ねえ、フェイト」

「なに、“姉さん”」

あの、事件以来。フェイトはアリシアを姉さんと呼べるようになった。
最初は戸惑ったものの、今では普通に言えるようになった。

「今度、お墓参りいかない？」

「え・・・それって母さんの？」

「うん」

「でも、お墓なんて」

「実はね。レイが建ててたんだ。形だけだけど、それが大事なんだってレイが言ってた」

「うん。いこう！リニスも、それに兄さんも一緒に」

「ええ。そうね。そうしましょう」

フェイトはとても喜んでいた。私も嬉しかった。

けど、私は覚悟もしていた。

（フェイト、きっとそれがあなたと一緒にいられる最後の時間かもしれないから）

≪某所≫

その部屋には大勢の者たちが集まっていた。

暗くモニターの光が彼らを照らしていた。

そこで、彼らは何やら怪しいことを企てているようだ。

「やはり、このままでいかん！」

「そうだ！これではただの私物化だ！」

「管理局の運営からすべてあの男の手によって動いている。人も、物資も金も！」

「最早、これは管理ではない。支配だ」

「そうとも。あの男は自分が神だと思っている。管理局も世界もだ！そして、自分の思う通りに事を進める！」

「しかし、民衆は彼を崇め、英雄と称している」

「過去の出来事をまだ棚に上げるか。そもそも年をとらない―不老不死というのがいかんのだ。まさに永久支配だ」

「それだけはあってはならない。世界を管理するのは同じ人間である我らがしなければならないこと」

「奴は人ではない。化け物だ」

怒号とも呼べるそれを先から言い放つ彼ら。

「待て、落ちつこう。そして、話を戻そう。
そもそも管理局が使用している航行艦、物資、機材などなど。約７割が不明でありしかもこれを管理しているのがあの男だ。どこから紛れ、どこから持ってきたかもわからないモノを今こうして我々は使っている」

「しかし、不憫はない。不満もない」

「だが、恐怖する」

「そして、もっとも謎なのが本局だ。今こうしていなければ我々も知らなかったままでいられた。だが、事実知った。本局には謎の区画、設備、局員までも一部謎に包まれている」

「また、そこに当てられる使途不明金。人材。資材。そもそもあの男には謎が多すぎる」

「本当に管理が目的なのか。ロストロギアの保護管理なのか。曖昧すぎる」

「ロストロギアについても危険だ。本局に管理されてるが故、なにが起きるかわからない」

議論は続く。彼らも気づかない内に同じことを繰り返し始める。

だが・・

「やはり、起こすしかない」

「そうだ」

「そのために我々はこうして募った。あとは、あなた方が力を貸していただけるのならより完成度が増します」

彼らの目は中央に座る三人に向けられた。

そして、そのうちの人が口を開いた。

「もし、行ったとしてその後はどうする気だ?約7割もあの方が占めているのだ。それがなくなればパニックで済まされん」

「ご安心を。その点については随時解決中です。特に兵器関連についてはカレドヴルフ・テクニクス社と極秘裏に契約を結んでいます。また、信用に長ける企業と随時契約を行っています」

「・・・・」

「だが、肝心なことが一つある」

「それは、彼が消えた後、誰が立つかだ」

「それも解決済みです。候補としてはあなた方のうち一人がなっていただく。
また、こちらで選抜した有能な者を祭り上げるか」

「その者はそれほどに?」

「ええ、優秀です。いえ、優秀すぎるほど」

「だが、民衆がそれを納得するかどうか」

「それは一番簡単ですよ。辞任したと言えば簡単です。もしくは死亡したか」

「「「・・・・・」」」

そして、間もなくして会議は終わった。

≪？？？≫

会議を終えたが私はまだ、会議室に残っていた。
これほど、ここの闇が深いと思ったのは初めてだ。
多分、彼が私やあの二人がこちら側にいると知ったらどう思うだろうか。

「提督」

「なにか？」

「いえ、この後面会が控えているのですが」

私の副官とも言える女性局員が丁寧に教えてくれた。

「ああ、いこうか」

会議室を出て、指定された部屋へとゆく二人。
そして、部屋に入ると室内は暗かった。

「あらまだ、誰も」

そう言った瞬間部屋に明かりが灯される。

「！！！」

「よお」

なぜ、彼がここにる。

私はふと後ろを振り向いた。そこには私の副官ではない者が立っていた。

「無駄な抵抗はやめてください。提督。私はあなたにこの引き金を引きたくありません」

「あなた・・・」

「なにやら面白いことをしているみたいだな」

「・・・」

だが、私は口を開かない。

「別にお前はどうこうするってわけじゃないさ。ただ、お前たちのシナリオに手を加えたくてな」

「なぜ？」

「俺にとって都合がいいからさ」

「・・・」

「さあ、話を始めよう」

≪？？？≫

「皆の者、こんにちは」

『こんにちは！』

「今日諸君に集まって貰ったのはあることを伝えるためじゃ。それは、我らの悲願が叶う時が近づいているということじゃ」

『おおおおおおおお！！！』

老人は手を振り静粛にと伝える。

「それは、あと数年で始まる。我らが計画。我らが夢。

こちらもそのために準備をしていきた。そして、私はいや、私たちは迎えにいかなければならない」

「彼を。“裏切り者アンヴァルト”を！」

その時、怒号が飛び交う。

「いや、もうその名で呼ぶのはやめよう。
我らの婿“レイル・アンヴァルト・Ｙ・神乃”を！」

『おおおおおお！！！！』

「そして、紹介しよう！
我らが花嫁“アメリア・クロウリー”！」

『おおおおお

「さあ、舞台は整いつつある。お前はどうしている？エバ」

≪？？？≫

『幸福と呼べた時間はもう終わる』

「いや、そんな時間事態あったのか」

『あったわ。少なくともあなたと過ごした日々は』

「そうか」

『戦いが始まる。すべてを巻き込み、他人を巻き込み、大切な人を巻き込みあなたは人々から疎まれ、憎まれ、蔑まれる。世界もあなたを拒絶するかもしれない』

「今さらなにを。俺はとっくに覚悟はすませてある」

『そう・・・ありがとう』

場所は移り

そこはとある部屋の一室。そこには一人の男と、１２人の乙女がいた。

「俺たちは戦うことになるだろう。敵。それは、人、化け物、魔導師、魔術師、そして―友人と。それでもお前たちにはその覚悟があるか？」

その問いに対して、紫色の髪の毛をした女が答えた。

「無論、あります。そのために私たちは訓練し、戦い、あなたについてきた。
もう、覚悟はできてますよ。そんなに、心配しなくても私たちは自分で決めましたから」

「・・そうか」

「もう、迷うことなんてないわよ」

「ええ、そうです」

「だから」

「そうだな」

「だって、私たちは家族（ファミリー）でしょ？」

そうだ。俺たちは家族だ。

「家族は裏切らない。裏切らないことは守ること。

俺たちはけして裏切らない。そして、守る」

「そう、守る。皆を。世界を」

「大切な友達も」

「例え、その行いがいけないことだったしても、誰かに否定されても」

「私たちは守る」

「そして、俺も終わらせなければならない。
だから、待っていろ。戦いは―」

―もうすぐだ―

第１０３話　六課解散そして次なる物語へ（後書き）

てなわけで次回は新章突入って話にならないんですよね・・・

なんで作ったかがわからないんですけど、・・なんとデートのお話。

一回ぐらいこういう話ないとなと思って書いています。

まあ、六課解散の前にしたかったんだけどなんか合わないんで。

さてさて、後半は色々と次章への伏線ばっか。

提督は一体誰なのか。一体この世界はどうなってしまうのか。

そして、レイは何をしようとしているのか。

かんばって完結できるようこれからも頑張りたいと思います

第１０３．５話　初デート？（前書き）

なんとかクリスマスに間に合わせた。
でも、内容にクリスマス要素はあまりないんですが・・・。

ただ、書いてて虚しくなりました・・・

第１０３．５話　初デート？

ＡＭ　９：３０
＊＊＊グラナガン中央駅　噴水前＊＊＊

ここ、グランガン中央駅前にある噴水で一人の女性がたっていた。
彼女の名前は、高町なのは。
言わずと知れたエース・オブ・エース。
彼女の知名度は局内だけではなく世間一般でも知れ渡っている。特に先の事件でマスコミがどういう経緯で知ったかはしらないが彼女の名が挙がり今まで以上に有名人になっていた。

そんな彼女はある人を待っている。
わざわざ有給まで使ってこの日をどれほど待ち望んだことか。
なのはがここに来てから数分後やっと彼がやってきた。

「おー待ったか、なのは？」

「う、ううん。私もさっき来たばかりだよ」

彼が待っていたのは、なのは以上の有名人である―時空管理局総帥
レイル・アンヴァルト・Ｙ・神乃である。

「そうか。ならいくか」

「うん！！」

二人は肩を並べて歩き出した。
ここまできたら否が応でもわかるだろう。

二人は今―『デートをしてるんだよぉぉぉぉぉ！！！』

なぜ、二人がデートをしているのか。それには少し時を遡らなければならない。

≪六課解散前≫

それは、六課の試験運用期間がもう少しで1年を迎えようとしていた時だった。
その時、レイとなのは一緒に散歩をしていたのだ。
もちろん、誘ったのはなのはだ。
なのはは、いつ、どのタイミングで言おうか思考錯誤していたのだが、彼女は思い切って言ったのだ。

「れ、レイくん！！！」

「ん？」

「わ、わたしと・・」

「うん」

「私とデートしてください！！！」

「え？別にいいぞ」

と、あっさりと承諾。

なのはは、あとであんなに緊張してたのが馬鹿らしくなった。と言っていた。

しかし、実際は彼の都合やら、なのはの六課解散前、後の手続きがありデートは解散前にはできず、こうして解散後になってしまったわけだ。

―そして、現在

「にしても、お前の私服姿久しぶりにみるな」

「え、そうかな？」

今日のなのはの服装は、白いワンピースにいつものサイドポニーではなく髪をおろしている。

そして、彼女には似合わないサングラスをしている。

「なんていうか、大半が学生服のイメージが強い」

「あ、まあそうだよね・・」

なのはもその意味がわかった。多分、周りの人曰く、私は彼との付き合いが長いと思われているかもしれないが実際は違う。どちらかと言えば離ればなれだった時間が長い。
だから、彼が私の私服姿をみて懐かしいといったのだ。

「けど、私もレイくんのその格好。初めて見たよ」

「ん？ああ、そうだな」

今の彼の服装はいつもの黒いコートではない。彼には珍しくおしゃれをしているようなものだ。ちゃっかし、ネクタイだってしている。
そして、彼もサングラスをしている。
言うまでもないが一応変装しているつもりらしい。

「しかし、なんで今日は髪をおろしたんだ？」

「えーと『別にいいじゃない。細かいことは言わないの』・・だって」

「ああ、クイーンか」

通称『なのはの本当の姿』こと、クイーン。

今ではレイもその奇怪現象には慣れている。

「さて、とりあえずどこからいく？」

「それじゃあね、最近新しくできたショッピングモールにいかない？」

「ああ、いいぞ」

「へへ・・・ねえ、腕組んでいい？」

「クイーン・・・いいぞ」

『あら、よくわかったわね』

「まあね」

「もう！」

二人は腕を組みながら目的地であるショッピングモールへと向かった。

しかし、それを遠くで眺める者たちも・・・

≪？？？≫

『ジェラシー4よりHQ。目標移動開始。どうやら会話をしながら移動中。どうぞ』

『こちら、HQ。了解した。引き続き監視を『ジェラシー7よりHQ!緊急事態発生!さっそくケースAが発動。二人は腕を組んで目的に移動中!!う、うらやましい!!!』落ちつくんやジェラシー7!まだ、作戦は始まったばかりや。引き続き監視を続行せよ』

『zy、ジェラシー7了解・・・・ぐす』

『まさか、こんなにも早くケースAが・・・。なのはちゃん。奥手やと思っておったけど・・意外や・・。HQよりジェラシーズ。まだ、作戦は始まったばかりや。皆、落ちついて行動するんや』

『温い。生温い・・こんなものでは生温い』

通信にいきなり割り込んできた者の声はとても怒り震えている声だった。

『す、すじゃなかった。ジェラシー1、とにかく落ちついてな?な?』

『・・・・・』

(落ちついた?)

ホント、恐いわー。

そりゃあ、私たちもかなりキテたけどまさか、ねえ?

≪なのはが告白した直後≫

『私とデートしてください！！！』

『え？別にいいぞ』

ピキ！ドォォォォォォォォン！！！！！！

その時、彼女達に電流走る！

＊＊＊六課秘密会議室＊＊＊

「え～ただいま第一回なのはちゃんのデート妨害作戦について話合いたいと思います。
尚本日はスペシャルなゲストをお呼びしてるっていうか勝手に来ました」

はいってええよ、とはやてが言うと入ってきたのは、ギンガ、アリサ、すずかが入ってきたのだが・・・

「で、いつ、どこで、行われるの？」

「す、すずか？」

（（なんか様子が・・））

ギンガを除けば彼女達はすずかのことをわかっているが今の彼女は今までみたことのない程怒っていた。いや、嫉妬なのだろうとわかった。

「ちなみに、当分“総帥は“仕事で忙しいから無理」

「なんで知ってるの？」

「はやて、あんた私たちがあいつの秘書だって忘れたの？」

「あ」

そういえば二人は秘書だってこと忘れたわ。

「それよりも・・・この件。早くしないとすずかやばいわよ？」

「へ？」

「例えるならメルトダウンする寸前かしら。まったく、あいつこんな時期になにがなのはとデートよ！馬鹿じゃないの！たくぅ・・・・ちぇ」

こっちはこっちで色々あるんやね・・・（汗）

とまあこんなことがあって、すずかちゃんとアリサちゃんがなんとかスケジュールを弄ったり、こっちもなのはちゃんに色々仕事を押し付けたりと延期できたけどさすがに限界がきて・・・今に至るわけや。

回想終わり

『とにかく、HQよりジェラシーズ。引き続き尾行及び監視を続行せよ』

『了解・・・』

≪レイ≫

「・・」

レイは何かを感じたのか後ろに振り向き辺りを見回した。
しかし、なにもないことに気づき首をかしげる。

「どうしたの？」

「いや・・なんでもない。お、新刊が初版で５０万部か。いやー今回も大ヒットだな」

「？なにを書いたの？」

「題して『今我々がしなければならないこと』というどっかの都知事の条例に対抗している皆さんに書いた本さ」

「ふ～ん」

「関係ないって思ってるかもしれんがお前らも規制対象だからな」

「なんのことかわからないなの」

「２ｎｄ、大丈夫かな～」

そんな会話をしながら二人はショッピングモールに向けて歩いていった。

≪近くの高層ビル屋上≫

「とりあえず今のところは順調にデート中ね」

「そうだな」

レイたちが歩いている近くの高層ビル屋上から二人を眺めている者たちがいる。
嫉妬乙女たちに比べ彼女達は暖かな目で見守っていた。
それもそのはず。
彼女達は・・・彼の娘たちなのだから。と＋孫とペット

「それにしても、あの子たちもよくやるわね～。ま、気持ちはわかるんだけど」

「もう、フェイトったら。なのはちゃんに先を越されて・・お姉ちゃんとしては残念の一言よね」

「そうですね。プレシアも泣いてますよ」

―まったく、私の娘なんだからしっかりなさい！―

アレ、目から魔力が・・・

「気にいりません」

「なにがだ？」

「彼女の髪型ですよ！私とかぶるじゃないですか！」

星音は自分とかぶっていることが気に食わないようだ。

「それに、眼鏡もしてるよ～」

雷華が口添えするがさらに逆効果だった。

「サングラスする＝変装だと思ったら大間違いです！」

「お前も大変だな」

「あの～あ姉さま方？」

『なあに、チンク（ちゃん）』

「い、いえ、その・・・」

「チンクが言いたいのはどうしてこんなことしているか。だそうです」

チンクの代わりにセッテが答えた。

「チンク、セッテ。これは私たち家族にとって特に大事なことなんだぞ？」

銀がなにとか強調して言ってくるが二人にはまだよくわからないで

いた。

「い、一体それはなんなんですか？」

「それは・・」

「それは・・？」

『あの子たちの誰かが私たちの母親になるってことなのよ（ですよ）（だぞ）（だよ）』

「「な、なんだってーーーーー！！！」」

「けど、まさかあの三人も加わるとは。予想はしてたけど・・」

あの三人と言うのはすずか、アリサ、ギンガのことだった。
ちなみに、この三人は彼女達の中で誰がレイの妻になるかランクでは上位という噂がある。

「あの三人のことはよく知ってるからな。すずかはかなりいいかもな」

「いやいや、ツンデレアリサも」

「いや、ロボ属性（戦闘機人的な意味で）なギンガでしょ？最近胸成長したみたいだし」

「ん～でも姉としてはフェイトを応援かな～」

「じゃあ、私はシャマルですかね。何故か応援したくなります（年齢的な意味で）」

「それでは、私は彼女（なのは）を」

「では、我はたぬき（はやて）を」

「じゃあ僕は・・・シグナムを応援するぞー！」

「麻衣的にはユキナを応援・・」

『じゃあ、私はダークホースなヴィヴィオとリインフォースにしようかな』

姉たちはアレコレ自分の好みの子を言っている。ちなみに誰がどの台詞なのかはご想像に任せます。

『で、二人は誰？』

「え、ええと・・私は・・ええっと」

「チンクちゃんは駄目ね。セッテちゃんは？」

「えーと私は・・・」

『うんうん』

「新キャラ、ですかね」

『あ～ありそうー』

『まあ、でも・・・簡単に嫁には来させないけど（ニヤリ）』

彼女達の計画には既に『レイの妻になるための花嫁試練』というのができあがっていたのだった。

＊＊＊

「じゃあレッツゴー！」

と腕を組みながら目的地へと向かう二人。

『こちら、ジェラシー6。目標はショッピングモール内へと移動』

『こちら、ジェラシーマムですぅ。これより作戦は第2段階へと移行。とにかく邪魔をしっちゃってください』

『邪魔をしろったて・・・・あ』

『ジェラシー5より6。何か問題があったのか？』

『いや・・雑誌で乗ってたアイス店があったからさ。あそのこのアイス、ギガ美味いらしいんだよな・・・』

兄ちゃんと一緒に食べたいな・・・

『HQより6。そんなんあとや。とにかく各員、内部へ潜入後目標がいくであろう場所で待機』

『了解』

『ジェラシー1よりHQ。提案なんだけどね？ここの一つの店を爆

破すれば台無しなると思うんだけどどうかな？』

『ＨＱより１。却下や！それはやりすぎや！』

『じゃあ、どっかで火事でも起こそうかしら？』

『ジェラシー４より３。それはいいですね。私だったらモールを支えている支柱を壊します』

『ＨＱより、ジェラシー１・３・４。三人は少し黙っといて！』

『・・・ち』

もう、嫌になってきたわ・・・

一方二人は

「ん～どっちがいいかな？」

「俺は右」

「私は左の方がいいと思うけどなぁ」

何故か二人は服でどちらを買うか揉めているようだ。ちなみにそれは二人が着れる服ではなく子供用の服。つまり、ヴィヴィオヘプレ

ゼントするために服を選んでいるのだが・・・

『ジェラシー2よりHQ。なんだか揉めている模様。・・・けど・・服が?あ、多分、ヴィヴィオのかな?』

『え、それ本当なのママ!?』

『ジェラシーマムよりジェラシー9。ちゃんとコールサインで呼ぶように』

『はーい・・。えーと、ジェラシー9?よりジェラシー2。それは本当?』

『う、うん。服はどうみても子供用だし・・でも、ああやって服を選んで揉めてる姿もう夫婦だよぉ・・。私だって兄さんとデートしたことないのに・・』

『ん~私は両方ほしいな。二人が選んでくれたものだし』

そんな9の思いが通じたのか

「なら、両方買うか」

「うん。そうだね」

『やったー!!』

「さて、次はどこにいく？」

「ん～と」

「アレ、なのはさん！」

と二人に声をかけてきたのはギンガの妹で元六課のＦＷ。スバルだった。

隣には相棒？愛人？であるティアナも一緒にいた。

「スバル！どうしたの？」

「ティアナとデートだろう？」

「違います！」

「なんだ、違うのか。だって、お前らお似合いだし」

「えーそうですか～♪」

「あんたも照れなくていいから！」

ティアナは相変わらず容赦ないツッコミを入れる。

『こちらジェラシー8、アクシデント発生。何故か現場にスバルとティアナの両名が目標に接触！そのままどこかにいくようです』

『これは・・・想定外や。どうにかせんとなにやら嫌な予感が・・・』

『こちらジェラシー4。私に任せてください』

『わかった。頼むで』

スバルとティアナと一緒に見て回っている二人。
なのはも、本当は二人きりでデートしたかったのだがこうなってしまっては仕方がないと思っていた。
すると、ティアナがお手洗いにいったのだが・・・

「ふー。けど、いいのかしら？多分、なのはさんは二人きりになりたいんだろうけど・・」

「・・・ティアナ」

「！」

いきなり背後に断たれ反応するがそれをする前に身体を高速された。
声と鏡に映った姿をみて驚いた。

「ぎ、ギンガさん！？」

「いい？これから私の言うことよ～く聞いてね？ここから出たらすぐにスバルを連れてどこかにいきなさい。最低でもショッピングモールを出なさい」

「え、なにを言っているんですか！？」

「もし、やってくれたらあなたとスバルの交際を認めてもいいわ。結婚前提で」

「いや、いいですから！」

「じゃあ、さっさと行動しなさい・・・いいわね」

シュパ！

そして、いつのまに消えていた。
私は恐ろしくなって・・・

「す、すす、スバル！いくわよ！」

「え、どうしたのティア？」

「なのはさん！レイさん申し訳ございませんが私たちこれからいくところがあるので。では！！！！」

「ちょっとティア～！」

そんな二人が消えるまで眺めていた二人・・

「どうしたんだろうね？」

「さあ？」

一方嫉妬乙女たちは喜んでいたそうだ。

それからお昼が過ぎ

二人はショッピングモールから出て海岸沿いの近くを歩いていた。

「それにしても騒がしいな」

「なにかイベントでもあるのかな？」

辺りが騒がしいので気になったその方へ向かってみるとなぜか断末魔みたいのが聞えた。

そのことについて、ジェラシーズも気になっていた

『ジェラシーマムよりジェラシーズ。あれはどうやら・・その・・・
リア充撲滅運動みたいです』

『なんだよ、それ。いくらリアルの方がクリスマスだからって』

『やりすぎだな』

「神聖なるキリストの誕生日にデートとは！不届き千番！！！」

「今年もやってきたぜ！クリスマス！！サンタとか色々殺っちゃうよ！！」

「リア充死ね！！」

「リア充大切断！！」

すると一組のカップルに向かっていき繋いでいた手を引き裂いた。
ちなみに血は出ていません

「きゃあああああ！！」

「いってぇぇぇ！！！」

その光景をみた近くのカップルたちは逃げ出すがどうやらリア充たちはそこら辺にいるらしく次々と狩られていき・・残るはレイとな

のはだけになった

「はっは。残るは貴様らだけだ！」

「お前ら馬鹿だろ？」

「うるさい！貴様らリア充の言うことなど聞きたくはないわ！！」

「嫉妬って怖いね」

『まったくね』

「ていうか俺たち恋人じゃないし」

「え！？」

「う、嘘をいうな！」

「本当だって。付き合ってないし、ただデートしてるだけだし」

「そ、そうなのか・・」

「隊長なにを迷ってるんですか！デートしてるやつらは皆敵ですよ！！」

「そ、そうだったな！！」

よっしゃあああああ！！

とか辺りがうるさい

まさかの事態にＨＱも戸惑っているらしく・・

『どうしようか？』

『どちらかというとお仲間だしね・・』

『こちら、ジェラシー１。敵をせん滅する』

「「「「「「え！！！」」」」」」

「ヒーハー！！！リア充は消毒だ～～～～！！！」

「どうすっかな～？」

「こんな奴らディバインバスターで一殺なの」

なのはさんは物騒なことを言っています。

すると・・「ひゅ～～～～」

「なんだ？」

「花火か？」

あれ、この音は・・・

「あ、アレは！」

「ミサイルぅぅぅ！！！？？？」

というよりロケットランチャーみたないものなんだけど・・

ドッカーーーーン！！！

「ぎゃぁぁぁぁぁ！」

「友よ！！！ぎゃあぁぁぁぁ！！」

「さ・・たさん・僕にもプレゼン・・かの・・・じょ・・――――」

「・・・わーお」

たった一発でほとんどの“俺たち”が死んだ。
爆煙が晴れると一人の男が立っていた。

「ここで、倒れるわけには・・いかんのだーーーー！！！」

「いや、意味わからん」

こいつの名はリア充撲滅教会会長。それ以上でもそれ以下でもない。
いや、他に彼を名乗るならば・・人はこう呼んだ『大賢者』と

「世界中の俺たちよ！おらにリア充を倒す力を！！！」

するとどうだろう。空から光が集まってゆく・・・

「へっへ・・これだけありゃそこらへ辺のリア充を道連れに・・・・」

「ディバイン・・バスター！！！」

「・・・すまない・・同士たちよ・・・」

最後の最後でなのはが止めを刺してしまった。
そんな彼女をみて、レイは「容赦ないよな」と呟いた。

「さ、デートの続きしよ」

「しかし、こんな有様じゃな・・・」

辺りはもう戦場の後と言っても間違いではない有様で、色々と問題があったためミッドの局員もやってきはじめた。

「・・逃げるか」

「そうだね！」

これぞ、まさに愛の逃避行！

あ、違うか。

そして、二人は海岸沿いは歩いていた。

それに関してすでに最終作戦が行われようとしてた

『もう、一刻争う。目標がアレをする前に・・仕方ない。ジェラシー2・9例のアレを結構や！』

『了解』

「しかし、今日は色々と大変だったな」

「にゃはは。そうだね。色々な意味で。ね」

二人は夕陽の海岸を歩いていた。
もう、どっからどうみても恋人なのだが・・

「なあ、なのは」

「なに？」

「お前は、今は好きか？」

「今？それって・・うーん。好き、かな。皆がいるし、それにレイくんもいる。
ヴィヴィオもいるし。幸せかな？」

「そうか。幸せか」

なんか今のレイくんカッコイイ・・

ね、ねえ。言うなら今かな？

（どうからしらね～。まあ、当たって砕けちゃえば？）

もう！！

「あ、あのねレイくん！！！」

「ん？」

「えーと」

言うのよ、高町なのは！

「私と『ママ～～パパ～～』え？え？」

「お、ヴィヴィオ」

「パパ～」

ガバ

ヴィヴィオは走りながらレイに飛びついた。レイはそれを受け止め抱っこしている。

「なんで、ヴィヴィオが！？フェイトちゃんに預けていたのに」

「・・ごめんね、なのは。その・・ヴィヴィオが待ちきれなくて・・・」

「そ、そうなんだ」

（よかった。なんとか阻止できたよ～）

「もう、遅いしどっかで食事して帰るか」

「わーい」

「じゃあ、いいお店知ってるからそこにいこう」

「そうだね」

こうして、乙女たちの戦いはとりあえず終わった。

だが・・・

≪高町家≫

「ねえ、フェイトちゃん？」

「な、なに。なのは？」

「今日言ったよね。絶対にヴィヴィオと一緒に家にいるって」

「け、けど、ヴィヴィオが・・」

「少し・・お仕置きしようか・・」

「ごめんなさ～～～い（泣き）」

≪神乃家≫

「で、結局駄目だったと」

「意味ないわね」

「そうだね」

ぐ～～～

「お腹空いた・・・」

「食材がないから・・・あ、カップラーメンならありますよ」

『なぜに？』

≪すずか≫
デート後

「すずか」

「は、はい！」

「・・・はー。そんな捨てられた猫みたいな眼をするな」

「だって・・・」

「これから飯なんだがアリサも誘って一緒にいくか」

「はい！！！」

おまけ

第一回なのはちゃんのデート妨害作戦終了後

＊＊グラナガン某所にあるネカフェ＊＊＊

「では、お客様の料金は締めて十万円になります」

「な、なんでや！？だって、ここ２４時間で３０００円やないか！」

「なんでだって？あんたのとこだけ無駄に電力消費してんだよ！それに、周りから苦情もきてんだよ！

「そ、そんな・・・」

「はやてちゃん・・」

「・・・領収書、ください・・・」

「（経費じゃ落ちないと思います・・・）」

おまけ２

ジェラシーズのコールサイン
ＨＱ＝はやて
ジェラシーマムリインフォース？
ジェラシー１すずか
ジェラシー２フェイト
ジェラシー３アリサ
ジェラシー４ギンガ
ジェラシー５シグナム
ジェラシー６ヴィータ
ジェラシー７シャマル
ジェラシー８ユキナ
ジェラシー９ヴィヴィオ

それではみなさん。

よい、クリスマスをお過ごしください

ただし、リア充。テメェは駄目だ

第１０３．５話　初デート？（後書き）

なんと文字数８０００

頑張った・・・

さて、次話から新章です。
序盤はｖｉｖｉｄ路線でいくのでアインハルトも登場する予定です。

いやーアイン可愛いよ～

お持ち帰り～

第5章　予告編だよ！（前書き）

もう少しで今年も終わりですね・・・

というわけで来年から新章ということで予告になります

5章に入りしだいこの予告は消す予定です

第5章　予告編だよ！

第5章　イツワリノヘイワ　（ｖｉｖｉｄ編）　予告

※一応予告編なので実際に本編に以下のものが登場するかはわからないのであしからず

ＪＳ事件から早数年
時が流れるのは早い
その中で人は大きく、成長する
子供は大人へとなるように
しかし、永遠に変わらないものもいる

「俺の名は、レイル・アンヴァルト・Ｙ・神乃。レイでいい」

「どうも、なぜなのはのお時間がやってまいりました」

また、小さな聖王も今では・・・

「どうも、高町ヴィヴィオです！
元気にストライクアーツやってます！」

そして、覇王との出会い

「なんだ、アインじゃねえか」

「レイ、おじさん？」

「今から、俺がお前のコーチだ！！！（キラーン）」

「（　゜Д゜）ポカーン」

そして、皆と温泉！

「ふふ、完璧だわ・・・さあ、元六課の皆さん！ドーンとおいでませ！！！」

「なんか、いい気分の所が悪いがちょっと手伝ってくれ」

「へ？」

だったけど・・・

「どうも、時の湯女将、時乃冴子と申します。本日は我が時の湯においでいただきありがとうございます。ですが・・現在肝心の温泉がでません」

「「「「えーーーーー!!」」」」

肝心の温泉（大浴場）は出ない。しかも、旅館改装中。
さらに、何故かレイを筆頭に神乃家総出。しかも、何故かユキナも改装の手伝い!?

「原因はこの岩か・・ユキナ」

「アイアイサー!」

「わー温泉だ!!!」

「やっぱ、この岩が源泉を塞いでいたのか」

そして・・・

「れ、レイくん!?ここ混浴だっけ!!??」

「いいか、絶対にこっちみるなよ」

再会する兄妹

「ルリ・・なのか？」

「にい・・さん？」

交錯する思い

「嘘！嘘！嘘！！」

抑えきれぬ、復讐の衝動

「会いたかった・・・・この時をどれほど待ち望んだか・・くくっ」

「やはり、貴様は戦い人。平和は貴様には合わん」

「テメェはこの手で殺す。殺す殺す！！！」

ありえない再会と蘇る記憶

「何故だ・・・何故お前が！！」

「アイタカッタ、レイ・・・」

「お前は俺が・・俺が殺したはずだ！！！」

そして、彼は再び引き金を・・

「お願い・・私を・・」

「お前はもう一度俺に殺せと言うのか！」

「うわぁあああああああああああああああああああ！！！」

すべてはイツワリにしか過ぎない

でも、まだ終らない。始まってもいない

けど、いつかは始まる

イツワリノヘイワが終わり再び始まる戦いの日々

彼はその時、戦っているだろう

例え、どんなに憎まれ、蔑まれても彼は戦うだろう

それは、己のため？他人のため？

そして、イツワリノヘイワが終わり

世界を賭けた戦いが始まる

あいつも戦いに参戦!!??

「ふも?」

魔法少女リリカルなのは～Ｔｈｅ　ｍａｇｉｃｉａｎ　ｗｈｏｌｉｖｅｓ　ｉｎ　ｅｔｅｒｎｉｔｙ～

２０１１年　第５章スタート!!

登場人物（原作）（前書き）

第４章時点、また第５章からの原作キャラの登場人物の紹介になります

こちらは自ずと加筆していきます

ただ、ゆっくりやっているのでかなり時間がかかると思われます

これは、簡易版です。もし、しっかりしたモノというか細かいことまで記載してあるのがよいという意見が多数あればそちらに変更しようとも考えております

登場人物（原作）

一部出ないキャラ、また書いてないことがいますがご了承ください
これは作者、本作での紹介になるのであしからず。
また、作者の本音がぽろっとでてているので注意を。

≪高町なのは≫
レイと出会い魔導師になった。
今では“エース・オブ・エース”と呼ばれる程の実力者。また、“魔王”“白い冥王”と呼ばれている。娘にヴィヴィオがいる。
また、昇進を断ったそうだが実は三等空佐になっている（本人には内緒）
最近、2重人格になった。
愛機のデバイスは“レイジングハート”

≪フェイト・T・ハラオウン≫
時空管理局本局執務官。あの大魔導師プレシア・テスタロッサから生み出された子供。しかし、今はとても幸せ。最近は妹キャラが多すぎて悩んでいる。
脱げば脱ぐほど速く、強くなる子。
アリシアのことをやっとお姉ちゃんと呼べるようになった。
愛機のデバイスは“バルディッシュ”

≪八神はやて≫
時空管理局陸上一佐。このたび昇進しました。
六課の経験を得て、今では一つの艦を預かる立派な艦長になりました。

残念ながら本作品ではたぬきにはあまりなりません。
愛機のデバイスは“シュベルトクロイツ”と“夜天の書”。
また、ユニゾンデバイス“リインフォース?”をパートに持つ

≪リインフォース?≫
頼れる大佐殿。ではなく我らがリインちゃん。
最近はちっちゃいことで悩んでいたが成長することが発覚し大喜び。
しかし、その実態はユニゾンデバイス。初代“リインフォース”から受け継いだ祝福の風二代目である。
デバイスは“蒼天の書”
※ロリ要員

≪ヴィータ≫
はやてが従えるヴォルケンリッターの一人“鉄槌の騎士”
現在、航空戦技教導隊で活躍している。階級も二等空尉に昇進している。
好物はアイスでよくギガ美味と言うのが口癖。
赤もいいけど白もいいよね!
愛機のデバイスは“グラーフアイゼン”中身が勇者王のため一々暑ぐるしい。
※ロリ要員にして作者のお気に入り

≪シグナム≫
ヴォルケンリッターの一人“烈火の将”
クールで厳しい彼女だがそれと同じくらい優しさを持っている。階級も一等空尉と昇進した。最近、時代劇をみるようになり（水戸黄門とか）騎士なのに侍になりたいそうで、過去にタイムスリップしたいそうだ。
愛機のデバイスは“レヴァンティン”ユニゾンデバイスに“アギト”をパートナに持つ。

“レヴァンティン”も最近は口癖でござると言わなくなった。
※巨乳要員であり作者のお気に入り

≪シャマル≫
ヴォルケンリッターの一人“湖の騎士”
いわゆる“保健の先生”になりつつある彼女。最近ではやっと人並みに料理ができるようになった。
作者的にある意味一番強いんじゃないかって思うキャラ。だって、リンカーコア摘出できるし。
愛機のデバイスは“クラールヴィント”
※巨乳要員

≪ザフィーラ≫
ヴォルケンリッターの一人“盾の守護獣”
八神家の犬

≪スバル・ナカジマ≫
元六課の一人。
現在は湾岸特別救助隊に所属している。
実はロボ属性を備えている。ティアナの夫?
※作者的にはスバルよりギンガが好きー

≪ティアナ・ランスター≫
元六課の一人。
現在は夢であった執務官になれました。フェイトと違って一発で受かりました（笑）
ツインよりロングの似合ってると思うんだよね。
スバルの嫁
※ツンデレ要員一応

≪エリオ・モンディアル≫
元六課の一人。
フェイトと同じように生まれた。
現在は妻であるキャロと一緒に仕事をしている。
だが、胸の大きい人には弱い。最近はエロリオという称号を持つ

≪キャロ・ル・ルシエ≫
元六課の一人。
現在は夫であるエリオともにいる。
数年経った今でも全然成長しない永遠のロリ。

≪高町ヴィヴィオ≫
通称魔王の娘。
とっても便利な変身魔法を覚え、大人にもなれる。
レイから貰ったデバイス“セイクリッド・ハート”の“クリス”と
日々成長中。
ちなみにレイを“パパ”呼ぶ。なんだかんだでヒロインの座を狙っ
てたり狙ってなかったり。
※ロリ要員？そして作者のお気に入り

登場人物（オリキャラ）（前書き）

原作キャラと同じです

ただ、原作キャラでかなり変わったキャラはこちらになります

登場人物（オリキャラ）

登場人物（オリジナル版）
※原作キャラで一部変更になったキャラはこちらになります。
例すずか・アリサなど

―神乃家―

≪レイル・アンヴァルト・Ｙ・神乃≫
本作品の主人公
“時空管理局”設立者であり“総帥”でもある。また、“神の代行者”（現在剥奪中）
しかし、その実態は不老不死の“魔術師”。謎多き人物だが人々からは英雄扱いされている。
さらに、その実態はニートで働きたくない駄目野郎である。
愛機のデバイスは“ＺＥＲＯ”。よく、好んでリボルバー（サクラ大戦のマリアが使用している銃みたいなもの）を使っている。また、神乃家の家宝である刀を所持（名はない）

≪銀・Ｒ・神乃≫
神乃家長女。（Ｒはリインフォースという意味）
銀はインと読む。
かつて、消える筈だったがレイの介入により存在し続けている。
一応レイは主という立場だがそんなことはもう忘れている。普段は姉らしいことをあまりしないがそれでも妹たちを大切に思っている。
デバイスは魔道書である“夜天の書・外書”
※みんなの嫁

≪リニス・神乃≫
神乃家次女兼使い魔
プレシアの使い魔だったがアリシアが使い魔として呼び出しレイがリニスの記憶を植え付けた。普段はメイドとして、姉としてやっていっている。
猫になれることから隠密性にすぐれている。
愛機のデバイスは“トレイン”（最近まで存在を忘れていた）
武器は、ナイフ・超電磁砲。

≪アリシア・T・神乃≫
神乃家三女
プレシアの娘で、死んでいたがレイが“賢者の石”で蘇らせた。
魔導師としては普通より少し上ぐらいだが稀少能力“生命との会話”で大地や自然、生きとし生けるものの声が聞える。一度死んでいるため人間の１００％の力が出せる。
ちなみに、胸はフェイトより大きい。
愛機のデバイスは“ハルバート”
必殺技はファイナル・トマホーク・アリシアスペシャル
※作者のお気に入り

≪闇樹・神乃≫
神乃家四女
かつて、“闇統べる王”と呼ばれたマテリアルの一人。一人称は「我」
マテリアルの中では一番の年上という位置にある。無限書庫の司書としても活躍。
少し前までは走り屋としてどっかの豆腐店と死闘を繰り広げていた。
愛機のデバイスは“エルシニアクロイツ”

≪星音・神乃≫
神乃家五女
かつて、“星光の殲滅者”と呼ばれていたマテリアルの一人。一人称は「私」
マテリアルの中で一番大人しいと思われがちだがかなりのバトルマニア。
それでも無限書庫司書長。
愛機のデバイスは“ルシフェリオン”
※星光たんはぁはぁ

≪雷華・神乃≫
神乃家六女
かつて、“雷刃の襲撃者”と呼ばれていたマテリアルの一人。一人称は「ぼく（僕）」
動物スキルを身に着けたためか捨て猫とか（ライオンとかもいる）を拾ってくる。それでもエサ代は自腹なのだから偉い。他の二人と同様書庫の司書をしている。
愛機のデバイスは“バルニフィカス”

≪チンク・神乃≫
神乃家七女
元ナンバーズで戦闘機人。事件の後レイの養子として向か入れられた。
今でも右目の眼帯をつけている。養子となってからは周りが姉ばかりなのでかなり妹キャラに転属しているがセッテに関しては「姉としては・・」などと言ったりしている。
がんばれチンク！
武器は“スティンガー”にＩＳ「ランブルデトネイター」

≪セッテ・神乃≫

神乃家八女
元ナンバーズで戦闘機人。おそらく一番変わってだろうと思われる子。
姉妹の中では一番の末っ子で姉らに「セッテちゃん魔改造計画」なることをたまにさられている。まあ可愛がられているだけだが。
余談だがヘッドギアを外した彼女は可愛い。
武器は“ブーメランブレード”にＩＳ「スロータアームズ」

≪スノー≫
神乃家におけるマスコット的な存在？
でもあるが、本当はレイと同じ魔術師である。その実力は“雪女”と呼ばれるほど。
禁忌である輪廻転生の術を使い生きながらえてきた。
現在は猫に天使の羽があるぬいぐるみに転生中

≪風ちゃん≫
雷華の愛馬。とある星でみつけ保護し飼いはじめた。
雷華にとても懐いておりとても賢い馬。
しかし、レイはその馬をどこかで知っており・・？

≪神乃麻衣≫
レイの遠い孫にあたる。
現在神野改め神乃家１３代目当主である。
最初は、レイを恨んでいたが現在ではまるで娘のように甘えている。
いまだに「ご先祖様」と口癖が治っていない。
そして、魔乳でありユキナと同等でシグナムより大きい。
武器は日本刀（業物だが名はない）

≪ユキナ≫
ヴォルケンリッターの一人≪螺旋の騎士≫

本作オリジナルキャラである。
ヴォルケンリッターの中ではシグアム、シャマル同様お姉さん的存在である。優しく明るい子。しかし、彼女はシグナムよりデカい。
また、彼女は所謂ドリラーでありドリルをコヨナク愛する。
愛機のデバイスは“紅蓮”と“螺元”。
必殺技は「天元突破紅蓮螺元」

≪アリサ・バニングス≫
灼熱の魔剣士兼総帥秘書
本作では魔力保持という設定。
闇の書事後、密かにレイを師匠として鍛えられた。失踪後にはすでに自分で鍛えられるほどになっていた。
髪はロングのままでところどころ赤い。魔力というより炎を使用する。
武器は“贄殿遮那”そして、精霊神である「カグヅチ」を召喚することができる

≪月村すずか≫
月光の魔銃士兼秘書
アリサと同様だが魔力保有量は一般的。
しかし、運動能力は群を抜いて上位。それをレイに見込まれ鍛えられ今に至る。
主に、銃と体術そして、技研で開発された装備を使いこなす。
武器は「ベレッタＭ９３Ｒ」×２と「パニッシャー」
愛機のデバイスは“ティファ”

組織&重要語句（前書き）

以下略

組織&重要語句

組織&重要語句

ここでは、本作品に登場する組織、また重要語句を記しています。
一部原作に登場しているがここでは記していないものもあります。

≪時空管理局≫
元最高評議会3人と現総帥レイル・アンヴァルト・Y・神乃によって設立された組織である。
目的は、世界の管理及び古代遺産“ロストロギア”の回収・保護・管理である。その他に、犯罪者の逮捕・事件の解決なども行っている。管理されている世界は第〇管理世界と呼ばれる。
管理されている世界においてはある意味指導者に近い存在である。しかし、裏ではその権力を行使し様々な非道な実験などを行っている者おり、また一部市民の管理局反対運動もある

≪本局≫
次元の海にある時空管理局の本部である。各世界にある支部を統括している場所である。
本局には“無限書庫“といった貴重なモノある。基本総帥は本局にいるが当然なのだが本人は滅多にいない。機材、人材はもとよりどこの支部よりも最高なのだが人手不足が一番の問題。
ロストロギアはすべて本局の管理区画に保管されている。
最近では、使途不明金やら、謎の区画が一部の局員らによって発見

されている。

≪ミッドチルダ地上本部≫

レジアス中将亡きあと、復興作業が行われた。今現在は依然通りの活動率である。

第１０４話　ヴィヴィオはみた！　突撃神乃家編（笑）（前書き）

おけおめことよろ的な感じです。

駄目だ連日のバイトで疲れが・・・

第１０４話　ヴィヴィオはみた！　突撃神乃家編（笑）

「新年明けましておめでとうございます！高町ヴィヴィオです！」

って、こっちはまだお正月じゃないよ！ていうかミッドにはないよ！？

（いやいや、初めが肝心だから）

「え、えっと。ただいま、私はとある家の前に来てるんだよ！」

ふむふむ、それはどこなんだい？

「それは・・・私のパパの家でーす！！」

な、なんだってー！！

「今日は、なのはママも、フェイトママもお仕事でいなくて、学校もないから今日はパパの所で過ごそうかなと思ってやってきたんだ」

神乃家。ＪＳ事件後からここグラナガン郊外に建設されていた木造建築の家。

ｖｉｖｉｄでいうとなのは達が住んでいる居住区エリアから約３０分もかかります。

周りには自然ばっかりでご近所さんはいません。

「というわけで、さっそくいきたいと思います」

まず、家に入るにはＩＤカードが必要で、門のとこにカードをきるところがあるんだよ。

セキュリティは万全なんだって。

今、塀を飛び越えられたらどうするの？って思った人！

実は塀から敷地内には見えない結界が貼ってあるから大丈夫なんだって。

『ＩＤ確認。いらっしゃいませ』

すると門が開いた

「わーすごーい！」

例えるなら極道みたいな感じかな？
広いし、池あるし、すごい。

「じゃあ、いこうかクリス！」

「コクリ」

ちなみに、クリスというのは私のデバイスでパパにプレゼントしてもらいました！
やっと、デバイスを持つことができて嬉しいのですがなにやらこのクリスにはちょっとした防衛機能があるらしく、なんでも世間の通称Ｒから守ってくれるそうです。
Ｒってなんだろう？

そして、早速見つけました。
なにやら、大きな小屋？檻？ではないんだけどそれっぽいのがあります。
そこに、白い馬の世話をしている人がいるようです。

「あ、雷華お姉ちゃん～」

「ん？お、ヴィヴィオ！どうしたんだ？遊びに来たのか？」

雷華・神乃
神乃家の六女にして“雷刃の襲撃者”という異名があるんです！
それに、動物が大好きで捨てられた動物たちを育てているんだよ。

「うん。今日は、ママ達仕事でいないから」

「そうなんだ」

「あ、風ちゃん」

「ヒヒーン（こんにちは。ヴィヴィオ）」

「ねぇ、雷華お姉ちゃんまた風ちゃんに乗せてくれる？」

「ああ、いいぞ！」

前に私はお姉ちゃんに乗せてもらったんだけどこれが凄いの！
車より速いし、何故かよくわからないけど空も飛べるんだよ！？

「ヒヒーン！（いいよ！）」

どうやら風ちゃんも満更ではないご様子。

「そうだ、ヴィヴィオ。実は新入りがいるんだ」

「新入り？また、捨て猫？」

「猫と言えば猫だぞ。おーい、“ガイガー”！」

「が、がいがー？」

猫に変な名前つけるなあと思っていると茂みの奥から・・・・デカイライオンが飛び出してきました。

私は思わず、雷華お姉ちゃんの後ろに隠れました。

「大丈夫。ガイガーは大人しいから。ね、ガイガー」

「がう♪（うん！）」

普通に触れ合っている雷華お姉ちゃん恐るべし・・。

というかよくみてみると普通のライオンにしては少し変な気が・・？

さて、気を取り直して。

今度は家の縁側へとやってきました。玄関から入ってもいいんだけどまあ細かいことはいわないの。

すると、縁側というより通路で将棋？をしている銀お姉ちゃんとと闇樹お姉ちゃん。その間にセッテがいて、近くに星音お姉ちゃんが本を読んでいてその隣でチンクがお茶を飲んでる光景が目に入った。

星音・神乃

神乃家五女して“星光の殲滅者”としての異名を持ち、尚且つ時空管理局本局無限書庫司書長なのだ。
私も本を読むのでよくお世話になっています。

チンク・神乃
神乃家七女で私にとってもお姉ちゃんだけどチンクって呼んでる。チンクも私の事をヴィヴィオと呼んでくれている。チンクは私で言うと同年代のお姉ちゃん的な感じ？（まあ年上なんだけど）

「こんにちはー」

「ん？」

「おや、ヴィヴィオではありませんか」

「おお、いらっしゃい」

星音お姉ちゃんとチンクは私に気付いたみたいだけど

「王手」

「た、頼む。闇樹、待ってくれ」

「駄目ですよ、銀お姉様」

「む～」

三人は夢中で私に気づいていない

銀・Ｒ・神乃
神乃家長女にして皆のよ（ｒｙえ、違う？えーと初代リインフォースです
たまに、ゲーセンとかいくとよく欲しいのをとってくれます。
なんでも“グランガンゲームセンター”の“チャンピョン”とか“伝説のお姉さんＲ”
と呼ばれているそうです。

闇樹・神乃
神乃家四女にして“闇統べる王”と呼ばれています。
（正直言うと、はやてさんより闇樹お姉ちゃんのがカッコイイよね）
最近はないそうですが少し前までは走り屋で結構大変だったみたいです。
囲碁や将棋で唯一銀お姉ちゃんに勝てる存在（レイ除く）

セッテ・神乃
神乃家八女で元ナンバーズ。私もあまり面識ないんだけどたまたま見かけたセッテの笑顔がもう可愛くて可愛くて。
意外と優しい面もあり、いいお姉ちゃんです。

「あれ、リニスお姉ちゃんとアリシアお姉ちゃんは？」

リニス・神乃
神乃家次女でメイドさん。私服もメイド。しかも、常時ナイフを装備していてどこかの館のメイドさんみたい。でもＰＡＤじゃないから。

最近、メイド学校なるものに特別講師として呼ばれたりしているそうです。

アリシア・T・神乃

神乃家三女でフェイトママのお姉ちゃん。私はよく間違えてママと呼んじゃうんだけどそれを言っちゃうとお持ち帰りされちゃうんだよね。

でも、フェイトママと比べちゃうとアリシアお姉ちゃんのが母性を感じるんだよね。

「ああ、二人は父上を呼びに言ったよ」

「パパを？」

「ええ。日課のトレーニング中ですから」

「へー。じゃあ少し待ってようかな」

数分後

レイは来なかったが先にアリシアとリニスが戻ってきた。

「あれ、ヴィヴィオじゃないの」

「あら、本当ですね」

「お邪魔してまーす」

「なに、家出でもしたの？」

「し、してないよー！」

ヴィヴィオをからかうアリシア。
笑ったあと、「違うのね」と残念そうに粒やいていた。
すると、彼がやってきた。

「おお、ヴィヴィオ。よく来たな」

「パパ～」

走りながら抱きつくヴィヴィオ。成長してもこれだけはまだ治っていないのだ。
人前じゃやらないけど。

「あいつらから話は聞いてる。ゆっくりしていくといい」

「うん！」

レイル・アンヴァルト・Y・神乃。
パパと呼んでいるけど本当のパパじゃないんだよね。
しかし、パパはなんと時空管理局の総帥なんです！すごいでしょ！

ちなみに今の服装は着物って言うんだっけ？マジで極道っぽい。

「あれ、麻衣お姉ちゃんは？」

神乃麻衣
パパの遠い孫だそうです。
私もよくわからないんですけど。でも、優しくてよく飴とかお菓子をくれます。

「あいつなら・・・」

パパに連れられ麻衣お姉ちゃんの部屋に入ると・・・凄かったです。
日本人で白い着物をというか寝巻を着て寝ているんでしょうか？もう、脱げていて、その・・・大きいアレが見えていました。

パパは全然興味なさそうに

「麻衣は昨日まで本家で会議があって集中力を使い過ぎたから爆睡中」

普段の麻衣お姉ちゃんは「・・・ヴィヴィオ、いらっしゃい」など、ワンテンポを遅れて言う感じなのだが、集中力もとい、本気モードだと凄いんだって。

それから・・・

「でね、最近忙しくて大変だーってママが言ってたんだ」

「ふーん」

「パパにも会えないよーとも言ってた」

「なのはがねー。確かになのはは、少ないよな」

「ええ、そうですね」

「どういうこと？」

「あれ、ヴィヴィオはフェイトから聞いてないの？」

「ふぇ？」

予想外の展開に驚くヴィヴィオ。

「フェイトはよく来るけど。まあ、私に会いにくるって口実よね」

「フェイトならありえますね」

「フェイトママそんなにこっちに来てるの？」

「う～ん、執務官として忙しくないなら週に2日ぐらいは来てるわ

ね」

つまり、ママが仕事。私が学校の時とかに行ってるのかな？

「けど、フェイト以外にも来てますよ？」

「え？」

「シグナムは麻衣と稽古を口実に」

「ヴィータはレイとゴルフをしに」

「シャマルはレイに料理を教わりに」

「ユキナはただ純粋に遊びに」

「リインは人生相談」

「はやては銀に会いに」

「なんだか一人だけおかしいのが」

八神家（犬除く）も何故か会わないようになっているのだ。

本当に都合よく来るのが不思議だ。

レイは気づいているかどうかは知らないが・・・娘たちはある結論

に辿りついた。

（4年前のあのデートの腹いせか）

そう、4年前になのはとデートして以来レイは誰ともデートをしていない。
いや、ただ単に皆が誘わないだけなのだが・・。

女の嫉妬って怖いわー

「で、最近学校はどうだ？」

「うん、楽しいよ。最近新しい友達もできたんだよ」

「そうか。どうやら、変な虫は付いていないようだな」

「虫？」

「心配しすぎですよ。父上」

「そうか」

「親ばか」

「なんだと！」

「ははははは（汗）」

パパも皆も私のこと物凄く大切にしてくれているんだと思うんだけどちょっと度が過ぎるような・・。

『一おじゃましまーす』

「誰か来たよ?」

「ああ、あいつらだろ」

「?」

どうやら常連さんのようです。
入ってきたのはママ達の友達のアリサさん、すずかさん。それに何故かギンガさんでした。

「あれ、ヴィヴィオじゃない」

「こんにちは」

「こんにちは。今日はどうしたの?」

すずかさんが優しく聞いてきた。マジ天使。

「それしても、ギンガさんも来るんですね、今日は仕事お休みですか？」

「！え、あーそんなところかな？」

「？」

ギンガさん凄く慌ててるようにみえたけど気のせいかな。

―ヴィヴィオがいるなんて聞いてないですよ！

―すまん。なのはから連絡は来てたんだが言うの忘れてた

―勘弁してくださいよーレイさん。このメンツじゃ私が一番危ないんですからね！

―わかった。わかった。

「そういえば、ヴィヴィオ。お前、今ストえーと・・・・ストライクガンダム作ってるんだって？」

『おしい！』

「違うよ！なにそれ？ガンプラ？どうしたらそうなるの！？」

ヴィヴィオは突っ込みを覚えた。

「じゃあ、なんだっけ？」

「ストライクアーツですよ。確か、ノーヴェに教わっているのよね、ヴィヴィオ」

「うん！」

「ふーん。格闘技か。なんだったらムエタイとか中国拳法教えてやろうか？
そっちのが実戦的だぞ」

「レイさん・・・」

「ギンガ、そんな可哀想な目でみるな」

「まったくぅ」

「しかし、まあ娘がなにかをやっている姿をみるのは父親としては当然か」

「それは、いいですね。いつもここに引きこもってないでたまには外に出るべきです」

「そうだ。訓練の後、引きこもってネットなんて駄目だぞ」

「お前らに言われたくねーよ！」

まあ、確かに彼らは職にはついているが働いていない者の方が多い。
マテリアルズを除けば公式に働いている者はいないのだ。

「まあ、機会があったらな」

しかし、その発言があんな出来事になろうとは（笑）

「（にぱー）」

ヴィヴィオは不気味な笑顔を浮かべていた。

第１０４話　ヴィヴィオはみた！　突撃神乃家編（笑）（後書き）

とまあ始まりました第５章。
章管理はあとでします。

あと次回あの子です
作者が好きで好きで仕方がないあの子。
乞うご期待

第１０５話　覇王登場（前書き）

アインハルトｋｔｋｒ

実は今回大分前に執筆したものを訂正、加筆したもので展開が急な感じがするかもしれません。

しかし・・・冬休み、今日で終わりか・・・

第１０５話　覇王登場

＊＊＊公民館へ通じる道＊＊＊

「なぁ～ヴィヴィオ俺やっぱ帰っていい～？」

「え～ここまで来てなに言ってるの！？」

「だって、久しぶりに外でたし太陽眩しいし人がいっぱいるし」

「ママにも言われたんだから、たまには外にだせって」

ただいま、俺こと レイは外にいます。

インドア派の俺には外は眩しい・・・。そんな俺が何故外にいるのか。

それは前回を参照してほしい。機会があったら。なんて言うんじゃなかった。

頑張って言い訳もした。

「俺夜行性だから」

や

「起きたら負けかなぁ～と思ってる」

など

しかし、ヴィヴィオの一言で止めを刺された。

「一緒にいこっ♪」

と言われ

「いくしかねぇよな～おい！」

となぜか力がみなぎっていた（父親的な意味で）

それがもうこの様である。

近くにあるベンチで今ノーベェを待っている。

「あ～だりぃ」

「も～パパったら！」

父親がだらしないの対し娘はしっかりしているといったところだ。

「もー歩けねぇ、死ぬ、ぜってー氏ぬ」

「それ以前にそんなコート着てるからじゃないの？」

「あぁ？」

こんなに暖かいのに冬のようにコートをきている。あたりを通る人は彼を不思議そうに見ている。

「ば～か。これは色んな役目を持ってるんだ～って確かにそうだなぁＺＥＲＯジャケットを春服に」

『了解～』

すると先ほどのコートから一転長袖の部分は無くなり方から腕が見えて、さらに薄地。それでもロングコートのようなものになっている。

「駄目だ、少し涼しくなったがやっぱ駄目だ」

「も～」

さすがのヴィヴィオもお手上げだ。

すると公民館の方向から呼ぶ声が聞こえた。

「おっ、いたいたヴィヴィオに兄貴ってなにやってんだ?」

「ノーヴェ～、パパを何とかしてぇ」

とりあえず軽くいきさつを話した。

―しかしな～兄貴をどうかしてくれって言われてもな

「兄貴、もう公民館で子供たちも待ってるから急いでくれないか」

「子供たちぃ～？それってヴィヴィオが言ってた三人か？」

なんでも、ヴィヴィオの友達も来ると言われ、どんな子かみておこうとも思っていた。

「うん、そうだけど？」

「仕方ない、ヴィヴィの友達なら父親としてしっかりしなければな！」

「パパっ♪」

―駄目だ、兄貴がどんどん駄目になっていく

＊＊数分後＊＊

公民館の出入り口で三人の少女が待っていた。
それを見た途端パパの態度が激変した。

「どうも、始めまして。ヴィヴィオの保護者のレイと言います。いつも娘と仲良くしてくれてありがとね」

「い、いえこちらこそっ！」

『・・・・・』

ヴィヴィオとノーヴェは彼のあまりの変化に驚いていた。

―兄貴、いいこと言ってるかもしれないけどそれ駄目だよ

―うわーパパってあんなかっこよかったけ？

「え～と君がリオにコロナちゃん・・・」

リボンにツインテールね。

と特徴のある部分で覚えていくかれそして、三人目の子をみたとき

「・・・なんだ、アインじゃねぇか」

「レイ、おじさん？」

『？』

それが、覇王との再会だった

＊＊公民館内休憩所＊＊

「どういうことだよ、兄貴！？」

「どうって何が？」

先ほどの件についてノーヴェは彼に問いただしていた。
理由は簡単だ。彼女自身が行ったあの件がなければ知らなかったことになっていたかもしれないが、それ以前に教えてもいないのに彼女のことを知っているのか？

※あの件とは漫画でいうとアインが格闘家を倒していたこと

「言ってなかったけ？俺は当時の王、オリヴィエやイクスヴェリア、イングヴァルトと面識があって色々とその子孫といっても一人だけだが代々見てきた。イクスが眠っていることも知っていたし、イングヴァルトの子孫もあのこのように血が濃く受け継がれる者もいればそうでないものもいた。ある意味では俺は受け継がれる子たちを見守っていた。まぁヴィヴィオは例外だったが今ではいいと思ってる」

とある意味とんでもないことを聞いてしまった彼女。

「な、なるほど兄貴がその・・見守ってきたってのはわかったけどよ、当の本人とはどれくらいの面識なんだ？」

「ん～確か生まれてから物心ついたころに何回か会ったな。うん、でもまさか覇王とか名乗って色々とやってるとは思わなかったがなっ！はーっはっは」

「はぁ～」

溜息をつかずにはいられなかった。
これが管理局の総帥の言うことなのかと。

「で、お前もやるんだろ？着替えてきたらどうだ」

「ん、ああじゃいってくる」

ノーヴェは荷物をもって更衣室へ向かった。それと引き換えにヴィヴィオたちが着替えてやってきた。

「ねぇレイどう？」

「どうって言われてもただの練習着だろ？」

「もーわかってないな」

「まぁまぁ」

リオがヴィヴィオを落ち着かせる。

ちなみに保護者といっただけでパパとは言えないのでというか恥ずかしいとヴィヴィオ本人がいったので来る前に打ち合わせをしていたのだ。

「にしても、子供から大人まで幅広いな」

「ストライクアーツは人気の格闘技ですからね」

コロナが丁寧に教えてくれた。

うん、いい子だな。

「ところで、二人は大人モードになって練習するのか？」

ヴィヴィオとアインは互いに顔を見合わせた。

「私や彼女もそうですが互いに練習する時かノーヴェさんとやるときは、その大人モード？というのでやります」

「そういえばノーヴェがヴィヴィオの師匠って言ったな、誰かが」

ギンガだっけ？

しかし、その時だった。俺の脳裏に何かが閃いたというより思いついた。

「ヴィヴィオには師匠がいるけどアインにはいない、なるほどそう

なると・・・」

いいきなり一人でぶつぶつ言っているとヴィヴィオが言った。

「ま、まぁとりあえず練習しよ、練習」

「そうだね」

「うん」

ヴィヴィオとアイン、リオとコロナのペアで組み手をしている。
練習いていると着替えてきたノーベェが色々と指導している。

そんな中レイはふらっと消えた。

それから３０分後

黙々と練習していくヴィヴィオたち。
レイは公民館のどこかを歩いていた。

「・・・師匠、いい響きだ」

などと言っていると目の前の人とぶつかり軽く謝ったがそうはいかなかった。

「ちょっと兄ちゃんよぉ？」

「ん？」

それからなぜか色々と揉めてしまい。

「勝負だ、こらっ！」

となってしまった。

その光景をギャラリーが見逃さなかった。

いつのまにか二人を中心となり練習していた者たちも手をとめそれを見ている。

「なんで、こうなる」

「兄ちゃん、やったことがないなら手加減してやってもいいぜ」

「あーやっぱ外なんかに出るんじゃなかった」

「てめぇ人の話を聞いてるのか！？」

「だりぃ」

男はプッツンしたらしい。
そんな出来事をヴィヴィオをたちもみていた。

「兄貴、なにやってんだ?」

「レイぱ、レイ大丈夫かなぁ」

「あの・・・レイさんストライクアーツやってことがあるんでしょうか」

「多分ないよ」

「でも、相手の人かなり悪い人だけどそれなりには腕は立つって評判らしいです」

と面々が言っているが当然彼には届かない。
すると男の方から仕掛けた。

シュッ!シュッ!

彼の前でパンチやらキックやらをしているがレイは一歩もというか身体を動かさない。

「なんで、レイさんは避けようとしないんですか?」

「避ける必要がないからさ、相手は挑発してるだけ。兄貴にはそれがわかってるんだ」

「私たちも見てる側でそういうのがやっとの感じでわかりますけど・・・」

自分自身がそうだったらと思うとそんなことわかるはずがない。そうリオとコロナは思っている。少なくとも三人はわかっている。

「どうした?怖くて動けないのかぁ?」

「・・・・・」

「ちっ!むかつく野郎だ、ぜ!」

顔面向けて正拳突きを放つがレイは簡単に避ける。顔だけ

「お前無駄が多すぎる」

「なにっ!」

男は一旦間合いをとった。

「それにしてもレイ、中々反撃しないね」

「そりゃあ素人相手に手加減は難しいからなぁ兄貴の場合」

『手加減？』

二人そろってノーヴェに聞いた。

「ああ、兄貴はあたしらみたいな奴らにはそれなりに手加減できるんだけどなんていうのかな例えるなら二人みたいな人には手加減が難しいんだよ」

「それってどういう意味ですか？」

「兄貴はあたしたちの力量を知っているからどのくらい手加減できるかわかるけど、知らない相手ましてザコ相手だと転加減ができないって兄貴はいってたけど」

二人はいまいち理解してなかった。

喧嘩が始まって5分が経過した。

「これで、終わりだ――――――！」

と言いながら突っ込んでくる彼。

そんな彼をレイは―

「単純すぎるんだよ」

その時その場にいた誰もが目を疑った。
男がレイとぶつかる直前男はいつの間にか宙を舞い、床にたたきつけられていた。

「「「「「「「お～～～～～～パチパチパチパチ！」」」」」」」

傍観していた人たちが歓喜をあげ拍手をした。
そんなことに見向きもせず彼女達の方へ戻って行った。

《休憩所》

休憩所に戻った彼はテーブルに顔を埋めている彼を見ていた。

「あー動いたから疲れたぁー」

「はい、兄貴アイスコーヒー」

「あんがと。で、お前は練習しなくていいのか？」

「ん、今からいくけど兄貴はどうする」

「もう少ししたらいくわ」

「了解～」

―兄貴にしては珍しいかもな

レイはクリスを中継にして練習の様子を見ていた。

「リオとコロナだっけ？二人はまだまだだが筋は悪くない。それにヴィヴィオはノーベェに鍛えて貰ってるだけ様になってるな。アインは・・・我流というか一人でよくここまでできたもんだ」

いくら血を濃く受け継いだからといって一人じゃあ限界があるか・・・

「やっぱ師匠やってみようかな・・・・２８２８２８２８」

それからお昼。

彼は突然言い出した。

「アイン俺を師匠にしないか！？」

「―は？」

「何言ってんだ兄貴？」

「いや、ヴィヴィオにはもうお前がいるし、ヴィヴィオのライバルとしてアインにも師匠は必要かなと」

「お、俺はべつに師匠とかじゃ・・・」

本当は嬉しいのに素直になれないノーヴェ

「私に師匠は必要あ―」

「いるよな♪」

「―はい、お願いします・・・・」

『―今の半ば強引じゃなかったかな？』

―レイおじさんに逆らえるわけがありません。というか逆らえない。

「という訳だ、ヴィヴィオ！俺はとうぶんそっちには帰らないから夜・露・死・苦」

「えっ、なんで！？」

「さぁーいくぞ、アイン特訓だっ――――――――――！」

彼は何かを誤魔化すかのようにアインを連れ逃げた。そう逃げたのだ。

それからというものアインがいなくなってから1時間ほど練習して解散となった。

おまけ

前回入れようと思って忘れていたネタ

それは、ヴィヴィオが神乃家で遊んでから数日のことだ。
ヴィヴィオはなのはがいないのを見計らってふフェイトに聞いてみた。

「ねぇ、フェイトママ」

「なあに、ヴィヴィオ」

「フェイトママ、なのはママに内緒でパパに会いに行ってるんでしょ」

「ぎく!!!!」

「ねえ、どうなの？」

「そ、そんなことない『嘘だ！！！！』ひ！」

「ヴィヴィオは知ってるんだよ。本当は、なのはママに内緒で週に2日も会いに行ってること」

フェイトは先ほどから体をぶるぶるふるわせている。

「お、お願い。い、言わないで」

「どうしよっかなー。なのはママだけ不公平なんてよくないよね」

「そ、それは」

「本当、よくないよね」

「お願いヴィヴィオ！なのはには絶対言わないで！言ったら頭冷やされるどころか命が消えちゃうよ！」

大げさと思うかもしれないが彼女ならやりかねない。

「だから、言わないでヴィヴィオ！なんでも言うこと聞くから！」

待ってました、その言葉。と言わんばかりにヴィヴィオの顔は笑っていた。

「本当？」

「本当！」

「じゃあ、これは契約だからね」

「うん！」

それから、ヴィヴィオはいつのまに制作したのか契約書なるものを取出し、サインさせ、判子まで押させた。

ちなみに、ヴィヴィオも書いたが、フェイトはパニックで気付かなかったのか。

フェイトは絶対に約束を守るに対し、ヴィヴィオは言ってはダメとか書かれていなかった。

結論

ヴィヴィオ、恐ろしい子！！

第１０５話　覇王登場（後書き）

さて、アイン登場。

大好きなキャラの一人ですよ。漫画みたとき電流はしったもん

次回は、まあ、特訓というか自分でもよくわからないんですよ

コーチとか特訓とか全国大会とかトップをねらえ、とかエースをねらえとか。

あ、俺はいったいなにを言っているんだ？

それと、今回のおまけ本編でもちゃんと引き継ぐ予定ですのでどこかで出るかは私も未定なんですけどね

第１０６話　少女誘拐・・じゃないよ！（前書き）

正直いうとアインが断空拳使ったとき俺の頭にアレが浮かんじゃって、いや、やってやるぜーとかいうね、アレ。だから、アインでも技だしたいなーって思った

まあベタなネタなんだけど

第１０６話　少女誘拐・・じゃないよ！

＊＊＊公園＊＊＊

あれからレイはアインを拉致・・・もとい誘拐じゃなかった、連れ出してから二人は近くの公園に訪れていた。
なぜか、辺りはもう暗い

「一つ聞きたいんですがなんでこんなことしたんですか？」

とアイン（大人版）で迫られた。しかも互いに正座で。

「理由は面白そうだから。というのもあるけどただ単に俺が楽しみたいだけ」

「・・・もう、おじさんはそういう人だったこと忘れていました」

呆れてものも言えないとはこういうことだろうかとアインは思った。

「というわけで住み込みでお前に色々と教えてやる」

「って、住み込みで、ですか！？」

「ああ」

「あなたにも帰る家があるでしょう！？」

アインもそのことは聞いていたようだ。ちなみに、娘がいるということは聞いていない。

「家事をするのがもうメンドクサイんだよ。いいか。朝を起きて飯を作るのも俺。洗濯するのも俺。昼飯を作るのも俺。それからぶつぶつ・・・」

今度は愚痴を言い始めた。

だが、アインは直感した。

―女がらみですか・・・・

だが、彼女はそれを聞いても否定はしなかった。

「でも、私は断るつもりはありませんでしたよ」

「そうなのか？」

―俺はてっきり断ると思って強引に言ったのだが・・・

確信犯がそこにいた。

「前に私が物心ついたとき、一緒に組み手をしたことを覚えていますか」

「あ、あーやったやった。お前はまだ小さくてなぁ。突きをするなり蹴るなり大人ぶってたっけ」

「・・・・・」

アインは恥ずかしいのか顔をうずめていた。

「で、それが?」

「はぁー覚えていないのですね。あの時もし、私があなたから一本取れたら私のお願いを一つ叶えてくれる約束でしたよね」

「・・・・・言ったけ?」

「言いました!」

―何がこいつを駆り立てるんだろ?

「―言ったよ、うん、言った」

俺は場を困惑させると面倒なのでそういうことにした。

「・・・・・やった（ぼそ）」

「なにか言ったか」

「いいえ、それでは特訓を始めましょうか」

「ああ」

二人は立ち上がりレイの服装はなぜか拳法の服になっていた。
胸には中華〇と書かれている。さらに、付け髭も。

「で、なにを教えてほしい？」

「なにって言われましても・・・」

「とりあえず・・・組み手でもするか」

「わかりました」

それから二人は組み手を始めた。
基本的レイは自分から責めない。とりあえずアインの攻撃を受け流す。

「ほ～ずいぶん成長したじゃないか」
「・・・・ハッ！」

しかし、彼女の攻撃はあっさり流されてしまう。
向かってくる拳を手のひらで受け流す。円運動ともいえる動きを彼はしていた。

―・・・試しにやってみますか

足先に力ため一気に拳を彼にぶつける。

「覇王　断空拳！」

「あらよっと」

彼は彼女の拳を軽くよけ、腕を掴み、くるっとアインは一回転した。

「えっ・・・ぐっ！」

気づいたら身体は一回転しそしたら身体は地面にたたきつけられていた。

「？？？？」

「お～い、大丈夫か？」

―今いったい何が起きたのですか！？

アインにはまったく訳が」わからなかった。

「ちなみに今のは相手の力を利用した技だ。技だったっけ？簡単に言うと俺はただお前の力を利用して投げ飛ばしたわけ」

「はぁ？」

「ん～実際にやったほうがわかりやすいか。ゆっくりでいいから俺に拳を放て」

「わかり、ました」

アインは彼の言うとりにした。

師匠が弟子にお手本を見せるかのような感じでやった。

「つまり、俺はこうやってお前の手首を持って―こう！したわけ」

「きゃっ！？？？？」

するとアインはまた宙をまった。今度は一回転したらまた元の場所に戻っている。

「ストライクアーツや格闘戦においてこの技はかなりの確率で有効だ。ただ、相手の動きを完全に見切れなきゃ意味はないが・・・・練習すればお前もできるだろ」

「この技は守りの武術なのですか」

「簡単にいえば護身術だな。ただ、銃とかそういう飛び道具にはちとキツイが」

「しかし、私が教えてほしいのは護身術ではないのですが―」

確かに護身術は役に立つがストライクアーツでは守るだけではいけない。時には攻めなければならない。いや、攻めず勝てることなどない。

「つまり、攻めの武術を学びたいと」

「はい」

「ん～じゃあアレやってみるか」

「アレ？」

「あーお前の覇王なんとかの足バージョン命名するなら「覇王　断

空脚」かな」

「でも、私はまだ拳でしかできませんが・・・・」

アイン自身もまだまだ未熟のためまだ拳でしかできない。

「んまぁ、手本を見せてやる―」

「見つけたぜぇ！！！！」

「あぁん？誰」

話の途中で誰かが割って入ってきた。

「テメェ、もう忘れたのか！」

「だから誰？」

「さっきあなたが投げとばした人ですよ」

「ああーいたね。そんなやつ」

男は先ほどレイにぼこされた男だった。

「話にならなねぇ、おい、やっちまえ」

彼の後ろからぞろぞろと不良どもがやってきた。
王道なのかどうかは知らないがニット帽からバットまで。
そこら辺のチンピラである。

『へ～あいつが』

『おい、あの子可愛くねぇ？』

『ねぇ彼女俺たちと遊ばない？』

『巨乳♪いただきまーす』

『アインたんｋｔｋｒ』

などと言っている。

「ちょうどいい、あいつらを的にしよう♪」

「えっ？」

「覇王！！断空脚！！

例えるならそれはカマイタチのようなものだ。
ちょうど３０人ぐらい横に並んでいる不良どもぐらいの長さの弧を

描いた。

ドッカーン！！！

なんか知らんけど爆発した。

「とまぁこんな感じ」

「あのー怒ってません？」

「怒ってないよ～」

顔は笑顔だが雰囲気というかそういったものから感じから怒っているとアインは思った。

「さて、奴らが来る前にとんずらしないと」

「奴ら？」

「まぁ後で話す―いくぞ！」

「えっ？」

そして、二人はその場から消えた。

後に地上の警備隊やら報道陣が騒ぎたてていた。

技紹介

≪覇王　断空脚≫

※最初に言いますが、作者はｖｉｖｉｄを単行本でしか読みません。
もし、原作であったら教えてくれると幸いです。

断空拳の足バージョンだがレイの場合は斬撃が飛ぶ。
なので、近距離、中距離と使用が可能。

伐採するときは便利だなこれ

第１０６話　少女誘拐・・じゃないよ！（後書き）

誘拐、拉致？いいえ、連行です。

今更言うまでもないがレイはロリコンだぜ・・・

嘘だけどな

次回、コーチ誕生にご期待ください

第１０７話　覇王をねらえ！（前書き）

最近何がしたいのかわからない

第１０７話　覇王をねらえ！

＊＊＊アインハルト邸＊＊＊

「へーここがお前の部屋か。筋トレ用具とかそんなもんしかないのか」

「いけませんか？」

「いや、少し女の子らしいものぐらい置いとけ」

彼の言うとおり筋トレ用具やあと生活最低限必要なものしかない。いくら悲願とかそんなもん、いやそれのだけのために色々と捨て過ぎている。

「で、奴らって誰ですか？」

「なんのこと？」

「大人のくせに誤魔化すのはどうかと思います」

「・・・・・」

子供のくせに痛いとこつくよな。

「奴らって言うのは・・・まあ、管理局だ」

「管理局？どうしてですか？」

「総帥の俺が言うのもなんだが・・あんまり信用しない方がいいぞ」

「？」

「まあいい。さて、明日から特訓をするわけだが・・・やっぱり形からだな」

「？？」

≪アインハルト≫

―あんまり信用しないほうがいいぞ―

私はその言葉の意味を考えていたせいで眠れませんでした。

なぜ、あの人があんなこと言うのか。それがわからなかったから。

―お前はもっと自分のことを考えたほうがいい。お前はそういう存在だからな―

さらに、そう言われたのですが全然わかりません。
私は、アインハルト・ストラトス。
彼の子孫にして覇王流を受け継ぐ者。

あとは・・・

しかし、わかりません

≪レイ≫

しかし、まあ、奇妙なこともあるもんだな。

彼はアインとの再開を心なしか喜んでいた。
最後にあったのは彼女がまだ3、4歳のころだ。実を言えば、カオス時代の時でよかったのだろうか?そのぐらいに会っていた。もしくは、なのはとまだ行動を共にしていたときだな。

当時を思えば、彼女―オリヴィエの複製体が生まれるとは思ってみなかった。
イクスヴェリアについては彼女が静かな眠りについていたからあまり気にはかけてはいなかった。

なんだかんだで目覚めたが。

今現代に再び存在している王たち。
考古学者たちやその道の奴らが知ったらどう思うだろうか。現代でも解明されていないことが解明されるかもしれない。

また、その特質、異質な存在として扱う人間も出てくるかもしれない。

今も、昔も〇〇の子孫と騒がれればそれなりの騒ぎになる。

さて、もう寝よう。明日から特訓だからな

≪翌日≫

どうも、おはようございます。アインハルトです。
今、私の目には不思議な景色が映っています。
海、海岸。
後ろを、向けば山、神社に長い階段。
武道場。

なにやら、ＳＡＳＵＫＥみたいなステージ。

ここは、ミッドチルダでもなくグラナガンでもありません。
いいですか、ここは（ｒｙ

「ここは、俺のプライベート空間、特訓ｖｅｒ」

すると、某コーチを沸騰するようなサングラスに竹刀にジャージ。

「今日から俺がお前を数日で全国大会にいけるようにしてやる」

「いや、全国大会って・・」

「口答えは許さん」

「あの、おじさま？」

「おじさまではない！コーチと呼べ！」

「・・・わかりました、コーチ」

「声が小さい！」

「はい、コーチ！」

アインの長い特訓が始まった

思いこんだら～試練の道を～
行くが女の　ド根性～
真っ赤に燃える　王のしるし～
覇王の星を　つかむまで～
血を汗流せ　涙ふくな～
行け行けアインハルト～　どんどん行け～

「うっ・・む、無理ですコーチ・・・」

「何が無理だ！」

今現在のアイン（大人）は全身ギプスをつけられている。
突きをしように腕を上げ、曲げることすらきつい。

「そんじゃ、一軍なんて無理だ！」

「私・・・別に・・・」

苦しくたって～　悲しくたって～

リングのなかでは平気なの～

拳がうなると～　胸がはずむわ～

「いくぞ！」

レーシブ

「はい！」

トス

「きゃ！」

スパイク

「そんなんじゃ世界大会はおろか地区大会にだって勝てないぞ！」

「はい、コーチ！」

ワントゥー　ワントゥー　アタック～

「だけど涙が出ちゃう　女の子だもん」

涙も汗も　若いファイトで～

青空に遠く　さけびたい

アタック　アタック？1

アタック　アタック？1

「コーチ、もう無理です」

「何、弱音を吐いている」

「だって、私なんかがヴィヴィオさんに敵うわけないんです！」

「なぜだ」

「だって、彼女は・・・（ｖｉｖｉｄの）主人公だから！」

「本当にそう思っているのか？」

「・・・」

「なら、第三者に聞いてみるか」

「え？」

すると彼女も光の玉が舞い降りた

天の声「アインハルトよ。ぶっちゃけ、俺ヴィヴィオより君のが好きだから」

「・・・」

天の声「よ、ようは、主人公を倒せばお前が主人公になるんだよ！」

「・・・コーチ」

「なんだ」

「私、頑張ります！」

アインは洗脳された

「よし、今度はイナズマキックの特訓だ！」

「はい！」

それから数日が経過した

といっても、外の時間とは違うのでほんの数時間程度なのだが。

それ、なんて精神と時の部屋？

＊＊＊アラル港湾埠頭　廃棄倉庫区画＊＊＊

この場所を聞いてわかる者も少なからずいるだろう。

そう、ここはかつてヴィヴィオとアインハルトが決闘したあの場所である。

ここに、今ヴィヴィオと観客を含めたものたちがやってきた。

自分の目の前にはアインハルトさんと・・・パパ？がいる

なんか、仁王立ちして。

そして、先に口を開いたのはレイだった。

「ふん、よく逃げずに来たな！」

逃げずって・・・

ヴィヴィオは思い出す。
ほんの少し前の出来事を・・・

≪数時間前≫

ヴィヴィオは普通に帰宅途中だった。
リオとコロナと別れ真っ直ぐ家を目指し歩いていたのだが・・・そこに！

ザッ！！

「！」

彼女の目の前には・・・矢文が突き刺さっていた。
ついてあった手紙を読むと

「　　決闘だ！！！　　」

その一言。
で、下の方に場所が指定されていて自分だけはどうしよもないので周りに相談し、で今に至るわけなのだが。
相手が二人だとは思ってもみなかった。

「あの・・アインハルトさん？」

「・・・」

彼女は眼を瞑ったまま立ちすくんでいる。
寝ているわけではない。
精神統一、集中ともいえる。

「ふっふ。どうだ、この集中力。俺がほんの手を貸せばこんなにもレベルアップが可能なのだ」

「（確かに）」

ノーヴェは、彼の言うことを理解していた。
毎日見ているわけではないが今までの彼女とは少し違う。彼の言う通レベルアップしているといっていい。

「さあ、野球でもバレーでも宇宙怪獣でもかかってこいやーーー！！！」

「「「（　。Д。）ポカーン」」」

彼は何を言っているのだろう・・・

すると、なのはとフェイトが彼に近寄り方に手を置く

「レイくん・・・病院いこうか」

「は？」

「大丈夫だよ。そんな兄さんでも私の兄さんだから」

「へ？」

一方アインハルトには・・

「アインハルトさん、パパに何されたんですか？大丈夫ですか？」

「なにを言っているのですか？」

至って彼女は正常である。

ちょっと洗脳されてはいるが。

「ええい！離せ！アイン、今こそあの奥義を『はい、あんたは少し黙っていましょうね』がはっ！」

すると、なのはからクイーンにチェンジし、頭を思いっきり殴った。

『まったく・・・』

すると今度はアインハルトに方に歩いていき・・・

『秘儀斜め４５℃！』

と言いながらアインにチョップする

「ちょ、ママ？！」

俗に言う、映らないテレビをたたくようなものである。

『よく効くのよこれ。それじゃ』

「もう・・」

すぐに元のなのはに戻る。もう、慣れっこである。
そして、チョップを食らったアインハルトはというと

「あ・・なぜ、ここにヴィヴィオさんが？私は・・・あれ？」

もとに戻っていた

＊＊＊アインハルト邸＊＊＊

「もう、こんなことはしないでくださいね？おじさま」

「善処する」

なんだかんだで決闘は中止。
二人は戻って夕飯を食べていた。

―特訓の時の記憶はなにのに・・なぜか強くなったと思うのはなぜでしょか？

まあ、あれだけ変態的な特訓をすればそう思っても不思議ではない。

「そう言えばさ、お前俺に一本取れたらお願いがなんとか言ってただろう？」

「はい」

「それが叶ったらお前、なにを俺にお願いするんだ？」

「そ、それは・・・／／／／」

ピンポーン

「ん？誰だ、珍しい」

レイは玄関に向かっていった

「あ・・・・」

ここは、救われたというべきなのでしょうか。
それに、言うのは恥ずかしいですし。

「お嫁さんにしてください」なんて・・・

・・・・・・・

あー、こほん。
諸君落ち着きたまえ。考えてもみたまえ。
幼い少女がかっこいい兄替わりみたいな人がいたらそういうのは定番だろう。

結果
アインハルトは乙女だった。

一方レイは

ピンポーン

「はいはい。今開けますよーっと・・・・」

「あ、れ」

ガチャ

レイは何をみたのか。開けたらすぐに扉を閉めた

「なにもいなかった。悪戯だった。うん、そうしよう」

ガチャガチャ・・・カチャリ

きー

「もう、酷いですよ。“総帥”」

目の間にはすずかだ立っている。
しかし、どうやって開けた？

「もう、いきなり閉めるなんてひどいじゃないないですか」

「ピッキングツール持って言う台詞とは思えん」

「さあ、帰りますよ」

「い、いやだーーー！！」

だだだだだ

「あ、おじ、さま！？」

「ぐへぇ！」

レイは突如鎖によって体を封じられてしまう

「もう、いい加減にしてください。あ、お邪魔してますよ」

「え？え？」

「仕事もありますし、家の方でもたいへんなんですから、帰りますよ」

「ちょっとは親孝行とかしろ！」

「無理ですよ・・たぶん。さ、いきますよ！」

「く、じ、自由への逃走が・・・」

「もう、諦めてください！」

ずるずると引きずられていくレイ。それをみていることしかできなかったアイン。

「・・・・」

一人残されたアイン。
再び戻った一人の時間。比べてみれば短い期間だったが楽しかった。
うれしかった。
あの人といられたから。
だけど・・・

「リバース!!」

「ひゃ!!!」

なぜか、再び舞い戻ってきたレイ。鎖にまかれた状態で。

「これ、俺の家の住所だ。たまには遊びにこい。じゃあ、なーーーーーー!!!」

引っ張られたのだろうか。再び彼方へ舞い戻る。

住所が書かれた紙をみて、アインは笑みを浮かべる

「楽しみです。おじさま」

第１０７話　覇王をねらえ！（後書き）

お嫁さん宣言はやりすぎた

だが後悔はしていない

最近感想が減ったのでちょっとさびしいです。

なのでお待ちしております

第１０８話　温泉編－１（前書き）

展開早！

どうも、不知火仁です。

前回のアレはなんだったのか・・・

大丈夫だ、アレは前フリだ。意味はない確率のが高い

とまあ、温泉編です。

タイトルを考えるのが難しいのでその１的な感じになってしまいましたが許してね

第１０８話　温泉編－１

＊＊＊第?:管理外世界＊＊＊

ここは、名もない世界。
“人”は誰もいない。でも、動物たちは存在している不思議な世界。
ここに来るためにはそうだな。
身近な例で言うならミッドチルダからとある管理世界を経由し、そこからこの世界に訪れることができる。
しかし、ここに来るためには条件がある。
この世界の“管理者”からの許可または招待状を持つ者にしかここを訪れることはできないのである。

噂では有名人が出入りしているとか、政府の人間が秘密の会合場所として使っているなどと色んな説が浮上している。

だが、こんな世界に一つだけ建築物が存在する。
この世界のどこを探してもそれしかない建物がある。
それ建物名を「時の湯」と呼ばれている。そこはすべてを癒すと呼ばれ程の隠れた名所。
しかし、今は・・・・

・・・・・・・

キンキン

ギュイ～～ン

カンカン

ドドドドドド

「よし、二人はこの木をこんな感じに斬ってくれ。1ミリでもずれたら自分で取ってきてもらうからな」

「はい、ご先祖様！」

「は～い」

私の目の前で二本の大木が二人によって切断・・いや、どうみても斬っているようにしか見えないのだが・・・それがいくつもの材料になっていった。

「えーと・・・これとこれかな」

「あとこれもだな」

「資材の最終チェックはこれで終わりです」

少し離れた場所で最後に搬入した資材をチェックしている三人。

「うーん、トンネル以外にも大工仕事とか経験しておいてよかったかな～」

「これは、なんですか？」

「トンカチだよ」

「これは？」

「釘」

一人はどうやら経験者。しかし、残りは未経験。
彼女が手取り足取り教えている。

そして私は・・・

「第2と第3はもう少しで終わりかな。問題は第1大浴場か・・・。デザインはもう決まってるからあとは向こうが終わり次第かな・・・」

自分でデザインした浴場を最初から最後まで構成し、完成させていた。

「はぁ・・・」

本来なら喜んでもいいのだが、今回ばかりはそういう気持ちになれなかった。
本当なら、本当なら・・・・・

＊＊＊無人世界カルナージ＊＊＊

その名の通りここは無人世界。
しかし、人が住んでいないわけではない。
住んでいるのはあのアルピーノ一家である。事件以来、レイがこの場所を提供し二人は静かに暮らしているのである。

そんな中、ルーテシアは今日ほど気分がいい日ないと思っていた。
理由は、簡単だ。恒例の元六課の皆さんが遊びに来るからだ。
今回ははりきって

「ふふ、自分の才能が恐ろしいわ・・・」

それもそうだろう。だいたい、一人でこんなものを建造してしまうのだから・・・。

「レイヤー建造物で組んだ訓練場は陸戦魔導師の練習に！」

バン！

「私とガリューの手作り。アスレチックフィールドはみんなのフィジカルトレーニングに！」

ババン！

「我が家の横に建築した宿泊ロッジも内外ともパワーアップ！（設計わたし！）」

ボンッ！

「掘ったら出てきた天然も癒しの空間にノリノリ改造！」

ポカーン

「完璧！もと六課の皆さんもヴィヴィオたちも！我が家にどーんとおいでませーーー！」

ふはははは！

と屋根の上で笑い声が響き渡る。

『・・・なんかいい気分のところ悪いがちょっと手伝ってくれ』

「へ？」

そして、今に至る。

私、ルーテシア・アルピーノはただいまここ「時の湯」にて改装のお手伝い中なのである。

「はぁ」

もう一度溜息をついてしまう。

嫌だというわけではない。むしろ、自分の力を評価されここにいるのだ。

嫌なわけではない。

ないのだが・・！

むしろ、空いている場所は好きに使っていいと言われ好きに改造した。
それには理由がある。
それは、本来我が家に招待するはずだった彼女らのためだ。
それをあの人に話したら

「あー、まぁなんだ。こっちも悪いから招待してやれ。見た目はこれだがな」

そう、みためはこれだが（周りから天幕で覆われ安全第一と記されている）

だから、これをみたときのみんなの顔を浮かべると・・・自分が情けなくなってきた。

＊＊＊〇〇港　受付＊＊＊

一方異世界旅行ということで首都グラナガンから近くの港へ着いたなのは達一向。
（メンツは漫画と一緒です。エリオとキャロは合流しています）
しかし、場所がルーテシアたちがいる世界ではなくなってしまったため彼女が紹介した場所へ向かおうとしていた矢先。

「ん～何度みてもないね、フェイトちゃん」

「そうだね」

それもそのはずだ。
名もない世界。一般には知らされていないからだ。

「ルーテシアちゃんが言うには受付にこの招待状をみせればいいらしいけど」

なぜ、最初からそうしなかったのはちょっと変だなと思ったからである。
そのまま、なのはとフェイトは受付にいるお姉さんに招待状をみせるとお姉さんは顔の色を変えた。

「・・・確かに承りました。では、あちらのゲートを通ってください。奥に係員がいますので再びこの招待状をみせてください」

「わかりました」

・・・不思議でならなかった

「どうだったのママ？」

「うん、あそこのゲートにいけばいいみたい」

「じゃあ、いこう！」

そのままゲートを通り抜ける彼女たち。

それを確認すると受付のお姉さんは

「・・・にしても、一般人が、ね」

そのあとはＳＰらしき男性が待っていて招待状をみせると素直に通した。

次元船の中は飛行機で言うならファーストクラス。

子供たちはものすごく喜んでいたが大人たちはどうも不思議でならなかった。

それから1，2時間あまりでその星に着き、彼女たちを降ろし帰って行った。

「なんか、行っちゃったよ・・・」

「う～ん、いいんじゃない？」

ここまで来たらいくしかない。
ということで歩くこと数分。
目的地の旅館がみえてきた。

最初、彼女たちは旅館と聞いてピンと来てはいなかった。わかるとしたら、なのはぐらいであろう。
木造建築で綺麗な場所。天然温泉などなど。

だが、それをみたなのはの旅館というイメージが崩れた。

それもそのはずだ。
なぜなら、今の旅館は見える範囲ではどうみても改装中で安全第一と書いてあり、ここからでも工事の音が聞こえてくるのだから。

『・・・・・』

空気が重い。

それでも、引き返すことができない彼女たちは入口の前まで来た。
その前には一人の女性が待っていた。

「ようこそ、我が時の湯へ。高町様とその御一行様の皆様方。
心からお礼申し上げます」

「は、はい。それと・・」

「申し遅れました。わたくし当旅館の女将の時乃冴子と申します」

「あ、ご丁寧にどうも」

「ですが、ただいま我が時の湯は改装中でして、それに・・・」

「それに？」

「ただいま、肝心の温泉がありません」

『・・・・・・』

少しの間を置き

『えーーー

第１０８話　温泉編－１（後書き）

初めに言っておきますが人間はいないと書いてありましたがその通りです。

「だって、女将でたじゃん」

と思ったかた次回までまってください

ちなみに、原作通りにしなかったのには理由があり、ていうかネタばれすると修羅場ばっかかもね、うん。

それと、次回更新はかなり遅めです

その代わりですが設定集というか登場人物などを少し増やしたいと思っています

その時は活動報告で連絡します

では、これにて

第１０９話　温泉編－２（前書き）

というわけで温泉編その２

正直あまり進んでないんですけどすみません・・・

第１０９話　温泉編－２

「ただいま、肝心の温泉がありません」

『えーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー！！！！！』

彼女たちの叫びが響き渡る。

「すみません、大げさ過ぎました。あるにはあるんですけど・・・」

「ど、どういうことですか？」

「我が旅館には３つの温泉がありまして、その２つはあるんです。
ただ、メインである秘湯の源泉が枯れたかで出ないんです」

「あ、じゃああるにはあるんですね」

「ええ。見た目もこれですが明日には終わりますので」

「なら、よかった」

と、一息つく一向。
すると玄関から一人の女性が現れた。

「冴子さん、なんか悲鳴みたいのが聞こえたんですけどなにか・・・げ」

「あら、セッテちゃん。ううん、違うのよ。お客様」

『セッテちゃん!?』

ひょっこりと顔を出しているのは紛れもなくセッテだ。
ただ、違うと言えば着物を着用しているぐらいか。あと、髪が長いからお団子になっている。

「セッテ、お前・・」

一番に反応したのがノーヴェだった。

「・・・ッ!」

するとセッテは逃げた。

「セッテ可愛い」

「いや、そんなことよりも」

ジリリリリリ

なにか時計が鳴る音が聞こえた。

「おっし、休憩～」

どこからか聞きなれた声が聞こえる。
すると、上から人が落ちてきた。いや、降りてきた。

「休憩、休憩♪」

「・・・今日のおやつはなにかな～」

「僕は羊羹がいいかな～」

「はぁ・・とりあえずお茶が飲みたいです」

「力仕事はつかれる・・・」

『・・・・・・・』

『・・・・・・・』

無言の時間が流れる。

なのは達から見れば彼女たちの姿はありえない。
理由は簡単。今の彼女たちの姿は所謂工事現場でおっさんたちが着ているあれだ。
さらには、ヘルメットは安全第一。

「なんだ、お前ら来てたのか」

「来てたって・・」

「冴子、茶菓子は？」

「用意してありますよ」

「お～し、いくぞ～」

『お～』

『ちょっと、待てい！』

「ぐほぉ」

逃げようとしたらレイだけ捕まった。

「ちょっと、これどういうこと兄さん！」

「そうだよ、私たちからの誘い断ったくせに！」

そうなのだ。
今回の旅行になのはたちは彼を誘ったのだが彼は断った。

「なんで、俺がこんなめに・・・」

「なんでって！」

「レイくんが悪いんだよ！」

「ち、違うんです！」

「「？」」

奥から声が聞こえ振り向くとルーテシアがいた。

「ルーちゃん！」

「その・・」

「だから、元々俺たちはここにくる予定だったんだよ。けど、こういうことになっちまって。それで、ルーテシアにも協力頼んだ。そしたら、お前たちが来る予定だって聞いたからここに招待したんだよ」

「そうなの、ルーテシア？」

「はい・・・」

「逆に感謝しろよ。お前たちじゃ一生かかってもここに来ることなんてないんだからな（キリッ）」

「威張るんじゃありません！」

ボコ！

あのフェイトが容赦なくレイを殴った。

「痛ってなー。本当だぞ。ここに来る途中いろいろ可笑しかっただろう？」

「確かにそうですよね」

「ここはな、一般人じゃ絶対これないんだよ」

「え、そうなの？」

「ここに来られるのは世界のトップとか、政治家。理由は、温泉が原因でな。
疲労回復、お肌すべすべ、なんか肩こり解消、なんか若返った、清め、その他ｅｔｃ・・・」

「なにそれ」

「それらすべてを備っているのがその秘湯の湯で、あとの二つは至って普通。原因はわからんがな。一応それ目当てでくる奴もいるがメインは会議とかそういった内緒話に使われるんだ」

「えーと、つまり？」

「つまり、ここは超がつくのほどのＶＩＰしかこれない場所というわけだ」

『なん・・だと・・』

「って、そんなこと言われてもね？」

『ねえ？』

彼女たちがそう思うのは無理もない。
ただ、そういわれればそうだとも思うが。

「まあ、いいさ。それじゃあな・・あ。それとあんまり冴子に迷惑をかけるなよ。
祟られるぞ（笑）」「

彼は不気味な笑顔を浮かべて旅館の中に入っていった。

「もう、レイったら」

「えーと、どう意味？」

「大丈夫ですからあまり気にしないでください」

冴子はそういうとなのはたちを部屋に案内した。
外はあれだが中はものすごいほど綺麗であった。さらにはまさに旅館の一言である。
そして、部屋の割り振り
一号室
なのは・フェイト

二号室
ヴィヴィオ・コロナ・リオ・アインハルト

三号室
スバル・ティアナ・ノーヴェ

四号室
エリオ・キャロ（公認だからおｋ）

と言う感じなりました。

今日はまあ、いろいろあったということで明日から本格的にやることになり、その日は静かに過ごした。

余談になるが夕食は絶品であながちレイが言ったことは間違いではないことに気づき始める彼女たちであった。

第１０９話　温泉編－２（後書き）

次回は旅行２日目

原作でいえば訓練してたり遊んでたりの場面になりますかね。

セインがいないが大丈夫か？

大丈夫だ問題ない

あ、それとこっちではもうエリオとキャロはできてるという設定にしようと思います。

だって、需要ないんだもん。この話だと

第１１０話　温泉編－３（前書き）

お待たせいたしました！！！

というわけで温泉編はまだ続くのですがタイトル的には今回で終わりです

第１１０話　温泉編－３

≪　翌朝　≫

「ん～、いい朝」

朝早く目覚めたなのはは廊下を出て、玄関に向かっていた。
外の空気を吸うためだ。

靴を履き、外に出ると女将である冴子がいた。
なのはに気付いたのかあいさつをしてくれた。

「あ、高町様。おはようございます」

「おはようございます。あの、様つけなくていいです。それと、なのはで構いません」

「そうですか。まあ、これも職業柄仕方ないのですが。では、なのはさん」

「はい」

「私が言うのもなんですが、これはいいと思いませんか？」

「これ？」

彼女が言う、これとは旅館のことだった。
すでに天幕はなく、安全第一もない。そう、改装はもう終わったのだ。
たった一晩で。

「レイたちには頑張ってもらいました」

「あ、はは（昨夜全然そんな音しなかったけど）」

「温泉の方は、第2と第3大浴場が使えますのでそちらを。第1大浴場はまだなのです」

「あ、いえ。大丈夫です」

「それと、ルーちゃんがあなた方のためにと。訓練場？を造ったみたいなのでそちらも。水遊びにいい川もすぐに近くにありますから」

「なにから、なにまでありがとうございます」

「いえ。これが仕事ですから」

それにしても、冴子さんって綺麗。人間じゃないみたい。
綺麗なロングヘアー。着物をきちんと着こなしていて。

「あの、一つ聞いてもいいですか？」

「ええ。いいですよ」

「その・・・レイくんとはどうゆう関係なんですか？」

昨日のあの会話だけでも二人それなりに仲だと思うし。なにより、レイくんのこと呼び捨てで読んでいたし。

「まあ、彼とは古い付き合いですよ。彼に色々と助けてもらって、その礼と言えばいいんでしょうか。ここを提供している。そんな感じです」

「そう、なんですか」

「ちなみに彼に恋愛感情ありませんよ」

「え、そ、そんなことではなく！！」

「ふふ。私には愛した夫がいました」

「いましたって・・・すみません」

「いいんです。それに、仕方がないことですもの。彼は“人間”でしたから」

「？」

奇妙なことを言ったことに気付いたなのは。しかし、あえて深追いはしなかった。
それは、触れてはならないことだと思ったからだ。

それから、まだ寝ていた彼女たちは起き、朝食をすませた。
なのはたち、現役組は訓練。
ヴィヴィオたちは、川で遊んでいる。
川で水切りを頑張ってやっている彼女たち。そんなところに―

「あ、パパ」

「んあ？ああ、ヴィヴィオか」

「パパと・・・アリシアお姉ちゃんとユキナさんはどこに行くの？」

「ちょっと、源泉を掘り当てにね」

「うん」

「へー。あ、パパ。水切りやってよ、水切り」

「・・・お前たちは先に行ってくれ」

「・・大丈夫？」

アリシアは何かを心配してレイに聞いた。
しかし、レイは。

「何がだよ？いいから、あとで合流する」

「わかったわよ。いきましょう、ユキナ」

「う、うん？」

二人は先に森の中へ入って行った。
残ったレイはヴィヴィオに水切りをやってみせようとするが。

「俺のなんて参考にならないぞ？」

「それでもいいから！」

子供というのはなんでもねだる年頃。それに、ヴィヴィオはレイが凄いことを知っているから余計にみたいのだ。

「はぁ・・・」

足だけ、川の中に入るレイ。裾をまくらずそのまま川の中に入った。
そして、普通に足を蹴りあげると

―ザバァァァァァン！！！

流れてくる川に向かって蹴り上げたそれは川を裂き、底をさらけ出せた。どこまで続くのかその斬撃はそのまま上流の方まで行って消えた。

「だから、言ったろ。参考にならないって。じゃあ、俺いくからな」

そういうと、彼は跳んで森の中に消えて行った。

『・・・』

「凄いね」

「うん・・・ヴィヴィオをどうしたの？」

「え、あ、うん。なんでもない」

自分から言いだしてなんだと思った。今のパパは怖かった。口調もいつも違っていた。

それは、ノーヴェも感じていた。

（兄貴の様子がおかしい？）

今の行為は大人げない、に近いだろう。いつもの彼ならちょっとは

ジョークをかましながら言ったのかもしれない。しかし、今の彼は違う。
人が変わっている。
違和感を残しながら時間は経ち―

夕方の森は意外と暗かった。あまり、光は薄暗い部屋に近い状態だった。
レイ、アリシア、ユキは森をてくてくと歩いていた。

「で、どうだ？」

「ん～・・・近いと思う」

源泉が出なくるのには理由がいくつかあり。その源泉が枯れたか、源泉が何らかの原因で塞がれたかだ。
で、アリシアの能力でそれを探っているのだ。ユキナも声は聞こえるらしいのだがはっきりと位置は特定できていない。

「・・・ＺＥＲＯ。ここら辺一帯をスキャンしろ」

『了解・・・近くに小さいですが。地下に小さな空間がありますね』

ＺＥＲＯはその座標を示しながら説明してくれた。

レイは二人に聞くとどうやらそこら辺から声が聞こえるらしい。
そして、移動すること数分。
ユキナが穴を掘り地下に降りた。
地下の空間の広さはそれほど大きくはない。高さは軽く１０メートルあるかないかだ。

「わぁー凄いや」

「これね。源泉を止めていたのは」

「そうみたいだな」

冴子が言うには少し前に地震があったと言っていた。そのせいで落盤して源泉を止めていたのだろう。

「さっさと終わらせるぞ。ユキナ」

「アイ、アイサー」

ユキナお得意の穴あけ工事の始まりである。
紅蓮を起動し、お得意のモード天で巨大ドリルなり岩盤を削る。
ドリルの先端が岩盤を貫いたのか少しずつ湯が漏れ始めた。
その時だ。レイがあることに気付いたのは。

―バリ・・・ドバァァァァ！！！

今までせき止めていたお湯が一気に流れ出すことを忘れていたのだ。
そして、三人お湯という洪水に飲み込まれるのだった。

≪　旅館　≫

夕食を済ませた彼女たちはお楽しみのお風呂タイム。
なぜかは知らないが第2、第3大浴場の効能は意外と普通らしく。
肩こりといった疲労回復だけだった。
それでも、日ごろ体に大きな負担をかけている彼女たちにとっては十分だ。

「いい、お湯ですね～」

「そうだね～」

幸せな気分。まさに今のことを刺すに違いない。
そんな、極楽な気分に浸っていると。

ゴォォォォォ

何かが揺れる音が響く。

「え、地震？」

「いや、これは地響き？」

―ゴォォォォォ・・・・・・

すると、いきなり音が収まったことに気付いた次の瞬間！

―ドォォォォォォン！

見事温泉が噴き出ていた。

「わー温泉の雨だ！」

と、喜ぶ子供たち。

「あれって、第１大浴場？」

方角的にはそうだった。３つある温泉は少し距離が離れて位置していたのだ。

―ヒュュュュュュ～

音が収まったと思ったら今度は変な効果音まで聞こえてくる。
聞き覚えのあるこの音に反応し、上をみあげると

―ザッパァァァン！！！

彼女たちがいる温泉へと落ちた。
落ちて数秒後。

「ぷっはあ！！いやー危なかった」

『ユキナ！？』

「あれ、みんな？」

「あー、死ぬかと思った！」

「あ、アリシア！！！・・あ、お姉ちゃん！？」

ついつい姉をつけることを忘れていたフェイト。
二人ともずぶ濡れである。まあ、服を着ているのだから当然なのだが。

「ど、どうして？」

「あ～、流されてきたとしか。あれ、レイは？」

「俺なら・・ここだ・・・」

ザァァアという音とともに現れた男レイ。
彼もずぶ濡れである。

「たくっ、どっかにブツケテ頭がいたい・・・」

『あ・・・あ・・・』

『・・はらはら・・・』

『き・・き・・』

彼女たちはあとから大変なことに気付いた。今、自分体は裸なのだと。
それは、もちろんヴィヴィオたちもわかっているわけで。

『『『『きゃぁぁぁぁぁぁぁ！！！！』』』』

あまりの大声にレイ、アリシア、ユキナの三人は耳をふさいだ。

「は、早く出て行ってよ！」

「えっち、変態、すけべ！」

しかし、レイはそれにまったく動じずむしろ・・

「“一々煩いんだよ。裸みられたぐらいでピーピー騒ぎやがって。殺すぞ”」

『・・・・・え？』

「！」

その台詞はどうみてもいつもの彼とは違っていた。昼間の時と同じくまるで別人だった。

しかし、アリシアはそれに気づいたのか。

「―レイっ」

「―！・・いや、すまない・・・でていく」

レイとアリシアはそのまま浴場を出る。

「一体、どうしたの・・・？」

二人は、着替えるために彼らの部屋に向かおうとしていた。その途中で冴子にあったのだが。

「レイ。ありがとう。これで、また・・どうしたの？」

「あ、冴子さん。実は・・って。レイどこ行くの！？」

「少し、頭を冷やしくる・・・」

彼はそのまま玄関に向かった。

残された二人は。

「冴子さん・・」

「ええ。ルーちゃんたちには悪いけどお風呂の修繕急いでもらったほうがいいわね」

「起こしてきます」

「お願い」

事情を知っている二人はあわてて行動を起こす。
それは、今のレイの現状を知っているからだ。

＊＊＊旅館から少し離れた場所にある滝＊＊＊

旅館から少し離れた場所にある滝は小規模ながらも流れは級で高さは５０メートルもある。
そのため、どこから流れてきた大木などが流れ落ちてくることもある。
レイは、そんな場所で頭を冷やしてきた。
常人では滝に入ることさえ恐ろしい。それでも、彼はまるで当たり前のように滝に当たり目の前にある壁を殴っていた。

―ゴンッ！　ゴンッ！

頑丈にできていてもレイが殴るたび凹んでゆく。レイの拳も血が噴き出ている。だが、傷口はすぐに塞がるが、また殴りつけ血が噴き出る。その繰り返しだった。

殺せ殺せ殺せ

（五月蠅い・・・黙れ・・・）

殺せ殺せ殺せ

（いつからだったか。一人殺したら・・もっと人を殺したくなるようになったのは）

いいや、もとからお前は人殺しだ。

再び声が割って入ってくる。

（黙れ！）

―ゴンッ！！

今度は腕ごとめり込んだ。

彼はその症状―彼が持つ業による精神汚染によって苦しめられている。彼はそれを抑制するため寺に通った。自分を無にすれば何も考えなくなる。だが、駄目だった。

それから、探しに探して辿りついたのがここだった。何もない無人世界だと思ったら一人の“人間”と“神”が温泉宿を造ろうとしていた。レイは、それを手伝う代わりに『ここの温泉を使わせてくれ』と頼んだ。そして、汚染が酷くなるたびにここに通い“精神”と“心”の治療をした。あの湯はすべてを癒すという謎の効能があった。彼は、その恩として二人に感謝の意をこめて男願いだった『自分の宿を持って、お客さんを癒してあげたい』という夢を叶えた。それが今の時の湯の経営の在り方となった。

あまりにも効力のある湯のため一般公開はせず、またレイの信頼の

おける人物たちにこれを教えた。

だが、つい最近症状が悪化し訪れたわけだがまさかの源泉が出なくなったという有様。

彼女たちには伝えておいたので特に問題はなかったがまさかなのはたちがそういう予定でしかも頼んだルーテシアの家だと知らず。そのまま無視すればよかった。しかし、それが出来なかったのが彼の甘さだった。

現に、今の自分をみられた。

あまり、“本当の自分”を知られたくはない。それは、誰にもあることでレイも例外ではないのだ。

「ぐぁ・・・・早く、温泉に・・・・」

最早、限界に近かった。この衝動は、誰かを殺せば収まる。だが、それはむしろ悪化する。

そして、最悪の場合自我をなくして誰かを殺しそうになったこともある。

だから、なのは達が寝静まるのを待ってここに来た。

「最悪・・冴子に・・・『バキッ！』・・・・！！」

音がした。いや、今でも滝にあたる音が聞こえるが今の何かが折れた音だ。例えば木の枝とかだ。

（まずい・・）

ここで、あいつらの誰かが来たら本当に―

見ないようにと思ったが、体が反応して音の方を向いた。

すると、そこには・・誰かがいた。彼女たちではない。誰かがいた。

目を凝らしよく見る。

青い色をした長い髪。優しい目をした瞳。

そして、どこかで感じたことのあるこの雰囲気。

そう、遠い、遠い昔にいつもみていたはずだ。

「・・・・ルリカ・・・？」

「・・・レイ・・兄さん・・・？」

「ルリカ・・ルリ！」

「レイ兄さん！」

レイは埋まっていた腕を抜き、林の方に走る。また、林の中で自分の兄だとわかった彼女も滝の方へ走る。

彼女の妹―ルリカは服が濡れるのも構わずに水の中に入り、そして、長年離れ離れになっていた兄妹は再開した。

「ルリ・・本当にルリなんだな」

「レイ兄さん・・・生きて、生きていたのねっ」

「それは、俺の台詞だ・・だが、やはりお前も・・」

「うん」

語らなくてもわかっていた。それは、『お前も不老不死の呪いを』と。

だが、ここで一つ。

レイは、今にも暴走しそうになったのを忘れていた。

そして、それを傍観し涙を流し去る者が一人―

≪　???　≫

それは、お風呂を出て自室に戻るときだった。

―で、あいつは大丈夫なのか?

(なんの話だろう?)

―ええ。冴子さんが言うにはレイは今。少し離れたところに滝がある場所にいるって

（レイくんが・・？）

―そうか。なら、早く温泉を

―うん。とにかくフェイトたちを

私は、全部を聞く前にその場から立ち去った。
それで、誰にもみつからないようこっそりと旅館を抜け出した。
一応、このあたりをサーチしていたので場所はわかった。
それから、少したって歩いて移動しなければいいと思った。道は複雑で危なかった。
けど、これもトーレニングと思って。と、目的地目指して歩いた。

（とりあえず・・・どうしたのって聞けばいいかな？）

会ったときのことをシュミレーションするが実際にどうすればいいかわからない。
すると、うっすらとだけど光がみえた。
どうやら、目的地についた。
近づく度になにか声みたいのが聞こえたが気にしないで歩いた。
だが、彼女の目に写ったのは最悪の光景だ。

「・・・うそ・・」

それは、彼と知らない女性が抱き着いていたのだ。

「うそ・・うそ・・うそっ」

そう、自分に言い聞かせながら後ろにさがり。あげく、元来た道を走り始めた。

（嘘っ、どうして!?なんで?!）

わからない。なんで、彼が抱き着いていたのか。わからない。

「あっ」

足が木に躓いて体が倒れる。浴衣のまま来ていたのが仇となったのか。浴衣に土や泥がつき汚れる。
彼女の顔も汚れていた。
それに、目から綺麗な水が流れていた。
再び立ち上がり走る。ただ、来た道を走る

≪　フェイト　≫

「なのは、どこいったんだろう」

フェイトは旅館の外。入口の前でなのはを待っていた。
お風呂をでたあとどこかいったままで最初に外に出ていると思って辺りを探したがいなかった。
だから、こうして外で待っている。

「もう・・どうしたんだろう」

溜息をついて、下げた顔をあげる。すると、なにか人がみえた。こちらに向かって走ってくる。

「・・・なのはっ」

それが、なのはだとわかるとフェイトも走った。しかし、だんだん彼女がはっきりみえるようになると彼女の異変に気付いた。

「なのは！」

なのははそのまま倒れるようにフェイトに抱き着いた。

「なのは、一体どうしたの!?」

「うぅ・・ふぇいとぢゃん・・。もう、わからないよぉ・・」

なのはが泣いている。
どうして、泣いているかがフェイトにはわからない。

「なのは・・落ち着いて。何があったの?」

とりあえず、フェイトはなのはを落ち着かせる。
なのはも少し落ち着いてきたのか話始めた。

「・・みぢゃっだの・・ぅ・・れいぐんが・・れいぐんが・・」

「兄さんが、どうしたの?」

「・・・しらない・・・おんなのひどと・・だきづいてでるのを・・・」

「―え」

第１１０話　温泉編－３（後書き）

修羅場だけど次回で終わる

頭が痛い・・・・

第１１１話　二つの再開（前書き）

ん～なんか描写みすったかな

第１１１話　二つの再開

『・・・しらない・・・おんなのひどと・・だきづいてでるのを・・・』

すべては、その一言で始まった。
その言葉は、彼女たちにとっては大きな心の痛みだった。最初は、フェイトに。それからその騒ぎを聞きつけた彼女たちに伝わり。それは・・彼の娘たちにも伝わった。

＊＊＊銀たちがいる部屋＊＊＊

このことを知った彼女たちはまず冷静に判断していた。なのはたちと違って彼のことはよく知っている。
だから、わかるのだ。
彼が見知らぬ女と抱き合うわけがない。
だが、そうはわかっていても特にすずかなどはあまりにも反応しすぎていた。

「ッ・・・」

「すずか。落ち着きなさい」

「でもっ」

「そのうちわかるわ」

「・・はい」

＊＊＊旅館玄関前＊＊＊

なのはをはじめ、子供たち以外は玄関で待っていた。
それもそのはずだ。その女が気になって仕方がない。問いただすためだ。
そして、彼が帰ってきたのはなのはが戻ってから３０分後だった。

彼は隣に妹であるルリカを連れ戻ってきていた。
もちろん、妹であることを知らない彼女たちは。

「お前ら、なにやってんだ？」

玄関に入ってきた彼の第一声はそれだった。

「なにって、レイさんがいけないんですよ！」

怒鳴ったのはスバルだった。なのはを泣かしたことが相当頭にきているんだろう。

「俺がなにをした？」

「なにって。しらばくれるんですか！隣にいる彼女を連れてきて！？」

レイに向ける彼女たちの視線はとてつもなかった。
嫉妬の眼差しが殺意にかわっているといってもいい。

「彼女？ああ、ルリカのことか。こいつは―」

「初めまして。レイ兄さんの妹のルリカ・バーナス・Ｓ・神乃です」

『・・・・・・え？』

頭の中が真っ白になる。
今なんと言ったか。妹。確かにそう言ったのだろうか。

「妹・・？兄さんの？」

「兄さん？ねえ、この子・・」

「ああ、フェイトにとって俺は兄みたいな存在なんだよ」

「ふーん。で、レイ兄さんは女性関係がいいみたいね。なに?彼女でもいるの?」

「いるわけないだろう」

『!!!!!』

その一言ですべてを理解した。特になのははは、自分が恥ずかしくなってきていた。

妹と抱き合っていただけ。別に彼女ではない。

ああ、自分はなんて誤解をしたのだろう。

なのははもう自分に我慢ができなくなってその場から逃げた。

＊＊＊応接間＊＊＊

旅館にある応接間にてレイとルリカ。そして、冴子が話をしていた。

「なんだ。お前もここを利用していたのか」

「うん」

「なんで、教えてくれなかったんだよ。冴子」

「だって、神乃って名乗ってなかったですし」

ルリカはある日を境に神乃という名がとても目立つことに気付いたのだ。
原因はよくわらなかった。しかし、本当はそれが兄の所為であることは知らない。

「そうか。にしても・・・変わらないな。お前は」

特徴的な蒼い髪。黒の瞳。ルリカは母親似だった。母さんは、ルリカと同じ髪をしていた。
俺は親父似で日本人特有の黒い髪と瞳を受け継いだ。

「兄さんは変わったね」

「そうか？」

「うん。うまくは言えないんだけど・・変わった」

「そうか」

「ところで、お二人はいつから離れ離れに？」

なぜ、冴子がここにいるかというと。彼女には知る権利があるから

だ。
ただ単に、冴子はレイのことを知っているからでもあるが。

「もう、１０００年も前さ。けど、俺たちの歴史でいったら短いが。前に話したろ？
俺の一族は滅んだって」

「ええ」

「その時、俺はたまたま出かけてて。まあ、結果的に免れた」

「実はね、私もそうなの。レイ兄さんが出た後だから私が死んだと思っても仕方ないんだけど」

「そうなのか。だけど、今は嬉しいよ。お前にまた会えて」

「それは、私もよ。レイ兄さん」

冴子は兄妹の再会を心から喜んでいた。
離れ離れになっていた兄妹がやっと再会できたのだ。嬉しくないはずがない。
そんな状態でも冴子はふと思い出しように言った。

「あ、レイ。温泉に入った方が。ルーちゃんたちに特急で修復してもらったので」

「ん。そうか。なら、入ってこよう。ルリ、お前は俺の部屋にいっ

て家族にあいさつしてきてくれ」

「家族？だって、誰とも結婚してないんでしょう？」

「まあ、養子みたいなもんだ。冴子も一緒に頼む」

「わかりました。では、いきましょうか。ルリカさん」

「はい」

◇◆◇◆◇◆◇◆

部屋を出て脱衣所へ。服を脱ぎ風呂に浸かる。

彼は、幸せそうな顔をしていた。

「癒されるな・・ここは」

感覚だけだが、狂気が沈静化していくのがわかる。

自分はまだ未熟だ。心も精神も。だから、狂気に飲まれそうになる。

だが、それらは簡単に強くなることはない。鍛えられない。

本当に心や精神が強い者とは一体どういう者をさすのだろうか。

「弱いな、俺は」

「―誰かいるの？」

「―！」

＊＊＊レイたちの部屋＊＊＊

「初めまして。ルリカ・バーナス・Ｓ・神乃です」

『はじめまして。彼の娘です』

『はじめまして。あの人の部下です』

妹と娘たち＋彼の部下がルリカにあいさつをしていた。

「個性豊かな娘たちね」

『いやいや、それほどでも』

「兄さんはいい家族をもったみたい」

「でも、それはあなたもですよ」

「え？」

「あの人の妹なら、私たちの家族同然ですから」

ルリカは嬉しかった。
家族を失い、今日まで一人だった自分。
きっと、兄も同じだったのだろう。家族がほしい。あの温もりがほしいと。

「ありがとうねっ」

＊＊＊第1大浴場＊＊＊

衝撃の妹発言からなのははやっとモチベーションを戻した。
フェイトにお風呂に入って来たらと言われて、ここに来た。
鏡をみたら本当に汚かった。シンデレラほどじゃないけど。

浴衣を脱ぎ、下着も脱いでゆく。
その時、改めて思った。

レイくん、嬉しそうだった。確かに、妹さんと会えたんだから嬉しいのは当然だよ。
でも・・・私たちの時と全然態度が違うよね。

自分とううん。私たちと妹さんを比べるとどうみても私たちはそれだけのことみたいに感じる。

レイくんは、私たちのことどう思っているのかな・・

「はぁ。駄目だな、私」

溜息をつきながら戸をあけ浴場に入る。
すると、湯煙で少し前しか見なく。また、温泉の特有の匂いもわずかながらした。
そのまま足から湯船につかると声がした。

「弱いな、俺は」

「―誰かいるの？」

声がしてつい言葉に出してしまったがよくよく思えば「俺」って一人称は彼しかいない。

「なのは―！」

「れ、レイくん！ど、どどうしてっ！？」

「いいか、絶対にこっちみるなよ」

「え、あ、うん」

あれ、それって私の台詞じゃ・・・

そんなことを思いつつも、なのはは入口の方を向き。レイはその反対側を向いた。
それから、少しの間沈黙の時間が続いた。
それを、最初に破ったのはなのはだった。

「よかったね。妹さんに会えて」

「ん。ああ、そうだな」

「・・・やっぱり、嬉しい？」

「そりゃあ、たった一人の妹だし。なにより、家族だから」

「・・・・」

聞くたびに心が病んでゆく。
だが、そこで“なのはの意識”は途絶える。

「どうなの？」

「なにが？」

「だから、あなたのその衝動。収まった？」

「お前・・クイーン。知っていたのか？」

「まあ、私も似たようなものだし」

今まで黙っていたクイーンが表に出てきた。髪はほどいているため、目が紅くなっている。

「大丈夫よ。あの子の意識は今抑え込んでいるから」

器用な奴とレイは思った。

「そのことを知っているのは？」

「娘たちとすずかたち。あと、冴子に今お前が加わった」

「そう。・・・辛い？」

「今は辛くない」

「深く追及はしない。でも、いつか話す時が来ると思うわ」

「・・・。来ないことを祈っているよ」

「本当、あなたって―」

そこで、クイーンの意識は消え、なのはの意識が戻る。

「アレ、私・・」

自分の意識が戻るといつのまにか風呂からあがっている彼がいた。
湯煙で全身はみえなかったが幽かに彼の背中がみえた。多くの傷跡
がある彼の背中を。

「・・・やっぱり、私はなにも知らないんだ」

≪　レイ　≫

風呂からあがり、服を着て部屋に戻ろうとしたレイ。
しかし、ふと何かを感じたのだ。

（なんだ、この感じ）

うまく言葉では言えないものだった。彼は、気になってそれを確か
めに向かった。
誰にも言わずに―。

そして、旅館を離れ、着いたのが開けた場所だった。辺りが木々で

生い茂っているのにここだけ妙に開けていた。
その中央になにかが立っていた。
暗くてわからない。すると、雲に隠れていた月がだんだん姿を現し辺りを明るくしていくと・・・それはいた。

「貴様っ」

「こんばんは。アンヴァルト」

それは、復讐すべき相手との再会だった。

第１１１話　二つの再開（後書き）

やっとここまで来たか・・・・

最近各キャラのエンディング書いている自分がいる・・・・

第１１２話　レイＶＳ黒装束（前書き）

今回のは少し前に先駆けして作成したものなので前回の最後と微妙に展開が飛んでいますがごめんね☆

第１１２話　レイＶＳ黒装束

最初は、何も考えず生きていた

次は、一族のためにこの力を捧げ生きてきた

次第に、自分のために生きるようになった

だが、一族を、家族を殺された俺は復讐のために生きるようになった

それと同じくらい、今日を、明日を生きるのに必死だった

そして、今その仇が目の前にいる

今日ほど、いい日はない

今日ほど最高に気持ちいい日はない

こんな夜ほどいい夜はない

だから、俺は・・・笑っているだろう

「レイＶＳ黒装束」

旅館から数十キロ離れ、開けた場所に対峙する二人の男。
一人は最強の魔術師。一人は最悪な呪術師。
一方は彼の人生を弄び、一方は弄ばれ。

そして、何百年の時を経てやっと彼は、仇を取ることができるのだ

「くくくくく」

「・・・」

「今の俺はどんな顔をしている？」

「・・・酷い顔だな。あの、アンヴァルトとは思えない」

「そうか、そんなに俺は酷いのか・・・くくく」

今の彼をみたら誰もが酷い、恐怖するだろう。
不気味な笑い方、笑顔。裂けるぐらいに口をにやりとさせる恐ろしい表情。
彼の眼は獲物を狩る眼だ。

「今の俺はお前を殺したくてウズウズしているのさ。
撃ちぬき、斬り裂き、殴り殺したくて・・・笑いが止まらないのさ」

「それはそれは」

「・・・さあ、始めよう。今、この時間、瞬間を無駄にしたくはない」

「それは、私も同感だ」

「ＺＥＲＯ、リミッター５まで解放」

『了解』

「―」

『・・・・』

ザッ！

二人はその場から飛び去り、空へと上がる

「モード、ケルベロス！」

『了解』

レイの両手に二挺の大型自動拳銃が具現化される。

無限銃とも呼べる、弾切れがないケルベロス。

彼は容赦なく奴に向けて撃つ。

黒装束も魔力弾で応戦する。
無数の弾が飛び交いぶつかり合い閃光を放つ。
そして、だんだんと空から地上へと舞い戻る。

「私が、人形使いとも呼ばれているのを忘れては困るな！」

どこから現れたのは無数の子供くらいの人形が現れる。
手には、ナイフ、剣、銃から武器なら何でも手に持っている。
不気味な人形たちはカタカタと音を鳴らせながらレイに迫る。
銃を持つ人形は容赦なく撃った。

ＤＯＮ　ＤＯＮ　ＤＯＮ
ＤＡＤＡＤＡＤＡＤＡＤＡＤＡＤＡＤＡＤＡＤＡＤＡＤＡＤＡ

四方八方から放たれる銃弾の雨。
しかし、レイは避けようとはせず、それをその身で受けていた。

「カタカタ」

その瞬間にナイフや、刃物を持った人形がレイに襲い掛かる。

グサッ　グサッ・・・・・・・

無数の刃がレイの体を突き刺す。
そのまま地上へ叩き落とす。

ドォォォォン

「・・・」

「この程度か・・・」

「なに」

「この程度か!!!」

バンッ!!!

体に付きまとう人形を吹き飛ばす。

「・・・プッ!」

血を吐くレイ。
ぬるぬると抜け出てくるナイフが零れ落ちる。

「温いんだよ・・・こんなんじゃ温すぎる」

・・・戦いを楽しんでいるとしか思えない

黒装束は思った。

自分でいうのもなんだが、復讐の仇を前に戦いを選ぼうとしている。

「こんな人形じゃ・・・！」

その場から消え目の前にいた人形の顔を地面にたたきつける。人形の顔が壊れ活動を停止する。

「チッ」

剣を持った人形が襲い掛かり、レイは刀を持つ。
そのまま容赦ないレイの攻撃が始まる。
今度は近づく前にレイの刀の餌食になる。表情のない人形が何体も何体も斬られそれは妙な光景。

「おいおい、まさかこんな人形遊びで終わりじゃないだろうな？」

「まさか」

すると奴は拳を構えた。あの服装で拳がどこにあるのかわからなかったが腕はあるようだ。

だが―

シュッ

「！」

ヒラヒラトしているコートが真っ直ぐレイに向かって伸びた。

「まさか、お前の体がそんな風になるとはな！」

「ふ。私の秘密の一つだよ！」

レイは刀で斬りながら距離を詰めるが一度斬られてもすぐに布は動き、レイに向ってくる。

「では、これはどうかな！」

「なに！」

すると一つの布がレイの右腕を拘束し、さらに左腕、両足、体と彼の身動きを封じる。

「ふん！」

黒装束の体のあらゆるところからナイフのように尖った布が迫り、そのまま彼の胴体を貫いた。

「ぐふっ！」

シャー――――

体中から血が噴き出る。彼の周りは血だらけに染まってしまった。

「・・・・くくく」

「？」

「俺は不老不死だぞ・・こんなんでくたばると思っているのか？それに・・・」

「・・む！？」

奴を突き刺した布が戻らない。
よく見るとレイの体に突き刺さったまま硬直してしまった。

「弾丸の雨（ブリット・レイン）！」

コートの中、空間を裂き銃というあらゆる銃が空間を破り出現し、
黒装束に向けて放たれた。

DADADAD

体中に穴が開いているがすぐに元に戻る。

「前々から思ってたがお前、人間にしては可笑しな存在だな」

「人間？そう見えるか？」

「・・・まぁいい」

彼は距離を詰めるために地面を蹴る。
手にはケルベロスが二挺。
銃口を奴に向けるが

「！」

「私は、人形使いだ。こういうこともできる！」

銃身の周りに透明な糸がまとわりついている。
先をたどれば奴の指から出ている。
そのままケルベロスは弾き飛ばされる。
今度は刀を出す。

「さあ、踊れ！」

キュィーン

再び糸が刀にまとわりつく。

「なめるなぁ！！！！」

刀を突くように構え、そのまま突貫する。

近づけば糸は緩む。

だが、今度は左腕に絡まる。肉に食い込む以上の力で縛り付けている。

距離が近くなるたびに刀を縛る糸は緩むが左腕を縛る糸は強く食い込んでゆく。

「ふんっ」

―キッ！

とうとう、糸は肉に食い込み骨をも切断した。

―シャーッ！！

左腕の肘から少し上あたりから切り落とされた。しかし、レイは気にすることなく残った右腕を使い刀を振るい、奴に刺した。

「はぁあああああ！！！」

体を突き刺した刀を上に弧を描くように振るう。
ヤツの体は斬り裂かれそのまま地面に倒れる。

「はぁはぁ・・・ん！」

レイは懐から円柱の形をした注射器を取出し残っている左腕に刺した。
すると、斬られたところから腕が生えてきた。

「・・・よし」

レイは不老不死でもあり不死身である。呪いで死ねない体となり、怪我をしても治る体になった。その再生速度は傷の具合にもよるが先のように腕を切られた場合は1日あればもとに治るだろう。彼の魔力が全開放ならすぐにも治るだろうがそうはいかない。
今打ったのがそれを促進するもの。所謂ドーピングというやつだ。
目の前に倒れている黒装束をみる。すぐに違和感を感じ取った。

「貴様、やはり人間じゃないな」

絶対的な自信があった。なぜなら、ヤツの体から血が出ていないのだ。

「―そうだ。私は人間はない。人の形をしているに過ぎない」

すると、斬られた部分が再生というよりなにもなかったように戻った。

「さて、ここでエキストラの登場といこうじゃないか」

どこから現れたのか。女の形をした人形が現れた。

「エキストラ?その人形が?」

レイはそういうとヤツは首を傾げた。

「―そうか。記憶を。なら、知らないのも無理はない。辛い、辛いことだったからな」

喜んでいる。なぜ?

「だがそれは悲しいことだ。忘れたのか?彼女は人形ではないぞ」

「―レイ」

「?喋るのか・・・・・・!」

突如頭痛がした。

「―アイタカッタワ。レイ」

ザッ・・・・ザッ・・私・・サクラ・・ザッ

ザッ・・・・よろしくね、レイ・・ザッ

「・・・俺は、お前を・・」

ザッザッ・・ねぇ、私のこと・・ザッ・・

ザッ・・私、幸せよ・・ザッ

「そうだ・・お前は・・」

ザッ・・愛しているわ・・ザッ―オン

パリーン

それは、すべてが割れるような音。
すべてを思い出した音。

「ああ・・・どうして・・どうして・・」

いるはずがない。目の前にいる彼女はいるわけがない。

「アイタカッタワ。レイ」

「お前は俺が殺したはずだぁぁぁ！！！」

第１１２話　レイＶＳ黒装束（後書き）

次回でこの話がまとまったら俺、過去編書くんだ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8302k/

魔法少女リリカルなのは　～永遠を生きる魔術師～

2011年3月10日21時42分発行